

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第91集

かわ はら 遺 跡
川 原

第一分冊

2001

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

愛知県のはほぼ中央部に位置する豊田市は、自動車の町「トヨタ」として世界的に名の知れた工業都市であります。しかし、その一方では三河随一の大河矢作川の恵みをうけ、郊外には緑豊かな田園風景が広がっています。こうした豊かな環境のもと、この地域には太古の時代から多くの人々が生活を繰り広げてきた姿が、近年の発掘調査によって明らかになってきました。

川原遺跡の発掘調査は、第二東海自動車道豊田ジャンクション建設にともない、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、愛知県埋蔵文化財センターが平成9年4月より平成10年5月にかけて実施いたしました。今回の調査では、弥生時代から古墳時代にかけておびただしい数の建物跡や大規模な墳丘墓のみで構成される墓域などが確認され、多くの成果をあげることができました。本書は、その成果の一端をまとめたものであります。本書の内容が、今後、地域史研究をはじめとした様々な場で活用されるとともに埋蔵文化財に対するご理解に役立つことができれば幸いです。

最後に、発掘調査を行うにあたりご理解をいただいた日本道路公団、愛知県教育委員会、豊田市教育委員会および地域住民の方々、その他ご協力を賜った皆様方に対し心よりお礼申し上げます。

平成13年8月

(財) 愛知県教育サービスセンター

理事長 久留宮 泰啓

例 言

- 1 本書は、愛知県豊田市鶯鳴町川原に所在する、川原遺跡（県遺跡番号:63413）の調査報告書である。
- 2 調査は、第二東海自動車道（第二東名高速道路）豊田ジャンクション建設に伴い、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成9年4月から平成10年5月にかけて財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施し、整理報告書の作成は、事業を引き継いだ財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが行った。
- 3 調査は、藤井孝之（調査課課長補佐、現一宮町立一宮東部小学校長）、服部信博（調査課課長補佐）、赤塚次郎（調査課主査）、木下 一（同、現西尾市立鶴城中学校）、春日井毅（同、一宮市立宮西小学校）、川井啓介（同）、中野良法（調査課調査研究員、現県立大府東高校）、秋田幸純（同、現県立半田高校）、宇佐見守（同）、鈴木正貴（同）、樋上 昇（同）、飴谷 一（同、現県立小牧高校）、加藤博紀（同、現県立蟹江高校）、木川正夫（同）、鈴木達也（同、現県立日進西高校）、成瀬友弘（同）、永井邦仁（同）があたり、富田智恵氏、石田優子氏のご協力を得た。
- 4 調査にあたっては、次の各関係機関のご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、日本道路公団名古屋建設局および豊田工事事務所、豊田市教育委員会
- 5 調査記録、遺物整理等の作業には、河合明美、水野多栄、小嶋そのみ、田口雄一（以上調査研究補助員）、佐藤洋子、河村圭子、鈴木加代子、土井由美子、堀田春美、横川尚美、竹市由美子、小崎暢子、浜島奈保美、長谷川ゆかり、川名詳子、妹尾美佐穂、伊藤 恵、近藤文子、中村たかみ、土井てる子、田中和子、後藤恵里、伊藤典子、前田弘子、服部恵子、宇佐美美幸（以上整理補助員）、上田美智子、牛田長子、大竹とし子、粕谷和美、神谷信子、日下部祥子、佐藤ヤエ子、高木英子、塚本ひろみ、服部三枝子、水野たつゑ、坂倉洋子、草野しず子、阿辺山孔子、伊藤友子、河合涼子、大西由香里（以上整理作業員）、以上各氏のご協力を得た。
- 6 本遺跡の出土遺物は膨大であり、また多義にわたる。整理作業の効率化をはかるため、以下のものに関しては民間の企業に一部を委託した。
石器の実測およびデジタルトレースの一部を阪神文化財調査会、シン技術コンサルに、弥生土器のデジタルトレースの一部をセビアスに、木器の実測の一部を元興寺文化財研究所に、3DCGの作成をアジア航測及び四門に、本書の作成に関わる編集作業（オンライン校正）をクイックスに、また、石器使用痕の分析をアルカに、その他の自然科学分析をパレオ・ラボ、ズコーシャ、パリノ・サーヴェイにそれぞれ委託し、実施した。
- 7 本書の執筆は、服部信博、石黒立人（調査課主査）、赤塚次郎、中野良法、飴谷 一、鬼頭 剛（調査課調査研究員）、蔭山誠一（同）、田口雄一、尾崎和美（調査研究補助員）が担当し、斎藤基生（愛知女子短期大学）、原田 幹（愛知県教育委員会）、鈴木とよ江（西尾市教育委員会）、森 勇一（県立明和高校）、永草康次（神塾）、小野映介（名古屋大学）の各氏にも執筆して頂いた。文責は目次に記した。
- 8 本書は、第1分冊弥生中期、第2分冊弥生後期以降、第3分冊自然科学分析・写真図版の3分冊からなる。第1分冊は服部信博が、第2分冊は赤塚次郎が、第3分冊は鬼頭 剛・堀木真美子（調査課調査研究員）が自然科学分析を服部・赤塚が写真図版をそれぞれ編集を担当した。
- 9 調査および本書をまとめるにあたり、次の諸氏にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝したい。
藤沢良祐、中野晴久、森 達也、西川修一、川崎みどり、森 泰通、和気清章、高野陽子、赤澤徳明、河野一隆、佐原 真、春成秀爾、難波洋三、井上洋一、七田忠昭、田島龍太、岡崎正雄、松本岩雄、錦田剛志、植崎彰一、湯村 功、野島 稔、佐伯英樹、平賀大蔵、和田 萃、渡辺 寛、渡辺 誠、海津正倫、笠原 潔、福岡猛志、宮塚義人、鈴木真由美、三木 弘（敬称略、順不動）
- 10 今回の調査に使用した方位・座標は建設省（現国土交通省）の定めた平面直角座標第Ⅶ系に基づくものであり、海拔座標はT.P.（東京湾平均海面高度）による。
- 11 本調査に関する記録・出土遺物等は、すべて愛知県埋蔵文化財調査センターおよび（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが管理・保管している。

目 次

第1分冊

Ⅰ 発掘調査の概要

調査の経緯と経過(服部信博)	1
調査の概要(服部信博)	2
地形・地質の概観(鬼頭 剛・小野映介)	4
歴史的環境(服部信博)	6
遺跡の層位と時期区分(服部信博)	10

Ⅱ 弥生時代中期

I・Ⅱ期の遺構	12
Ⅰ期の遺構(服部信博)	12
Ⅱ期の遺構(服部信博)	22
I・Ⅱ期の遺構の変遷(服部信博)	38

土器

縄文晩期から弥生前期(石黒立人)	40
弥生中期(石黒立人)	40
土製品(田口雄一)	52

石器

旧石器・縄文草創期(斎藤基生)	54
弥生時代の石器(原田 幹・服部信博)	57

木製品(樋上 昇)	75
-----------------	----

付論

1 矢作川流域における弥生中期土器編年の再検討	77
石黒立人(愛知県埋蔵文化財センター)	
2 凹線文土器の波及をめぐって	104
鈴木とよ江(西尾市教育委員会)	
3 川原遺跡出土の石製舌について	115
服部信博(愛知県埋蔵文化財センター)	
4 剥片石器の技術分析と使用痕分析	120
原田 幹(愛知県教育委員会)	
角張淳一・池谷勝典(株式会社アルカ)	

図版

第2分冊

Ⅲ 弥生時代後期から古墳時代初頭

Ⅲ期の遺構	1
墓域の概要(赤塚次郎)	1
墳丘墓(赤塚次郎)	4
主体部(赤塚次郎)	11
土器集積(赤塚次郎)	19
配石遺構(赤塚次郎)	29
竪穴状遺構ほか(赤塚次郎)	30
Ⅲ期の遺物	34
土器(赤塚次郎)	34
石製品・金属製品・土製品等(赤塚次郎)	36
木製品(樋上昇)	38

Ⅳ 古墳時代中期

Ⅳ期の遺構(飴谷 一)	45
Ⅳ期の土器(田口雄一)	51

Ⅴ 古代・中世

Ⅴ期の遺構(飴谷 一)	55
Ⅵ期の遺構(飴谷 一)	55
Ⅶ期の遺構(飴谷 一)	57
Ⅴ～Ⅶ期の遺物(中野良法)	59

Ⅵ まとめ(服部信博・赤塚次郎) 69

付論

5 川原上層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の設定	71
赤塚次郎(愛知県埋蔵文化財センター)	
6 墳丘墓と槽形木棺墓について	93
赤塚次郎(愛知県埋蔵文化財センター)	
7 川原遺跡出土の木製品群について	100
樋上 昇(愛知県埋蔵文化財センター)	

図版

第3分冊

自然科学分析

- 1 矢作川沖積低地北部、川原遺跡における古環境の復元 1
 鬼頭 剛・尾崎 和美(愛知県埋蔵文化財センター)
 小野 映介(名古屋大学)
- 2 川原遺跡のプラント・オパール分析 17
 鈴木 茂(株式会社パレオ・ラボ)
- 3 川原遺跡から産出した昆虫化石 19
 森 勇一(愛知県立明和高等学校)
- 4 川原遺跡出土の植物遺体 23
 新山 雅広(株式会社パレオ・ラボ)
 蔭山 誠一(愛知県埋蔵文化財センター)
- 5 川原遺跡の焼失家屋 97BCD 区 SB201 および
 SB211 から出土した炭化材樹種同定 27
 植田 弥生(株式会社パレオ・ラボ)
- 6 川原遺跡から出土した墓壇に残存する脂肪の分析 33
 中野 益男(帯広畜産大学生物資源科学科)
 中野 寛子・門 利恵・長田 正宏(株式会社ズコーシャ・総合科学研究所)
- 7 川原遺跡出土土器の胎土材料 39
 藤根 久・今村 美智子(株式会社パレオ・ラボ)
- 8 川原遺跡、叩き甕の胎土材料 47
 藤根 久・今村 美智子(株式会社パレオ・ラボ)
- 9 川原遺跡出土土器の胎土分析 55
 矢作 健二(パリノ・サーヴェイ株式会社)
- 10 川原遺跡出土弥生中期土器の胎土分析とその考古学的評価 61
 永草 康次(神塾)・蔭山 誠一(愛知県埋蔵文化財センター)
- 11 川原遺跡、遺構内粘土の粘土鉱物分析 71
 パリノ・サーヴェイ株式会社
- 12 墨書土器の墨材料 73
 藤根 久(株式会社パレオ・ラボ)
- 13 銅鏃・管状銅製品・ガラス玉の蛍光 X 線分析 76
 藤根 久(株式会社パレオ・ラボ)

写真図版

挿図・図版目次

第1図	作業風景	1-3
第2図	実測風景	1-3
第3図	調査区位置図（1:5,000）	1-3
第4図	矢作川沖積低地および周辺の地質図（牧野（1988）を基に作成）	1-5
第5図	周辺の遺跡（1:25,000）	1-8,9
第6図	調査区基本層序（1:100）	1-11
第7図	川原Ⅰ期遺構配置図（1:800）	1-13
第8図	土墳墓分類図	1-14
第9図	土墳墓長軸・短軸相関図	1-14
第10図	土墳墓主軸方向	1-14
第11図	土器棺墓（1:20）	1-15
第12図	土墳墓（1:50）	1-17
第13図	土坑（1:50）	1-18
第14図	SK538（1:40）	1-19
第15図	Ⅱ期遺構配置図（1:800）	1-23
第16図	竪穴住居分類図	1-24
第17図	竪穴住居・床面積別度数	1-24
第18図	SB201（1:50）	1-27
第19図	SB211（1:50）	1-28
第20図	竪穴住居1（1:100）	1-29
第21図	竪穴住居2（1:100）	1-30
第22図	竪穴住居3（1:100）	1-31
第23図	竪穴住居4（1:100）	1-32
第24図	炉（1:20）	1-33
第25図	SZ202・SK201・SK208（1:100, 1:50）	1-35
第26図	土器棺墓（1:20）	1-37
第27図	遺構変遷図（1:1600）	1-39
第28図	瓜郷式壺紋様模式図	1-41
第29図	川原遺跡出土凹線紋系土器 主要器種区分	1-43
第30図	川原遺跡 凹線紋系土器 主要器種区分	1-44
第31図	川原遺跡 非凹線文系土器 主要器種区分	1-45
第32図	器面調整1	1-48
第33図	器面調整2	1-49
第34図	器面調整3	1-50
第35図	ナイフ形石器	1-54
第36図	縄文草創期の石器	1-55

第37図	石器出土地点（1:1600）	1-56
第38図	主要石器出土地点	1-58
第39図	石鏃分類図表	1-60
第40図	石鏃相関図	1-60
第41図	石製舌（1:2）	1-68
第42図	玉類（1:1）	1-68
第43図	器種別石材	1-70
第44図	伊勢湾地方の把手臼	1-75
第45図	SD502出土木製品 1/8	1-76
第46図	主要遺構配置図（1/1000）	2-3
第47図	SZ01主要遺構配置・遺物出土地点（1/200）	2-5
第48図	SZ02主要遺構配置・遺物出土地点（1/300）	2-7
第49図	SZ03遺物出土地点（1/200）	2-8
第50図	SZ04主要遺構配置・遺物出土地点（1/200）	2-9
第51図	SZ05・SX03遺物出土地点（1/200）	2-10
第52図	墓壇1（1/50）	2-12
第53図	墓壇2（1/50）	2-13
第54図	墓壇3（1/50）	2-14
第55図	墓壇4（1/50）	2-15
第56図	墓壇5（1/50）	2-16
第57図	墓壇6（1/50）	2-17
第58図	SX102	2-19
第59図	土器集積位置図（1/1000）	2-20
第60図	SX103	2-21
第61図	SX104	2-22
第62図	SX106	2-23
第63図	SX107	2-24,25
第64図	SX108	2-26
第65図	SX109	2-27
第66図	SX110・SX111西	2-28
第67図	配石	2-29
第68図	SZ01下層の堅穴状遺構	2-30
第69図	大溝（NR03）1/100	2-32,33
第70図	朱付着の小型片口鉢1/4	2-34
第71図	石製品・金属製品・土製品出土地点（1/1000）	2-35
第72図	墨書土器（1/4）	2-36
第73図	石製品・金属製品・土製品	2-37
第74図	NR03出土木製品（1）1/4	2-40
第75図	NR03出土木製品（2）1/8	2-41

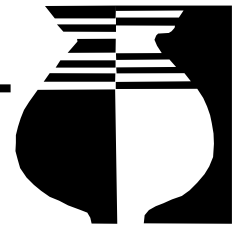
第76図	NR03出土木製品（3）1/12	2-42
第77図	NR03出土木製品（4）1/8	2-43
第78図	NR01・SD08・SD10出土木製品1/4	2-44
第79図	古墳時代中期主要遺構配置図	2-46
第80図	SB01遺構図（1:100）	2-47
第81図	SB02遺構図（1:100、セクション1:50）	2-48
第82図	S211遺構図（1:100）	2-49
第83図	SB03遺構図（1:100）	2-50
第84図	古墳時代中期の土器1	2-53
第85図	古墳時代中期の土器2	2-54
第86図	V期の遺構	2-56
第87図	VⅦa期（下層水田）遺構配置図	2-57
第88図	VⅦb期遺構配置図	2-57
第89図	SK02遺構図（1:40）	2-58
第90図	V期の遺物	2-59
第91図	VI期の遺物	2-60
第92図	VⅦa期遺物出土割合	2-62
第93図	VⅦb期遺物出土割合	2-62
第94図	VⅦa期遺構別遺物出土点数	2-62
第95図	VⅦa期遺構別遺物出土点数	2-62
第96図	VⅦ期遺物実測図	2-66
第97図	VⅦ期遺物実測図	2-67
第98図	VⅦ期遺物実測図	2-68

表目次

第1表	調査進行表	1-1
第2表	銅鐸型土製品県内出土一覧	1-53
第3表	剥片調査区別出土点数	1-57
第4表	石器の出土点数	1-59
第5表	主要遺構時期区分表	2-2
第6表	墓壙一覧表	2-18
第7表	遺物集積組成表	2-27
第8表	VⅦ-b期出土瀬戸・美濃窪産製品器種一覧表（時期別）	2-65

I

発掘調査の概要



調査の経緯と経過

川原遺跡(遺跡番号63413、北緯35度01分09秒・東経137度08分55秒)は、豊田市鴛鴨町川原に所在し、東名高速道路上郷サービスエリアの南東約1.3kmの地点を中心に広がりをもつ遺跡である。従来は縄文土器や条痕文系土器を出土する遺跡として知られていたが、本格的な発掘調査は実施されることなく、近年の圃場整備や宅地開発等によって、すでに滅失したものと考えられていた。

平成7年に第二東海自動車道(第二東名高速道路)豊田ジャンクションの建設工事に伴い、愛知県埋蔵文化財調査センター・豊田市教育委員会により建設予定地内の遺跡有無確認調査が実施された。その結果をうけ、平成8年には愛知県埋蔵文化財センターが遺跡範囲確認調査を実施し、東名高速道路の南方部分に弥生中期を中心とした集落遺跡が展開する可能性が高いことが判明し、建設予定地内において約12,500m²の発掘調査が必要となった。

発掘調査は、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として愛知県埋蔵文化財センターが、平成9年4月より1年間の予定で調査を進

めた。しかし、調査が始まると遺跡の保存状態が極めて良好であり、中世期から弥生中期に至る複数の遺構面が存在し、それに伴う遺物量も膨大なものになることが判明した。また、全国的にも極めて希な弥生後期の大型墳丘墓や弥生中期後葉に比定されるおびただしい数の竪穴住居群など重要な遺構の検出が相次ぎ、調査は難航した。年度途中で調査員および発掘作業員を増加して対応したが、最終遺構面の調査を年度内に終了させることは困難な状況になった。そこで、日本道路公団、愛知県教育委員会、愛知県埋蔵文化財調査センターと協議を重ね、工事への影響の少ない平成10年4・5月の2ヶ月間で調査を終了することを条件に、最終遺構面の調査を翌年度に実施することになった。最終遺構面の調査も、弥生中期の広大な墓域が確認され、銅鐸に伴う石製舌などの貴重な遺物の出土がみられたが、最終的に平成10年5月29日をもって終了した。

整理・報告書の作成は、洗浄・注記等の一次整理は調査の進行にあわせて平成9・10年に実施し、続けて11・12年の2ヶ年をかけ、実測・復原等の二次整理および報告書の作成作業を進めた。

年	調査区/月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	担当調査員
発掘調査	97 A													春日井・服部
	D													春日井・服部・秋田・鈴木
	B・C													藤井・赤塚・秋田・鈴木・中野・春日井
	B・C・D													木下・服部・鈴木(正)・加藤・樋上
	E													春日井・服部
98														赤塚・中野・川井・樋上・宇佐見・木川 鈴木(達)・成瀬・永井(邦)
整理	99 二次整理													服部
	00 報告書作成													赤塚・服部

* 1次整理(洗浄・注記)は、調査の進行にあわせて97・98年度に実施した。

第1表 調査進捗表

調査の概要

●● 調査の方法 ●●

当初、調査予定地内が生活道路等によって分断されていたため、これらを利用して、便宜上A～Eの5調査区に分割して調査を進めた。B・C・D区に関しては、平成9年度の途中より、生活道路の撤去が可能となったことや調査の進行、遺構の展開状況等を考えて一括して調査した。BCD区の最終遺構面の調査は、平成10年度に持ち越されたため98区として実施した。

調査は、調査区全体を建設省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した100m単位の中グリッドおよび5m単位の小グリッドで覆い、基本的には小グリッドを最小調査単位として、手掘りで包含層の掘削、遺構の検出・掘削、遺物の取り上げ等を行った。ただし表土に関しては、厚く盛り土がなされていたためバック・ホウにて除去した。

記録類の作成に関しては、調査の進行にあわせ、ヘリコプターによる空中写真測量を5回実施し、50分の1の基本平面図を作成した。今回の調査では、将来的な遺構図面の活用を考え、デジタル・マッピング処理による三次元図化を行った。

また、調査の必要に応じて土層断面図、遺物出土状態図等の補助測量図をトータルステーションを用い手測りにて作図した。

●● 調査の概要 ●●

今回の調査の概要について、調査区別にまとめておきたい。

A区 東名高速道路の北側に設定した唯一の調査区である。他の調査区に比べ遺構検出面のレベルが著しく下がっており湿地・沼地状を呈していた。範囲確認調査の段階で畦畔状の遺構が検出されており、水田遺構の存在が予想された。実際、調査においても畦畔状の遺構が検出され、小区画水田の可能性をもつブロックがみつかったが、遺物がまったく出土せず、プラント・オパール等水田跡

の存在を予想させるものは確認されなかった。

B C D区・98区 今回の調査のメインとも言える調査区である。調査区の北・東方向は湿地、南・西方向は谷状地形となっており、南北120m・東西80m程の島状の微高地が確認され、弥生時代中期から中世にいたる複数の遺構面が存在していた。なかでも注目されるのは、弥生中期と弥生後期から古墳初頭の時期であろう。

弥生中期は、中葉と後葉の2つの段階に区分して考えることができる。

まず、中期中葉段階には遺跡全体が墓域として機能しており、土壙墓や土器棺墓、方形周溝墓などが、祭祀的な色彩を帯びた方形周溝状遺構を中心に規則的に配置されている状況が明らかとなった。この方形周溝状遺構の周辺からは全国的にも類例の少ない銅鐸に伴う石製舌や大形の石包丁、赤彩をおびた石鏃などが出土している。

中期後葉段階は、墓域から一転して約300軒にもおよぶおびただしい数の竪穴住居群が確認された。これらの竪穴住居群は著しい重複関係をみせ、短期間の間に何度も建て替えられた状況をうかがうことができる。

弥生後期から古墳時代初頭にかけての時期には、再び遺跡は墓域として機能しており、全国的にも極めて珍しい大型墳丘墓のみで構成された墓域の存在を明らかにすることができた。また、墳丘墓に隣接する溝状遺構(旧流路)からは、2世紀前半代に比定できる墨書土器(?)や土製合子などの貴重な資料も出土している。

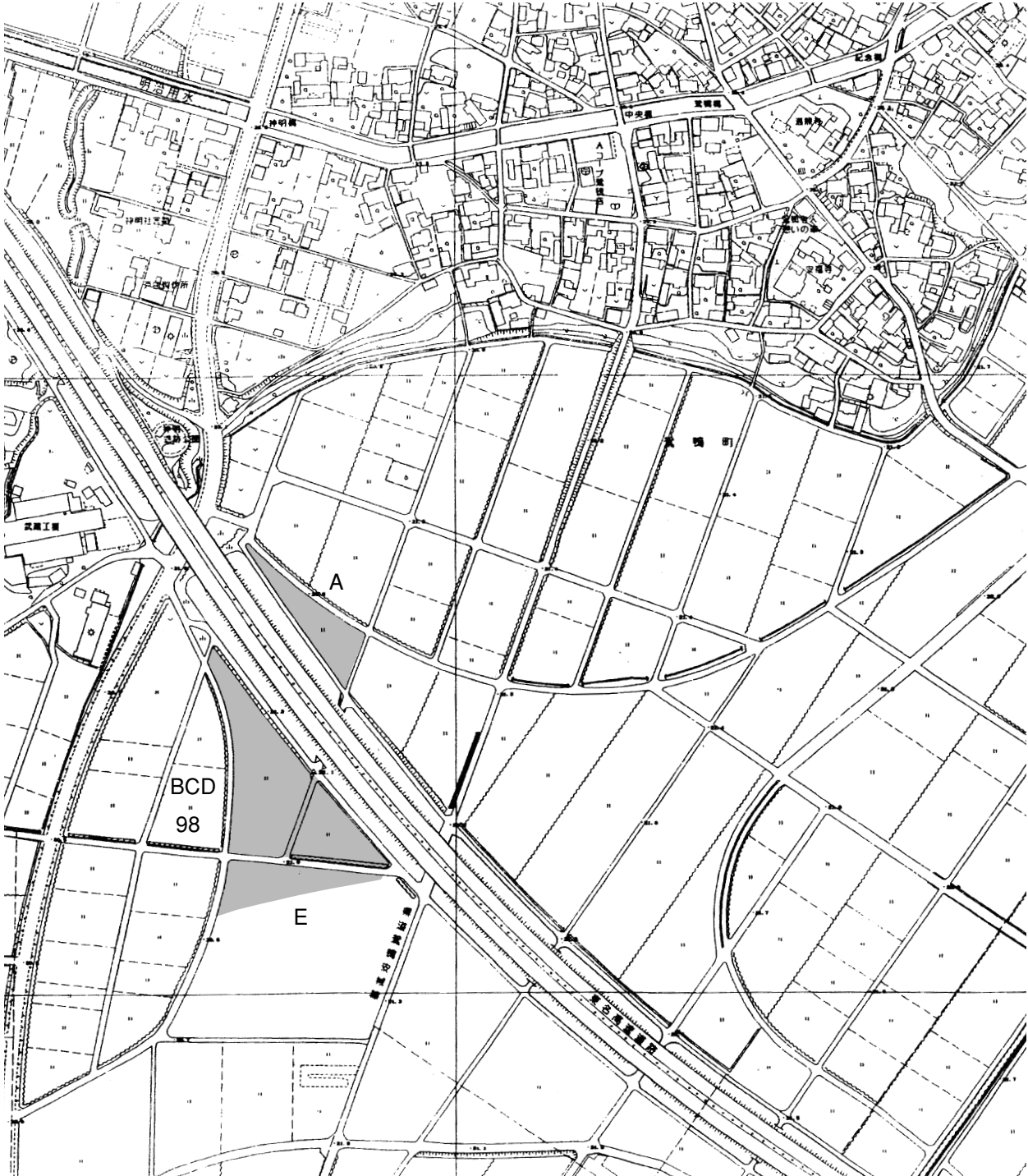
E区 B C D区より水路・道路を挟んで南側に設置した調査区であり、主として中世の旧流路や水田遺構を確認することができた。また、調査区の北端部で微高地の一部が僅かに残っており、B C D区から続くと考えられる弥生中期の竪穴住居を検出した。



第1図 作業風景



第2図 実測風景



第3図 調査区位置図 (1:5,000)

地形・地質の概観

川原遺跡は、愛知県のほぼ中央を南北に流れる矢作川の中流部、三河湾の河口から約30km北方の沖積低地に立地する。本節では、川原遺跡周辺の地形・地質について概観する。

川原遺跡の立地する矢作川沖積低地は、西三河平野の東縁、三河山地との境界部に発達する。矢作川沖積低地の北東～南東側にひろがる三河山地の大部分は標高400～800mの隆起準平原状を呈し、三河高原ともいわれる。三河山地の地質は領家帯の特徴を示し、南部では領家変成岩類、北部では花崗岩類が卓越するが、東部では雲母片岩を主とする領家変成岩類が広い面積を占めている。

西三河地域における新第三紀以降の地形面は、高位のものから藤岡面・三好面・挙母面・碧海面・越戸面・籠川面・沖積低地面に分類される。通常、西三河平野という名称は、碧海面以下の段丘群および沖積低地面の総称として用いられ、挙母面以上の段丘群は西三河丘陵と呼ばれる。

藤岡面は標高200～160mの地域に分布し、その分布域は矢田川累層の分布と一致することから、矢田川累層の堆積面と考えられている。三好面の分布域は標高110～35mであり、尾張地域の八事面に対比されている。挙母面は標高130～80mの地域に分布する矢作川の扇状地性堆積層であり、尾張地域の覚王山面に対比されている。西三河平野の大部分を占める碧海面は標高80～5mの地域に分布し、縦断面勾配は他の面に比べ緩やかである。碧海面は、濃尾平野の熱田層と対比されており、東海道本線以北の地域では扇状地、それ以南の地域では三角州の特徴を持つ。越戸面・籠川面は、上述した各面に比べて分布範囲が著しく狭い。これらの面は粗い礫層からなる河岸段丘で、豊田盆地周縁において認められる。

矢作川沖積低地は南北に細長く、平均勾配は $0^{\circ}75/1000$ と緩傾斜である。沖積低地は扇状地を欠く反面、顕著な自然堤防が発達する。とくに、豊田市水源町付近の狭さく部から西尾市南部にかけ

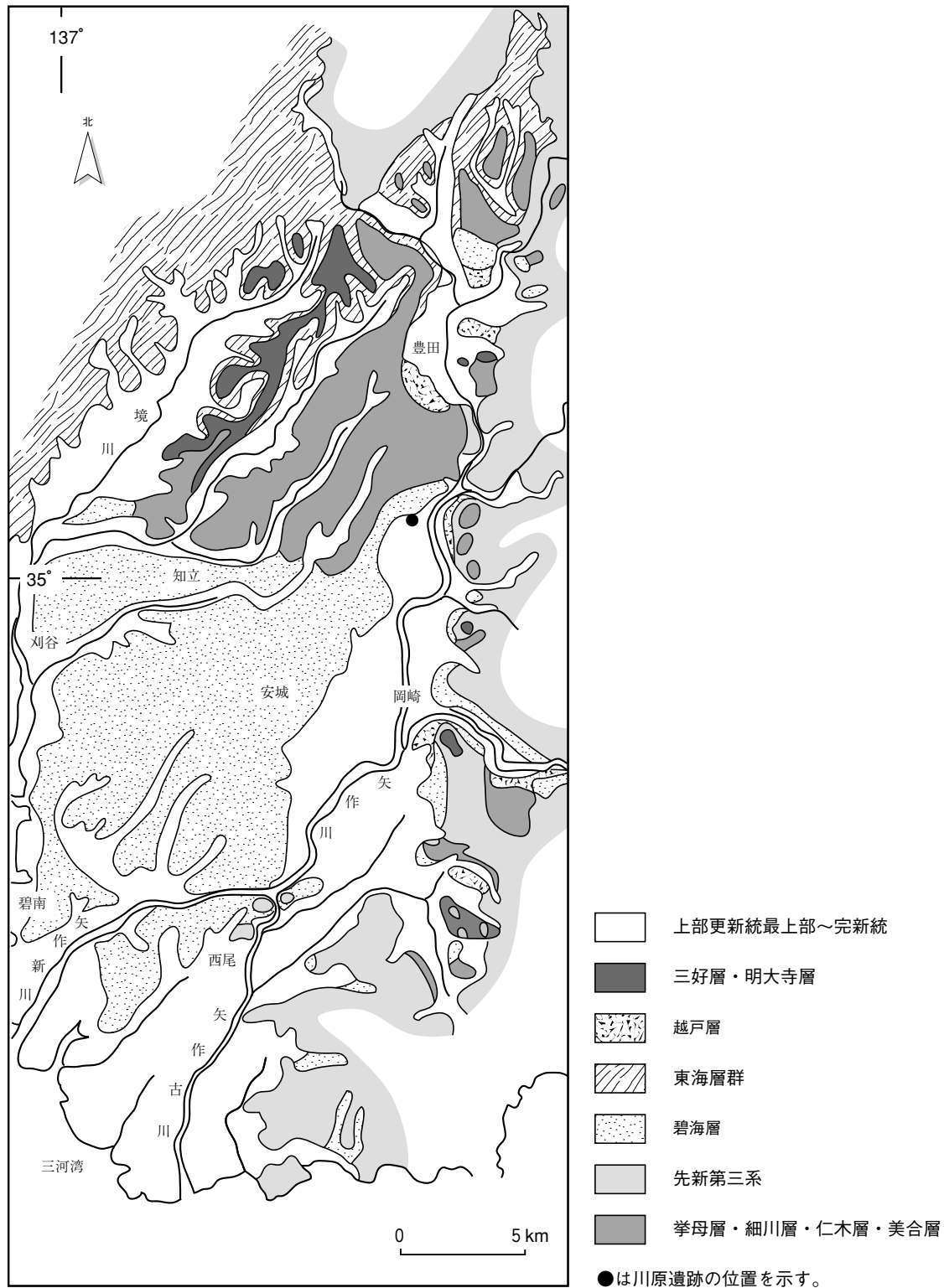
ての地域には、小礫を含む粗粒砂からなる比較的規模の大きな自然堤防や破堤堆積堤が発達する。

沖積低地を貫流する矢作川は、木曽山脈の南部、長野県伊那郡大川入山(標高1908m)に源を持つ流域面積1830km²、幹線流路延長117kmの河川である。河川上流部の山地はその大半が花崗岩からなり、深層風化によって生産されたマサが沖積低地に大量に供給される。このため江戸時代以降、矢作川は急速に天井川化し、沖積低地上の集落は洪水によって多大な被害を受けた。しかし、昭和に入り、上流側に多くの堰堤が造られてからは、顕著な河床の上昇は認められない。また、現在の矢作川は西尾市の八ツ面山付近で碧海面を切って西流し、三河湾に注いでいるが、これは1605年(慶長10年)におこなわれた河川の付け替え工事の結果で、それまでは現在の矢作古川ないし広田川を南流し、三河湾に注いでいた。

一方、矢作川沖積低地の層序は、基底砂礫層・下部泥層・下部砂層・中部泥層・上部泥層・上部砂層・頂部泥層・頂部砂(礫)層に区分され(松沢ほか、1965；森山・小沢、1972；森山・浅井、1980)、沖積層の基底をなす地質は、領家花崗岩類・変成岩類や鮮新統の瀬戸層群矢田川累層などである。

基底礫層は層厚0～15m、おもに砂礫からなる層で、豊田盆地から海岸部にいたるまで矢作川埋没谷を埋めている。下部泥層・下部砂層はそれぞれ層厚0～15m、粗砂～シルトからなり、海岸部ほど厚く堆積する。中部泥層は層厚0～15m、貝殻の破片を多く含む砂まじりのシルト～粘土からなる。この層は縄文海進時に形成された海成層で、その分布範囲は東海道新幹線の付近にまで及んでいる。上部砂層は層厚0～15m、粗砂～シルトまじりの砂からなり、三角州の前置層として堆積したものと考えられる。頂部泥層は層厚0～5m、後背湿地部に堆積しており、頂部砂(礫)層は層厚2～10m、現河床および旧流路の砂(礫)層である。

以上、地形・地質の概観について述べたが、川原遺跡周辺の微地形および表層地質の詳細は第三分冊の自然科学編で述べる。



第4図 矢作川沖積低地および周辺の地質図
(牧野(1988)を基に作成)

参考文献

- 町田 貞・太田陽子・田中真吾・白井哲之 1962「矢作川下流地域の地形発達史」、『地理学評論』 35 505-524。
 松沢 勲・嘉藤良次郎・北崎梅香・新藤義武「衣浦地区の地質構造および地盤地質」、1965『都市地盤調査報告書』9 建設省計画局・愛知県、16-31。
 森山昭雄・小沢 恵 1972「矢作川流域の沖積平野の地形と沖積層について」『第四紀研究』 11 193-207。
 森山昭雄・浅井道広 1980「矢作川河床堆積物と供給岩石の造岩鉱物との粒度組成関係」『地理学評論』 53 557-573。
 岡田篤正「地形分類」1975『愛知県土地分類基本調査「岡崎」』愛知県企画部 11-24。

歴史的環境

川原遺跡が所在する豊田市の南部地域は、矢作川によって形成された広大な河岸段丘(碧海台地)と沖積平野からなり、当然これらの地形を利用する形で数多くの遺跡が点在している。しかし、本格的な発掘調査が実施された遺跡は少なく、その実体については不明な部分が多かった。近年、第二東海自動車道建設に伴う発掘調査の急増により、臆気ながらも各時代の遺跡の状況が明らかになった。ここでは、これらの発掘調査の成果を援用しながら、川原遺跡周辺の遺跡の概要を時代を追ってまとめておきたい。

旧石器時代

この地に人々の最初の営みが確認できるのは後期旧石器時代のことである。矢作川右岸の低位段丘上に位置する水入遺跡では、平成11年の発掘調査によって、ナイフ形石器やスクレイパーなどの石器がまとまって出土した。なかでもフレークおよびチップなど石器製作に係する遺物が多量に発見されており注目される。他に、碧海台地縁辺部の大明神B遺跡、川原遺跡、矢作川左岸の岡崎市千地遺跡、仁木八万宮遺跡などでも旧石器時代まで遡る遺物が確認されている。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、碧海台地縁辺部に小規模な遺跡が点在している。矢作川に近接した段丘上に位置する水入遺跡では、早期の焼土坑、中期の埋甕を持つ竪穴住居等が検出され、今町遺跡でも、中期の土坑、後期の竪穴住居等が発掘されている。いずれの遺跡も長期にわたって継続した状況はうかがうことはできず、単発的な集落と考えられる。また、川原遺跡では草創期の可能性が考えられる円ノミ状石器が、神明遺跡では縄文前期から後期の土器片が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、確認されている遺跡が少

なく不明な部分が多い。川原遺跡、本川遺跡などがあるが、いずれの遺跡も沖積地に進出している点が注目される。川原遺跡の詳細は次章以降に譲るが、部分的な断続はみられるものの、弥生前期から古墳時代初頭にかけての継続型の遺跡であり、矢作川中流域における拠点の弥生集落である。本川遺跡では中期後半から後期にかけての竪穴住居が確認されている。また、台地上に立地する遺跡としては、神明遺跡があり、弥生後期の竪穴住居等が検出されている。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、碧海台地縁辺部を中心に数多くの古墳や集落が確認されている。古墳時代の初頭(廻間Ⅰ式～Ⅱ式併行期)は前代に続き、沖積地での展開が顕著であり、川原遺跡では大型墳丘墓が引き続いて築造されており、本川遺跡でも若干の遺構が検出されている。しかし、廻間Ⅲ式併行期には、遺跡は断絶してしまい、それ以降の動向は明確ではない。5世紀に入ると一旦途切れた遺跡の展開が再び活発となる。なかでも神明遺跡は、現在までに40棟近くの竪穴住居が確認されており、三河地方ではもっとも早くカマドや須恵器、鉄製のU字形刃先などを導入しており注目される。本川遺跡でもこの時期再び集落が形成され、5世紀前半を中心とする竪穴住居が70棟近く見つかり、カマドを有する住居等も確認されているが、神明遺跡とは対称的に須恵器は1点も出土しておらず、その差異が興味深い。いずれにしろ、人々の活動が活発化すれば、当然それらの遺跡を核とした周辺地域での開発が顕著となる。水入遺跡では矢作川に平行する形で台地の基盤層を掘りこむ巨大な溝が掘削されており、郷上遺跡でも幅15mにおよぶ大規模な溝が確認されている。天神前遺跡では水田跡が発見されている。また、古墳も神明遺跡に隣接する三味線塚古墳など台地の縁辺部や沖積地の微高地を中心に造営されており、6世紀には天冠など豊富な副葬品を出土した豊田大塚古墳が出現する。

古 代

古代に関しても、近年の発掘調査の増加に伴い良好な考古資料が蓄積されてきている。古墳時代中期を中心として隆盛を誇った神明遺跡も6世紀中葉を境に衰退する傾向を見せ、代わって碧海台地上に矢迫遺跡が現れる。矢迫遺跡は6世紀中葉から8世紀にかけての小規模な集落であるが、7世紀初頭に比定される大壁建物が3棟確認されており、その性格とあわせ注目される。同じく古墳中期に大規模な溝が掘削された水入遺跡では、7世紀から9世紀にかけての集落がほぼ完掘され、集落が谷を挟んで時代を経るに従い移動していった様相が明らかにされ、今町遺跡や郷上遺跡でも当該期の堅穴住居が多数確認されている。また、神明遺跡の西方には北野廃寺の瓦窯の一つとして著名な神明瓦窯がある。

中・近世

中・近世に関する遺跡の発掘調査も数多く実施されている。水入遺跡では、矢作川沿いに作られた鎌倉時代に属すると考えられる広大な墓域を確認しており、今町遺跡では、中世から戦国時代にかけての遺構が多数検出されている。矢迫遺跡に近接して鴛鴨城跡がある。鴛鴨城は応仁2年(1468)～永禄年間にかけて存在した城とされるが、現状では明確な遺構は残っていない。鴛鴨城から眼下に広がる沖積地には、広大な水田が展開していたことが川原遺跡の調査から確認されている。郷上遺跡では、戦国時代から近世にかけての集落跡が調査されており、伝承として残されていた明和4年(1767)の水害を境にして、集落が沖積地から台地上へ移動した様相が明らかにされた。



郷上遺跡



水入遺跡



矢迫遺跡



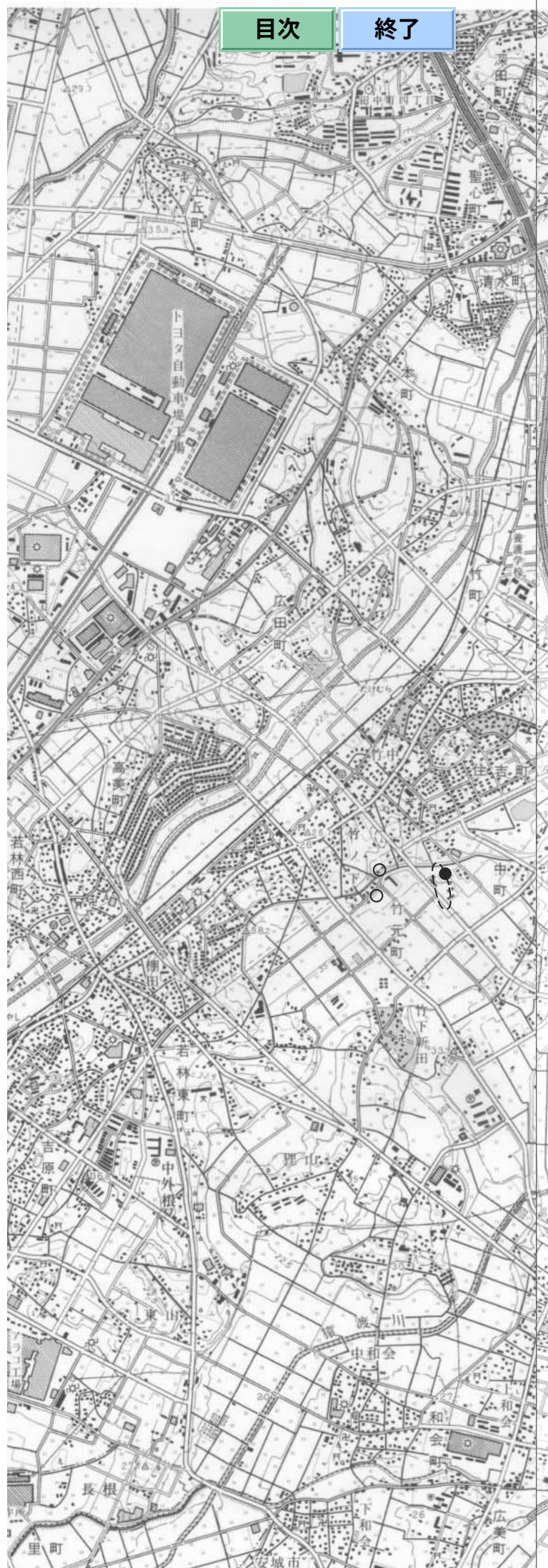
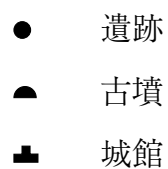
本川遺跡

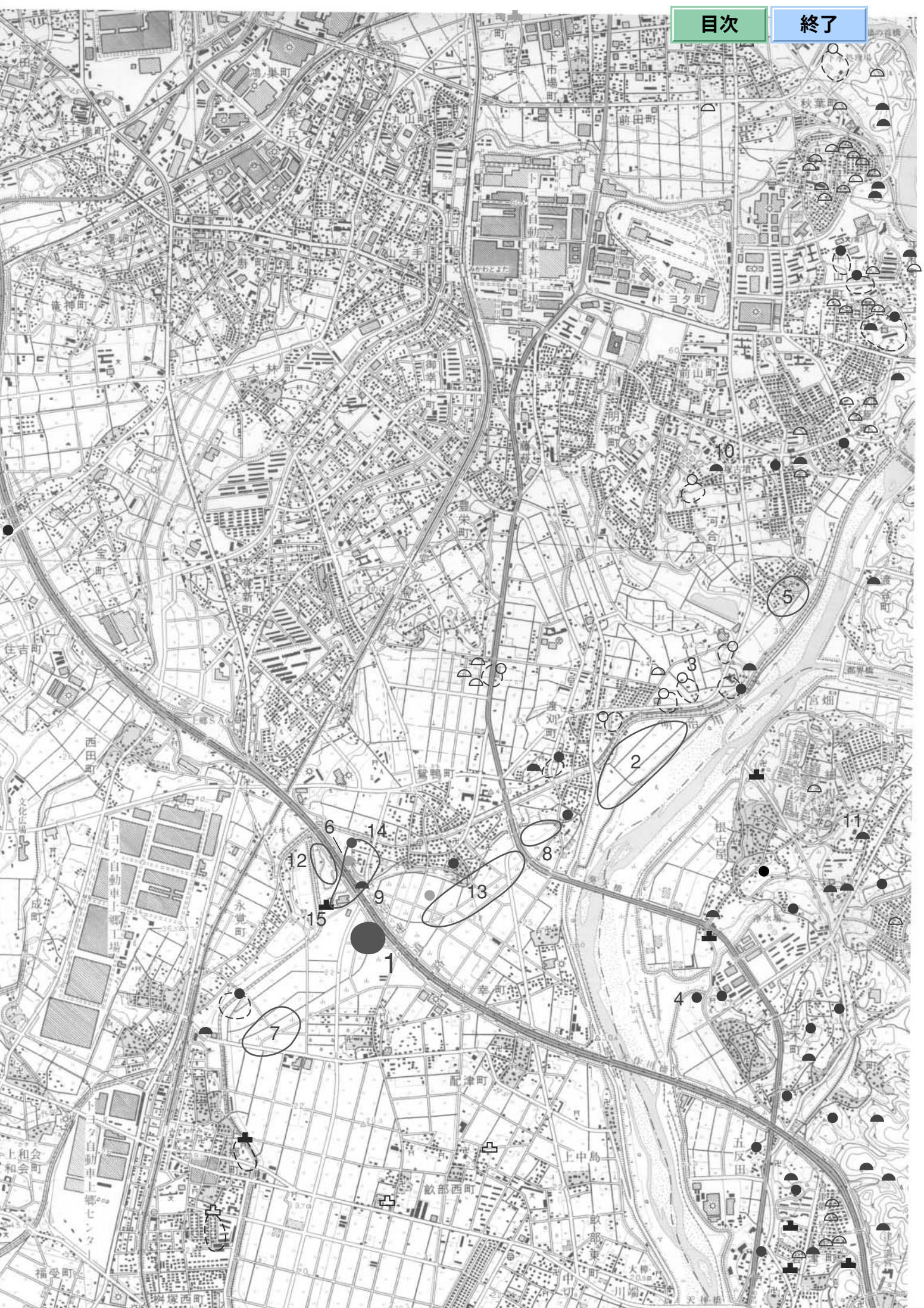
参考文献

- 豊田市教育委員会 1996『神明遺跡』。
 愛知県埋蔵文化財センター 1998『年報』平成九年度。
 愛知県埋蔵文化財センター 1999『年報』平成十年度。
 愛知県埋蔵文化財センター 2000『年報』平成十一年度。



- 1 川原遺跡
- 2 水入遺跡
- 3 大神明遺跡
- 4 千地遺跡
- 5 今町遺跡
- 6 神明遺跡
- 7 本川遺跡
- 8 天神前遺跡
- 9 三味線塚古墳
- 10 豊田大塚古墳
- 11 古村積神社古墳
- 12 矢追遺跡
- 13 郷上遺跡
- 14 神明瓦窯
- 15 鴛鴨城跡





遺跡の層位と時期区分

●●● 層位 ●●●

遺跡の層位状況は、調査区が東名高速道路に沿って300m程の長さで設定されたこともあって、各地点によって異なりをみせる。大きくA区からBCD区北端部、BCD区中央部、BCD区南端部からE区にかけての3つの地点に分けて考えることができる。

まず、微高地上にのるBCD区中央部分であるが、基本層序として大きく5つの層序を確認することができた。上位より第Ⅰ層現代の盛土ないしは旧耕作土層、第Ⅱ層褐灰色シルト層、第Ⅲ層褐色シルト層、第Ⅳ層灰色シルト層、第Ⅴ層灰色砂質シルト層の順で堆積しているが、BC区側では第Ⅱ層および第Ⅲ層の一部が削り取られる形で第Ⅰ層が厚く存在しているため、第Ⅱ層中位・第Ⅲ層上位で検出されるはずの古代～中世期の遺構は確認することができなかった。基本的に第Ⅱ層から第Ⅳ層は、各時代の遺物を含む包含層と考えられ、第Ⅲ層中位で古墳中期、第Ⅲ層下位で弥生後期～古墳初頭の遺構群を検出した。第Ⅳ層から地山面の第Ⅴ層にかけては、弥生中期後葉に比定される竪穴住居群がおびただしい切り合い関係を持ちながら存在し、最終調査面である弥生中期の墓域に関わる遺構群は第Ⅴ層において確認した。

次に、A区からBCD区北端部であるが、現代の耕作土層を剥ぐと、約1.2mの厚さで褐色系のシルトが5層存在しているが、いずれの層位からも遺物はまったく出土していない。その下層には砂とシルト、腐食物を含むシルトの互層が厚く堆積しており、長期にわたる湿地・沼地状の環境であったと推定される。互層の最上位で水田状の遺構を検出したが、遺物の出土はみられず、時期は特定できなかった。

BCD区南端部からE区の状況は、旧河道による谷状の堆積状況が確認でき、弥生中期、弥生後

期、中世の3時期で河道法面の整形が認められた。中世前半のSD06の埋没後、その上層を利用する形で、中世後半の水田が2面検出された。

以上をまとめると、川原遺跡は、その周辺に近接して湿地や河道が広がり、これらに囲まれた南北120m・東西80m程度の狭小な島状の微高地上に展開した遺跡と考えることができよう。

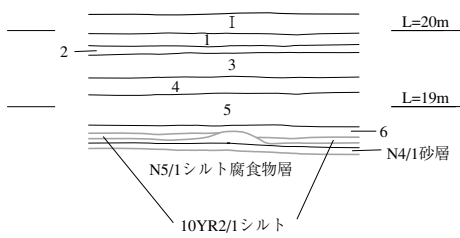
●●● 遺構の時期区分 ●●●

今回の調査によって確認された遺構群は、次の大きく7つの時期に区分することができる。

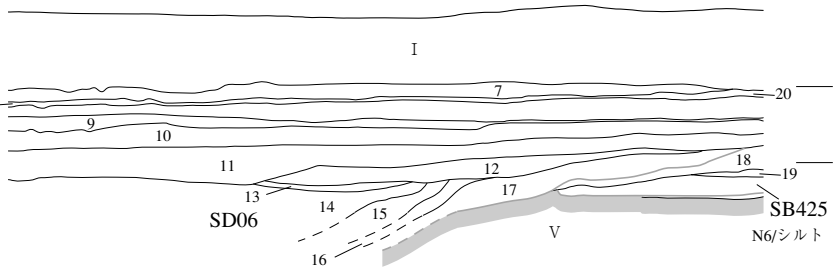
- Ⅰ期 弥生時代中期(瓜郷式～古井式前半)を主体とする時期で、主に土器棺墓、土壙墓、方形周溝墓などが確認され、遺跡が墓域として機能していた段階。
- Ⅱ期 弥生時代中期後葉(古井式後半)を中心とする時期で、県下最多の300棟にもおよぶ竪穴住居群や方形周溝墓などが確認された段階。
- Ⅲ期 弥生時代後期から古墳時代初頭(川原上層式)にかけての時期で、方形周溝状遺構を中心に一辺20mを越える大型墳丘墓のみで構成された墓域が造られた段階。
- Ⅳ期 古墳時代中期を中心とした時期で、古墳と推定される方形周溝状遺構や、その周囲に展開する竪穴住居・掘立柱建物等が確認された段階。
- Ⅴ期 奈良から平安時代にかけての時期で、遺構の分布としては希薄であったが、竪穴住居などを確認した段階。
- Ⅵ期 中世前半を中心とした時期で、鎌倉時代初頭の旧流路が検出された段階。
- Ⅶ期 中世後半の室町時代を中心とした時期であり、遺跡の南東に広がる谷状地形に広く水田が展開していた段階。

以下、本書の記述は、この時期区分に基づいて説明を加えていくことにする。

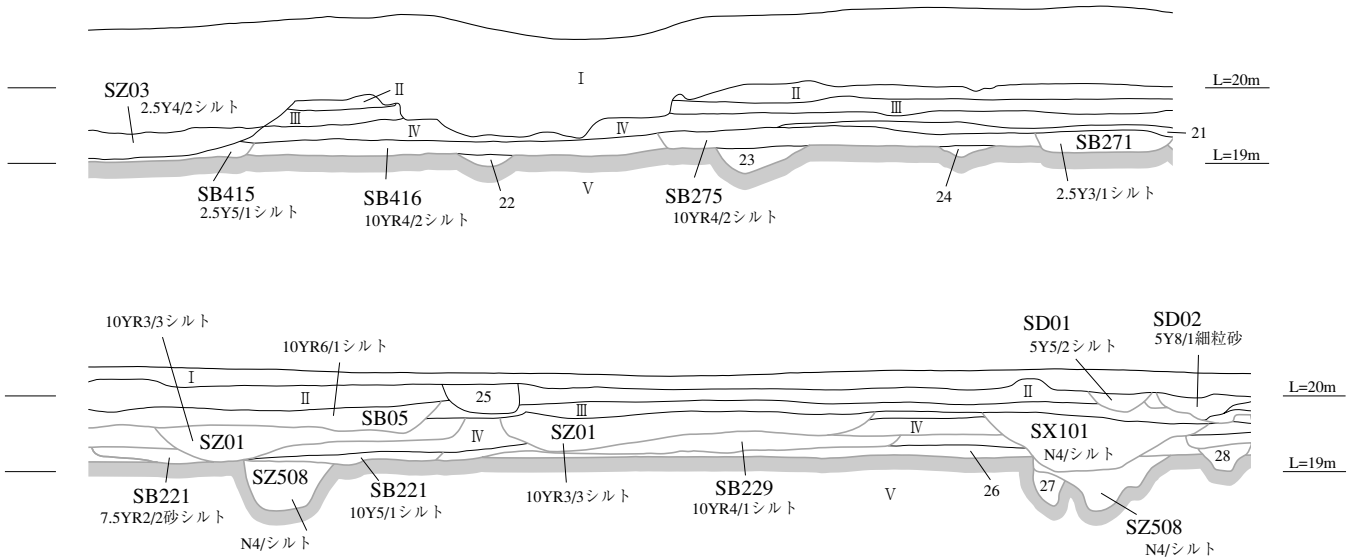
A区



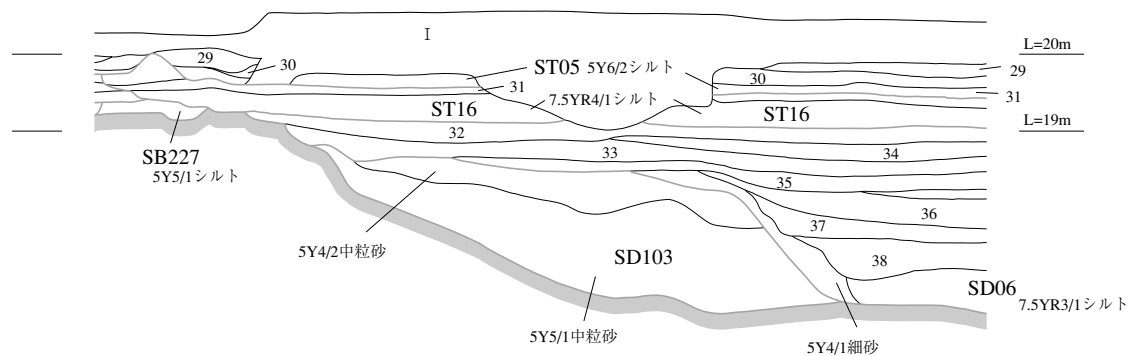
E区



BCD区中央



BCD区南部



1. 粗砂、粘質土ブロック混じり
4. 10Y4/1シルト
7. 7.5Y6/1砂
10. 2.5Y7/1砂
13. 2.5Y6/1砂
16. 2.5Y6/1砂質シルト
19. N5/0砂質シルト
22. N4/シルトとN7/極細粒砂の斑土
25. 10YR4/1極細粒砂、2.5Y7/1細粒砂の斑土
28. 5Y5/2粘質シルト
31. 2.5Y5/3砂質土
34. 10YR5/2粘質シルト
37. 7.5YR3/1シルト

2. 10YR5/1シルト
5. N3/1シルト
8. 5RP4/1砂質シルト
11. 10YR4/1砂質シルト
14. N5/0砂質シルト
17. 7.56/1、7/1砂の互層
20. N6/0砂
23. 2.5Y4/1シルト
26. 5Y5/1シルト
29. 5Y5/2シルト
32. 10YR4/2粘質シルト
35. 7.5YR4/1粘質シルト
38. 7.5YR3/1砂質シルト

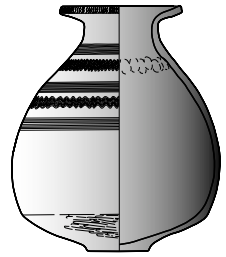
3. 10GY4/1シルト
6. 10BG5/1砂質シルト
9. 10Y6/1砂
12. 2.5Y6/1砂質シルト
15. N5/0砂
18. N6/0砂質シルト
21. 10YR6/1シルト
24. 7.5Y5/1シルト
27. N5/シルトとN6/極細粒砂の斑土
30. 5Y6/1極細粒砂
33. 7.5YR3/1粘質シルト
36. 7.5YR3/1砂質シルト

1/100 0 10m

第6図 調査区基本層序 (1:100)

II

弥生時代中期



I・II期の遺構

● I期の遺構 ●

I期の遺構は、最終下面で確認された弥生時代中期(瓜郷式直前段階から古井式)に属する遺構群である。確認された遺構は、土坑、土墳墓、土器棺墓、方形周溝墓、溝などがあるが、おおむね墓に関連する遺構が数多く検出されており、堅穴住居など生活に関わる遺構は確認されていない。

土器棺墓

土器棺墓として認定できるのは5基ある。時期別には瓜郷式前半段階2基、瓜郷式後半段階1基、古井式2基である。これらの土器棺は、土器の打ち欠かれた位置により、口頸部を打ち欠くものと、体部を打ち欠くものの大きく2つのタイプに分類することができる。これは土器棺の埋納状態にも直接関わっており、前者は立位の状態、後者は横位の状態検出された。

SK682 SB535・SB536の下層で検出された。長軸90cm・短軸70cmを測る楕円形をした土壇内のほぼ中央部に大型の壺が口縁部をほぼ南に向け、横位の状態出土した。壺の体部は大きく円形に打ち欠かれており、土器棺として利用されたと考えられる。土壇内の埋土は暗灰色シルトであり、骨片などは検出されなかった。古井式に属する。

SK888 瓜郷式前半段階に属する土器棺であり、長軸60cm・短軸52cmを測る土壇内に、壺の口縁部をほぼ西に向けた横位の状態出土した。棺身である大型壺の体部は意識的に大きく打ち欠かれており、その上位より蓋として利用された他の壺の体部片が出土している。土壇内の埋土は暗灰色シルトであり、骨片などは検出されなかった。

SK925 瓜郷式後半段階に属する土器棺であり、長軸64cm・短軸52cmを測る土壇内に、壺の口縁部をN-30°-Eに向けた横位の状態出土した。棺身である大型壺の体部は意識的に大きく打ち欠かれている。土壇内の埋土は暗灰色シルトであり、骨片などは検出されなかった。

SK938 古井式瓜郷式前半段階に属する土器棺であり、長軸86cm・短軸78cmを測る土壇内より、壺を棺身、甕を蓋として利用した土器棺が立位の状態出土した。壺は体部の上半部以上を意識的に打ち欠いている。土壇内の埋土は暗灰色シルトであり、骨片などは検出されなかった。

SK943 古井式に属する土器棺である。明確な土壇は確認できなかったが、体部上半以上を欠損する大型壺が立位の状態出土した。

土壇墓

調査区内のほぼ全域で土壇墓の可能性が考えられる遺構を35基検出した。

① 土壇墓の認定

調査区内で検出される遺構の多くが、土器棺墓、方形周溝墓などの墓に関連する遺構であり、墓域内に構築された遺構として、一定の方向性を持ち、ある程度群集して築造された土坑群を土壇墓の可能性のある遺構として判断し調査を進めた。

② 時期

遺構の性格上ほとんど遺物の出土はみられなかったが、わずかばかりの出土遺物、他の遺構との切り合い関係から、おおむね瓜郷式直前段階から古井式に属する可能性が考えられる。

③ 形状

これらの遺構の平面形態は、次の3つのタイプに大きく分類することができる。

I ほぼ長方形に近い形状を示すもの。



第7図 川原Ⅰ期遺構配置図（1:800）

Ⅱ 長軸方向はほぼ直線的だが、短軸方向の両辺が丸く終わっているもの。

Ⅲ 楕円形に近い形状を示すもの。

さらにこれらは、断面の形状により細分することが可能であり、ほぼ逆台形状に掘りこまれるaタイプとU字形を示すbタイプとがみられる。

平面形態は、おおむね円を意識したⅡ・Ⅲタイプが圧倒的に多く、全体の8割以上を占め、Ⅰタイプは総じて少ない。また、断面の形状は、Ⅰタイプが逆台形に掘り込まれるaタイプが多いほかは、Ⅱ・Ⅲタイプではa・bが突出することなく、それぞれ約半数程度であった。ここで注目しておきたいのは、平面形態でⅠタイプが2割弱程度存在することである。なかでもSK820などは2mを超える規模を有するとともに定型化した長方形プランを持ち、断面の形状もaタイプである。また、床面も平坦に整形されており、調査では明確にすることはできなかったが、一宮市猫島遺跡で確認されているような木棺を有していた可能性も考えられるであろう。

④ 規模

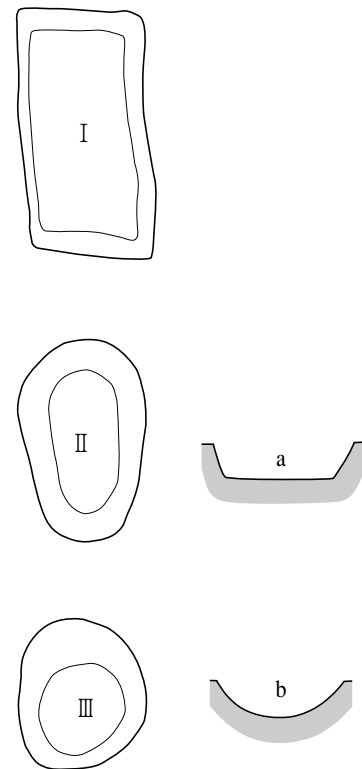
第9図に示したように、長軸の長さをもとに、次の3つのグループに分けることができる。

- A 長軸長が100cm未満のもので5基確認されている。
- B 長軸長が100cm以上200cm未満のもの。今回の調査で最も多く確認されたグループであり26基確認されている。
- C 長軸長が200cmを超えるもので4基確認されている。

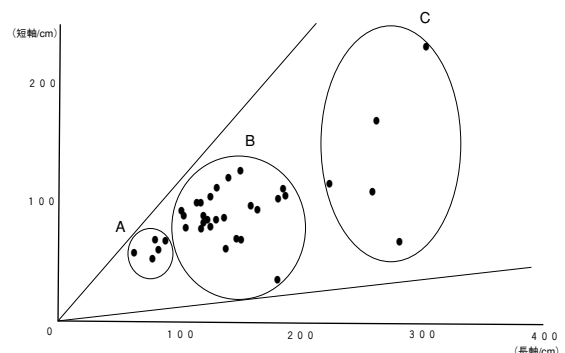
以上のように分類することができるが、③で述べた形状との強い相関は見いだすことはできず、それぞれの形状で、AからCの規模を有するものがみられた。また、⑥で述べる主軸との相関も特に認めることはできなかった。

⑤ 埋土の状況

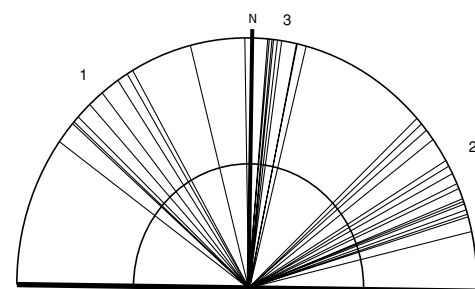
これらの遺構の埋土の状況は、基本的には単一の埋土で構成されており、遺構の掘削から埋め戻しまでそれほどの時間をおかなかったものと推定



第8図 土壌墓分類図

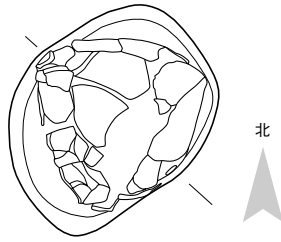


第9図 土壌墓長軸・短軸相関図



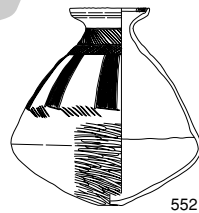
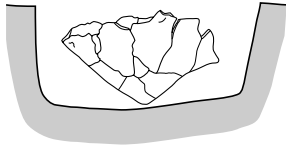
第10図 土壌墓主軸方向

SK682



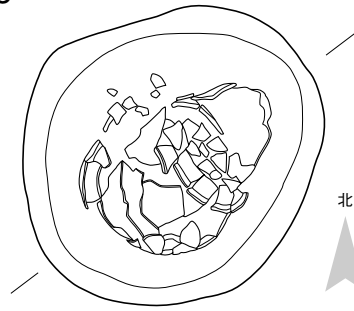
北

L=19m



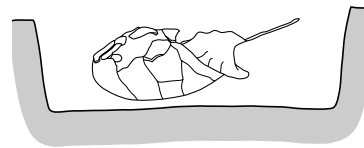
552

SK938

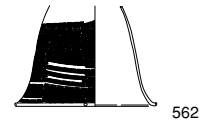


北

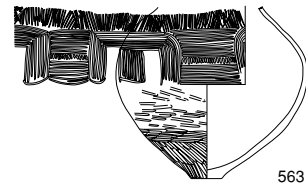
L=19m



L=18.5m

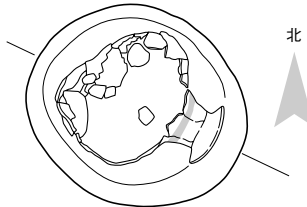


562



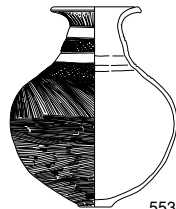
563

SK888



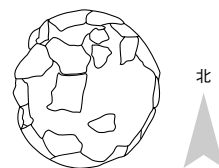
北

L=19m



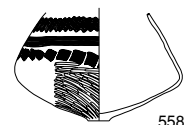
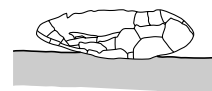
553

SK943



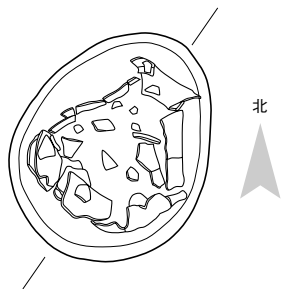
北

L=19m



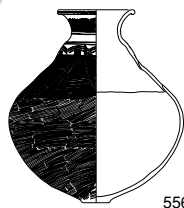
558

SK925



北

L=19m



556

1/20 0 1m

第11図 土器棺墓 (1:20)

される。

⑥ 主軸方位と分布状況

これらの遺構の主軸方位を示すと第10図のようになる。図に明らかなようにおおむね次の3つの方向に集約され、一定の方向性のもとにこれらの遺構群が構築されていたことがわかる。

- 1 N-30°～40°-W
- 2 N-45°～75°-E
- 3 N-2°-W～N-12°-E

これらを遺構の切り合いおよびわずかばかりの出土遺物から時期を推定すると、1・2の方向性を持つ土壇群は、おおむね瓜郷式直前段階から瓜郷式の範疇でおさえられる。3の方向性を有すものに関しては、古井式に属する。これらの遺構の分布状況は、1・2の方向性を有するものは、おおむねSD574をはさんで、東西に散在的に分布するのに対し、3の方向性を有する一群は、祭祀的な性格を有するSZ504を中心にして、この時期に新たに登場する方形周溝墓との間に集約されるように分布している。

⑦ 主な土壇墓

SK501 長軸130cm・短軸85cm・深さ20cmを測る(規模B)。平面形態は、長軸方向は両側縁ともに直線的に延びるのに対し、短軸方向の両端は微妙に円弧を描き、楕円状の形態を呈する。断面はU字状を示す(形状Ⅱ-b)。埋土の状況は、暗灰色粘質シルトの単一の土層で構成されており、基本的には掘削から埋め戻しまでそれほどの時間を有さなかったと推定できる。遺物の出土は見られなかった。

SK587 長軸117cm・短軸100cm・深さ40cmを測る(規模B)。平面は楕円形状を呈し、断面は台形に近い形状を示す(形状Ⅲ-b)。埋土は暗灰色粘質シルトからなり、掘削から埋め戻しまでそれほどの時間を有さなかったと推定できる。遺物としては瓜郷式古段階の土器片がわずかに出土した。

SK618 長軸258cm・短軸110cm・深さ42cmを測る大形の土壇墓である(規模C)。平面形態は、細長く延びる楕円状に近い形状を示し、断面はほぼ

U字形に掘りこまれる(形状Ⅱ-b)。埋土の状況は、基本的にはオリーブ黒色粘質シルトからなり、遺物の出土はみられなかった。

SK784 長軸182cm・短軸104cm・深さ56cmを測る(規模B)。平面形態は、ほぼ楕円形に近い形状を示し、断面はほぼ逆台形に掘りこまれる(形状Ⅲ-b)。埋土の状況は暗灰色粘質シルトの単一の土層であり、底面付近より瓜郷式古段階に属する土器片が若干出土した。

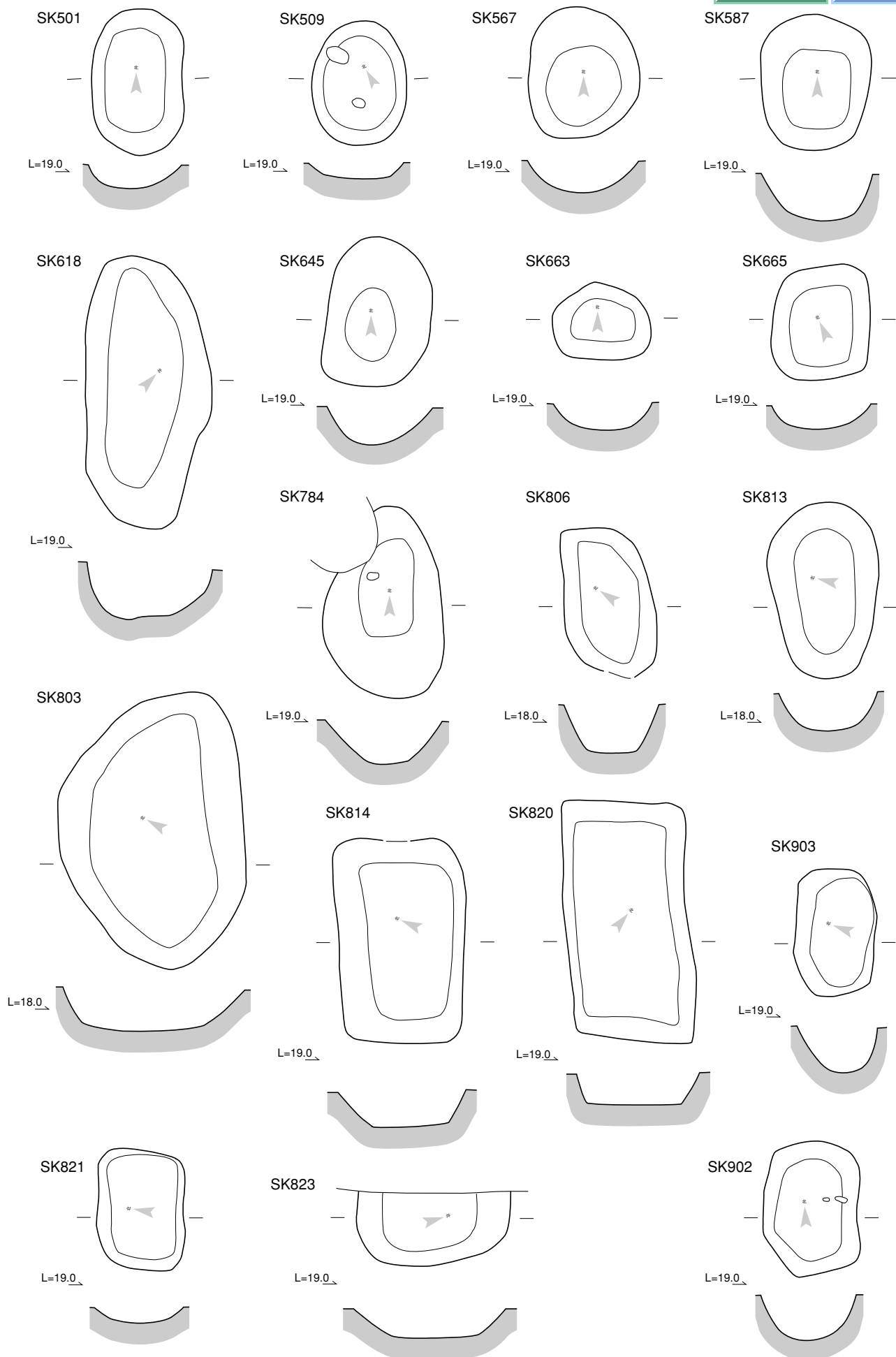
SK814 長軸186cm・短軸105cm・深さ30cmを測る(規模B)。平面形態は、ほぼ長方形に近い形状を示し、断面はほぼ逆台形に掘りこまれる(形状Ⅰ-a)。埋土の状況は暗灰色粘質シルト層のみで構成されている。遺物の出土はみられなかった。

SK820 長軸223cm・短軸117cm・深さ25cmを測る(規模C)。平面形態は、定型化した長方形プランを持ち、断面はほぼ逆台形に掘りこまれ、床面も平坦に整形されている。(形状Ⅰ-a)。調査では明確にすることはできなかったが、一宮市猫島遺跡では、弥生中期段階の木棺墓が確認されており、木棺を有していた可能性も考えられるであろう。埋土の暗灰色粘質シルトより構成されており、基本的には掘削から埋め戻しまでそれほどの時間を有さなかったと推定できる。遺物の出土はみられなかった。

土坑

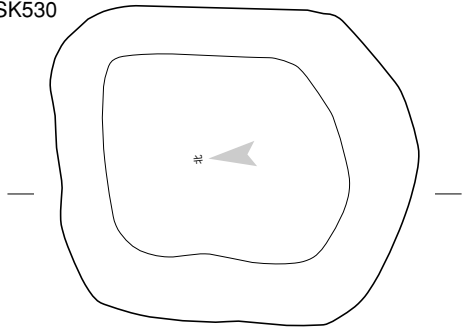
300基以上の土坑が検出されたが、そのほとんど小規模な性格不明の遺構であり、ここでは、土壇墓群のなかで検出された炭化物・灰層を含む特徴的な土坑およびまとまった遺物の出土をみた土坑について説明していく。炭化物・灰層がまとまって出土した土坑は、総数14基あり、平面の形状はおおむね楕円状、掘形はU字型を呈し、50cm以上の掘り込みを持つものが多い。時期的には瓜郷式直前段階から古井式段階まであり、土壇墓・方形周溝墓とオーバーラップするため、性格等不明なところが多いが、墓域を構成する遺構の一部と考えられる。

SK538 遺構の北端をSK537、南西隅をSK541に



第12図 土壌墓 (1:50)

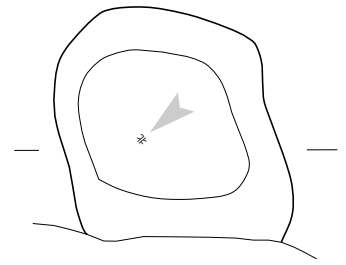
SK530



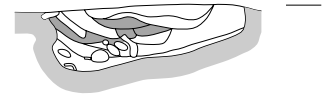
L=19.0



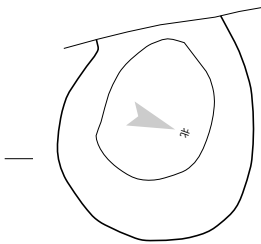
SK597



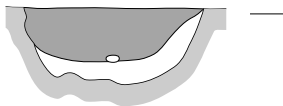
L=19.0



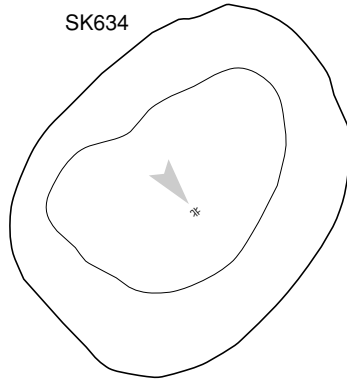
SK624



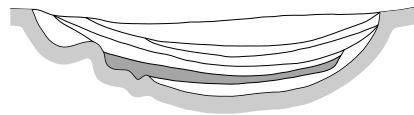
L=19.0



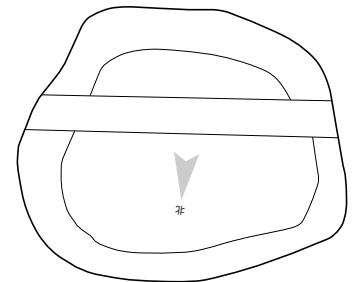
SK634



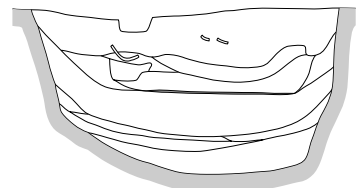
L=19.0



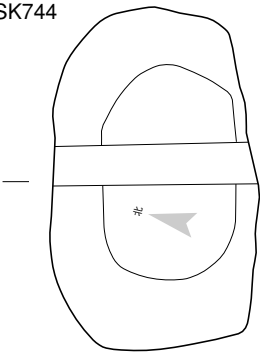
SK730



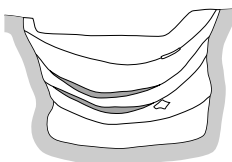
L=19.0



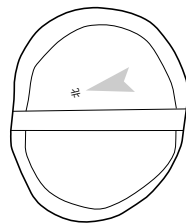
SK744



L=19.0



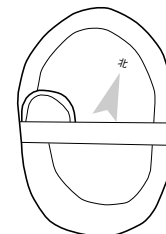
SK816



L=19.0



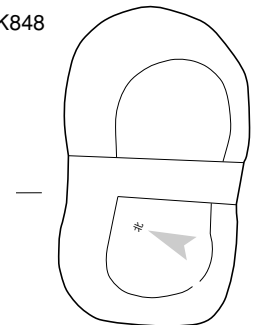
SK818



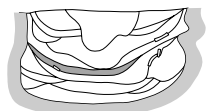
L=19.0



SK848



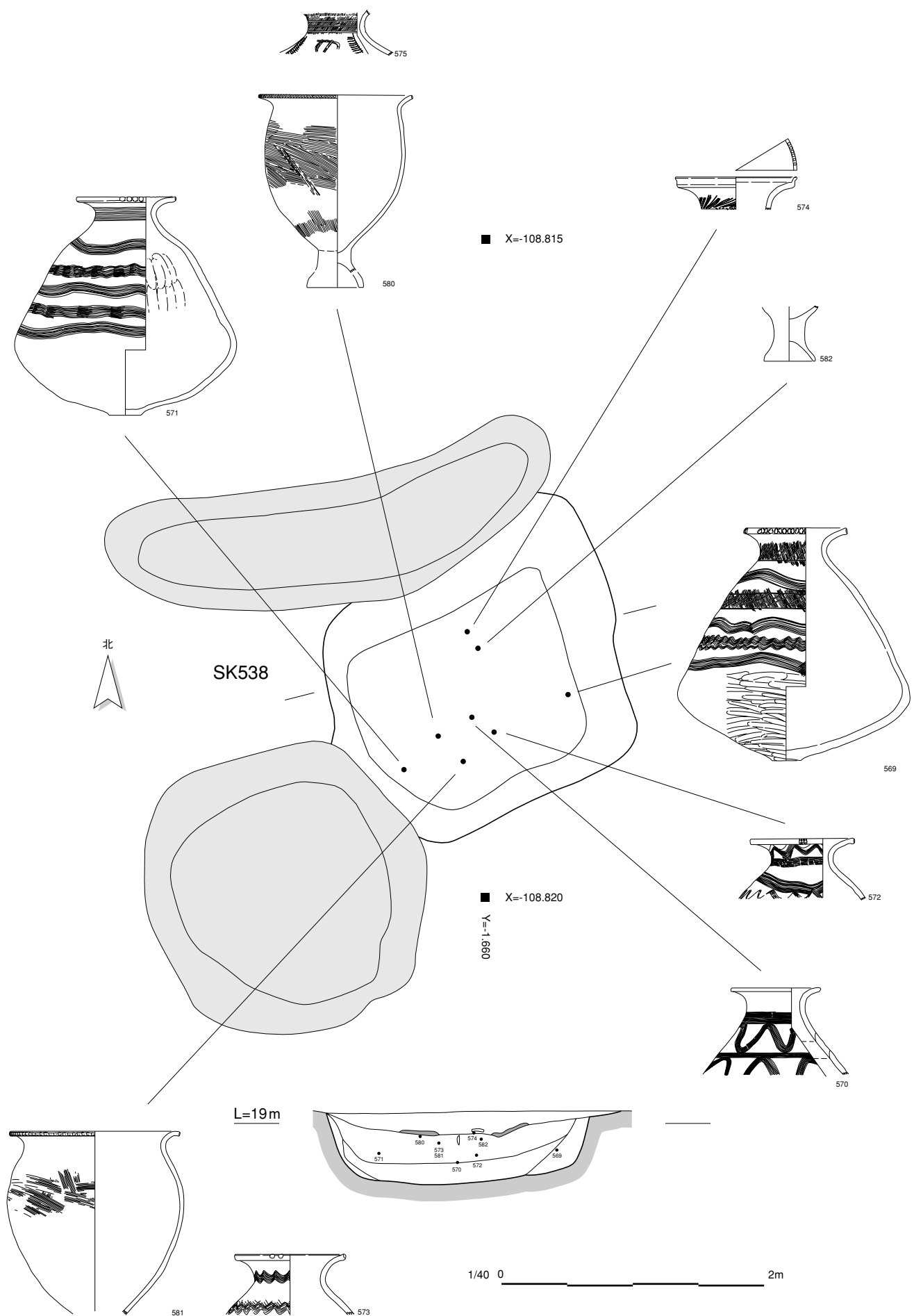
L=19.0



※ ■ 部分 炭化物・焼土含む

1/50 0 4m

第13図 土坑 (1:50)



第14図 SK538 (1:40)

切られるが、おおむね長軸約300cm・短軸250cm・深さ56cmを測る。平面の形状は、おおむね正方形に近い形状を示し、断面はほぼ逆台形に掘りこまれており、セクションの観察から少なくとも1回の掘り直しが行われていることが確認された。埋土の状況は、おおむね4層の堆積が認められ、いずれも炭化物を含み、特に第1層の下位では焼土のブロックが検出された。古井式に属する完形の壺をはじめ多数の遺物が第2層を中心に出土した。

SK545 調査区の北端で検出された大形の土坑であるが、他の遺構にその大半を削られ、全形はうかがうことはできない。おおむねU字型の掘形を有していたと思われ、深さは現存で30cm程度を測る。遺物としては、床面直上で瓜郷式直前段階の壺および瓜郷式古段階の大形壺が出土した。

SK586 径170cm程の楕円状の平面形態を有し、ほぼU字型に近い掘形を持つ。深さは60cm程度あり、埋土は6層の堆積が確認できた。すべての層より炭化物の出土が認められたが、特に最下層は非常に多くの炭化物の出土をみた。遺物としては、瓜郷式直前段階に比定される土器がまとまって出土した。

SK624 遺構の一部を欠くが、長軸145cm・短軸118cm・深さ50cmを測る楕円状の平面形態を有する土坑であり、U字型の掘形を持つ。埋土は大きく2層に分かれるが、いずれも炭化物を若干含む。最下層より瓜郷式直前段階の壺が出土した。

SK730 長軸209cm・短軸180cm・深さ100cmを測る大形の土坑である。埋土の状況は中位で大きく分かれ、上位は多量の炭化物を含むのにたいし、下位は全く炭化物をふくまない。図示はしていないが炭化物層の上位より凹線文段階の遺物および種子類等が出土しており、上面で確認された竪穴住居の貯蔵穴として再利用された可能性も考えられる。

SK744 長軸223cm・短軸127cm・深さ90cmを測る。平面形態は、ほぼ長方形の短部が弧状を示す楕円形を示し、断面はほぼ逆台形状に掘りこまれる。埋土の状況はすべての層で炭化物が認めら

れたが、特に中位で2層の炭化物が集中する層序が確認できたが、時期を特定できるような遺物の出土はみられなかった。

SK848 長軸185cm・短軸112cm・深さ61cmを測る土坑であり、平面形態は、ほぼ長方形の短部が弧状を示す楕円形を示し、断面はほぼU字形状に掘りこまれる。セクションの観察からは、何回かの再掘削の様子をうかがうことができるが、この土坑も中位で炭化物や灰層が厚く堆積する層序が認められた。遺物としては古井式に属する土器片が出土している。

方形周溝墓

方形周溝墓およびその可能性が考えられものは総数12基確認した。方形周溝墓に伴う遺物の出土は少なく時期の特定は困難なものが多いが、僅かばかりの出土土器および遺構の切り合い関係よりみるならば、おおむね古井式前半段階におくことができよう。平面形態は四隅に陸橋部をもつものが3基確認できるほか、三隅および二隅に陸橋部を有する可能性のあるものがそれぞれ1基ずつ(SZ510・SZ513)推定できる以外は、周溝が全て揃わず極めて不定形なものが多い。墳丘の規模・形状については、大きく4～6m前後と8～10m前後の2つのグループにわけることができ、正方形に近いものと長方形に近いプランをもつものがみられた。また、方形周溝墓は、後述する祭祀的な色彩の強いSZ504を中心として微高地の縁辺部に弧状に配置されており興味深い。いずれの方形周溝墓もマウンドはすでに削平されており、主体部などは検出することはできなかった。以下、主だった方形周溝墓の概要を説明していきたい。

SZ501 四隅に陸橋部を有する方形周溝墓である。墳丘の周囲をめぐる周溝は東西の周溝は規模・形状ともに同様なのに対し、南北の周溝は不定形である。墳丘部は東西10m、南北8.2mを測り、東西方向にやや拡大した長方形に近く、下層の調査で確認された方形周溝墓の中では最大の規模を持つ。遺物の出土はみられなかった。

SZ502 四隅に幅広の陸橋部を有する方形周溝

墓である。溝は東周溝がやや拡張気味であるが、他はおおむね同様な形状を示す。墳丘部は東西4.7m、南北4.2mを測り、ほぼ正方形に近い形状を示す。若干の遺物が周溝内より出土しているが、混入の可能性が高い。

SZ505 四隅に陸橋部を有する方形周溝墓であるが、周溝の形状は東西南北ともに不定形である。墳丘部は東西5.2m、南北5.9mを測り、正方形に近い形状を示す。周辺には不定形な溝が錯綜し、調査時には複数の方形周溝墓が切り合う形で存在したと想定したため、SZ506、SZ511、SZ512のように鍵状に屈曲する溝も方形周溝墓と認定した。しかし、周溝のセット関係がつかめず、主体部等の施設も認められないので方形周溝墓とするにはやや根拠が乏しい。

SZ507 方形周溝墓としては東周溝を欠損しており不定形であるが、南周溝が僅かに屈曲し、周溝自体の深さも10cm程度と浅いため、東周溝が削平された可能性を考え、方形周溝墓と認定した。方形周溝墓とすれば、三隅に陸橋部をもつタイプと想定される。墳丘部は、東西・南北ともに3.5mを測り、正方形に近い形状を示す。西周溝より古井式に属する壺および甕が出土した。

方形周溝状遺構

SZ504 調査区のほぼ中央部南よりで検出された。南東コーナー部分に幅広の陸橋部を有する方形周溝状遺構である。マウンドの周囲には幅80cm～100cm、深さ10cm程度の浅い溝がめぐる。マウンド部分はやや長方形となり、長軸11.9m、短軸9.8mを測る。方形周溝墓の可能性も考えられるが、溝内より大型石包丁や周辺から赤彩された石鏃、銅鐸にともなう石製舌など祭祀的な色彩の強い遺物が出土している点、一隅に陸橋部を持つ方形周溝墓は、この地方において一般化するのは弥生後期以降である点、周溝の断面の形状が他の周溝墓は深くU字形となっているのに対し、浅く皿

状の形状を示し、明らかに異なっている(溝部分が削平されている可能性は否定できないが)点などを考慮し、ここでは祭壇的な性格を有する方形周溝状遺構としておく。時期は、遺物の出土が少なく、判然とはしないが、遺構の切り合いよりみるならば、おおむね古井式前半段階のいずれかにおくことができる。なお、溝内より、細片ではあるが古井式前半段階に比定される細頸壺の口縁部片が出土している。

溝

方形周溝墓の周溝を除き、明確に溝と認定できる遺構としてSD574がある。他は性格不明の細長い土坑状の形状を示すものである。

SD545 方形周溝状遺構SZ504の墳丘西側で確認された遺構であり、長軸900cm・短軸144cm・深さ15cmを測る大形の土坑状の溝である。瓜郷式新段階の壺が出土した。

SD574 調査区のほぼ中央部を南西から北東に向けて走る溝である。溝の南方部は幅70cm、深さ60cmを測り、断面の形状はV字に近い形状を示すが、溝の北方部は幅120～150cm、深さ40cm、断面の形状は逆台形に近い形と変化する。溝内よりほとんど遺物が出土せず時期は特定できないが、SZ504をはじめとした他の遺構との切り合い関係より類推するならば、おおむね瓜郷式段階に比定することができよう。

旧河道

SD502(SD103) 調査区の南端で確認した旧河道(旧矢作川?)である。大きく弥生中期(SD502)、弥生後期から弥生終末期(SD103)、中世(SD06)の段階で大規模な法面の整形を行っている。弥生中期段階の整形は、SD103の整形の際に大きく削りとられており、極一部残存していたのみであった。若干の弥生中期の土器と木製の臼、梯子などが最下層より出土した。

●● II期の遺構 ●●

II期の遺構としては、調査区ほぼ全域に広がりを見せる竪穴住居群と方形周溝墓、土器棺墓などがある。

竪穴住居

① 竪穴住居の認定

今回の発掘調査では、297棟の竪穴住居を確認した。竪穴住居の認定の基準は、基本的に以下の5点である。焼失した炭化材や一括遺物の出土したもの。地床炉や貼り床が確認されたもの、柱穴や壁溝の痕跡と考えられるピットおよび溝などの施設が確認されたもの。床面や掘方埋土内に炭化物を含むもの。平面形態が方形状を呈し、掘方断面(床面)が平坦で、一辺が概ね2m以上を測るものの5点である。先の4点については、住居として問題はなかろうが、後の1点については、多少根拠が希薄な感はある。しかし、その大半が確実な住居と重複して検出されており、他の性格を持った遺構と想定するよりは、より蓋然性が高いと考えられるため、ここでは竪穴住居として取り扱っていくことにする。

② 時期

今回の調査で確認された竪穴住居の時期は、出土遺物および遺構の切り合いなどより、おおむね古井式後半段階(凹線文土器)に比定することができる。なお、3棟の住居は弥生後期前半の川原上層Ⅰ式期に属するものである。

③ 分布

竪穴住居は、南北120m・東西80m程度の島状に広がる微高地のほぼ全域に築かれているが、その密集域は、遺跡南部に広がる谷を南限として、遺構検出レベルの高い80m程の範囲内に集中し、それより以北の密集度は湿地に近づくにつれ薄くなる。東に関してもE区での検出状況からみて、住居の密集度は薄いと考えられ、また、西については調査区外となるため判然とはしないが、間近に湿地ないしは谷が迫っていることを考慮すると、当然

住居の密集度は薄くなると考えられる。

時期的には、4段階の住居は微高地上に散在的に分布するのに対し、5段階の住居はその数量自体も爆発的な増加をみせ、微高地上にカードをばらまいたような凄まじい重複関係を有する。

④ 平面形態

確認された竪穴住居は著しい重複関係をみせるため、全形をうかがうことのできる住居は少ないが、おおむね次のようなタイプに分類することができる。

I 一辺の長さがほぼ等しい正方形に近いタイプ。

II 一辺の長さがほぼ5:4以下になる長方形に近いタイプ。

III 上底と下底の差がほぼ5:4以下になる台形に近いタイプ。

さらにこれらは、コーナー部の形状により細分することが可能であり、ほぼ直角的に曲がるaタイプと大きく丸みを有して曲がるbタイプとがみられ、同一の住居においてa・bの両者が混在して検出されるものも数多くみられた。

ある程度平面形態をうかがうことのできる竪穴住居は、159棟あり、そのタイプ別内訳は、Iタイプ59棟(37%)、IIタイプ67棟(42%)、IIIタイプ33棟(21%)を数え、ややIIタイプの占める割合が高く、尾張地方の沖積地に立地する遺跡でよくみられるIIIタイプも2割程度存在し目立つ。コーナーの形状については、調査精度の問題もあろうが、先に記したようにa・bが混在して検出されるものが多く、単純に方形とか隅丸方形だとか認定するのは難しい。ただ、全体的には、やや丸みを意識しながら屈曲するものが多い。

⑤ 内部構造

内部構造を示すものとして、柱穴・壁溝・貯蔵穴などがある。

竪穴住居の屋根を支える柱穴に関しては、



第15図 II期遺構配置図（1:800）

基本的にⅠ・Ⅲタイプは4本ずつのパターンで検出されるものが多く、Ⅱタイプに関しては6本柱からなるものが多かった。しかし、全く柱穴が検出されない住居もみられる反面、数多くの柱穴を有するものもあり、基本パターンで検出された住居に関しても柱穴の深さが一定せず不揃いで、なかには極端に浅いものもみられるなど不明瞭な部分が多い。

壁溝を有する住居は92棟確認することができた。幅20～30cm程度の浅い溝を壁際にめぐらしており、おおむね全形が判明する住居より推定するならば、ほぼ全周するものないしは1カ所のみ途切れるものが多いようである。

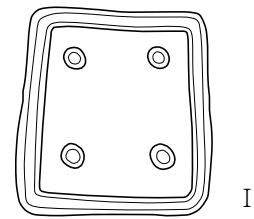
柱穴および壁溝が確認された住居は、竪穴住居が密集する微高地のなかでも、比較的高所に位置する住居であり、湿地等に近接するレベル的にやや下がった地点では明瞭ではなかった。このような状況は、尾張平野の低湿地帯に位置する弥生遺跡でも指摘されており、尾張・三河を問わず、低湿地帯に位置する遺跡では共通してみられる特色と言えるのかもしれない。

貯蔵穴に関しては、遺構の切り合い関係が凄まじく、確実に貯蔵穴と認定できるものはみられなかった。しかし、何軒かの住居では、数十cmから1m程度の円形土坑が確認されており、それらが貯蔵穴に該当する可能性はある。なかでもSB201で確認された円形土坑は炉に近接して設けられており、その蓋然性は高いと考えられる。

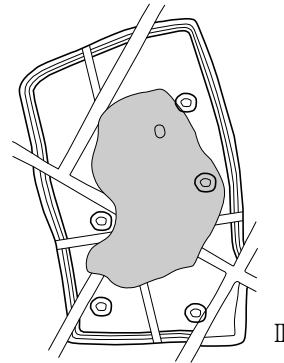
その他、何軒かの住居跡内から、人頭大の川原石が出土しており、作業台の可能性が考えられる。また、SB205からは大型の砥石が据え置かれた状態で出土しており注目される。

⑥ 炉の形態と位置

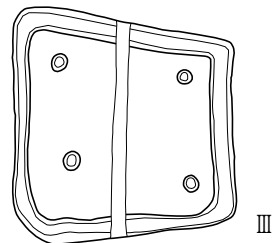
炉が検出された竪穴住居は総数35軒であ



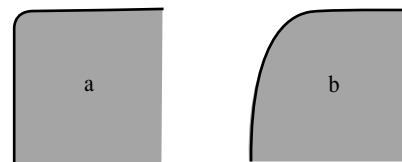
Ⅰ



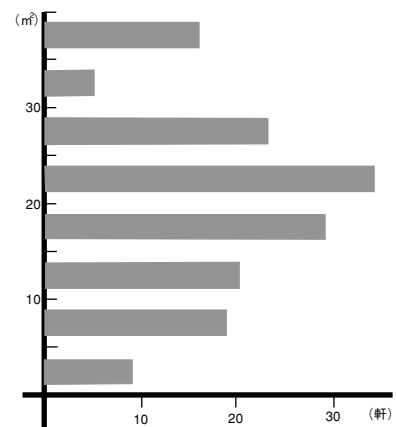
Ⅱ



Ⅲ



第16図 竪穴住居分類図



第17図 竪穴住居・床面積別度数

1) 藤山誠一 1996「竪穴住居の地域性が表れる背景」『年報』平成7年度愛知県埋蔵文化財センター

る。住居全体の検出軒数に比べ少ないような気もするが、竪穴住居の重複状態を考慮すれば、切り合い関係において下層に位置する住居の炉に関しては破壊され確認できなかった可能性もあろう。炉の基本的な形態は、床面を数cm～20cm程度掘り下げた皿状のピットを利用したいわゆる地床炉あり、板状の炉縁石をとまなうものが大半であった。炉の位置としては、住居中央に設けられるもの5軒、住居柱穴間にあるもの27軒、壁際に設置されるもの3軒であり、住居柱穴間に設置されているものが圧倒的に多い。SB373では地床炉が2カ所確認されている。

⑦ 重複関係

今回の川原遺跡の発掘調査では、300棟におよぶ竪穴住居が検出されたが、それらは独立して存在したものではなく、その大半の竪穴住居が重複関係を有している。最多の切り合い関係を有する竪穴住居はSB297であり8棟にもおよぶ重複関係を持つ。最下層で確認された竪穴住居出現段階と考えられる段階は、住居自体が散在的に分布するため必然的に重複関係は少なく平均で約2棟の切り合い関係を持つ。上層で確認された竪穴住居は、微高地上に集中的に築造されているため当然重複関係も多くなり、平均で約4棟の竪穴住居と切り合い関係を持つ。単純に遺構の住居の検出数と重複関係よりみるならば、同時存在した竪穴住居は、おおむね40～50棟程度であったと想定される。

⑧ 面積

竪穴住居の床面積について、計測できた住居は136棟あり、それについてグラフ化したものが第17図である。最小でSB564の3.4m²、最大でSB343の49m²と大きな開きが見られる。住居の面積の中心は14～21m²であり、このあたりの住居が本遺跡の平均的な住居と言えよう。10m²を切る小型の住居は、下層で確認された住居に多く認められる傾向が認めら

れる。また、25m²を超える大型住居は20棟確認されているが、その分布状況は散在的であり、これらの大型住居が単位集団の核となっていた可能性も考えられよう。

⑨ 焼失住居

確実な焼失住居として、検出された住居は4棟あり、他に炭化材が出土した住居を含めるともう少し増えそうである。焼失住居に共通する点は、すべての住居が最も新しい(集落廃絶時)段階の住居である点であり、集落廃絶時(新たな墓域への転換)の様相を考える上で興味深い。

⑩ 主な竪穴住居

今回の調査で確認された各竪穴住居の詳細については、CD-ROM内の別表に委ねることとし、ここでは一括遺物などを出土した主要な竪穴住居について説明していきたい。

SB201 SB377・SB376・SB280・SB291・SB285・SB321と重複関係が見られ、全ての竪穴住居を切るため時期的には最も新しい段階に属する。長軸806cm・短軸520cmを測り、長方形を呈する大型竪穴住居であり(平面形態Ⅱ)、掘形は10cm程度の残存状況であった。壁溝は確認できなかったが、径30～40cmの主柱穴と考えられるピットを6カ所確認している。また、床面に接して炭化材を検出しており、焼失家屋であったと考えられる。住居西側の桁間のほぼ中央付近には、炉縁石を伴った地床炉の痕跡を確認しており、また、炉に近接して長軸180cm・短軸100cm、深さ30cmを測る炭化物を多く含む土坑状の落ち込みがあり、貯蔵穴の可能性が考えられる。遺物としては、凹線文土器最終段階の土器がまとまって出土しており、土器編年等を考えられる上で良好な資料といえるが、出土土器に熱をうけた痕跡は認められず、住居焼失後に廃棄されたと考えられる。

SB211 SB275・SB276・SB296と重複関係が見られる(SB295→SB276・SB275→

SB211)。長軸 435cm・短軸 394cm を測り、正方形に近い形状を呈する(平面形態Ⅰ)。掘形は 15cm 程度の残存状況であった。30cm 強を測るピットを 6 カ所で確認しているが、外側の 4 カ所が主柱穴に相当すると考えられる。炉跡、貯蔵穴等は確認することはできなかった。この住居も焼失住居であり、焼けた棒状・板状の材が崩れるかたちで方形状にかたまって出土し、被熱をうけた凹線文土器最終段階の遺物がまとまって出土した。

SB218 SB300・SB306 と重複関係が見られる(SB300・SB306→SB218)。下端 640cm・上端 530cm を測り、台形状の平面形態を示す(平面形態Ⅲ)。柱穴および壁溝などは確認することはできなかったが、掘形は 37cm 程度残存していた。また、この住居に伴うかどうか不明であるが、土坑状の落ち込みを 3 カ所検出した。遺物として古井式段階の遺物がまとまって出土しているが、凹線文土器段階の遺物も若干出土しており、古井式段階の遺物については、Ⅰ期の遺構に伴っていた可能性が高い。

SB224 SB223・SB311・SB312・SB381 と重複関係が見られる(SB312→SB311→SB381→SB223→SB224)。西辺は試掘トレンチによって欠くが、おおむね一辺 430cm 程度の正形状を呈すると思われる(平面形態Ⅰ)が、北辺はやや内側に傾斜している。掘形は 20cm 程度残存していたが、柱穴や壁溝などは確認することはできなかった。床面直上より凹線文土器最終段階の遺物がまとまって出土した。

SB258 SB255・SB255・SB262・SB290 と重複関係が見られる(SB259→SB258→SB255→SB290→SB262)。複数の竪穴住居に切られ、形状・規模は不明であるが、幅 20cm 程度の壁溝および柱穴が確認できた。完形となる川原タイプの大型壺をはじめ凹線文土器段階に属する壺がまとまって出土した。

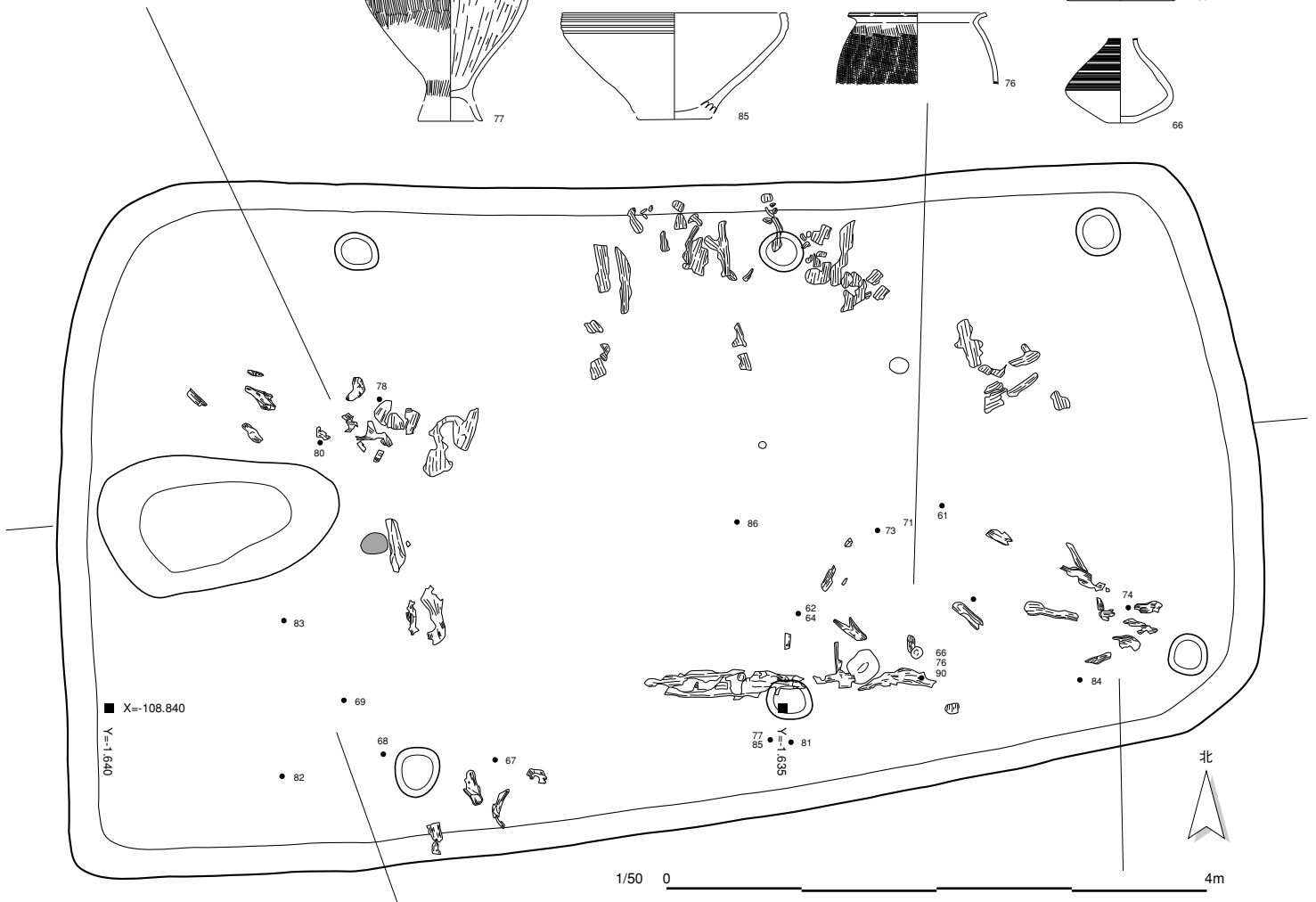
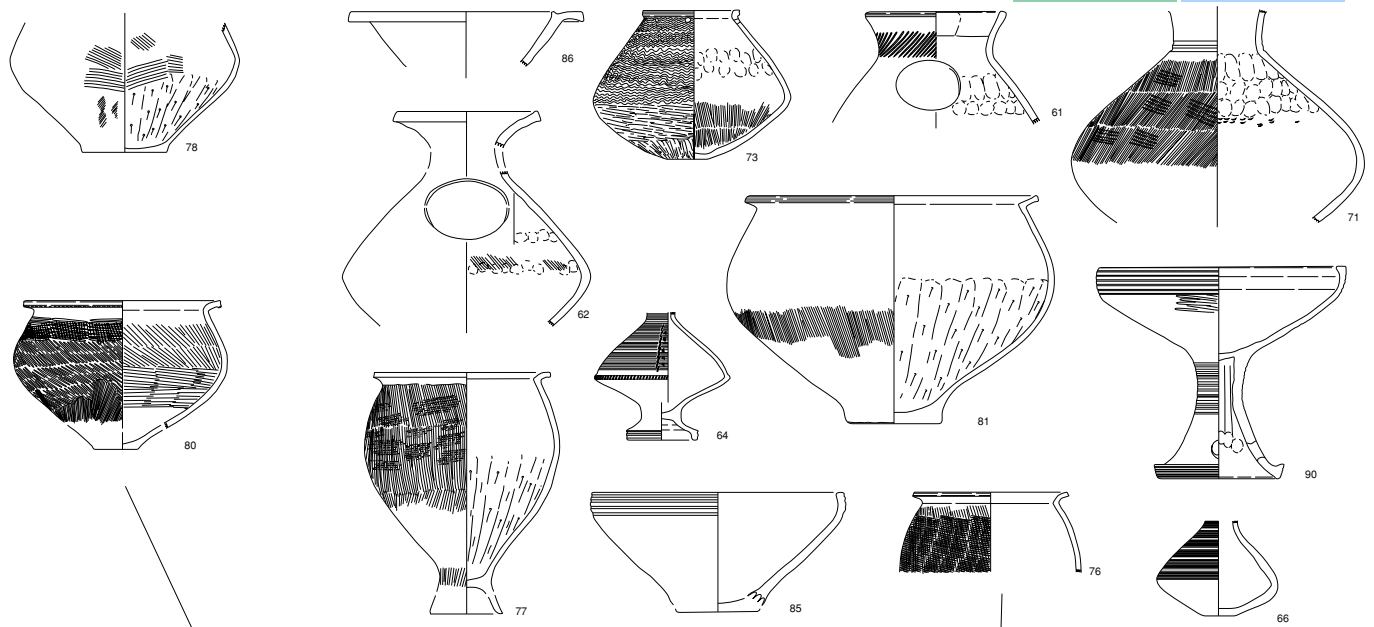
SB264 SB210・SB263・SB287・SB288 と重複関係が見られる(SB288、SB263・SB287→SB264→SB210)。長軸 420cm・短軸 390cm を測り、正方形に近い形状を呈する(平面形態Ⅰ)。掘形は 5cm 程度しか残存しておらず、壁溝は確認できなかった。主柱穴と考えられるピットを 4 カ所検出した。遺物としては凹線文土器段階の高杯が出土した。

SB273 SB221・SB272・SB349 と重複関係が見られる(SB221・SB272→SB273→SB349)。長軸 620cm・短軸 500cm を測り、南北方向にやや延びた長方形に近い形状を呈する(平面形態Ⅱ)。掘形は 18cm 程度残存していたが、壁溝は確認することはできなかった。柱穴を 2 カ所、土坑状の落ち込みを 1 カ所検出しており、土坑状の落ち込みを中心として遺物の出土をみた。

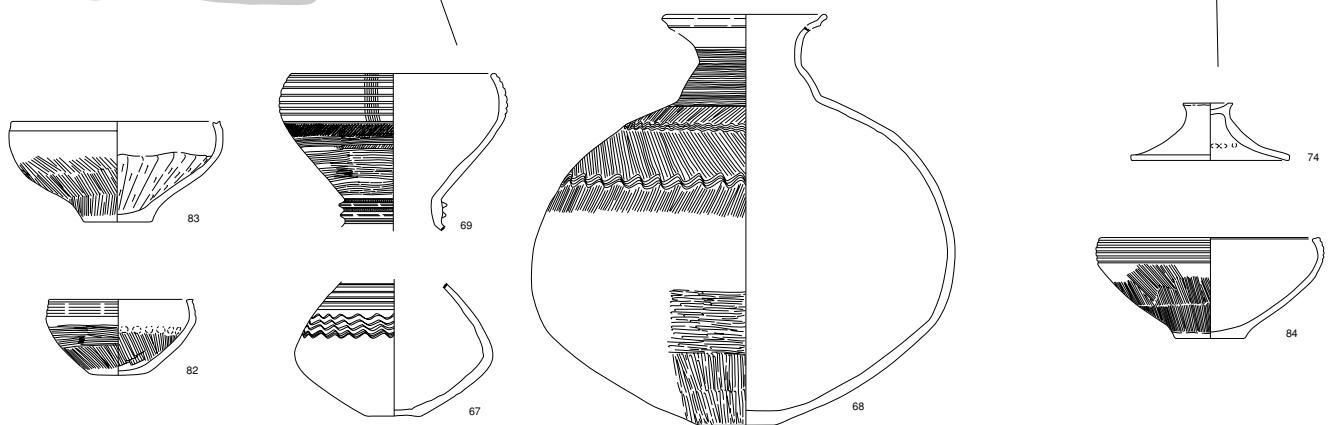
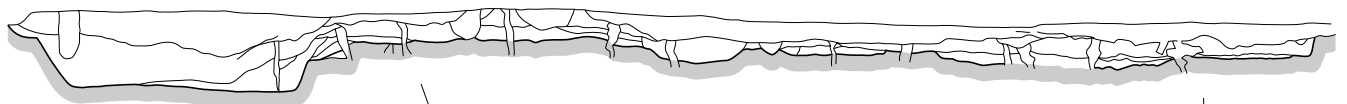
SB284 SB220・SB281・SB282・SB289・SB296・SB298 と重複関係が見られる(SB296→SB298→SB282・SB289→SB220→SB284→SB281)。長軸 555cm・短軸 390cm を測り、南北にやや長い長方形に近い形状を呈する(平面形態Ⅱ)。壁溝は認められず、主柱穴と考えられるピットを 3 カ所検出した。凹線文土器段階の遺物がまとまって出土した。

SB343 SB340・SB351・SB352 と重複関係が見られる(SB352→SB343→SB351→SB340)。長軸 780cm・短軸 725cm を測る正形状(平面形態Ⅰ)の平面形態を有し、床面積 49m² を測る大型の住居である。住居の中央部、西辺の一部を試掘トレンチによって欠くが、内部の状況を示す柱穴、壁溝などは確認することはできなかった。

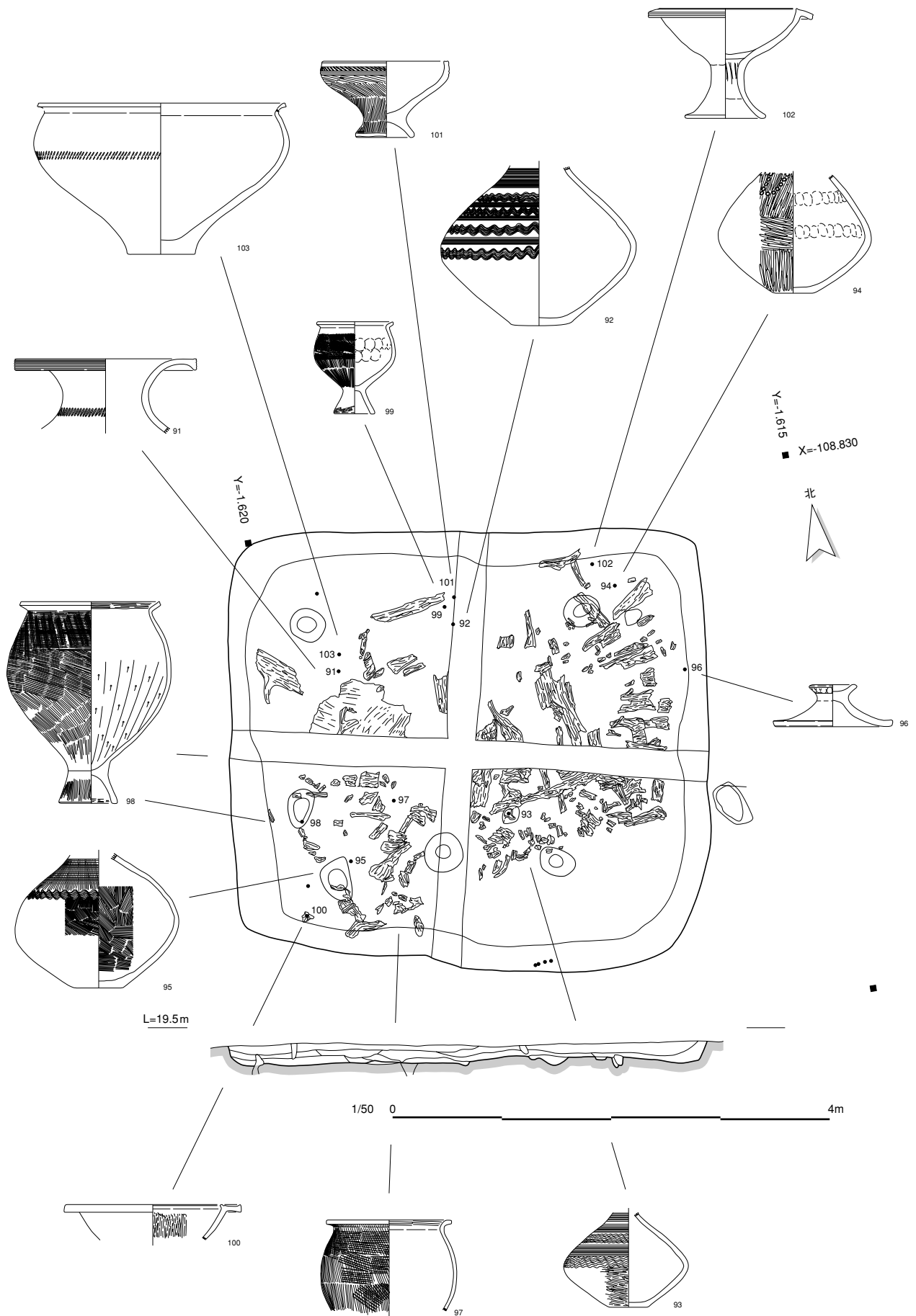
SB354 SB371・SB400・SB414・SB421 と重複関係が見られる(SB421→SB371→SB400・SB414→SB354)。上端 400cm・下端 570cm を測り、台形状の平面形態を示す(平面形態Ⅲ)。主柱穴と考えられるピット 4 カ所および幅 40cm 程度の壁溝が全周していること



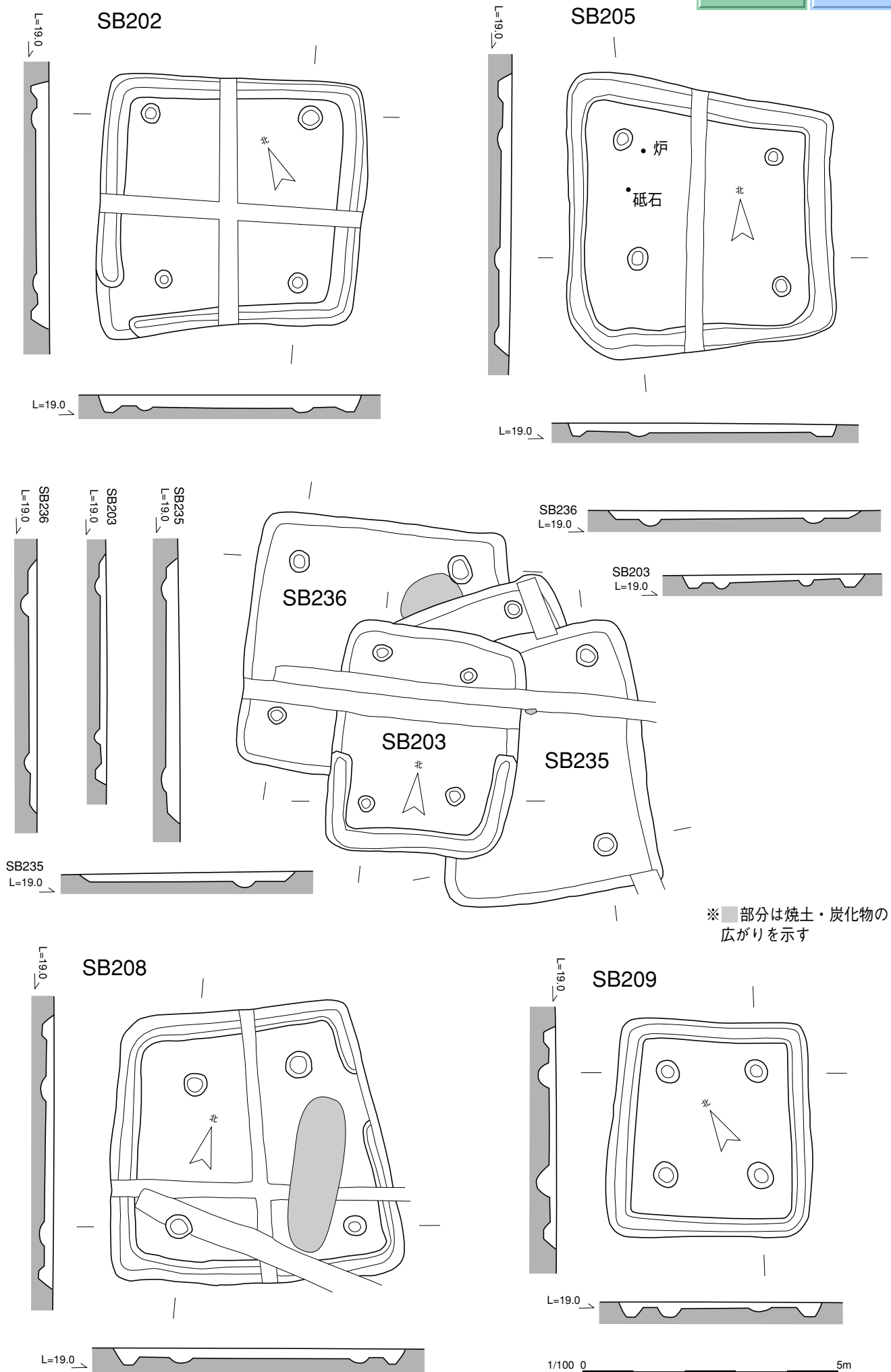
L=19m



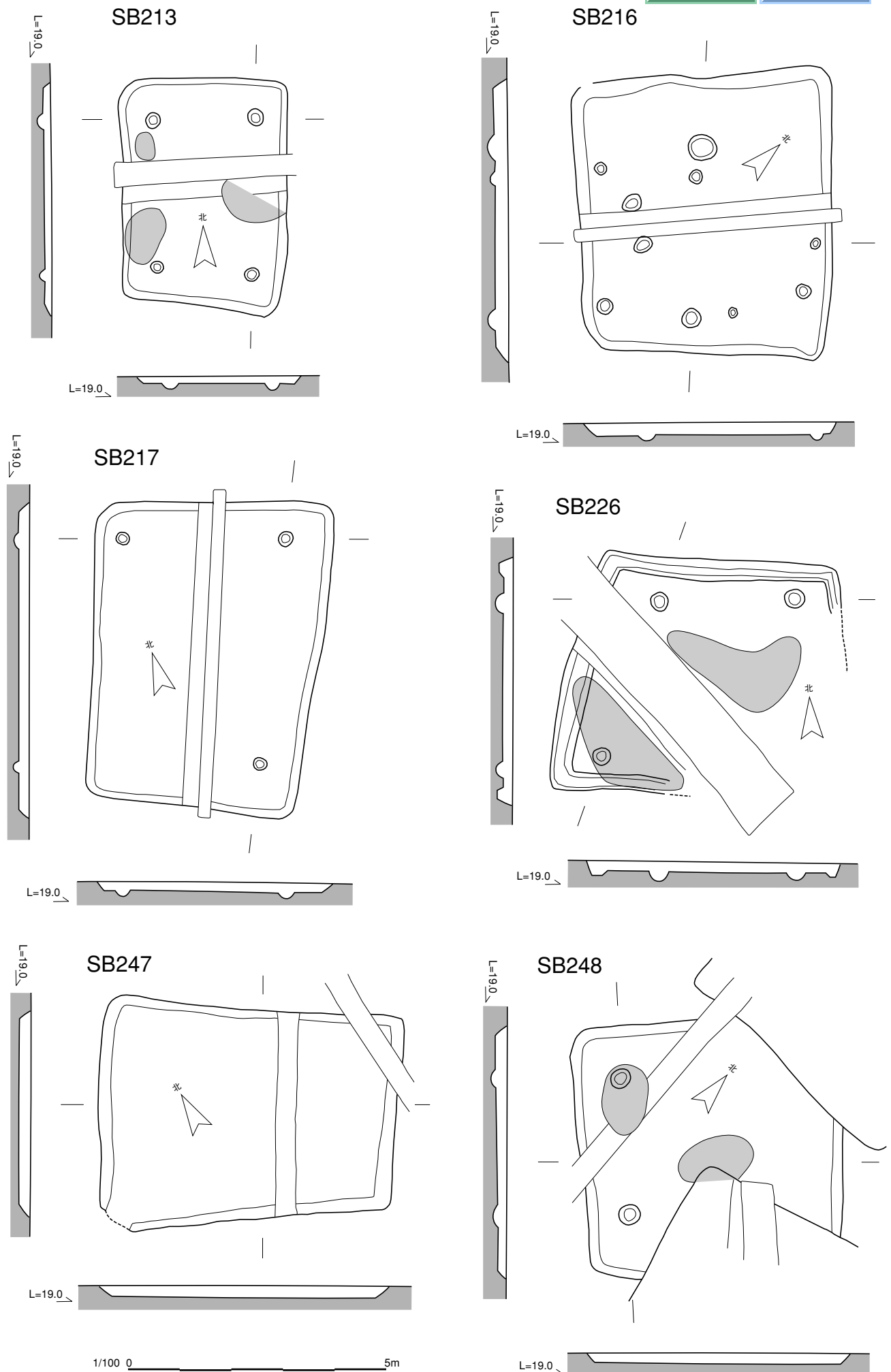
第18図 SB201 (1:50)



第19図 SB211 (1:50)

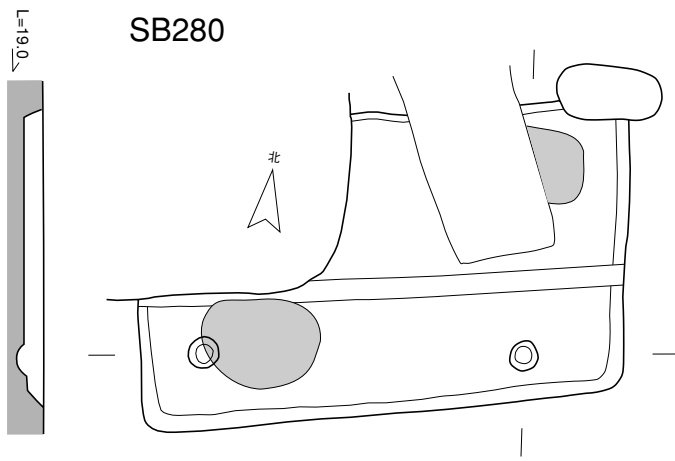
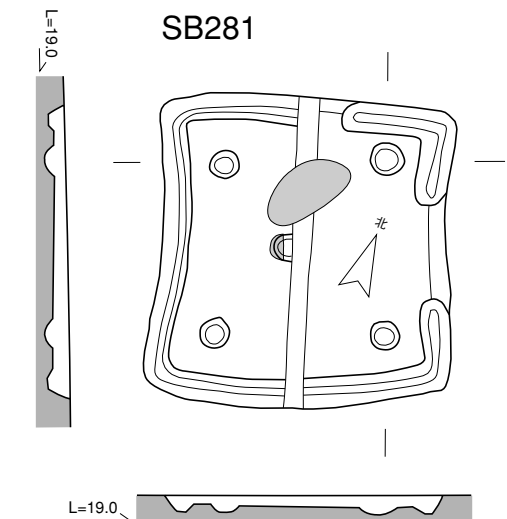
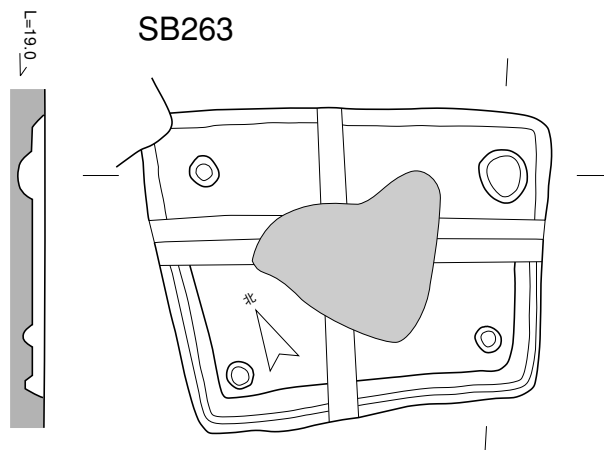
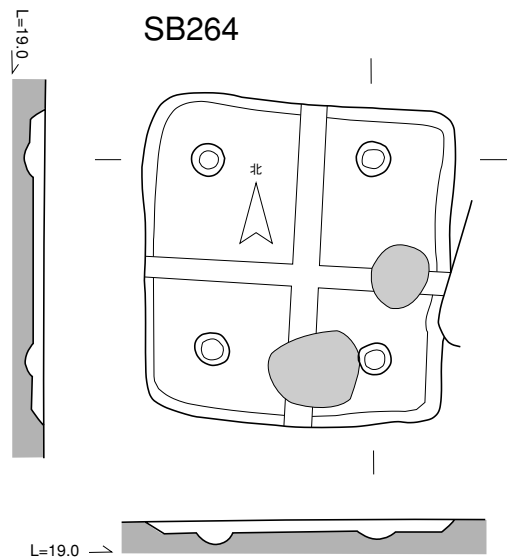
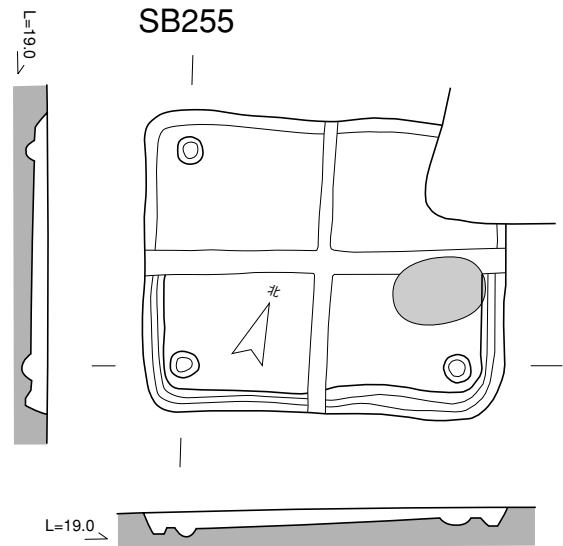
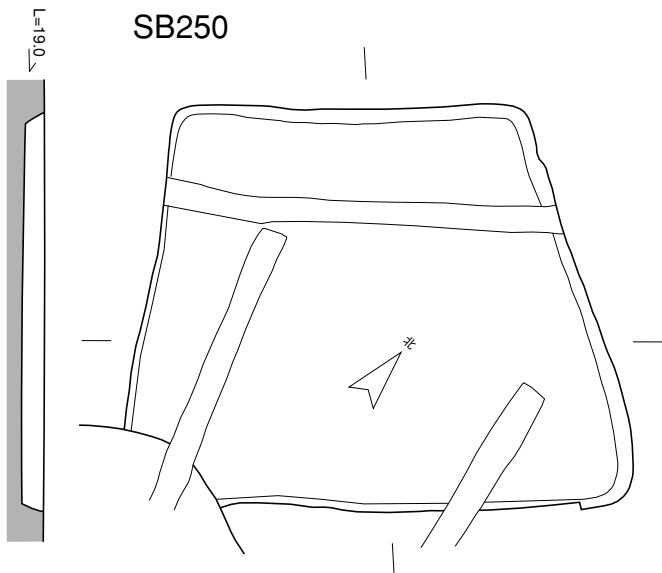


第20図 竪穴住居1 (1:100)



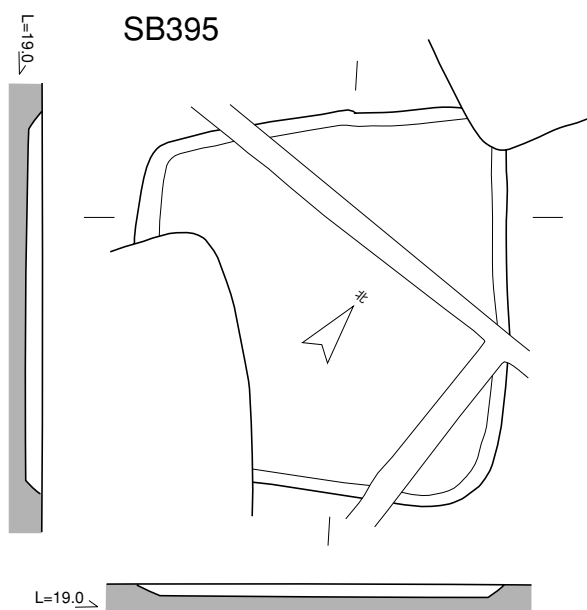
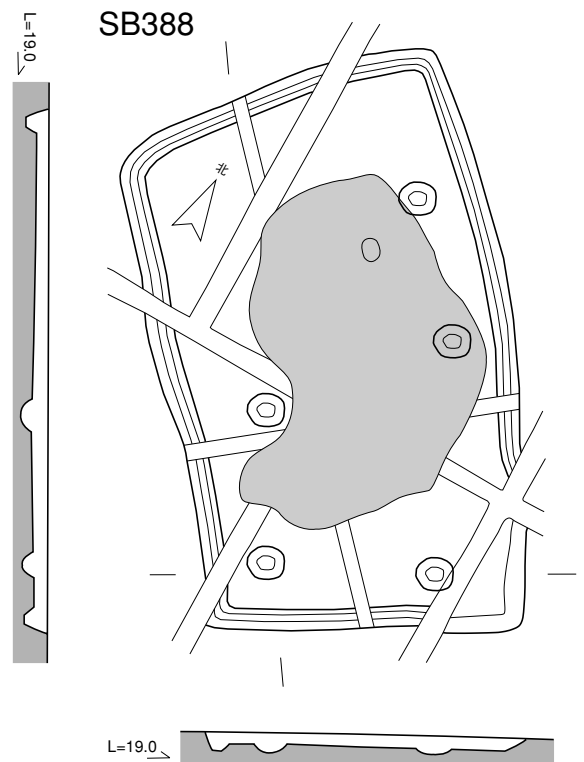
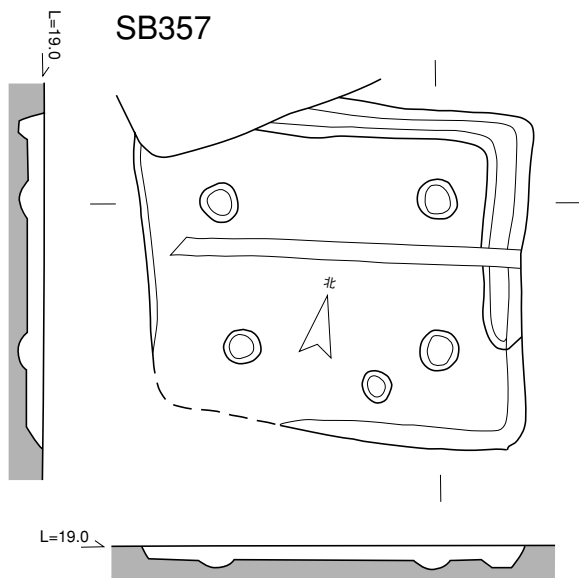
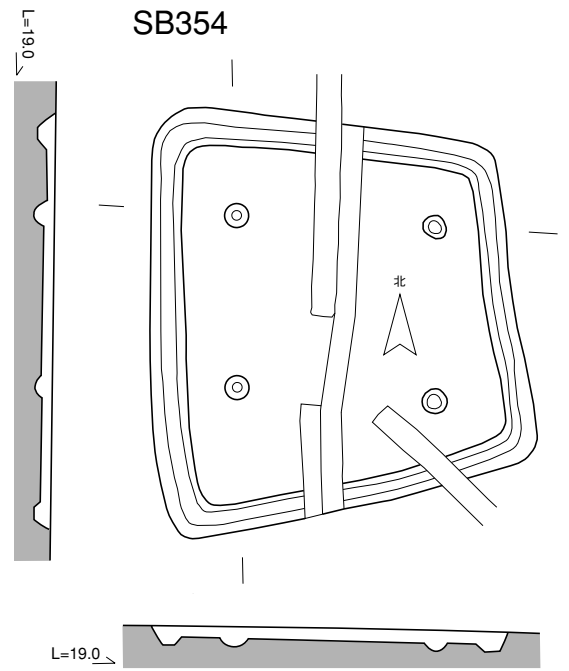
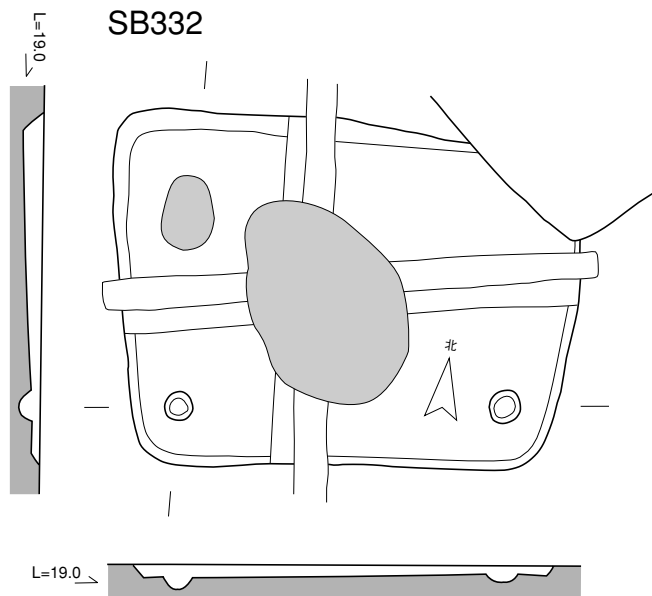
1/100 0 5m

L=19.0



1/100 0 5m

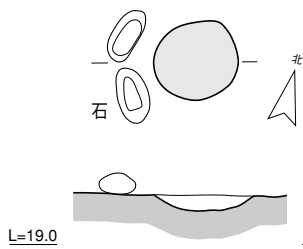
第22図 竪穴住居3 (1:100)



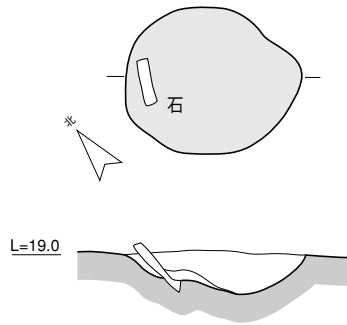
1/100 0 5m

第23図 竪穴住居4 (1:100)

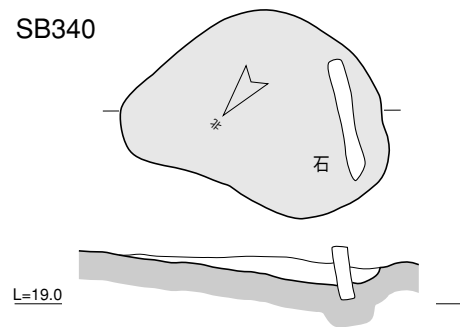
SB289



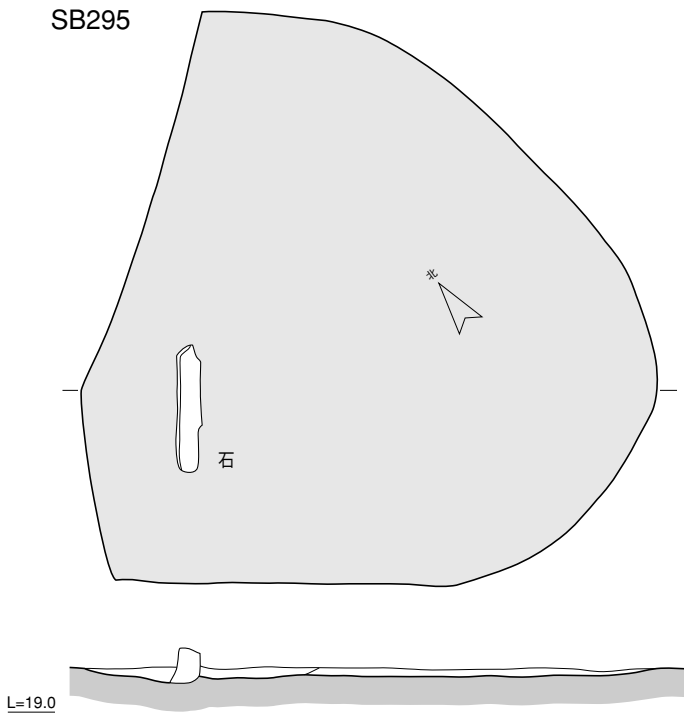
SB327



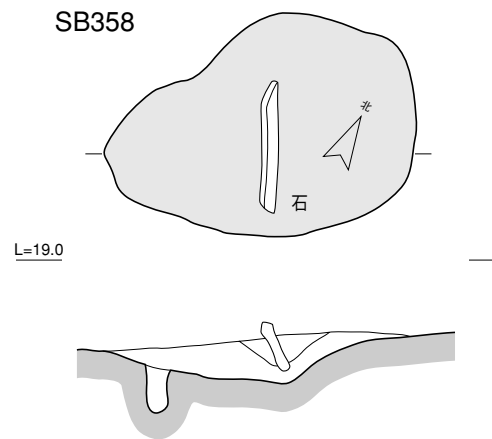
SB340



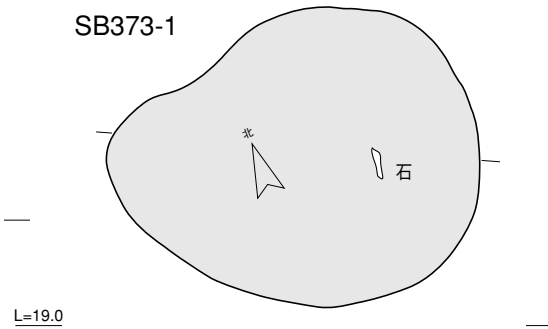
SB295



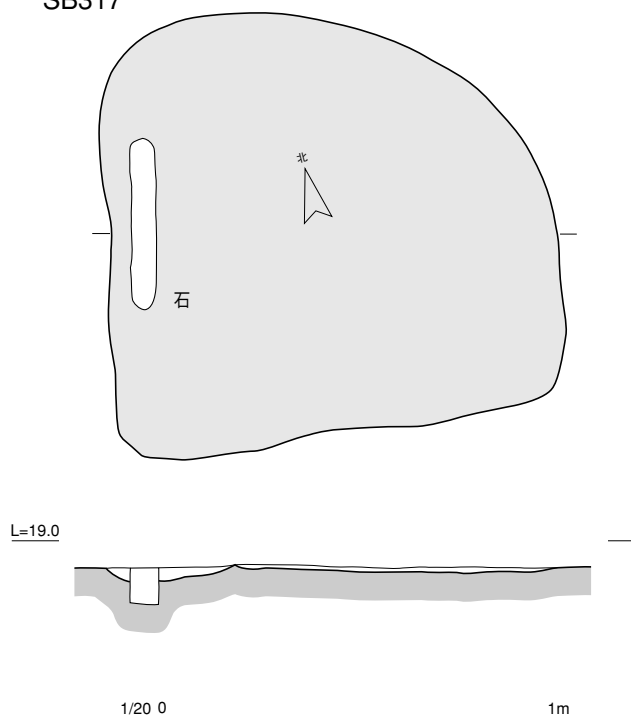
SB358



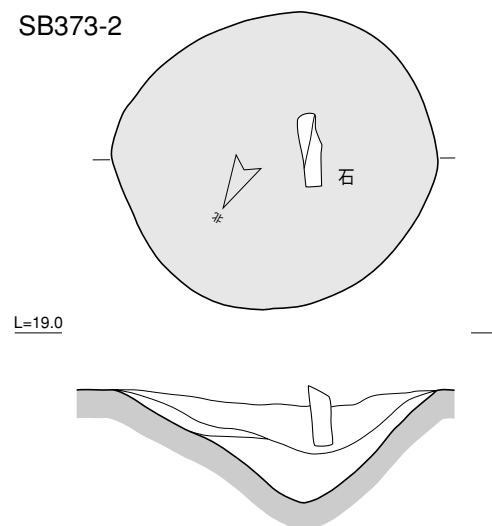
SB373-1



SB317



SB373-2



1/20 0 1m

が確認された。掘形は 15cm 程度残存していた。

SB368 住居というよりは土坑に近い。長軸 420cm・短軸 410cm・深さ 20cm を測る。北・南・西辺はやや円弧を描くような緩やかなカーブを持つのに対し、東辺は直線的に延び、やや不整形な形状を呈する。東辺と南辺の結節点に関しては、トレンチ等の存在により確認できなかった。床面は中央部分に向かって全体に傾斜しており、掘り鉢状となる。凹線文土器段階の遺物がまとまって出土した。

SB388 SB318・SB381・SB390・SB391・SB402・SB423 と重複関係が見られ、全ての竪穴住居を切るため、時期的には最も新しい部類に属すると考えられる。長軸 775cm・短軸 470cm を測り、長方形の形状を呈する(平面形態Ⅱ)。炭化材の一部および炭化物が床面に広く残存しており焼失住居と考えられる。南東隅を除き、幅 20～30cm の壁溝が巡る。柱穴も 5カ所確認した。凹線文土器段階の遺物がまとまって出土した。

SB518 SB516・SB519・SB520 と重複関係が見られる(SB516・SB520→SB519→SB518)。長軸 440cm・短軸 435cm を測り、正方形に近い形状を呈する(平面形態Ⅰ)。掘形は 13cm 程度しか残存しておらず、壁溝等は確認できなかった。ピットを 2カ所検出した。また、北辺内側の中央部あたりで炉縁石をとまなう炉跡を検出した。

SB545 SB543 と重複関係が見られる(SB543→SB545)。上端 400cm・下端 560cm を測り、やや台形に近い形状(平面形態Ⅲ)を呈する。壁溝等は認められなかったが、ピットを 2カ所確認しており、北側のピットに近接して炉縁石をとまなう炉跡を検出した。

方形周溝墓

調査区の北辺部、湿地部へ緩やかに傾斜していく地点で 2 基の方形周溝墓を確認した。

SZ201 周溝墓の形状は、西溝を欠くため不明で

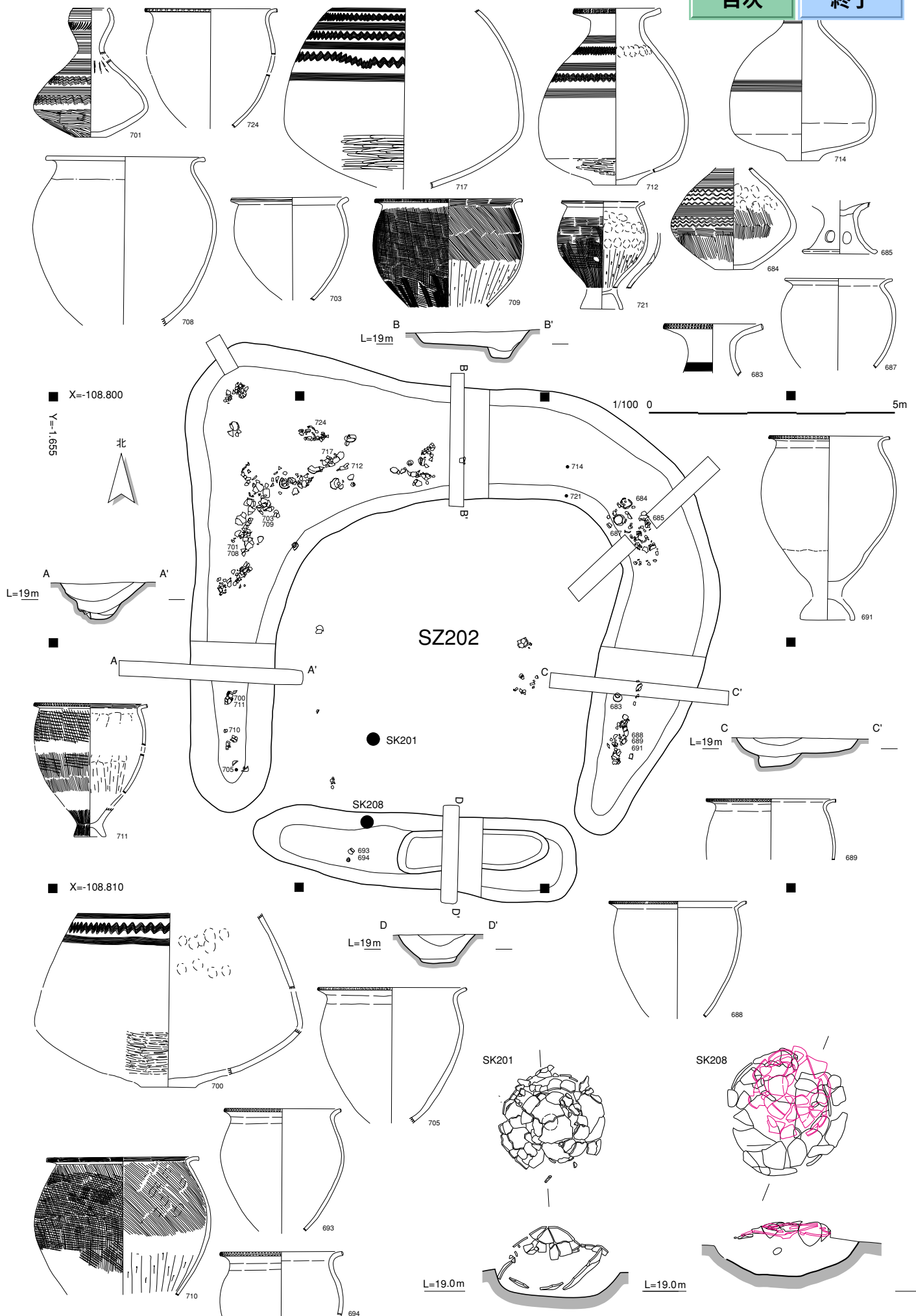
あるが、東溝の南北 2カ所で陸橋部が確認できる。墳丘部は南北方向で 7.8m を測り、東西方向は不明ながらも、やや東西方向にのびる長方形状となると思われる。墳丘の周囲をめぐる周溝は、いずれも幅 1～2m、深さ 30cm 程度であり、断面は逆台形となる。墳丘は削平されており、主体部等は確認できなかった。

SZ202 南溝の東西で陸橋部を有する方形周溝墓であり、墳丘部は東西 7.2m、南北 7m を測る。墳丘北辺の両コーナー部は緩やかな屈曲をみせ、全体的に正方形がやや崩れた形状を呈する。墳丘の周りを巡る周溝は、概ね 1～2m 程度の幅を持つが、周溝北西部は大きく張り出し 4m 程の幅を有する。深さは 40cm 程度を測り、断面は逆台形に近い掘形を有する。南溝は、幅 1.4m、深さ 40cm 程を測り、溝の東側部分では、溝底からさらに一段掘り窪められた土坑状の落ち込みが確認され、脂肪酸分析を実施したところ動物遺体または動物由来の脂肪酸が残存しており、溝内埋葬の可能性が考えられる(第 3 分冊参照)。墳丘は土層の識別が非常に困難であり、調査の不備もあって盛土等は確認することはできなかった。しかし、墳丘中央部よりやや西側の地点で土器棺(SK201)が検出面よりやや浮いた状態で出土しており、本来的には盛土が残存していた可能性が高い。また、墳丘南辺のほぼ中央部でも土器棺(SK208)が、南溝と切り合う形で検出された。遺物はコ字状に墳丘を巡る周溝内より、溝底よりやや浮いた状態で多数出土しており、おおむね古井式後半段階に比定できる。

土器棺

Ⅱ 期に比定できる土器棺は 6 基確認している 4 基の土器棺は、おおむね散在する竪穴住居の出現段階に比定することができ、住居に近接する形で検出された。また残りの 2 基は、方形周溝墓 SZ202 墳丘部内で確認されている。

SK201 SZ202 の墳丘中央からやや西よりの地点で確認された。検出面で径 64cm を測る土壇内に大型の壺を棺身とする土器棺が立位の状態で確認された。棺身の壺の口頸部は意識的に打ち欠かれ、蓋



第25図 SZ202・SK201・SK208 (1:100, 1:50)

としてやはり口頸部を打ち欠いた大型壺が使用されていた。調査では明らかにすることはできなかったが、本来的にはSZ202の墳丘上に墓壙が掘りこまれ、土器棺が埋納されていたと思われる。

SK204 SB225の下層、SB529の南辺と切り合う形で検出された。高杯の口縁部を蓋とし、壺を棺身とした土器棺である。検出面で径45cmを測るほぼ円形の土壙内に、壺の口縁部を東にむけ、やや斜位の状態で埋納されていた。壺の体部は大きく打ち欠かれており、その上部に大型高杯の口縁部を被せた状態で出土した。棺身の主軸はほぼ東西方向を向く。土壙および土器棺内の埋土はほとんど差のない暗灰色シルトであり、骨片などは検出されなかった。

SK208 SZ202南溝のほぼ中央部で、周溝と切り合う形で検出された。検出面で径50cmを測る土壙内より大型壺の底部を蓋とし、口頸部を打ち欠いた壺を棺身とする土器棺が立位の状態で出土した。方形周溝墓と土器棺との関係については、南溝と切り合い関係を有するという点を重視すれば、周溝墓廃絶以降の埋納と考えられるが、周溝内より出土した土器との時期差が明瞭ではなく、周溝墓最終段階の埋納の可能性も考えられよう。

SK738 径120cm、深さ40cmをはかる大型の土

坑の北側の地点で、4段階に属する口頸部を欠いた大型壺が横位の状態で出土したため、調査時は土器棺と認定したが、土器の出土位置が土坑底より20cm程度浮いた状態で出土しており、また、口頸部の欠損も意識的なものとは考えられないため土器棺の可能性は薄いと考えられる。

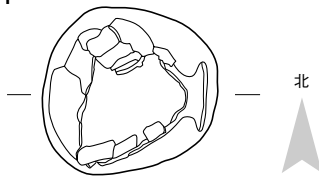
SK877 長軸66cm・短軸58cmのやや楕円形の土壙内より、大型壺が口縁部をやや下に向けた横位の状態で出土した。壺の体部から底部にかけて大きく打ち欠かれており、主軸方位はN-30°-wである。土壙埋土は暗灰色シルトである。

SK880 径60cmの円形の土壙であるが、ほとんど削平され、かろうじて底の部分が確認できたにすぎない。土壙内より口縁から体部上半をきれいに打ち欠いた壺を転用した土器棺が立位の状態で出土した。

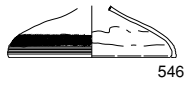
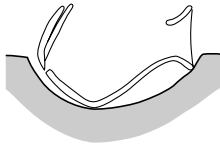
SK934 SB560の下層で検出された。土器棺は径44cm・深さ30cmを測る土壙内より立位の状態で出土した。棺身は壺の口縁部をきれいに打ち欠き、さらに別個体の大型壺の体部を蓋として利用していた。土壙内の埋土は暗灰色シルトであった。

SK960 SD545と切り合う形で検出された。土器棺を埋納した土壙は不明であるが、棺身と考えられる壺がほぼ立位の状態で出土した。

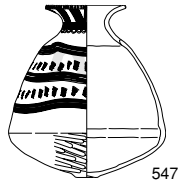
SK204



L=18.5m

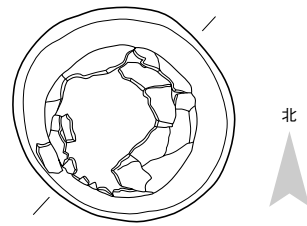


546

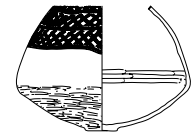
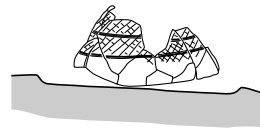


547

SK880

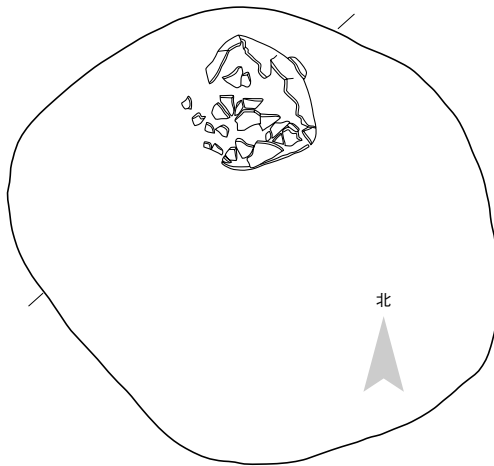


L=19m

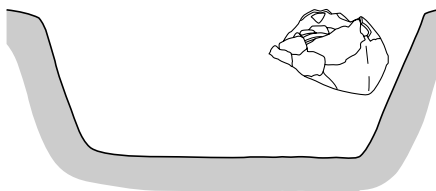


551

SK738

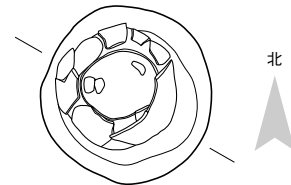


L=19m

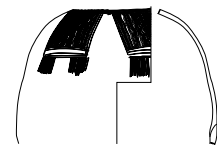
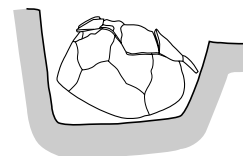


550

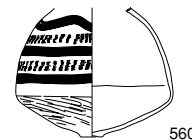
SK934



L=19m

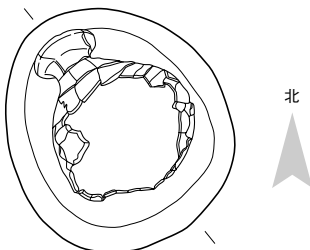


559

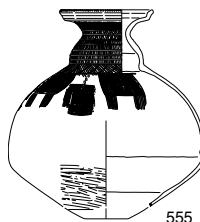
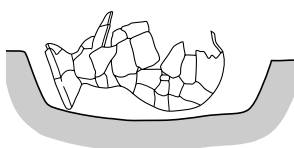


560

SK877



L=19m



555

1/20 0 1m

第26図 土器棺墓 (1:20)

●● I・II期の遺構の変遷 ●●

すでに述べてきたように、弥生中期の遺構は、狭小な微高地上に墓域を構成する遺構群が広く展開する段階とおびただしい数の竪穴住居が築造された2つの段階に大きく区分して考えることができ、前者をI期、後者をII期として説明を加えてきた。I期は瓜郷式直前段階から古井式前半段階に、II期は古井式後半段階(凹線文土器)に相当する。今回の調査で確認された遺構について、その推移を中心に簡単にまとめておきたい²⁾。

I期 川原遺跡の最終調査面で確認された遺構群であり、土器棺墓、土壙墓、方形周溝墓など基本的に墓域を構成する遺構群からなる。大きく2つの時期に分けて考えることができる。

I-1期 土壙墓および土器棺墓、溝から構成される墓域が形成された時期であり、おおむね瓜郷式直前段階から瓜郷式段階に比定される。調査区中央の南西から北東にかけて走る溝SD574によって明確に土壙墓、土器棺墓群が分離される。土壙墓は、それぞれが他の遺構と切り合うことなく単独で築造されている。

I-2期 おおむね古井式前半期に比定される遺構群から構成される段階である。引き続き、遺跡は墓域として機能しているが、その様相は大きく異なりをみせる。最も大きな変化は方形周溝墓の登場である。遺跡北部の微高地の縁辺に不定形ながら方形周溝墓が整然と並ぶ姿は新たな墓制の出現を象徴的に表現している。また、これらの扇の要として存在するSZ504の存在は、方形周溝墓というよりは、祭祀的な色彩を帯びた祭壇的な性格を有していたと推定され、新たな墓制の出現に伴い墓前祭祀の形態が変化していった様相を垣間見ることができる。しかし、前代からひき続いて土器棺墓も築造されており、それらの遺構は、方形周溝墓を避ける形で、SZ504の周辺に集約されてくる。

また、1・2期ともに性格不明とした炭化物層を

含む土坑については、散発的に分布するものも若干みられるが、おおむねSD574およびSZ504をはさんで北西・南東の2つの地点に集中する傾向が見られるとともに、土壙墓、土器棺墓、方形周溝墓などとは切り合い関係をもたず、独立して構築されており、墓域を構成する遺構群の一部であることは疑いないが、どのような性格・機能を有していたかは、今後の類例を待ちたい。

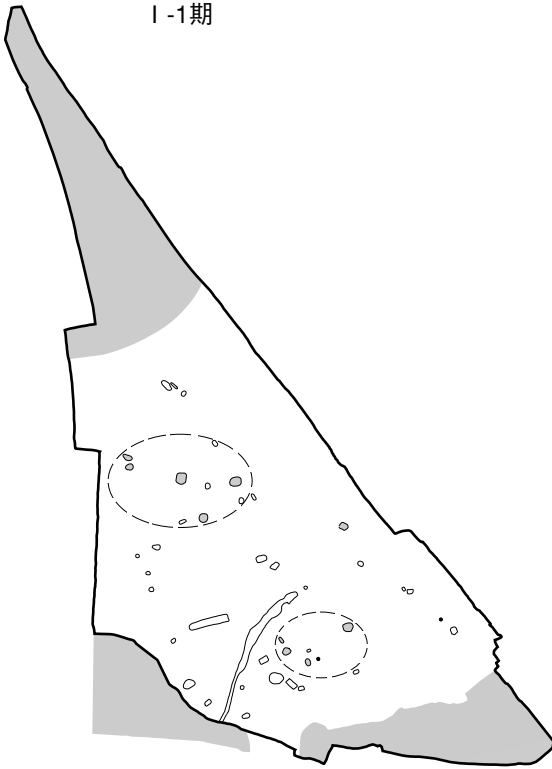
II期 300軒にもおよぶ膨大な竪穴住居が確認された段階である。II期もI期と同様に2つの時期に区分して考えることができ、古井式後半期(凹線文土器)に相当する。

II-1期 墓域から転じて微高地上に竪穴住居が登場してくる段階である。この段階に属する竪穴住居は、おおむね微高地上の北西部と南東部の2つの地点に集中して築かれており、北西部の一群は集中度が高いの対し、南東部の住居は散在的に分布している。住居の平面形態はI・II・IIIいずれのタイプもこの段階から見ることではできるが、その内部構造を示す柱穴、壁溝などは不明瞭なものが多かった。しかし、炉縁石を有する地床炉の存在は何棟かの住居で確認することができた。また、竪穴住居が集中する2つの地点がオーバーラップする地点では土器棺墓が集中して確認された。

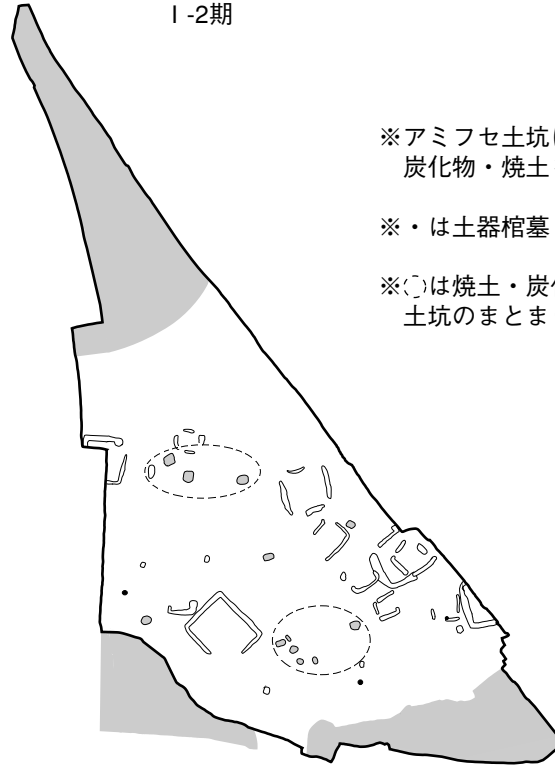
II-2期 微高地上のほぼ全域に、竪穴住居が築造される段階である。この段階だけで200軒を超える竪穴住居が確認されており、それぞれの住居が4～8棟ほどの住居と重複関係を有するため、具体的にグルーピング等を検討することは困難である。ただ、大型竪穴住居の分布は、微高地上の各所に点在しており、それに注目すれば4～5程度のグループに分かれていたとも考えられよう。また、今回の調査では焼失家屋を4棟確認しているが、それらはすべて切り合い関係上最も新しい段階の住居であり、集落廃絶時(新たな墓域への転換)の様相を考える上で興味深い。

2) 今回の調査では明確な遺構が検出されなかったため時期区分の対象とはしなかったが、弥生前期に相当する遠賀川系の土器や条痕文系の土器が一定量出土しており、調査地点の周辺に該期の遺構が展開していた可能性が高い。

I-1期



I-2期

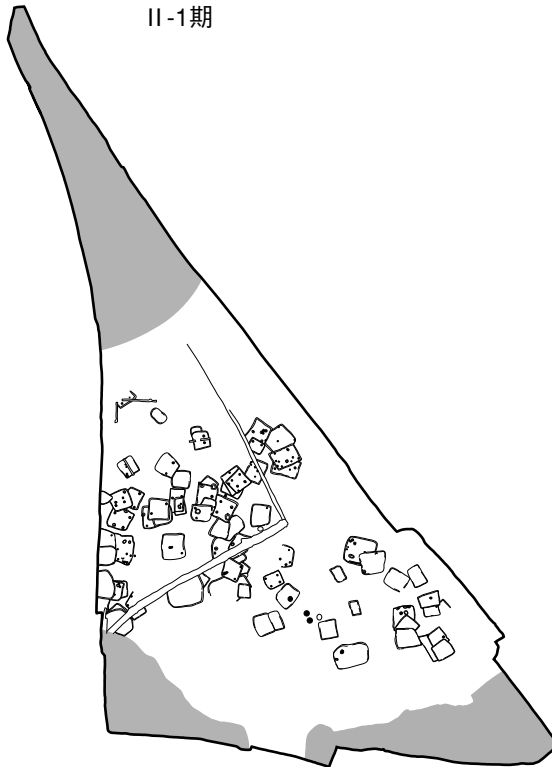


※アミフセ土坑は時期不明の炭化物・焼土を含む土坑

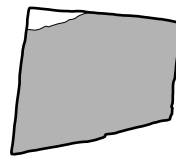
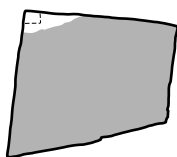
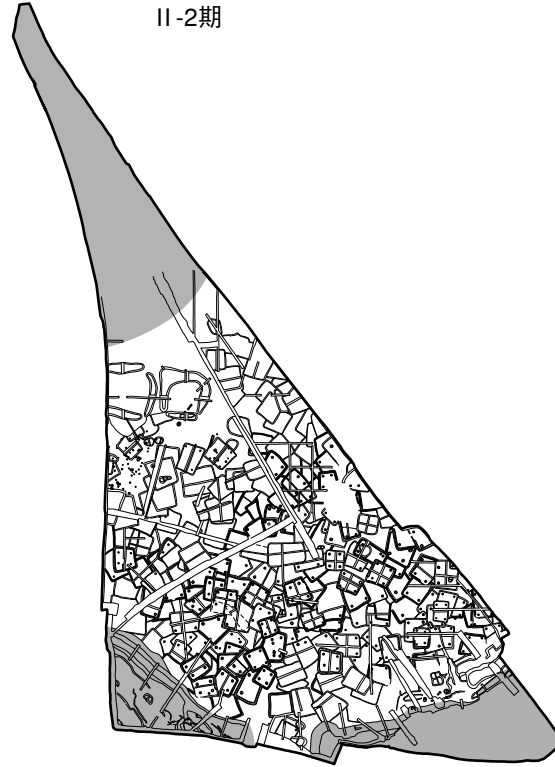
※・は土器棺墓

※○は焼土・炭化物を含む土坑のまとまり

II-1期



II-2期



第27図 遺構変遷図 (1:1600)

土 器

●● 縄文晩期から弥生前期 ●●

1～3は突帯紋土器期に属すると思われる。3は口縁部内面に沈線と指圧痕を加えるもので、渥美半島に類例がある。

4～8は条痕紋系土器初期の刻み目突帯紋壺の口縁部である。4・6は刻み目突帯が低く痕跡的である。また5を除き口縁部の肥厚が顕著ではない。

9はやや時期が新しい資料で、突帯を棒で刻んでいる。

12・13は浮線紋浅鉢である。12は口縁部(口外帯)に圧痕を加えている。

深鉢は、口縁部が直立もしくは内傾する形態で、口縁端面をほとんど拡張しないもの、内側に粘土紐を貼り付けて肥厚させるもの、口縁端部に指圧痕を加えるもの、など多様である。こうした多様さは烏帽子遺跡とも近似し、条痕紋系土器成立期の様相を表していると考えられる。

56～58は遠賀川系土器で、前期後半に相当しよう。33～35は口縁部が外反し、同時期であろう。59・60は中期初頭の条痕紋系土器である。

●● 弥生中期 ●●

現在の矢作川流域における土器編年は、岡島遺跡編年が軸になっている。しかし、その広域妥当性については確定していない。今回報告する川原遺跡資料とは若干組成器種に相違があり、また川原遺跡では凹線紋土器期の単純資料が良好に存在するなど、同じ矢作川流域とはいいいながらも、地域的・年代的に注意すべき点がある。

以下では、年代的に重要と思われる資料を中心に取り上げて説明する。

●● 資料の記述 ●●

中葉

いわゆる瓜郷式期に相当する資料である。土器棺や土坑からの出土資料で、集落としての様

相は不明である。

SK888

棺身の553は胴部が大きく打ち欠かれている。長頸壺の形態を残しているが、頸部の長さは短く寸詰まりになっている。口縁部外面の放射状沈線は幅広く、また浅い。頸部は斜格子紋帯2段で連弧紋はない。棺蓋の554は連弧紋が櫛描である。

SK925

棺身の556は胴部が打ち欠かれている。形態的に長頸壺ではなくなっている。頸部の紋様帯は2段に減少。1段目は無紋帯、2段目は隆起して3条沈線の連弧紋帯である。連弧紋に重なって櫛描の垂下紋が施されている。棺蓋の557は、頸部外面や連弧紋帯に斜位の櫛条痕が施されている。また垂下紋は沈線である。

SK938

棺身の563は口頸部が打ち欠かれている。体部は複合鋸歯紋帯をめぐらし、その下に多条コ字紋を単位紋として、間に沈線・単線を充填して紋様帯を構成している。棺蓋の562は、口縁部が内面に稜をもって屈折する甕で、二枚貝腹縁調整で仕上げられている。

SK533

564は無紋の壺で口縁端部に二枚貝腹縁条痕が施されている。565は二枚貝腹縁条痕を地として連弧紋が施されている。566～568は二枚貝腹縁条痕の甕で、568は口縁端部にも二枚貝腹縁条痕が施されている。

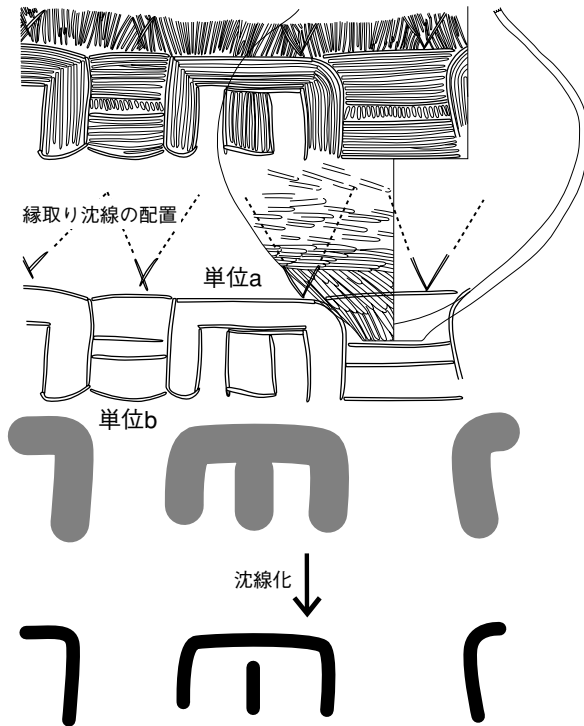
SK540

583は長頸壺である。条痕帯と縄紋帯、複合鋸歯紋帯を配し、上2帯には沈線による波線が1条加えられている。

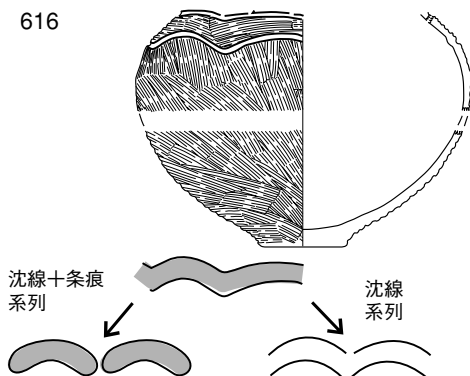
SK586

やや破片が多いけれども、時期的にはまとまっている。591は貝田町式系細頸壺の口縁部。592・593はおそらく長頸壺で、口縁端部には二枚貝腹縁条痕が施されている。595・596・598も長頸壺で濃尾系の特徴をもつ。599～615は深

563



616



第28図 瓜郷式壺紋様模式図

563は複合鋸歯紋帯の下に、下向きの多条コ字紋と方形に区画された多条沈線の組み合わせからなる単位aと、多条沈線帯2段と充填する短沈線帯からなる単位bが連続して体部をめぐる。

単位aは本来はコ字重ね紋であったものが無紋帯を取り込んで幅広の紋様単位に変化したもので、縁取り沈線によって区画されている。

単位aは最終的には沈線紋化し、瓜郷式壺の主要モチーフとなる。

616は二枚貝腹縁条痕を地紋にして、縁取り沈線に区画された条痕連弧紋がめぐる。

連弧紋は次には谷部が分離して、弧状条痕を沈線で囲むバナナ状の環状弧紋の連続配列(連環状弧紋)と、2条～3条の沈線連弧紋とに系列が分岐する。前者は濃尾地方の続条痕紋系土器に、後者は瓜郷式壺に採用される。

鉢・甕で、608が櫛条痕である以外は二枚貝腹縁条痕である。

SK727

623は連弧紋がつながって沈線波状紋になっている。625は垂下紋が波状紋になっている。626は大型鉢(鍋)で、紋様構成は壺と同じである。頸部無紋帯上下の平行沈線間には刺突紋が加えられている。627は櫛条痕仕上げである。

SK811

642は頸部に沈線紋、口縁部外面に櫛描波状紋が施されて受口状口縁壺で、口縁部はほぼ直立する。643はナデ調整ののちに沈線で連弧紋と八字状垂下紋が施されている。644はミガキ調整が認められるので、台付鉢か高杯であろう。645・646は粗いハケメか二枚貝腹縁による調整が施されている。

SK815

647は次段階との中間にくる壺で、ナデ調整のあと櫛描連弧紋と垂下波状紋が施されている。648は短く屈曲する口縁部をもつ厚手の甕で、壺と同様にナデ調整されている。

口縁部内面の櫛描波状紋は本資料の微妙な位置を示している。

SD502

755は2条沈線区画をもつ壺片。756は条痕地に連弧紋が施されており、古い資料である。

SD540

782は頸部の隆起帯に斜格子紋と沈線八字紋がほどこされている。783は紋様帯区画が2条沈線。784も2条沈線区画。785は大型鉢(鍋)で、口縁部内面には2ヶ1単位の浮紋とそれを囲む櫛描弧紋が施されている。外面にはナデ地紋に2条沈線が複数段施されている。782が古い以外、時期的にはまとまっている。

SD545

頸部無紋帯以下に、刺突紋を加える2条沈線、連弧紋、刺突紋を加える2条沈線、連弧紋、垂下紋を配する。垂下紋は櫛描波状紋3帯1単と1条の沈線を囲む長U字状紋である。

NR03

790 は長頸壺で、口縁部外面の短い沈線は刻み突帯の痕跡である。横位条痕に鋸歯紋が施されている。794は受口状口縁壺で、頸部外面に放射状の沈線が、口縁部外面に斜格子紋が施されて、刻み突帯は痕跡的になっている。

包含層

815～818は二枚貝腹縁条痕。819は太い櫛である。820・821は次段階の資料。822は櫛描紋系土器。口縁端部にも波状紋が施されている。825は斜格子紋が施される細頸壺。823は貝田町式系の紋様を持つが、体部下半は二枚貝腹縁条痕である。831は無頸壺で複合鋸歯紋が施されている。829・832は遠江嶺田式の壺である。834～850はいわゆる瓜郷式であるが、840を除いていずれも新しい段階に相当する。836・841・842・849は2条沈線区画で、836は刺突紋が加えられている。838を含めて地紋がナデ調整になる直前段階の資料である。847は無頸壺であろうか。840は条痕地に多重連弧紋が施されており、それほど新しくはない。851～853には二枚貝背面圧痕による擬縄紋が認められる。853は円紋を配する可能性がある。855は二枚貝腹縁条痕仕上げの深鉢で、口縁端面にも条痕が施されている。858は口縁端部上縁に条痕が施されている。859～862は濃尾系の横位羽状条痕深鉢と模倣品。859は櫛ではなく二枚貝腹縁条痕である。類例は甚目寺町阿弥陀寺遺跡にある。862は内面調整にハケメが観察でき、模倣品と思われる。865は口縁部に刻みを施しており、遠江系か？

類例は浜松市梶子遺跡、梶子北遺跡に認められる。

後葉

いわゆる古井式期に相当する資料で、凹線紋系土器の並存する時期でもある。

SB201

壺類・台付甕・甕蓋・鉢類・高杯が出土している。個体数も多く良好な資料である。

壺には円窓付壺(61・62・63?)、袋状口縁太

頸壺(69)、短頸壺(73)、細頸壺(65～67)、台付細頸壺(64)、折衷型壺(68)がある。61は直線的な口縁部をもつが、上部外面に凹線紋はなく、頸部の屈曲も強い。68は大きく膨らんだ胴部に短い口頸部がつく。形態はいちおう在来を踏襲しているが、製作技法は外来である。73は紋様が波状紋のみで、直線紋を加えない。体部下半にはミガキが施されているが、ハケメ仕上げの場合と同じ方向である。68も同様。71は頸部に沈線2条施されている他は無紋で、体部にはタタキ痕が認められる。

台付甕(76・77)は外面タタキ仕上げで、口縁部はヨコナデされている。77はタタキが左下がり、他とは異なる。

甕と同様の口縁部を有する鉢A(78～81)は、体部も甕を扁平にした形態で製作技法も異なるところが無い。製作技法上は壺系列と甕系列に分かれる。

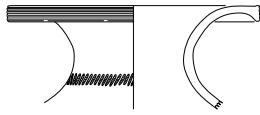
鉢B(82～85)には壺系列と甕系列がある。82は壺系列で、底部の立ち上がりが丸く、外面調整も同様である。83以下は内彎して立ち上がり上述の鉢と同様である。83は内面にケズリ痕がみられる。甕系列の浅鉢の延長に上述の鉢が位置づけられよう。

高杯(86～90)は鐙状の水平口縁をもつ高杯Aと皿状の杯部をもつ高杯Bがある。後者は口縁部外面に凹線紋が施される。90は脚端部の凹線紋と大きな円形透穴が特徴的である。口縁端部は内側に拡張されている。

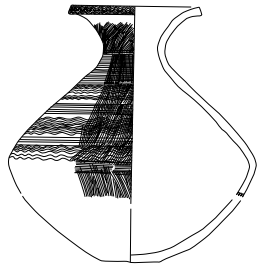
SB211

量的に多くないが器種は豊富である。小型台付甕(99)、台付鉢(101)、高杯(102)、赤彩の台付無頸壺もしくは台付鉢B(104)がある。93は体部下半のミガキが横位で、伊勢湾西岸部と共通している。94はミガキ調整された後に管状工具で刺突紋を加えている。99や101は尾張地方では後期初頭に典型化する器種である。103は甕系列の鉢Abである。104は赤彩の台付鉢脚台である。

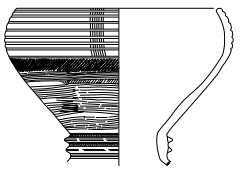
単純口縁壺



口縁部がゆるく外反する通常の形態。

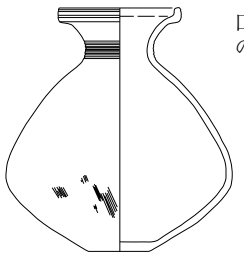


大形袋状口縁壺



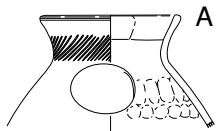
袋状口縁細頸壺を大形化したもの。

受口状口縁壺

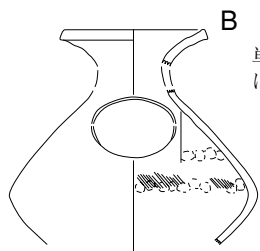


口縁部が受口状を呈するこの時期の指標ともなる形態。

円窓付壺

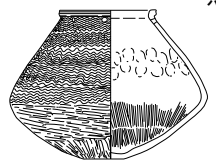


A 直口口縁を呈する。頸部にはハケメ刺突がめぐる。



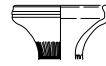
B 単純口縁を呈する。Aとは別系譜である。

無頸壺



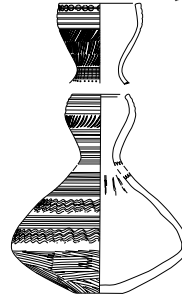
紐孔をもつが蓋の有無は不明。

受口状口縁細頸壺



口縁部が受口状を呈するこの時期の指標ともなる形態。

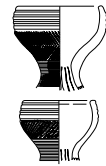
袋状口縁細頸壺



口縁部が袋状を呈するこの時期の指標ともなる形態。

1: 口径<口頸高

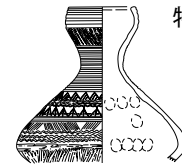
口縁部が内傾してまさに袋状を呈する。



2: 口径>口頸高

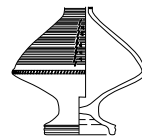
口縁部が大きく開き、深めの受口状口縁といった趣きを呈する。

特殊紋様壺



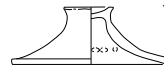
袋状口縁細頸壺にはほぼ限定される形態。複合鋸歯紋が特徴的。

台付袋状口縁細頸壺



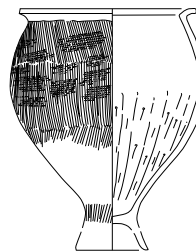
袋状口縁細頸壺に脚台をつけたものが通有で、受口状口縁を有するものは少ない。

カメ蓋



凹線文系土器にのみ伴う器種。

台付カメ



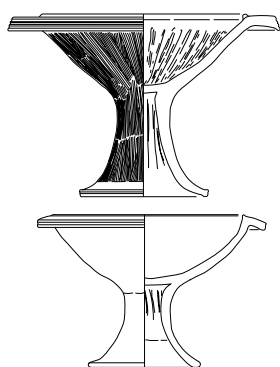
濃尾平野で成立した台付カメの系譜を引く。口縁部をヨコナデ仕上げしたものは濃尾地方では新しい段階に対応する。

小形台付カメ

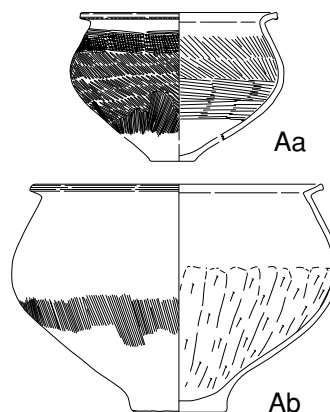


「小さい」という形態を有する、後期につながる器種。

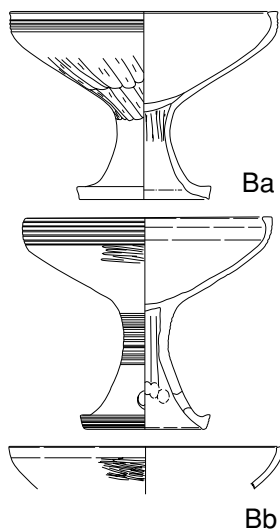
第29図 川原遺跡出土凹線紋系土器 主要器種区分



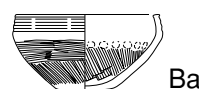
逆台形もしくは丸い杯部に、水平にのびた口縁部がつく。杯部はケズリの後にミガキを加えるものもある。タタキ痕を残すものは少ない。暗文を加えるのは稀である。



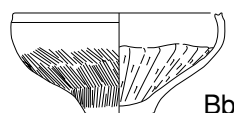
口縁部が外反し、体部は偏平。サイズに違いがある。ツボ系列とカメ系列があり、それは調整技法と底部形態で判別できる。つまり、内面にケズリ痕があり底部が突出するのが甕系列で、そうでないのが壺系列である。ツボ系列は成形第2段階で分岐、カメ系列は体部を偏平にすることによって成形。



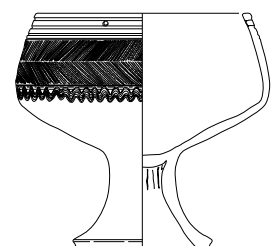
浅鉢状の杯部に受口状口縁と同様の口縁部がつく。口縁端部は拡張されて面をもつ。



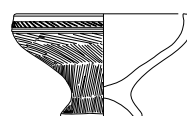
ツボ系列の鉢。壺成形の第1段階で分岐。底部が突出しないのが壺系列の特徴。



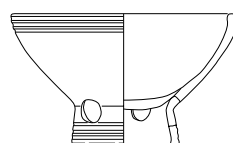
カメ系列の鉢。口縁部や底部付近の作り方はカメと同じだが、形態が違う。カメ成形の第1段階で分岐。



杯部の小さいものと大きいもの、また紐孔のあるものと無いもので器種が異なるようである。紐孔のあるものが蓋がともなう有蓋無頸壺になるのかどうかはわからない。杯部が小型化したものは後期につながる。



台付壺系列の鉢。台付壺成形の第1段階で分岐。後期につながる形態だが、この時期、出現頻度は低い。



大きな円孔が特徴的な鉢。口縁部がさらにのびて無頸壺になるものもあり、台付無頸壺成形の第1段階で分岐。

第30図 川原遺跡 凹線紋系土器 主要器種区分

SB217

120は浅鉢と思われる。棒状浮紋をもち、遠江白岩式との関連が窺える。

SB218

在来系土器(129～136)と外来系土器(123～128、137)の共伴である。

129は太い櫛で垂下紋と連弧紋が施されている。連弧紋はおそらく右手で右から左へ弧線を描き、それを左回りに重ねたものと思われる。

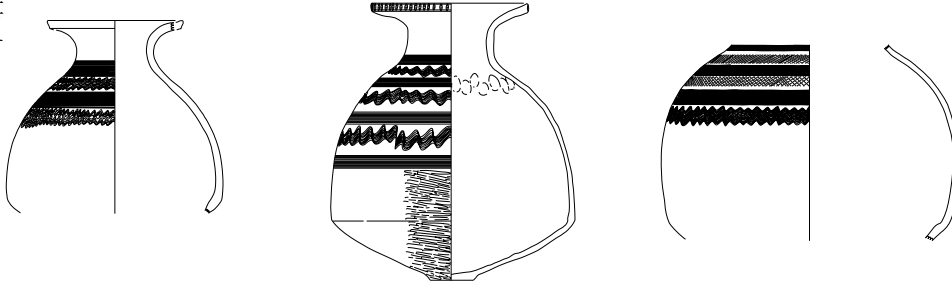
130は不揃いの櫛による直線と波長の大きな波状紋の組み合わせである。135は2条沈線刺突紋帯と波長の大きな波状紋を基本紋様として、さらに沈線による垂下紋を加えている。132はハケメ台付甕。137は櫛による縦位羽状紋が施されている。遠江以東と関連があらうか。

SB229

151・152はともに台付甕である。口頸部は内面に稜をもって屈曲し、外面は上半部で屈折し

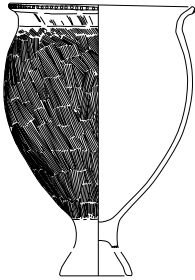
川原タイプ壺

尾張地方の壺を原型とし、川原遺跡特有の形態・紋様を有する壺。



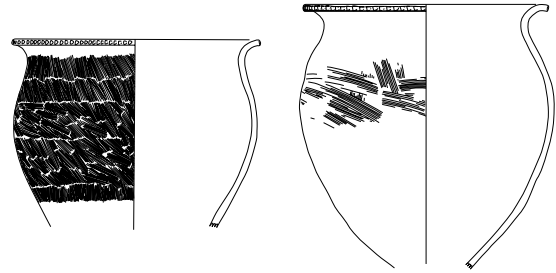
台付甕A

尾張地方の台付甕の系譜を引く。



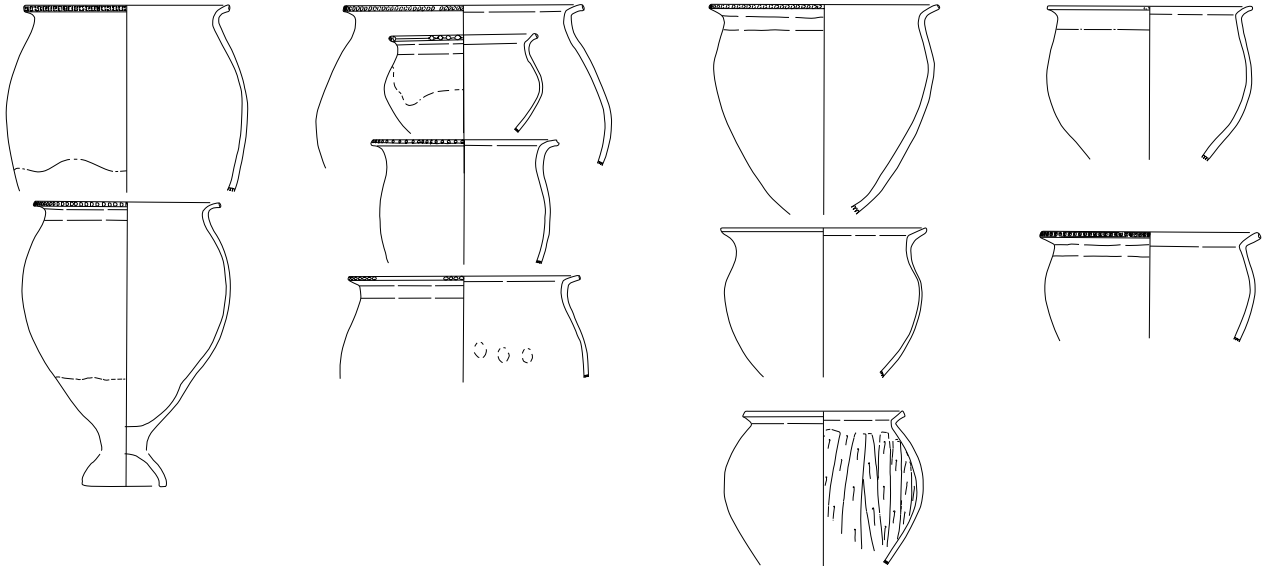
台付甕C

台付甕Aと台付甕Bとの折衷。



台付甕B

矢作川流域で生み出された在地の台付甕。ナデ仕上げが特徴。



第31図 川原遺跡 非凹線文系土器 主要器種区分

て肩をつくり、口縁部へは内彎していたる。

SB224

155・156は台付細頸壺である。体部の稜は鋭い。158は体部内面のケズリが頸部まで及んでいる。また器壁も厚く、次期資料の混入であろうか。高杯165・166の脚部裾端は、微妙に拡張気味であり、次段階の尾張地方で盛行する脚端の特徴を有する。

SB236・SK01

178は大型鉢(鍋)か？ 無紋である。

SB248

185・186は凹線紋系土器の変容形で、186は複合鋸歯紋が複数段施されている。

188は垂下紋をもつ在壺。

SB253

199・200ともに口縁部が内面に稜をもって強く外折れしている。また頸部内面も微妙に面を作っている。複雑な外郭線をもつのがこの時期の特徴であろう。

SB251

197 は半球状の体部をもつ台付鉢で、口縁部上端と脚部下端に凹線紋帯をもつ。198 は台付無頸壺 B で、口縁部には小さな円孔が穿たれている。

SK253・SK01

201 は川原遺跡特有の壺で、肩が大きく張って扁平な体部になっている。以下、川原タイプ壺と呼ぶ。鋭い工具による斜格子紋帯と櫛描紋帯の交互配置である。甕はいずれも台付甕と思われる。206・208 は口縁端部がやや拡張されている。

SB258

211 は受口状口縁をもち、体部には櫛描直線紋を区画紋として、斜格子紋2帯、波状紋が施されている。212 は川原タイプ壺で、円筒形の頸部に直線的に開く口縁部がつく。体部は肩が張る逆台形で、下半との間には稜線をつくっている。

SB255

217 は壺の体部に甕風のく字状口縁がつく短頸壺である。

SB260

222 はかなりだれた在地の受口状口縁壺である。口縁端部には刻みが施されている。

226 は頸部が短く立ち上がる台付甕である。

SB269

252 は鏝上面に斜格子紋が、端面には刺突紋が施されている。後者は波状紋が変形したものか？

SB271・SK01

249 は受口状口縁壺である。体部には簾状紋が多段に施され頸部も強く屈曲している。体部下半は底部付近にケズリが施されている。伊勢地方南部の紋様・調整手法との関連が窺える。時期的には新しいことを示している。

SB273

在来系土器が主で、外来系土器は 269、284～286 と少ない。ただ在来系甕の 282 は形態が 286 に酷似しており、SB270 の 263 などともに両者

の技術的交流から当遺跡固有の形態が生み出されている可能性がある。287・288 の底部が薄いことからいえば、SB270 資料と合わせてやや古相ということになろう。273 は2条沈線区画の名残を紋様構成に持つ壺。275・276 は梯子状の垂下紋である。

SB284

すべて外来系土器である。313 は頸部に沈線をめぐらす単純口縁壺。口縁下端の突出は伊勢湾西岸部的である。

SB291

343・345 は川原タイプ壺。それ以外は凹線紋系土器である。

SB300

凹線紋系土器は伴わず、在地土器と尾張系土器が出土している。351 は凹線紋系土器段階の貝田町式系太頸壺に類似している。川原タイプ壺の祖型となろう。352 は伊勢湾西岸部系か？

355 は下部にミガキが施され、鉢であろう。357 は台付甕か？ 353 は在地土器で、口縁部に圧痕が施されている。356 も口縁部に部分圧痕をもつ台付甕である。

SB306

360 は珍しく器高の高い甕蓋。361 は在地甕の初期型であり、台付甕ではないだろう。363 は凹線紋系壺。これらが同時期であるとは思えない。

SB333

404 は川原タイプ壺であるが、類似例は名古屋市高蔵遺跡にある。406 は口縁部の屈曲も甘くなり、ケズリ範囲も上昇している。

SB355

412 は円窓付壺。

SB368

436 は在地壺。肩が丸く、珍しい形態である。437 は川原タイプ壺の変異。頸部の隆起は在地壺に共通する。439 はく字状口縁鉢。

SB386

448 は袋状口縁細頸で、複合鋸歯紋、三叉紋などによる紋様構成は珍しい。

SB388

459・460の基本形は同じである。457は同形壺の口縁部であるが、外面には凹線紋状の沈線がみられる。折衷形である。

SB398

471は大型鉢(鍋)で波状紋が施されている。472は川原タイプ壺であるが、口縁部は内彎気味で、在地細頸壺に共通する。

SB541

515はナデ地紋に沈線紋が施されている。2条沈線二枚貝刺突連弧紋に沈線垂下紋をつなげている。516は描連弧紋で、両者とも凹線紋土器期初頭に位置づけられる。

SB582

537は袋状口縁細頸壺1類で、頸部外面に3段のハケメ刺突紋を加えている。口径：口頸高比も近く、古い様相を残している。台付甕542も口縁端部に刻みが施され、古い様相を保っている。538は川原タイプ壺の別バージョンである。頸部と体部の櫛描紋帯を波状紋でつなげている。

SK204

高杯と壺の組み合わせは西方的である。

SK538

在地土器からなる一群である。凹線紋土器期の最初期に遡るわけではない点で、評価が微妙である。

569は口縁端部に連続単位圧痕が施され、頸体部には櫛描紋と沈線紋が複合して用いられている。体部は斜走櫛描紋帯に重ねて平行沈線がめぐらされ、間に斜走沈線が施されている。570は肩の張りが無くなだらかで、振幅の大きな波状紋と直線紋が施されている。571は569や579に比べて肩の張りが強い。572・573は口縁部に部分圧痕が施されている。574は受口状口縁壺で、口縁部は薄く作られ、上端に刻みが連続して加えられている。575は垂下紋をもつ壺の頸部で、単位紋らしき沈線紋もみられる。576は沈斜走櫛描紋帯に平行沈線を重ね、区画内に2条1単位の斜走沈線が施され、最下部には八字状に

櫛描垂下紋が加えられている。577・578は単位紋をもつ壺片である。

579は頸部が屈曲せずゆるく立ち上がって外反するハケメ仕上げの台付甕で、底部は厚くなっている。580はゆるく外反する口縁部を持ち、体部は傾斜の大きな斜位ハケメになっている。581は頸部が大きく彎曲し、口縁端部には在地甕と同じD字刻みが施されている。582は581の脚台になるのかわからない。底部は厚くなっている。

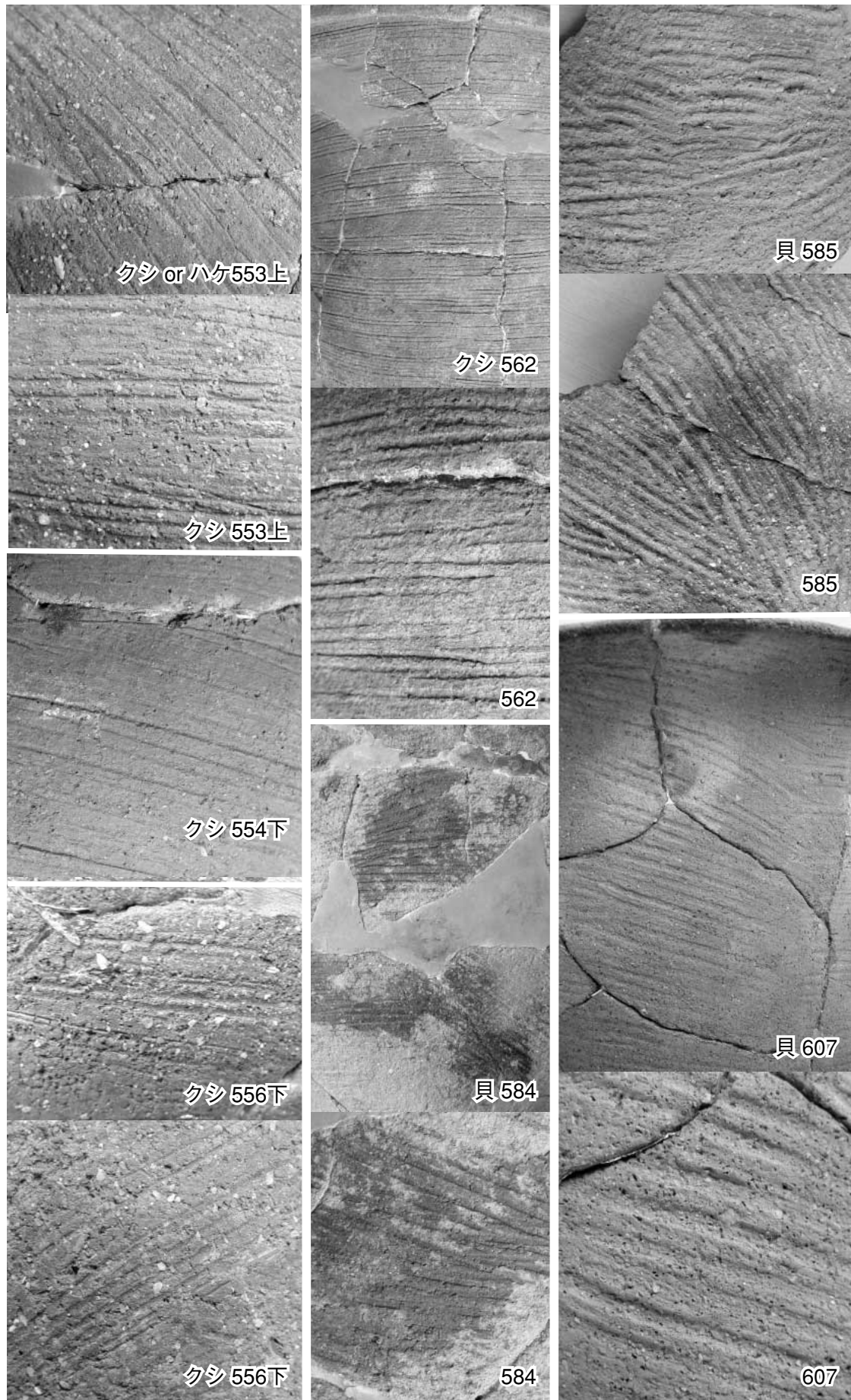
これらの土器は、その属性から壺570・572・573・574・576、甕579・580と、壺569・571・575・577・578、甕581の2群に分かれると考えられる。後者の575・577・578の単位紋からいえば下がって中段階であり、前者は古段階に位置づけられよう。ただし、壺が最古段階まで遡らないことからいえば、甕がハケメ調整を残すことの原因づけが別に必要になる。

SK848

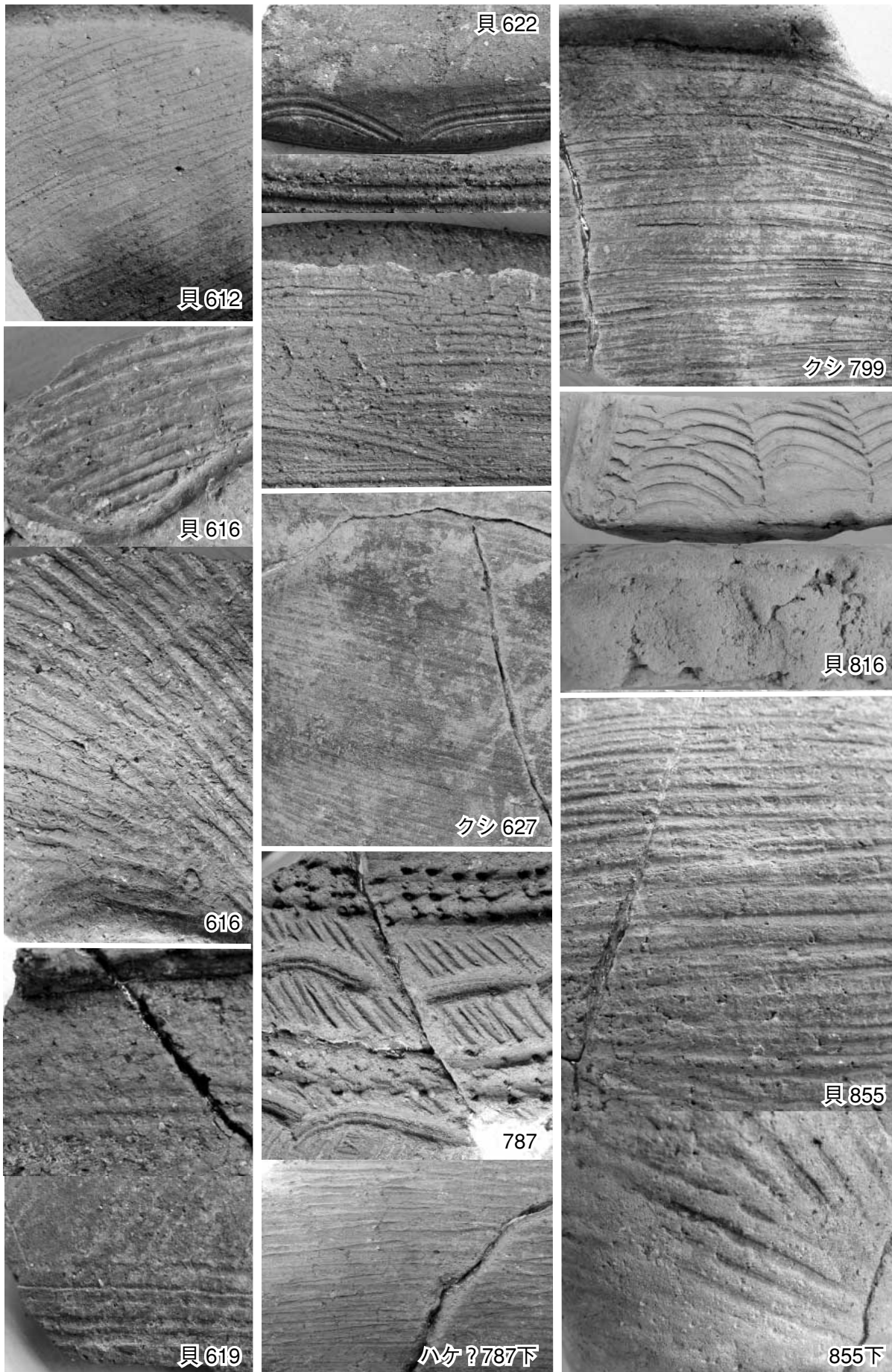
657は口縁部が外反する受口状口縁壺で、口縁部外面には沈線連弧紋が施されている。658・659は川原固有壺の初期型か？ 660は櫛描連弧紋と羽状紋が沈線波状紋によって区分されている。661は櫛描斜走紋がやや幅の広い平行線によって区画され、平行線内部には刺突紋が施されている。前段階の2条沈線からの系譜にある。平行線間には沈線斜走紋が施され通有である。663は断続櫛描紋、664は659と同一個体であろうか。665は無頸壺で櫛描紋と沈線紋・平行線紋を複合させた紋様を構成している。区画紋が沈線から平行線に変化している。666は台付鉢であろう。668は凹線紋系タタキ甕である。

SZ202

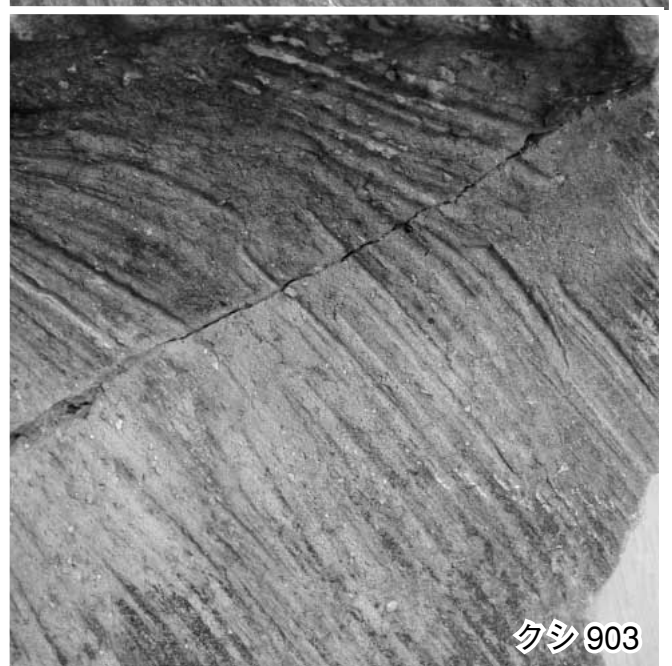
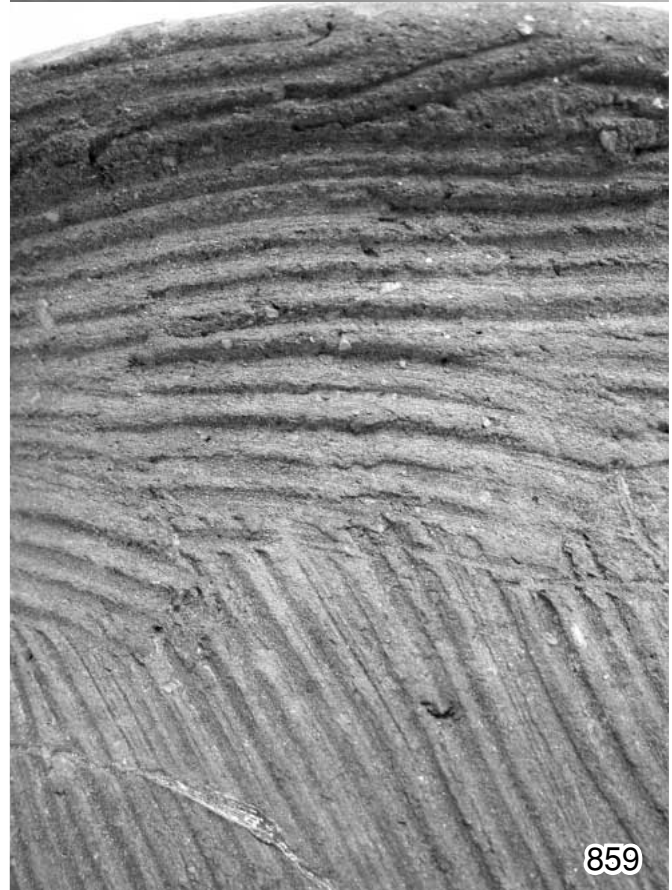
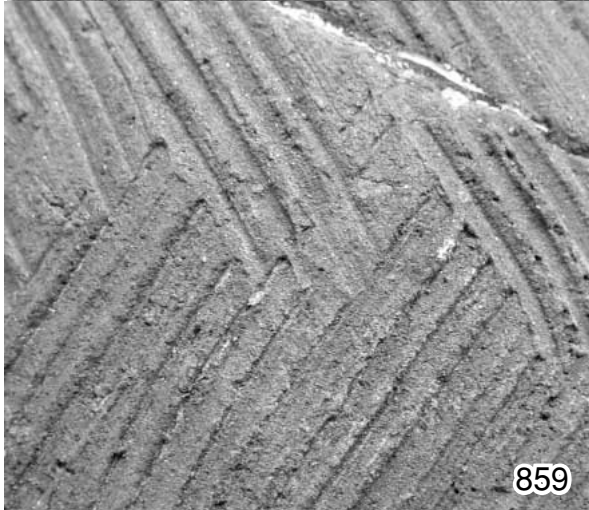
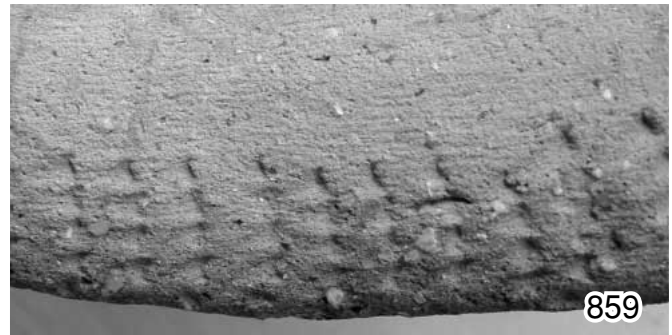
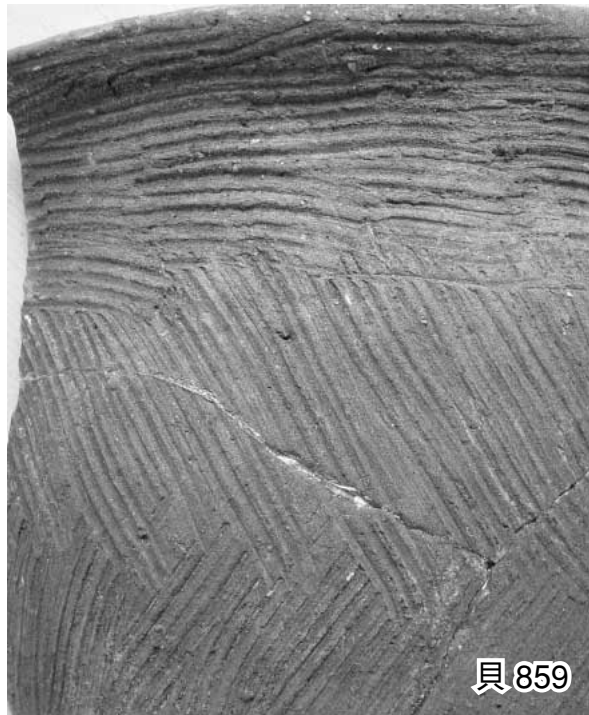
東溝 683は川原タイプ壺の口頸部。685は大きな円孔を有する高杯の脚部。687～691は在地の台付甕で、687・688の口縁部は頸部内面に稜をつくって外に折れている。689以下の頸部はまるく屈曲するが、頸部から少しさがったところに肩部との変換点がある。691はまだ縦長で



第32図 器面調整1



第33図 器面調整2



第34図 器面調整3

ある。

南溝 692は受口状口縁壺で、口縁部はかなり外傾している。693は肩がはり、694は肩から頸部にかけて大きく彎曲する。

西溝 697・698は川原タイプ壺か？ 696は古い時期の資料が混入したものである。699・700は川原固有壺であろう。701は袋状口縁細頸壺で、口縁部外面にはハケメ刺突紋が1段しか施されていないが、形態的には口径<口頸高で古い様相を示している1類である。702は単純口縁壺で最大径部が鋭く屈曲している。703～708は在地甕。708は体部の張りが強く、またやや扁平化しており新しい様相を見せている。709～711は凹線紋系台付甕。709はかなり扁平化しているが、711は脚台も小さく縦長である。

北溝 712は川原タイプ壺。口縁部外面には二枚貝で刺突が加えられている。713・714は在地壺。715・716は凹線紋系細頸壺。717も川原タイプ壺か？ 718～721は凹線紋系台付甕。722は受口状口縁甕で、口縁部外面には凹線紋、体部外面にはハケメ波状紋が施されている。723は在地甕。

SZ201

いずれも凹線紋系土器。727・728は体部の最大径部分にハケメ刺突がめぐる。

SD502

在来系土器と凹線紋系土器の混在。763は川原タイプ壺と同じ紋様をもつ大型鉢(鍋)で、口頸部は内面に稜線をもち、頸部がややのびる。773は口縁部に部分圧痕が施されるが、形態は頸部がゆるく伸びて新しい様相を示している。774・775も頸部が伸びる。それに対して771・772は頸部の屈曲が強い。

包含層

873・874は大きな波長の波状紋が特徴的である。890～892は2条沈線に刺突紋が施され、沈線紋が併用されて、古相を呈する。889・893は単位紋が認められる。896はコンパス鋸歯紋が施されているが在地土器であろう。珍しい。899は無頸壺で、これも珍しい。925は台付円窓付壺。三河地方ではほとんど類例の無いものである。

925は流水紋の転回部の間がナデ消され、またその下には複合鋸歯紋が施されており、遠江地方からの搬入品の可能性がある。

川原遺跡では凹線紋系土器群が充実している。これまで、こうした様相は岡島遺跡や西中遺跡群では最終段階とされていたものであり、それに対して川原遺跡の資料群は時期が少し遡る傾向にある。矢作川流域における在地土器群と凹線紋系土器との2重構造を考える上で、極めて重要な資料になろう。

末葉

SB303

364は凹線紋系壺の系譜にあるが、変形している。365も同様。368は混入か。

370以下は後期初頭に含めたい資料である。370は袋状口縁細頸壺が変形したもの。371は小型台付甕。373は頸部内面上位までケズリ調整がおよんでいる。374・375は同一個体かわからないが、できれば375が脚台でないほうが理解しやすい。376は鉢で、厚ぼったい作りである。

SB402

478は皿状杯部の高杯Cだが、凹線紋は沈線になっている。477は脚部が欠損して残念。上下対称の複合形を呈する可能性がある。

●● 土製品 ●●

ここでは川原遺跡出土の土製品を扱う。主に弥生中期の遺物を扱うが、弥生後期から古墳中期の遺物も一部含んでいる。

946～950は、銅鐸形土製品及び銅鐸形土製品の可能性のあるものである。この他に第2分冊で紹介されているSZ02周溝から出土した弥生後期前半に属する銅鐸形土製品951がある。

950は全体の形状が窺えるものでSB528から出土した。紐は円板状で中央に紐孔を模した穿孔が施されている。舞には紐を囲むように沈線が一条巡っていて、3ヶ所に穿孔が施されている。本来は4ヶ所に穿孔が施されていたと思われる。鐸身にも中位に2つの穿孔が見られ同様に4ヶ所に穿孔が施されていたと思われる。鐸身に文様は見られないが、一側辺に条線状の縦線が見られる。また鰭の表現・鰭が取り付けられた痕跡ともに見られない。鐸身の横断面は楕円形ではなく、方形に近い断面形をなす。紐及び鐸身は、磨きのようなナデで調整されている。時期は弥生中期後半。

946は銅鐸形土製品の紐の部分でSD03から出土した。指押さえて円板上に成形されており中央に紐孔を模したと思われる穿孔が施されている。紐の下方には、舞に施された穿孔が両面に見られる。時期は弥生中期～後期。947も紐の部分でNR03から出土。形状は946と同じく円板状を呈し、中央に楕円形の紐孔を模した穿孔が施されており、舞に施された穿孔が両面に見られる。時期は弥生中期～後期。948は径が小さく筒形土器の底部の可能性もあるが、ここでは銅鐸形土製品と想定して扱う。SB357から出土しており、銅鐸形土製品とすれば、舞と鐸身上部が残存している。舞・鐸身に穿孔はみられず、鐸身に文様は施されていない。また紐・鰭の表現や痕跡も見られない。時期は弥生中期後半。949は土器片の反り具合から非常に径が小さく、小型土製品と想定される。外面には十字状の文様が見られ、その文様構成から銅鐸形土製品の可能性が考えられる。SB528から出土している。時期は弥生中期後半。

952はSB284から出土した動物形土製品で、胴体と右前足が残存している。指押さえて成形されており、下腹部がやや膨らんでいるので雌犬か雌鹿を表していると思われる。時期は弥生中期後半。

953～955は人面付土器である。953は人面の下半部でSK888から出土した。口は刺突で表現され、髭は線刻で表現されその髭を別の線刻で囲むことで口髭を表現している。また頬には2本の線刻が引かれている。時期は弥生中期。954は髭の線刻が残っておりSK854から出土した。上部には貼り付けによる突帯が有り、刻みと刺突が施されている。また右下部分は若干膨らみを持ち刺突が施されている。時期は弥生中期。955は髭を表したと思われる線刻があり人面付土器の可能性もある。SK514から出土している。時期は弥生中期。

956・957は平底の筒形土器である。956は体部上半は内湾し円形刺突が施され、端部は僅かに外反している。また体部の一部に櫛による縦線が見られる。時期は弥生後期以降。957は体部はほぼ直立し、口縁部は外反する。口縁内面は面を有し、体部内面には棒状工具の痕跡が残っている。底部は僅かに突出している。時期は弥生中期。

958～960はミニチュア土器である。958は手捏ねで成形されており、甕を模倣したと思われる。959・960も手捏ね成形で台部のみ出土している。時期は3点とも弥生中期後半以降。

961は穿孔が見られることから、蓋の可能性が高く、上面に線刻が施されている。時期は弥生中期後半。

962は円板状土製品で、中央に穿孔が施される。時期は弥生中期。

963は土錘で、円形で中央に穿孔が施される。時期は古墳前期～中期。

964は大形の紡錘車で断面形は台形をなす。時期は古墳前期～中期。

川原遺跡出土の銅鐸形土製品を県内出土の銅鐸形土製品と共に検討してみる。銅鐸形土製品を銅鐸と同様に紐の形状で分類すると大きく2つに分類することができる。1つは紐がリング状のもの

で、もう1つは紐が円板状のものである。紐がリング状の銅鐸形土製品は、951の他に分かっているだけで、県内からは朝日遺跡・森南遺跡・西志賀遺跡・住崎遺跡などから出土している。この形態の銅鐸形土製品は、951の側辺の溝が鰭に関わる物だとすると全てが文様・鰭を有している。しかし、県内出土の銅鐸形土製品は、A・B両面で文様が異なっており、また文様構成、施文位置なども本来の銅鐸とは大きく異なっている。これらは弥生中期後半から後期前半にかけて出土している。多くは包含層出土だが、川原遺跡では墳丘墓・森南遺跡では土坑から各1点出土している。紐が円板状の銅鐸形土製品は、川原遺跡・朝日遺跡・見晴台遺跡などから出土している。この形態の銅鐸形土製品は、全形の分かるものは少ないが、現状

では文様が施された物は見られない。鰭は有する物と有さない物があり、精製と粗製のものがある。弥生中期後半から後期にかけて出土しており川原遺跡では住居から1点出土している他は包含層から出土している。このように銅鐸形土製品は、器形的には銅鐸と共通する要素を持つ反面、文様構成などは稚拙で省略されている。

次に出土状態を見てみると、銅鐸は特別な埋納坑から出土するのを原則としている。それに対し銅鐸形土製品は多くは包含層出土だが、住居・墓・土坑などからも出土している。また川原遺跡・朝日遺跡のように一遺跡から複数出土する例も見られる。このように銅鐸形土製品は、基本的には生活空間と思われる地点から出土しており銅鐸の出土状態とは大きく異なっている。

No.	遺跡名	出土遺構	現高	舞幅	時期	残存部	紐の表現	鰭の表現	穿孔の有無	文様表現
1	川原	周溝	5.5	6.3	後期前半	鐸身上部	(リング状)	鰭の位置に浅い溝	舞×2	鋸歯文・刺突文・非対称
2	川原	住居	8.9	2.3	中期後半	紐・鐸身	円板状・舞に紐を巡る沈線	なし	舞×3・鐸身×2	一側辺に条線状の縦線
3	川原	包含層	3.6	-	中期～後期	紐	円板状	—	—	—
4	川原	包含層	3.9	-	中期～後期	紐	円板状	—	—	—
5	朝日	包含層	4.8	1.6	中期末～後期前半	鐸身	なし	鰭の位置に面取り	舞×1	無文
6	朝日	包含層	5.2	2.4	後期前半	鐸身の一部	(リング状)	突帯状	—	横帯に平行斜線
7	朝日	包含層	8.8	4.5	後期前半	鐸身	—	扁平形・両下端に突起	なし	斜格子文
8	朝日	包含層	9	4.2	中期末	紐・鐸身上部	リング状	—	舞×1・鐸身×2	袈裟襷文・鋸歯文
9	朝日	包含層	6.1	3.2	後期前半	鐸身	リング状	突帯状・ミガキ調整	舞×1	袈裟襷文・鋸歯文・羽状文
10	朝日	包含層	6.45	4.3	後期前半	鐸身上部	リング状	鰭の位置にスリット	舞×1	横帯に斜格子文・鋸歯文
11	朝日	包含層	3.2	1.3	後期前半	鐸身上部	円板状	指押圧	舞×2	無文
12	朝日	包含層	5.1	3.2	不明	鐸身	円板状	指押圧	なし	無文
13	朝日	包含層	5.1	2.2	不明	鐸身	円板状	指押圧	舞×1	無文
14	朝日	包含層	4.1	-	不明	鐸身の一部	(リング状)	指押圧	—	7条のヘラ横線
15	朝日	包含層	4.1	-	不明	鐸身の一部	—	—	—	波状文
16	朝日	包含層	2	-	不明	鐸身の一部	—	—	舞×1	山形または斜格子文
17	森南	土坑	6.5	4.5	中期後半	鐸身	(リング状)	突帯状	舞×2	横帯に斜格子文・鋸歯文
18	阿弥陀寺	溝	3.4	-	中期末	鐸身の一部	—	—	—	横帯に鋸歯文
19	八王子	谷	3.2	2.2	後期以降	紐・鐸身	円板状	なし	なし	無文
20	西志賀	包含層	3	2.4	(後期?)	鐸身	(リング状)	沈線で区画	なし	沈線で袈裟襷文に区画
21	正木町	包含層	5	1.4	(中期末?)	鐸身の一部	(リング状)	僅かに突出	—	横帯に鋸歯文
22	瑞穂	溝	4	2.3	後期後半	鐸身	—	指押圧	なし	無文
23	柿町	包含層	4	1.4	(後期?)	鐸身	—	指押圧	舞×2未貫通	無文
24	見晴台	包含層	7.7	2.8	後期	紐・鐸身上部	円板状	指押圧	—	—
25	岡島	包含層	4.8	4.5	後期	鐸身上部	なし	なし	なし	袈裟襷文に斜格子文
26	岡島	包含層	3	-	中期	紐	円板状	—	—	—
27	住崎	包含層	6.1	4.6	後期	鐸身上部	(円板状)	突帯状	舞×2	無文
28	住崎	包含層	8.7	4.4	中期～後期	鐸身の一部	(リング状)	扁平形・鋸歯文	舞×2・鐸身×3	袈裟襷文に格子文・斜格子文
29	住崎(石製)	採集品	4.1	1.8	後期	完形	円板状	突帯状	なし	無文

第2表 銅鐸型土製品県内出土一覧

参考文献

- 神尾恵 -1984「銅鐸形土製品試考」『古代文化』第36巻
5号・10号・11号
木村有作 1994「伊勢湾周辺における銅鐸形土製品について」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅦ
同志社大学考古学シリーズ刊行会
愛知県教育委員会 1982『朝日遺跡Ⅱ』
愛知県埋蔵文化財センター 1994『朝日遺跡Ⅴ』

- 愛知県埋蔵文化財センター 2000『朝日遺跡Ⅵ』
甚日寺町教育委員会 1990『森南遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 1990『阿弥陀寺遺跡』
名古屋市見晴台考古資料館 1992『見晴台遺跡第三十次発掘調査の記録』
西尾市教育委員会 1994『岡島遺跡』
西尾市教育委員会 1996『住崎遺跡』
八王子遺跡の調査報告書は2002年刊行予定

石 器

旧石器・縄文草創期

本遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡であるが、これらの時期に紛れ込む形でナイフ形石器と縄文時代草創期に属すると思われる石器がある。後者は、時代を特定できる共伴土器がないため、あくまでも石器の形態からの類推にとどまる。また、定型化した石器ではない剥片類は、旧石器時代に遡る可能性もあるが、ひとまず草創期の石器と一緒に版を組む。

旧石器時代の石器

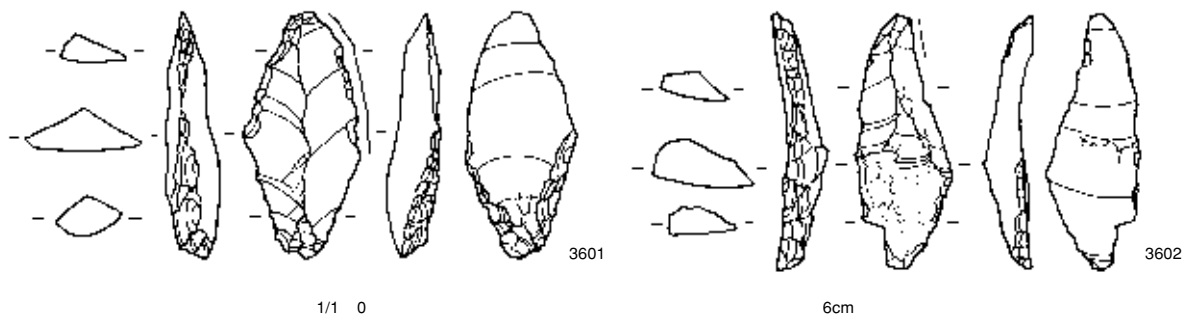
ナイフ形石器(第35図 3601・3602) 3601の石材は下呂石か。先端部を欠損している可能性もあるが、完形品としておく。長さ3.2cm、最大幅1.4cm、最大厚0.7cm。縦長剥片を素材とし、基部側に打点がかかる。打面は基部加工の際に除去され、打瘤も見られない。刃部は図正面右側縁上半で、刃こぼれが見られる。刃潰しは、図正面左側縁から右側縁下半に及ぶ。左側縁上半は主要剥離面側から施されているが、基部端以外の左右両下半部は図正面から主要剥離面側へ刃潰しが施されている。その結果、基部の横断面は菱形に近くなり、尖頭器様の着柄が想定される。全体が水磨を受けて摩耗しており、現位置から動かされている可能性が高い。茂呂形ナイフの範疇に含まれる。

3602は検V出土。石材は黄褐色に赤色が交じったチャート。完形品である。長さ3.3cm、最大幅

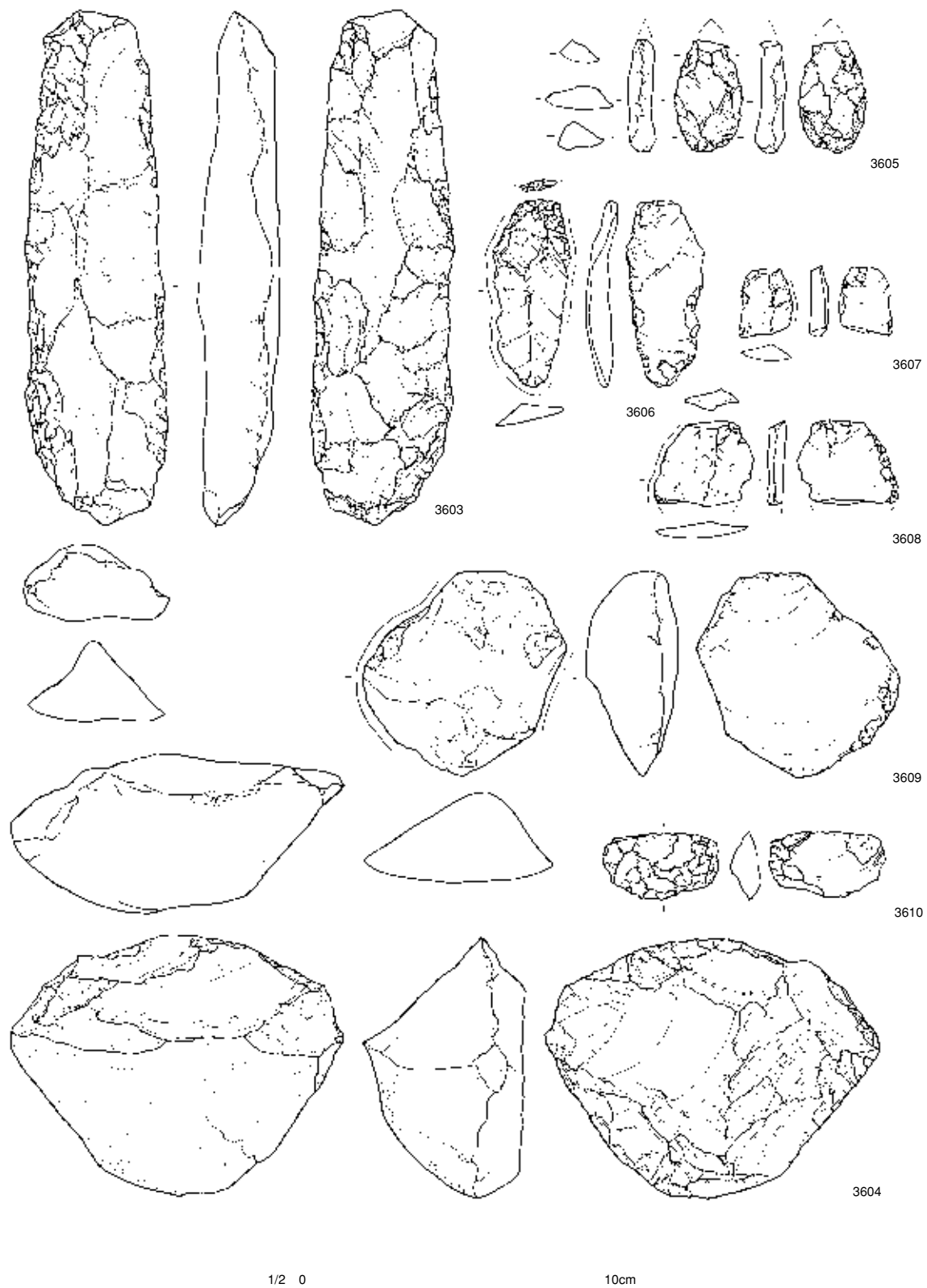
1.2cm、最大厚0.5cm。縦長剥片を素材とし、打点は先端側にくる。主要剥離面に残されたリングの形状から見て、素材は打点から遠い部位が使われている。図正面上半に広く礫面を残している。爪傷が見られ、中流域より上の川原で採取された円礫と思われる。刃部は図正面右側縁上半で、先端寄りに刃こぼれが見られる。刃部を除く4分の3周に刃潰しが施されている。調整は、すべて主要剥離面側からである。図正面左側縁上半の刃潰しは丁寧だが、他の部位の刃潰しは雑で形状も不揃いである。茂呂型ナイフの範疇に含まれる。

縄文時代草創期の石器

丸ノミ型石斧(第36図 3603) 風化されやすい石材(砂岩の一種か、)で細かな観察は難しい。完形品と思われる。全長16.9cm、最大幅9.6cm、最大厚2.6cm。横長剥片を素材としている。平面形はほぼ短冊型を呈する。図正面上半は中央に稜が入り、この横断面はやや潰れ気味の二等辺三角形となる。下半から刃部にかけては目立った稜はなく、カモの嘴状になる。調整は、図正面側は大きめの剥離で全体の形を大雑把に作り出し、さらに側縁部に中小の剥離を施し形を整える。この時、図正面右半は大剥離でほぼ形が整っており、微調整は少ない。大剥離は頭部寄りから刃部方向に向かって順に剥離されている。一方、図正面左半の剥離は中剥離、微細な調整が多い。中剥離は、中位から頭部と刃部両方向へ向かって施されているか。図裏面は、素材の主要剥離面のリングの凸凹を除去し、



第35図 ナイフ形石器

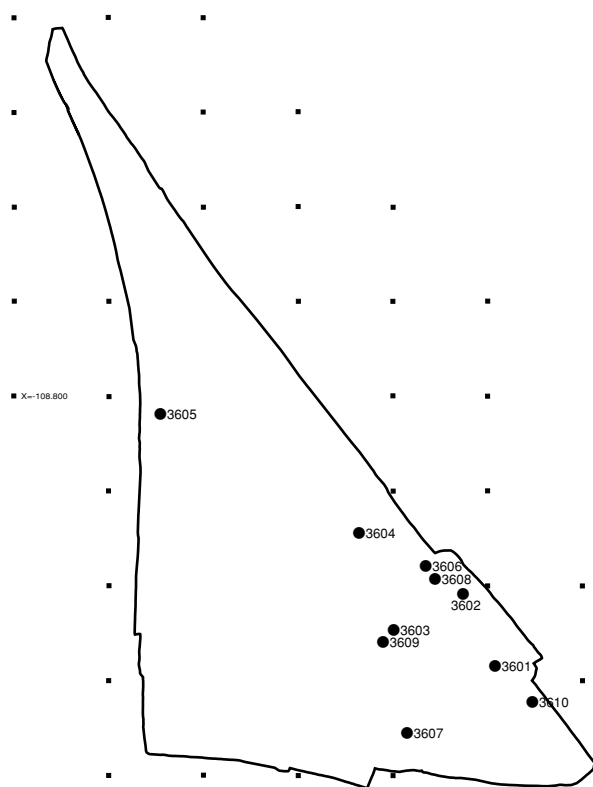


第36図 縄文草創期の石器

平坦に仕上げようとする意図が見られる。剥離面の大きさは不揃い。側面観は左右両側縁とも頭部と刃部に向かい反り上がっている。刃部を下方から見ると、凸状の弧を描くが、両側縁が高い位置にあるだけに一般的な丸ノミとはやや趣が異なる。

礫器様石器(第36図3604) 礫器を思わせる形態だが、拳よりやや大きめの礫を適宜割り、素材としている。残された礫面は全体の4分の1程度であり、厳密な意味での礫器ではない。こうした形態の石器を、礫器の様な石器「礫器様石器」と呼ぶことにしている。風化されやすい石材で、丸ノミと同質か。最大幅10.9cm、最大厚5.2cm、高さ8.5cm。刃部の平面形は凸型、側面観は中心軸の偏った両刃、上方から見るとジグザグ状になる。礫を半截し、図正面側を斜めに斬り落とす様に大きく剥離し、その後で4回程中程度の大きさの剥離を施している。図裏面側は、中程度の大きさの剥離4回程で形を整えている。剥離の大きさや方向に統一性がない。刃部の一部に摩耗痕が見られる。

尖頭器?(第36図3605)先端欠。頁岩?。現長3.6cm、最大幅2.1cm、最大厚0.8cm。縦長剥片を



第37図 石器出土地点 (1:1600)

素材としている。表裏両面とも身に比し相対的に剥離面が大きく、形も不揃いで、細部調整は見られない。剥離順も統一性がなく、尖頭器の完成品とは思われない。スクレイパーなど他の器種の可能性もある。風化もあまり進んでおらず、所属時期がどこまで遡るのかは不明である。

スクレイパー(第36図3606～3609) 3606は茶褐色のチャート。頭部を除くほぼ全集に刃こぼれが見られ、スクレイパーのⅡ類とする。縦長剥片で長さ6.1cm、最大幅2.4cm、最大厚0.6cm。側面観は、ねじれている。打面は調整されており、複数の細かな剥離面からなる。

3607はチャート。端部欠。現長2.2cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm。時期不詳。図正面右側縁に刃こぼれがある。

3608は縦長剥片で端部を欠いている。チャート。現長2.8cm、最大幅3.5cm、厚さ0.5cm。図正面左側縁に使用による刃こぼれを留めている。

3609は3603の丸ノミと同じ石材で風化されやすい。砂岩か。長さ6.5cm、幅6.4cm、厚さ3.0cm。拳大の円礫を半割しており、肉厚の縦長剥片である。両側縁の使用による刃こぼれが見られる。時期不詳。

横長剥片(第36図3610) 円礫を素材としている。主要剥離面はネガティブ。図正面下半に階段状の剥離が集中している。肉眼では使用痕は認められない。時期不詳。

●● 弥生時代の石器 ●●

川原遺跡の今回の発掘調査では、製品・未製品・剥片類を含め遺物用コンテナに換算して40箱を超える膨大な石器が出土している。これらの石器は、旧石器時代から縄文時代に比定される遺物も一部出土しているが、おおむね弥生時代中期に属するものと考えられ、従来、良好な弥生石器に恵まれなかった矢作川流域の遺跡のなかでは異色ともいえるほどの充実ぶりである。

しかしながら、それら石器の大半の資料は包含層中からの出土であり、出土状況においてなんらかの人為的な行為をうかがうことのできる資料は極めて少なく、わずかにその状況をうかがえるのは次の2例である。

①SZ504周辺より出土した石器 SZ504については遺構編で詳述したとおり、遺構の形状及び配置の状況から方形周溝墓とは考えられず、祭祀的な性格を有した遺構の可能性が高いと説明したが、それを支持するかのように、この遺構の周辺からは石製舌・大形石庖丁・赤彩を帯びた石鏃など日常生活で使用されたとは考えにくい石器が出土した。

②SB205の埋設された砥石 SB205は、台形状の平面形態を有する竪穴住居であるが、支柱穴の一つと考えられる北西ピットの周辺で地床炉とともに埋設された平板な板状の石材を使用した大形砥石が検出された。その周辺が調理等を行う空間であったと推定できよう。

今回の調査では、第3表に記したように、膨大な量の剥片類が出土した。それらは、大きく石鏃等

の製作に使用されたチャート・下呂石の類と粗製剥片石器・刃器等に利用された安山岩・泥岩の類の2つにわけて考えることができ、特に粗製剥片石器・刃器等に利用された安山岩・泥岩などの出土量の多さは注目される。

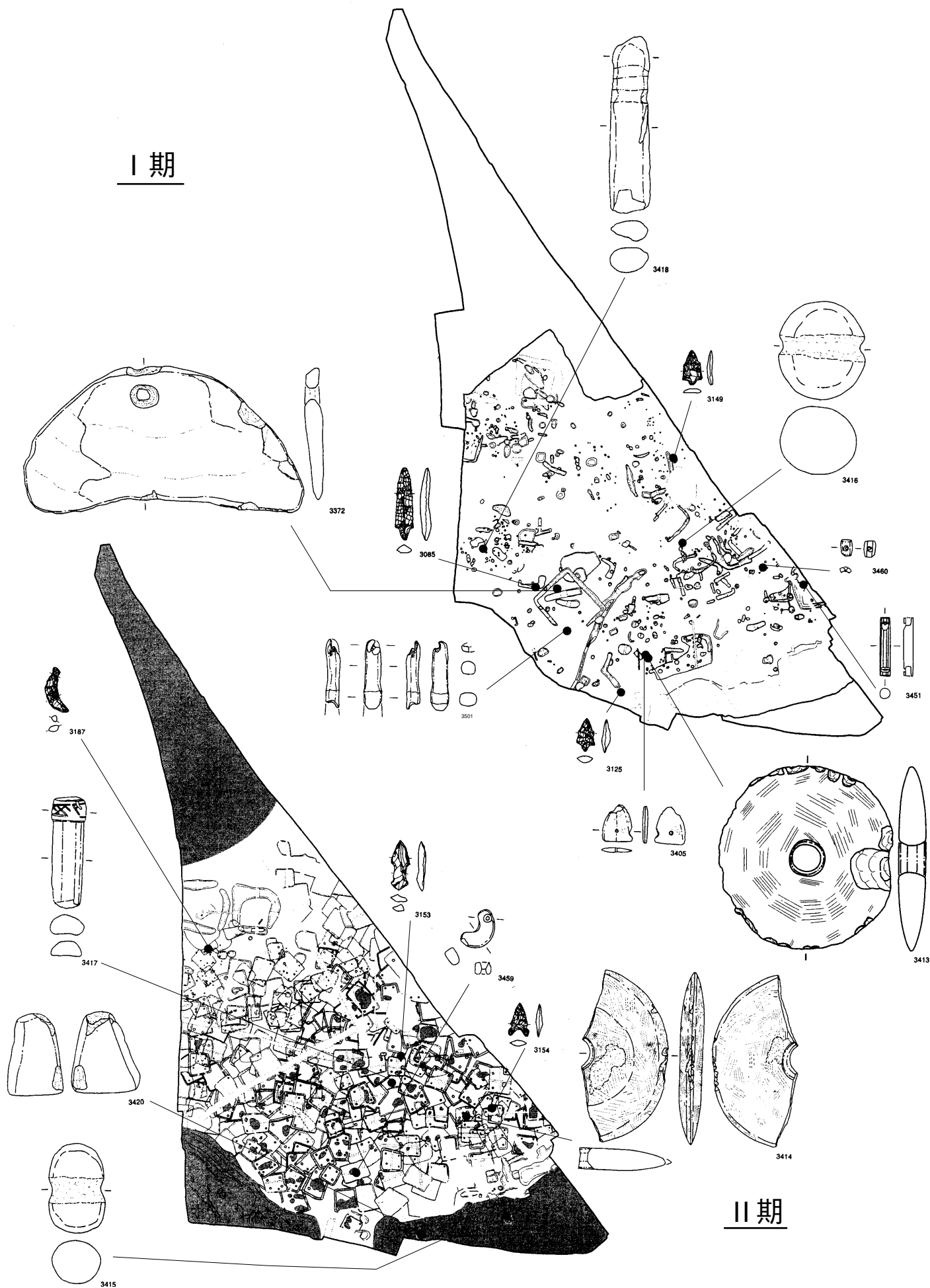
これらの石器の所属時期について、第3表のフレイクカウント表より考えてみたい。まず、表に記載されている各調査区で確認された遺構については、97BC・D区は弥生後期以降の墓域を構成する遺構群、97BCD区で検出された遺構群は凹線文段階のおびただしい数の竪穴住居群、98区は弥生中期の墓域を構成する遺構群であった。97BC・D区出土の剥片類に関しては、検出された遺構が墓域に関連する遺構であり、かつ弥生後期以降という時期からも、それらに伴うものとは考えられない。当然下面に包含されていた石器が、遺構掘削などの影響で検出されたものと推定されよう。また、最終下面の98区からも一定量の剥片類が出土しているが、これらの多くの資料は、97BCD区で調査できなかった竪穴住居(竪穴住居出現段階の住居)検出中に出土したものであり、最下層の墓域を構成する遺構群の調査時には、その出土は目立ったものではなかった。以上のことから、今回の調査で確認された石器の大半は、最も多く剥片類が出土している97BCD区、つまりおびただしい数の竪穴住居が検出された凹線文土器段階の遺構群に属していたと推定される。

弥生時代の石器の記述にあたっては、舌及び出土状況に関しては服部が、その他を原田が担当した。

調査区	石鏃系			刃器系				合計
	チャート	下呂石	その他	安山岩	泥岩	ホルンフェルス	その他	
97BC	527	144	5	476	737	111	11	2011
97D	384	59	4	221	361	37	5	1071
97BCD	709	172	0	653	634	131	21	2320
97E	0	0	0	0	1	0	0	1
98	412	114	3	305	316	49	6	1205
合計	2032	489	12	1655	2049	328	43	6608

第3表 剥片調査区別出土点数

一期



第38图 主要石器出土地点

●● 資料の概要と記載について ●●

発掘調査で出土した石器関連資料は1788点を数える。これは二次整理において実測、写真撮影、計測等の記録化の対象となった資料であり、未整理の剥片等を加えればその数量はさらに増える。このなかには、その形態からみて縄文時代に属す可能性のある資料も若干含まれているが、遺構や層位から縄文時代の資料を抽出することが困難なためまとめて報告する。器種別の出土数は第4表のとおりである。若干の混入を除けば、出土石器の多くは弥生中期後葉の限定された時期の資料と考えることができる。

資料の報告にあたっては、石器群を便宜的に打製石器、磨製石器、礫塊石器、装身具に大別し、さらに器種ごとに細分する。しかし、各器種の設定およびその分類については、かなり曖昧な部分が多く課題を残すことになった。この点は本遺跡のみの問題ではなく、今日の石器研究がかかえている方法論的な課題を含むものである。本遺跡出土資料の特徴として打製石器が卓越している点が上げられ、器種分類の曖昧さに関わる問題の多くは、これら打製石器に関係するものである。

弥生石器の記述についてはその形態による検討、分類に負う部分が大きい。製作技術に関する分析も重要な意味をもっている。報告にあたっては、出土した剥片石器および石核の一部について、技術的な分析を株式会社アルカに委託した。その分析結果を別に掲載するとともに、本報告の分類、記述にあたって一部この成果によっている。石器の製作技術に関する問題とともに、石器の使用痕に関する分析も近年の重要な研究課題であり、従来の形態による機能推定では明らかにしえなかった新しい成果を生みつつある分野でもある。打製石器の一部を株式会社アルカに委託し、高倍率による使用痕分析を実施した。また、委託した以外の資料についても、金属顕微鏡による使用痕光沢の観察を行い、特徴的な使用痕を報告中に記載している。

器 種			計
打 製 石 器	石鏃		516
	石錐		78
	尖頭器		23
	石匙		9
	ヘラ様石器		11
	石匙様石器		23
	刃器	二次加工有 使用痕有	95
	打製石斧		12
	楔形石器		49
	石核		26
	剥片他		562
磨 製 石 器	その他		121
	石庖丁	大型	28
	磨製石斧	両刃	59
		柱状	
		扁平	
		不明他	
	石棒		2
	環状石斧		2
	磨製石鏃		11
	磨製石剣		2
礫 塊 石 器	その他		2
	石錘		2
	敲石類	磨石	44
		凹石	
		敲石	
装 身 具	砥石		25
	舌		1
	管玉		8
	勾玉		1
	ガラス		1
自然石			75
計			1788

第4表 石器の出土点数

●● 資料の解説 ●●

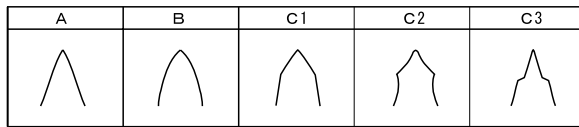
A. 打製石器及び関連資料

石 鏃(四版 87-3001～図版 90-3165)

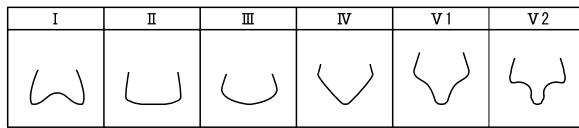
計 515 点と 1 遺跡の出土資料としては県内でも有数の資料が出土している。使用されている石材はチャートが圧倒的に多く(374点)、下呂石(92点)、安山岩(38点)がこれに次ぐ。他に黒曜石、石英、流紋岩、泥岩、サヌカイトがそれぞれ数点程度みられる。

形態 基部の形態、身部の形態に分けて分類を行い、第34図にその分類模式図と組成表を提示した。個別の石器には中間形も多く、厳密に区分できない場合も多いが、分類結果を簡素化するために、なるべく中間形の分類を設定しないようにした。このため各分類の集計数は、必ずしも厳密なものではない。

身部の形態



基部の形態



分類		身 部 の 形 態								計
		A	B	C1	C2	C3	C ?	他	不明	
基部の形態	I	6	1	3					2	12
	II		1							1
	III	5	12						3	20
	IV	3	7	2					3	15
	V1	49	39	33	9	2	1	1	23	157
	V2	65	43	65	32	17	2	2	31	257
	他	3	2					2	1	8
	不明	2	3	8	1	1			30	45
計		133	108	176				5	93	515

第39図 石鏃分類図・表

＜基部の形態＞

- ・ I 類 凹基鏃
- ・ II 類 平基鏃
- ・ III 類 円基鏃
- ・ IV 類 尖基鏃
- ・ V 類 有茎鏃

V 1. 挟りが弱く内湾するもの。

V 2. 強い挟りの入るもの。

- ・その他の形態(基部上に挟りが入るものなど)

＜身部の形態＞

- ・ A 類 平面形が三角形をなすもの
- ・ B 類 側縁が外湾するもの
- ・ C 類 いわゆる五角形鏃

C1. 肩部の屈曲が弱いもの。

C2. 肩部の屈曲が強く、突出気味に強調されるもの。

C3. 肩部が段をなすもの。

- ・その他の形態

I 類は凹基鏃であるが、数は少ない。縄文時代のものも含まれる可能性がある。いずれも長さ 1.5cm ～ 2.5cm の小型鏃である。身部の形態は三角形の A 類、外湾する B 類と五角

形を呈する C 類の各形態がみられる。この形態の石鏃は、下呂石、黒曜石などチャート以外の石材が用いられている。

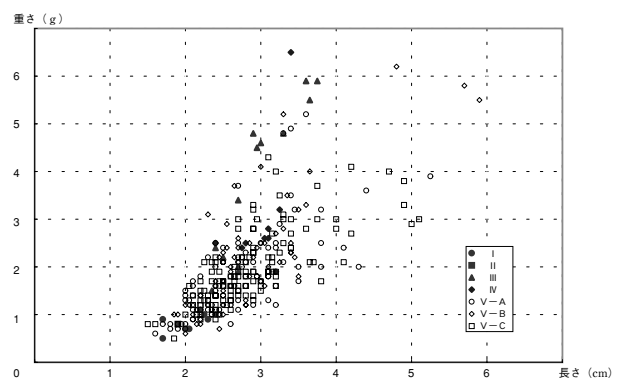
II 類の平基鏃、III 類の円基鏃は極めて少ない。いずれも身部が外湾する B 類に含めて考えられる。

IV 類の資料も少ない。本類型に含めたものの、有茎鏃 V 類の基部の作りが粗雑なものや、石鏃の可能性のあるものも含まれている。

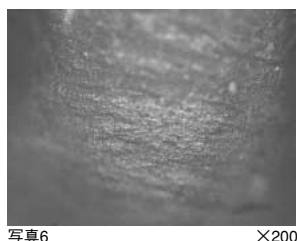
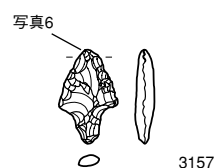
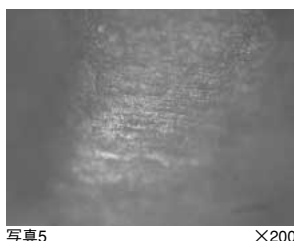
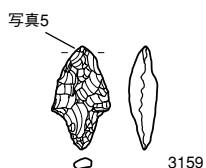
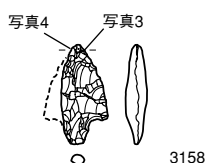
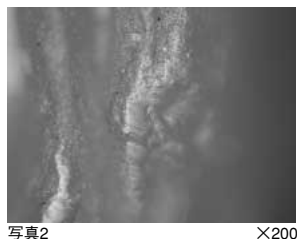
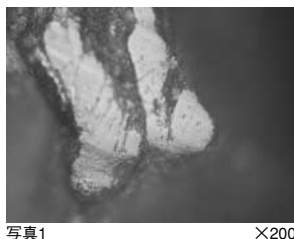
V 類の有茎鏃が本遺跡の主体である。身部が三角形の A 類のものは、短身で幅広のものから長身で先端が鋭角なものまでであるが、法量、形態の変化は漸移的である。B 類は A 類と C 類の中間的な形態として存在する。五角形鏃の C 類は有茎鏃のなかでも主体であり、東海地域の特徴的な石鏃の形態でもある。なかでも肩の屈曲が強く強調され、屈曲部以下が大きく湾曲する C2 類は長身鏃に特徴的なデザインである。先端部が段をもつ C3 類はいずれも短身で、長身鏃にはみられない。

この他特殊な形態のものとしては、身部中位で段をもつ 3153、凹基鏃で基部に近い部分に挟りをもつ 3154 などがある。3152 は石鏃としたが、先端部は丸味をもって作られており鋭くない。

石鏃の大きさ 弥生時代中期後葉の石鏃は、著しく大型化したものが特徴的であるが、実際には本報告資料のように小型品も多くみられるのが実態であろう。川原遺跡では長さ 15mm、重さ 1g 以下のものから長さ 60mm、



第40図 石鏃相関図



3165・3158は明るく平坦な使用痕光沢が測辺の剥離稜上に形成されている。光沢部は稜の起伏に沿って波打ったように見え、線状痕が明瞭に観察される。

3159・3157は肉眼でも容易に観察できる摩滅面をもつ。高倍率の観察では、光沢面ははっきりせず、摩滅面上に無数の鋭い線状痕が観察される。

使用痕写真1

重さ6g以上のものまで多様な法量の石鏃がみられる(第40図)。形態の違いを考慮しなければ、法量分布の主体となるのは、長さ20mm以上35mm以下、重さ1g以上3g以下の領域であり、大型の石鏃のみが主ではない。一方、40mm以上の長身鏃の形態をみるといずれもV類の有茎鏃で構成されており、大型化と形態には一定の相関関係が見出せる。ただ、この場合も小型品から連続して分布しており、特定の法量にピークが分かれるということはない。また、Ⅲ類の円基鏃には、長さこそ40mm以下だが、重さ4gをこえるものがみられる。平面の面積が大きく身部の厚みがあるものが多いという形態的な特徴を反映しているものと思われる。

赤色顔料の付着した石鏃 表面に赤色顔料が付着した石鏃が6点確認された。いずれも剥離の内部に痕跡的に付着している。科学的な分析を実施していないため、赤色顔料の成分は不明。

使用痕 石鏃の使用痕としてはいわゆる衝撃剥離痕がある。衝撃剥離痕には先端部に生じる場合と基部に生じる場合があるが、資料中に多く認められるのは先端部の剥離痕である。剥離痕には単なる折れ状のものと先端から基部側への剥離痕が認められるが、前者は使用痕であるのか偶発的な剥離であるのか区別が困難である。

石錐に転用された石鏃(3155～3165) 石鏃の先端部に磨滅痕が観察される資料があり、石錐に転用された可能性がある。金属顕微鏡による観察でも使用痕と考えられる光沢面、線状痕が確認された(使用痕写真1)。

石 鏃(図版 90-3166～3185)

小型剥片石器では石鏃に次いで多く、78点出土している。石材は大半がチャートで、他に下呂石、安山岩などが若干みられる。

形態 錐部と頭部の形態により以下のように分類する。

- ・Ⅰ類 頭部と錐部の境がなく、全体が細長い形態のもの(3166～3168)
- ・Ⅱ類 頭部と錐部の境が明瞭で細長い錐部をもつもの(3169)
- ・Ⅲ類 全体が円形または多角形を呈し、錐部と頭部との境が不明瞭で先端部がそのまま錐部となるもの(3170～3180・3185)
- ・Ⅳ類 不定型な剥片の一部に加工を施し、錐部をつくるもの(3181～3184)

最も定型的なⅡ類は少ない。Ⅲ類、Ⅳ類が目立ち、全体の形状よりも機能部の作出に重点がおかれているようである。全体が棒状をなすⅠ類も一定量みられる。

使用痕 肉眼で観察できるものとしては、錐部側縁の微小剥離痕や摩滅痕がある。金属顕微鏡による観察では、一部の資料に使用光沢面が観察された。使用痕の詳細は使用痕写真2に示したとおりであるが、3175はDタイプの光沢面が観察され、骨や鹿角の加工との関係が考えられる。

石 匙(図版 90-3186～3192)

3186～3189は縦型の石匙である。3186は刃部が大きく湾曲する。3187は黒曜石製の小型品で、摘部が明瞭に作られている。3188・3189は刃部が尖頭器状を呈する。

3190～3192は横型の石匙でいずれもチャート製である。3190・3191は明瞭な摘部をもつ。いずれも刃角は鈍く、刃部は正面から見ると湾曲している。

ヘラ様石器(図版 91-3193～3202)

小型の剥片石器で先端部がヘラ状の形態をもつものを「ヘラ様石器」として抽出した。チャートを主要な石材とし、基部が有茎のものと茎をもたないものに大きく分けられる。

Ⅰ類(3193～3195) 有茎のもの。主に表面に加工を施し、主要剥離面側はほぼ平坦な面として残す傾向がみられる。

Ⅱ類(3196～3202) 無茎のもの。Ⅰ類と同様に主要剥離面を残し、平坦に作られたもの

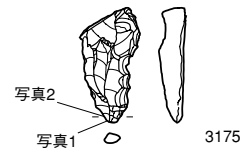


写真1

×200

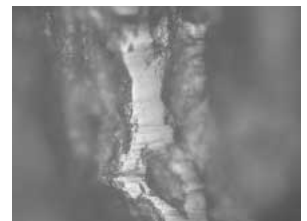


写真2

×200

錐部側辺の稜上に使用痕光沢が認められる。光沢部は明るく平坦で、表面はなめらかである。線状痕が明瞭に認められる。光沢タイプはDタイプで、水分を含む鹿角や骨と関係する使用痕とみられる。



写真3

×200

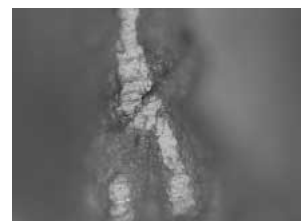


写真4

×200

錐部側辺の稜上に使用痕光沢が認められる。光沢部は明るく平坦で線状痕も明瞭である。3175で確認したDタイプの光沢に似るが、表面がやや粗く線状痕も鋭く、光沢内部に剥落したようなピットがみられ、より硬いものが被加工物と推定される。

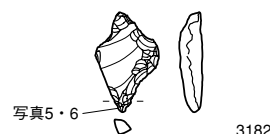


写真5

×200



写真6

×200

肉眼でも観察できるほどよく摩滅している。光沢としては発達しておらず、摩滅面に無数の鋭い線状痕が形成されている。被加工物は石などの硬いものか。

使用痕写真2

が多い。

使用痕 3194・3196を株式会社アルカに委託し、他は筆者が金属顕微鏡による観察を行った。3196は主要剥離面側の先端部に近い縁辺でDタイプの光沢面が確認された。水分を含む骨や鹿角の削りに用いられた可能性が高い。他の資料については明瞭な使用痕は観察されなかった。

石匙様石器(図版 91-3203～3223)

ここで石匙様としてとりあげる資料は、当初石鏃あるいはその未製品として整理されていたものである。しかし、石鏃とするには対称軸においた場合、左右非対称形になること、縁辺のみ剥離が施され加工が全体に及ばないなど、石鏃としては不自然な点がある。実測図の上下を反転した場合、縦型の石匙に近い形態をなすことから、「石匙様石器」として分離したものである。使用されている石材はチャートを主体とする。

I 類(3203～3215) 明確な茎部を有するものをI 類とした。刃部は先端が尖頭器状で、全体的には三角形を呈する。刃部の主軸と茎部の主軸がずれている。

II 類(3216～3223) I 類のように明瞭な茎部をもたないが、基部がすぼまる形態のもの。基部は一方が大きくえぐれる傾向があり、えぐりの大きい方の辺に直線的な刃部が作り出されているようである。

使用痕 3207・3220・3221を株式会社アルカに分析委託、他は筆者が金属顕微鏡による観察を行った。いずれの資料も識別的な使用痕光沢は確認されず、これらの石器の機能については課題を残すことになった。

中型尖頭器(図版 93-3251～3257)

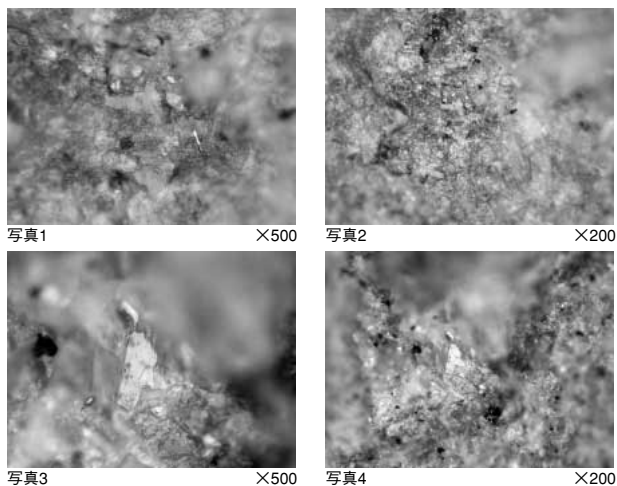
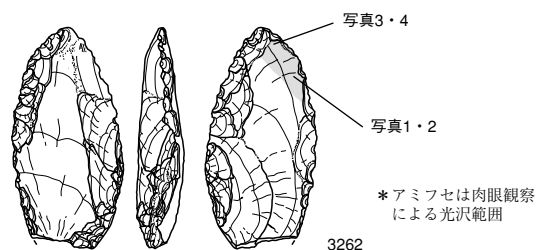
長さ3～5.5cm程で左右対称形のポイント状の石器で、石鏃とするには身が厚く、加工の剥離痕も荒く粗雑なものである。あるいは他の器種の未製品の可能性のあるものも含む。石材はほとんどがチャートである。側面から

剥離を加えているが、剥離は荒く、側面から見ると稜線が大きく波打ったようなものが多い。器面中央まで剥離が及ばず自然面を残すものもある。尖頭器としたものの、先端部はあまり鋭くない。

3254・3255は基部を円基状に整形加工するもので、前述したものに比べ、比較的丁寧な押圧剥離が施されている。

大型尖頭器(図版 93-3261～3263)

安産岩製の石器で、側辺に加工を施し尖頭器状の形態を作り出している。チャート等の小型石器に比べ剥離は粗雑である。また、後述する刃器類のうち、尖頭器状の刃部を作り出すものとの区別も曖昧である。3262は鋸歯



先端部付近に肉眼でも観察可能な光沢がある。高倍率での観察では、非常に滑らかな光沢が認められる。Aタイプの光沢に似るが、ややコントラストが弱く、縁辺の丸みが見られない。安山岩製の石器では他にも同様な光沢が観察され、Aタイプが風化の影響を受け変化したものでないかと考えられる。

なお、この石器では刃部を加工する剥離に光沢が形成されている面が切られており、剥離部分では光沢は認められない。もともと刃器として使用されていたものが、再加工され尖頭器に作り替えられたものと考えられる。

使用痕写真3

状の剥離を施しているが、株式会社アルカに委託した剥離技術の分析では、ハードハンマーによる間接打撃と同定されている。また、先端部付近には肉眼で光沢痕が認められ、金属顕微鏡による観察でもAタイプと推定される使用痕光沢が観察された。光沢の形成されている面は剥離によって切られていることから、もともと刃器として使用されていたものを尖頭器として作り替えたものと推定される。

刃 器(図版 93-3264～図版 104-3355)

いわゆるスクレイパーや使用痕のある剥片と呼ばれるものまでを含み、多様な形態のものがある。用いられている石材から、チャートを主体とする緻密な石材を用いた比較的小型の石器と安山岩を用いた比較的大型のものとがあり、製作技術の面からも両者は区分できそうである。以下、チャート等緻密な石材を用いるものをⅠ類、安山岩系の石材を用いるものをⅡ類とし記述していく。

Ⅰ類(3264～3284) チャート、サヌカイト、下呂石などの石材を用いたもので、総じて小型品が多い。

264～267は全体の形状を整える加工が施されたもので、尖頭器状の刃部を作り出しているものである。265はサヌカイト製で尖頭部の一辺が著しく磨滅している。267は尖頭部と反対側が摘み部状に作り出されており、石匙様の形態を呈する。3268～3278は剥片の形状を大きく変えずに、刃部と推定される縁辺を中心に加工が施されているもの。形態は多様であるが、素材剥片の形状を大きく変えるような加工が施されていないので、詳細な分類は困難である。3279～3284は明確な加工が施されていないもので、刃部と推定される縁辺に微細な剥離痕が認められるものである。いわゆる使用痕のある剥片と呼ばれるものであるが、微細な剥離痕には使用によるもの以外に、偶発的な剥離痕も含まれる可能性がある。

Ⅱ類 3285～3355は安山岩、泥岩等を用いた剥片石器あるいは剥片である。報告したものの以外にも多量の剥片類が出土している。明瞭な整形加工を施したものは少なく、石器と製作時の剥片との境界はきわめて曖昧であることをことわっておきたい。

3285～3289は比較的明瞭な整形加工を施し、尖頭器状の刃部を作り出しているものである。この点においてはⅠ類の3264～3267と共通する器種である。3290～3307は刃部を中心に整形加工を施すものである。形態としては多様なものがあるが、全体の形状を大きく変えず、形状を整える程度の加工が施されている。3308は刃部のみ研磨が施されている。3309～3355は明確な加工がみられず、剥片の鋭い縁辺を使用した可能性のあるもの。刃こぼれ状の不規則な剥離痕が顕著に認められるものもあるが、明確な使用痕跡をもたないものも含まれている。形態としては、一次剥片である自然面をとどめる貝殻状の形態のものがみられる他、剥片の一部に自然面をもつものが多い。

使用痕 掲載した資料については、株式会社アルカに使用痕分析を委託したものの他、筆者自身も金属顕微鏡による使用痕光沢の観察を実施した。チャート系の石器ではいずれの資料も明瞭な使用痕光沢は観察されなかった。安山岩系の石器は、ほとんどの資料が風化によりもとの黒色の表面が白く変化している。使用痕光沢もほとんど観察されなかったが、一部の資料についてはAタイプと考えられる光沢がみられた(3304・3308・3317・3332～3337)。これらの資料は肉眼による観察でもある程度明瞭に刃縁に光沢が識別できるものである。顕微鏡観察では光沢部がやや荒れており、光沢本来の広がりや明るさも失われているものが多い。風化による影響をどのように評価するかは問題であるが、いずれの資料もイネ科草本植物の切断と関係する石器と

考えられ、尾張地域における粗製剥片石器と同じような石器として考えることができる。使用痕光沢が確認された資料は総じて大型で、刃部には加工を施さないものが多いことも粗製剥片石器と類似する特徴であろう。

打製石斧(図版 105-3356 ～ 3359)

打製石斧及びその可能性が考えられるもの12点をカウントしている。石材はホルンフェルス(7点)が多く、他に結晶片岩、泥岩、安山岩が数点ずつである。形態はいずれも短冊形の範疇でとらえられ、いわゆる石鋏と称される大型のものは出土していない。時期としては縄文に属す資料の存在も考慮する必要があるだろう。

3357・3358は基部よりの両側辺に調整と見られる敲打痕を残しており、この部分が若干摩滅している。

使用痕 打製石斧の特徴的な使用痕は刃部における摩滅痕であり、土に対する作業によって生じると理解されている。本報告資料では、3357・3358の資料において顕著に観察される。

その他(図版 92-3224 ～ 3250)

これまで報告した器種に該当しないものを「その他」とし、図版 92 に一括した。ここで紹介するものは全て小型剥片石器に属し、チャート、下呂石などの緻密な石材を使用したものである。

3224 ～ 3243 は先端部を尖頭状に作り出している。先に石匙様石器としたものに類するものか、あるいはその未製品を含むものと考えられる。石鋏の未製品も含まれている可能性があるが、抽出することはできなかった。3409は全面に加工が施されている。実測図の向きが異なっているが、3192のように摘部の作り出しの弱い横型石匙の可能性もある。3245も横型石匙に類似するが、製作技術の分析を委託したアルカの所見では、石錐ではないかという意見をj得ている。この場合、実測

図上部の摘部として表現されている部分が錐部となる。3248・3249は厚みのある剥片の片面に加工を加えたもので、器種は不明。3250は一見凹基式の石鋏にみえるが、先端部は尖らせず丸味をもたせており、通常の石鋏とは異なる。

楔形石器

楔形石器については、これを石器として評価する意見と剥片を得るための加工過程のなかで生じるものとする意見がある。本報告では後者の考えにたち、形態については考慮せず、相対する両極に打撃痕が認められるものを抽出した。資料は写真のみを提示している。総数は49点で、石材はチャート37点が最も多く、次いで下呂石10点である。他に安山岩、泥岩が各1点ずつである。打撃は短軸にみとられるもの、長軸に認められるもの、長短の両方に認められるものがある。打撃部は潰れと階段状の剥離痕が顕著に認められる。石材の組成や大きさからも小型の剥片石器類の製作と関わる資料と考えられる。

石 核(図版 105-3360 ～ 図版 106-3368)

安山岩の石核と考えられるものが出土している。いずれも円礫ないしは亜円礫が用いられているが、連続的に定型的な剥片を剥離したと考えられるものはない。(株)アルカに委託した属性分析によれば、いずれもハードハンマーの直接打撃によるもので、自然面打面のものが多い。分析委託資料では、剥離軸長は4cmから6cmのものが多い。剥離技術及び剥離面の大きさから、前述した安山岩系刃器のうち、中小型のものと対応する石核ではないかと考えられる。

B. 磨製石器

磨製石鋏(図版 111-3400 ～ 3410)

磨製石鋏は11点出土している。石材は凝灰岩、片岩、泥岩、安山岩、ホルンフェルス等の石材が用いられている。形態は多様であるが、有孔石鋏が一定量見出せるのが特徴であ

ろうか。

3400～3404は有茎、3405～3410は無茎鏃である。有茎のうち3400・3401は凹基有茎で、有孔鏃でもある。この2点については、石材も緑色凝灰岩が用いられており、他とは容易に識別できる。無茎石鏃には、研磨が全面に及ばず縁辺のみ形を整える程度の粗雑なものが多い。3408は磨製石斧片を使用している可能性があり、縁辺に整形のための剥離が施されたままになっている。

磨製石剣(図版 111-3411・3412)

破片資料であるが2点出土している。3412は安山岩で、先端に近い部分の破片とみられ、片面の鎬は明瞭である。3411は泥岩製。扁平な形状で、片面は剥離面を完全に研磨しきれず残している。

磨製石斧(図版 108-3374～3399)

磨製石斧は小片を含め59点がカウントされている。器種ごとの内訳は、両刃石斧13点、扁平片刃石斧11点、柱状片刃石斧8点、小型石斧5点で、他は器種不明の小破片である。使用されている石材は、ハイアロクラスタイト46点、他に安山岩、凝灰質泥岩、頁岩、玄武岩、黒色片岩、ホルンフェルス等が数点ずつみられる。尾張地域で占有度の高いハイアロクラスタイトが一定量を占めるのは、石斧石材及び製品流通の広域性をうかがううえでも注目される。

両刃石斧 身が比較的厚く、断面形が円形、正確には楕円形を呈するものとやや扁平で断面形が長方形に近いものがある。刃部は丁寧に研磨されるが、身や基部に近い部分は敲打痕を残すものが多く、逆に整形段階の剥離痕が残るものはほとんどない。3383・3384のように刃部に対し基部がすばまる形態のものは縄文時代の可能性もあるが、弥生時代にも全くみられないものではない。

扁平片刃石斧 研磨は全体に及ぶものが多い。整形段階の剥離痕をとどめるものが多い

が、敲打による調整はほとんど確認できない。

柱状片刃石斧 両刃石斧に比べ、大小に関わらず敲打痕を残さず全体を丁寧に研磨したものが多く、3385は浅い挟りが施されている。

小型石斧 細部加工用と考えられる小型の石斧である。3390は柱状石斧、3396は扁平片刃石斧をそのまま小型化した形態であるが、不定型なものも多く、次に述べる破損破片の再製品化と関わる資料がみられる。

再生と再製品化 磨製石斧のなかには、刃部の損耗、あるいは破損に応じた処置が施されたものが少なくない。継続的な刃部の消耗と再生による形態の変化として、刃部左右が偏る例は代表的なものであり、出土資料の大半は多かれ少なかれこの種の形態的变化を被っている。3375は断面形でみると、基部の主軸と刃部の主軸にズレがあり、刃部の一方の面は著しく平坦である。これは大きく破損した部分を研ぎなおして刃を再生したことによると考えられる。

また、破損した石斧片を再利用して、小型の加工斧に作り替えたとみられるものがある。3397・3399は剥離面を残したまま刃部が研ぎ出されている。器面のカーブから推定して、両刃石斧の破損品を素材としている可能性が高い。3398も両側辺に連続した剥離が施されており、石斧刃部の再加工品と思われる。小型ノミ状の3495・3497も一辺が不自然な剥離面からなり、剥離面の刃部のみを研磨し、形態もいびつなものである。なお、朝日遺跡などで指摘されている擦り切りによる分割整形を示す資料は認められなかった。

環状石斧(図版 112-3413・3414)

2点出土している。3413はハンレイ岩製の完成品で、縁辺の刃部には刃潰れ状の痕跡とこれに伴うとみられる大小の剥離痕が認められる。3414はカンラン岩製で、刃部に刃潰れ状の痕跡と剥離痕がみられる。また、3414は

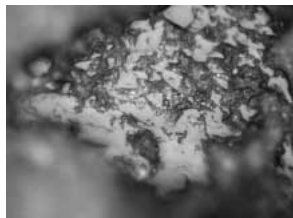
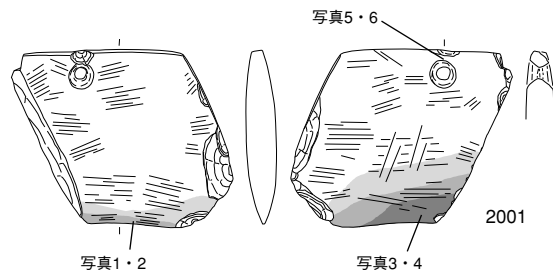


写真1 X500

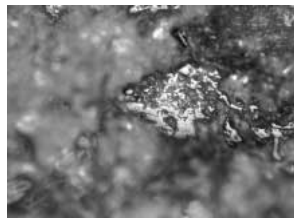


写真2 X200



写真3 X500



写真4 X200

刃縁に非常に明るく滑らかな光沢が認められる。光沢部は平面的に広がり、縁辺は滑らかな丸みをもつ。典型的なAタイプの光沢である。使用痕光沢は刃縁の表裏に形成されており、光沢面上の滑らかな線状痕は刃部と平行するものが多い。水分を含んだイネ科草本植物を対象に使用されたと考えられ、石器は刃部を平行に操作したものと推定される。

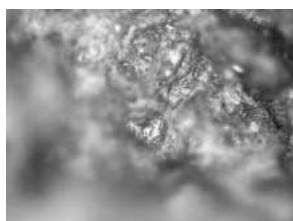


写真5 X500

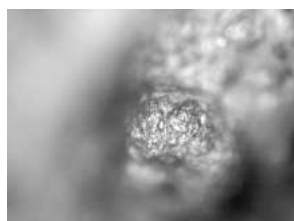


写真6 X500

写真5・6は穿孔部付近で観察されたポリッシュである。この磨部分は肉眼でもやや摩滅しているようにみえる。光沢部は非常に微弱で、表面は微細な凸凹がみられ、全体にやや丸みをもっている。Eタイプあるいは未発達なBタイプとするべきか。紐ズレによって生じた可能性も考えられる使用痕である。

使用痕写真4

表面に赤色顔料が付着している。

磨製石庖丁(図版 107-3369～3373)

磨製石庖丁として28点の資料をカウントしているが、その多くは破片資料である。かろうじて形態を推定しうる資料は全て大型石庖丁と考えられるものであり、いわゆる穂摘み

の用途が考えられている通常サイズの石庖丁は抽出できなかった。この点は尾張地域等で指摘した様相と基本的には変わらないものと考えている。石材は結晶片岩や緑色片岩などの片岩系の石材が主体で、泥岩、ホルンフェルスがわずかに認められる。

全形がわかる3372はやや内湾する刃部をもち、背部は緩やかだが、全体に台形状を呈する。穿孔は中央背部寄りに1孔のみである。結晶片岩製で表面はほとんど剥落している。3373は石器であるかどうか不明であるが、3372と同じ石材であり、大型石庖丁の未製品あるいは素材となる可能性もあり図示した。この他、刃部の形状がわかるものは、いずれも両刃で、刃部を作り出す稜は不明瞭である。この刃部の特徴も大型石庖丁として認識できる要素の一つである。

使用痕 刃部をある程度残し、表面の遺存状況も良好な3370について金属顕微鏡による使用痕の観察と使用痕分布図を作成した。使用痕の詳細は使用痕写真4と解説によるが、推定される使用方法是刃部を平行方向に操作するイネ科植物の切断であり、大型石庖丁の機能をよく示している。

石 棒(図版 112-3417・3418)

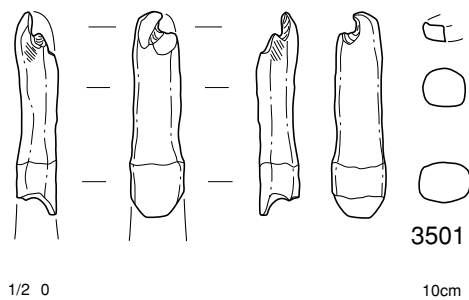
2点出土している。3418はくびれ部を敲打により作りだしている。3417は研磨が全面に及ぶ作りの丁寧なもので、先端部には装飾が施されている。いずれも縄文時代に属するものと考えられる。

その他不明石器

3502は磨製石器の破片で、研磨による溝が付けられている。剣あるいは戈の一部である可能性が考えられるが、小片であるため器種不明とした。

舌(棒)(第41図-3501)

川原遺跡の最終下面の調査で、祭祀的な性格を有する方形周溝状遺構SZ504の開口部周辺より出土した。現状は、上端部の一部と下



第41図 石製舌 (1:2)

部を欠損しているが、現存長 5.5cm(推定復原長 6.5cm)、幅 1.5cm、重量 11g を測る。全体の形状は、上部先端を丸く仕上げ、下端に向かってわずかにふくらみを持ちつつ次第に太さを増す棒状の形態を呈する。上端部には、両側より径 4mm 程度の穿孔が施され、垂下するための紐を通したと考えられる。注目すべきは、下半部にみられる敲打によると考えられる著しい摩耗痕の存在であり、測縁部分で特に強く、一部表裏面におよんでいる。銅鐸の内面突帯と激しい接触があったことが推測される。

C. 礫石器

石 錘(図版 112-3415・3416)

花崗岩製の石錘が 2 点出土している。球あるいは楕円形の円礫の中央に、敲打による紐掛けの溝が全周する。

凹石・敲打石・磨石(図版 113-3419～図版 115-3440)

凹石、敲打石、磨石は通常異なる器種として別々に記載される。これらの器種の最大の特徴はそれ自身が特定の製作工程により作られたものではなく、主に自然石を使用した結果、

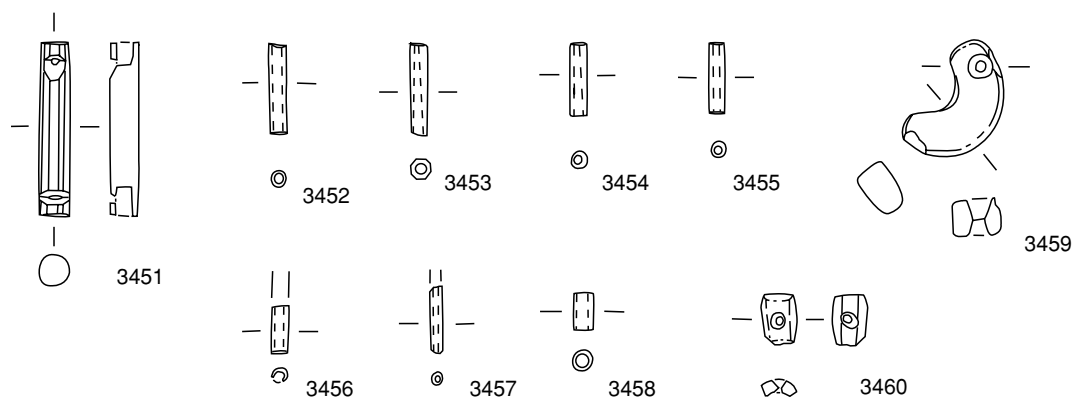
その痕跡により石器として識別できるという点にある。また、敲打痕、磨面、凹部などの使用による痕跡は一個の石器に複数認められることが多い。ここではこれらの器種を一括して扱うこととする。

3419～3423 は磨り面をもつ磨石で、石材は全て花崗岩である。3420 は三角形の礫の広い平坦面と側面に磨り面をもつ。3419・3421～3423 は円礫の側面に磨り面をもつもので、平坦な面には敲打痕が認められる。3419 は磨り面に赤色顔料が付着しており、朱あるいはベンガラ製の精製用のためのものである。

3424～3440 は敲打石ないしは凹石とされるものである。石材は花崗岩、安山岩の他、泥岩、流紋岩なども用いられている。使用されている礫の形態は、長楕円形のもの、扁平な円礫、不整形なものなどがある。長楕円形のは、主に端部に敲打痕が認められるもの、側面あるいは平坦な面に敲打痕が認められるものがある。扁平な円礫の場合、平坦な面に敲打痕あるいは凹部を有するが、側面にも敲打痕をもつのが通例である。

砥 石(図版 116-3441～3450)

砥石は 25 点が出土している。使用されている石材は、凝灰岩、花崗岩、結晶片岩がある。3441・3445 のように比較的小型で方柱状を呈するものもあるが、やや扁平で断面が長方形を呈する形態のことが多い。使用面は複数あるのが通常で、平坦な面の表裏、側面ともに使用される。凝灰岩、花崗岩製のでは使用面



第42図 玉類 (1:1)

が緩やかに湾曲しているものが多い。結晶片岩製のものは、もとの石材が板状に剥離したものを、薄い板状の平坦な面を使用面としている。

朝日遺跡などで多く見られる有溝砥石については、本資料中では該当する資料がみられない。

D. その他・装身具等

装身具としては管玉、勾玉、ガラス小玉が出土している。ここでは、弥生後期以降の資料を除いたものについて報告する。また、ガラス小玉についてもここで報告する。

管 玉(第 42 図 -3451 ~ 3458)

8点の資料が報告の対象になる。いずれも緑色の凝灰岩製である。3451 は特殊な形態で、両端からの穿孔は貫通しておらず、端部よりの外面から切り込みを入れ、この部分から紐を通すようになっている。長さ 23mm と他の管玉よりも大きい。他の管玉はいずれも長さ 9 ~ 12mm、径 1.5 ~ 2.5mm の小型のものばかりである。3458 は長さ 5mm、径 3mm と他に比べ幾分寸詰まりで太めの形態である。

勾 玉(第 42 図 -3459)

3459 はヒスイ製の勾玉で、両面から穿孔が施されている。

ガラス玉(第 42 図 -3460)

3460 の 1 点が出土している。色調はコバルトブルーで、気泡が多く認められる。平面形は方形に近い形状で、断面は緩やかにカーブしている。両面から穿孔が施されており、管玉等の破片を再利用して作られたものと考えられる。

E. 自然石等

明確な加工、調整の痕跡は認められないが、遺跡外から意図的に搬入された可能性のあるもの、何らかの石器、石製品の素材ないしは素材の残欠である可能性のあるものを取り上げる。

軽 石

小片を含め 17 点が出土しているが、明確な

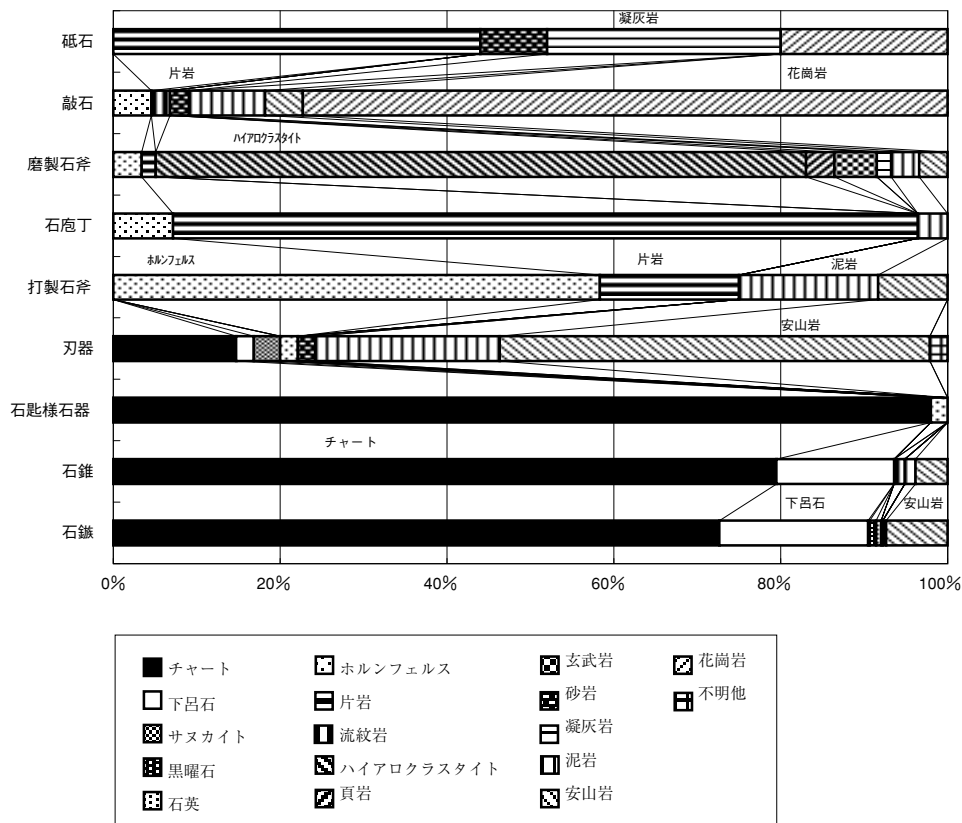
加工を施したものはない。平坦な面をもつもの、条痕がみられるものもあり、砥石として使用された可能性もあるが断定はできない。

この他水晶(黒水晶・白水晶)、メノウ、コハク、黒曜石などが出土している。メノウ、黒曜石については石器石材として使用されているが、水晶やコハクは同種の石材を使用した石器は出土していない。

●● まとめ 弥生時代の石器 ●●

器種構成について

川原遺跡の弥生石器は、一部の混入品を除けば、弥生時代中期後葉の限定された時期の組成を反映しているとみられる。特色としては、多量に出土した打製石器類をあげることができる。器種が特定できるものでは、石鏃が 500 点以上出土しており、調査面積に比較してもきわめて密度の高い出土状況といえる。この他小型剥片石器では、ヘラ様石器、石匙様石器として報告した器種がある。これらの石器の性格を特定するために実施した使用痕分析では、一部の資料に鹿角、骨などの加工を示唆する使用痕光沢が検出された以外、有意な結果は得られていない。石鏃など他器種との区別、その機能については、微小剥離痕や衝撃剥離痕などの観察もとりにいながら検討する必要がある。また、安山岩を主とする多量の刃器(剥片を含む)が出土しており、川原遺跡の石器組成を特徴付けている。一部の資料については、刃部に形成された光沢によりイネ科植物を作業対象としたことが推定され、尾張地域でみられる粗製剥片石器と同様に農具としての性格が想定される。しかし、こうした石器は形態的にもある程度限定され、多くの刃器類はまた別の機能をもっていたと考えられる。使用痕分析では、石材の風化の影響が強くイネ科植物の使用痕以外には十分な成果を上げられなかったが、これら刃器の機能を明らかにしていくことは本遺跡資料の



第43図 器種別石材

性格を知る上でも重要な問題である。

磨製石器については、石庖丁、石斧類、石鏃等当該期の器種を網羅する構成となっている。石庖丁は小片が多いものの30点近く出土しており、尾張地域における中核的な集落の出土状況と類似している。穂摘み用の石庖丁がほとんどみられず、大型石庖丁を主とする構成も伊勢湾地域に共通する様相である。磨製石斧は伐採用の両刃石斧、加工用の片刃石斧や小型石斧などがあり、磨製石器の主要な器種となっているが、積極的な石斧製作の痕跡は認められない。おそらく尾張地域のように、外部からの製品あるいは半製品状態での搬入と消費が想定される。朝日遺跡で指摘されているように、石斧の破損品から新たに小型の石斧を作り出す再生産の状況が伺えることも消費遺跡として共通するあり方であろうか。石鏃では有孔石鏃がみられ、東濃地域や信州方面との関係を示唆するものと考えられる。

器種と石材の関係

主要器種における石材の使用頻度を第43図

に示した。

打製石器の石材は大きくチャートと安山岩に分けてとらえることができ、前者は比較的小型の剥片石器の素材として、後者は大型の剥片石器の素材として用いられている。個別の器種でみると、石鏃の場合チャートが70%以上を占めるが、下呂石が2割程度、安山岩も1割に満たないが若干使用されており、石錐や石匙様石器に比べ非チャートの石材の構成が複雑なようである。刃器の場合、安山岩、泥岩の占める比率が高いが、二次加工が明確な小型品ではチャートの占める比率が高くなる。また、サヌカイトが少数ではあるが認められることも注意される。打製石斧は上記の石材構成とは大きく異なり、ホルンフェルスや片岩系の石材等、大型で板状の素材を得やすい石材を使用する傾向が読みとれる。

磨製石器の場合は器種と特定の石材との結びつきが強い。石庖丁は板状の素材が得られ、加工のしやすい片岩を好んで用いる傾向がはっきりと現れている。磨製石斧はハイアロクラ

スタイトの比率が高い。この石材は石斧以外の器種にはほとんど用いられていない。ハイアロクラスタイト製磨製石斧の生産遺跡としては、三重県大安町宮山遺跡の例が知られている。濃尾平野の主要な弥生遺跡はこの地域から製品ないしは半製品の供給を受けていたと考えられており、川原遺跡もその流通圏の

範囲であった可能性が高い。

礫塊石器では敲石類に占める花崗岩の比率が高い。特に磨石として使用されたものは、ほとんどが花崗岩である。敲打具には砂岩や安山岩などの硬質な石材も使用されている。砥石は花崗岩、凝灰岩、砂岩が用いられているほか、片岩も多く用いられている。

石器出土地点一覧

登録番号	整理番号	調査区	グリッド	検出遺構	器種	石材	備考
3001	212	97D	IXD9t	SZ101北周溝	石鏃	チャート	アメリカ式
3002	4599	98	IXD7p	SB543-2	石鏃	チャート	
3003	276	97BC	IXD2i	検II	石鏃	下呂石	
3004	140	97BC	IXD4o	SD04	石鏃	黒曜石	
3005	372	97BCD	IXD1l	SB361	石鏃	チャート	
3006	193	97BCD	IXD15o	SD502	石鏃	下呂石	
3007	74	97BCD	IXD12l	SB296	石鏃	安山岩	
3008	172	97D	IXD15r	SD102	石鏃	下呂石	
3009	155	97D	IXD9r	SZ101	石鏃	チャート	
3010	113	97BC	IXD7i	SD03	石鏃	チャート	
3011	141	97BC	IXD4o・5p	SD04	石鏃	下呂石	
3012	397	97BCD	IXD12s	SB236	石鏃	チャート	
3013	145	97BC	IXD16k	SD08	石鏃	チャート	
3014	249	97BC	IXD16j	NR01	石鏃	チャート	
3015	186	97BCD	IXE14a	SD501	石鏃	チャート	
3016	295	97BC	IXD8o	検II	石鏃	チャート	
3017	309	97BC	IXD11l	検II	石鏃	下呂石	
3018	84	97BCD	IXD11r	SB334	石鏃	チャート	
3019	92	97BCD	IXD6k	SB365	石鏃	チャート	
3020	578	97D	IXD9r	SZ101	石鏃	チャート	
3021	143	97BC	IXD3o	SD04	石鏃	チャート	
3022	161	97D	IXD9t	SZ101	石鏃	チャート	
3023	9	97BCD	IXD8n	SB201	石鏃	黒曜石	
3024	41	97BCD	IXD14o	SB252	石鏃	下呂石	
3025	374	97BCD	IXD5f	検IV	石鏃	チャート	
3026	531	98	IXD9h	検V	石鏃	チャート	
3027	166	97D	IXD9r	SZ101	石鏃	チャート	
3028	506	98	IXD5f	SZ503東溝-2	石鏃	チャート	
3029	64	97BCD	IXD7p	SB276	石鏃	チャート	
3030	287	97BC	IXD5n	検II	石鏃	チャート	
3031	518	98	IXD8j	SB355	石鏃	下呂石	
3032	91	97BCD	IXD14i	SB356	石鏃	下呂石	
3033	207	97D	IXD8s	SZ101	石鏃	チャート	
3034	330	97D	IXD11o	検III	石鏃	チャート	
3035	204	97D	IXE11a	SZ101	石鏃	チャート	
3036	129	97BC	IXD8m	SD03	石鏃	チャート	
3037	128	97BC	IXD11n	SD03	石鏃	下呂石	
3038	338	97D	IXD12p	検III	石鏃	チャート	
3039	109	97BC	IXD12m	SD03	石鏃	チャート	
3040	514	98	IXD5k	P-569-1	石鏃	チャート	
3041	478	98	IXD10l	SD544-1	石鏃	チャート	
3042	410	97BCD	IXE12a	SB226	石鏃	チャート	
3043	348	97D	IXD13p	検III	石鏃	チャート	
3044	107	97BC	IXD13m	SD03	石鏃	チャート	
3045	297	97BC	IXD9g	検II	石鏃	チャート	
3046	528	98	IXD7g	SB527	石鏃	チャート	
3047	521	98	IXE11b	SB228	石鏃	チャート	
3048	381	97BCD	IXD8s	SB212	石鏃	チャート	
3049	230	97BC	IXD2j	SK21	石鏃	チャート	
3050	306	97BC	IXD9p	検II	石鏃	チャート	
3051	318	97D	IXD8s	検III	石鏃	チャート	
3052	395	97BCD	IXD12s	SB203	石鏃	下呂石	

登録番号	整理番号	調査区	グリッド	検出遺構	器種	石材	備考
3053	194	97D	IXE13a	SX01	石鏃	チャート	
3054	298	97BC	IXD9g	検II	石鏃	チャート	
3055	163	97D	IXD10t	SZ101	石鏃	チャート	
3056	317	97D	IXD8s	検III	石鏃	チャート	
3057	273	97BC	IXD2h	検II	石鏃	チャート	
3058	217	97BC	IXD10k	SZ01-SD01	石鏃	チャート	
3059	456	98	IXD8f	SB582-6	石鏃	チャート	
3060	488	98	IXD6o	SK594-1	石鏃	安山岩	
3061	474	98	IXD9s	SZ512南溝-1	石鏃	チャート	
3062	324	97D	IXD9r	検III	石鏃	チャート	
3063	537	98	IXD11q	SK713	石鏃	下呂石	
3064	461	98	IXD10i	SB553-2	石鏃	チャート	
3065	554	98	IXD14j	検V-33	石鏃	安山岩	
3066	242	97D	IXD11s	SK111	石鏃	石英	
3067	413	97BCD	IXD11s	検V	石鏃	チャート	
3068	50	97BCD	IXD9p	SB263	石鏃	チャート	
3069	277	97BC	IXD3f	検II	石鏃	チャート	
3070	493	98	IXD9h	SK662-1	石鏃	チャート	
3071	248	97D	IXD16n	SK126	石鏃	チャート	
3072	234	97D	IXD9r	SK103	石鏃	安山岩	
3073	183	97BC	IXD12n	SD103	石鏃	チャート	
3074	105	97BC	IXD7l	SD03	石鏃	チャート	
3075	370	97D	IXE14a	検III	石鏃	チャート	
3076	555	98	IXD14l	検V-37	石鏃	チャート	
3077	12	97BCD	IXD9q	SB202	石鏃	チャート	
3078	4	97BC	IXD9o	検II	石鏃	チャート	
3079	123	97BC	IXD6i	SD03	石鏃	安山岩	
3080	184	97BCD	IXD16q	SD103	石鏃	チャート	
3081	17	97BCD	IXD10k	SB206	石鏃	チャート	
3082	3	97BC	IXD5p	検II	石鏃	チャート	
3083	5	97BC	IXD13j	SD03	石鏃	下呂石	
3084	192	97BCD	IXD15q	SD502	石鏃	チャート	
3085	535	98	IXD11i	SZ509	石鏃	安山岩	
3086	210	97D	IXD12p	SZ101西周溝	石鏃	チャート	
3087	499	98	IXE12a	SK869-1	石鏃	下呂石	
3088	483	98	IXD10r	SD563-2	石鏃	チャート	
3089	259	97BCD	IXD14g	NR03-5層	石鏃	安山岩	
3090	401	97BCD	IXD13q	SB245	石鏃	チャート	
3091	33	97BCD	IXD13q	SB246	石鏃	安山岩	
3092	561	98	IXD15l	検V-38	石鏃	チャート	
3093	371	97D	IXD8s	検III	石鏃	チャート	
3094	551	98	IXD13p	検V-47	石鏃	下呂石	
3095	291	97BC	IXD7n	検II	石鏃	チャート	
3096	68	97BCD	IXD11k	SB289	石鏃	チャート	
3097	57	97BCD	IXD9r	SB270	石鏃	チャート	
3098	116	97BC	IXD10o	SD03	石鏃	チャート	
3099	385	97BCD	IXD9l	SB285	石鏃	チャート	
3100	350	97D	IXD12r	検III	石鏃	下呂石	
3101	69	97BCD	IXD11k	SB289	石鏃	チャート	
3102	399	97BCD	IXD13n	SB254	石鏃	チャート	
3103	266	97BC	VIII D19f	検II	石鏃	チャート	
3104	202	97D	IXD14q	SZ101南周溝	石鏃	下呂石	

石器出土地点一覧

登録番号	整理番号	調査区	グリッド	検出遺構	器種	石材	備考
3105	245	97D	IXD9s	SK116	石鏃	チャート	
3106	23	97BCD	IXD5l	SB224床面直上	石鏃	チャート	
3107	219	97BCD	IXD1i	SZ202墳丘(検V)	石鏃	チャート	
3108	421	97BC	IXD9n	検Ⅰ	石鏃	チャート	
3109	379	97BCD	IXD8o	SB280	石鏃	チャート	
3110	502	98	IXD13q	SK902-1	石鏃	黒曜石	
3111	42	97BCD	IXD12n	SB253	石鏃	チャート	
3112	78	97BCD	IXD6h	SB306	石鏃	チャート	
3113	296	97BC	IXD8o	検Ⅱ	石鏃	安山岩	
3114	288	97BC	IXD5o	検Ⅱ	石鏃	チャート	
3115	363	97D	IXE12a	検Ⅲ	石鏃	安山岩	
3116	383	97BCD	IXD8t	SB272	石鏃	チャート	
3117	237	97D	IXD11r	SK105	石鏃	チャート	
3118	191	97BCD	IXD16r	SD502	石鏃	チャート	
3119	560	98	IXD15l	検Ⅴ-43	石鏃	チャート	
3120	547	98	IXD13n	検Ⅴ-28	石鏃	チャート	
3121	467	98	IXD12t	SB572	石鏃	下呂石	
3122	70	97BCD	IXD10o	SB290	石鏃	チャート	
3123	360	97D	IXE11b	検Ⅲ	石鏃	チャート	
3124	25	97BCD	IXD11s	SB233	石鏃	チャート	
3125	563	98	IXD15n	検Ⅴ-48	石鏃	チャート	
3126	491	98	IXD5l	SK634-1	石鏃	下呂石	
3127	347	97D	IXD12t	検Ⅲ	石鏃	チャート	
3128	503	98	IXD11j	SK926-1	石鏃	チャート	
3129	412	97BCD	IXD8r	検Ⅴ	石鏃	チャート	
3130	236	97D	IXD11r	SK105	石鏃	チャート	
3131	492	98	IXD8h	SK643-1	石鏃	流紋岩	
3132	485	98	IXD6l	SK567-1	石鏃	下呂石	
3133	34	97BCD	IXD14q	SB247	石鏃	チャート	
3134	481	98	IXD12l	SD562-1	石鏃	下呂石	
3135	548	98	IXD12o	SK854	石鏃	チャート	
3136	489	98	IXD5k	SK634-1	石鏃	チャート	
3137	98	97BCD	IXD12m	SB401	石鏃	安山岩	
3138	1	97BC	IXD14j	検Ⅱ	石鏃	チャート	
3139	509	98	IXE10a	SZ508-1	石鏃	チャート	
3140	550	98	IXD13p	SD556-35	石鏃	チャート	
3141	2	97BC	IXD10n	検Ⅱ	石鏃	チャート	
3142	546	98	IXD13j	検Ⅴ-36	石鏃	チャート	
3143	404	97BCD	IXD14q	検Ⅳ	石鏃	下呂石	
3144	197	97BCD	IXD15j	SX115裏込部	石鏃	チャート	
3145	220	97BC	IXD2l	SK01	石鏃	下呂石	
3146	168	97D	IXD9s	SZ101	石鏃	下呂石	
3147	75	97BCD	IXD4h	SB300	石鏃	石英	
3148	515	98	IXD14q	P-1116-1	石鏃	チャート	
3149	44	97BCD	IXD11o	SB255	石鏃	チャート	
3150	21	97BCD	IXD5o	SB214	石鏃	下呂石	
3151	384	97BCD	IXD9m	SB285	石鏃	下呂石	
3152	552	98	IXD13r	検Ⅴ-19	石鏃	チャート	
3153	6	97BC	IXD8o	SD03	石鏃	チャート	アメリカ式
3154	332	97D	IXD11r	検Ⅲ	石鏃	安山岩	
3155	13	97BCD	IXD12s	SB203	石鏃	下呂石	石鏃転用
3156	24	97BCD	IXE11b	SB228	石鏃	チャート	石鏃転用
3157	285	97BC	IXD4n	検Ⅱ	石鏃	チャート	石鏃転用
3158	260	97BCD	IXD15g	NR03-5層	石鏃	チャート	石鏃転用
3159	278	97BC	IXD3g	検Ⅱ	石鏃	チャート	石鏃転用
3160	275	97BC	IXD2i	検Ⅱ	石鏃	チャート	石鏃転用
3161	539	98	IXD12m	検Ⅴ	石鏃	チャート	石鏃転用
3162	181	97D	IXD16r	SD103-2層	石鏃	チャート	石鏃転用
3163	216	97D	IXD11r	SZ101-SK107	石鏃	チャート	石鏃転用
3164	473	98	IXD8q	SD528-1	石鏃	チャート	石鏃転用
3165	52	97BCD	IXD9p	SB263	石鏃	チャート	石鏃転用
3166	701	97D	IXD10t	SZ101	石鏃	チャート	
3167	711	98	IXD9k	SB550-1	石鏃	チャート	
3168	700	97BC	IXD7j	SD03	石鏃	チャート	
3169	697	97BCD	IXD10j	SB333	石鏃	チャート	
3170	706	97BC	IXD9m	検Ⅱ	石鏃	チャート	
3171	712	98	IXD9g	SB538	石鏃	チャート	

登録番号	整理番号	調査区	グリッド	検出遺構	器種	石材	備考
3172	707	97BC	IXD8k	検Ⅰ	石鏃	チャート	
3173	699	97BC	IXD11n	SD03	石鏃	下呂石	
3174	708	97BC	IXD11g	検Ⅱ	石鏃	チャート	
3175	702	97D	IXD12t	SZ101	石鏃	下呂石	
3176	695	97BC	IXD14o	SB240	石鏃	チャート	
3177	694	97BCD	IXD13s	SB234	石鏃	チャート	
3178	696	97BCD	IXD9s	SB272	石鏃	チャート	
3179	709	97BCD	IXD15o	SB250	石鏃	チャート	
3180	713	98	IXD15o	検Ⅴ	石鏃	チャート	
3181	703	97BCD	IXD15q	SD502	石鏃	チャート	
3182	698	97BCD	IXD5n	SB388	石鏃	チャート	
3183	704	97BCD	IXD15h	NR03-4層	石鏃	安山岩	
3184	710	97BCD	VIII D20l	カクラン	石鏃	チャート	
3185	705	97BCD	IXD1h	SZ202西溝-1層	石鏃	チャート	
3186	957	97D	IXD9s	SZ101	石匙	チャート	
3187	958	97BCD	IXD3g	SB313	石匙	黒曜石	
3188	682	97BCD	IXD11m	SB294	石匙	黒ノミ他	
3189	2028	98	IXD7f	SB576-1	石匙	チャート	
3190	2025	97BC	IXD15k	SD08	石匙	チャート	
3191	2026	97BC	IXD4o	検Ⅱ	石匙	チャート	
3192	2029	98	IXD11n	検Ⅴ	石匙	チャート	
3193	2095	98	IXD13s	検Ⅴ	ヘラ様石器	チャート	
3194	2101	97BC	IXD12l	検Ⅰ	ヘラ様石器	チャート	
3195	2098	97D	IXD11s	検Ⅲ	ヘラ様石器	チャート	
3196	2526	97BCD	IXD6h	SB306	ヘラ様石器	チャート	
3197	2525	97BCD	IXD10l	SB289	ヘラ様石器	チャート	
3198	2511	98	IXD3m	検Ⅴ	ヘラ様石器	チャート	
3199	626	97D	IXD15t	検Ⅲ	ヘラ様石器	安山岩	
3200	422	97BC	IXD10l	検Ⅰ	ヘラ様石器	チャート	
3201	2512	98	IXD11g	検Ⅴ	ヘラ様石器	チャート	
3202	633	97BCD	IXD12o	SB253	ヘラ様石器	下呂石	
3203	55	97BCD	IXD9r	SB268	石匙様石器	チャート	
3204	280	97BC	IXD3n	検Ⅱ	石匙様石器	チャート	
3205	375	97BCD	IXD5j	検Ⅳ	石匙様石器	チャート	
3206	504	98	IXD5n	SZ501北溝-1	石匙様石器	チャート	
3207	180	97D	IXD16q	SD103-2層	石匙様石器	チャート	
3208	201	97D	IXD9p	SZ101西溝	石匙様石器	チャート	
3209	19	97BCD	IXD11r	SB207	石匙様石器	チャート	
3210	94	97BCD	IXD9i	SB374	石匙様石器	チャート	
3211	283	97BC	IXD4k	検Ⅱ	石匙様石器	チャート	
3212	223	97BCD	-	SK07	石匙様石器	チャート	
3213	56	97BCD	IXD9r	SB268	石匙様石器	チャート	
3214	173	97D	IXD15q	SD103-1層	石匙様石器	チャート	
3215	39	97BCD	IXD14p	SB250	石匙様石器	チャート	
3216	85	97BCD	IXD13k	SB335	石匙様石器	チャート	
3217	160	97D	IXD10s	SZ101	石匙様石器	チャート	
3218	125	97BC	IXD13m	SD03	石匙様石器	チャート	
3219	292	97BC	IXD7o	検Ⅱ	石匙様石器	チャート	
3220	97	97BCD	IXD4n	SB396	石匙様石器	チャート	
3221	586	97D	IXD10r	SK102	石匙様石器	チャート	
3222	594	97BCD	IXD8o	SB283	石匙様石器	チャート	
3223	585	97D	IXD10t	SD101	石匙様石器	チャート	
3224	300	97BC	IXD9o	検Ⅱ	打製 その他	チャート	
3225	446	97BC	IXD13j	SD03	打製 その他	チャート	
3226	640	97BCD	IXD15k	SB373	打製 その他	チャート	
3227	340	97D	IXD12o	検Ⅲ	打製 その他	チャート	
3228	621	97D	IXD4i	検Ⅱ	打製 その他	チャート	
3229	618	97D	IXD9t	SZ101北周溝	打製 その他	チャート	
3230	130	97BC	IXD12k	SD03	打製 その他	チャート	
3231	582	97BC	IXD12n	SD03	打製 その他	チャート	
3232	647	97BCD	IXD11t	検Ⅳ	打製 その他	チャート	
3233	359	97D	IXE11a	検Ⅲ	打製 その他	チャート	
3234	598	97BCD	IXE11a	検Ⅳ	打製 その他	チャート	
3235	570	98	IXD11n	検Ⅴ	打製 その他	チャート	
3236	689	97D	IXD11s	検Ⅲ	打製 その他	チャート	
3237	593	97BCD	IXD9n	SB280	打製 その他	チャート	
3238	361	97D	IXE11a	検Ⅲ	打製 その他	チャート	

石器出土地点一覧

登録番号	整理番号	調査区	グリッド	検出遺構	器種	石材	備考
3239	2031	97BCD	IXD16n	SB317	打製 その他	チャート	
3240	688	97D	IXE11a	SX01	打製 その他	チャート	
3241	658	98	IXD15l	検V	打製 その他	チャート	
3242	599	98	IXD6j	SK586	打製 その他	チャート	
3243	508	98	IXD10q	SZ507北溝	打製 その他	チャート	
3244	409	97BCD	IXD16n	検IV	打製 その他	チャート	
3245	2030	98	IXD8g	検V-2	打製 その他	チャート	
3246	1087	97BCD	IXD15q	トレンチ	打製 その他	チャート	
3247	321	97D	IXD8s	検III	打製 その他	チャート	
3248	2062	97BC	IXD7m	SD03	打製 その他	安山岩	
3249	2064	97BCD	ⅧD20l	検IV	打製 その他	下呂石	
3250	433	97BCD	IXD16j	NR02-1層	打製 その他	下呂石	
3251	684	97D	IXD10r	SZ101-SK104	尖頭器	チャート	
3252	137	97BC	IXD9n	SD03	尖頭器	チャート	
3253	312	97BC	IXD13i	検II (谷)	尖頭器	珪化木	
3254	353	97D	IXD13s	検III	尖頭器	チャート	
3255	564	98	IXD13m	検V-39	尖頭器	チャート	
3256	402	97BCD	IXD14q	SB359	尖頭器	チャート	
3257	462	98	IXD11m	SB561-1	尖頭器	チャート	
3258	157	97D	IXD10r	SZ101	尖頭器	チャート	
3259	388	97BCD	IXD9r	SB268	尖頭器	チャート	
3260	687	97BCD	IXD3j	検IV	尖頭器	チャート	
3261	2154	97BCD	IXE10a	SB221	尖頭器	安山岩	
3262	2060	98	IXD8r	SZ505西溝-1	尖頭器	安山岩	
3263	2150	97BCD	IXD15l	検IV	尖頭器	安山岩	
3264	2046	97BCD	ⅧD18f	検IV	刃器	サヌカイト	
3265	2034	97BCD	IXD10f	SB343	刃器	サヌカイト	
3266	2506	98	IXD10l	検V	刃器	安山岩	
3267	2053	97D	IXD16q	SD103-2層	刃器	チャート	
3268	2489	97BC	IXD14j	検II	刃器	チャート	
3269	2508	98	IXD11s	検V	刃器	安山岩	
3270	2505	98	IXD11n	検V	刃器	チャート	
3271	2549	97BCD	IXD12j	SB327	刃器	チャート	
3272	2038	97BC	ⅧD20g	検I	刃器	チャート	
3273	2040	97BC	IXD10k	SK09	刃器	チャート	
3274	2650	97BCD	IXD6l	SB405	刃器	下呂石	
3275	2654	97BC	IXD7j	SD03ベルト	刃器	チャート	
3276	2047	97BCD	IXD15-16p	SD502	刃器	チャート	
3277	2032	97BCD	IXE10a	SB231	刃器	チャート	
3278	2045	97BCD	IXD14f	NR03-5層	刃器	サヌカイト	
3279	2036	97BC	IXD9h	検I	刃器	チャート	
3280	2497	97D	IXD11r	検III	刃器	チャート	
3281	2627	97BCD	IXD8g	SB302	刃器	チャート	
3282	2624	98	IXD9n	検V	刃器	チャート	
3283	2629	97D	IXE11b	SX101	刃器	チャート	
3284	2711	98	IXD4h	SK537	刃器	下呂石	
3285	2203	97BCD	IXD14f	NR03-5層	刃器	泥岩	
3286	2152	98	IXD10g	検V	刃器	安山岩	
3287	2156	97BCD	IXD8p	検IV	刃器	泥岩	
3288	2052	97D	IXD12q	検III	刃器	泥岩	
3289	2147	97BCD	IXD4k	SB308-8	刃器	泥岩	
3290	2164	98	IXD8m	SK744	刃器	安山岩	
3291	2155	97BCD	IXD15p	SD502	刃器	安山岩	
3292	2123	97BCD	IXD11o	検IV	刃器	安山岩	
3293	2153	97BC	IXD8p	検II	刃器	安山岩	
3294	2166	97BCD	IXD15q	SD502	刃器	安山岩	
3295	2180	98	IXD10s	SD563	刃器	安山岩	
3296	2057	98	IXD9k	SB550	刃器	安山岩	
3297	2193	97BC	ⅧD20f	SX03-27	刃器	安山岩	
3298	2059	98	IXD3l	SB541	刃器	泥岩	
3299	2061	97BC	IXD14k	SD03	刃器	泥岩	
3300	2126	97BC	IXD7j	SD03	刃器	泥岩	
3301	2234	97BCD	IXD12j	検IV	刃器	安山岩	
3302	2204	98	IXD6h	SB518	刃器	安山岩	
3303	2235	97BCD	IXD15m	トレンチ	刃器	安山岩	
3304	2119	97BC	ⅧD19g	検II	刃器	安山岩	
3305	2130	97BCD	IXD15q	SD502	刃器	安山岩	

登録番号	整理番号	調査区	グリッド	検出遺構	器種	石材	備考
3306	2382	97BCD	IXD12h	SB341	刃器	安山岩	
3307	2201	97BCD	IXD2f	SZ201南溝	刃器	安山岩	
3308	2226	97BCD	IXD4l	SB224	刃器	泥岩	
3309	2236	98	IXD5m	SB533	刃器	砂岩	
3310	2270	98	IXD11t	SK725	刃器	安山岩	
3311	2394	97BCD	IXD10r	検IV	刃器	安山岩	
3312	2342	97D	IXD15q	SD103-2層	刃器	安山岩	
3313	2148	97BCD	IXD11s	SB334	刃器	安山岩	
3314	2356	97BC	IXD14n	SD03	刃器	安山岩	
3315	2041	97BC	ⅧD20m	SD07	刃器	泥岩	
3316	2165	97BCD	IXD10m	SB285	刃器	安山岩	
3317	2107	98	IXD11p	SK730	刃器	安山岩	
3318	2174	97BCD	IXD10f-g	SB352	刃器	泥岩	
3319	2055	97D	IXD9r	検III	刃器	砂岩	
3320	2413	97BCD	IXD4m	SB223	刃器	安山岩	
3321	2149	97BCD	IXD13g	NR03-5層	刃器	安山岩	
3322	2452	98	IXD9p	SK784	刃器	安山岩	
3323	2135	97D	IXD8s	SZ101	刃器	泥岩	
3324	2143	97BC	IXD1f	トレンチ	刃器	安山岩	
3325	2145	97BCD	IXD4i	SB300	刃器	泥岩	
3326	2366	98	IXD10s	SD563-3	刃器	安山岩	
3327	2381	97BCD	IXD8n	SB280	刃器	泥岩	
3328	2299	97BCD	IXD4i	SB217	刃器	安山岩	
3329	2317	97BCD	IXD13n	SB254	刃器	泥岩	
3330	2187	97BCD	IXD15g	NR03-5層	刃器	ホルンフェルス	
3331	2134	97D	IXD8q	SZ101北	刃器	泥岩	
3332	2112	97BC	IXD12n	SD03	刃器	泥岩	
3333	2110	97BC	IXD6l	SD03	刃器	安山岩	
3334	2117	98	IXD15k	検V	刃器	安山岩	
3335	2109	98	IXD10j	検V	刃器	安山岩	
3336	2108	97BCD	IXD11i	SB332	刃器	泥岩	
3337	2111	97BC	IXD11o	SD03	刃器	泥岩	
3338	2170	97BC	IXD1g	SD06	刃器	泥岩	
3339	2289	97D	IXD16q	SD103-1層	刃器	安山岩	
3340	2346	97BCD	IXD15p	SD502	刃器	安山岩	
3341	2253	97D	IXD16q	SD103-1層	刃器	安山岩	
3342	2353	97BCD	IXD13g	NR03	刃器	泥岩	
3343	2387	97BCD	IXD15q	SD502	刃器	安山岩	
3344	2324	97BCD	IXD15j	SX115(裏込部)	刃器	安山岩	
3345	2290	97D	IXD16p	SD103-2層	刃器	安山岩	
3346	2281	97BC	IXD11h	SD03	刃器	安山岩	
3347	2120	98	IXD11l	SZ504東溝	刃器	安山岩	
3348	2121	98	IXD10i	SZ509	刃器	安山岩	
3349	2384	97BCD	IXD15k	SB373	刃器	安山岩	
3350	2417	97BCD	IXD15p	SD502	刃器	安山岩	
3351	2310	97BCD	IXD16j	NR02-1層	刃器	泥岩	
3352	2457	97BC	IXD8o	検II	刃器	ホルンフェルス	
3353	2396	97BCD	IXD8r	SB270	刃器	安山岩	
3354	2388	97BCD	IXD15p	SD502	刃器	安山岩	
3355	2225	97D	IXD16p	SD103ベルト-2層	刃器	安山岩	
3356	880	97BCD	IXD13f	NR03-5層	打製石斧	ホルンフェルス	
3357	872	97BCD	IXD14g	NR03-5層	打製石斧	ホルンフェルス	
3358	878	97BCD	IXD15g	NR03-6層	打製石斧	安山岩	
3359	873	97BC	IXD9m	SB291	打製石斧	泥岩	
3360	2083	97BC	ⅧD20l	SD07	石核	泥岩	
3361	2081	97BCD	IXD9t	SB273	石核	ホルンフェルス	
3362	2072	97BC	IXD9p	検II	石核	泥岩	
3363	2092	98	IXD8j	検V	石核	流紋岩	
3364	2068	97BCD	IXD14g	NR03	石核	泥岩	
3365	2078	97D	IXD16p	SD103-2層	石核	ホルンフェルス	
3366	912	98	IXD15m	検V	敲打石類	泥岩	
3367	1080	98	IXD10i	検V	石核	安山岩	
3368	2074	97BC	-	旧トレンチ	石核	泥岩	
3369	2011	98	IXD10n	SK748-1	石庖丁	紅簾石片岩	
3370	2001	97BCD	IXD7r	SB275	石庖丁	緑色片岩	
3371	2009	98	IXE13a	SD570	石庖丁	緑泥石片岩	
3372	2000	98	IXD11j	SK935-2	石庖丁	結晶片岩	

石器出土地点一覧

登録番号	整理番号	調査区	グリッド	検出遺構	器種	石材	備考
3373	2014	97D	IXD10s	SK119-2	石庖丁	結晶片岩	
3374	828	97BC	IXD3i	SD07	磨製石斧	河原石	
3375	823	97BC	IXD4j	SD07	磨製石斧	河原石	
3376	814	98	IXD7n	検V-5	磨製石斧	河原石	
3377	825	97BCD	IXD16k	NR02-1層	磨製石斧	玄武岩	
3378	819	97BCD	IXD10t	SB273	磨製石斧	河原石	
3379	824	98	IXD13m	SK815-3	磨製石斧	安山岩	
3380	826	97BC	IXE3e	検II	磨製石斧	河原石	
3381	820	97BCD	IXD10l	SB289	磨製石斧	河原石	
3382	827	97BCD	IXD5l	SB224	磨製石斧	河原石	
3383	829	97BCD	IXD9r	SB202	磨製石斧	緑色凝灰岩	
3384	818	97BCD	IXD5h	SB218	磨製石斧	河原石	
3385	816	97BCD	IXD2k	SB362	磨製石斧	河原石	
3386	849	97BCD	IXD11l	SB284	磨製石斧	河原石	
3387	846	98	IXD13q	SD566	磨製石斧	河原石	
3388	815	97BCD	IXD7n	SB377	磨製石斧	河原石	
3389	848	97BCD	IXD15f	NR03-6層	磨製石斧	玄武岩	
3390	853	98	IXD3j	SB501-P01-1	磨製石斧	河原石	
3391	833	97BCD	IXD11j	SB326	磨製石斧	河原石	
3392	834	97BC	IXD2i	検II	磨製石斧	河原石	
3393	840	97D	IXD13t	検III	磨製石斧	河原石	
3394	836	97BC	IXD7k	SD03	磨製石斧	河原石	
3395	817	98	IXD5k	SB512	磨製石斧	河原石	
3396	844	97BC	IXD5o	検II	磨製石斧	黒色片岩	
3397	845	97D	IXD13t	SK115	磨製石斧	河原石	
3398	842	97BCD	IXD17n	NR02-1層	磨製石斧	河原石	
3399	839	98	IXD7f	SB528-2	磨製石斧	ホソフェルス	
3400	678	97BCD	IXD6m	SB402	磨製石鏃	緑色凝灰岩	
3401	677	97BCD	IXD9o	SB264	磨製石鏃	緑色凝灰岩	
3402	673	97BC	IXD11n	検I	磨製石鏃	泥岩	
3403	672	97BC	VIII D20f	SX03	磨製石鏃	安山岩	
3404	676	97BC	IXD6o	検II	磨製石鏃	安山岩	
3405	679	98	IXD15o	検V-41	磨製石鏃	ホソフェルス	
3406	681	97BCD	IXD13h	SD10	磨製石鏃	緑泥石片岩	
3407	671	97BC	IXD10n	検II	磨製石鏃	泥岩	
3408	680	97D	IXE11b	検III	磨製石鏃	緑色凝灰岩	
3409	675	97BC	IXD8p	検II	磨製石鏃	泥岩	
3410	674	97BC	IXD11g	検II (谷)	磨製石鏃	黒色片岩	
3411	961	97BCD	IXD9r	SB268	磨製石剣	泥岩	
3412	960	97BCD	IXD14p	SB250	磨製石剣	安山岩	
3413	885	98	IXD13o	検V	環状石斧	ハンレイ岩	
3414	886	97BCD	IXD11r	SB334	環状石斧	カンラン岩	
3415	953	97D	IXD15t	検III	石錘	花崗岩	
3416	954	98	IXD8q	SK774-1	石錘	花崗岩	
3417	955	97BC	IXD10o	検IV	石棒	緑ノミ(外帯)	
3418	956	98	IXD9g	SD526-2	石棒	蛇紋岩(外帯)	

登録番号	整理番号	調査区	グリッド	検出遺構	器種	石材	備考
3419	948	98	IXD9r	SB565	磨石	花崗岩	
3420	946	97BCD	IXD15o	NR02	磨石	花崗岩	
3421	949	97BCD	IXD13f	NR03-5層	磨石	花崗岩	
3422	950	97BC	IXD16i	NR03	磨石	花崗岩	
3423	947	97BCD	IXD16n	検IV	磨石	花崗岩	
3424	893	98	IXD8f	SB576-3	敲石類	花崗岩	
3425	895	97BC	VIII D19i	検II	敲石類	花崗岩	
3426	911	97BCD	IXD15g	NR03-5層	敲石類	花崗岩	
3427	909	97BC	IXD15h	NR03-3層	敲石類	花崗岩	
3428	917	98	IXD7i	SK565	敲石類	砂岩	
3429	899	97BCD	IXD9n	SB291-3	敲石類	花崗岩	
3430	915	98	IXD11p	SB563	敲石類	花崗岩	
3431	922	97BCD	IXD15h	NR03-5層	敲石類	花崗岩	
3432	910	97BCD	IXD14g	NR03-5層	敲石類	花崗岩	
3433	903	97BC	IXD7k	SD03	敲石類	花崗岩	
3434	919	98	IXD11k	SK755	敲石類	花崗岩	
3435	920	98	IXD11l	SD574	敲石類	花崗岩	
3436	906	97D	IXD16q	SD103-2層	敲石類	花崗岩	
3437	902	97BC	IXD7o	SD03	敲石類	花崗岩	
3438	905	97BCD	IXD12f	SD09	敲石類	花崗岩	
3439	921	98	IXD15k	検V-52	敲石類	花崗岩	
3440	904	97BCD	IXD13i	SD09	敲石類	花崗岩	
3441	928	97BC	IXD8p	SD03	砥石	花崗岩	
3442	931	97BCD	IXD5k	SB312	砥石	砂岩	
3443	932	97BCD	IXD10p	SB263	砥石	砂岩	
3444	940	97BCD	IXD15q	SD502	砥石	結晶片岩	
3445	945	97BCD	IXD13o	SB205	砥石	結晶片岩	
3446	934	97BCD	IXD15m	SB413	砥石	結晶片岩	
3447	933	97BCD	IXD12l	SB298	砥石	凝灰岩	
3448	937	98	IXD8g	SK749	砥石	結晶片岩	
3449	935	97BCD	IXD13o	SB205	砥石	結晶片岩	
3450	952	98	IXD11q	検V-51	砥石	花崗岩	
3451	985	98	IXE10a	トレンチ02-1	管玉	溶結凝灰岩	
3452	984	98	IXD12o	検V-16	管玉	溶結凝灰岩	
3453	978	98	IXD8h	SB523-1	管玉	溶結凝灰岩	
3454	970	97BCD	IXD11p	SB261	管玉	溶結凝灰岩	
3455	968	97BCD	IXD7q	SB211	管玉	溶結凝灰岩	
3456	974	97D	IXD11s	SK111	管玉	溶結凝灰岩	
3457	977	98	IXD4g	SB503-1	管玉	溶結凝灰岩	
3458	979	98	IXD8f	SB528-7	管玉	溶結凝灰岩	
3459	964	97BCD	IXD13n	SB254	勾玉	ひすい	
3460	963	98	IXD9s	検V-8	ガラス小玉	—	
3501		98		検V	舌	ホソフェルス	
3502	959	97BC	IXD3i	検I	磨製 その他	緑色凝灰岩	

木製品

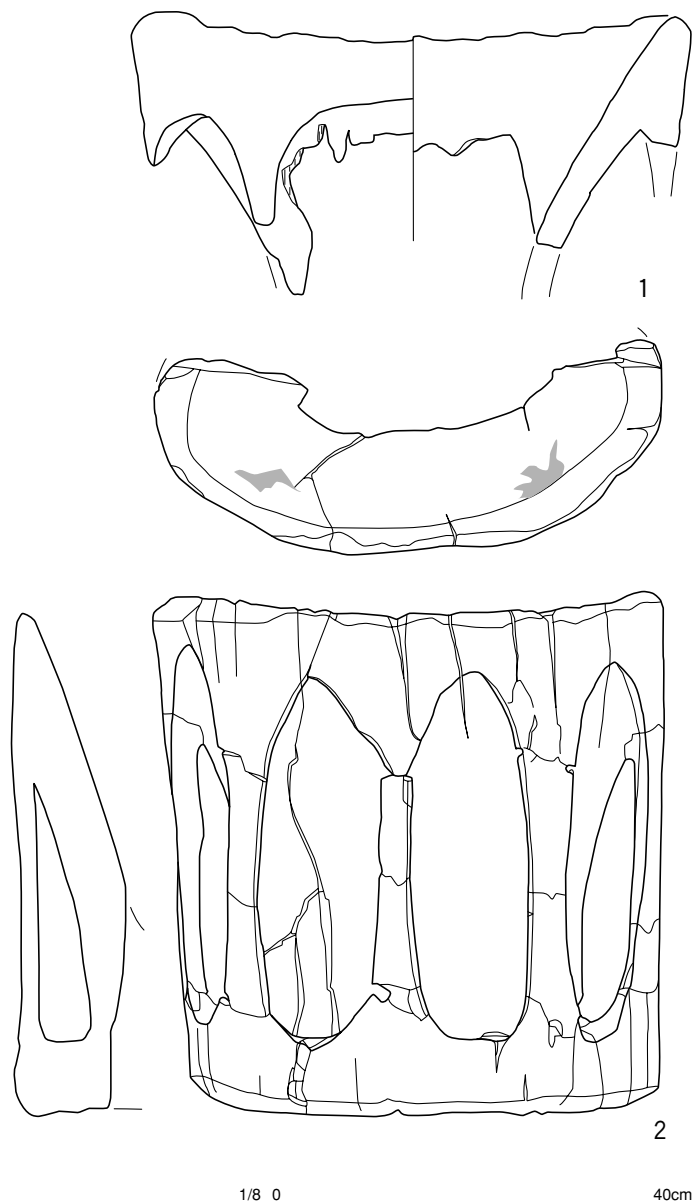
川原遺跡では、主として谷の周辺から木製品が出土している。時期はおおまかに弥生中期後半と、弥生後期～古墳前期に分けられる。まず、第一分冊では弥生中期後半に属する2点についてのみ記述し、他は第二分冊で扱うこととしたい。

弥生中期後半の木製品は、いずれも SD103 から出土している。

4001 は大型の臼で、胴部に紡錘形の透かしが6ヶ所入る把手臼とよばれる形態のものである³⁾。器高は40.0cmあり、口縁端部からくびれ部までの高さが32.7cmで、脚部の高さは7.3cmである。口縁部の長径は40.8cm、短径は30.0cmで、底部は長径35.0cm、短径26.0cmの楕円形を呈する。樹種はクスノキの芯持ち材で、芯の部分はすでに欠損している。

本例と同様に胴部に紡錘形の透かしをもつ把手臼は、愛知県西春日井郡清洲町の朝日遺跡⁴⁾で、積み重ねて井戸枠に転用された臼のうち3点と、静岡県浜松市角江遺跡⁵⁾の自然流路出土の2点が確認でき、時期はいずれも弥生中期後半である。樹種は朝日遺跡出土例のうち1点と角江遺跡の2点がともにクスノキである。朝日遺跡出土例はいずれも胴部下半が欠損しているため、全形は不明だが、角江遺跡出土の2例は透かしが8ヶ所で、口縁部直径と器高が50cmを超える点を除けば、川原遺跡出土例ときわめて良く似ている。このほか、静岡県静岡市有東遺跡⁶⁾からもやはり弥生中期後半の、長方形の透かしを入れた把手臼が出土している。しかしながら、三重県以西の地域からはこのような透かし入りの把手臼の出土例がほとんどみられないことから、弥生中期後半における愛知県西部から静岡県東部にかけての地域的特徴といえるかもしれない。

4002 は梯子である。残存長は147.1cm、最大幅が19.6cm、最大厚は16.5cmである。上端部が欠損しており、下端部は両側面を削り込んで尖り気味に仕上げる。ステップは現状で4段を数える。樹種はモミの芯持ち材である。



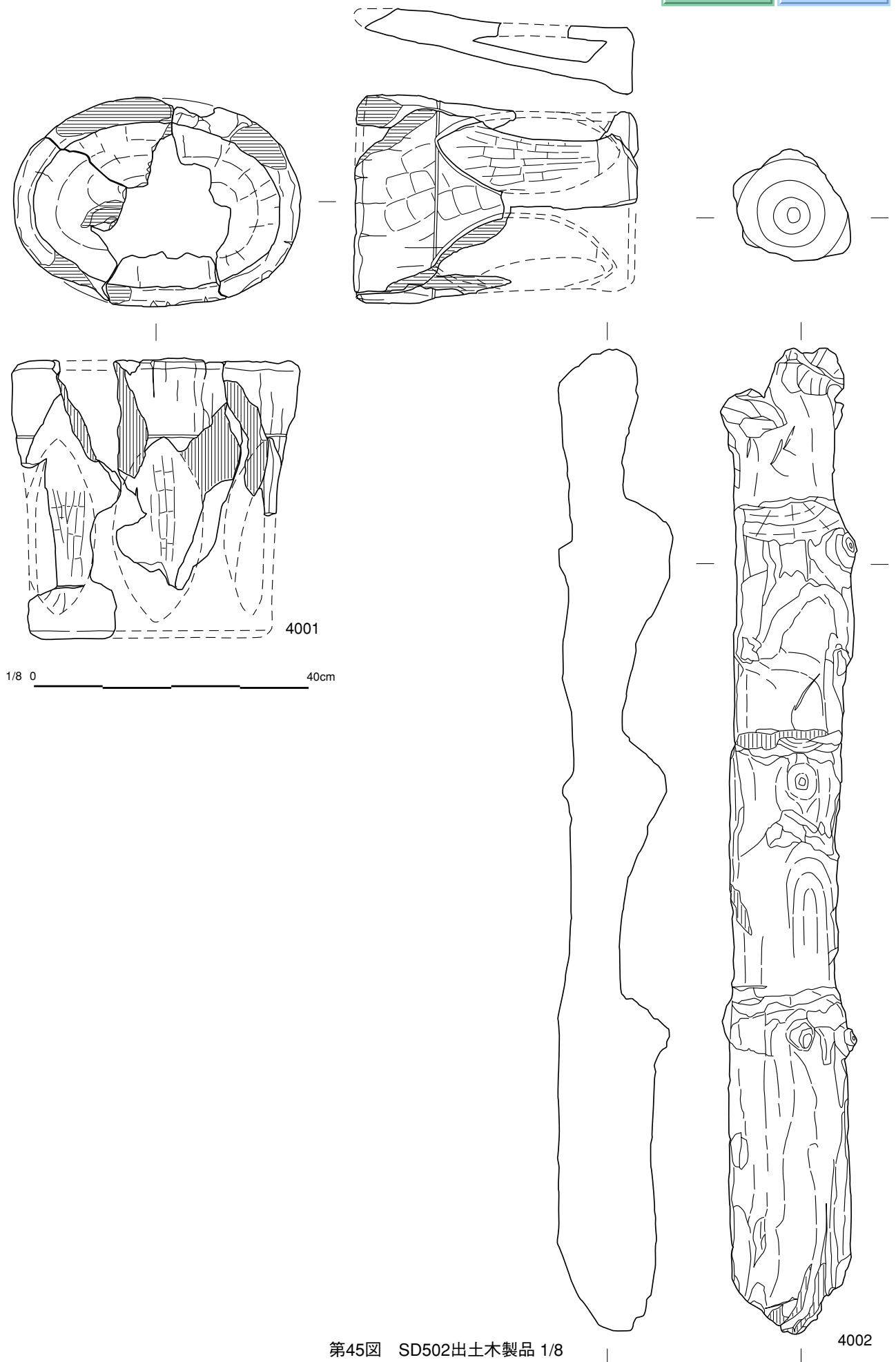
第44図 伊勢湾地方の把手臼
(1. 朝日遺跡 2. 角江遺跡)

3) 村上由美子「杵と臼の変遷について」、『滋賀考古』第15号、滋賀考古学研究会、1996

4) (財)愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡Ⅲ』、1992

5) (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所『角江遺跡Ⅱ 遺物編2(木製品)』、1996

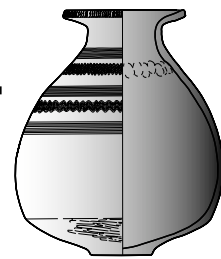
6) 日本考古学協会『登呂(本編)』、1954



第45図 SD502出土木製品 1/8

4002

付論1

矢作川流域における
弥生中期土器編年の再検討

● 序 言 ●

矢作川流域における弥生遺跡の発掘調査のうち、埋蔵文化財行政に関係する部分ではこれまで愛知県埋蔵文化財センター、吉良町教育委員会、西尾市教育委員会、安城市教育委員会、豊田市教育委員会、岡崎市教育委員会、足助町教育委員会などいくつかの機関によって行われてきた。また、水系は異なるが、西接する猿渡川流域でも知立市教育委員会によって調査が行われてきている。

これら多くの発掘調査は、その成果が関係機関によって『〇〇遺跡』『〇〇遺跡発掘調査報告書』という形式で公表されることによりその終結をみるわけだが、なお一部ではあるが長期にわたる未報告例もある。これは、発掘調査そのものが、何か考古学的な課題を解決するという目的にそって行われるのではなく、土木・建設工事などによって破壊される遺跡の記録保存を主眼に緊急避難的に行われているという体制が一般化するなかで、財政事情などによって整理・報告を迅速に進めることが難しい局面がしばしば生じているということであろうか。しかし、一般論として言えば、こうしたことは何も緊急発掘ばかりではなく、学術的であるはずの史跡整備関係調査でも、複合遺跡の場合においては焦点が当てられる時代以外について十分な報告がされない場合もあることと大きな違いはない。それは程度の差であって、問題は同根である。

このような発掘調査のおかれた状況において、その成果を単なる〈報告〉にとどめることなく、課題を的確に把握し〈研究〉にまで高めて報告内容をより深めることは、条件が十分に整っているか、報告者の意識が高くない限り難しい。むしろ、「事実」報告を行うことさえ至難である場合が少な

くないのが現状である。

「事実」と一口に言っても、関係機関内部の調査担当者や調査関係者、その外部にあって調査情報の入手に努める研究者や一般の人々など、それぞれの立場によって「事実」の受け取り方はさまざまである。

調査担当者は発掘調査を直接に指揮し、内容・成果に対して責任を負う。当該の「事実」を把握する立場にある点で、もっとも重要な位置にあるだけでなく、ある意味特権的でさえある。おおかたの調査担当者は客観的な「事実」を明らかにしようと努力を傾注するのだが、ややもすると独断に陥る可能性がある。自らのよって立つ基準——これ自体を自ら確立したのではなく、多くの場合には担当者として一本立ちするまでの学生時代を含む道程初期に与えられる場合が多い——に隷従して自己完結させることさえまま認められる。また、担当者そのものに果して適性があるのかどうかという問題もある。

調査関係者は直接現場に足を運ぶことが担当者に比べて少なく、担当者からの情報提供に頼らざるを得ないという限界がある。そのために入手し得る情報量はいきおい少なくなる。なかなか「生の事実」に肉薄することは困難である。一定のバイアスがかかっている、その意味で疑似的な「事実」を把握するにとどまる。

外部の人々は、自発的に調査に参加する以外に、よほどの努力をしない限り生の情報は入手できない。「擬似的な事実」でさえ入手は難しいだろう。報告書が刊行されるまでは、せいぜい人間関係を頼りに断片的な情報の入手に努力するのみである。ここに至れば「事実」の共有はまず不可能だろう。一般の研究者はまさに「事実」の外側

に存在するとさえ言えよう。

このような「事実」をとりまく周圈的情報格差はどのように乗り越えられるべきであろうだろうか。

建前上は報告書において共有されるべく「事実」が報告されることになる。しかし、すでに述べたように「事実」そのものがその実いたって曖昧なのである。しかも現状のように、どのようなかたちであれ最終的に報告されることが期待される中では、統一した基準による「事実」の整備など不可能に近いように思えてくる。

そうした状況のなかで流通する「事実」とは何かといえ、まず遺物に関する部分ということになろう。遺物はもちろんその属す文脈を抜きにしては価値も著しく低下するのだが、多くの場合には一見それ自体で存在するように見えること、それゆえに独立して扱われ易いことが相俟って、遺物そのものがあたかも当初から信頼度が高いかのように扱うわれわれの習性をより強化することにつながっている。要は安心できるということか。以上はいささか悲観的な観方ではあるが、卑近な例で言えば報告書に掲載されている実測図の精度のばらつきがなお解消されていないこと、しかも客観性の確保とは無関係かつ無意味な数十年前から何ら変わらない表現法が何故か細々と存続していることのなかに憂鬱の種がある。

このことが表しているのは、遺物をめぐる「事実」にも相当のブレがあるということである。報告書作成に至る条件・過程、そして報告書の体裁がその「事実」「価値」に大きな影響を与えていると言わざるを得ない。

遺構についてはどうだろうか。もっとも重要だとわたしが思う遺構・堆積環境などの遺跡情報の多くは、調査段階にすでに不十分なものになっていることが多い。また遺物と違って、遺構の場合には遺跡の遺存状況・調査条件・担当者の力量など、根本的な影響を与える要因がことのほか多い。

これに関しては私もけっして例外ではなく、申し訳無いことだが反省材料にことかかないのが実情だ。この点で深く反省している。

報告書とは、当然のことながら客観的でなければならないけれども、全くの匿名では無価値である。少なくとも、だれが、どのような条件で、何を指して発掘調査し、それをどのような意図に基づいて、どういった条件・環境のもとで報告したのか、そして調査主体・機関はそれに対してどのように関係したのか、などが問われよう。この意味で「わたしは客観的な報告書作成に努めそれを実現した」と言い切れるとするなら、そのことははからずも没個性を表明しているに過ぎないのであり、まさに無価値ということではないか。

いずれにしても、主観・客観のせめぎあい報告書に緊張感を生み出し、それを価値あるものにする。正しい手続きは重要であり必要であるが、それはなにも「行政的に」ということではないだろう。多少のプラスマイナスはあったとしても遺跡の価値に焦点を結ぶことができたもの、それが価値ある報告書ではないか。わたしとしてはこのように考えたい。

さて、前置きが長くなった。急いで本題に移ろう。以下では矢作川流域における弥生中期の土器編年をめぐる諸課題の一部について検討を加えることにしたい。

●● いわゆる「瓜郷式」の前後をめぐる二、三の問題 ●●

いうまでもなく「瓜郷式」は三河東部の豊川下流域に所在する豊橋市瓜郷遺跡出土資料を標式として設定された概念である。通常は該当する土器群の名称として使用されているが、年代表記として用いられる傾向が強い¹⁾。

「瓜郷式」概念はその設定当初から曖昧であり、その後も型式学的な特徴に基づくというよりも、ただ単に当該期の資料を名付けるために用いられてきたきらいがある。それは、標式となった瓜郷

1) 久永春男氏は一般書や報告書のあとがきで新しく型式を提示することが多かったが、その中で「瓜郷式」は珍しく正報告を踏まえたものであった。

遺跡出土資料のそのほとんどが破片であり、形や紋様の全体像がわからなかったからである。そのためもあり、瓜郷式として一括されてきた資料体の中身については、その提示以後十分な吟味がなされてこなかった。むしろ、十分な吟味をしようにもできなかったというのが実態であろう。

そのなかで、贅元洋氏による瓜郷式土器の検討は正面から取り組んだ唯一のものといえる(贅1988)。特に長頸壺・細頸壺を祖上にのせて成形技法を中心に分析し、西日本の弥生土器に共通する特徴を明確にした点が評価される。ただ、結論において瓜郷式の生成過程に他地域の影響が認められるという以上に、集団移住を伴う重大な転換点を内包したというところにまで及んでおり、それがわたしには土器論を超えてしまっているように思え、納得がいかない部分が残った。

瓜郷式に関わる問題は、第一に瓜郷式が先行する在地の土器の完全な延長であるとはいえないこと、第二に瓜郷式分布圏内において他地域からの搬入品が決して多くはなく、よく問題にされる貝田町式土器 — その多くは細頸壺であるが — の類似品にしてもだいたい表現的部分の模倣(「忠実な模倣品」)であって、製作・調整技法などの基層部分は在地の伝統的な範疇に含まれることについてどのように理解するのか、という点にまとめることができる。

たとえば、紅村弘氏は瓜郷式についてあくまで条痕紋系土器からストレートに変化してきたとするが、それでは器種組成や<折衷形>の存在を説明できない(紅村1964)。瓜郷式が三河地方を主たる分布域とし限定されるならば、前段階との格差はかえって際立つことになる。狭い地域のなかで独立して変化したとみるよりは、少なくとも条痕紋系土器全体の広がりの中での分岐の方向と、それを経過して後の相互作用のなかで、器種組成が形成されたと考えるほうが、その複雑な様相を理解する上で相応しいと考える。濃尾地方の諸形式との少なからぬ関係も、それを強調する・強調しないという研究者の提示方法における表現傾向の

差に増幅されてより錯綜した印象を作り上げてしまったとすれば、再度もつれた糸をほぐす必要があるだろう。

もちろん技術系譜において瓜郷式が条痕紋系土器に連なる点を否定するつもりは毛頭ない。また贅氏が強調した貝田町式との共通性についても、そこに体系的な技術移転があり、その背景として集団移住の可能性が高いと結論づけるかどうかを別にすれば、両者の関係を否定する必要は無い。むしろ積極的に同意しよう。ただし、わたしが同意する前提としては、その関係の実態が紋様や形といった表層的部分、鍋や無頸壺の成立が西日本的な成形分岐システムによっていることを踏まえてのことである。さらに、関係する範囲はかつて述べたように濃尾地方全域が対象になることは当然として、伊勢地方との関係も十分に考慮する必要がある。とりわけ、不完全ながらではあっても器種分化に関係して成形分岐システムが認められる点は、広域的地域連鎖を背景にしているのであり、この点についての掘り下げが不十分であったことは反省しなければならないと思っている。

いずれにしても、瓜郷式は時間的には長期・短期の変化、空間的には遠隔地・近接地との関係、さらにより広域的な関係網を背景として現出した多様性を基本とするのであり、まさに「複数の系」から成り立っているのである。「複数の系」を軸に瓜郷式を考えてからすでに10年を経過しようとしているのだが、ようやく資料の集積が進んだ現在の地点から改めて考えてみるのも無駄ではないと思い、以下で「その成立前後について」、そして「その後について」も検討する。

● 岩滑式と瓜郷式の間 ●

(1) 岩滑式をめぐる

岩滑式は知多半島の東側の付け根付近に位置する半田市岩滑遺跡出土資料を標式とする。編年的には弥生中期前葉に位置づけられるのが通例であるが、その代表とさせるにはいささか新しい一群である。受口状口縁太頸壺の成立過程

からみても岩滑遺跡の一群を到底弥生中期初頭まで遡らせるわけにはいかない。

中期初頭の資料は、大形壺では朝日遺跡 56B 区や麻生田大橋遺跡の土器棺資料が代表的である。すなわち、口縁端部が受口状口縁をなさない単純口縁壺が該当する。外面は口縁部直下に横位の条痕帯をもち、その下に跳ね上げ紋が施されるものが古相資料であり、口縁部直下に跳ね上げ紋が施されるものはそれより新しい。通常サイズの壺も紋様構成は同様であるが突帯を欠落させる傾向をみせる。また、頸部に施される波状紋との関連では、麻生田大橋遺跡豊川市教委調査 SZ72 が重要な資料である。72-1 は口縁部直下が横位条痕で跳ね上げ紋は 2 段施されている。72-2 はやや振幅が大きく波長が短い横に詰まった感じの波状紋で、横位条痕は直線紋化している。72-3 は口縁部内面に二枚貝腹縁による直線紋が施されている。本例では、波状紋の一部は跳ね上げ紋と共存していることを示し、さらに前者の紋様構成は直線紋と波状紋の交互配置、つまり波状紋が 2 帯になっている可能性が高い。

このような紋様構成をもった壺が確実に遠賀川系土器と共存した事例はなく、したがって弥生中期前葉の波状紋といえる。しかし、普通サイズの無突帯壺で口縁部直下に波状紋を持つものが遠賀川系土器に共伴するの可否かという点は問題として残るが、積極的にそのように判断できる資料は無い。

増子康真氏は水神平式を再定義して、弥生前期に該当するものを古式と新式に 2 分した(増子 2000)。このうち新式に、上述した口縁部直下にくずれた波状紋、跳ね上げ紋をもつ壺(麻生田大橋遺跡市教委報告 1983:SK126 出土土器)を含めている。しかし、これらの壺の紋様構成は、典型的な水神平式壺が波状紋複帯構成であるのと

は異なり単帯波状紋 2 段構成であり、紋様構成が全く異なる。単帯波状紋 2 段構成は、これまで確実に遠賀川系土器に共伴した事例はなく、朝日式との共伴が通例である。したがって、増子氏が設定した「水神平新式」はけっして弥生前期に限定されるものではなく、明らかに弥生中期前葉にまたがると言える。加えて、口縁部内面紋の所属時期も、深鉢・甕については遠賀川系土器との共伴が確実に弥生前期に遡ると言えるものの、壺に関しては増子氏の主張が保障されるには十分ではなく、弥生前期に遡るか否かの決着は現状では先送りせざるを得ない。せっかくの増子康真氏の再定義ではあるが、はからずも久永春男氏の提唱した「続水神平式」の混乱を継承しているようである

いずれにしても、水神平式から岩滑式への変遷過程については、岩滑遺跡資料を 1 段階として含みつつ全体を想定した再定義可能な区分を設定する必要がある。現状では代替させえるだけの良好な資料が無いのでしかたがないけれども、この点については今後十分な検討が必要だろう。

(2) 岩滑式最終段階に併行する型式群

① 資料について

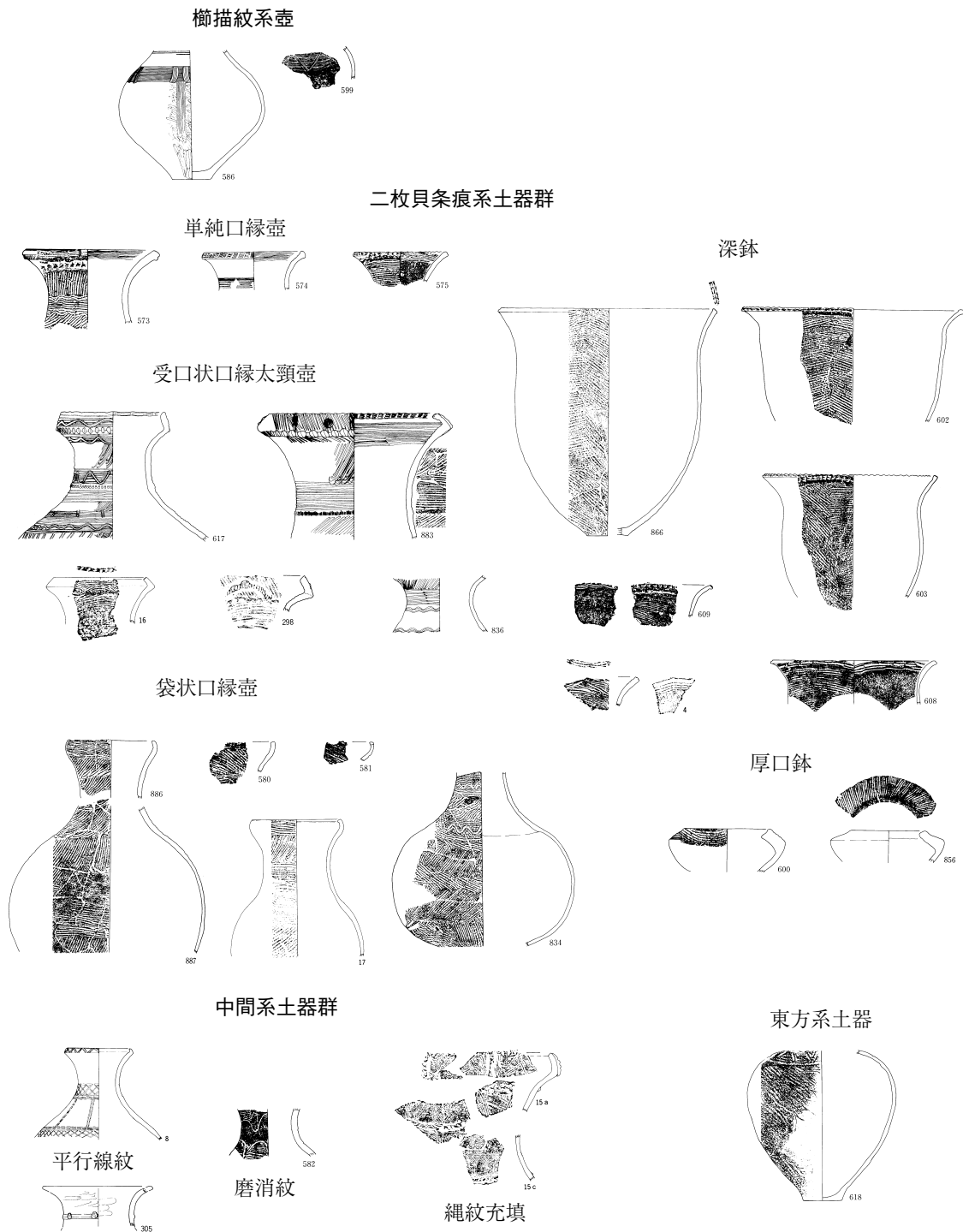
■ SK17 ■

出土資料は大きく条痕紋系土器と櫛描紋系土器²⁾に分かれるが、後者はわずかである。

条痕紋系土器は二枚貝腹縁条痕を指標として、壺・深鉢・厚口鉢などから構成される。

壺には単純口縁の太頸壺・細頸壺・袋状口縁壺がある。受口状口縁太頸壺は含まれていない。袋状口縁壺を除いて、口縁端部には二枚貝腹縁による押し引きが施され、口縁部内面にも断続する直線紋が加えられている。頸部は全面条痕で仕上げることなく無紋帯を設けたり、無紋部分に沈線による波線を加えるものがある。

2) 櫛描紋系土器としたものは出自不明である。濃尾地方との関係に単純化するには検討が不十分である。伊勢湾西岸との関連も無視できない。また、「櫛描紋系土器」対「条痕紋系土器」という 2 項区分で該期の説明が完了するわけでもない。本論では便宜的な使用にとどまる。



第1図 岡島遺跡出土 岩滑式最終段階の土器群

袋状口縁壺は、口縁部の開きが大きくジョウ口のような受口気味を呈する。口縁端部は無紋で、口縁外面に左上がりの条痕が施され、跳ね上げ紋はすでに消失している。他の壺でも跳ね上げ紋は崩れている。

深鉢は口縁部が外折れして伸び、端面も内側に拡張している。口縁端部には二枚貝腹縁による押し引きが加えられているが、口縁部に直交せず水平気味に施されている。そのため、粘土が内側にはみ出し拡張したものと思われる。しかし、これは型式学的指標となる重要な特徴である。

体部の調整は縦位羽状条痕と斜位条痕の二者があり、壺のように口縁部内面に加飾されるのは後者である。

厚口鉢は口縁部の伸びが短く厚ぼったい感じを与える。条痕は口縁部に平行して同心円に施されている。サイズは小型化している。

櫛描紋系土器には壺があり、甕は含まれていない。壺には太頸壺？と無頸壺がある。二枚貝腹縁による直線紋ではない。

■ SK20 ■

条痕紋系の受口状口縁太頸壺と条痕紋系細頸壺？が出土している。前者は平行線紋の併用が顕著だが、跳ね上げ紋が2段施され、構成は存続している。後者は肩が強く張る形態で、肩部紋様帯には条痕の直線紋と複線鋸歯紋が施されている。体部は斜位条痕で仕上げられている。

■ SD17 ■

破片が多く新しい資料も混じっているようだが、ほぼSK17に対応する資料である。条痕紋系土器が主体で櫛描紋系土器は認められない。

条痕紋系土器には壺・深鉢・厚口鉢がある。壺は太頸壺・細頸壺、口縁部形態では単純口縁・受口状口縁・袋状口縁などがある。跳ね上げ紋は認められるが崩れている。

深鉢は小片が多い。口縁端部に条痕を施すもの、まるく仕上げるものがある。

厚口鉢は口縁部に放射状に条痕が施されてい

る。やはり小型化している。

① 小 結

厚口鉢が伴う点から岩滑式最終段階と判断した資料は、今後独立した小期として扱いうる可能性を有するものであるが、さらに「型式」として設定できるのかどうかについては将来の課題である。安城市域においては対応する資料が存在するようなので今後関連資料の公表される中で検討する必要がある。

さて、当該資料を尾張地方に対比させれば、朝日遺跡 1995 編年:Ⅲ期(愛知埋文セ 1995)、もしくは石黒尾張編年:Ⅱ-3期(石黒 1996a)に相当しよう。条痕紋系土器の分類では、4類・5類に対応する(石黒 1997)。かつて田中 稔氏が資料紹介した西春日井郡清洲町松ノ木遺跡出土資料はこの時期に近い資料であるし、寅ヶ島第2貝塚出土資料にも含まれている。最近、財団法人岐阜県文化財保護センターから正式報告が刊行された美濃加茂市野笹遺跡資料には併行する時期の良好な資料が認められる。深鉢の体部外面の調整具が二枚貝から櫛へ移行する段階にあたり、条痕紋系土器の広域的な変質過程が窺える。

(3) いわゆる瓜郷式の直前段階に併行する型式群

② 資料について

■ SK11 ■

条痕紋系土器はいたって陰が薄い。構成器種には、壺・深鉢・大型鉢・浅鉢などがある。

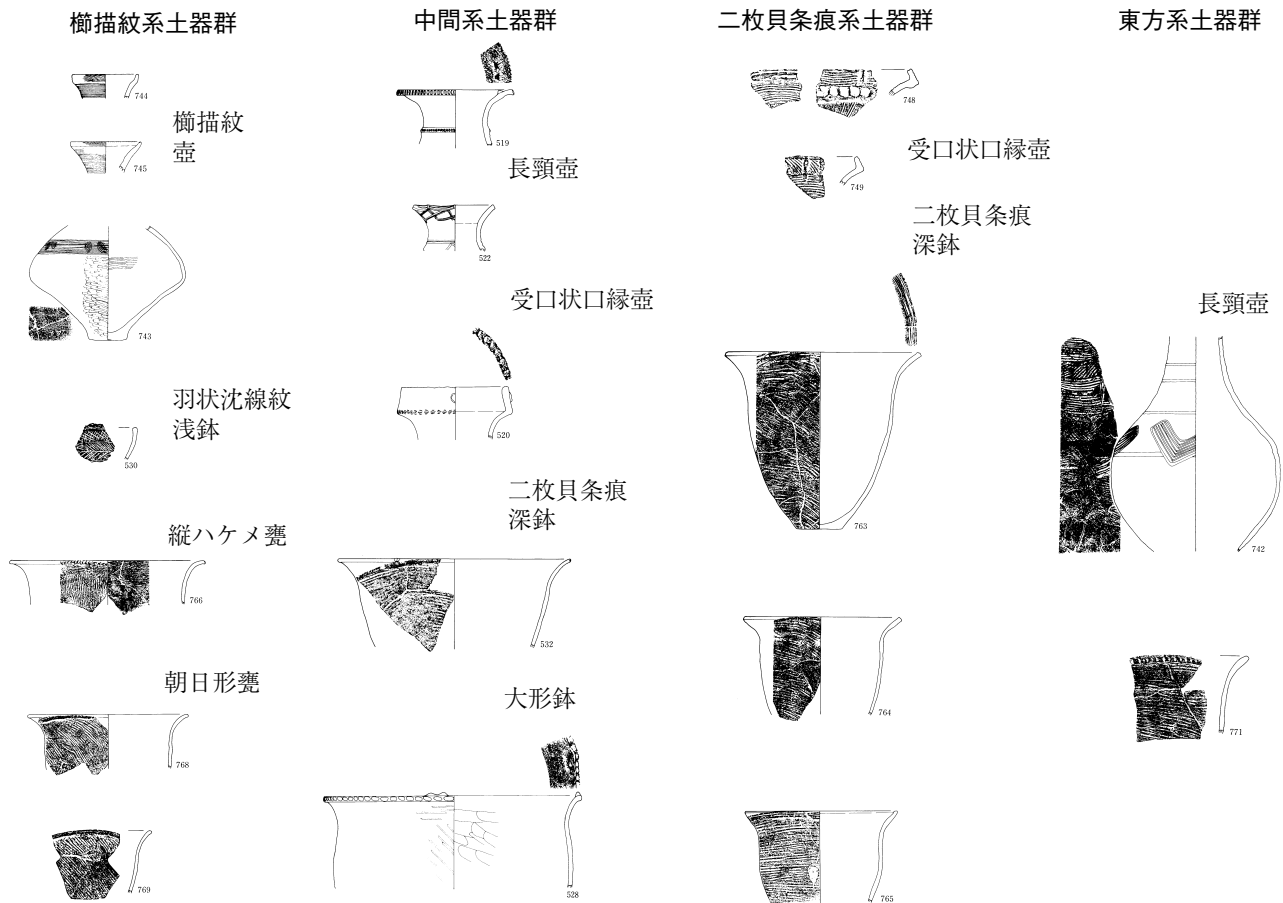
壺には単純口縁・受口状口縁がある。体部紋様では、平行線紋による区画や二枚貝背面圧痕による擬縄紋充填が認められる。縄文は一般的ではない。

深鉢は二枚貝腹縁条痕が横位に施されている。

大型鉢は無紋で、口縁部内面には壺と同様の中央部がつぶれて二山になった浮紋が貼り付けられている。同類の浮紋は貝田町式太頸壺に多用される。

浅鉢には無紋と有紋があり、後者にはヘラ描の羽状紋、斜格子紋が施された精製品がある。

■ SD12 ■



第2図 岡島遺跡出土 瓜郷式直前段階段階の土器群

条痕紋系土器と櫛描紋系土器がある。

条痕紋系土器はほとんどが二枚貝腹縁条痕で仕上げられ、器種には壺・深鉢がある。壺には受口状口縁太頸壺と長頸壺があり、その他の器種は含まれていない。長頸壺は頸部紋様帯に縄紋帯を含み、条痕も二枚貝腹縁かどうかわからない。他地域産の可能性もある。

深鉢は縦位羽状条痕が消失し、斜位もしくは横位となる。口縁端部を丸く仕上げるものが目立ち、条痕を施すものはわずかに、押し引きを施すものは皆無となる。

櫛描紋系土器は貝田町式の細頸壺および無頸壺、それに朝日形甕、タテハケメ甕が出土している。

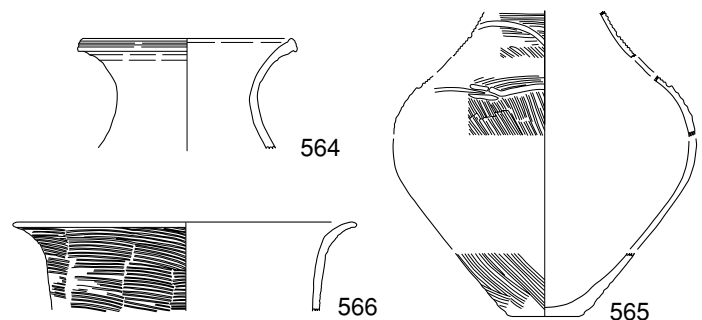
いちおう、細頸壺・朝日形甕・タテハケメ甕・斜位条痕深鉢の組み合わせは濃尾平野と共通し、三河地域への影響が該期に進行したことが伺え

る。ただし、これらの資料が搬入品であるのか、または技術移転を示す在地品であるのかは、現状では明らかではない。

このほか川原遺跡でも該期の資料が出土している(第3図)。

② 小 結

瓜郷式直前とした資料については、なお実態は不明である。器形的には瓜郷式構成器種と相違はないが、調整技法に差がある。また共伴す



第3図 川原遺跡出土 瓜郷式直前段階の土器群

る擬縄文手法にも先行する要素が認められ、従来知られている瓜郷式とは異なるのである。この点が地域差に関係し、かつ成立事情をも反映したものであるなら、岩滑式終末から直後にかけての変遷を考える上で極めて重要な位置を占めることになる。現状では、共伴資料からみて貝田町式最古段階と時間的に併行することは確定したといえるが、周辺地域における資料の増加をまって改めて検討を加えることが必要だろう。

尾張地方との対比では、名古屋城三の丸下層弥生遺構群出土土器古段階に相当し、朝日遺跡1995 編年ではⅣ -1 期(石黒尾張編年:Ⅲ -1 期)に対応する。そして、条痕紋系土器との関係では5 類の一部が時間的に重なる可能性もある。

● いわゆる「瓜郷式」とその後 ●

岡島遺跡の下層において主体となるのは瓜郷式相当資料である。ただし、これまでの調査においては細分ができるほど遺構単位で良好な出土資料が得られているわけではなく、なお型式学的区分を先行させざるを得ない現状にとどまっている。

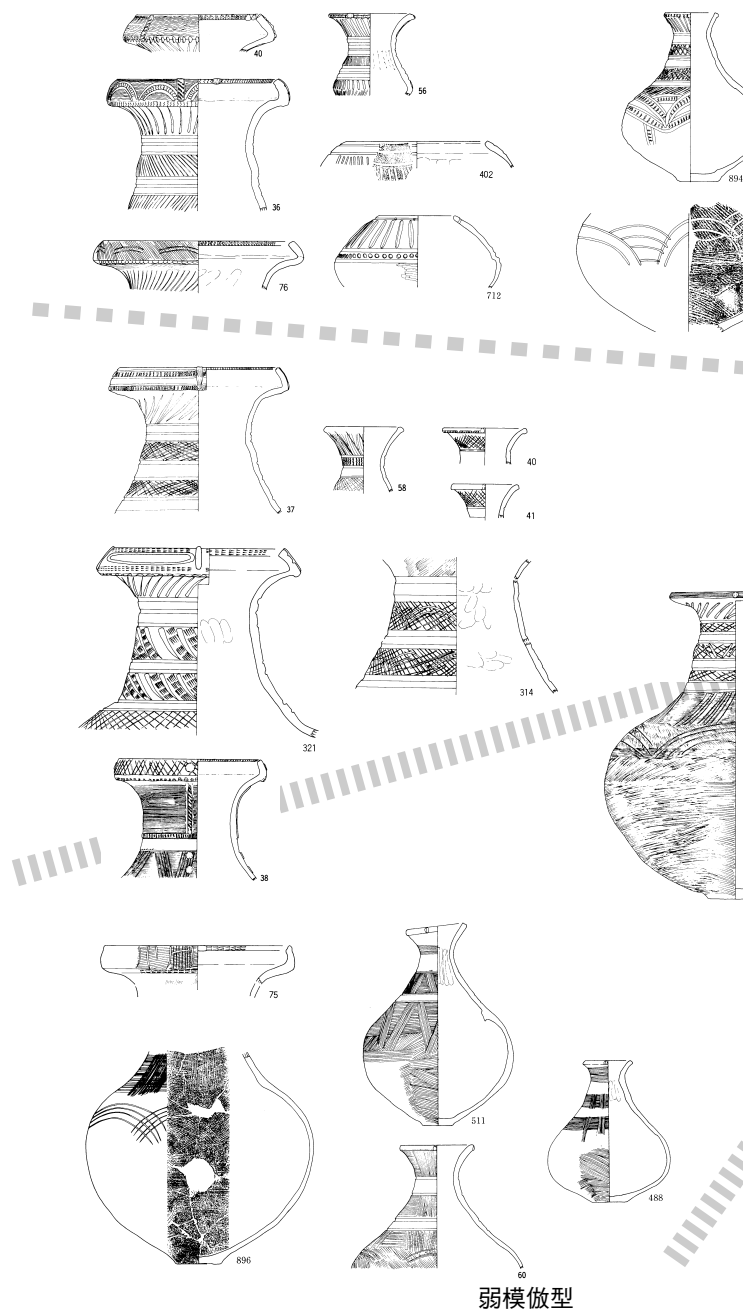
そのうえ、後半期の資料が少ないという状況もある。この点は、濃尾平野はいうにおよばず伊勢湾西岸部でも同様で、なぜか当該期の資料は量的に貧弱である。遺跡の環境が変化して立地の中心が移った可能性も考えられる。

瓜郷式相当資料の詳細についてはここでは触れない。それではただ報告書を解説することとなんら変わらないものになってしまうからだ。詳細は報告書に譲る。そこで、以下では岡島遺跡出土資料にみられる特徴についてまず考え、その後に変遷過程の概略を述べることにする。

(1) 岡島遺跡における瓜郷式相当資料の類型構造

岡島遺跡資料に即す限りは、甕は斉一的である。もちろん、濃尾平野の朝日形甕やタテハケメ甕も出土しているが、それらは僅かでありそれほど問題にはならない。それに対して壺は個性的で、形態・紋様構成において、大きく様相

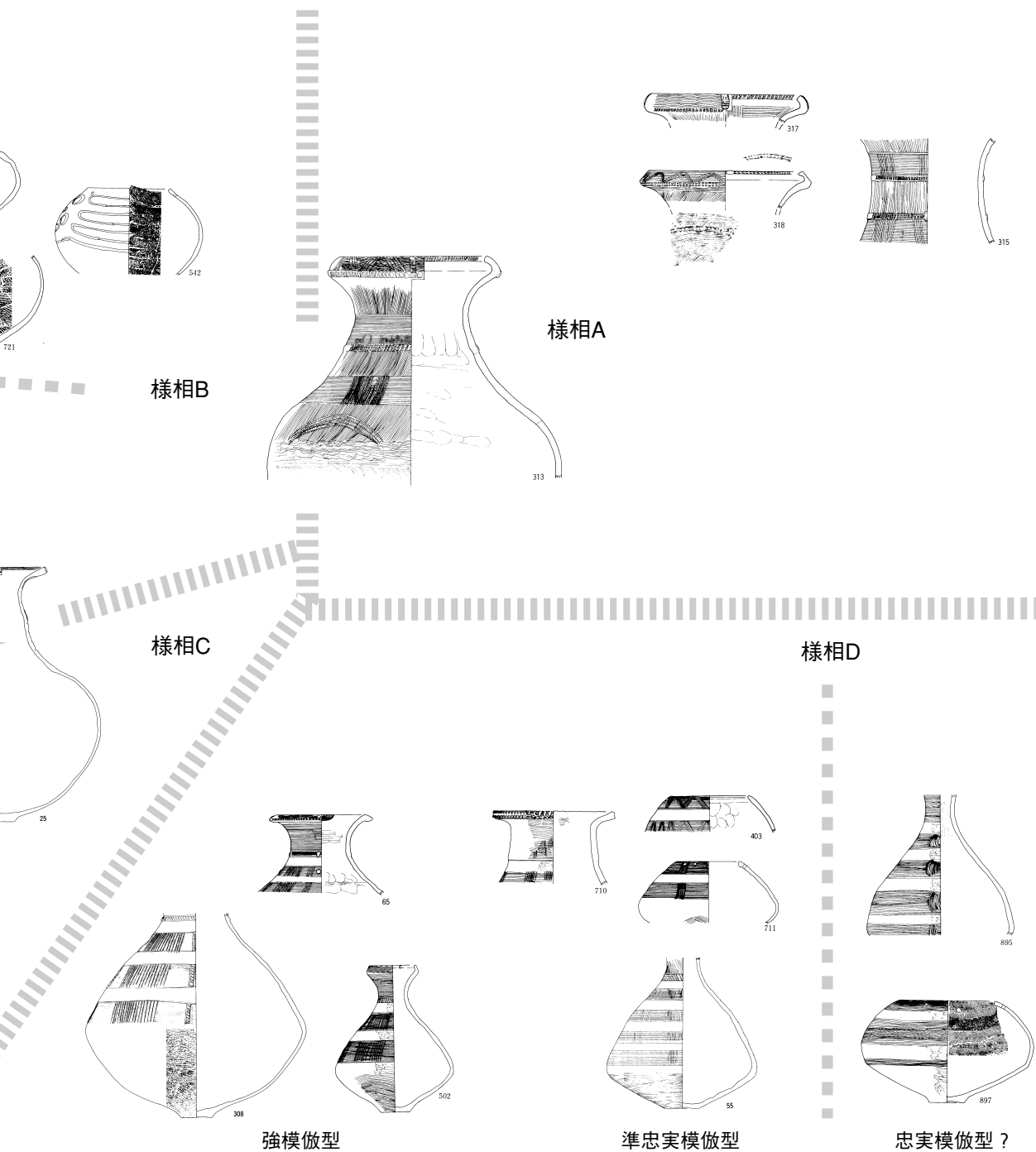
第4図 いわゆる瓜郷式壺の類型構造



a・様相 b・様相 c・様相 dの4群に分かれる。

様相aは、条痕紋系土器の条痕紋のうち櫛描紋に類似する部分を櫛描紋風にしたものである。器種としては受口状口縁太頸壺が知られるのみであるが、頸部の突帯や口縁部の形態など条痕紋系大形壺の特徴をもっともよく継承している。

様相bは、太い沈線によって紋様が描かれるものである。斜格子紋を多用するものとそうで



ないものと区分できる。青海波紋風の複合連弧紋が特徴的である。体部下半は条痕である。

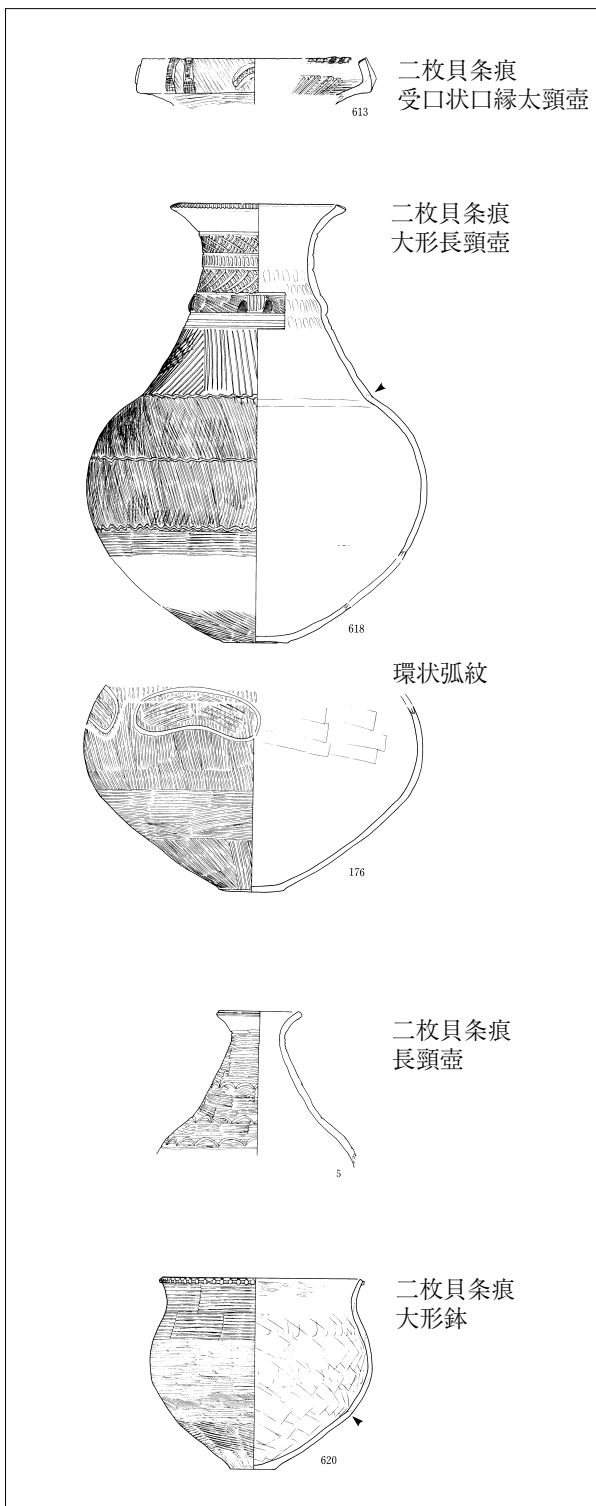
様相cは、体部の下半が条痕紋、上半が櫛描紋である。様相aから様相cは、形態の基本を条痕紋系土器におきつつも条痕紋から櫛描紋までの幅で表現手法がゆれているといえる。

様相dは、上の3群とはことなり、形態・紋様とも尾張地方の貝田町式に強く傾斜している。

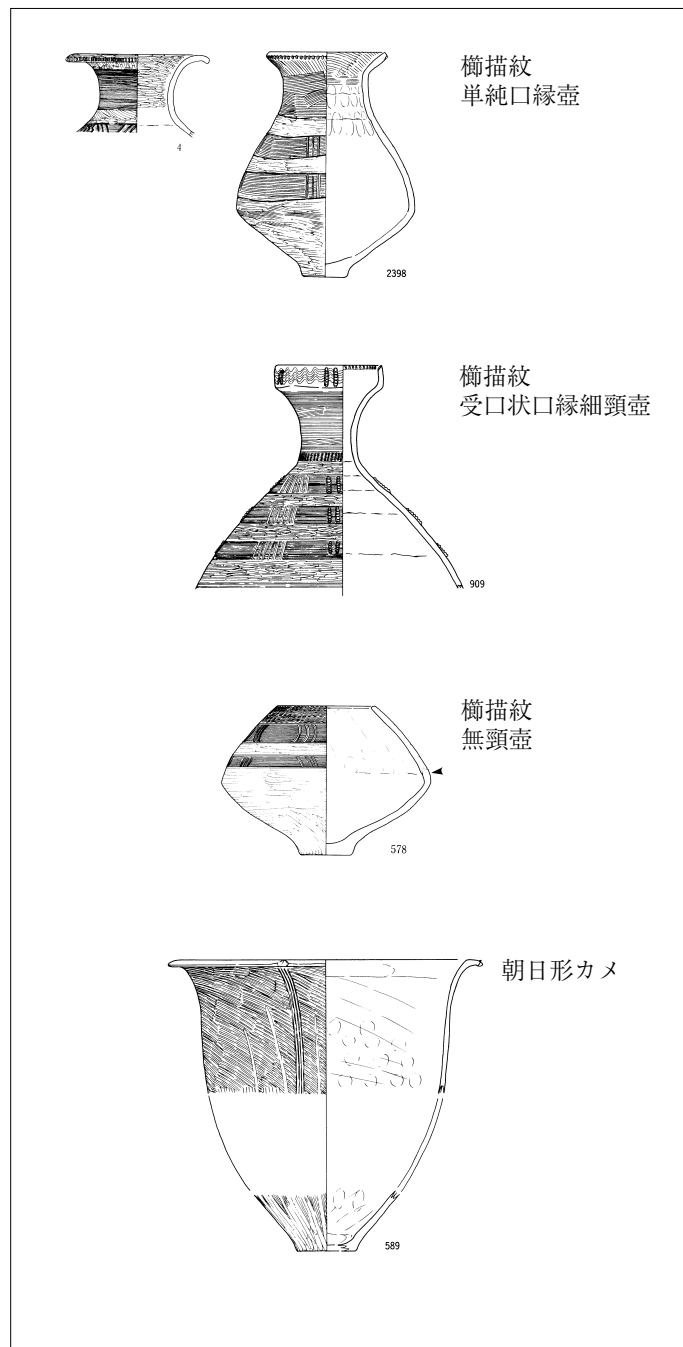
現状では、貝田町式に似てはいるが在地的な特徴が表れている一群と、より貝田町式に近似する一群に分かれる。後者については粘土・混和材分析などを駆使した製作地の調査・同定が必要かもしれない。

前者は、紋様や形態は貝田町式壺に極めて似ているけれども、体部下半部の調整が在来そのものである。この点については意外に見落とし

続条痕紋系土器群



櫛描紋系土器群



第5図 瓜郷式と関係する濃尾地方の諸形式

が多いのだが、貝田町式では壺下半部の調整は底部からみて左回りの斜め放射状にハケメ調整が施され、さらにミガキ調整が加えられるが、ここで様相dとしたものは側方から見れば水平、底部からみればクモの巣状に調整され、前段階

の羽状条痕の名残りが認められる。これは、模倣される部分とそうでない部分の相違であり、これを指標に系譜関係を決定することができる。ただし、上半部の破片の場合には、櫛描紋帯に貼り付けられる棒状浮紋や、鋭い沈線の縦直線

がなければ帰属認定が難しいし、また下半部がくまなくミガキ仕上げされれば判断不能となる。一般に上半部は忠実に模倣されるのが特徴である。

上記4群については、それぞれの製作地が異なるとは考えがたく、製作・施紋に関係する単位が複数存在したことを示していると考ええる。

このほかに、岡島遺跡では縄紋帯を加える長頸壺が1点出土している。三河東部の豊川流域ではさらに頻度が上昇するが、岡島例は遠江地方からの搬入品である可能性があり、固有の要素ではないといえる。実際のところ、濃尾平野から矢作川流域にかけては、二枚貝背面を器表面に押し付けて縄目風の痕跡をつける擬縄紋が多用され、純正縄紋は決して多くない。これまで濃尾平野南部では縄紋が施された貝田町式壺が散見され、これらは貝田町式の特徴ともいわれていたが、そのかなりの部分は伊勢湾西岸部からの搬入品のようである。どうも伊勢湾東岸北部では、縄紋は主たる紋様要素とはいいがたいようだ。

さて、岡島遺跡における器種組成は、壺・甕のほかに大型鉢(鍋)が主要器種として加わる。浅鉢・鉢・高杯は出現頻度が極めて低く、とりわけ高杯は見る影も無い。木製品が主であった可能性が高い。

濃尾地方でよくみられる沈線紋系土器は、矢作川上流域を除いて三河地方での出土例はほぼ皆無である。そのなかでわずか一例ではあるが、朝日遺跡から出土した三河地方からの搬入品と思われる資料中(愛知埋文セ1995)に沈線紋系土器のモチーフをもった土器があり、そのことから、瓜郷式も沈線紋系土器とはけっして無関係ではないと思われるが、まだはっきりしたことはいえない状況である。同時期濃尾平野や中部高地で一定程度存在する点と比較して対照的である。

ただし、この点に関して注意すべきなのが大型鉢(鍋)である。加飾されることが基本ではあ

るが、煮沸に使用されるために紋様が付着物で観察できないこともままある。とりわけ口縁部内面の浮紋とそれを囲む紋様は沈線紋系土器の口縁部突起を思い起こさせる。外見上大きな違いはあるのだが、デザイン性としての共通性をそこに観ることもできるのでは、と考えている。

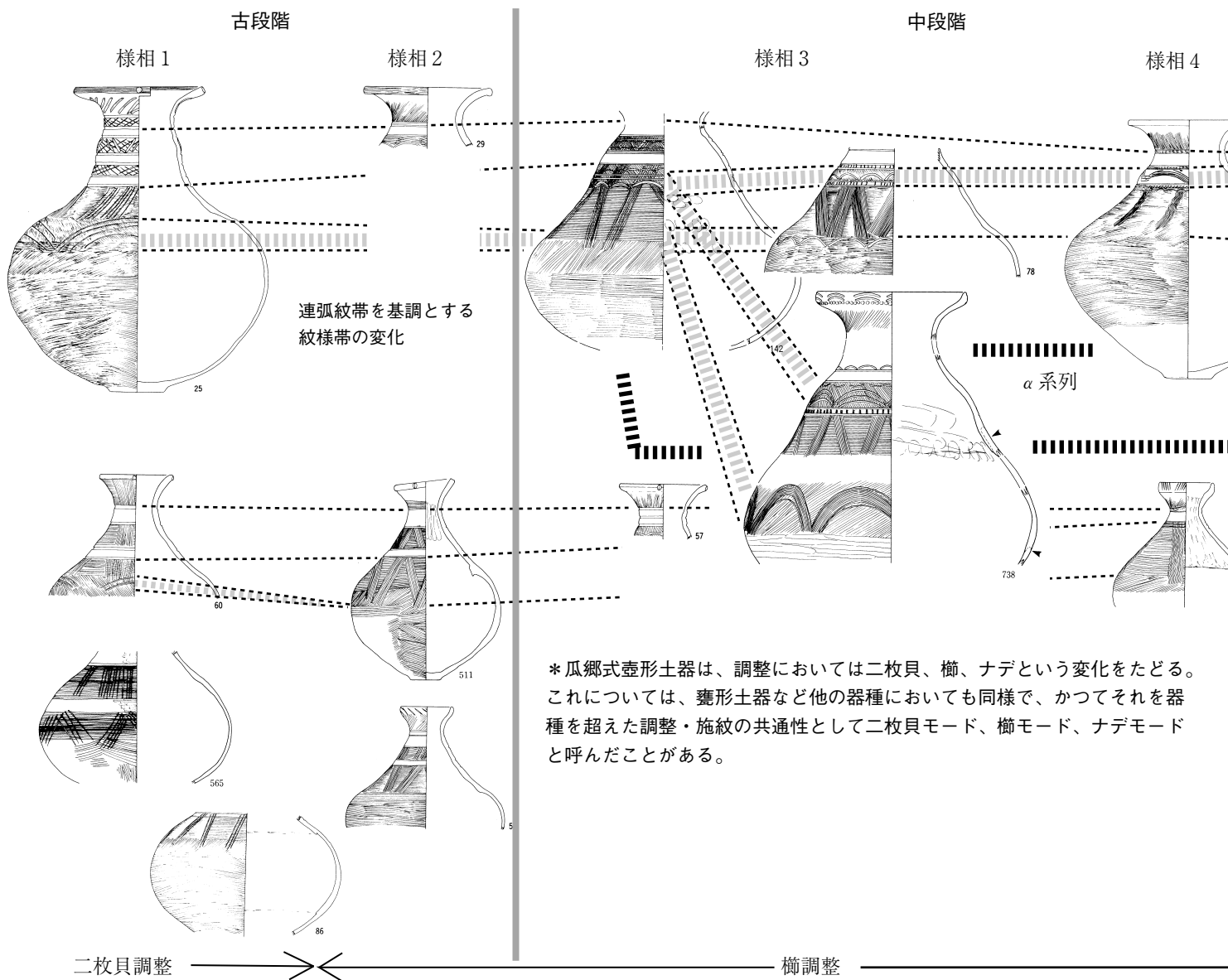
典型的な沈線紋系土器が存在しないのに対して、岡島遺跡では濃尾内陸部を主要な分布圏とする櫛条痕横羽状紋深鉢が一定程度存在する。工具に二枚貝を用いた模倣品も一部にはあるようだがほとんどは搬入品で、矢作川を遡った先の美濃地方東部との地理的關係が反映されているのであろう。

(2) 瓜郷式の区分

瓜郷式には調整工具および効果が器種を横断する齊一的变化が認められ、そのことによってまず3段階に区分できる。すなわち、第1段階:二枚貝腹縁調整、第2段階:櫛調整、第3段階:ナデ調整というように。わたしは、それをおつて二枚貝モード、櫛モード、ナデモードと呼んだが、今もその考えは変わっていない。大きくはこのように3分でき、さらに形態や紋様変化によっても細分は可能である。もっとも、出土状況に注目するならば各分類が共存するだろうから、その頻度差に注目してみる手もある。

たとえば、二枚貝調整単純、二枚貝調整+櫛調整、櫛調整単純、櫛調整+ナデ調整、ナデ調整単純、という具合にだ。さらに細かく見るならば、甕のうち口縁内面や口縁端部を加飾するものについては上記と同様の組み合わせの変化が一個体上で認められる可能性もあり、視点はさらに微細となる。もっとも、あまりに微細ではそれ自体が目的化して、成果としてはいささか貧しいものになるかもしれないが。

壺では連弧紋の変化に特徴的がある。第7図は総てが矢作川流域の資料ではないが、変化の方向と普遍性を示すためにあえて地域を限定しないで配列した。少なくとも、連弧紋モチーフは濃尾や三河だけでなく伊勢湾西岸部や琵琶湖



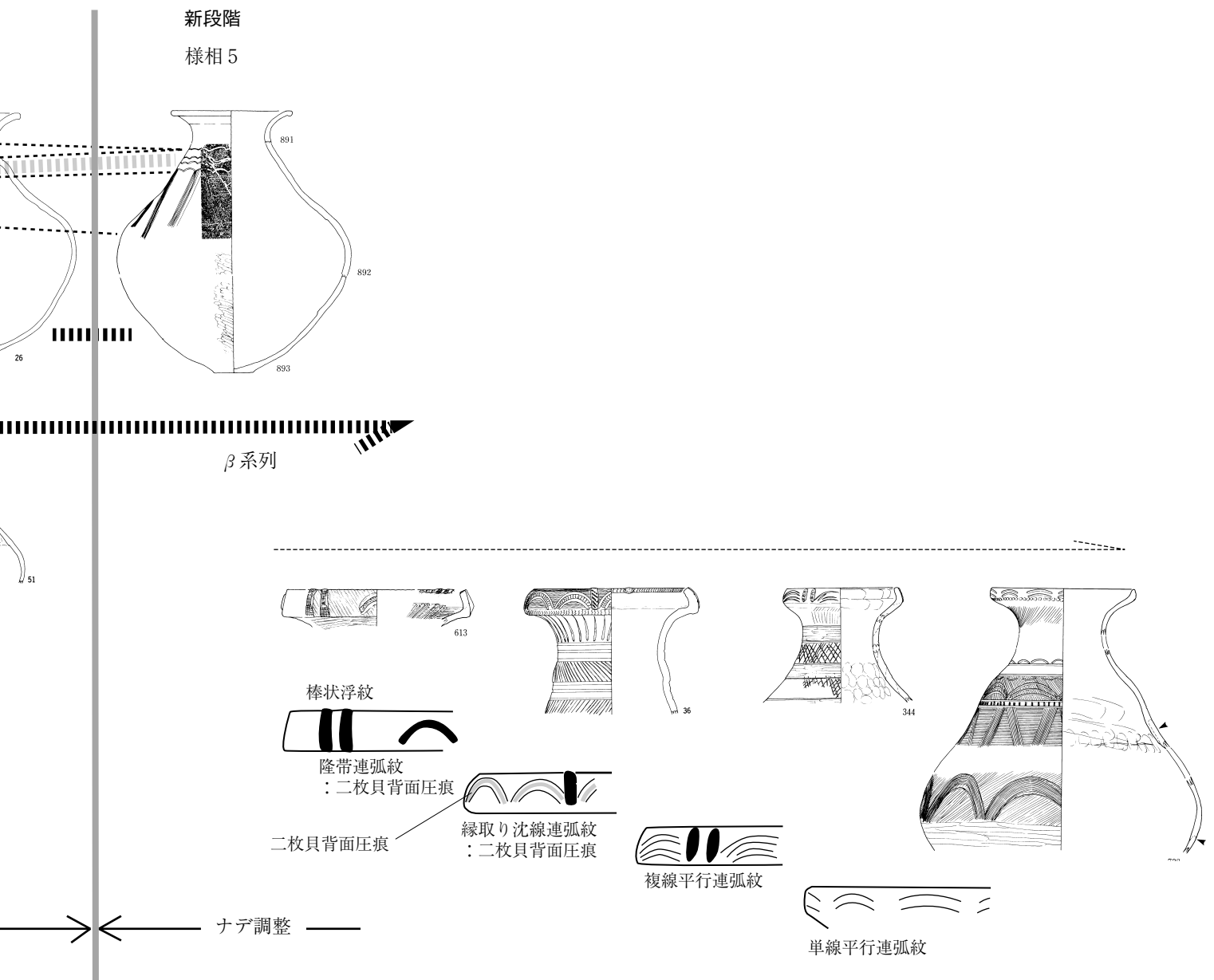
第6図 瓜郷式壺の変遷

地方にも存在し、分布には濃淡があるが、時期的には長期に、空間的には広域な展開を見せている。そうした中で共通した変化が辿れるとするなら、それは紋様独自の動態現象として十分に評価できるのではないか。

瓜郷式を細分する上で次に注目したいのが「2条沈線区画」である。古段階にはなく、中段階から凹線紋系土器出現期および展開期にいたるまで在地の壺に施され続けた基本的手法である。当初は刺突紋が伴わないようだが、ある時点から刺突紋が加えられるようになり、それが最終的には櫛描斜走短線につながる変化をみせる。

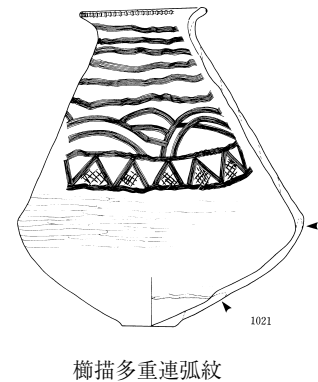
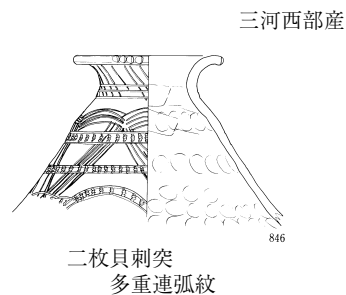
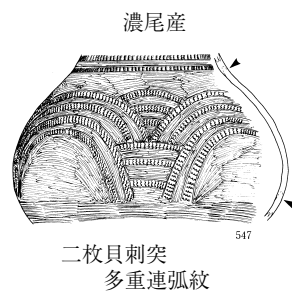
ところで壺の形態変化に関しては、第1段階から第2段階前半にかけて典型的であった長頸形態が、第2段階後半には体部上半部が扁平化するα系列と、下ぶくれの形態をもつβ系列の2系列に分岐する。両者とも資料的には恵まれていない。とりわけβ系列は断片資料が多くよくわからない点もあるが、両系列ともに、頸体部紋様帯構成も変化している。すなわち、①研磨帯の段数減少、②最下段の連弧紋と垂下紋の組み合わせの確定、③連弧紋帯の確立などである。

少なくとも形態上から第2段階後半以後は長頸壺ではなくなっており、独自の形態を保持し



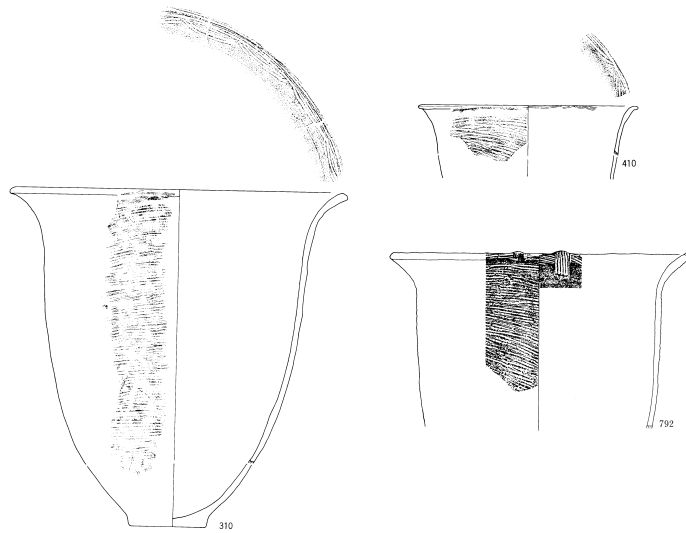
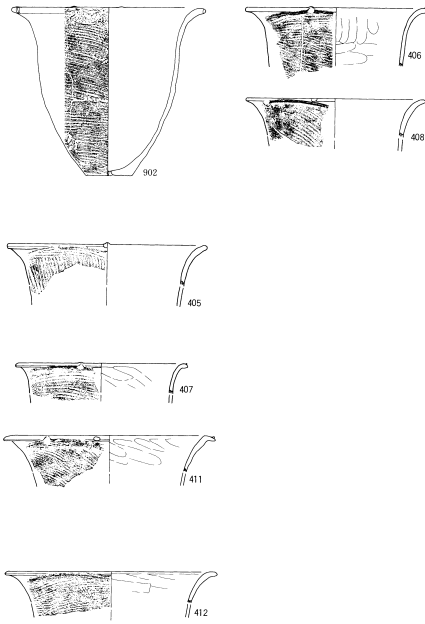
第7図 連弧紋の変遷と関連資料

阿弥陀寺遺跡出土連弧紋壺

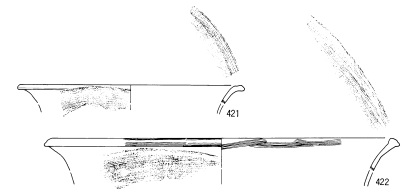
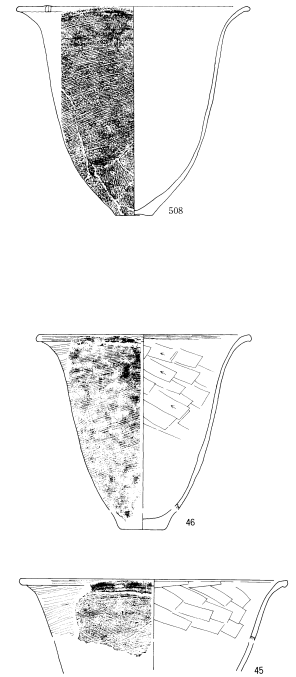


甕形土器の区分

様相1：二枚貝調整

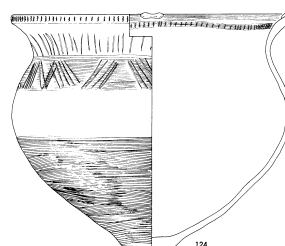
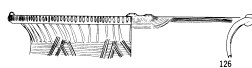


様相2：櫛調整

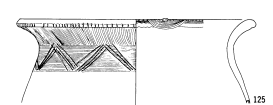


鍋形土器の区分

様相1



様相2



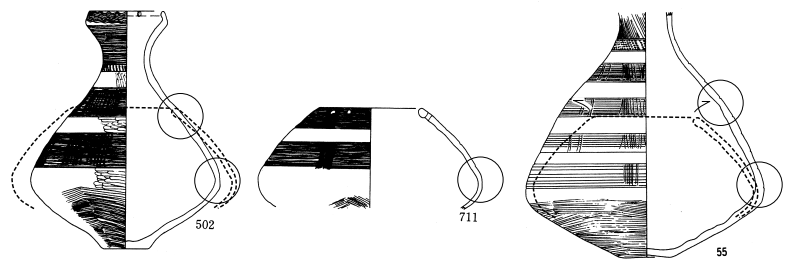
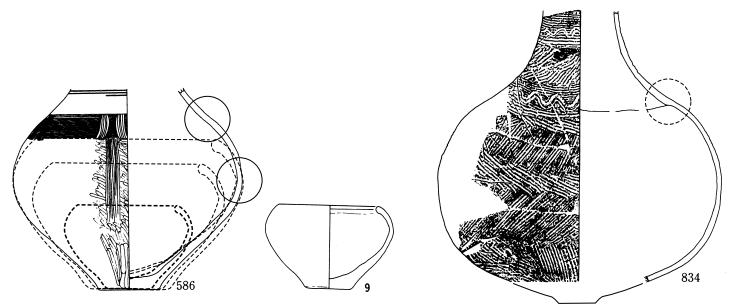
第8図 甕・鍋の区分

ている。ただ、頸部の隆起は基本的要素として存続し、それが凹線紋系土器段階まで継承される。

いずれにしても、連続的变化を基本とする点において瓜郷式成立以後に関しては外的影響を考える必要が無いといえよう。

いちおう、岡島資料については、上記のような調整および形態変化から、古段階、中段階、新段階に3分した。

古段階は、長頸形態、櫛描紋帯と研磨帯の構成が安定しており、二枚貝モードを様相1、櫛モードを様相2とする。中段階は櫛描紋帯が連弧紋帯に変化し、地文が斜位条痕となる。連弧紋は櫛描紋の場合もある。新段階はナデモードに一括する。ただし、ナデモードの広がりについては検討が必要である。



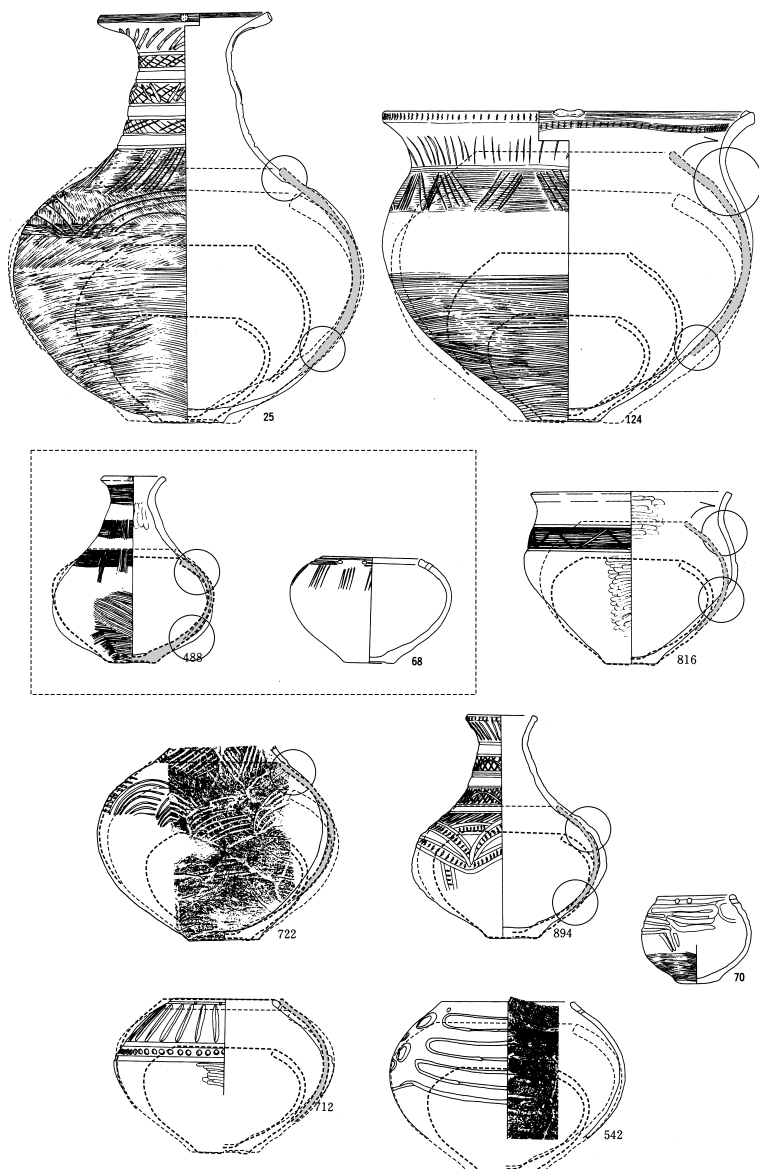
第9図 成形分岐比較図

尾張地方との対比では、古段階前半は石黒尾張編年Ⅲ-2/3期、朝日編年Ⅳ-2/3期に対応し、まさに典型貝田町式に併行する。古段階後半は阿弥陀寺遺跡SB18出土土器を指標に石黒尾張編年Ⅲ-4期、朝日編年Ⅴ-1期に併行し、中段階も同様である。新段階は石黒尾張編年Ⅲ-5期、朝日編年Ⅴ-2期である。ただし、新段階に関しては尾張地方への搬入土器がなく、クロスチェックはできていない。該期の設定も含めていまだ可能性の提示にとどまる。

(3) 器種分化と成形分岐システムとの関連

いわゆる瓜郷式を構成する器種には大小の長頸壺を始めとして、無頸壺・大形鉢(鍋)・甕・精製鉢・高杯がある。主要器種は長頸壺・甕であり、無頸壺・大形鉢・精製鉢・高杯は共伴頻度が低く、全形のわかるものも少ない。このうち問題になるのは長頸壺・無頸壺・大形鉢の関係である。

先に壺形土器については紋様や形態の特徴から様相a～様相dの4つに区分した。様相dは濃尾地方の貝田町式の細頸壺・無頸壺に類似する



一群で、体部下半に最大径があり、その部分は稜をもつほどに屈曲する。この様相dにおける細頸壺と無頸壺の関係は、細頸壺の体部形態と無頸壺の形態が相似形をなす点で、濃尾・貝田町式の細頸壺・無頸壺と同様に、成形途中の中断に基づく作り分けであると考えられる。ただし、濃尾・貝田町式では細頸壺胴部の屈曲部以下の成形第1段階から浅鉢が分岐するが、岡島遺跡では類例は出土していない。ミガキ状の沈線で斜格子紋が施された浅鉢が出土しているが、やや深めで成形の系列にはのらないようだ。したがって様相dは形態的類似に加えて製作システムも類似してはいるが、まだ完全に同一になってはいないということだろう。

では、様相b・様相cではどうであろうか。様相b・様相cに対応する無頸壺は残念ながら全形のわかるものは少ないが、体部上半まで残存したものをみるといちおう2つに分かれるようだ。

一つは様相dとは対照的に体部上半の屈曲が強くサイズも小さめで、弥生中期前葉の櫛描紋系土器の一群に伴う無頸壺や遠賀川系土器の無頸壺に類似するもの:1類、いま一つは最大径部がやや上位にあるものの大きくは屈曲しない形態でサイズもひとまわり大きいもの:2類である。形態やサイズをみると2類が中形以上の長頸部壺や大形鉢の体部形態と類似しているのに対し、1類には対応する資料が少ない。少ないという以上に、本当に対応するものがあるのかどうかははっきりしたことが言えない状況である。無頸壺1類の形態が古相を呈していること、そのことが対応関係の不確かさにもつながっているなら、2類の組成に占める割合が一定程度安定した段階で成形上の分岐が確立したと言えようか。

頸胴部界が明瞭で胴部上位が張る形態は濃尾地方の続条痕紋系土器に顕著である。その部分が成形の中断を伴う工程の段階区分に対応していることは明らかである。しかし、当該土器群には無頸壺などのような成形分岐を示す器種は含まれておらず、器種分化の傾向は薄い。せ

いぜい大形鉢が散見される程度で共伴頻度はきわめて低い。いっぽう、瓜郷式においても大形鉢(鍋)は組成しているけれども、共伴頻度は高い。おそらく、共伴頻度の高低と無頸壺の有無とが相関しているものであり、むしろ無頸壺は指標的であるようにみえる。

このように、成形段階の中断に基づく形態分岐による器種群構成は遠賀川系土器に始まるシステムであり、瓜郷式前段階の過渡期を経てようやく定着した。その背景としては瓜郷式土器分布圏の拡大と出土量、つまり生産量の増加があったものと考ええる。濃尾平野でも瓜郷式土器のうち特に壺が搬入品として高頻度で出土しており、生産量の増加は明らかである。

● いわゆる古井式と周辺地域 ●

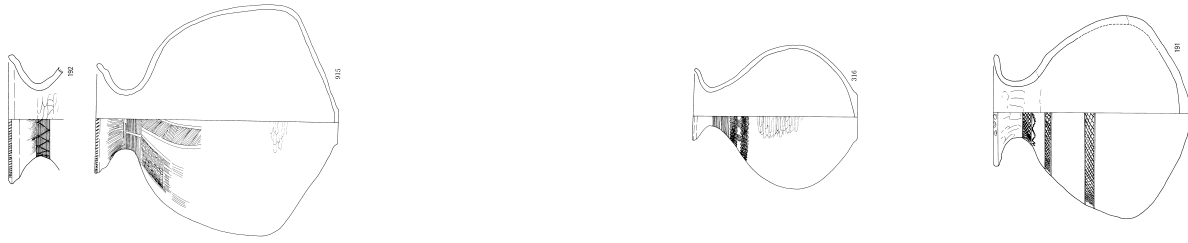
古井式は現在では矢作川流域の土器群を名付けるものとなっている。そして知多半島の獅子懸式をも席卷しつつあるようにみえる。

古井式をめぐる議論で重要なのは①台付甕の成立、②凹線紋系土器との共伴関係の推移の実態、それらと無関係ではない③他地域との併行関係の確立である。

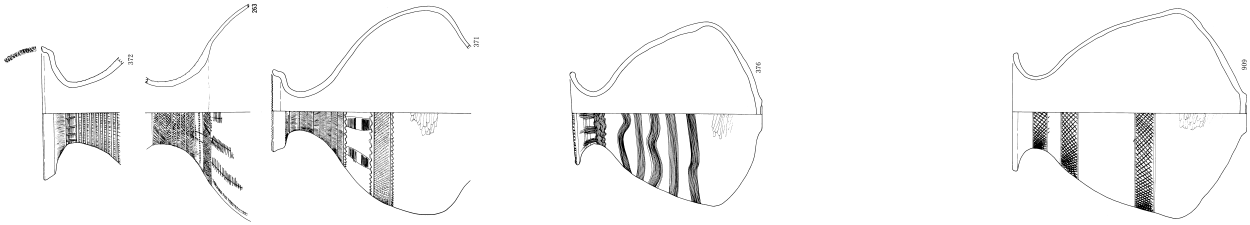
台付甕の成立に関しては、森泰道氏や鈴木とよ江氏などが解明に努めているが、なお痒いところに手が十分には届いていないという感があり、わたし自身も端的な説明ができないでいる。決定打といえる資料の出現が待たれる。

凹線紋系土器との共伴関係については、川原遺跡の様相がこれまでの矢作川流域の諸遺跡とは違って凹線紋系土器の頻度が高いことから新しいという印象を受けるが、年代的にはむしろ先行するという特異さがある。とりわけ共伴する川原タイプの壺は尾張の貝田町式系壺に非常に近似しており、しかも最初から直線紋と波状紋の交互配置という紋様構成であり、凹線紋系土器とも無関係ではないという、他に例の無い特徴をもっている。変数を絞り込んで同定するには周辺遺跡の資料が少ないから、まさに多変量解析として時間配列と他

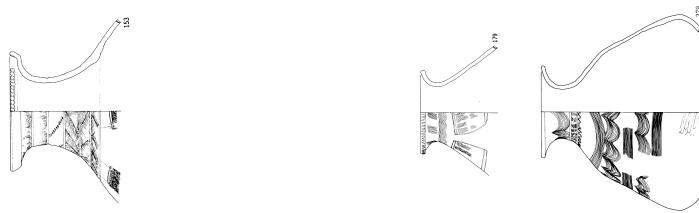
様相 6



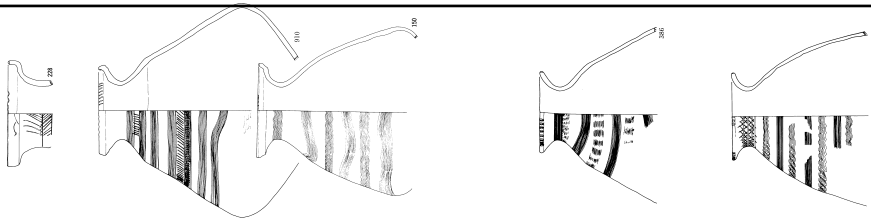
様相 5



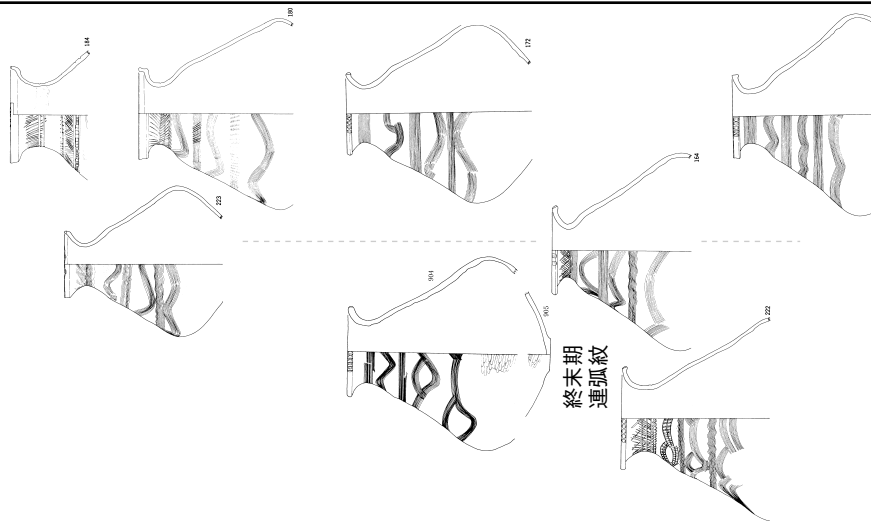
様相 4



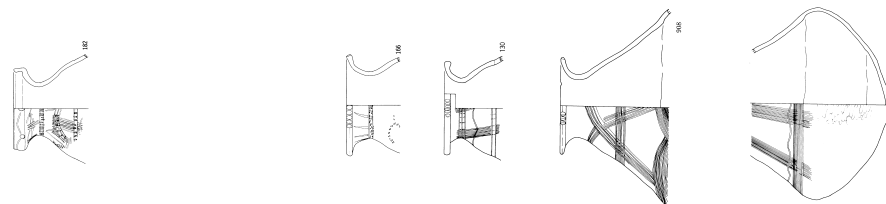
様相 3



様相 2

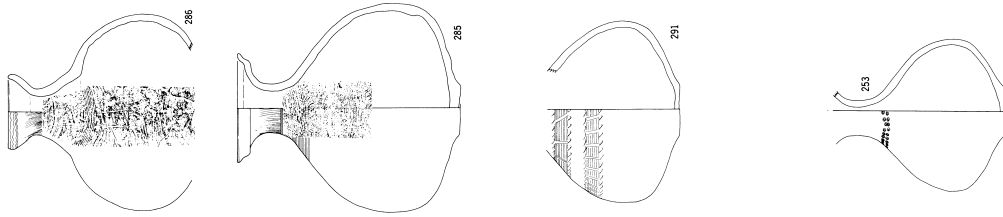


様相 1

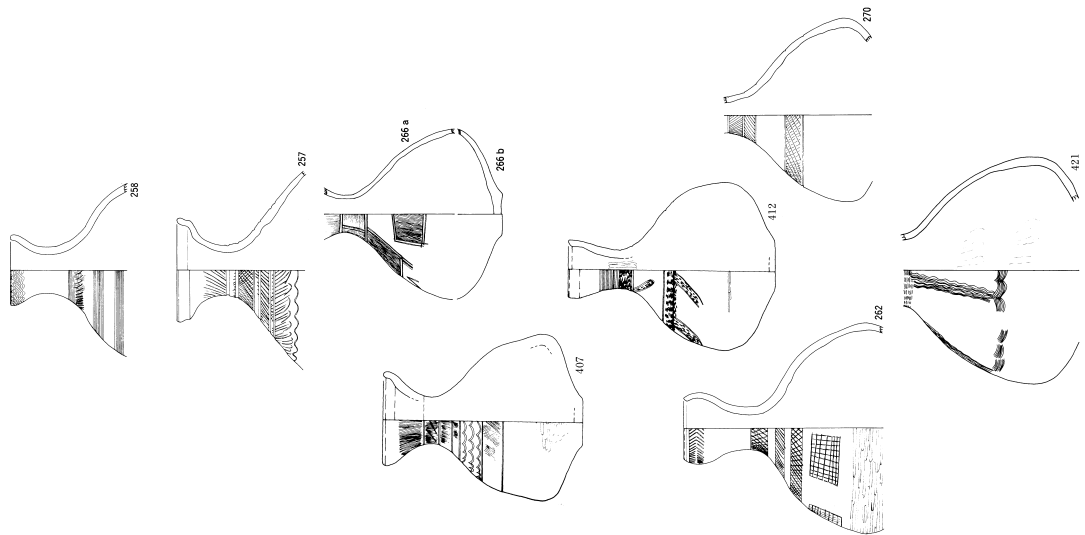


第10図 岡島遺跡 古井式壺の変遷

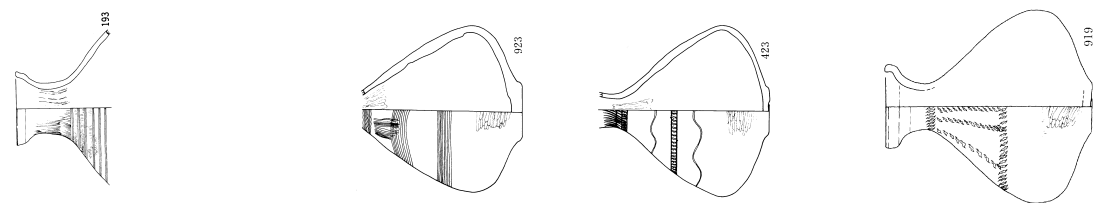
様相 5



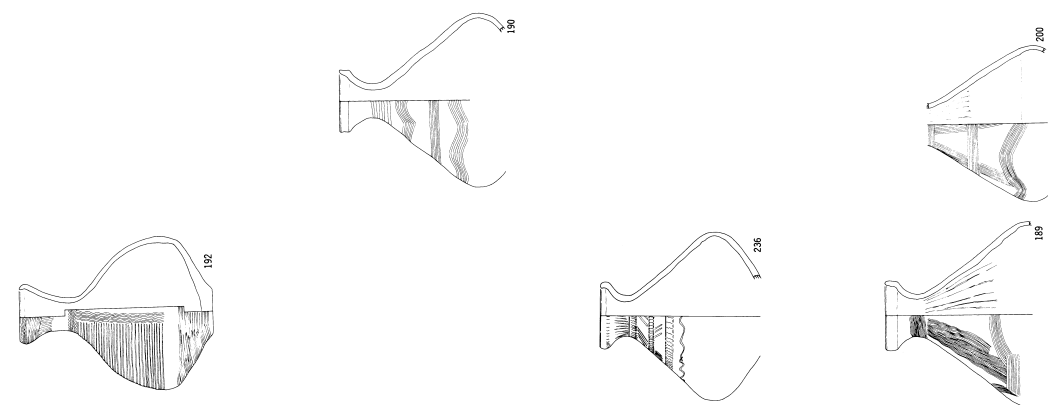
様相 4



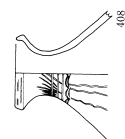
様相 3



様相 2

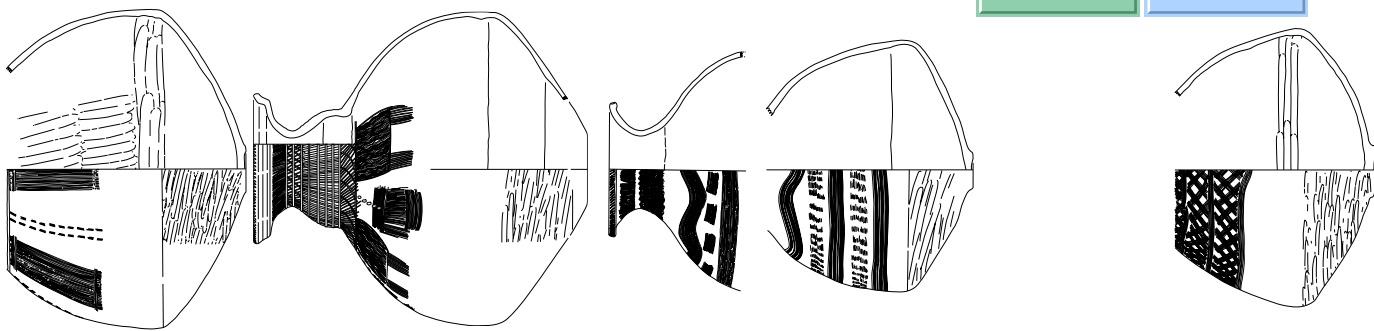
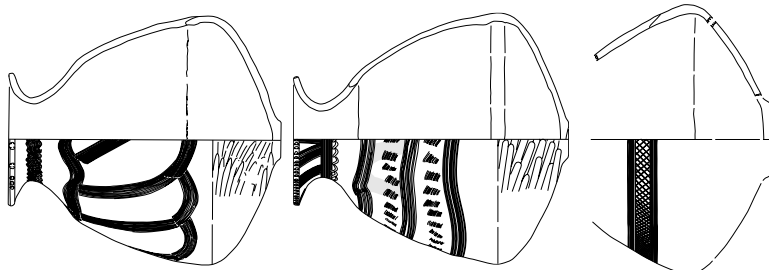


様相 1

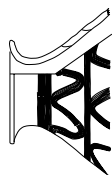


第11図 岡島遺跡 古井式細頸壺の変遷

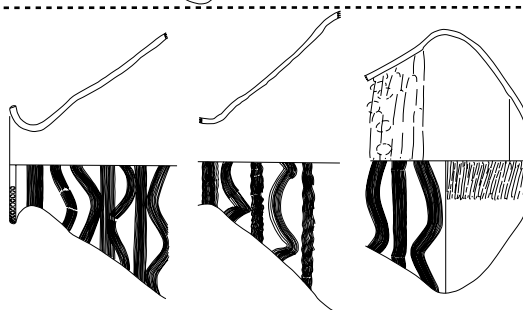
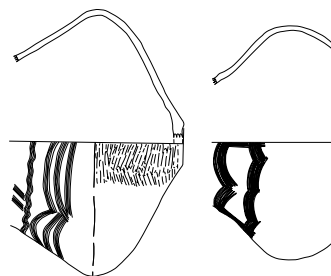
様相 4

様相 3 β 

様相 3

様相 3 α 様相 2 β 

様相 2

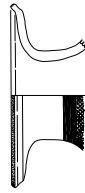
様相 2 α 

様相 1

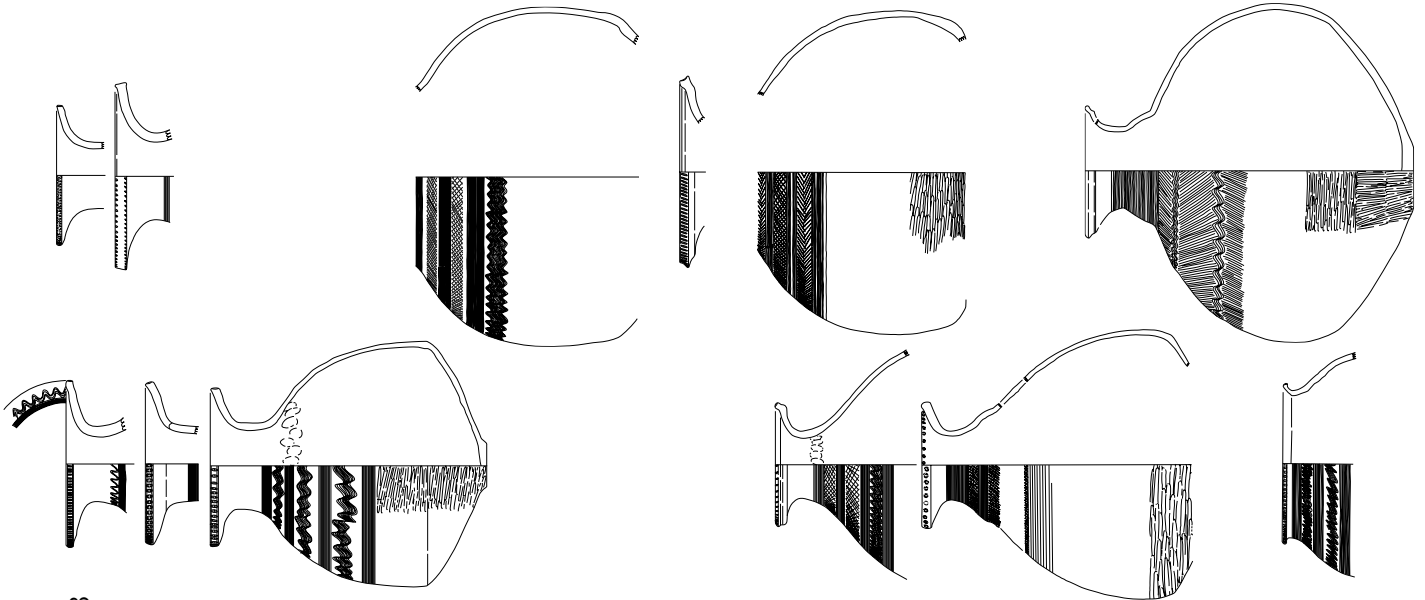


第12図 川原遺跡 古井式細頸壺の変遷

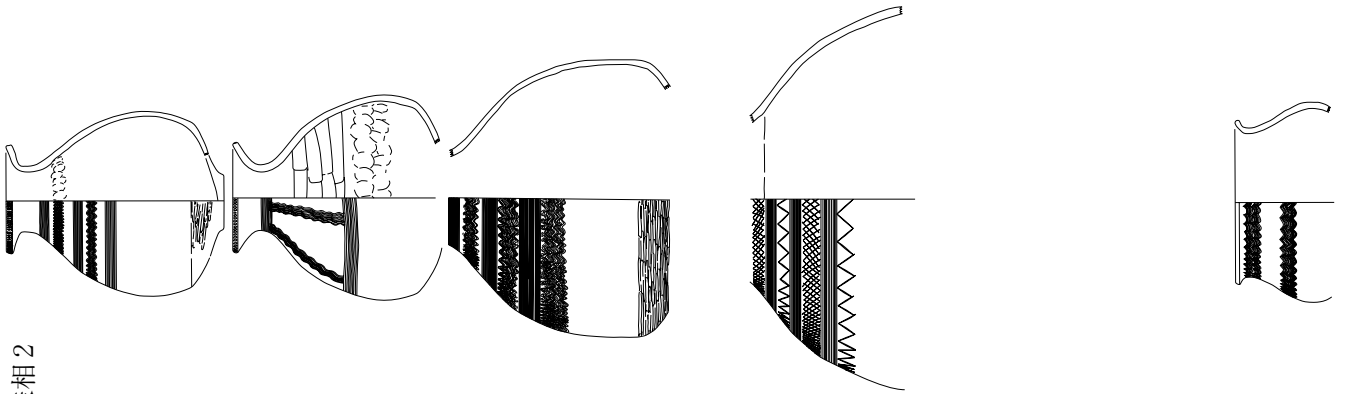
様相 4



様相 3



様相 2



様相 1



第13図 川原タイプ壺の変遷

地域との関係を見ていかなければならない状況にある。

矢作川流域と濃尾地方との併行関係に関しては以下で触れることにしたい。

(1) 時間的区分 - 器種ごとの区分と対応関係

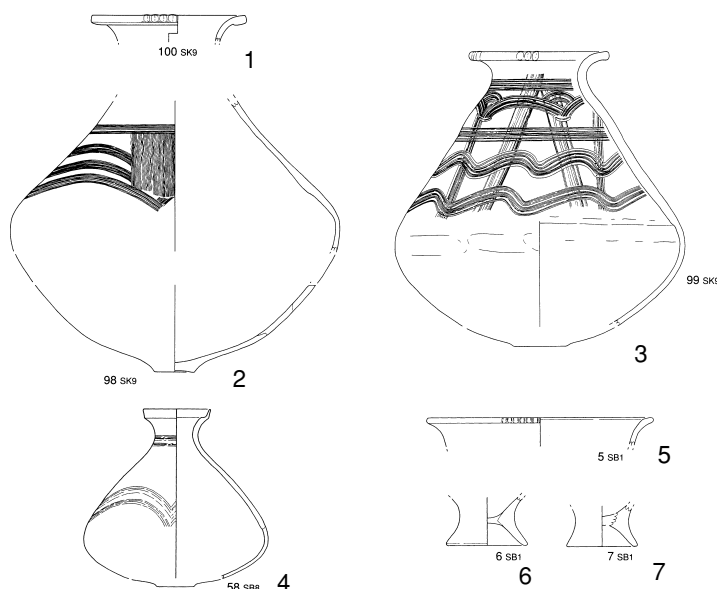
岡島遺跡における区分案は以前にも提示したことがあるが、ここで再び提出する。実際問題として連続的変化のなかでどこに区切りを入れるのかといった趣のある該期土器の区分は何度やっても納得がいかない。注意しなければいたずらな細分に陥ることになるが、紋様及び形態変化から太頸壺については様相1から様相6、細頸壺については様相1から様相5に区分した。

両器種ともに、様相1には別論(石黒1996b)で瓜郷式最終末に含めていたものをまとめた。様相2は体部の形態が長三角形を呈し、波長の大きな波状紋に特徴づけられる段階である。2条沈線区画もこの段階までは安定して認められる。様相3はほぼ中ごろの時期で、体部の肥大化が始まる。太頸壺の様相4・様相5は細頸壺の様相4に対応する。太頸壺様相6と細頸壺様相5が最終段階で、これまで凹線紋系土器が普及すると考えられていた時期に相当する。

川原遺跡については太頸壺を様相1から様相4まで、川原タイプ壺は様相1から様相4まで区分した。太頸壺の区分は岡島遺跡資料を念頭に置いて区分しており独自なものではない。いちおう様相2と様相3は細分を考慮してそれぞれ α 、 β に小区分したが、基本的には文様構成の違いによる。

川原タイプ壺は太頸壺の区分を軸に当てはめたもので、個別に型式学的区分を行うことが難しい資料が多い。両形式の対応関係は太頸壺様相3に川原タイプの様相1・様相2、太頸壺様相4に川原様相3が対応する。川原タイプ様相4は末葉の曖昧な一群に含まれるもので、実在は確定していない。

甕は川原遺跡資料について様相1から様相5まで区分した。基本的な変化の方向は岡島遺跡



第14図 ウスガイト遺跡出土土器

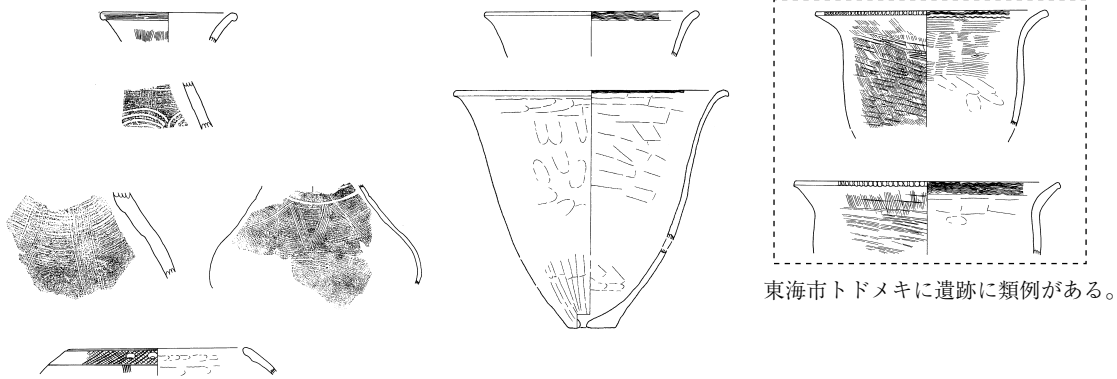
と変わらないが、川原遺跡資料では口縁部の部分圧痕の頻度が低い印象を受けたので、口縁部に連続刻みをもち頸部の屈曲の小さいものをⅠ系列、部分圧痕をもち頸部が彎曲するものをⅡ系列として区分できるかもしれない。様相5は末葉で川原タイプ壺様相5に対応し、太頸壺には対応するものは無い。様相1はハケメ台付甕の成立期であるが、壺との対応では岡島遺跡、川原遺跡ともに様相2、もしくは様相2 α に対応させる。現状では後に触れるように様相1は平底段階であると考えている。

以上のような個別の様相を相互の関係から対照して整理すると中期後葉土器は5段階に区分できるが、実はそれは従前の区分と大差ない。様相1を前に付け加えたに過ぎない。

(2) 凹線紋系土器出現過程の遺跡差

川原遺跡における凹線紋系土器の出現時期は3段階であり、川原タイプ壺の出現と対応関係にある。初現そのものは2段階であるが、3段階には頻度を上げている。これまで、三河地域出土の凹線紋系タタキ甕は、口縁部をヨコナデ仕上げしているのが一般的であり、それゆえに新しいと判断してきたのだが、川原遺跡では口縁部にタタキや刻みを加えるものがあり、この点が他とは異なる。

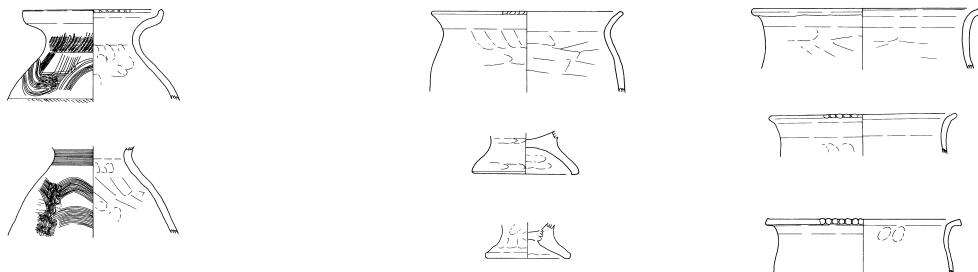
岡島1998 SK03 出土資料 瓜郷式新段階相当資料



岡島1998 III・IV層出土 古井式壺形土器様相1～様相2相当資料



岡島1998 III・IV層出土 古井式壺型土器様相2相当資料



第15図 岡島遺跡 台付甕出現期の関連資料

このような傾向は、川原遺跡の台付甕に形態的にタタキ甕に近いものがあることとも連動していると考えられる。つまり、川原遺跡は凹線紋系土器の在地生産に関して、近い位置にあったと考えられるということである。

これに関して、凹線紋系土器の技術移転がどの経路で行われたのかという点が問題となるが、川原遺跡で出土した石鏃にチャートの頻度が高いことが庄内川流域の様相-勝川遺跡では石

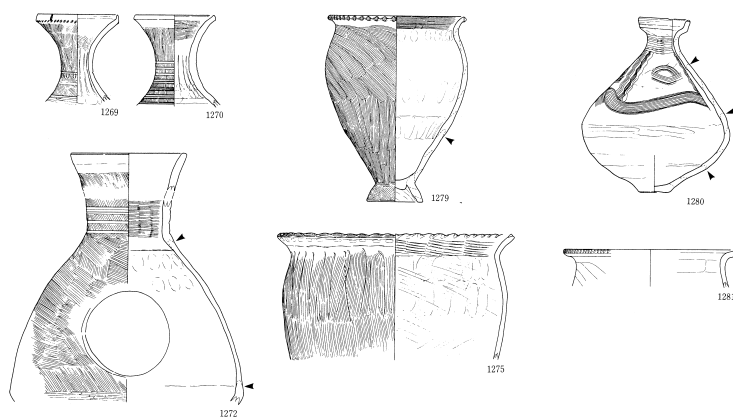
鏃やスクレーパーにチャートの占める比率が高かった-に近いことからみて、内陸経路であった可能性が高い。

南寄りの海岸沿いとなると名古屋台地における凹線紋系土器の展開時期とも絡むことになるが、名古屋台地への展開は実は低地部より遅れており、その可能性は低いだろう。

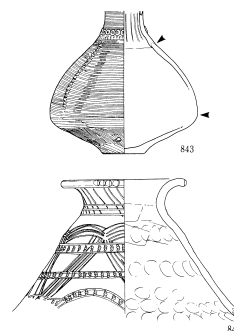
(3) 台付甕成立前後の様相と併行関係

岡島遺跡では瓜郷式新段階から1段階に対応

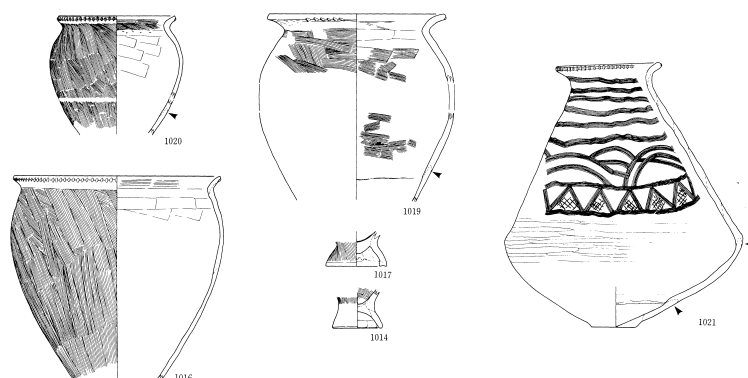
SD19出土資料



包含層資料



SK159出土資料



第16図 阿弥陀寺遺跡併行関係関連資料

するナデ調整平底甕が出土している。遺構一括という点ではなお不十分なところもあるが、予想を裏打ちしている点で評価したいと考える。

岡島 1998:SK03からは、櫛条痕を残した壺、ナデ仕上げの平底甕、ハケメ地に二枚貝調整を加えた甕が出土している。ナデ仕上げの甕は櫛条痕からナデ仕上げに移行したものであるが、ハケメ地を残す甕は口縁内面に櫛描紋をもち折衷的な様相を示している。類例は東海市トドメキ遺跡からも出土しており、貝田町式系甕の一変異といえようか。体部外面の二枚貝調整は阿弥陀寺遺跡からも出土しており、いちおう貝田町式の新段階でも前半期の特徴であると考えているものである。

岡島 1998:Ⅲ・Ⅳ層出土資料は、果たして報告者が信頼する程のまとまりがあるものかどうかははっきりしないけれども、壺は1段階に相当するものがあり、甕にも瓜郷式の形態をよく残し

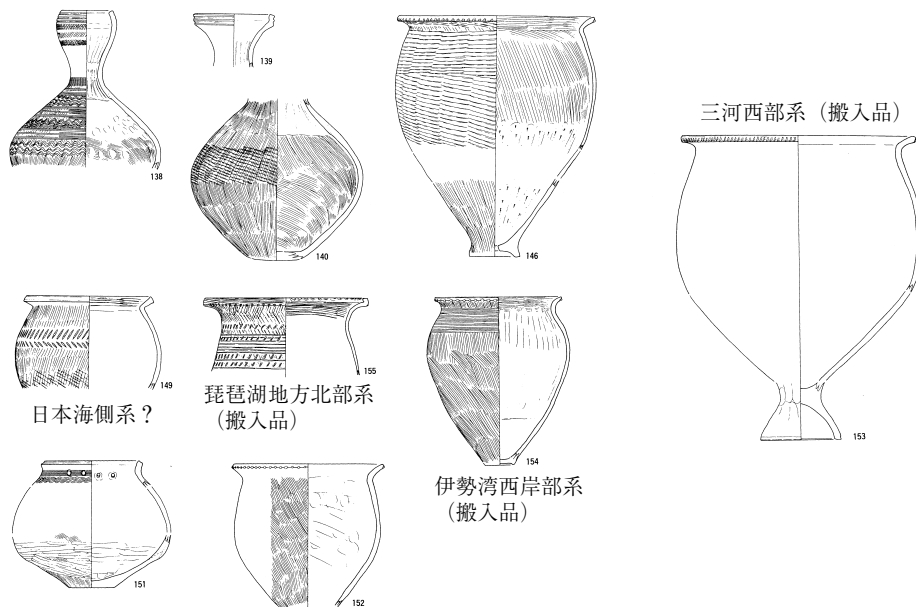
たナデ仕上げの平底甕が出土している。口縁部の部分圧痕に注目するなら一群としてまとめてみたい思いが強くなる。台付甕は果してここにくるのだろうか問題がある。

同じ層位からは在地台付甕も出土しており、対応する在地の太頸壺の特徴から2段階に相当するものと考えられる。川原遺跡では類似する資料が無く、それが異なる甕系列の存在を考えるきっかけにもなった。

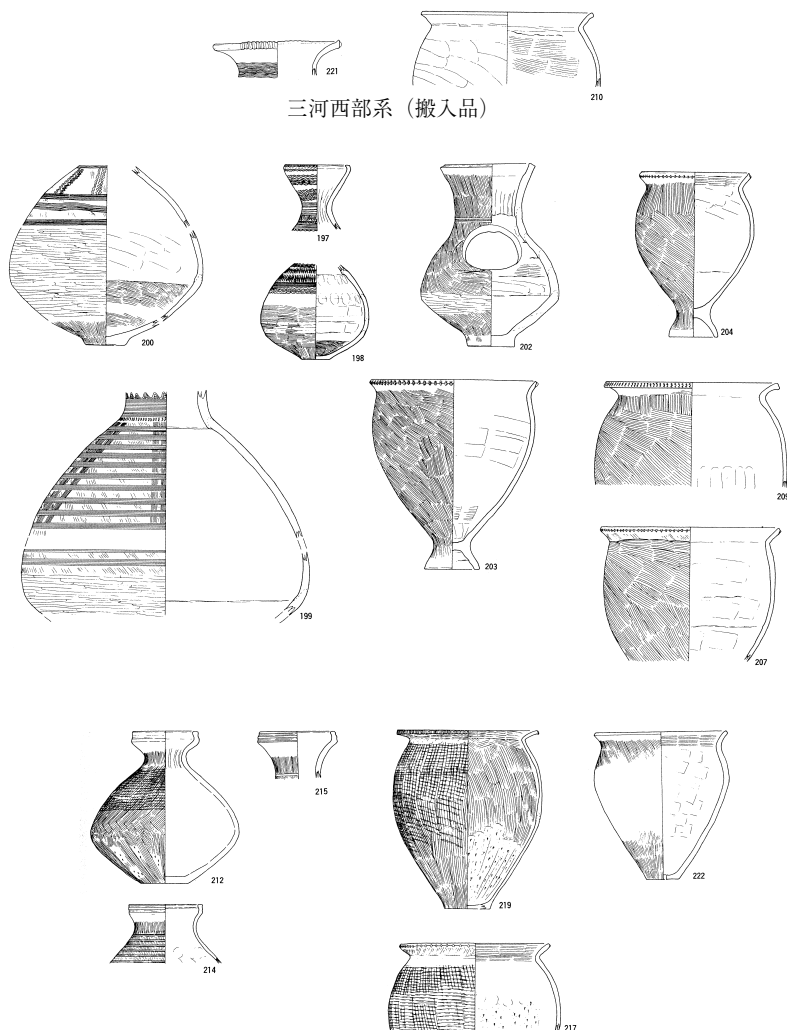
以上を台付甕出現にいたる過程と考えるならば、少なくとも初現期にハケメ台付甕が影響を与えているならば尾張地方の類例との比較が必要となろう。

阿弥陀寺遺跡では矢作川流域から搬入されたと思われる壺が出土しており、相互の検討が可能となっている。特徴を整理すれば、凹線紋系土器出現前後では包含層資料であるが1段階に対応する資料が1点あり、また遺構資料のうち

SB35出土資料



SE02出土資料



第17図 大渚遺跡併行関係関連資料

土坑では2段階に対応する壺が出土している。溝資料では甕も伴い時期的に幅がありそうだが、それでも2段階と接点があるといえそうだ。

大淵遺跡ではSB35住居後廃棄資料から台付甕が出土している。3段階に相当するもので、在地の一群は凹線紋系土器段階の中段階前半に相当する。SE02井戸廃棄資料は壺口縁部の小片で時期の確定は難しいがナデ調整のく字口縁甕も出土しており、2段階に相当しようか。

以上のように2段階に貝田町式系台付甕との接点がある。おそらく尾張地方において1段階には台付甕が成立していたと思われるが、なお確証はない。

矢作川流域における台付甕の出現と在地化の進行は、ほぼ2段階の期間内に終了し、急激に普及したと考えられる。そして川原遺跡では凹線紋系土器の影響を強く受けて独自の甕形態を保有した可能性がある。

初期の台付甕の分布は、矢作川下流域から知多半島北部、例えば武豊町ウスガイト遺跡で頻度が高く形態もよく似ている点からみて、南部の臨海地帯に沿って波及した可能性が高い。

●● おわりに、あるいは尾張地方との併行関係 ●●

以上の記述を要約し、尾張地方との併行関係を整理すると次のようになる。以下では石黒尾張編年と対照させる。

①水神平式以後の弥生中期の条痕紋系土器群は、器種組成の変化からは袋状口縁壺、受口状口縁壺、厚口鉢の出現を指標にして2区分、紋様変化では3区分できる。すなわち、単帯2段構成の波状紋と跳ね上げ紋の共伴段階を最古段階とすることから、当然岩滑遺跡出土資料は中段階を占めることになり初頭には遡らない。岡島遺跡出土資料新相はそれに続き新段階に該当する。以上を、「岩滑式」として括った上でⅠ期とⅡ期に区分し、Ⅱ期はさらに1段階と2段階に2区分する。岩滑式Ⅰ期は尾張編年Ⅱ-1期、岩滑式Ⅱ期1段階は尾張編年Ⅱ-2期、岩滑式Ⅱ期2段階は尾張編年Ⅱ-3期に概ね相当す

る。なお、岩滑式Ⅰ期に属す資料は矢作川流域では希薄である。

②いわゆる瓜郷式の直前段階資料は、長頸壺を基本器種とする組成では瓜郷式に共通している。また大形鉢(鍋)を伴うとなれば、瓜郷式と異なるのは紋様構成や調整法のみということになる。しかし、従来の資料では岡島遺跡でも瓜郷式との類似性はけっして顕著ではなく資料単位でのばらつきが大きことから型式学的には不安定な状況にあると考えられる。今後これらのばらつきが時期的な差として整理される可能性もあるが、ここでは区分せず1単位として再構成するほうが適当と考え、またあえて独立した時期とせず、これを「岡島下層式」に含めることにする。

すなわち、いわゆる瓜郷式直前段階を岡島下層式Ⅰ期、古段階相当を岡島下層式Ⅱ期、中段階相当を岡島下層式Ⅲ期、新段階相当を岡島下層式Ⅳ期と呼び、中期後葉土器の1段階は岡島下層式Ⅳ期に含む。以上のように区分するが、今後一括資料による吟味を必要とすることは、小期もしくは段階区分の可能性をにらんで必要なことは言うまでもないだろう。とくに岡島下層式Ⅰ期は瓜郷式の成立に関係し、また岡島下層式Ⅳ期は壺・甕のナデ調整だけでなく甕が平底であることをも指標とする点で、台付甕の成立過程が今後どのように把握されるかによって変動する余地もあるというように、決して確定したものではないのである。それぞれ、尾張編年Ⅲ-1期、尾張編年Ⅲ-2～Ⅲ-4期、尾張編年Ⅲ-4期、尾張編年Ⅲ-5期に相当すると考える。

③岡島遺跡の台付甕出現期、すなわち中期後葉土器の2段階以後を「岡島中層式」と呼ぶ。そして、2段階から4段階までを岡島中層式Ⅰ期、凹線紋が卓越する5段階を岡島中層式Ⅱ期と呼ぶ。したがって岡島中層式Ⅰ期は2段階から4段階までの3区分を新たに「1段階」から「3段階」と呼び替える。岡島中層式Ⅱ期に段階区分はない。岡島中層式Ⅰ期の各段階はそれぞれ、1段階:尾張編年Ⅳ-1a期、2段階:尾張編年Ⅳ-1a期～Ⅳ-1b期、3

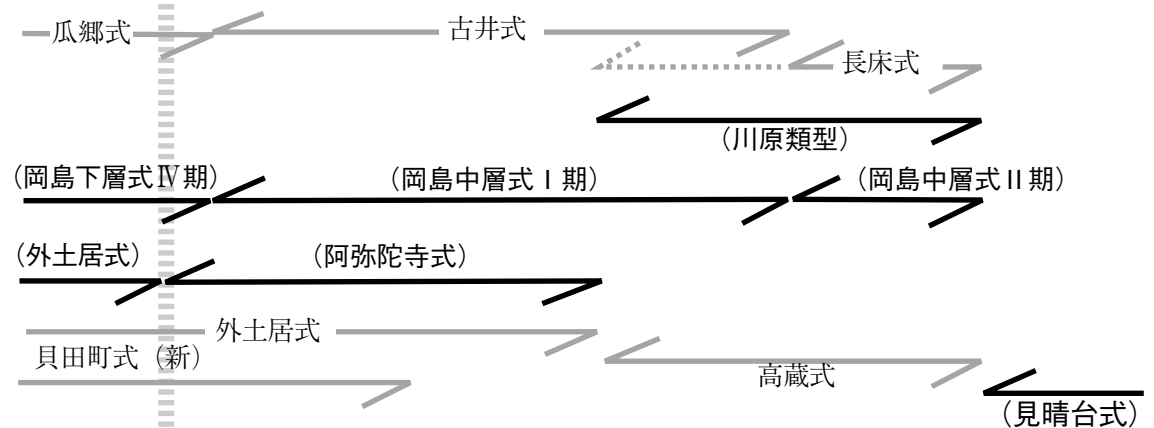
矢作川流域中期後葉土器の区分

		1 段階	2 段階	3 段階	4 段階	5 段階
作業案	岡島／壺	様相 1	様相 2	様相 3	様相 4 様相 5	様相 6
		岡島 凹線紋系土器				
	川原／壺	様相 1	様相 2 α 様相 2 β	様相 3 α	様相 3 β	様相 4
	川原／甕	?	様相 1 様相 2	様相 3	様相 4	様相 5 様相 6
	川原 タイプ壺			様相 1 様相 2	様相 3 様相 4	
		川原 凹線紋系土器				

従来案との対照

岡島区分		IV - 1	IV - 2	IV - 3	IV - 4	
凹線文系土器出現		-----				
朝日区分		VI - 1		VI - 2	VI - 3	
石黒 尾張編年	Ⅲ-5b	IV - 1 a	IV - 1 b	IV - 2 a	IV - 2 b	IV - 3

今回の提示案



2001.10

* 明朝体は既説の名称。ゴシック体は今回提示したものや、今後提示されるであろうもの。
今後吟味・改訂を必要とする。

第1表 時期区分対照表

段階および4段階:尾張編年Ⅳ-2期、岡島中層式Ⅱ期は尾張編年Ⅳ-3期に相当する。

④凹線紋系土器群の成立には遺跡差があり、矢作川下流域および碧海台地周辺では岡島中層式Ⅱ期併行であるのに、川原遺跡では岡島中層式Ⅰ期3段階併行とやや先行する。名古屋台地における凹線紋系土器の成立が尾張編年Ⅳ-3期で岡島中層式Ⅱ期併行であるとするれば、川原遺跡への経路にはのらない。おそらく、その矢作川流域への波及は内陸づたいということになろう。むしろ貝田町式系台付甕の波及経路が尾張平野南部から名古屋台地を経て三河地方に至るというように、伊勢湾岸沿いということになろうか。口縁部部分圧痕手法の分布は尾張平野南部から知多半島北部にかけて頻度が高く、この点で名古屋台地における貝田町式系土器群の展開の実態を把握することが極めて重要である。高蔵遺跡F地点出土土器³⁾が凹線紋系土器を伴わない貝田町式後半土器群であるなら、その詳細を知る上で重要な候補となる。

⑤岡島上層式は今回検討対象とはしなかった。川原中層資料群の一部と上層資料群の一部がその前段階に相当しよう。

⑥岡島遺跡出土資料については上述のように再区分を提示した。一方、川原遺跡出土資料については、凹線紋系土器群が卓越するのが4段階と岡島遺跡に先行し、組成器種にも相違があり固有性が認められるので、これを「岡島中層式・川原類型」と呼び、岡島遺跡資料とは区別する。

参考文献

(財)愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

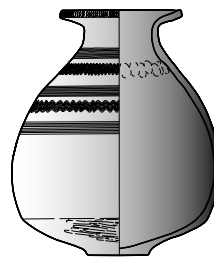
- 1990a『阿弥陀寺遺跡』
- 1990b『岡島遺跡』
- 1990c『名古屋城三の丸遺跡(1)』
- 1991『大淵遺跡』
- 1993a『岡島遺跡Ⅱ』
- 1993b『麻生田大橋遺跡』

- 1995『朝日遺跡Ⅴ』
- 1997『西上免遺跡』
- 2000『朝日遺跡Ⅵ』
- 東海市教育委員会
- 1988『トドメキ遺跡』
- 西尾市教育委員会
- 1994『岡島遺跡』
- 1998『毘沙門遺跡・岡島遺跡』
- 豊橋市教育委員会
- 1963『瓜郷』
- 豊川市教育委員会
- 1993『麻生田大橋遺跡』
- (財)岐阜県文化財保護センター
- 2000『野笹遺跡Ⅰ』
- 浜松市教育委員会
- 1983『国鉄浜松工場内(梶子)遺跡第Ⅳ次調査発掘調査概報』
- 久永春男
- 1956「各地域の弥生土器・東海」『日本考古学講座4』雄山閣
- 紅村弘
- 1964『東海の先史遺跡・総括編』名古屋鉄道株式会社
- 榊原克己
- 1968『寅ヶ島第2貝塚』愛知県立工業高校
- 賛元洋
- 1988「瓜郷式土器の再検討」『転機』第2号
- 石黒立人
- 1990「弥生中期土器にみる複数の系」『考古学フォーラム』1 愛知考古学談話会
- 1996a「尾張・美濃」『YAY』弥生土器を語る会
- 1996b「烏帽子遺跡をめぐる問題群」『烏帽子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 1997「弥生中期前半の濃尾平野北部」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 立松彰
- 1999「ウスガイト遺跡の弥生土器」『紀要』9 武豊町歴史民俗資料館
- 増子康真
- 2000「水神平式土器の研究 ―矢作川上流・下広覧遺跡資料をもとに―」『古代人』60 名古屋考古学会

3) 故田中稔氏が独自に調査された資料である。現在は名古屋市博物館に寄贈され、整理が進められている。資料見学にあたっては学芸員の梶山勝氏に便宜をはかって頂いた。

付論 2

凹線文系土器の波及をめぐって



●● プロローグ ●●

弥生時代中期後葉は、畿内との併行関係で言うといわゆるⅣ様式に相当する。この時期は従来からの在来系土器の系譜を継ぐ土器(以下Ⅲ系と呼ぶ。)と西からの影響で伝播した「凹線文系土器」(以下Ⅳ系と呼ぶ。)とが共存する時期として位置付けられる¹⁾。三河でのⅣ系の受容過程を大まかに言うと、中期後葉の当初は在来系土器を主たる構成要素としているが、やがてⅣ系土器の影響が強まることで様々な器種で凹線文系土器が共伴してみられるようになり、さらに高杯・鉢など新器種が加わることでⅣ系土器が各器種で安定してみられる時期にいたるという動きを示すという²⁾。

本稿ではこの凹線文系土器の波及について、矢作川下流域に所在する岡島遺跡と中流域に位置する川原遺跡とを比較検討する。両者はほぼ同時期に比定できながらも、その様相が異なっていることから、その波及状況は複雑であると思われる。

●● 岡島遺跡の状況 ●●

岡島遺跡は、矢作川下流の沖積平野に位置する弥生時代の拠点集落である。これまでに、県埋文・市教委によって幾度か調査が行われている。今回比較検討の対象資料として、県埋文一次調査SD25、県埋文二次調査SX05、県埋文二次調査SZ07の3遺構を取り上げる³⁾(以下、県埋文一次調査についてはⅠ、県埋文二次調査についてはⅡ、という形に省略する)。池本1993での時期区分ではⅠ

SD25がⅣ-Ⅰ期、ⅡSX05がⅣ-2a期、ⅡSZ07がⅣ-2b期に比定されている。ここでは、川原遺跡との比較の必要性からとりあえず、1段階、2段階、3段階とする⁴⁾。

1段階であるⅠSD25からは、前時期からその系譜をたどることができるⅢ系土器として壺(太頸壺・細頸壺)・甕・大形鉢が(1～7)、Ⅳ系土器には細頸壺と甕がみられる(9～11)。その他、尾張地方の影響を受けた土器として、甕がある(8)。このうち圧倒的主体を占めるものは在来系土器の壺(太頸壺・細頸壺)・甕類である。この遺構からはⅣ系土器はほとんど見られず、これに先立って影響を与えたとされる貝田町系土器群(以下Ⅰ系と呼ぶ。)が一定量見られることが特徴として上げられる(第4図)。

2段階であるⅡSX05からはⅢ系土器としては、壺(太頸壺・細頸壺)・甕・鉢(12～18)が、Ⅳ系土器には広口壺・細頸壺と甕(19～22)が出土している。前時期と比べると、Ⅳ系土器の出土量が増加し、広口壺が見られるようになることが特徴である。こうした点からもさらにⅣ系土器の影響が強くなったと考えてよからう。凹線文も定型化したつくりを呈している。しかし、甕についてはⅣ系の影響はまだそれほど及んでおらず圧倒的多数が在来系のナデ調整台付甕で、Ⅳ系甕は存在はするものの少量である。また、微量とはいえ高杯も見られ(23)、こうした状況が次時期のⅣ系土器の安定化への萌芽と評価できよう(第5図)。

1) 石黒1990a・1991・1996a・1996bなど、石黒氏の一連の研究成果を援用し、これらに従い、Ⅰ系～Ⅳ系と言う表現を用いる。石黒氏によるとこうした系統をⅠ系～Ⅴ系で整理して述べられている。

2) こうした状況を示したものとしては、池本1990・1993、石黒1996aなどがあげられよう。

3) 池本1990・1993のなかで、編年の基準資料となった遺構である。

4) 石黒1996では、この時期を4時期に分けている。筆者の言う1段階を石黒は二分している。土器の形態変遷上は当てはまるものの、遺構ごとに見た場合、石黒の言う1・2期の遺物が一つの遺構から共伴しており、ここでは1つの時期としてくくった。

3段階に比定できるⅡSZ07は方形周溝墓の一部と考えられ、周溝内から遺物が出土している。この方形周溝墓は、全体が検出されたわけではなく全容は分からないが、周溝の4隅のうち少なくとも1辺はつながっていることが判っており、それ以前の四隅すべてが切れる方形周溝墓と異なり、新たな様相を示す遺構である。この遺構の出土遺物もⅢ系土器(24～33)とⅣ系土器(34～41)の一群からなっている。このうちⅣ系土器の一群には、広口壺、細頸壺、無頸壺、甕、高杯がある。広口壺は口縁端部をやや垂下させたもので、口縁部の凹線文も不明瞭になっており、Ⅳ系土器の最終形態を示すと思われる。この36は川原遺跡SB211-91と類似しており併行関係を示す資料といえよう。高杯には皿状杯部のものと水平鍰をもつものとの2種類があり、いずれも杯部から脚部が連続成形で作られている。甕は外面タタキ、内面ケズリの台付甕になっている。一方、Ⅲ系土器には、太頸壺、細頸壺、台付甕があり、大形鉢は見られなくなる。太頸壺のうち受口口縁のものは受口部が退化し痕跡程度になっている。体部文様も無文のもの、区画文や垂下文が退化した文様になっている。台付甕は口頸部の屈曲が強くなり、口縁部が横に開くようになり、体部も丸みを持つようになる。台部も柱状部が発達したものである(第6図)。

以上のように3段階になるとⅣ系土器の器種が各種揃うようになる。また、その出土量も増加し、壺についてはⅣ系土器の方が多数を占めるようになる。その一方、甕についてはその他の器種とは異なりこの時期に至っても在来系のナデ調整台付甕が主体を占めている。Ⅳ系土器の甕はあるもののその出土量はⅢ系土器の甕に比べ格段に少ない。

こうした状況から見て、岡島遺跡ではいち早くⅣ系土器を見ることができ、その後も確実にその数量は増加しているのだが、その定着にはかなり時間を有したことが確認できる。また、最終的にⅣ系土器が定着する3段階に至っても、特に甕については従来の系譜のものが色濃く残っている。一方で、凹線文系土器の情報は確実に取り入れられて

おり、それはⅢ系台付甕の口縁部の横方向への強い屈曲や壺の球胴化志向に現れている。

●●川原遺跡の状況●●

川原遺跡は、矢作川中流域の沖積平野上に位置する。細かい遺物についての記述は本編に譲るが、ここでは岡島遺跡で取り上げた遺構とほぼ同時期と思われる、SK538、SB273、SB201・SB211をとりあげる。Ⅲ系土器からみて岡島遺跡との併行関係は、SK538が1段階、SB273が2段階、SB201・SB211が3段階におくことができよう。

1段階であるSK538からはⅣ系土器は出土しておらず、Ⅲ系土器のみである。その中にはⅠ系土器の影響をうけた台付甕がみられる。ハケをナデ消し、Ⅲ系のナデ甕と折衷させた形の台付甕である(580・581)。こうしたⅠ系土器の東方への影響については一連の石黒氏の研究(石黒1990a・1990b・1996など)や拙稿(鈴木2000)などですでに述べてきたところであり、そうした動きを顕著に示す例といえよう。SK538出土資料は、Ⅳ系土器の有無を除けば、岡島遺跡と同様の傾向を示すといえよう。

次の時期であるSB273になると、壺はⅢ系のものが大部分を占めており、Ⅳ系土器は細頸壺が見られる程度であるが、甕はⅢ系の台付甕とⅣ系の甕が共伴するようになる。このⅣ系土器の甕については、底部が出土しておらずよく判らないが、同時期に比定できるSZ202からは低脚の台を持つものがものが出土していることから、台付甕の形で入っているものと思われる。壺については、268・273のようにⅢ系土器の典型的なものと、太頸壺274のような折衷様相を示すものがある。SB273出土資料は岡島ⅡSX05と比べた場合、甕については様相が異なるが、壺については折衷様相を示す壺を除くとあまり違いを見出すことは出来ない。また、器種も岡島遺跡と差異は見出せない。

ついで3段階のSB201も、Ⅲ系土器とⅣ系土器から成っている。Ⅳ系土器には広口壺、細頸壺、無頸壺、台付甕、鉢、高杯があり、ほぼ全器種が揃っ

ており、Ⅳ系土器が定着した状況が確認できる資料である。一方Ⅲ系土器には広口壺 94 が見られるのみであるが、その形状も頸部がかなり突出しており典型的なものと比べやや異にしている。また、数量もⅣ系土器群が圧倒的多数を占める。壺・鉢・高杯のみならず、岡島遺跡ではこの時期でも少数しか見られないⅣ系土器の甕が多く見られることが特徴といえよう。

SB211 も基本的にはⅣ系土器のみからなっている。広口壺、細頸壺、台付甕、鉢、高杯と各器種揃っている。大部分がⅣ系土器で占められており、図化した遺物の中でもⅢ系土器は 94 のみという状況であり、それもⅣ系土器の影響で胴部がソロバン玉状の形態になっている。

こうした状況から見て、川原遺跡の場合、Ⅳ系土器が初現する時期は岡島遺跡と比べ 1 段階遅れるようであるが、その定着の度合いは早く、その出現期にあたる 2 段階には既に壺・甕が一定量確認できる。ただ、この時点でも高杯はほとんど見られない点でこの地域の他の遺跡と同様である。しかし、3 段階には、この時期の他の遺跡に比べⅣ系土器の比率が非常に高く、他遺跡以上にⅣ系土器が定着した状況が確認され、また、SK538-579～581 のⅠ系とⅢ系の折衷による台付甕や SB273-212・SZ202-712 のⅢ系とⅣ系の折衷の太頸壺のように、西から（ことに尾張地域から）の影響による折衷型土器を生み出すことについてはいち早く行われている状況が見られる。

岡島遺跡

		1段階	2段階	3段階
Ⅳ系	細頸壺	△	△	○
	甕	△	△	△
	広口壺	×	○	○
	無頸壺	×	×	○
	鉢	×	×	○
	高杯	×	×	○
Ⅰ系		△		

川原遺跡

		1段階	2段階	3段階
Ⅳ系	細頸壺	×	○	○
	甕	×	○	○
	広口壺	×	△	○
	無頸壺	×	×	○
	鉢	×	×	○
	高杯	×	×	○
Ⅰ系		△		

(×見られない △微量見られる ○多く見られる)

第1表 岡島遺跡・川原遺跡でのⅣ系出土状況

遺跡間の差異について

以上のことを基に、まずはⅣ系土器の影響のあり方について段階別にみていきたい。

岡島遺跡の場合、器種は限定されるが、1 段階からすでにⅣ系土器の出土例が見られる。Ⅰ SD25 の場合は甕と細頸壺である。こうした状況は併行関係では後出になるので単純に並べることはできないが、東三河の橋良遺跡の SB01-SX01 でも同様の傾向が見られることから、最も早くⅣ系土器で登場するものが細頸壺と甕になると思われる。しかし、1 段階の川原遺跡 SK538 ではⅣ系土器は全く見られない。このことから考えると、当初のⅣ系土器ルートは海岸伝いに伝播したと推察され、この時点ではすべての内容が伝播するわけではなく、限られた一部の情報のみが伝わる程度であったと思われる。一方、この時期には、尾張地域ではすでにⅣ系土器が波及し定着し始めているという(石黒 1990b・1996a ほか)。そうしたなか三河ではこの尾張地方の動きに連動した形でⅣ系土器に押し出

されるようにまずはじめにⅠ系土器がこの地域にドミノ倒しの流入が起こる(石黒 1990b・鈴木 2000)。それを示す資料が岡島Ⅰ SD25-8 や川原 SK538-579 である。こうした現状やⅢ系土器の変遷からみるとこの時期は新たな時期とはいうものの、まだⅣ系土器の影響はほとんど見られず、むしろⅠ系土器の影響を色濃く見せている時期であるといっていよい。

しかし、これに続く2段階、岡島Ⅱ SX05 では、Ⅳ系土器には細頸壺のほか広口壺が加わり、甕も若干量見ることが出来ることから、更にⅣ系土器の影響は強まったと思われる。更に多くのⅣ系土器の情報が伝播したといえよう。また、川原 SB273 でも、壺と甕でⅣ系土器が見られるようになる。しかし、その出土傾向を見ると、岡島遺跡ではⅣ系甕の出土が極めて少なく、ほとんどⅢ系の台付甕に限られるのに対し、この SB273 ではⅣ系の甕とⅢ系の甕が拮抗した量で見ることが出来る。また、そのⅣ系甕も同時期の他遺構出土資料から見て台付甕の可能性が高い。このⅣ系の甕に脚台をつけるということは尾張地方でⅠ系甕との折衷により生まれたものであると考えられることから、川原遺跡へのⅣ系土器の波及は尾張地方を介在したものであることは明白である。一方、壺類についてはⅣ系土器がさほどの量は見られず、Ⅲ系土器の壺が多数を占める。また器種では高杯が欠落しておりこれらの点については岡島遺跡Ⅱ SX05 と大差がない。しかし、この時期と思われる壺の中で、212 や 712 のように、外形は在地系土器の太頸壺であるが、体部の文様は凹線文系土器の文様構成を持つ折衷型壺がみられる。こうした壺の状況や甕の出土量からみても、岡島遺跡とは異なった受け入れ方を行っていることは明らかである。これらの点から見て、川原遺跡へのⅣ系土器の影響ルートとして、岡島遺跡への伝播とは異なるルートの存在を想定できる。現在のところこのルートではⅣ系土器のうち、甕についてはいち早く定着し、共存する。しかし、壺についてはⅢ系土器と折衷しながら

変化するという、共存化というより変容化というような異なる動きを見せるようだ。

3段階になると両遺跡で高杯や鉢といった器種が登場し、全ての器種でⅣ系土器がみられるようになる。これは矢作川流域のその他の同時期の遺跡を見てもこの流域にⅣ系土器が定着した様相を見ることが出来る。そういった点でひとつの画期を設定できよう(鈴木 2001)。しかし、岡島遺跡と川原遺跡とではその定着度には差が見られる。

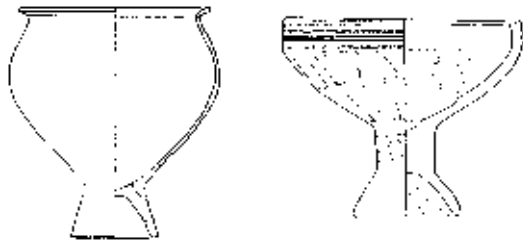
これまで考えられてきた三河地方でのⅣ系土器影響下での土器様相については、高杯と壺に特徴をもつ凹線文系土器様式と、壺と甕に特徴を持つ在地系土器様式(長床様式)との共存という構造を想定してきた(贅 1990・1995)。事実、岡島遺跡の様相を見る限りではそうした状況があてはまる。また、矢作川流域ではないが同時期で近在する知立市天神遺跡 SI9 についても同様の状況が確認できる(第7図)。

しかし川原遺跡の場合、他遺跡では最終段階まで在地色を強く残していたとされる甕に至るまで、すべての器種において凹線文系土器様式に強く彩られた土器様相を呈している。その他に SB200 出土の円窓付土器 Na61・62 をみると円窓部は焼成前穿孔であり、また、その形も当初Ⅰ系土器であった円窓付土器が凹線文系土器と折衷することで変化したものと思われ、尾張地方で同時期にみられるものと極めて類似している。こうしたことからみて、三河地方でこれまで考えられてきた様相とは異なるものとなっている。

しかし一方、同時期の岡島Ⅱ SZ07-27 は、確かに外見上は円窓付土器であるが、円窓部が焼成後穿孔であること、またその壺の形態は明らかに在来系土器の受口口縁太頸壺であることからⅢ系土器の体部中央を穿孔したもので、もともと存在した在地系土器を変化させた模倣土器である。また、同時期と想定できる岡島遺跡Ⅰ SB09 ではⅣ系土器である高杯に柱状の脚部をつけた形状のものがみられる⁵⁾。また、知立市の天神遺跡 SI5 の台付甕に

5) 松井・鈴木 1994 P56 にある。またこの資料については既に石黒 1994 の中で凹線文系土器の変容土器の例として示されている。

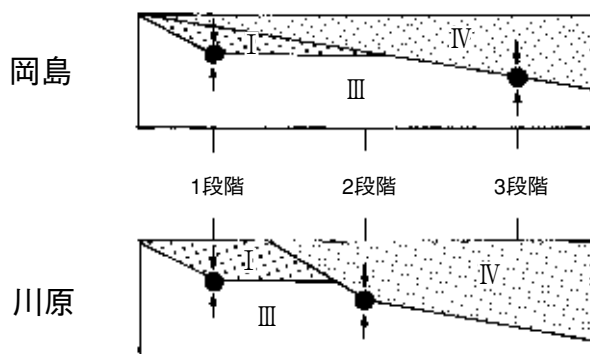
ついても外見は在地系のナデ甕であるが、ナデ以外の要素はⅣ系の台付甕となっており、やはり3段階でのⅢ系とⅣ系の土器の折衷がみられる⁶⁾(第1図)。



第1図 3段階でのⅢ系とⅣ系の折衷土器
(左：天神遺跡 右：岡島遺跡)

こうしたことから見ても、川原遺跡でみられるⅣ系土器の波及については、岡島遺跡でのそれとは異なり、2段階からとやや先行する形であったⅣ系土器との折衷が3段階を中心に行われたものであることが判る。

こうした様相の異なる遺跡が同時期に所在することから見て、凹線文系土器についての矢作川流域への波及状況については尾張地方経由で異なる2つのルートの存在が考えられる。それぞれのルートをここでは仮にAルート、Bルートとしておく。



第2図 両遺跡での各系統の分布状況
(●が折衷ポイント)

●● 凹線文系土器のルートをめぐって ●●

これら2つのルートを検証してみよう。

Aルートは、尾張地方を核とした動きの中ではⅣ系土器に限らず、それ以前にもⅠ系土器の影響やⅢ系土器の尾張地方への流入など従来から色々な形で取り上げてきたルートである。これまで岡島遺跡や天神遺跡など、この時期の遺跡の土器様相に多大の影響を及ぼしている。その例として、この時期以前のいわゆる「瓜郷式」の成立を理解していく上ではこのルートは欠かすことの出来ないものとされる(贅 1988・石黒 1990a)。また、台付甕の成立・東方への展開を考えていく上でもこのルートが東方へ与える影響が大きいと推察される(石黒 1990b・1991)。また、それ以东への伝播にも影響を与えたものとも理解できよう。またこのAルートについては尾張から三河へという動きもさることながら、三河から尾張へという逆方向の土器の搬入経路となっている可能性もあり、尾張地方西南部のこの時期の遺跡では多くの出土例がある。

一方Bルートは、これまであまり注目されていなかったものである。しかし、川原遺跡の調査の結果、これまで岡島遺跡などで見られたⅣ系土器のあり方とは異なった傾向を見ることが出来ることから従来のルートとは異なる道筋を想定したものである。これには川原遺跡での石器に、岡島遺跡や天神遺跡ではほとんど見ることのできない打製の剥片石器が多量に見られることや、凹線文系土器出現期以前に岡島遺跡で春日井方面(庄内川流域か)の胎土傾向を示すものが確認されている(池本・永草 1990)ことがその一例としてあげられる。こうしたことからこのルートはこの時期以前にも西三河地方へ様々な影響を及ぼしてきたと考えられる。Aルートとの違いは西から東へという一方通行経路であった可能性が示唆できよう。また、この経路についても川原遺跡の土器の状況を見る限りでは、まずはⅠ系土器が波及し、ついでⅣ系土器が波及するというドミノ倒しの動きを示す点ではA・B両ルートとも変わらないと思われる。そして

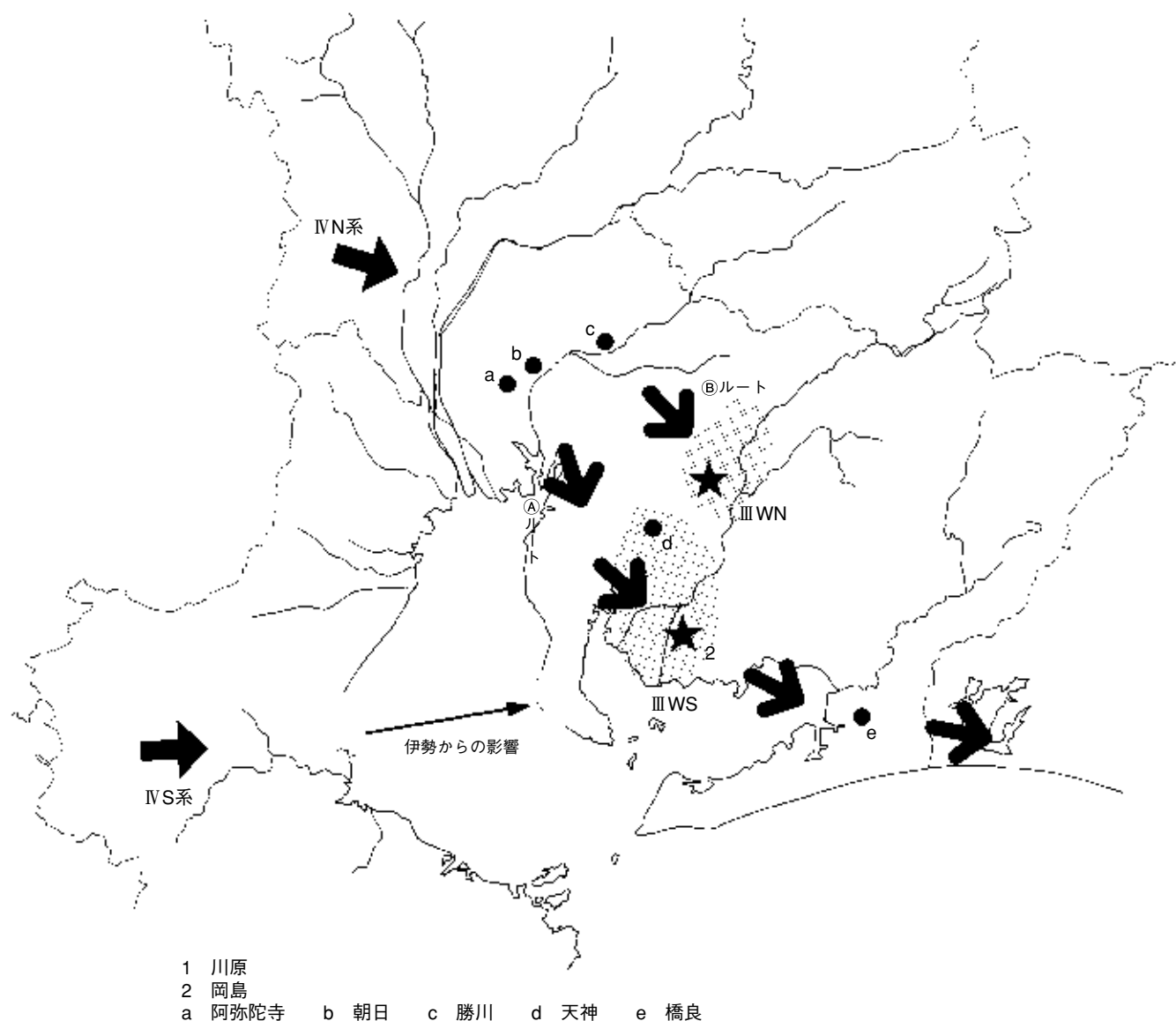
6) 岡本 1987 P23 No 10 が該当する。SI5 は SI9 と同時期にあたるとされている。

これらのルートはともに尾張地方を起源としたものと考えられることから、その内容については本来は大差ないと思われるが、その波及については、土器・石器ともに岡島遺跡と川原遺跡ではその状況が異なることからみて、このルート差のなかには定着する際の差も反映している。もっともこれについては、ルートというより、もともとその遺跡が持つ性格をも反映していることも否定できない。

従来示されていた2つの異なる土器様式の共存という様相は、岡島遺跡や橋良遺跡の在り方から見てAルートでの影響により成立したものと考えられる。これに対し、Bルートは新しい土器様式(=凹線文系土器)を全面的に取り入れていく形で波及

していったと考えられ、これが川原遺跡でのIV系土器の定着状況に現れているといっても過言ではなからう。

一方、海沿いには、Aルートとは別に伊勢湾を介しての伊勢・伊賀地方との関係も考えられる。こうした点については既に深沢1994によって高杯の技術系譜にその色が濃厚であることが示されている。その一方で壺・甕の技術系譜については尾張地方とのつながりの方がより深いことも示されている。こうしたことから海に近い岡島遺跡などではそうした伊勢地方からの影響も加味する必要もあり、それが異なった様相を生み出し、その結果2つの異なる土器様相の共存を生み出し、それがさらに東



第3図 三河への凹線文系土器の動き

三河へという形をとっていったとも考えられよう。

このようにこの時期には様々な二面性をもつ。そこには、Ⅲ系とⅣ系という土器系統の二面性もさることながら、おそらくは遺跡様相の二面性も含むという概念でくることが出来るのではないかと思われる。これについては、蔭山 1996 において、堅穴住居の地域性のなかで類型の差異を示しているが、それが川原遺跡と岡島遺跡間で生じていると仮定すればこの二面性が成り立ちうる⁷⁾。しかしながら、この遺構の様相差については地域性よりむしろその遺跡の立地の差が、その原因として考えられているが、それ以外の時期にこのような立地による差が明確に見られないことから、この差もⅣ系土器波及時の温度差に現れているともいえよう。その様相差を、内陸部を核とするⅢ WN 系と海岸部を核とするⅢ WS 系という形で整理したい(第3図)⁸⁾。それらの遺跡の例として、前者は川原遺跡が、後者は岡島遺跡をあげることができよう。また、現状ではⅢ WS 系を示す遺跡の事例の方が圧倒的に多く、明確な境界線を示すことができない。それは今後の課題である。

●● エピローグ ●●

今回、2つの遺跡の比較を通して、この時期同時期ながら異なった動きが同一の河川流域の狭い範囲内でも起きていることが明らかになった。これは土器の影響が単純な一つのルートで片付けられない複雑さを示している。

このⅣ系土器の影響下に入る時期というのは、社会の大きな変成期あたると考えられ、さまざまな事象で変化が見られるという(石黒 1991)。凹線文系土器の波及にはその後の社会の変化へのステップとしてその様相を見極めていく必要があると思われる。

最後に、今回この様な機会を与えてくれた服部

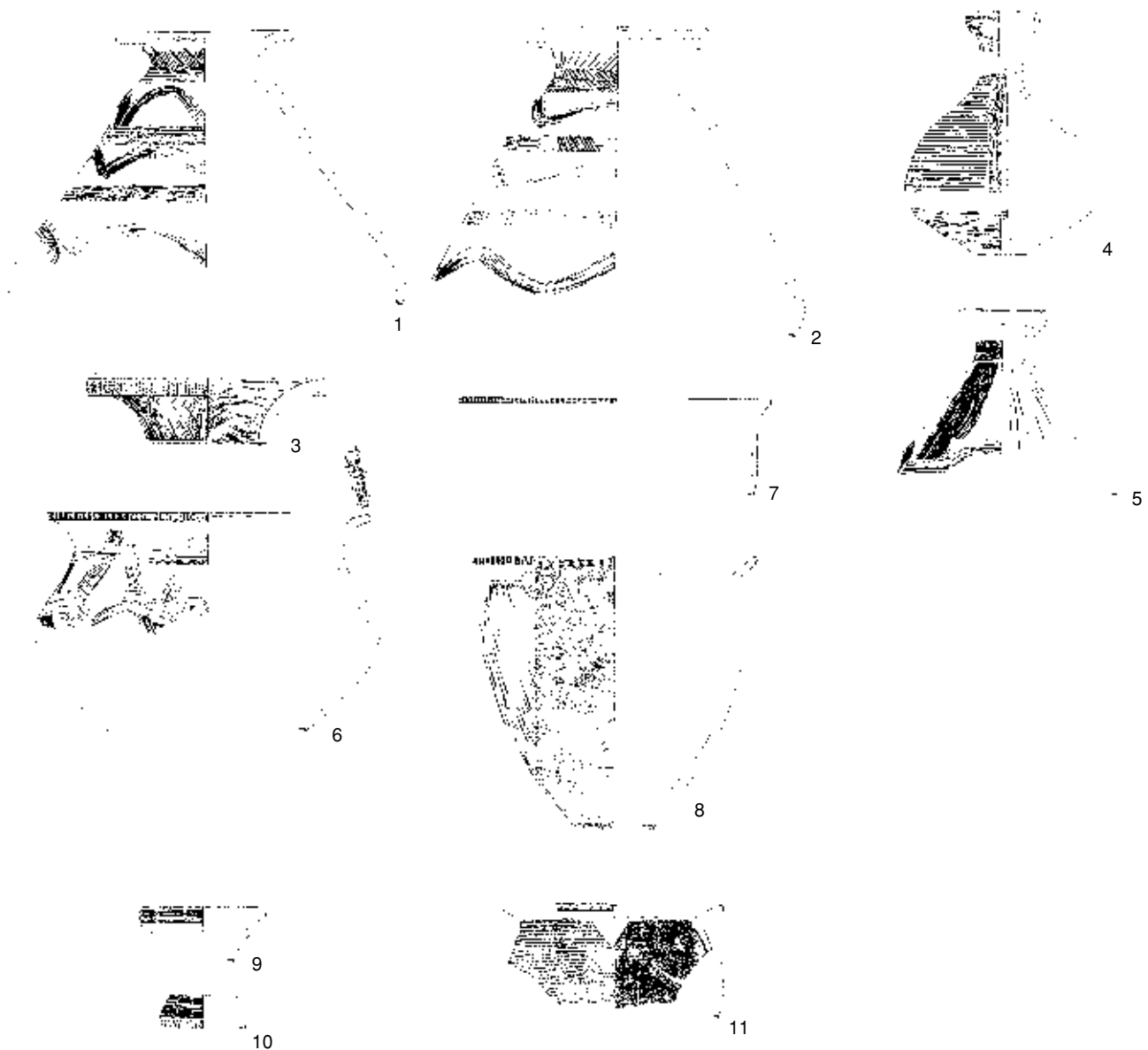
信博氏、石黒立人氏に厚く感謝いたします。

参考文献

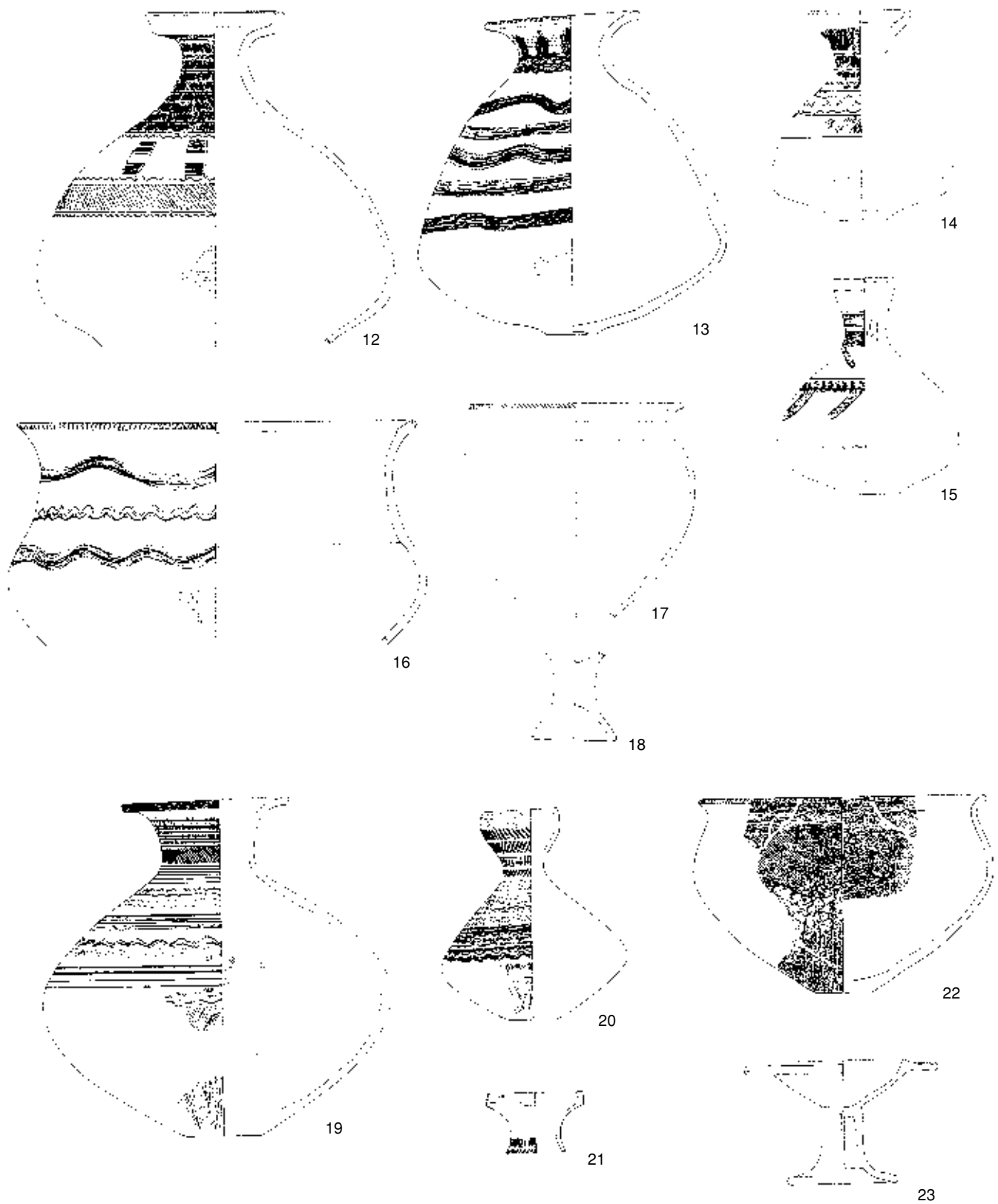
- 池本正明
 1990 「岡島Ⅰ式～Ⅳ式の設定」『岡島遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 1993 「岡島Ⅰ式～Ⅴ式の設定」『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 池本正明・永草康次
 1990 「岡島遺跡出土の土器胎土に関する考察」『岡島遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 池本正明・永草康次
 1993 「岡島遺跡の土器胎土」『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 石黒立人
 1990a 「弥生中期土器に見る複数の系」『考古学フォーラム』1
 1990b 「弥生時代の遺構と遺物」『阿弥陀寺遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 1991 「弥生中期土器に見る複数の系」その2『大淵遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 1994 「凹線紋系土器期における変異」『考古学フォーラム』5
 1996a 「烏帽子遺跡をめぐる諸問題」『烏帽子遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 1996b 「尾張・三河・美濃」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム
 石黒立人・堀木真美子・五藤そのみ
 1994 「朝日遺跡の弥生時代石器をめぐる」『朝日遺跡Ⅴ』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 岡本茂史他
 1987 「天神遺跡」『西中遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』知立市教育委員会
 蔭山誠一
 1996 「堅穴住居の地域性が表れる背景 - 弥生時代中期後葉における伊勢湾沿岸地域を中心として -」『年報 平成7年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 小林久彦
 1994 『橋良遺跡』豊橋市教育委員会
 鈴木とよ江
 2000 「西三河における台付甕の成立をめぐる」『三河考古』13号
 2001 「三河」『弥生土器の様式と編年 東海』木耳社(印刷中)
 永草康次
 1994 「伊勢湾岸流域の土器胎土の分析」『朝日遺跡Ⅴ』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 贅元洋
 1988 「瓜郷式の再検討」『転機』2号
 1990 「三河の弥生中期の土器」『伊勢湾沿岸の弥生中期をめぐる諸問題』
 1995 「長床式の構造」『三河考古』8号
 贅元洋・前田清彦
 1996 「三河」『YAY』弥生土器を語る会
 深沢芳樹
 1994 「尾張における凹線紋系出現の経緯—朝日遺跡出土土器の検討から—」『朝日遺跡Ⅴ』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 松井直樹・鈴木とよ江
 1994 『岡島遺跡』西尾市教育委員会

7) 蔭山 1996 において、中期後葉の伊勢湾岸地域の堅穴住居の地域性を、尾張型・伊勢三河型という二類型で提示している。このうち、伊勢三河型の例として天神遺跡をあげている。この天神遺跡については岡島遺跡と同様の土器様相を示している。一方、川原遺跡での堅穴住居の状況は天神遺跡とは異なっている。こうした点を踏まえ、岡島遺跡を天神遺跡で置換してみると、岡島遺跡と川原遺跡の違いを示す例としてあげられよう。

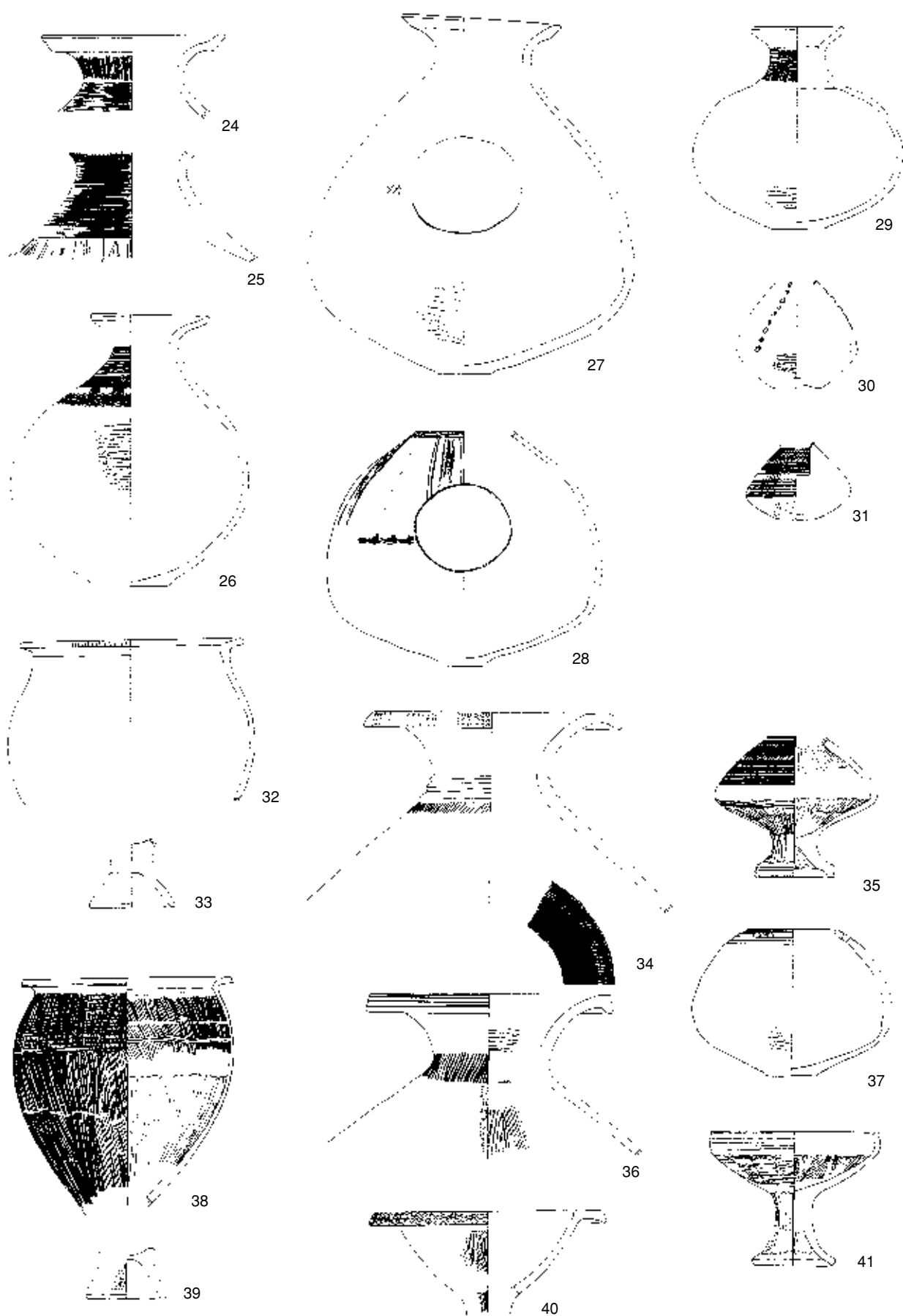
8) 石黒 1996b で示された甕についての編年案のなかで、東西の三河地域の差異を西三河をⅢ W 系、東三河をⅢ E 系としている。これを参考にし系統を提示した。



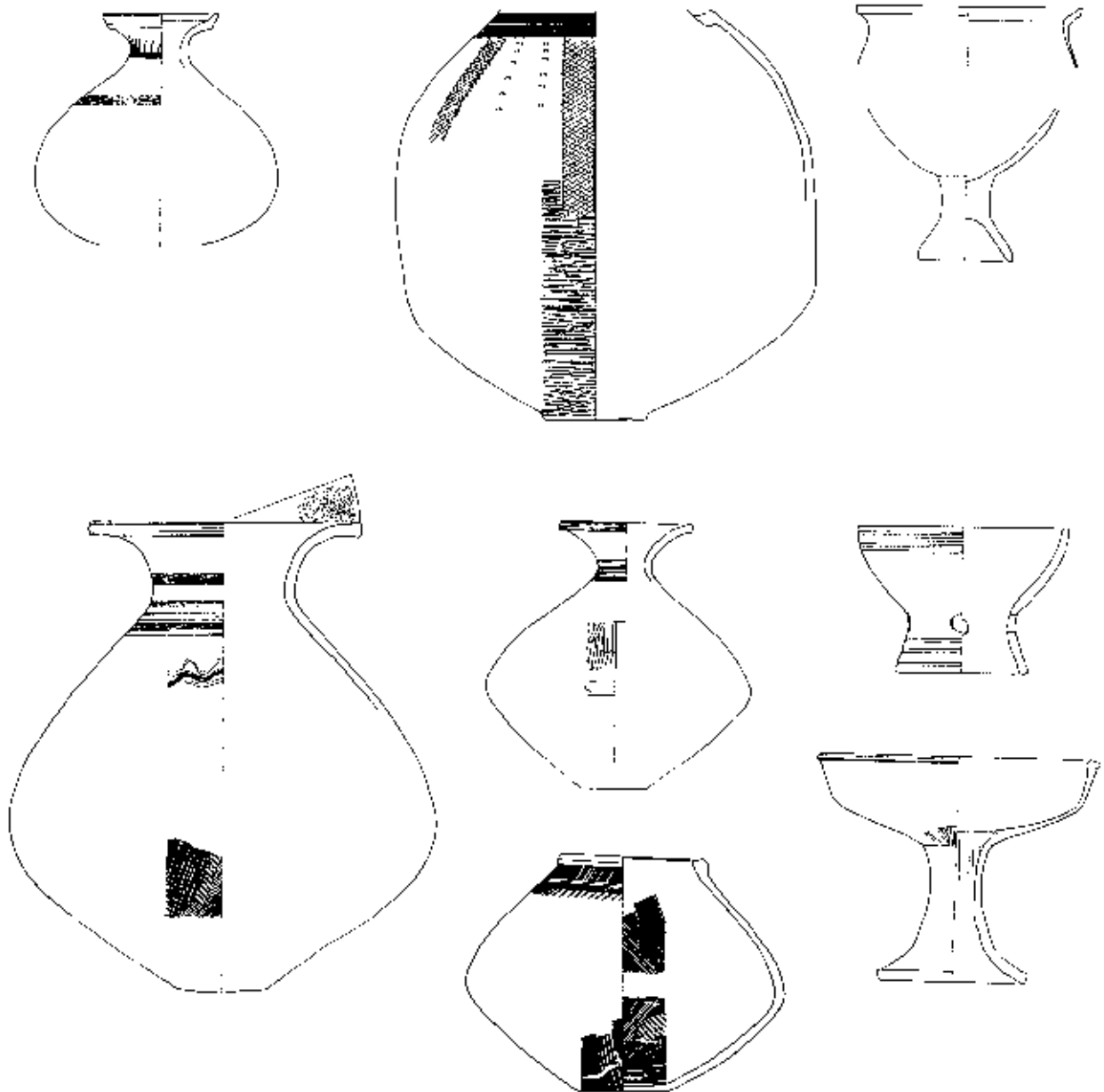
第4図 岡島遺跡Ⅰ SD25 主な出土遺物 (S=1/6)



第5図 岡島遺跡ⅡSX05 主な出土遺物 (S=1/6)



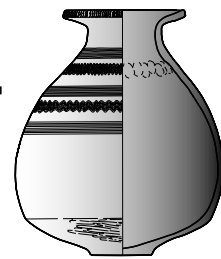
第6図 岡島遺跡Ⅱ SZ07 主な出土遺物 (S=1/6)



第7図 天神遺跡 SI9 主な出土遺物 (S=1/6)

付論 3

川原遺跡出土の石製舌について



●● はじめに ●●

川原遺跡の平成10年度の調査で銅鐸に伴ったと考えられる石製舌が出土した。弥生時代を代表する遺物である銅鐸は、近年、加茂岩倉遺跡出土資料や九州には銅鐸は存在しないとされた従来の通説を覆した吉野ヶ里遺跡出土例などを含め全国で500例近くが出土し、様々な研究が繰り広げられている。しかし、銅鐸とセットとなるはずの舌(棒)に関しては、極めてその出土例は少なく、問題にされることはほとんどなかった。そこで本論では全国より出土している舌を集成し、それらから考えられる川原遺跡出土舌についてその位置づけを考えてみたい。

●● 川原遺跡出土の石製舌について ●●

川原遺跡より出土した石製舌については、Ⅱにおいて既に述べたが、再度、出土状況及び遺物の概要について説明を加えておきたい。

石製舌が出土したのは、川原遺跡の最終調査面となる98区のほぼ中央部南よりで検出されたSZ504の開口部付近であり、銅鐸本体のような埋納された痕跡は認められず、単体で廃棄された状態で出土した。Ⅱにおいて詳述したごとくSZ504は、方形周溝墓というよりは祭壇的な性格を有する方形周溝状遺構と考えられ、この遺構の周辺からは大形石庖丁や赤彩された石鏃などが出土している。遺構の所属時期は、古井式の前半段階におくことができ、今回の調査で確認された弥生中期の墓域の後半段階(Ⅰ-2期、方形周溝墓の登場段階)を象徴する遺構である。舌の廃絶時期は、少なくともこの遺構が機能していた古井式前半段階以前と推定することができる。

川原遺跡出土の舌は、在地の石材であるホルン

フェルスを使用しており、現状は、上端部の一部と下部を欠損しているが、現存長5.5cm(推定復元長6.5cm)、幅1.5cm、重さ11gを測る。全体の形状は、上部先端を丸く仕上げ、下端に向かってわずかなふくらみをもつ棒状を呈している。上端部には、両側より径4mm程度の穿孔が施され、垂下するための紐を通したと考えられる。注目すべきは、下半部にみられる敲打によると考えられる著しい敲打痕の存在であり、側縁部分で特に強く、一部表裏面に及んでいる。銅鐸の内面突帯と激しい接触があったことが推測される。

●● 各地より出土した「舌」 ●●

現在までのところ、全国各地で出土している舌および舌状石製品として報告されている事例は、一覧表に示したとおり26遺跡36例(小銅鐸に伴った7例を含む)を数える。その内訳は青銅製10点、石製23点、銅鏃転用舌3点である。

銅鐸と舌がセットで確認された例としては、鳥取県泊出土例(銅鐸内面より2本の青銅製舌が出土)、兵庫県慶野中ノ御堂出土例(青銅製舌)、和歌山県太田黒田遺跡出土例(石製舌)がある(他に和歌山県山地より出土した銅鐸内にも銅製舌があったとされるが、銅鐸本体・舌ともに所在不明となっている)。これらに共通するのはいずれも外縁付紐Ⅰ式段階の銅鐸である点で、いわゆる「聞く銅鐸」を端的に示している。

舌に使用された材質は、現状では青銅製のものと石製のものがみられる。しかし、時期は異なるが愛媛県東宮山古墳出土の馬鐸には有機物(骨)が舌として使用されており、他に木製のものもあったとすると、舌の材質には様々なものが使用されていたと考えられる。

舌の形状は、青銅製舌はすべて頭部に紐を通すための円環状の穿孔を持つものであるが、石製舌はバラエティーに富む。大きく3つに分類することができる。一つは川原遺跡例のような頭部に穿孔を持つものであり、もう一つは八王子遺跡例のように紐掛け部分を作り出すものである。兵庫県平方遺跡出土例は、紐掛けのために溝を作り出したのち穿孔を加えており、両者の特徴を組み合わせた形状となっている。また、和歌山県太田黒田遺跡例のように加工を一切加えず、自然の棒状の石材をそのまま使用しているものも若干認められる。

舌の大きさについては、重量が公表されていない資料が多く長さとの相関関係は不明である。しかし、長さのみに注目すると高知県田村遺跡群(西見当)出土の銅製舌を除けば、概ね5～8cm程度のグループと10～15cm程度のグループに区分することができる。使用される銅鐸本体の大きさによって舌の長さも規定されていた可能性が考えられよう。

舌の使用痕に関しては、確実に中期の包含層中より出土した舌は、舌の下部に明瞭に敲打痕が認められる(川原遺跡出土例や宇木汲田遺跡出土例は特に顕著である)のに対し、後期の包含層中より出土した舌は、丁寧に研磨されたものが多く、銅鐸と接触する際に生ずる敲打痕は認められない。

舌の出土状況に関しては、銅鐸本体が特徴的な埋納坑より出土するのに対し、そのほとんどが包含層中からの出土である。

●●まとめ●●

川原遺跡より出土した石製舌についてまとめておきたい。まず、舌の大きさが推定長6.5cmと小さく、小銅鐸に伴う可能性も考えられるが、現状では東海地方出土の小銅鐸は弥生後期以降のものばかりであり、中期に属するものは認められない

ことから、小銅鐸に伴ったと考えるよりは八王子銅鐸のような20cmクラスの小型の銅鐸に使用されたと想定するのがより妥当だと思われる。

次に使用痕の状態より、具体的にどのタイプの銅鐸に伴ったのか考えてみたい。舌は少なくとも古井式前半段階には、破損して廃棄されたと考えられ、その点よりみれば、扁平紐式銅鐸以前の銅鐸と考えられる。一般的に「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へと銅鐸の機能が変化したと説明されるが、具体的に銅鐸の内面突帯のすり減り状況に関しては、外縁付紐Ⅰ式段階までは顕著に見られ、外縁付紐Ⅱ式はわずかに残る、さらに扁平紐式段階はほとんど確認できないとされる¹⁾。川原遺跡出土の石製舌は、ホルンフェルスという硬質の石材に挟りが入るほどの敲打痕が残っており、銅鐸内面のすり減り状況を考慮するならば、外縁付紐Ⅰ式銅鐸であった可能性が極めて高いと考えられる。現在のところ三河地方において最古段階の銅鐸は外縁付紐Ⅱ式段階の千両銅鐸であるが、川原遺跡で存在した銅鐸が外縁付紐Ⅰ式であったとすれば、尾張と同様に外縁付紐Ⅰ式段階には銅鐸文化圏に入っていたと推定されよう。

謝辞

本稿を草するにあたり、次の各氏より種々のご教示を頂いた。深く感謝の意を表する次第です。

佐原 真、春成秀爾、難波洋三、井上洋一、七田忠昭、田島龍太、岡崎正雄、松本岩雄、錦田剛志、湯村 功、野島 稔、佐伯英樹、平賀大蔵、森 勇一、三木 弘

1) 春成秀爾氏ご教授による。また、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターの松本岩雄氏のご好意により、荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡出土の銅鐸の内面のすり減り状況を確認させていただいた。菱環紐式・外縁付紐Ⅰ式は明瞭に内面のすり減り状況が認められ、外縁付紐Ⅱ式はわずかに、扁平紐式はほとんど認められなかった。

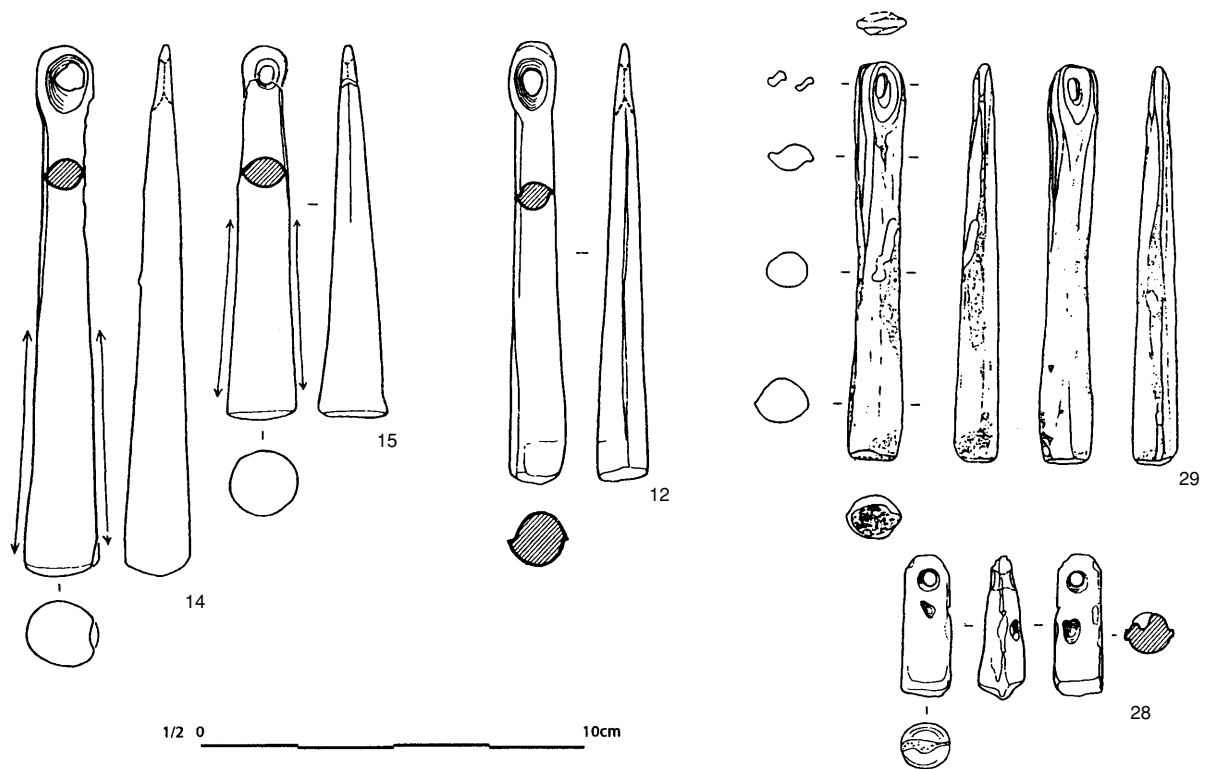
番号	遺跡名	出土地	銅鐸の形状	舌の材質	舌の長さcm	舌の重量g
1	川原遺跡	愛知	—	石製(ホルンフェルス)	5.5(6.5)	(11)
2	八王子遺跡	愛知	外縁付鈕Ⅰ	石製(安山岩)	6.5	25.9
3	角江遺跡	静岡	—	石製(凝灰質珪質粘板岩)	5.3	13.3
4	阿津里貝塚	三重	—	石製	—	—
5	白浜遺跡	三重	小銅鐸	石製(珪質泥岩)	11.7	70
6	下之庄東方遺跡	三重	—	石製(粘板岩)	9.6	—
7	野尻遺跡	滋賀	—	石製(安山岩系?)	9.6	—
8	雁屋遺跡	大阪	扁平紐	石製(塩基性凝灰質点紋片岩)	6.8	48.8
9	雁屋遺跡	大阪	扁平紐	石製(花崗岩質砂岩)	10.5	78.5
10	太田黒田遺跡	和歌山	外縁付鈕Ⅰ	石製(緑色片岩)	11.4	—
11	上ノ段遺跡(山地)	和歌山	不明	青銅製	—	—
12	慶野中ノ御堂遺跡	兵庫	外縁付鈕Ⅰ	青銅製	11.8	—
13	平方遺跡	兵庫	小銅鐸鋳型	石製(片岩)	6.7	—
14	池ノ谷遺跡(泊)	鳥取	外縁付鈕Ⅰ	青銅製	14	—
15	池ノ谷遺跡(泊)	鳥取	外縁付鈕Ⅰ	青銅製	9(10?)	—
16	青谷上寺地遺跡	鳥取	扁平紐 突線紐	石製	7.1	—
17	青谷上寺地遺跡	鳥取		石製	8	—
18	青谷上寺地遺跡	鳥取		石製	7.1	—
19	青谷上寺地遺跡	鳥取		石製	7.5	—
20	青谷上寺地遺跡	鳥取		石製	9.5	—
21	青谷上寺地遺跡	鳥取		石製	8.5	—
22	青谷上寺地遺跡	鳥取		石製	9	—
23	青谷上寺地遺跡	鳥取		石製	8.1	—
24	青谷上寺地遺跡	鳥取		石製	6.7	—
25	長瀬高浜遺跡	鳥取	小銅鐸	石製(碧玉)	5.5	—
26	タテチョウ遺跡	島根	—	石製(硬質頁岩)	9	21.16
27	前立山遺跡	島根	—	石製	14.6	—
28	田村(西見当)遺跡	高知	—	青銅製	3.8	—
29	宇木汲田遺跡	佐賀	—	青銅製	10.5	—
30	愛野向山遺跡	静岡	小銅鐸	銅鏃転用	3.5	—
31	草山遺跡	三重	小銅鐸	銅鏃転用	4.1	—
32	松原内湖遺跡	滋賀	小銅鐸	銅鏃転用	3.5	—
33	東奈良遺跡	大阪	小銅鐸	青銅製	8.3	—
34	原田遺跡	福岡	小銅鐸	青銅製	3.1(4.3?)	—
35	板付遺跡	福岡	小銅鐸	青銅製	5.3	—
36	浦志遺跡	佐賀	小銅鐸	青銅製	5.4	—

※舌の計測値について、服部信博 2000「銅鐸に伴う「舌」について」『まいぶん愛知』 No.60に掲載した一覧表に一部誤りがありましたので、この一覧表をもって訂正させていただきます。

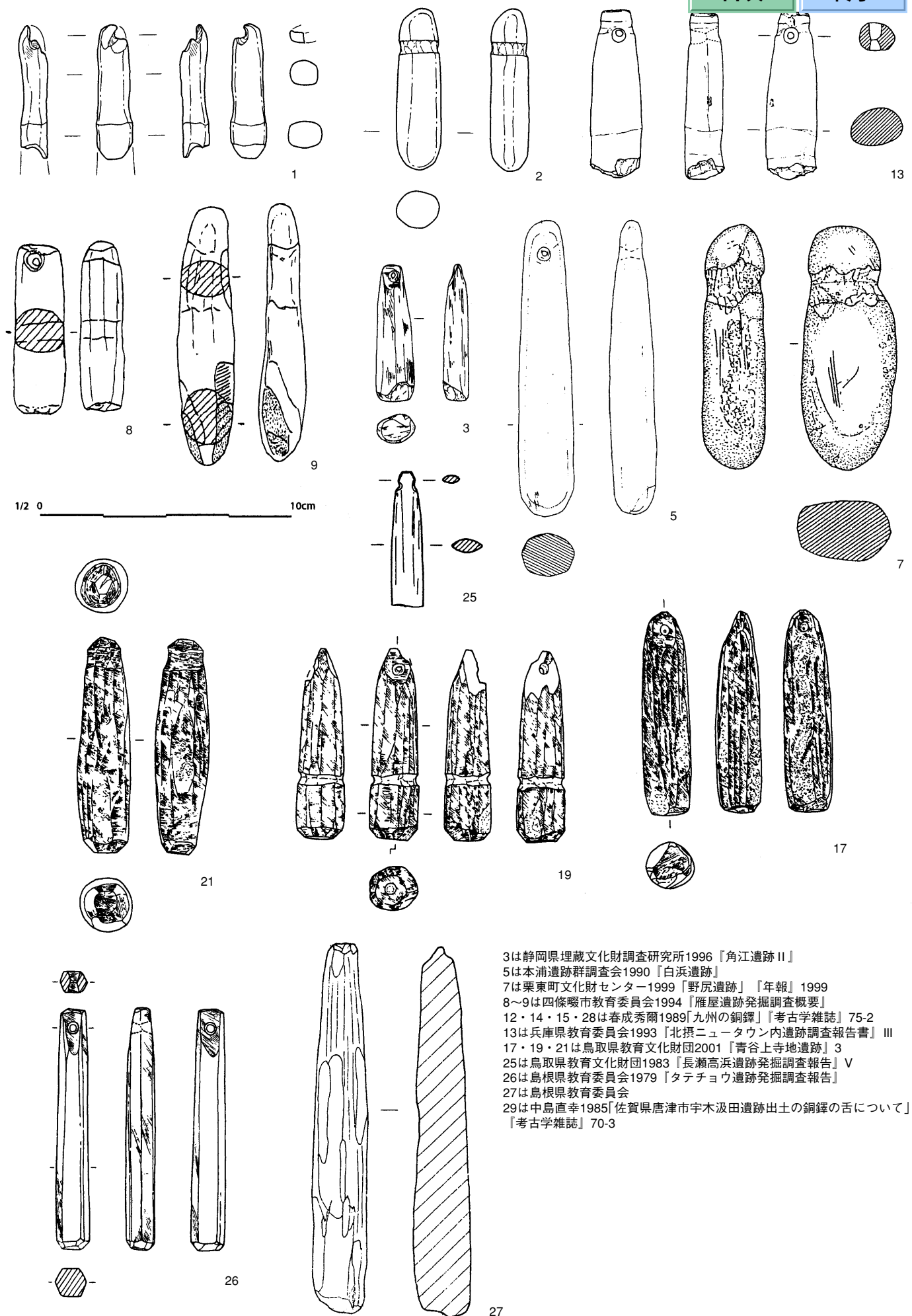
第1表 舌出土地名表



第1図 舌出土遺跡位置図



第2図 舌集成（青銅製）



3は静岡県埋蔵文化財調査研究所1996『角江遺跡II』

5は本浦遺跡群調査会1990『白浜遺跡』

7は栗東町文化財センター1999『野尻遺跡』『年報』1999

8～9は四條畷市教育委員会1994『雁屋遺跡発掘調査概要』

12・14・15・28は春成秀爾1989『九州の銅鐸』『考古学雑誌』75-2

13は兵庫県教育委員会1993『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』III

17・19・21は鳥取県教育文化財団2001『青谷上寺地遺跡』3

25は鳥取県教育文化財団1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告』V

26は島根県教育委員会1979『タテチョウ遺跡発掘調査報告』

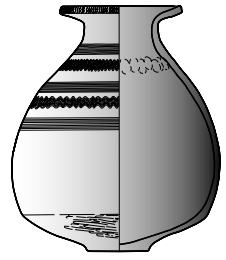
27は島根県教育委員会

29は中島直幸1985『佐賀県唐津市宇木汲田遺跡出土の銅鐸の舌について』『考古学雑誌』70-3

第3図 舌集成（石製）

付論4

剥片石器の技術分析と使用痕分析



川原遺跡では多くの打製石器が出土している。その内容は多種多様であり、形態のみからその性格を特徴づけることは困難であると考えられる。そこで、株式会社アルカに委託し、剥片石器の剥離技術を主とする分析(161点)、石核の分析(11点)、使用痕分析(20点)を実施した。以下、その分析結果を報告する。〈剥片石器の剥離技術〉および〈川原遺跡出土石器の所見〉は角張淳一、〈使用痕分析〉は池谷勝典、編集を原田が行った。

剥片石器の剥離技術

属性表の記号

属性表(表1・2)¹⁾には剥離技術を記号化して記入してある。属性記号の内容は以下のとおりである。

記号は、「ハンマーの種類」と「打撃の種類」を示し、この順番に記載されている。例えば、「HP」はハードハンマーの押圧剥離を意味する。

HP:ハードハンマーの押圧剥離(プレッシャーフレイキング)

HI:ハードハンマーの間接打撃(インダイレクトフレイキング)

HD:ハードハンマーの直接打撃(ダイレクトフレイキング)

HB:ハードハンマーの両極剥離

HvD:ハードハンマーの垂直剥離

SP:ソフトハンマーの押圧剥離

SI:ソフトハンマーの間接打撃

SD:ソフトハンマー直接打撃

また、スラッシュのあとの「急角度」は、剥離面の状態を剥離角で示したものである。川原遺跡の剥離面の状態は以下の凡例がある。

/ 急角度:剥離角が70度から90度の急角度の剥離面

/ 鋸歯:剥離面が鋸歯状になっている剥離面

石器群の属性分析

属性表を観察し、項目ごとのまとまりを抽出する。川原遺跡では、石材という点では、安山岩と珪岩に大きく分類される。

素材の技術に着目し、石材ごとに、どんな技術の石器の素材剥片があるのかをみるために表3を作成した。この表を見ると、安山岩にHDが多く、不明は2点しかない。珪岩は29点のHDだが、HIが4点、HvDが4点で不明が21点ある。珪岩は小形剥片石器の両面加工であり、素材剥片が不明なものが多い。

表1からは、主に安山岩の剥片はHDで剥がされることがわかる。小形の剥片類については、判断に猶予があること、つまり間接打撃や垂直打撃の可能性が高いことも考慮すべきである。

次に、石材と加工技術について同様な分析を行うために表4を作成した。この表を見ると、安山岩には加工がほとんどない。珪岩は42点のHPである。珪岩は小形剥片石器の両面加工を主にHPで行っていることがわかる。

1) 属性表に記載された器種名は(株)アルカによる分析時の名称をそのまま使用しており、報告中の器種名と統一していない。また、石材の名称についても、(株)アルカによる分析時の名称をそのまま使用しており、本報告中の石材名称と異なる場合がある。例えば、「安山岩」は安山岩の他、泥岩等が含まれる。「珪岩」「赤珪岩」「珪岩クロ」はいずれもチャートとしている。

第1表 剥片石器の技術属性

番号	整理番号	石 材	器 種	刃部加工	整形加工	成形加工	素材技術	素材形態	所 見
3012	397	珪岩	石鏃未製品	HP	SP	なし	不明	不明	凹基鏃の未製品
3014	249	珪岩	石鏃	HP	HP	なし	不明	縦長剥片	
3015	186	珪岩	石鏃様石器	HP	HP	なし	不明	縦長剥片	
3020	578	珪岩	石鏃未製品	HP	HP	なし	HI	縦長剥片	
3021	143	珪岩	石鏃未成品	HP	HP	なし	不明	横長剥片	
3047	521	珪岩	石鏃	HP	HP	なし	HI	縦長剥片	
3193	2095	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	HI	縦長剥片	
3194	2101	珪岩	石鏃様石器	HP	HP	なし	HvD	横長剥片	
3195	2098	赤珪岩	石鏃様石器	なし	HP	なし	不明	不明	
3196	2526	珪岩	削器	HP	HP	折取り	HI	縦長剥片	打面を折取りで除去。
3197	2525	珪岩	石鏃様石器	HP	HP	なし	HD	縦長剥片	
3198	2511	珪岩	削器	HP	HP	なし	HD	縦長剥片	
3199	626	サヌカイト	削器	HP	SP	なし	HD	縦長剥片	鋭い側面に不規則剥離
3200	422	赤珪岩	縦形石匙未製品	HP	HP	なし	HD	縦長剥片	摘みの部分が未完
3201	2512	珪岩	削器	HP	HP	なし	HD	縦長剥片	
3202	633	下呂石	削器	HP	HP	なし	HB	両極石器	
3203	55	赤珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	HvD	縦長剥片	
3204	280	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	HvD	不明	
3205	375	赤珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	HvD	縦長剥片	
3206	504	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	不明	縦長剥片	
3208	201	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	HD	縦長剥片	
3209	19	赤珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	HD	横長剥片	
3210	94	赤珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	HI	横長剥片	
3211	283	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	不明	不明	
3212	223	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	不明	横長剥片？	先端部は摩耗と刃こぼれ痕
3213	56	赤珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	HI	縦長剥片	
3215	39	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	不明	不明	
3216	85	赤珪岩	縦形石匙未製品	HP	HP	なし	HI	縦長剥片	
3217	160	珪岩	縦形石匙未製品	HP	HP	なし	不明	横長剥片	
3218	125	珪岩	縦形石匙未製品	HP	HP	なし	不明	縦長剥片	
3219	292	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	不明	横長剥片	
3220	97	珪岩	石鏃	HP	HP	なし	不明	不明	
3221	586	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	不明	横長剥片	
3222	594	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	HD	縦長剥片	
3223	585	珪岩	縦形石匙未製品	HP	HP	なし	HD	横長剥片	
3224	300	珪岩	石鏃未製品	HP	HP	なし	不明	横長剥片	
3225	446	珪岩（漆黒）	縦形石匙	HP	HP	HD?	HD?	横長剥片	
3226	640	珪岩	削器	HP	なし	HI	HD	横長剥片	
3227	340	赤珪岩	縦形石匙	HP	SP	なし	不明	不明	細いソフトハンマー
3228	621	珪岩	横形石匙未製品	HP	HP	なし	HB?	両極石器？	剥離は加工にみえるが、ハンマーによる加工痕ではなく、剥落痕
3229	618	珪岩	横形石匙	HP	HP	なし	HD	縦長剥片	
3230	130	珪岩	縦形石匙未製品	HP	HP	なし	不明	横長剥片	
3231	582	赤珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	HD	縦長剥片	
3232	647	珪岩	横形石匙	HP	HP	HI	HD	横長剥片	
3233	359	珪岩	縦形石匙未製品	HP/急角度	HP/急角度	なし	HD	横長剥片	
3234	598	珪岩	横形石匙	HP	HP	なし	HD	横長剥片	
3235	570	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	不明	不明	
3236	689	赤珪岩	縦形石匙未製品	HP	HP	HI	HD	横長剥片	
3237	593	珪岩	縦形石匙未製品	HP	HP	なし	HD	横長剥片	
3238	361	珪岩	縦形石匙未製品	HP	HP	なし	HvD	縦長剥片	
3239	2031	珪質頁岩	削器	HP	なし	なし	HD	横長剥片	
3240	688	珪岩	横形石匙	HP	HP	HD	HD	縦長剥片	
3241	658	珪岩	削器	HP	なし	HI	不明	縦長剥片	
3242	599	珪岩	縦形石匙未製品	HP	HP	なし	HD	横長剥片	
3243	508	珪岩	縦形石匙	HP	SP	なし	不明	不明	
3244	409	珪岩	削器	HP	HP	なし	不明	縦長剥片	
3245	2030	珪岩	石鏃	HP	なし	なし	HD	縦長剥片	
3246	1087	珪岩	器種不明	刃部不明	HI	HI・折取り	HD	縦長剥片	
3247	321	珪岩	器種不明未製品	なし	HP	なし	HB	両極剥片	やや幅広のソフトハンマー
3248	2062	ハリ質安山岩	尖頭器	HP	HP	HD	HD	横長剥片	
3249	2064	下呂石	不明	なし	なし	HI?	HvD	両極石器	
3256	402	珪岩	縦形石匙未製品	HP/急角度	HP/急角度	なし	不明	不明	
3257	462	珪岩	縦形石匙未製品	HP	HP	なし	HD	縦長剥片	素材打面は自然面
3260	687	珪岩	尖頭器	HD	HD	HD	HD	縦長剥片	
3261	2154	安山岩	尖頭器	HD	なし	なし	HD	縦長剥片	
3262	2060	安山岩	尖頭器	HI/鋸歯	なし	HD	HD	横長剥片	
3263	2150	安山岩	削器	HP	なし	なし	HD	縦長剥片	
3264	2046	サヌカイト	削器	SP	なし	SD	SD	横長剥片	
3265	2034	サヌカイト	尖頭削器	HD	研磨	HD	HD	縦長剥片	
3266	2506	サヌカイト	尖頭器	SP	SP	SI	不明	不明	
3267	2053	赤珪岩	縦形石匙	HP	なし	HD	HD	横長剥片	
3268	2489	珪岩	尖頭削器	HI	なし	HD	HD	縦長剥片	成形加工は素材打面の折取り
3269	2508	サヌカイト	削器	HP	なし	なし	HD	縦長剥片	
3270	2505	珪岩	尖頭削器	HP	なし	なし	HD	縦長剥片	
3271	2549	珪岩	尖頭削器	HP	HP	HI	HD	横長剥片	
3272	2038	珪岩	縦形石匙	HP	HP	なし	HD	横長剥片	
3273	2040	珪岩	削器	なし	なし	HI・折取り	HD	縦長剥片	
3274	2650	サヌカイト	二次加工剥片	なし	なし	折取り	HvD	両極剥片	差側辺を折取り加工
3275	2654	珪岩	削器	HP	なし	なし	HD	縦長剥片	
3276	2047	珪岩	削器	HP	HP	なし	HD	横長剥片	
3277	2032	赤珪岩	削器	SP	なし	SI	不明	横長剥片	
3278	2045	安山岩	削器	HD	HD	なし	HD	横長剥片	
3279	2036	珪岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3280	2497	珪岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3281	2627	珪岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3282	2624	珪岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	横長剥片	
3283	2629	珪岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HvD	両極剥片	表裏に発達するコーンが残る
3284	2711	サヌカイト	剥片断片	なし	なし	なし	不明	縦長剥片	

第1表 剥片石器の技術属性

番号	整理番号	石 材	器 種	刃部加工	整形加工	成形加工	素材技術	素材形態	所 見
3285	2203	安山岩	削器	HP	なし	なし	HvD	縦長剥片	
3286	2152	安山岩	鋸歯縁削器	HI/鋸歯	なし	なし	HD	縦長剥片	
3287	2156	安山岩	削器	HP	なし	なし	HD	縦長剥片	
3288	2052	不明	削器	HP	なし	HD	HD	横長剥片	
3289	2147	安山岩	尖頭器	HD	なし	HD	HD	縦長剥片	
3291	2155	安山岩	鋸歯縁削器	HP/鋸歯	なし	なし	HD	横長剥片	
3292	2123	安山岩	二次加工剥片	なし	HP	なし	HD	不定形剥片	
3293	2153	安山岩	鋸歯縁削器	HP/鋸歯	なし	なし	HD	横長剥片	
3294	2166	安山岩	削器	HP/鋸歯	なし	なし	HD	不定形剥片	
3295	2180	安山岩	削器	HP	なし	なし	HD	縦長剥片	
3296	2057	ハリ質安山岩	削器	HP	なし	なし	HvD	縦長剥片	
3297	2193	安山岩	削器	HP	なし	なし	HD	不定形剥片	
3298	2059	ハリ質安山岩	削器	HP	なし	なし	HvD	縦長剥片	
3299	2061	ハリ質安山岩	尖頭削器	HD/急角度	なし	なし	HvD	縦長剥片	
3300	2126	安山岩	二次加工剥片	HP	なし	なし	HD	横長剥片	
3301	2234	安山岩	削器	HP	なし	HD	HD	縦長剥片	
3302	2204	安山岩	基部成形削器	HD	なし	HD	HD	不定形剥片	基部をつくる削器
3303	2235	安山岩	磨製削器	研磨	なし	HD	HD	不定形剥片	
3304	2119	安山岩	不明	HD	なし	HD	HD	不明	
3305	2130	安山岩	二次加工剥片	HP	なし	なし	HD	横長剥片	刃部の剥離は使用痕（刃こぼれ）
3306	2382	安山岩	大形石匙	なし	HP	なし	HD	横長剥片	大形剥片の縁辺にHPで摘みをつくる
3307	2201	安山岩	削器	HD/鋸歯	なし	HD	HD	不定形剥片	
3308	2226	安山岩	基部成形磨製	削器	研磨	HP	なし	HD	縦長剥片
3309	2236	安山岩	削器	なし	なし	HD	HD	不定形剥片	
3310	2270	安山岩	削器	なし	なし	HD	HD	不定形剥片	
3311	2394	安山岩	削器	なし	なし	HD	HD	不定形剥片	
3312	2342	安山岩	削器	なし	なし	HD	不明	不定形剥片	
3313	2148	安山岩	二次加工剥片	なし	なし	HD	HD	縦長剥片	
3314	2356	安山岩	二次加工剥片	なし	なし	HD	HD	横長剥片	
3315	2041	安山岩	削器	なし	なし	HD	HD	不定形剥片	
3316	2165	安山岩	削器	なし	なし	折取り	HD	縦長剥片	
3317	2107	安山岩	直縁刃石器	なし	なし	HD	HD	縦長剥片	
3318	2174	安山岩	削器	なし	なし	HD	HD	縦長剥片	石核成形剥片が素材
3319	2055	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3320	2413	安山岩	使用痕剥片断片	なし	なし	なし	不明	不明	刃部の断片
3321	2149	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3322	2452	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3323	2135	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	
3324	2143	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HvD	縦長剥片	
3325	2145	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3326	2366	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3327	2381	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	大形剥片
3328	2299	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3329	2317	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	
3330	2187	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HvD	不定形剥片	刃先の剥離は使用痕
3331	2134	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3332	2112	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	使用痕光沢あり
3333	2110	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	使用痕光沢あり
3334	2117	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	横長剥片	使用痕光沢あり
3335	2109	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	被熱資料
3336	2108	安山岩	直凹刃石器	なし	なし	なし	HD	矩形剥片	
3337	2111	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	使用痕光沢あり
3338	2170	安山岩	使用痕剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3339	2289	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HvD	不定形剥片	
3340	2346	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HvD	不定形剥片	
3341	2253	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	
3342	2353	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	
3343	2387	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	横長剥片	
3344	2324	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HvD	不定形剥片	
3345	2290	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	
3346	2281	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	ボジボジの剥片
3347	2120	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	
3348	2121	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	
3349	2384	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	横長剥片	
3350	2417	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3351	2310	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	不定形剥片	
3352	2457	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	被熱資料
3353	2396	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HvD	横長剥片	
3354	2388	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	縦折れの剥片
3355	2225	安山岩	剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	
3361	2081	安山岩	打面作出剥片	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	石核の面に新しい打面をつくる剥片
3366	912	安山岩	ハンマーストーン	なし	なし	なし	なし	円礫	
		珉岩	縦形石匙	HP	HP	なし	不明	不明	

石器群の構造の解釈

さて、上でふたつの分析を行い、その結果、川原遺跡の剥片石器は、安山岩の大形・中形石器と珪岩の小形石器では、素材の剥離技術と加工の技術に差があることがわかった。安山岩は、直接打撃で剥片を剥離し、細かい整形加工はほとんど行わない石器。珪岩は直接打撃もあるが、間接打撃や垂直打撃も剥片剥離技術にはある可能性があり、加工はハードハンマーの押圧剥離で行う石器をつくっている。

こうした石器製作構造の違いは、安山岩と珪岩が全く別の体系でつくられていることを意味している。これをふまえて、さらに形態分類を行い、形態ごとに技術構造の分析を行うことにより、より詳細で総合的な解釈に近づくことができる。

●● 使用痕分析 ●●

キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ(VH-7000)と高倍率ズームレンズ(VH-Z450)を用いて高倍率の使用痕光沢の観察を行った。観察倍率は、450倍～1000倍(倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる)である。観察面は、中性洗剤で洗浄を行い、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定を行った。使用痕光沢分類は東北大学の分類基準によって²⁾。

観察の結果、4点の資料に使用痕あるいは使用痕の可能性のある光沢面が観察された。観察結果の詳細は表5および第1・2図に示したとおりである。

●● 川原遺跡の石器群の所見 ●●

まず簡単に川原遺跡の剥片石器の所見をのべておく。珪岩の石器は縄文石器の系譜の延長としてとらえられる可能性がある。実測図では有茎石鏃

の位置でかけられた摘みのある石器は、対称軸におくと肩が張りだしている。これは石鏃の作り方とは異なる。技術は押圧剥離、素材剥片は間接打撃や直接打撃でつくられているので、技術的には縄文石器の延長である。この石鏃のような石器の形態は、縄文石器のなかではむしろ「縦形石匙」に位置する石器と解釈できるかもしれない。属性表では「縦形石匙」としている。

その他、小形の石鏃の様な石器があり、そのひとつからは骨を削ったときの光沢に近似する使用痕光沢が検出されている。これらの石鏃のような石器は「石鏃様石器」として記述した。

そこで、珪岩石器の組成をみると、「縦形石匙」、「横形石匙」、「削器」、「石鏃様石器」、尖頭削器などがある。「石鏃」や「石錐」が欠如しているのは、全資料を扱っていないための資料選択の条件に負っている現象である。

次に安山岩の石器だが、石器の大きさに特徴がある。珪岩のような小形で精緻な石器ではなく、直接打撃で剥片を剥離している。石核も出土している。その石核の打面は、ほとんどが自然面打面なので、意図的な形態を剥片に求めているわけではないことが理解できる。ゆえに、安山岩は、単に剥片だけを剥離している。そして、加工がほとんどないので、精緻な加工をする石器ではない。形態をみると、縦形石匙や横形石匙のような摘みを付けた削器があり、尖頭削器もある。

さて、珪岩と安山岩の石器を比較すると、技術体系は全く違うにもかかわらず、同じような形態を意識している部分がある。形態だけ近似させて、技術がまったく異なる石器を折衷形式石器といい、特にコピー形式と呼んでいる。

以上を総合して、仮説的な解釈を述べると、川原遺跡の石器群は、珪岩石器と安山岩石器に大きく区分される。両者の技術体系は全く異なるが、珪岩石器の形態だけを模倣したコピー形式が安山岩

2) 梶原洋・阿子島香 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究 - ポリッシュを中心とした機能推定の試み -」『考古学雑誌』第67巻第1号
日本考古学会
阿子島香『石器の使用痕』考古学ライブラリー56 ニュー・サイエンス社 1989

第2表 石核の技術属性

整理番号	石 材	器 種	打面形態	目的剥片の技術	剥片形態	剥離軸長 (mm)	石核成形技術	石核素材
2083	安山岩	石核	自然面打面	HD	縦長剥片	65	なし	円礫
2072	安山岩	石核	平坦打面	HD	横長剥片	34	HD	亜円礫
2092	安山岩	石核	平坦打面	HD	縦長剥片	58	なし	円礫
2068	安山岩	石核	自然面打面	HD	矩形剥片	38	なし	円礫
2078	安山岩	石核	自然面打面	HD	縦長剥片	55	なし	円礫
1080	安山岩	石核	自然面打面	HD	横長剥片	64	なし	亜円礫
2074	安山岩	石核	自然面打面	HD	横長剥片	46	なし	長円礫
912	安山岩	ハンマーストーン	なし	なし	なし	なし	なし	円礫
1079	安山岩	石核	平坦打面	HD	横長剥片	55	なし	亜円礫
2069	安山岩	石核	自然面打面	HD	縦長剥片	54	なし	亜円礫
2071	安山岩	石核	自然面打面	HD	縦長剥片	54	なし	亜円礫

第3表 材と素材剥片の技術

	HB	HD	HI	HVD	SD	不	合計
サヌカイト		3		1	1	2	7
安山岩		62		7		2	71
下呂石	1			1			2
珪岩	2	29	4	4		21	60
珪岩クロ		1					1
赤珪岩		5	3	2		3	13
計	3	100	7	15	1	28	154

第4表 石材と加工の技術

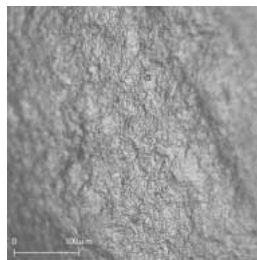
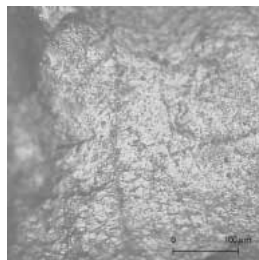
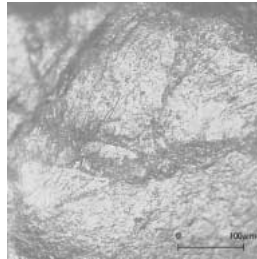
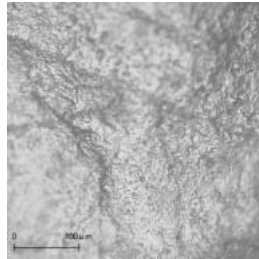
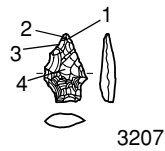
	HD	HI	HP	HP/急角度	SP	加工なし	合計
サヌカイト					2	4	6
安山岩	3	1	2			65	71
下呂石			1			1	2
珪岩	1	1	42	2	2	12	60
珪岩クロ			1				1
赤珪岩			10		1	2	13
計	4	2	56	2	5	64	153

石器にはみられる。また、珪岩石器は縄文石器の系譜を色濃くひいており、安山岩石器は、その剥片剥離技術から剥片石器を文化の体系としてもっていない可能性がある。ゆえに、川原遺跡では、剥

片石器を文化の規則に組み込むシステムと剥片石器を文化の規則に入れないシステムの2つの相異なる文化システムが存在していると推定される。

第5表 使用痕分析一覧表

番号	整理番号	使用痕光沢	所 見
3207	51	不明光沢	尖頭部が使用された可能性があるが光沢タイプは同定できない。
3220	97	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3021	143	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3014	249	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3244	409	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3047	521	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3020	578	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3221	586	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3246	1087	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3265	2034	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3272	2038	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3278	2045	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3276	2047	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3267	2053	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3194	2101	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3317	2107	AまたはBタイプ？ (風化による影響か)	刃部には肉眼でも光沢を観察できるが、高倍率で観察すると光沢面は風化などの影響でかなり損傷を受けている。
3336	2108	AまたはBタイプ？ (風化による影響か)	刃部には肉眼でも光沢を観察できるが、高倍率で観察すると光沢面は風化などの影響でかなり損傷を受けている。
3355	2225	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3354	2388	なし	使用痕と考えられる光沢面は観察されなかった。
3196	2526	Dタイプ	主要剥離面側の先端部でDタイプの光沢が観察される。線状痕が明瞭で石器を横方向に動かしたことがわかる。

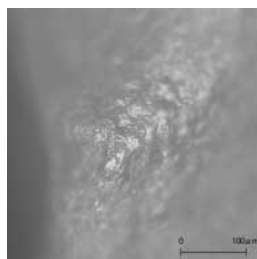
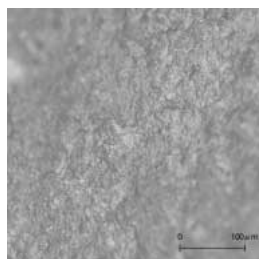
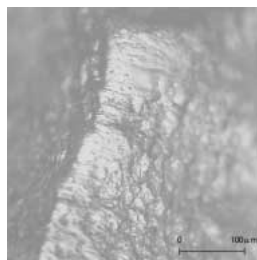
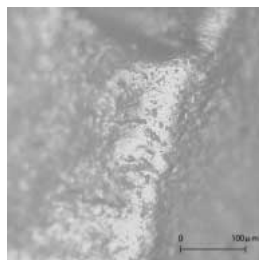
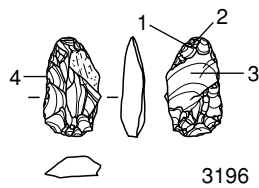


写真の解説

- 1 不明光沢(光沢は鈍く、網目状でピットが多数)
- 2 不明光沢(光沢は鈍く、網目状でピットが多数)
- 3 不明光沢(光沢は鈍く、網目状でピットが多数)
- 4 不明光沢(表面は凸凹が激しいが1～3のような網目状のピットはない)

総合所見

尖頭部から両側辺にかけて写真1～3のような、網目状のピットが多数ある光沢が観察されたが、石器中央部(写真4)とは違う状況である。尖頭部が使用された可能性があるが、光沢タイプの同定はできなかった。線状痕は不明瞭である。



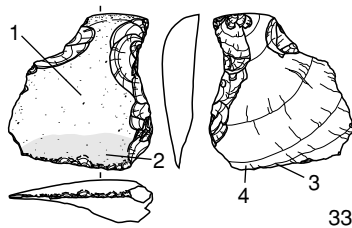
写真の解説

- 1 Dタイプ(剥離面の稜上にあり、線状痕が明瞭である)
- 2 Dタイプ(剥離面の稜上にあり、線状痕が明瞭である)
- 3 不明光沢(写真1、2とは明らかに違い表面の凸凹が激しく、光沢は鈍い)
- 4 Dタイプ(剥離面の稜上にある)

総合所見

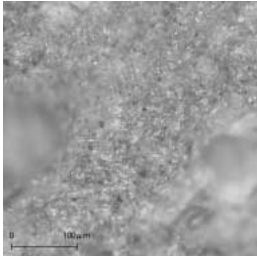
石器の主要剥離面側の先端部にDタイプの使用痕光沢が観察される。線状痕が明瞭で石器を図面の位置で横方向に動かしたと思われる。

第1図 使用痕写真・解説 (1)

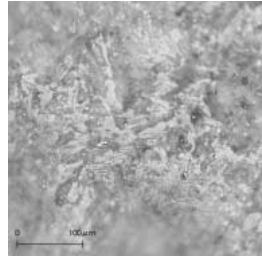


3317

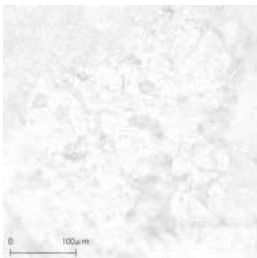
*アミフセは肉眼観察による光沢の範囲



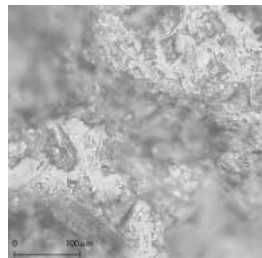
1



2



3



4

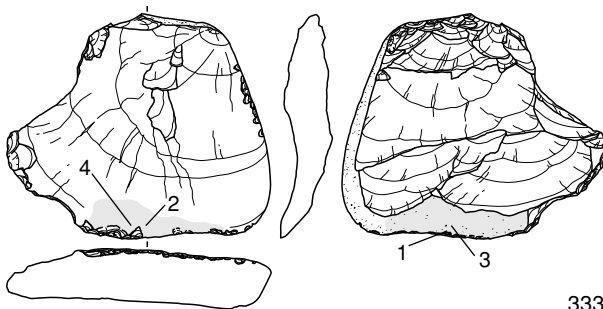
写真解説

- 1 不明光沢(光沢は微弱で点状に存在)
- 2 AタイプかBタイプが風化により荒れたもの
- 3 AタイプかBタイプが風化により荒れたもの
- 4 AタイプかBタイプが風化により荒れたもの

総合所見

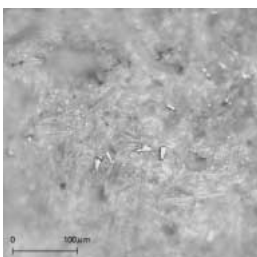
刃部には肉眼でも観察される使用痕が見られるが、高倍率で観察すると光沢面は風化などの影響によりかなり損傷を受けている。比較的よく残っているのは写真4である。

写真1は使用痕光沢がない部分で、観察される微弱な光沢は風化あるいは石材の結晶質の反射などの影響によるものと考えられる。

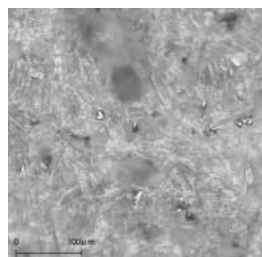


3336

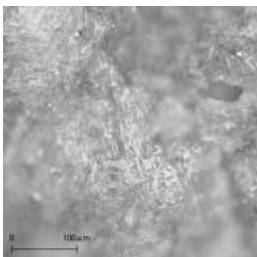
*アミフセは肉眼観察による光沢の範囲



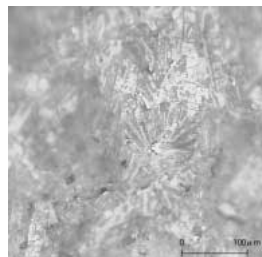
1



2



3



4

写真解説

- 1 AタイプかBタイプが風化により荒れたもの
- 2 AタイプかBタイプが風化により荒れたもの
- 3 AタイプかBタイプが風化により荒れたもの
- 4 AタイプかBタイプが風化により荒れたもの

総合所見

石器 317 と同じ状況である。

石材のなかで風化の影響を受けにくい結晶のところが比較的本来の使用痕光沢の特徴をよく残しているのがわかる。

第2図 使用痕写真・解説 (2)

版 図

図版1

X=-108.800

Y=-1.670

SZ502

L=19.0

L=19.0

X=-108.820

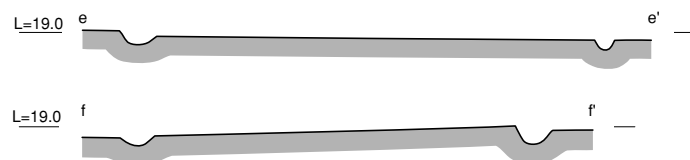




図版3



SZ504



攪乱

目次

終了

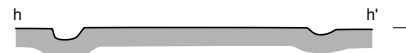
図版4

SZ505

L=19.0



L=19.0



X=-108.840

I 期遺構図 (1:200)

SZ507

L=19.0



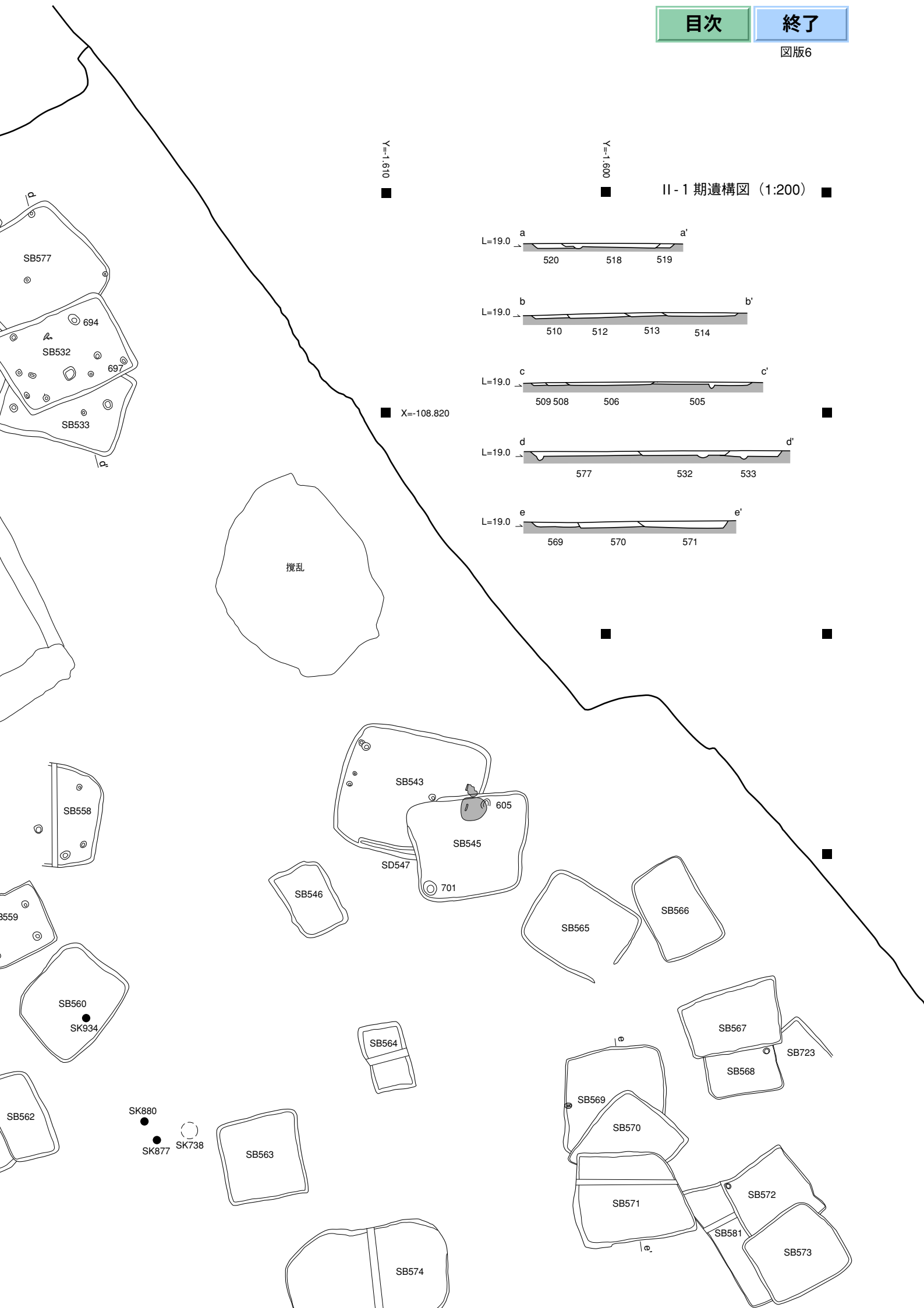
L=19.0



Y=-1.620

Y=-1.600





089°1'=Y



X=-108.800



X=-108.820



II-2 期遺構図 (1:200)





■ X=-108.850

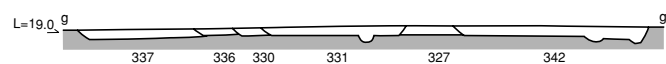
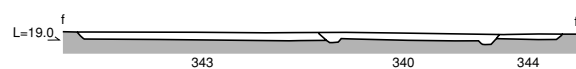


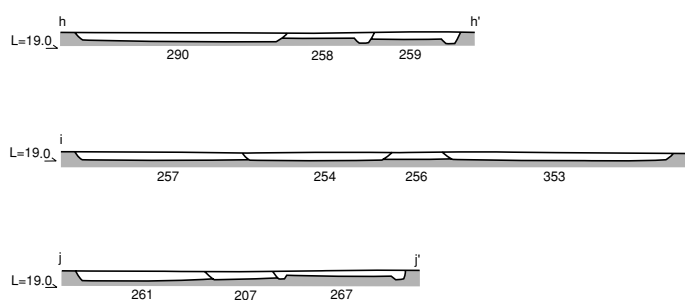
■ X=-108.870



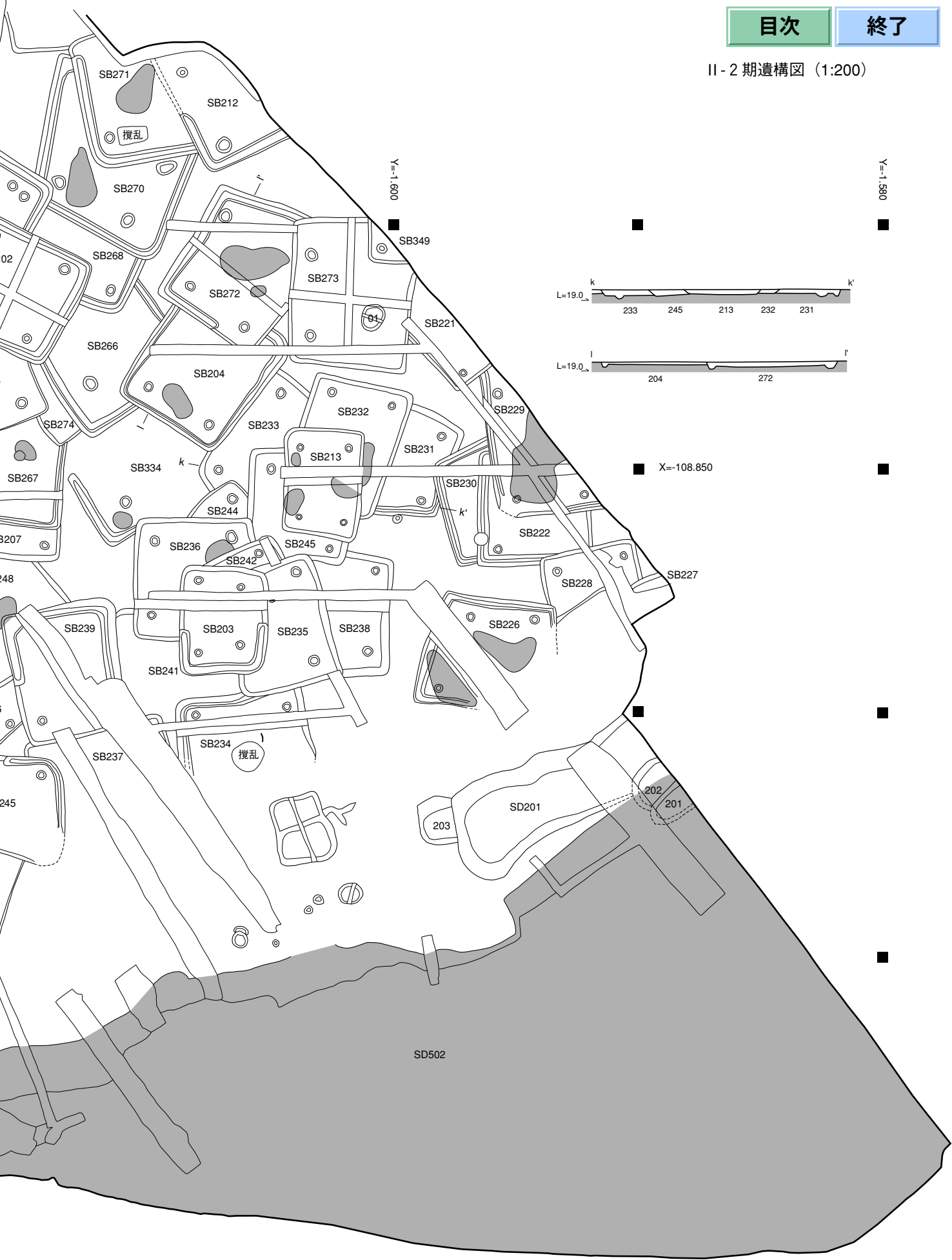
■ Y=-1.670

II - 2 期遺構図 (1:200)

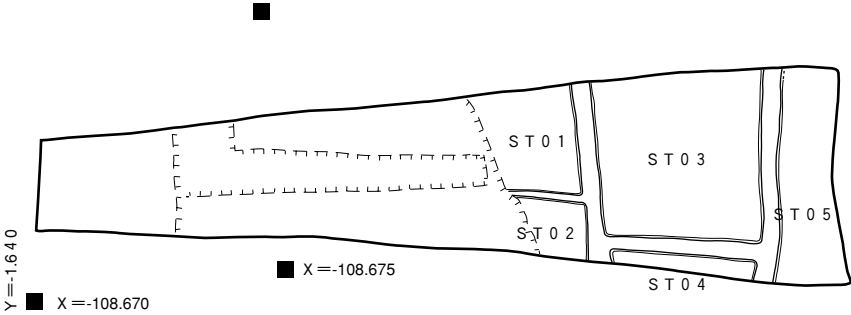




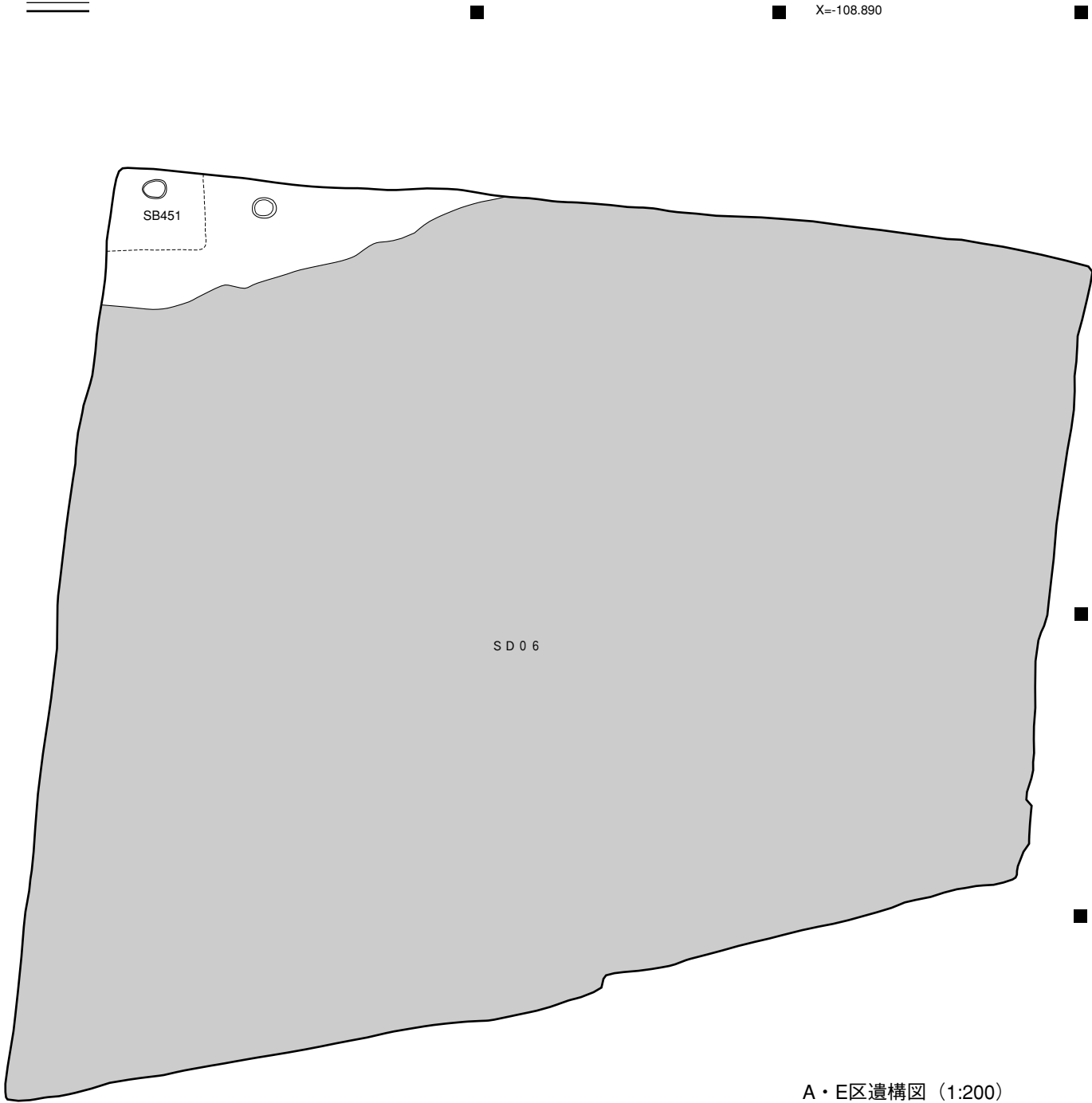
II - 2 期遺構図 (1:200)



A区

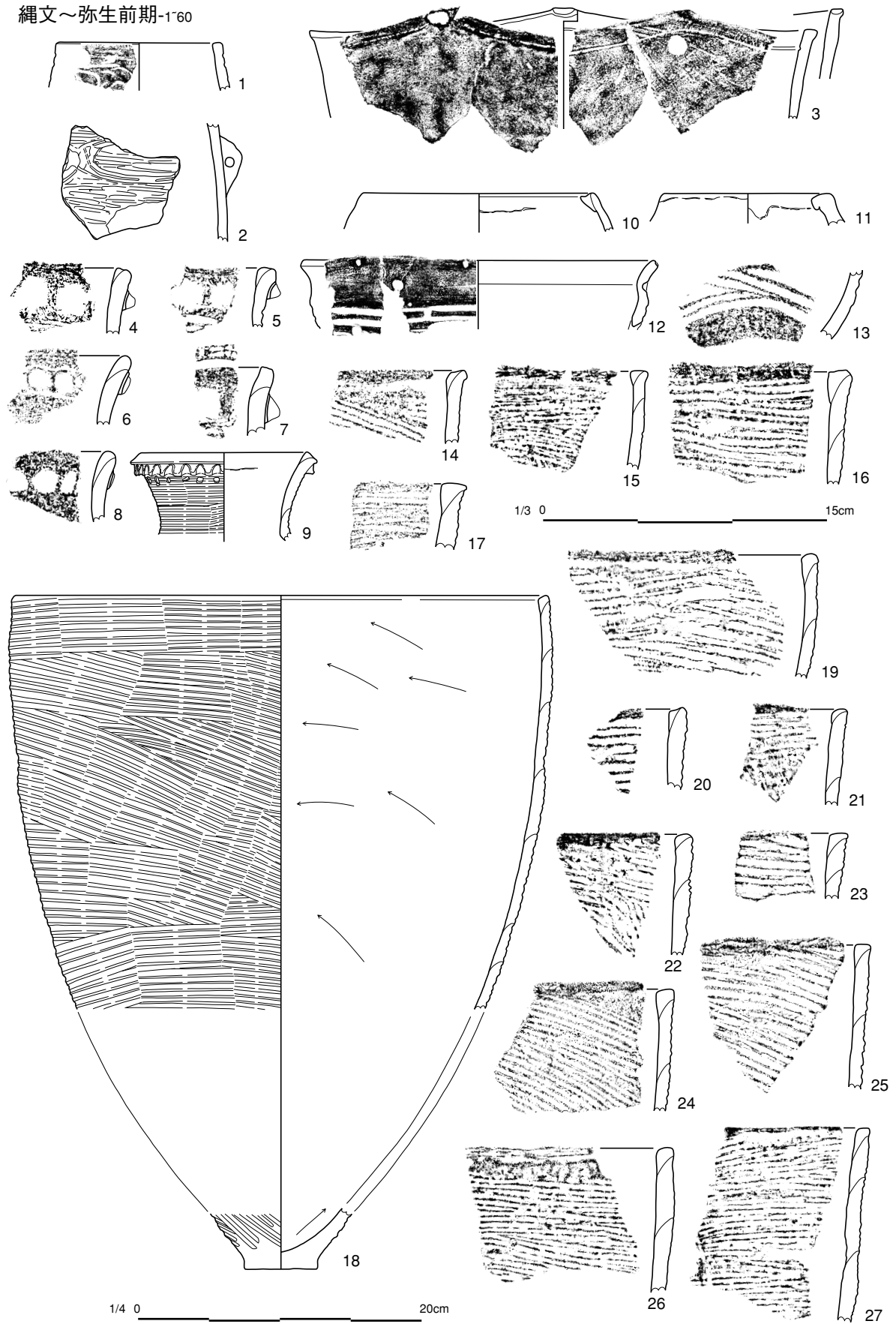


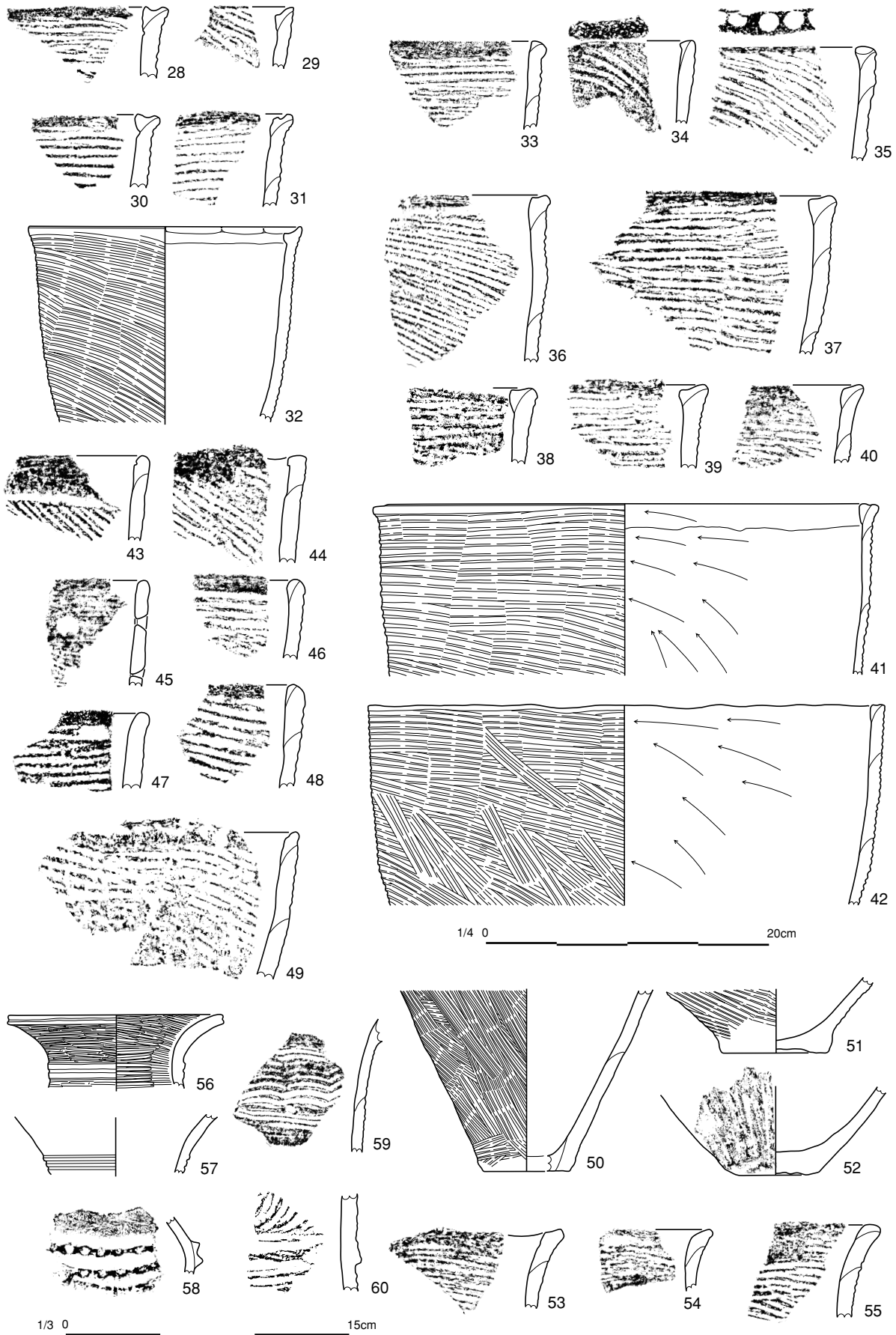
E区

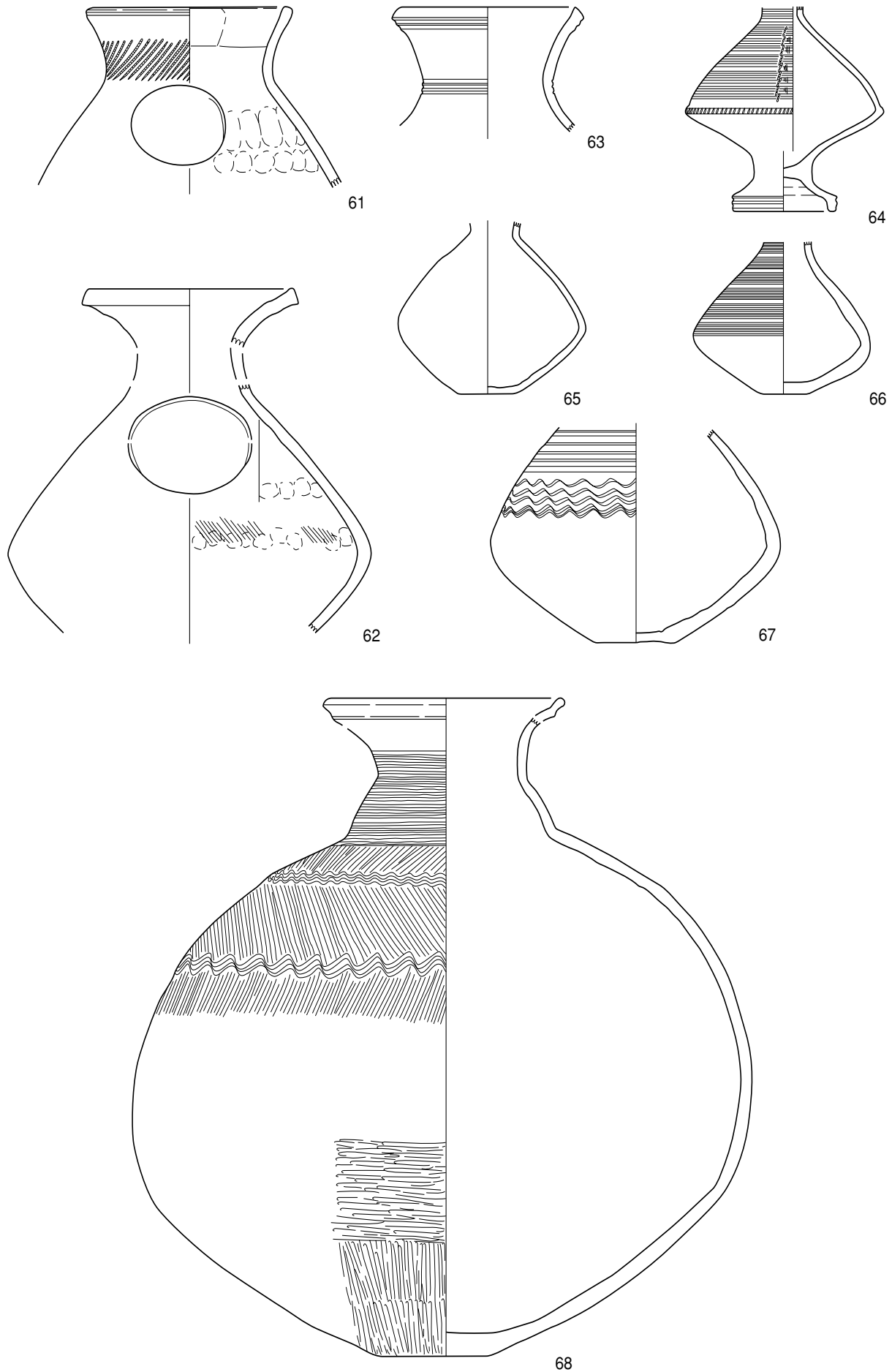


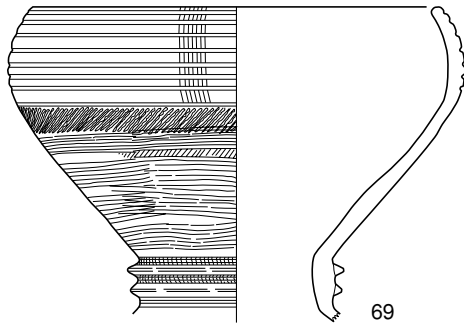
A・E区遺構図（1:200）

縄文～弥生前期-1'60

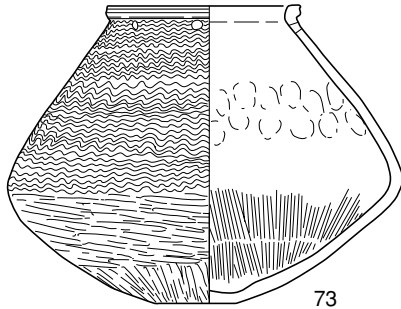




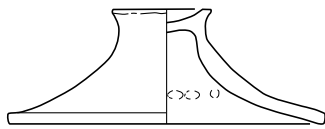




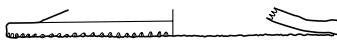
69



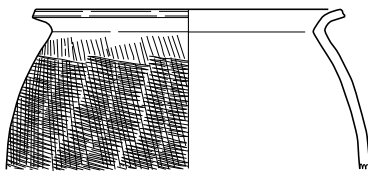
73



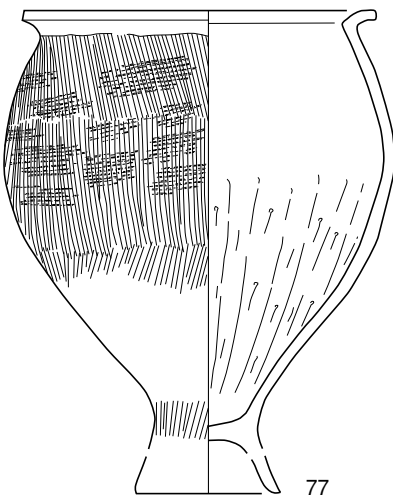
74



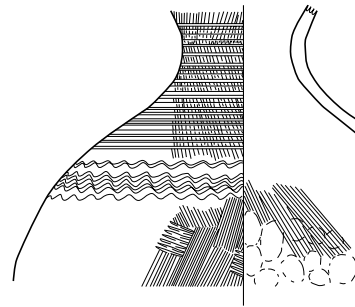
75



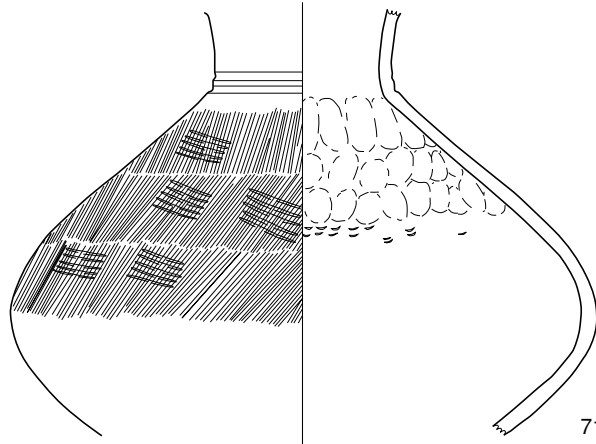
76



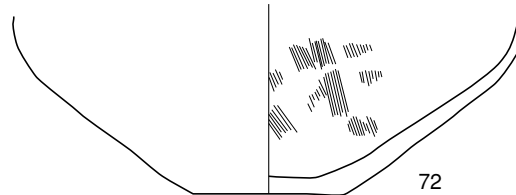
77



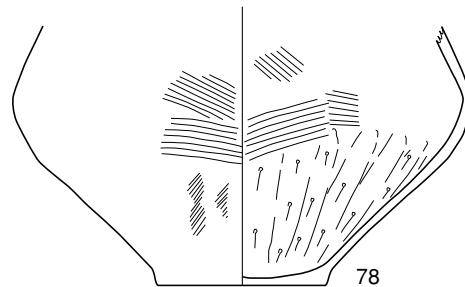
70



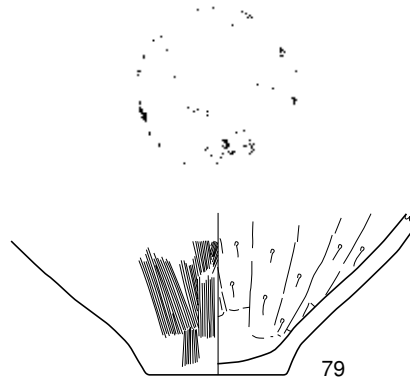
71



72

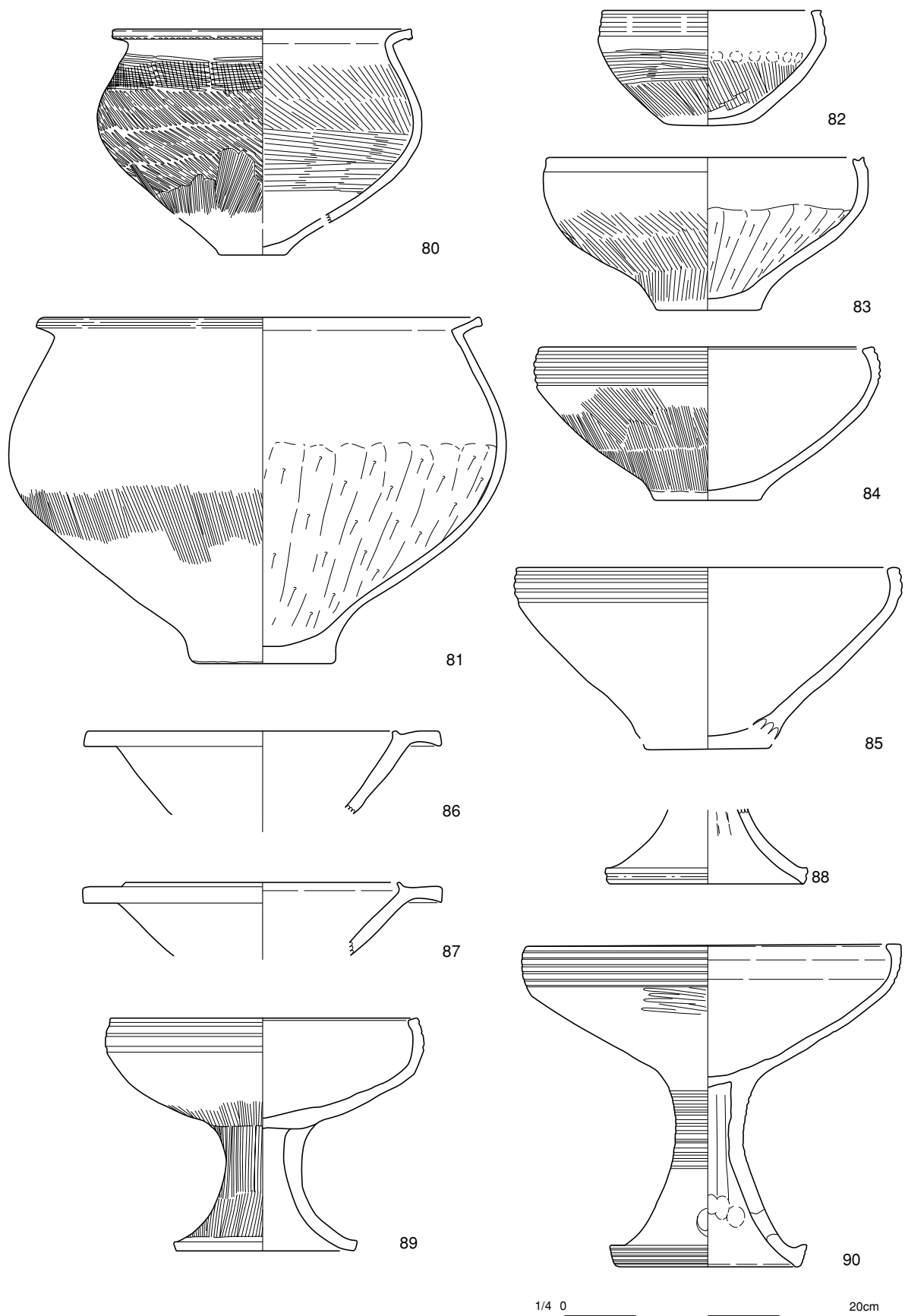


78

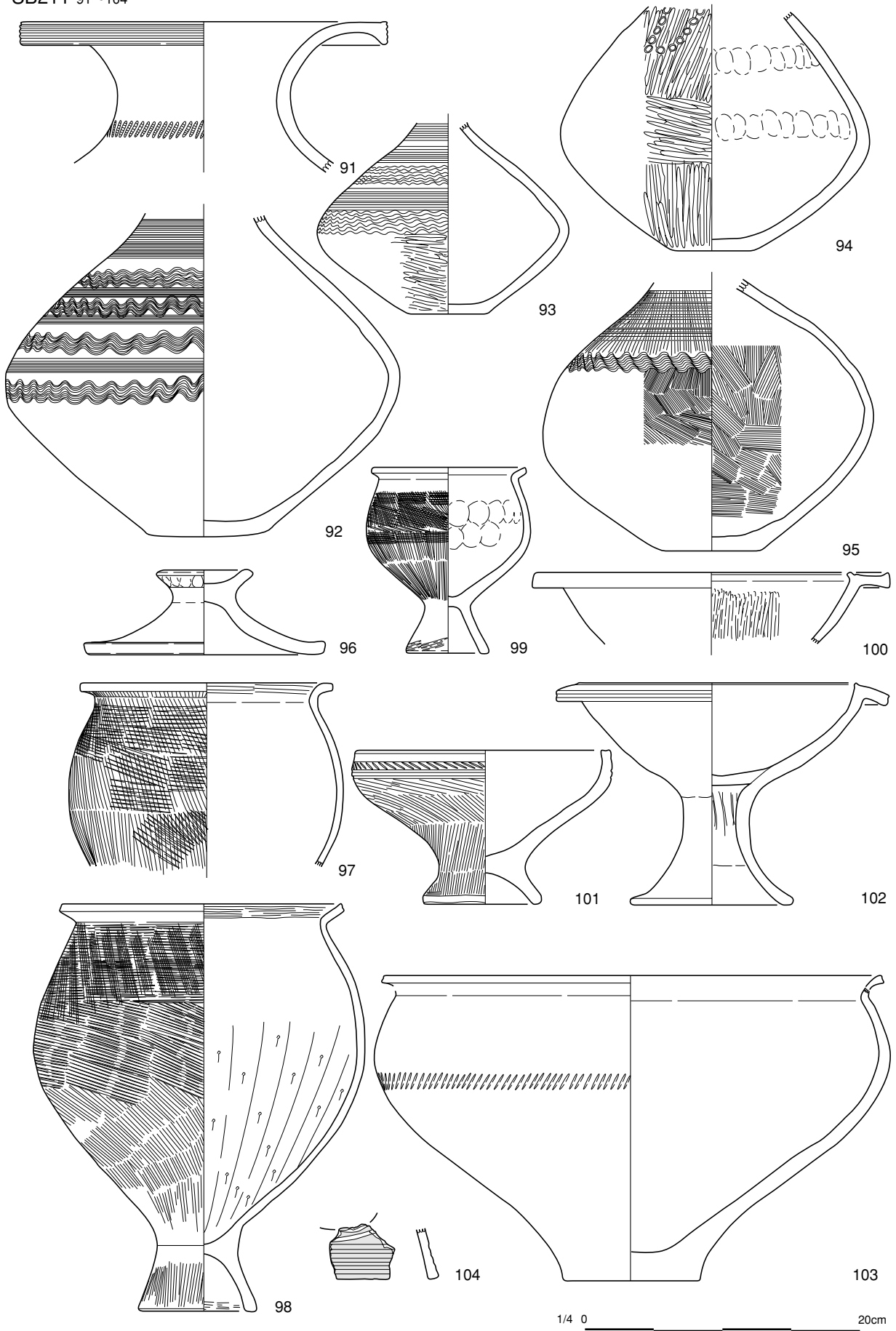


79

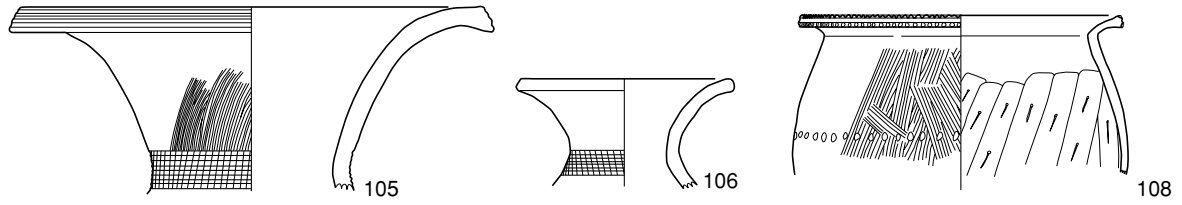
1/4 0 20cm



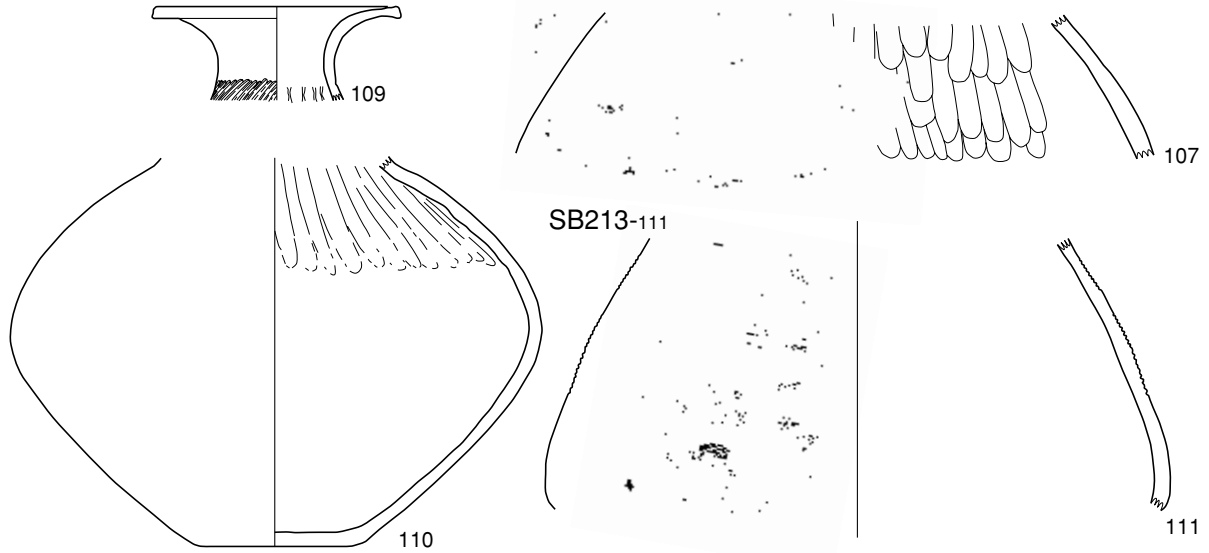
SB211-91~104



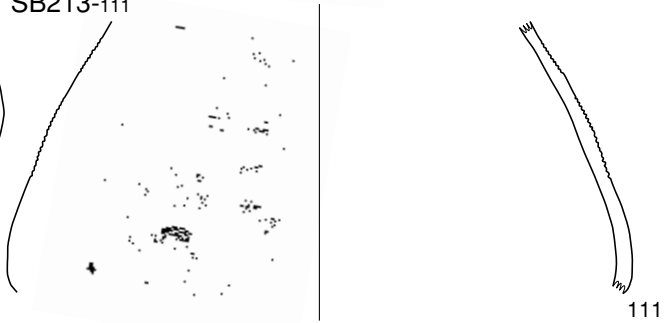
SB208-105~108



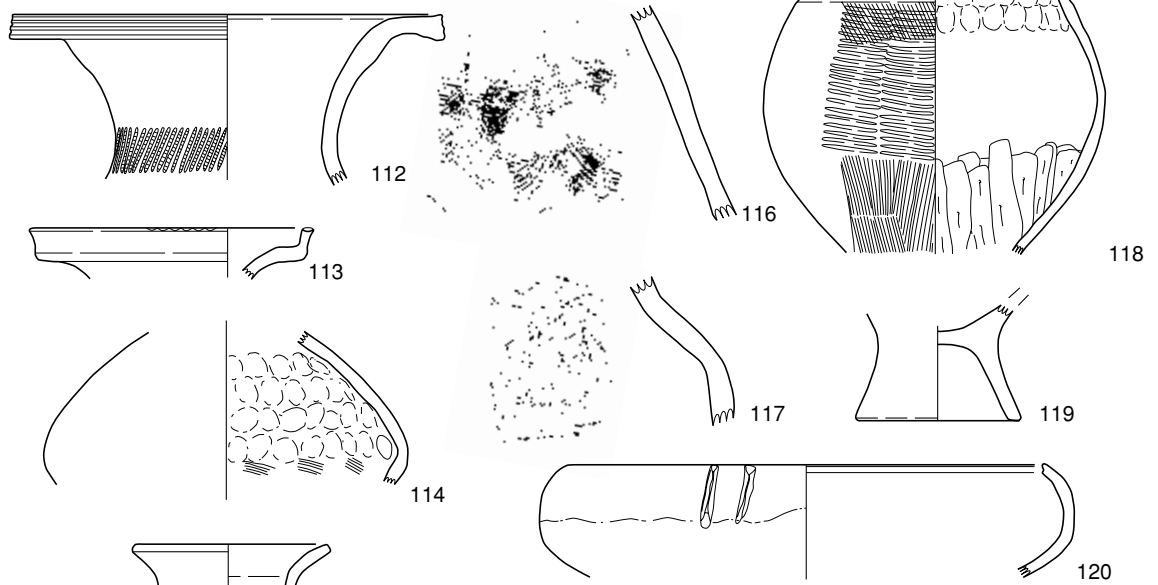
SB206-109~110



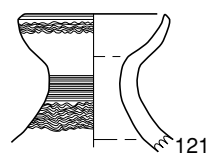
SB213-111



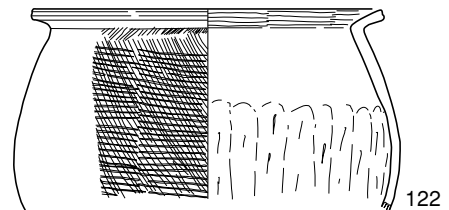
SB217-112~120



SB216-121

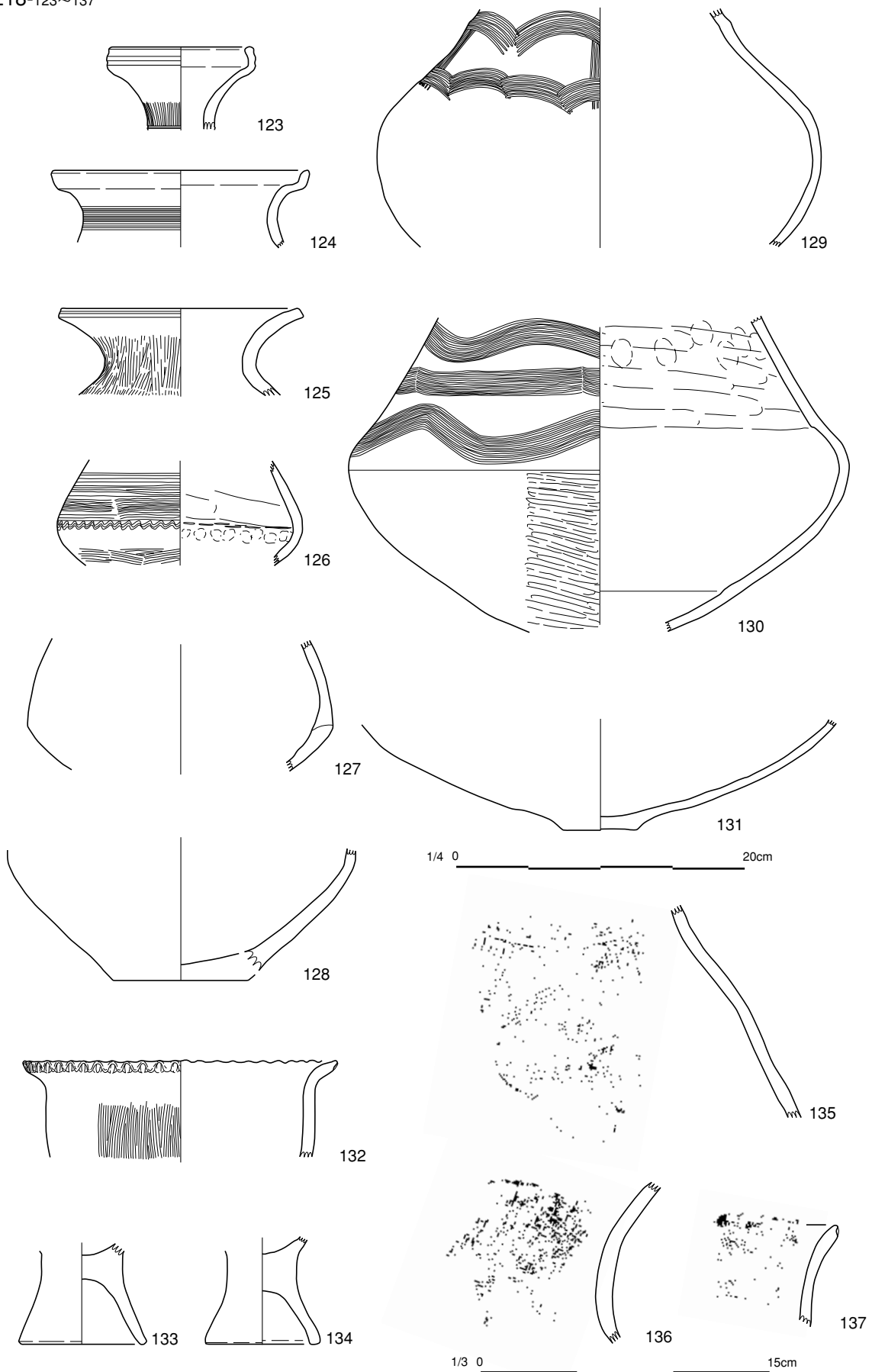


SB219-122

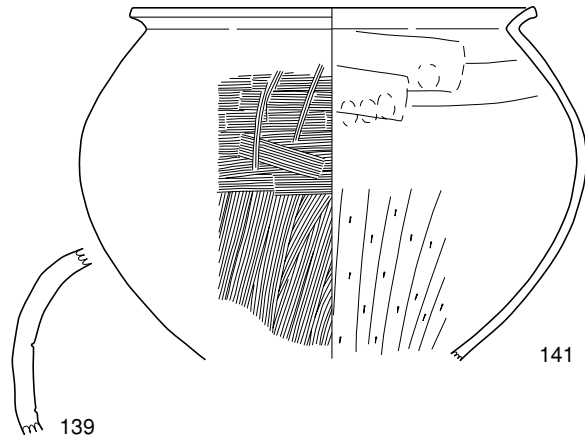
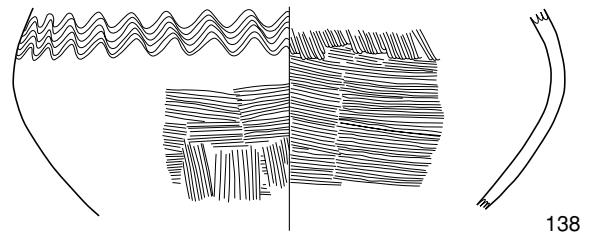
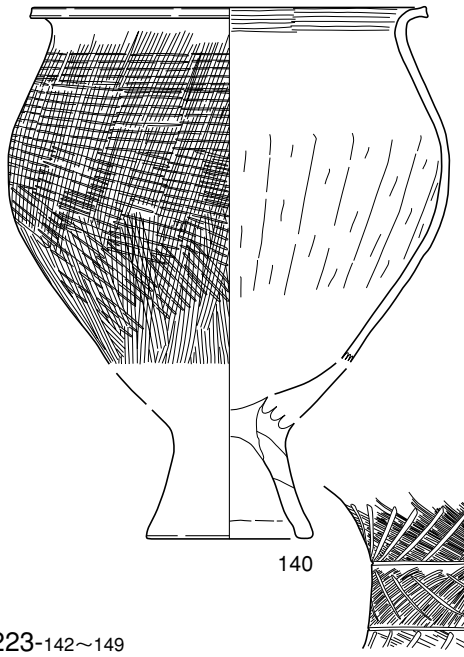


1/4 0 20cm

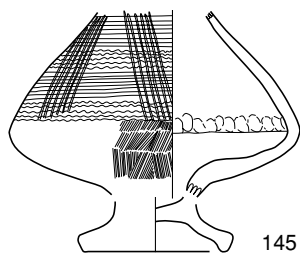
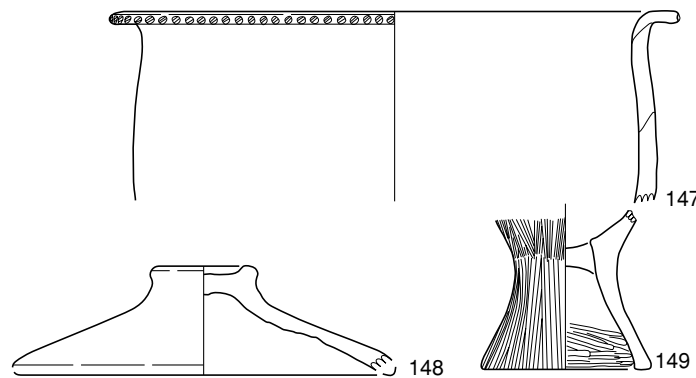
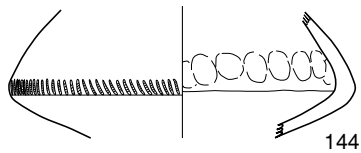
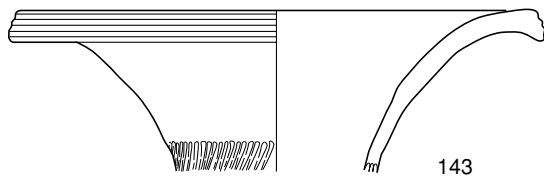
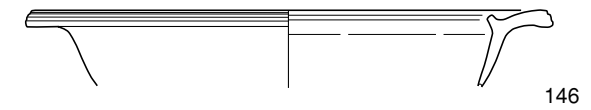
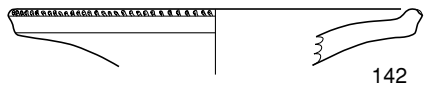
SB218-123~137



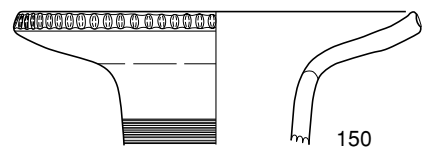
SB220-138~141



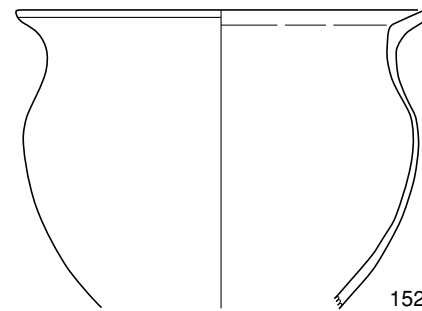
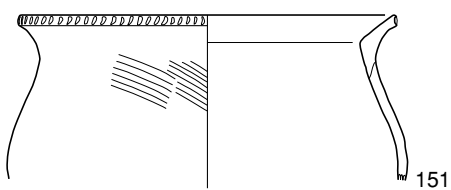
SB223-142~149



SB228-150

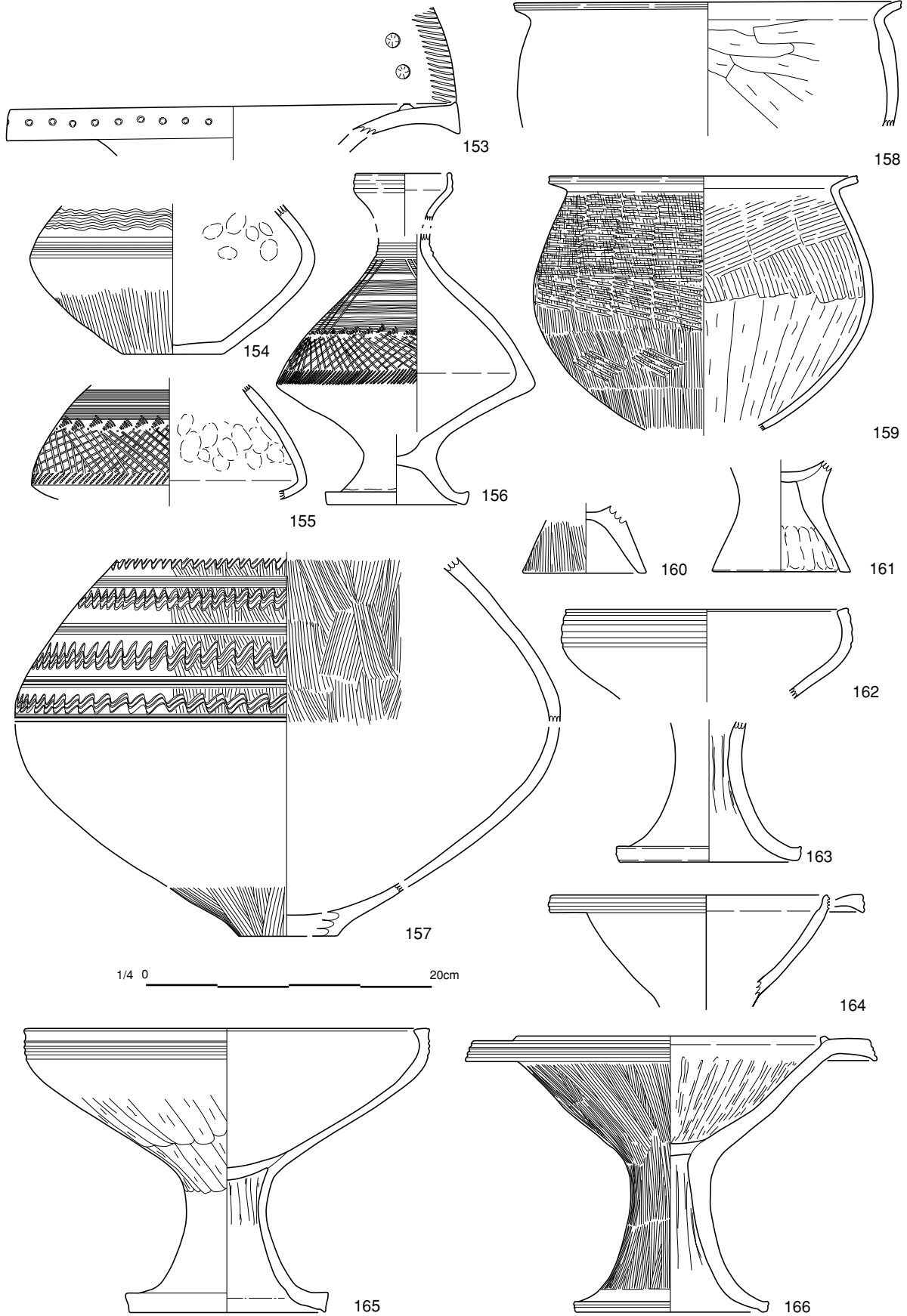


SB229-151~152

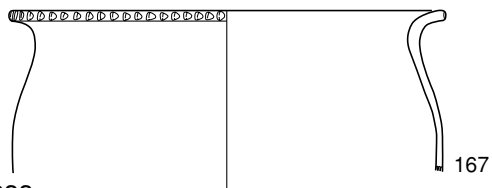


1/4 0 20cm

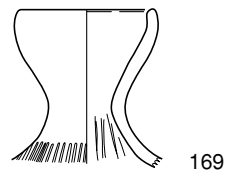
SB224-153~166



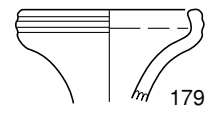
SB232-167



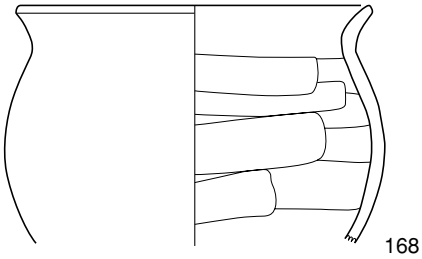
SB234-169~171



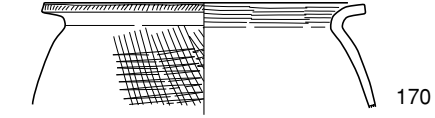
SB237-179



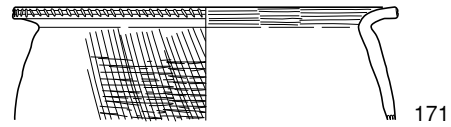
SB233-168



168

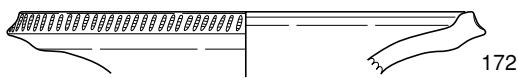


170

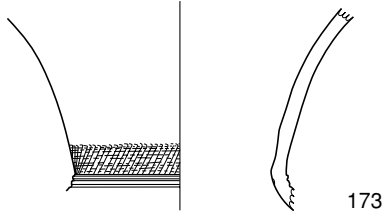


171

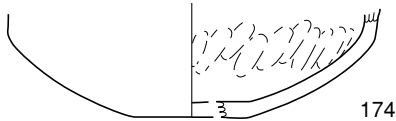
SB236-172~176



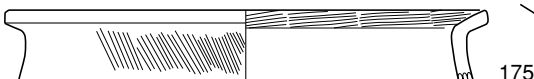
172



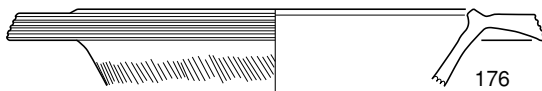
173



174

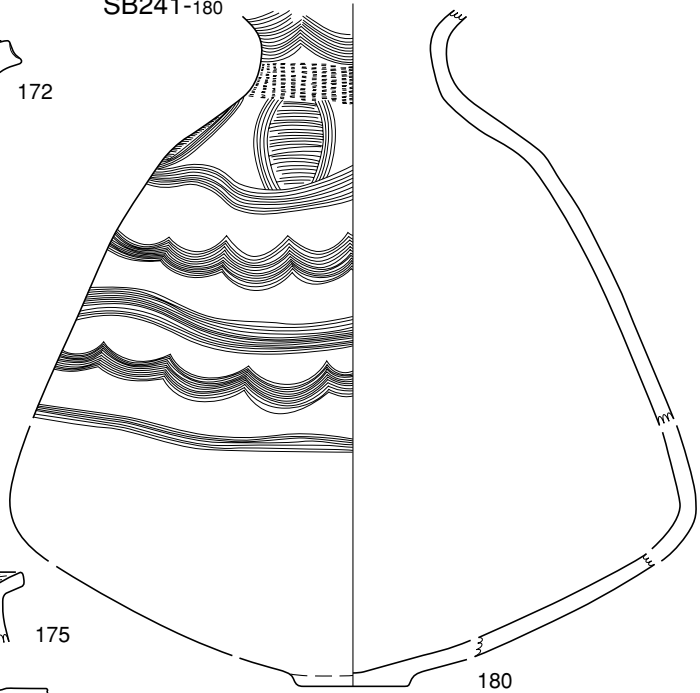


175



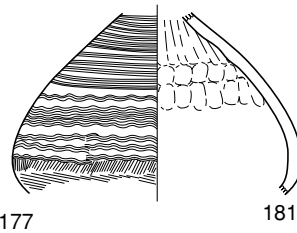
176

SB241-180



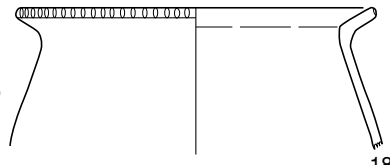
180

SB240-181



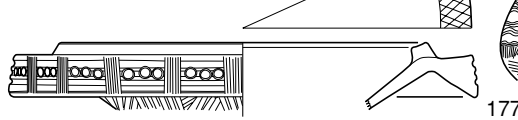
181

SB245-183



183

SB236・SK01-177

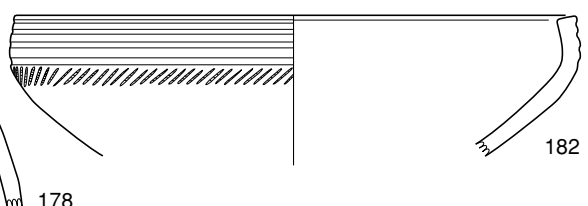


177

SB236・SK02-178



SB244-182

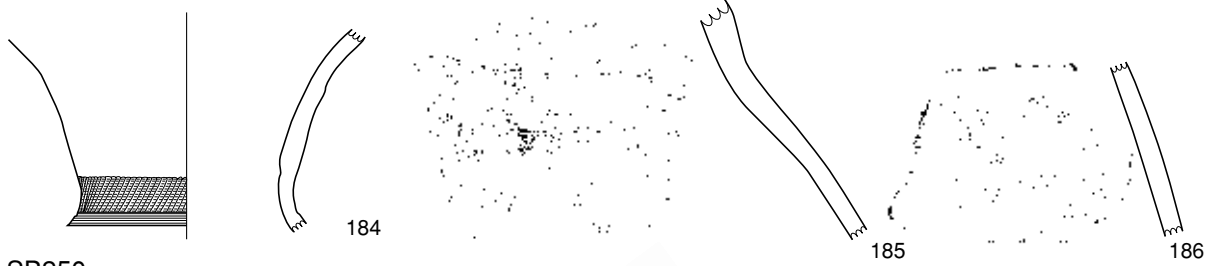


182

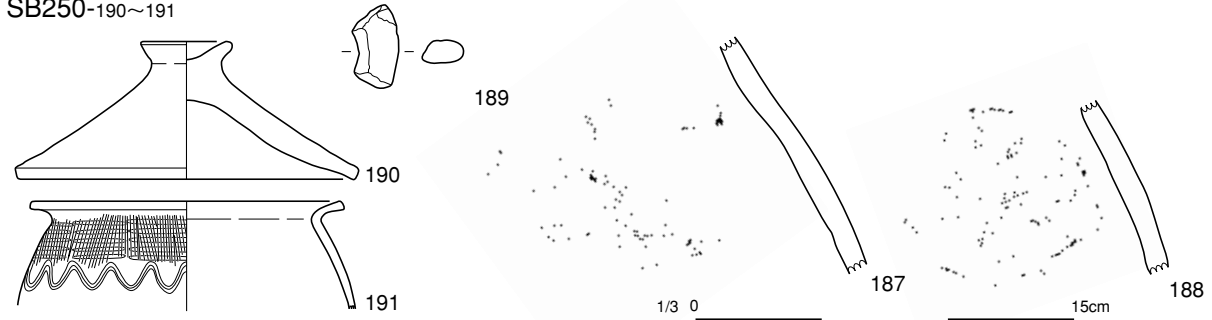
178

1/4 0 20cm

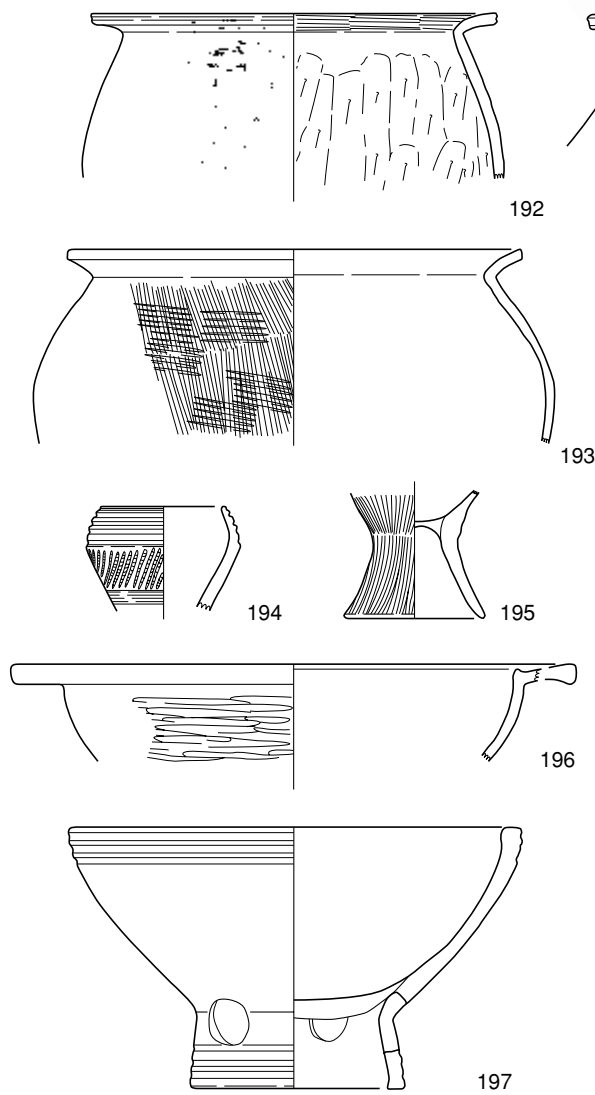
SB248-184~189



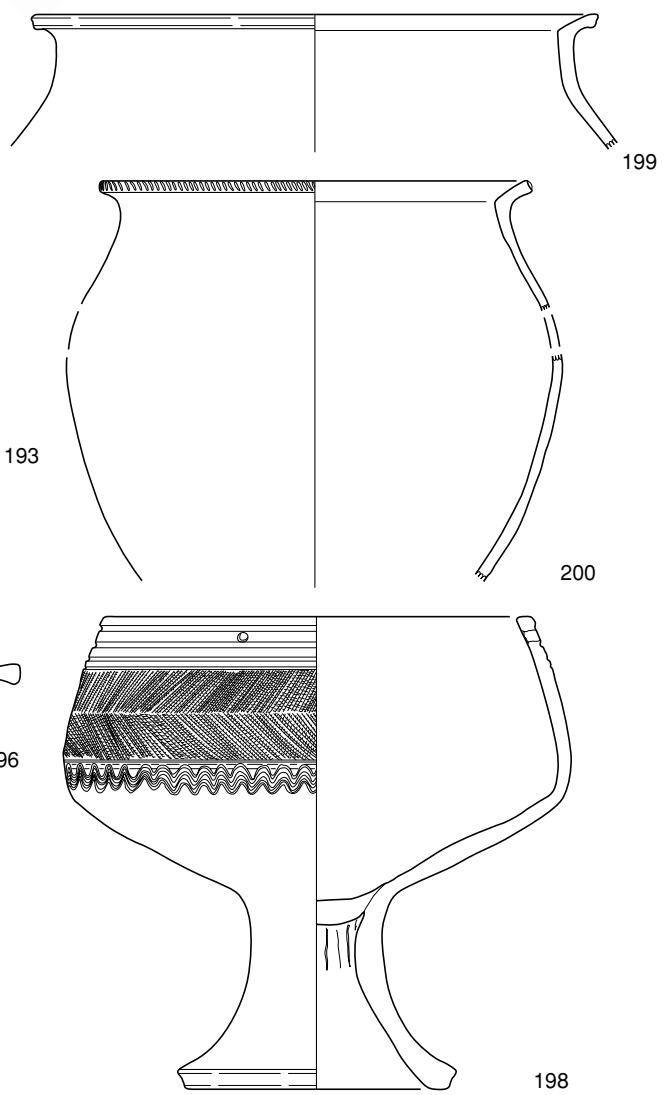
SB250-190~191



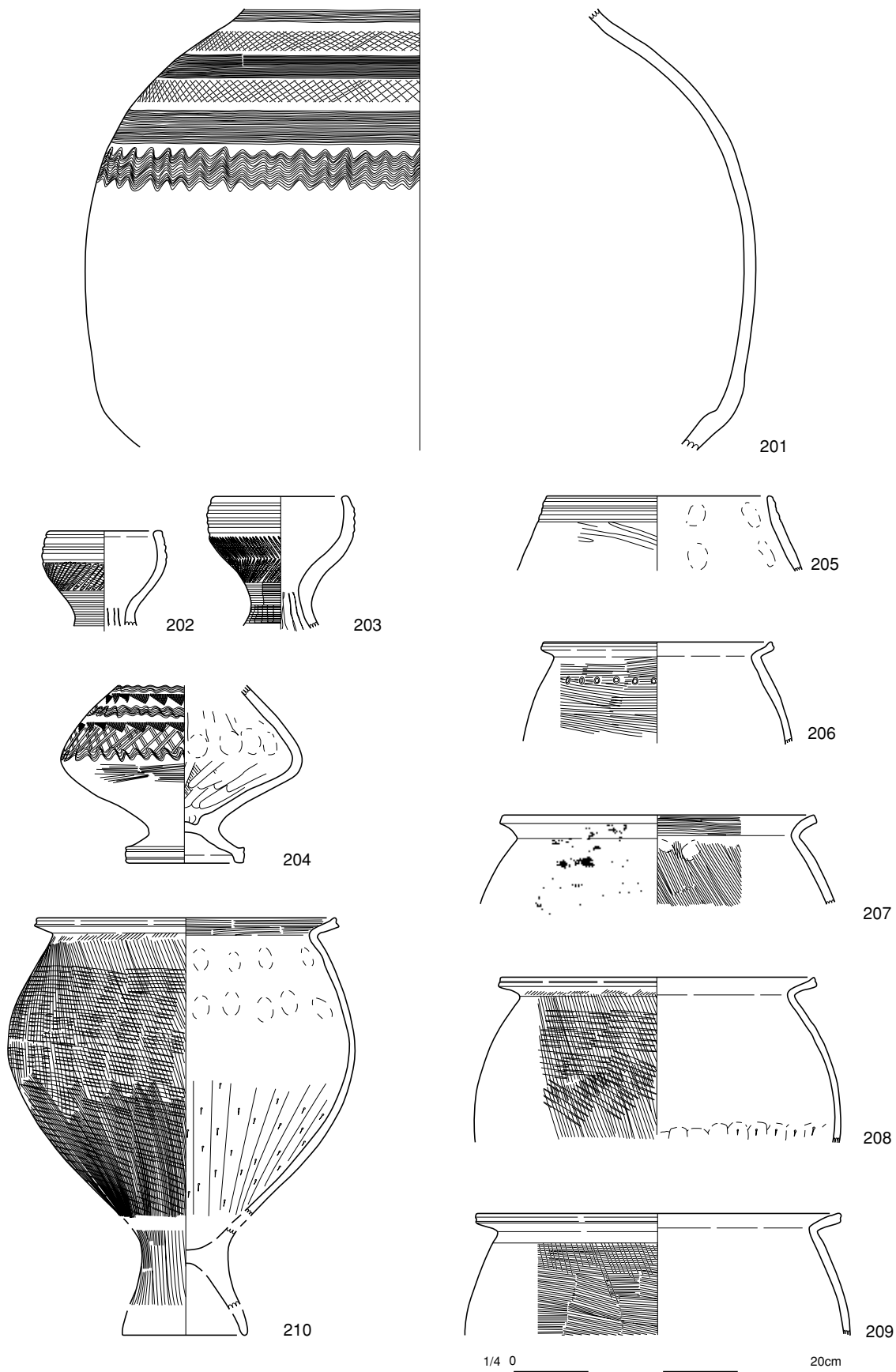
SB251-192~198



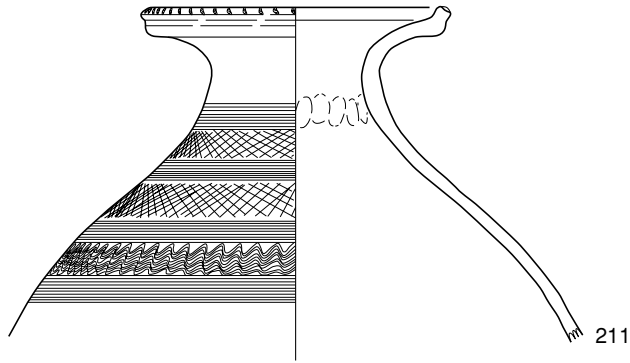
SB253-199~200



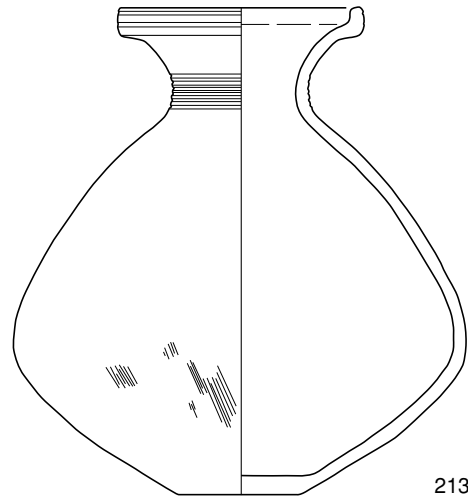
SB253・SK01-201~210



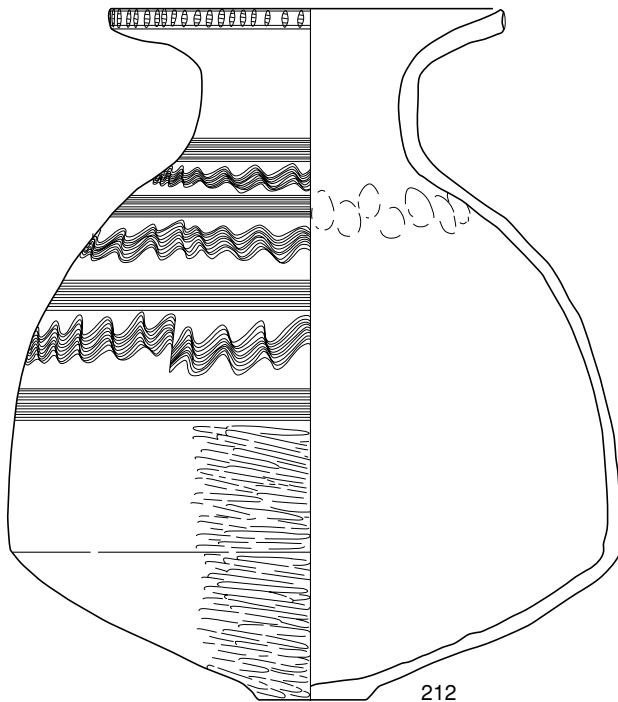
SB258-211~216



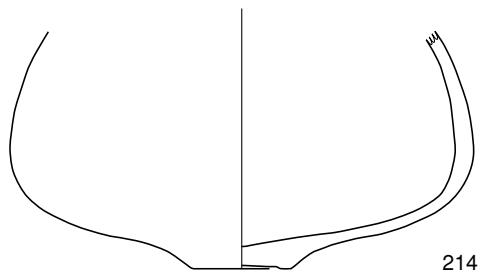
211



213



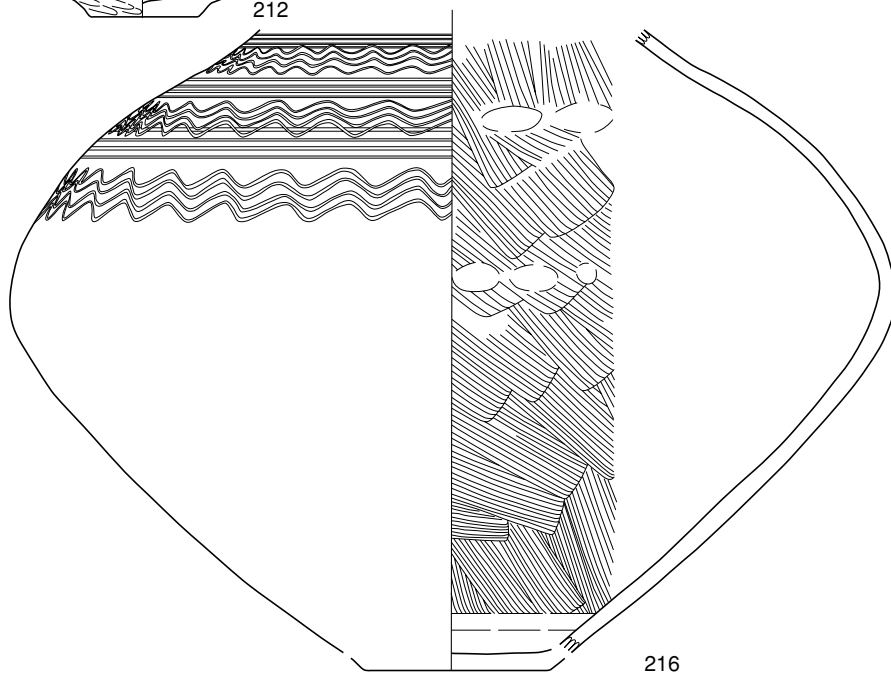
212



214



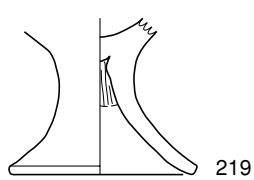
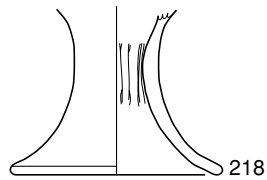
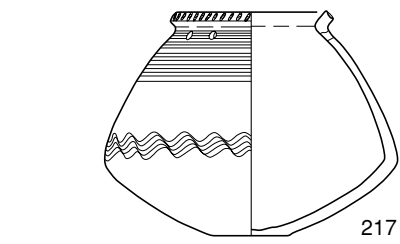
215



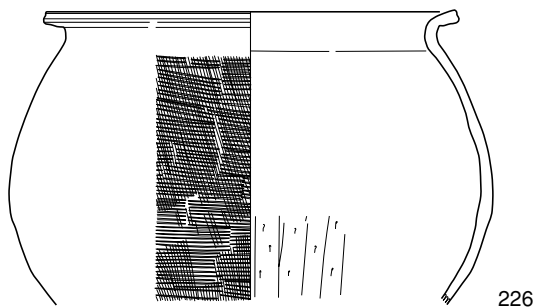
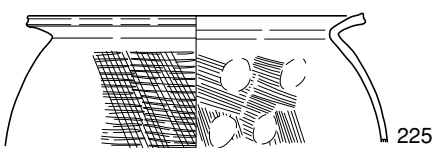
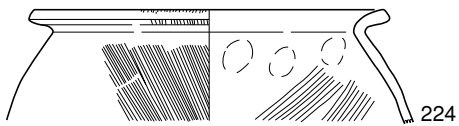
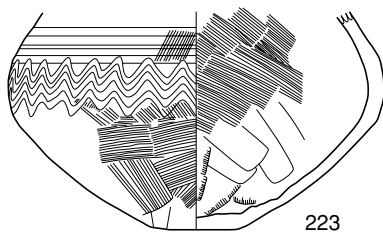
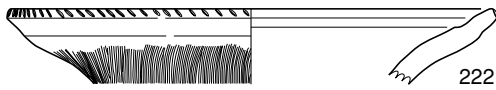
216

1/4 0 20cm

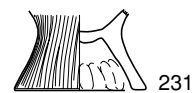
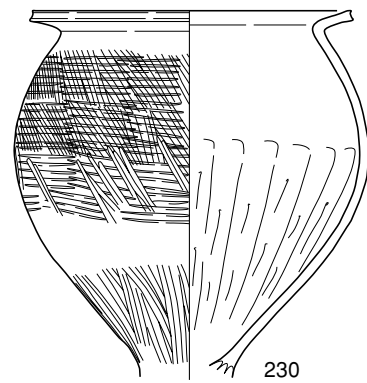
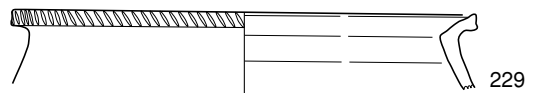
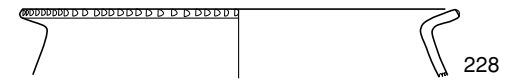
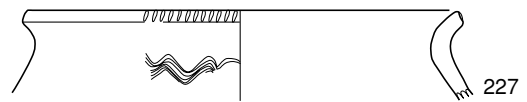
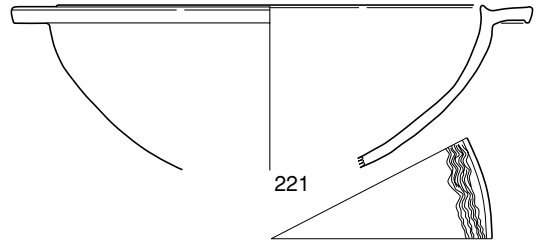
SB255-217~219



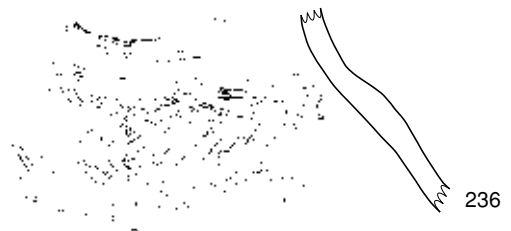
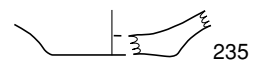
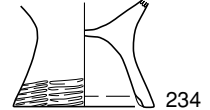
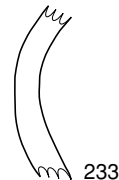
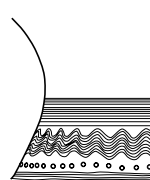
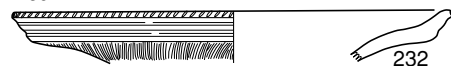
SB260-222~231



SB256・SK01-220~221

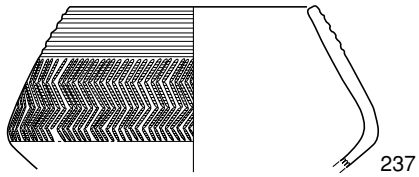


SB261-232~236

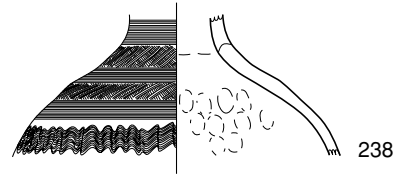


1/4 0 20cm

SB262-237



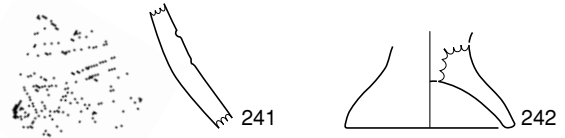
SB272-238



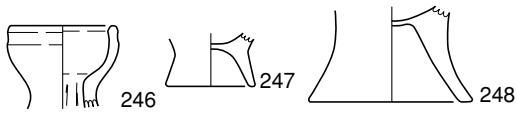
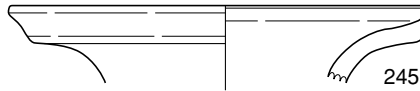
SB264-239~240



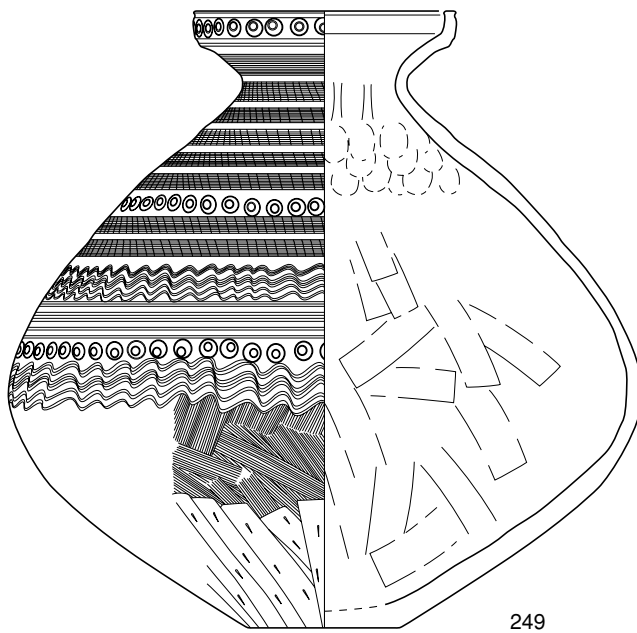
SB265-241~244



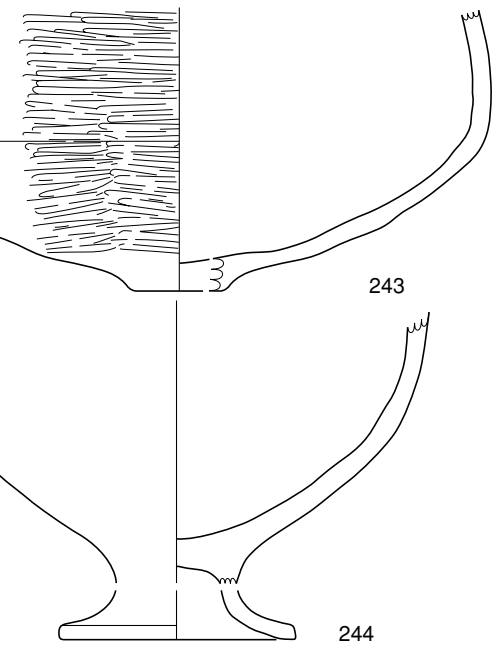
SB271-245~247



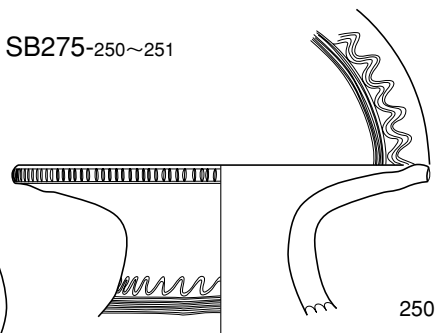
SB271・SK01-249



249



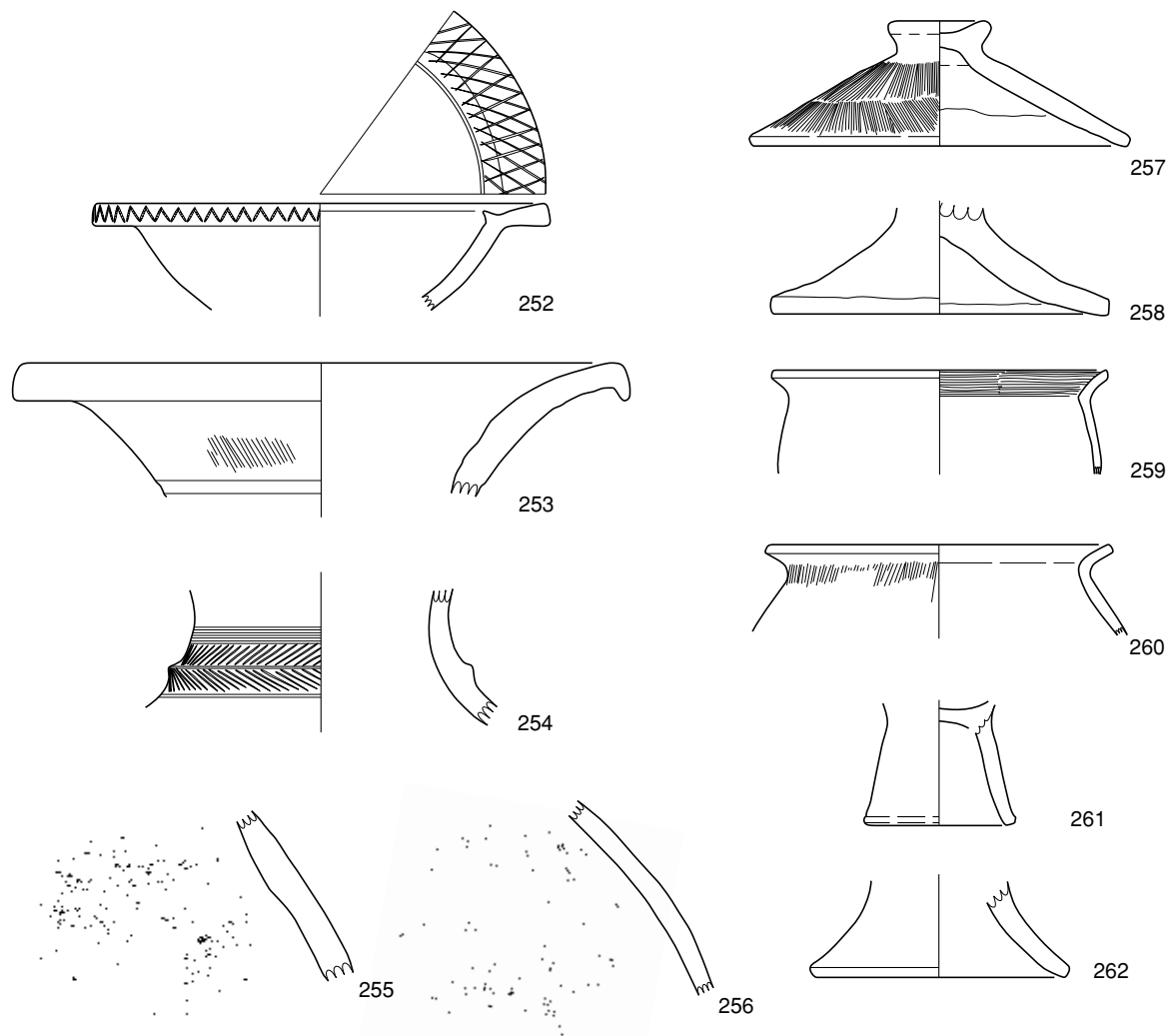
SB275-250~251



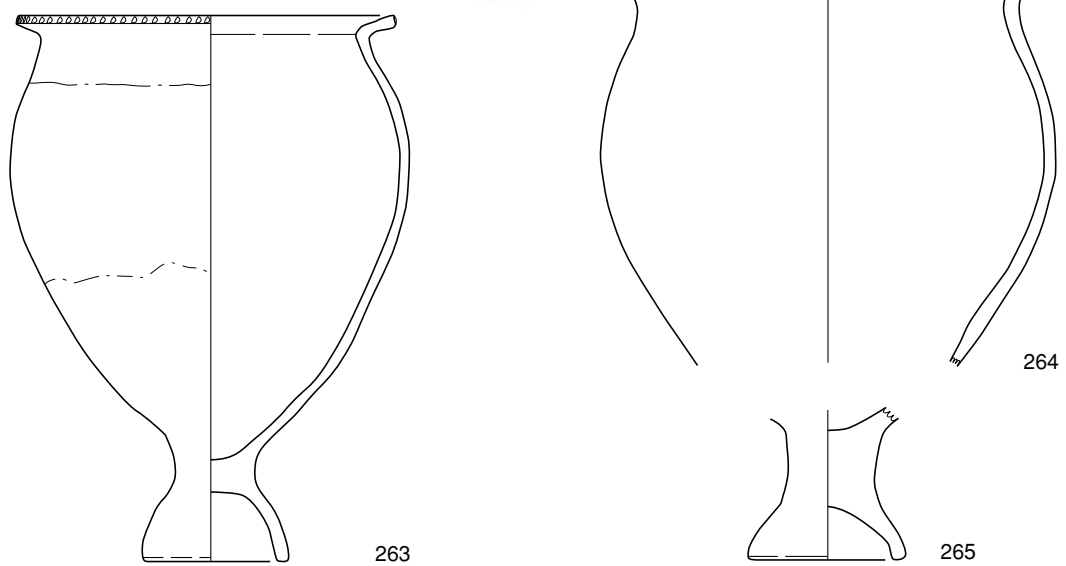
251

1/4 0 20cm

SB269-252~262

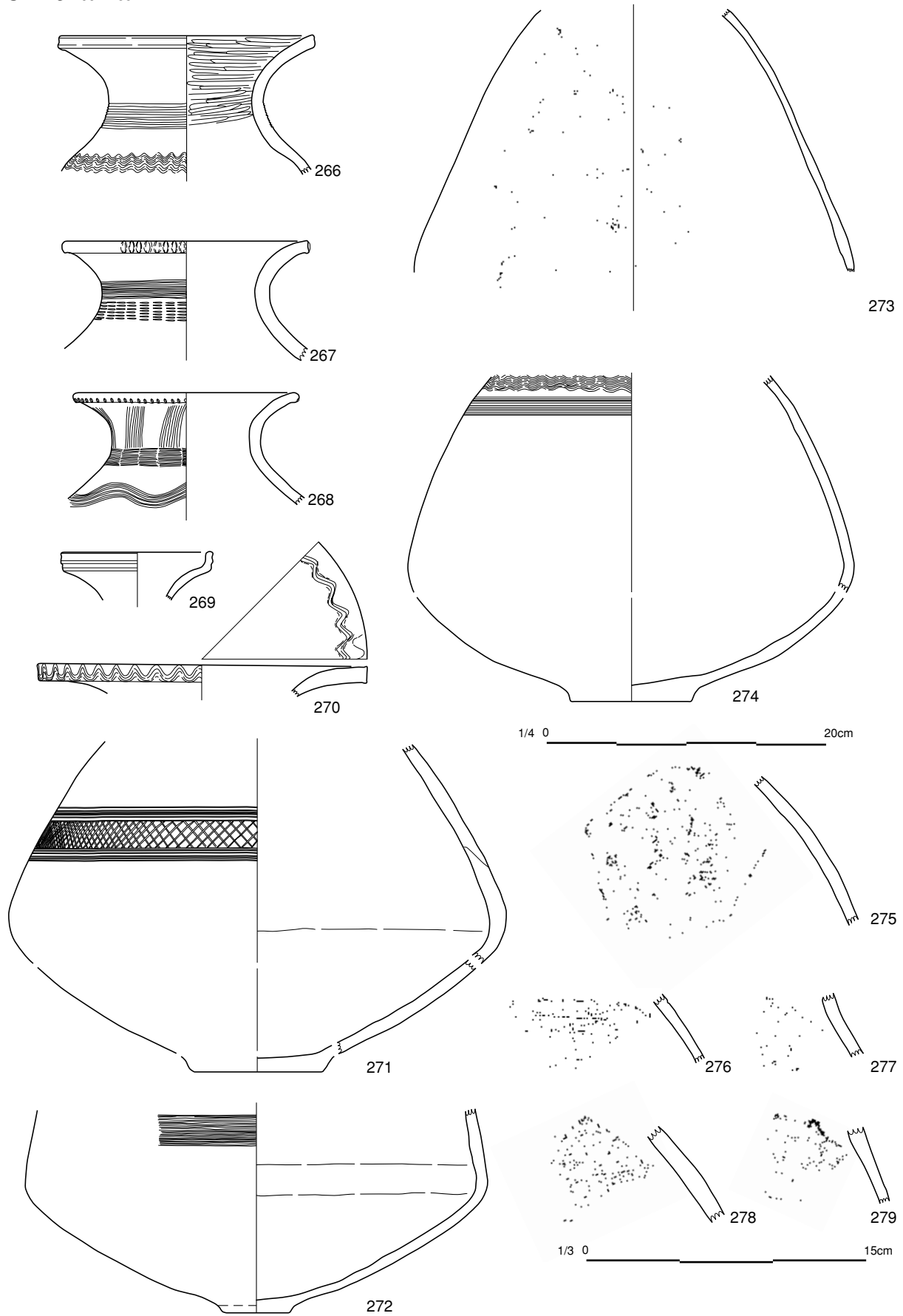


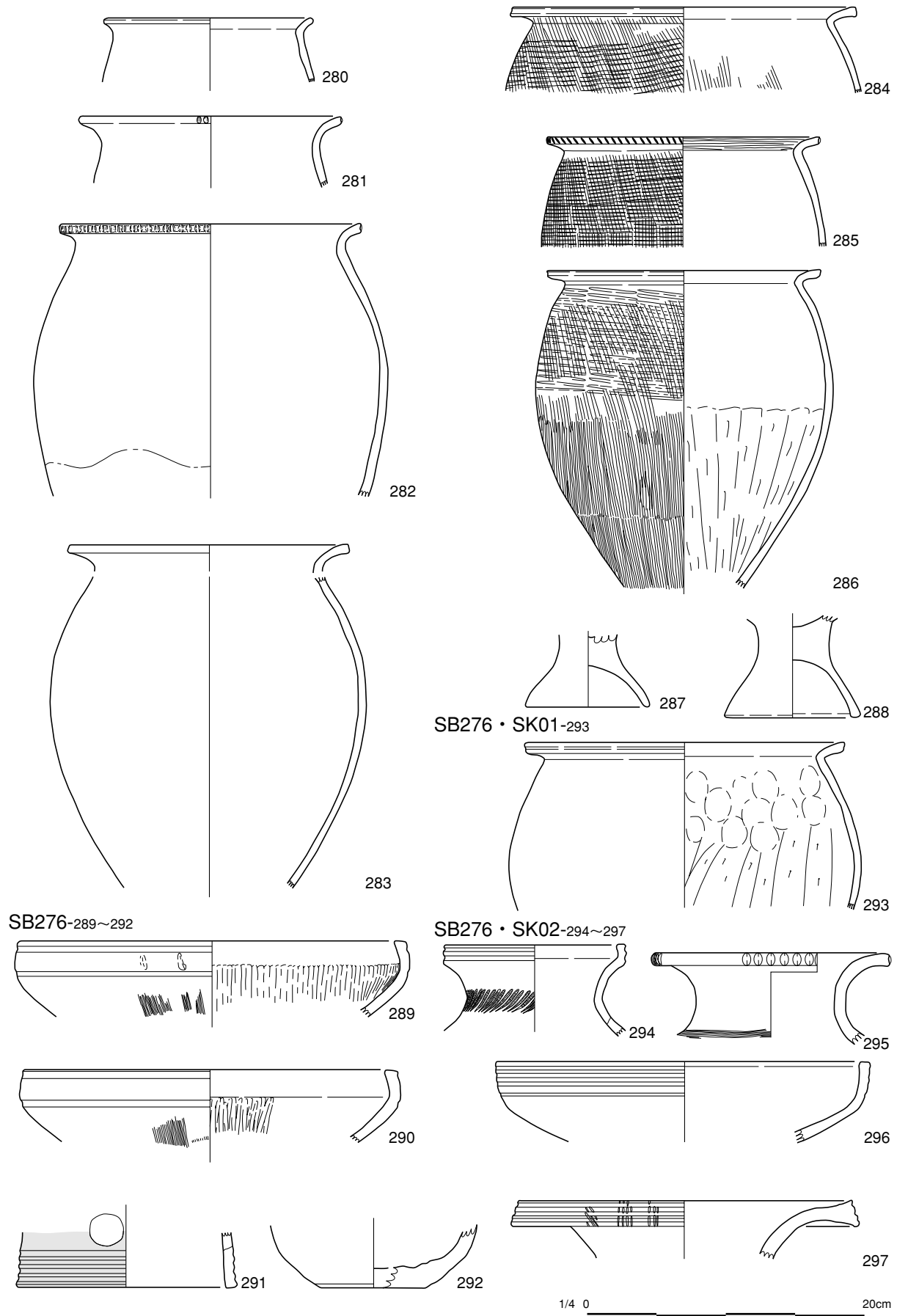
SB270-263~265



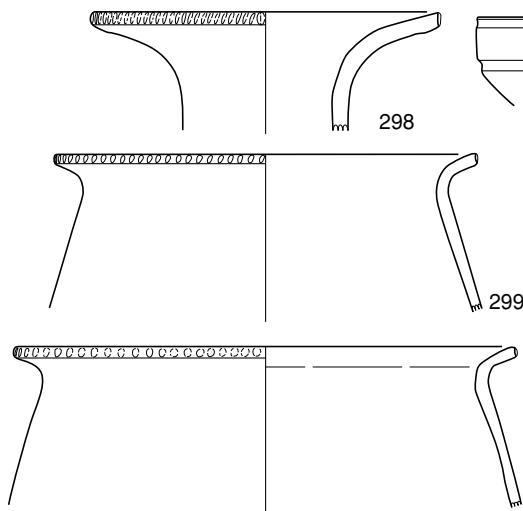
1/4 0 20cm

SB273-266~288

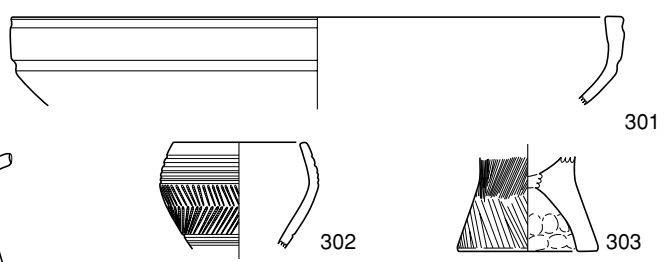




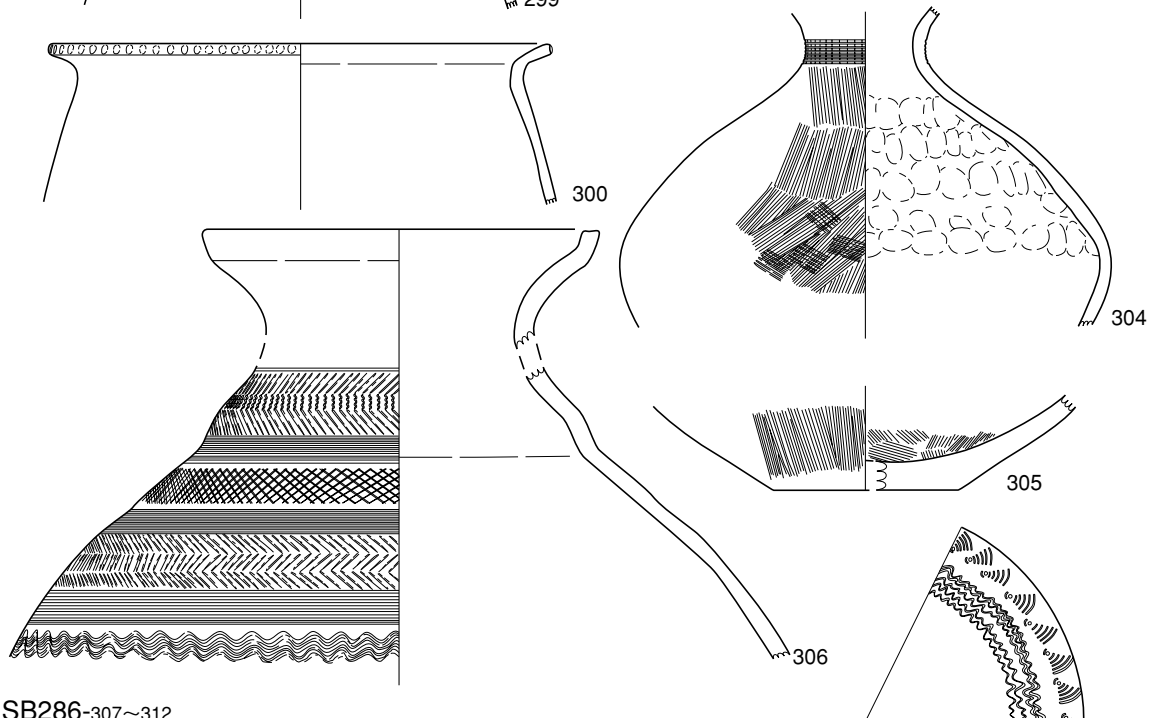
SB278-298~300



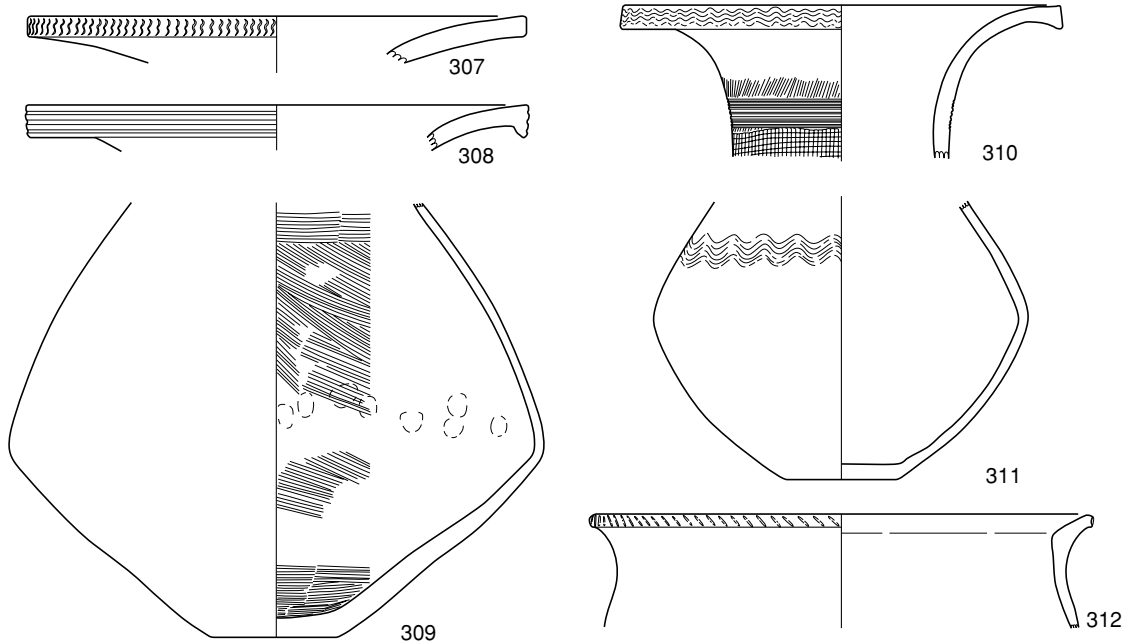
SB282-301~303



SB283-304~306

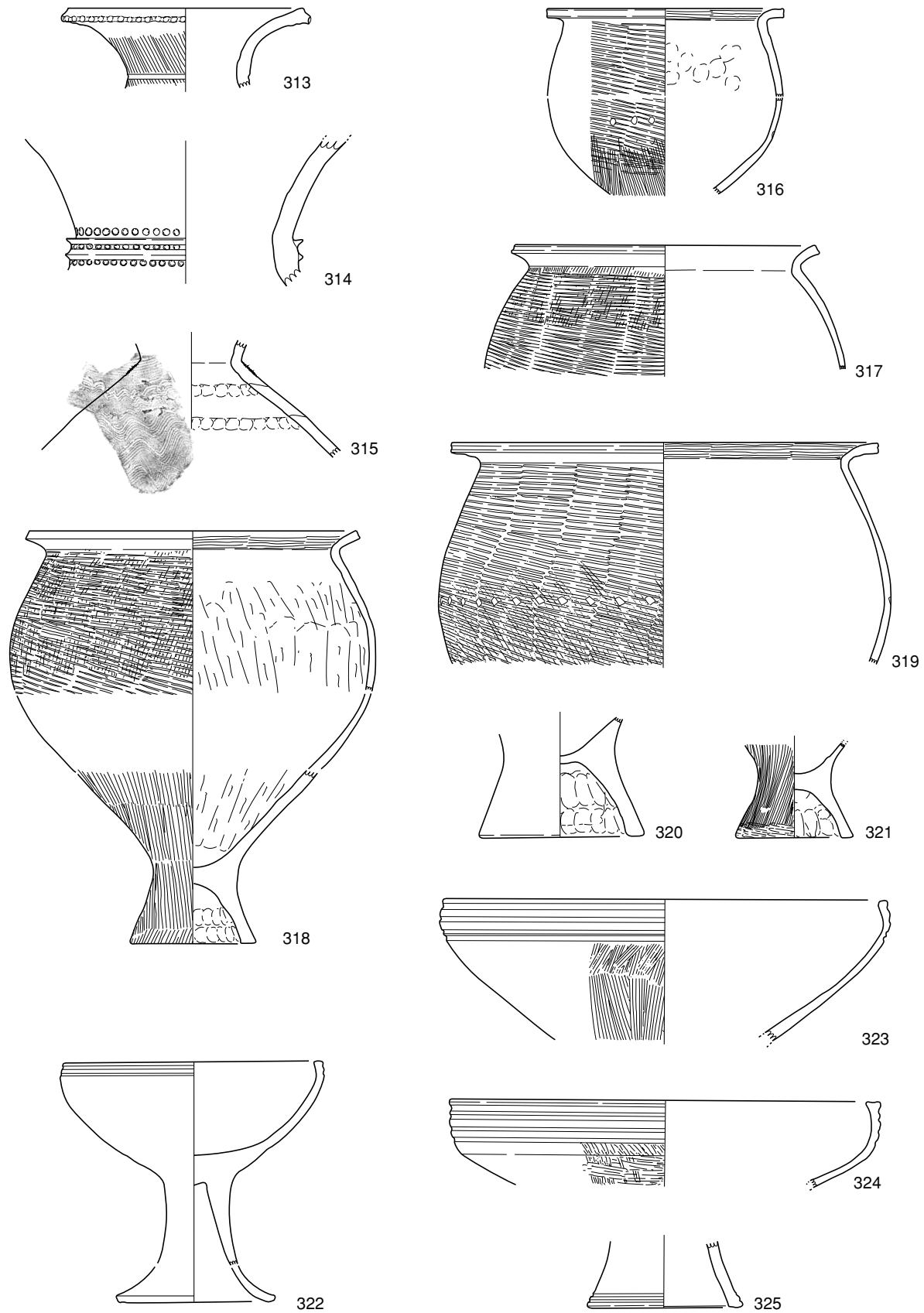


SB286-307~312

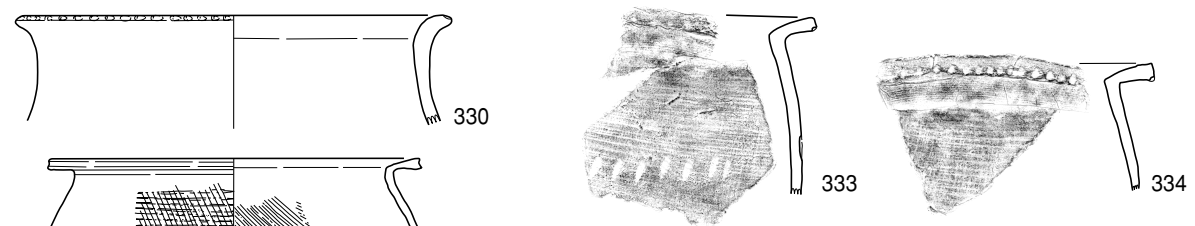
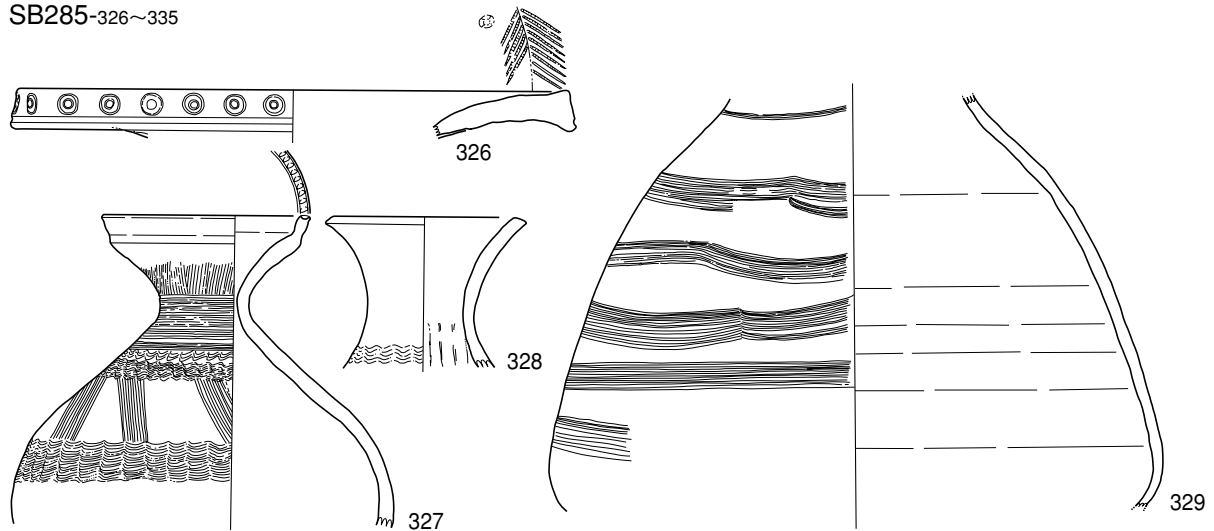


1/4 0 20cm

SB284-313~325

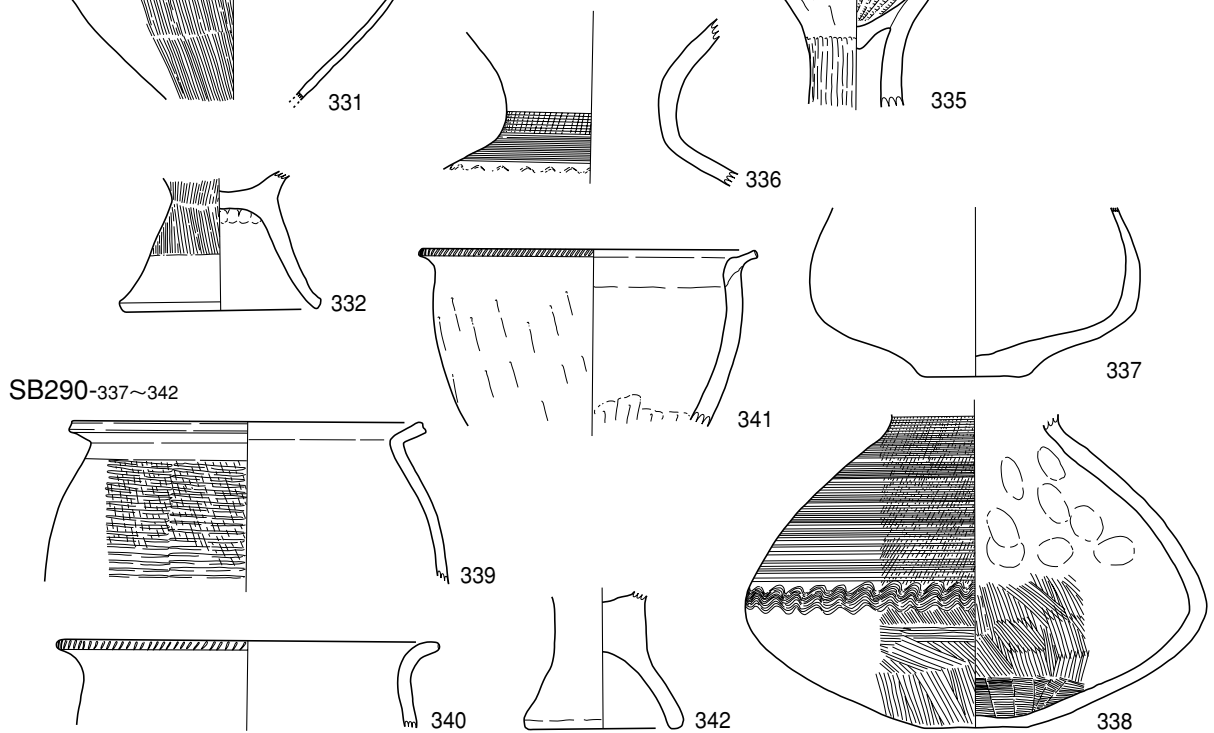


SB285-326~335



SB288-336

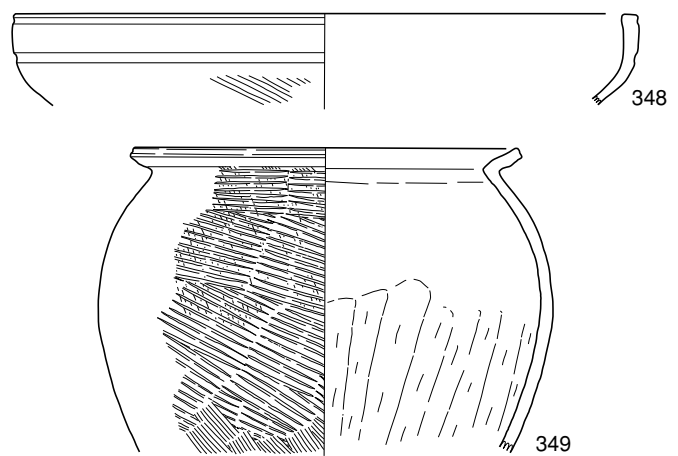
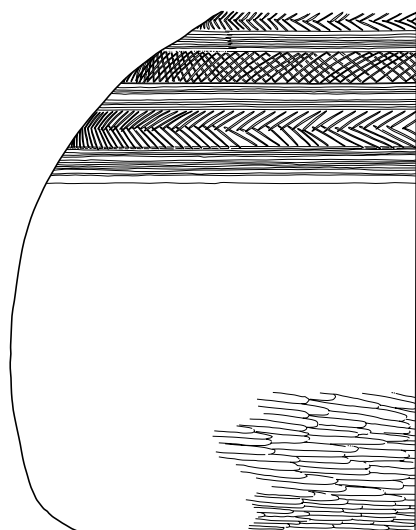
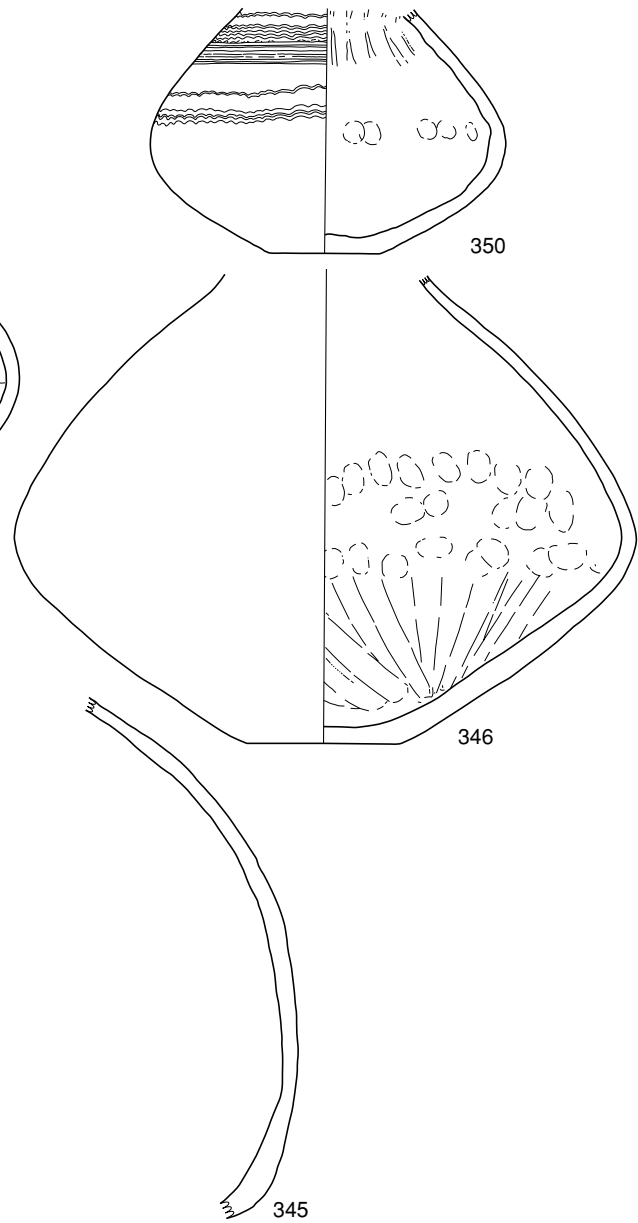
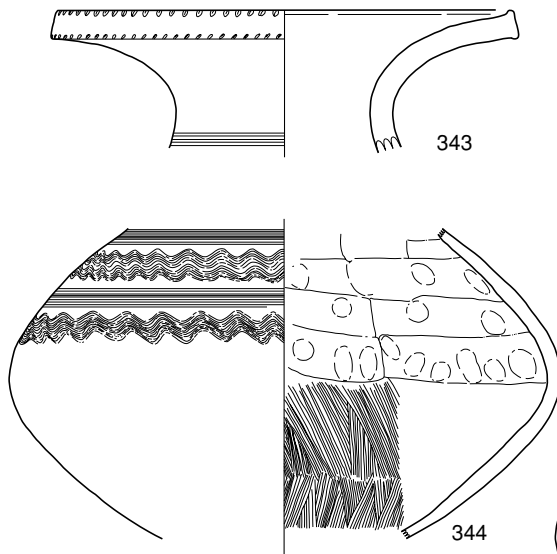
SB290-337~342



1/4 0 20cm

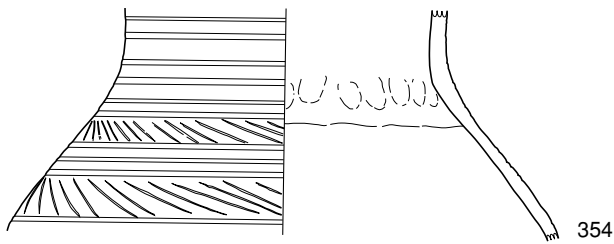
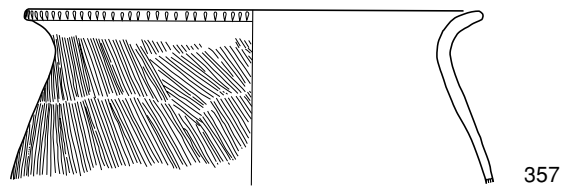
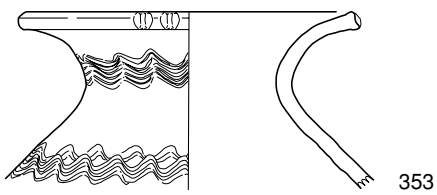
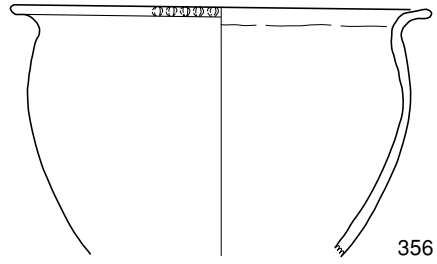
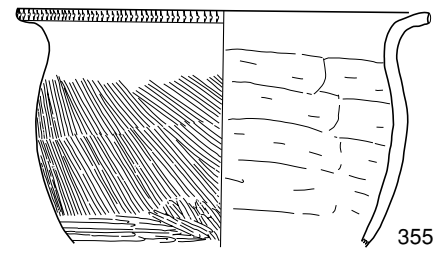
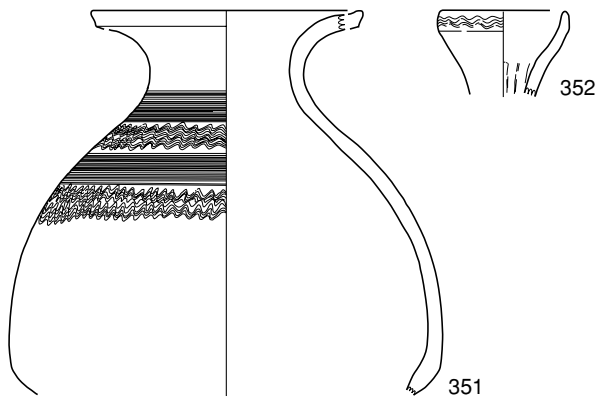
SB291-343~349

SB291・SK01-350

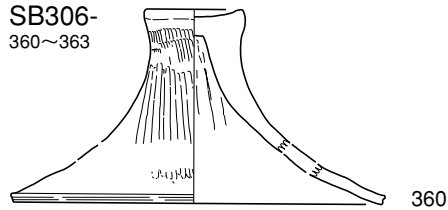


1/4 0 20cm

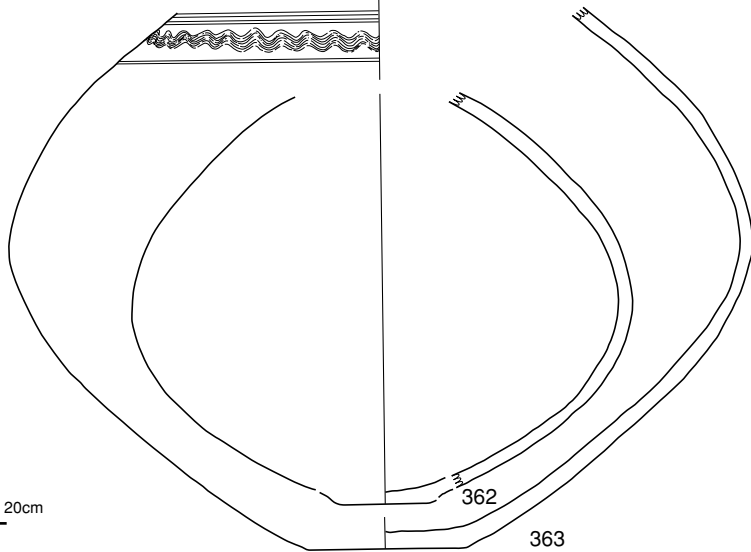
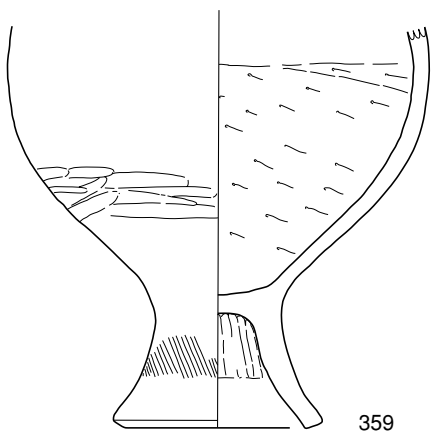
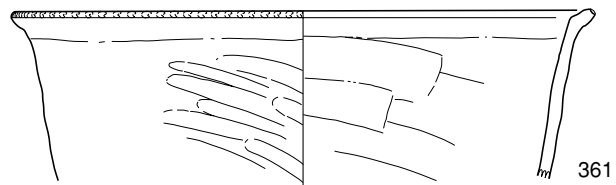
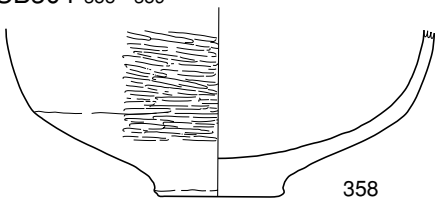
SB300-351~357



SB306-360~363

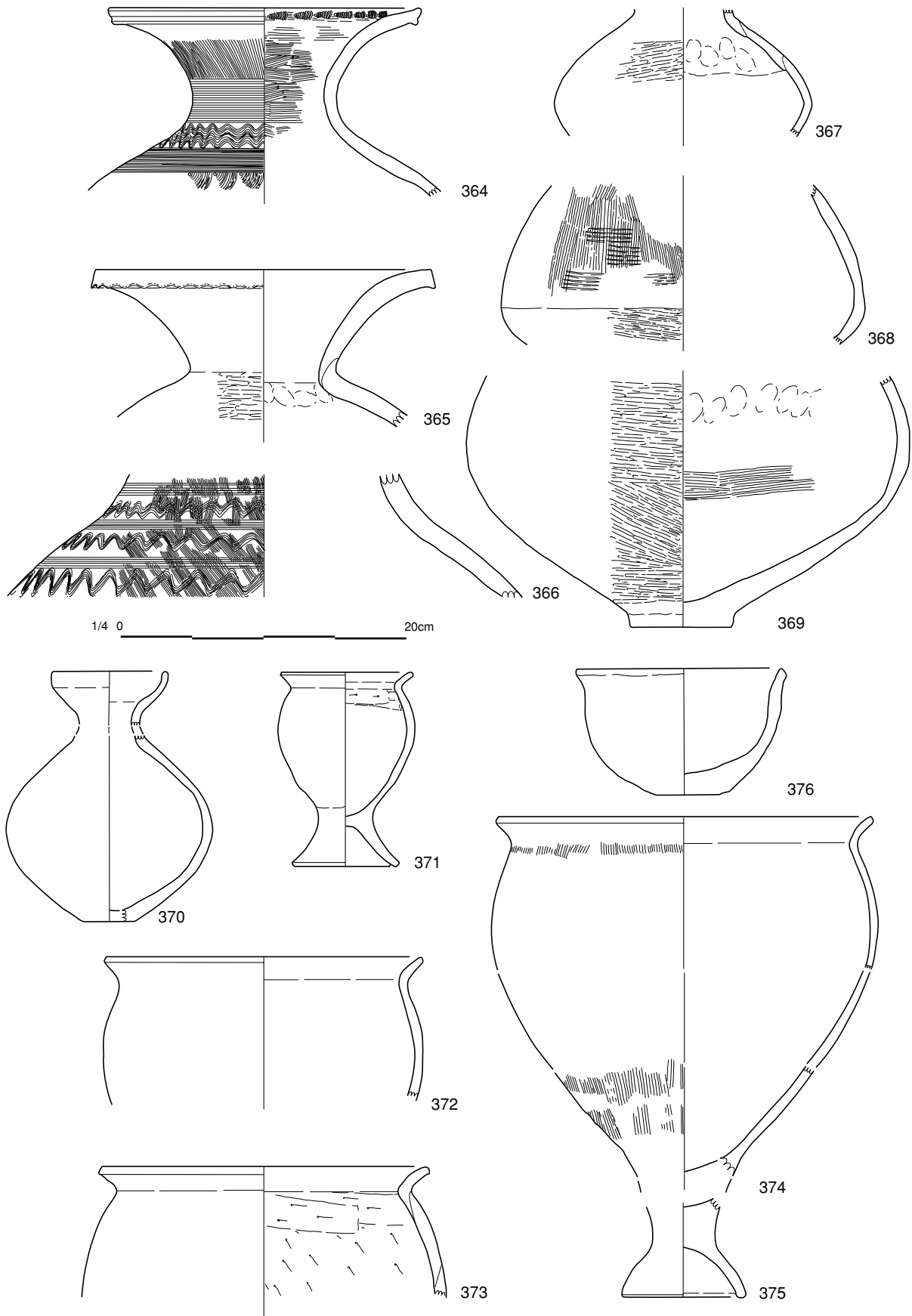


SB304-358~359

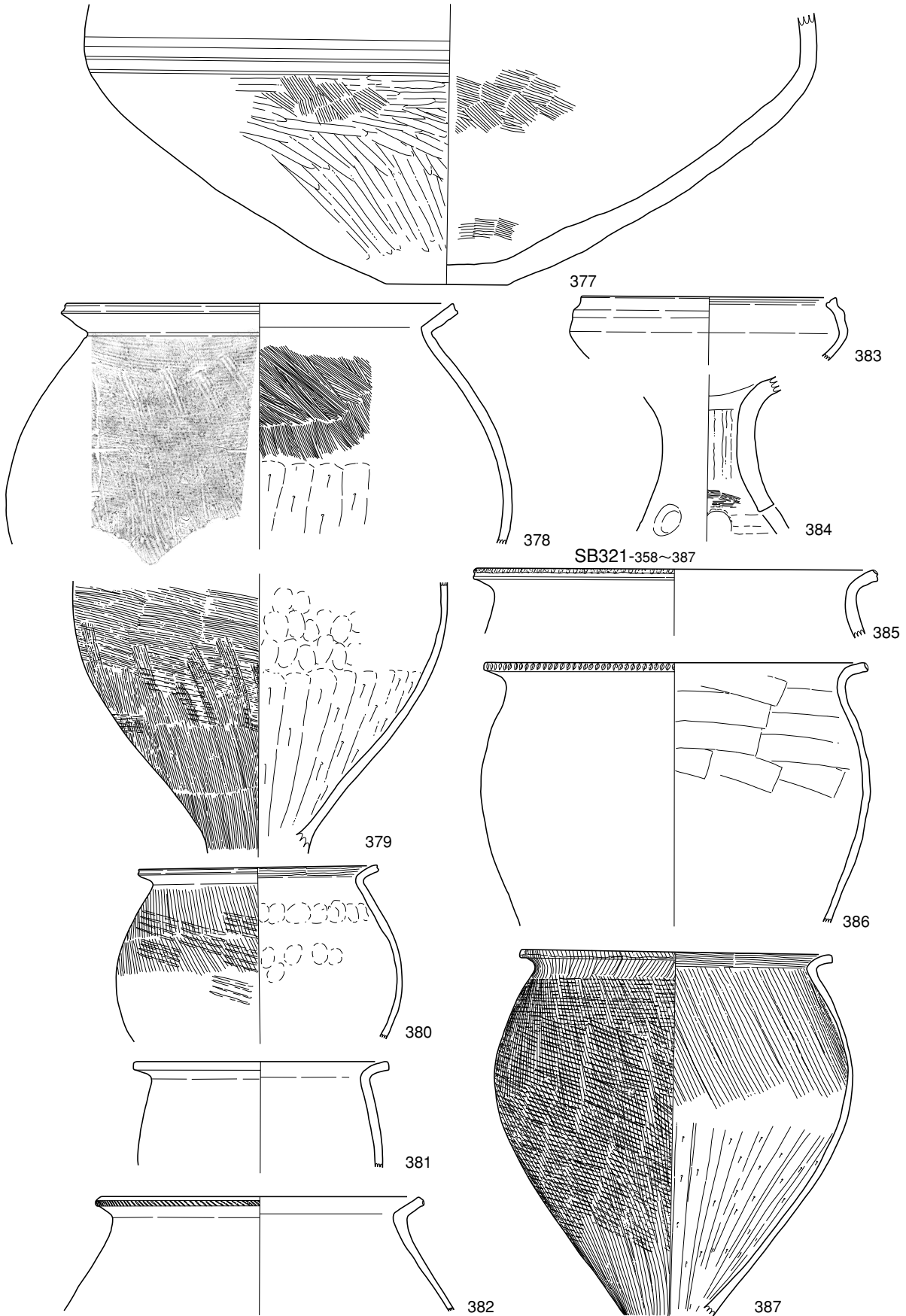


1/4 0 20cm

SB303-364~376

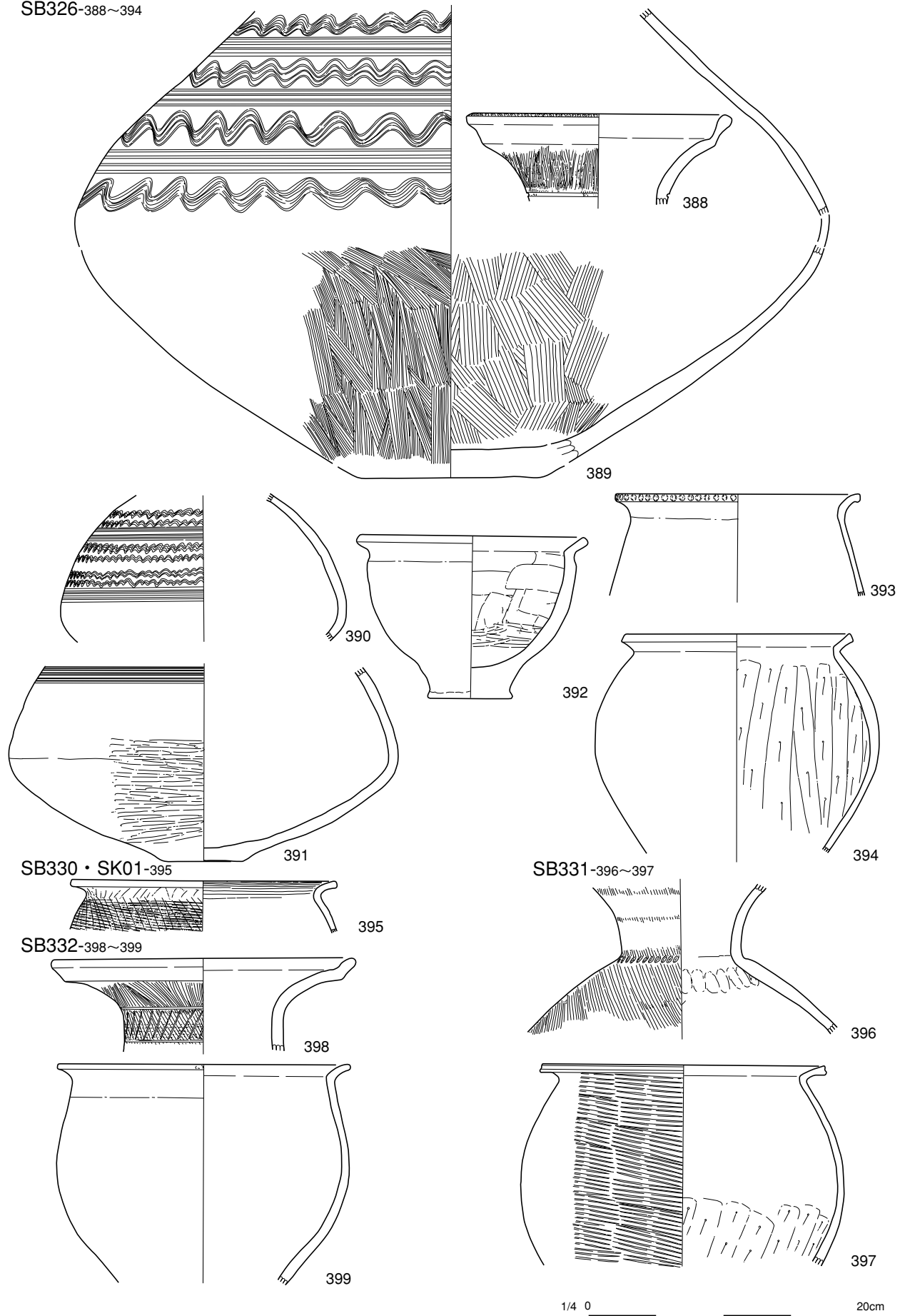


SB308-377~384

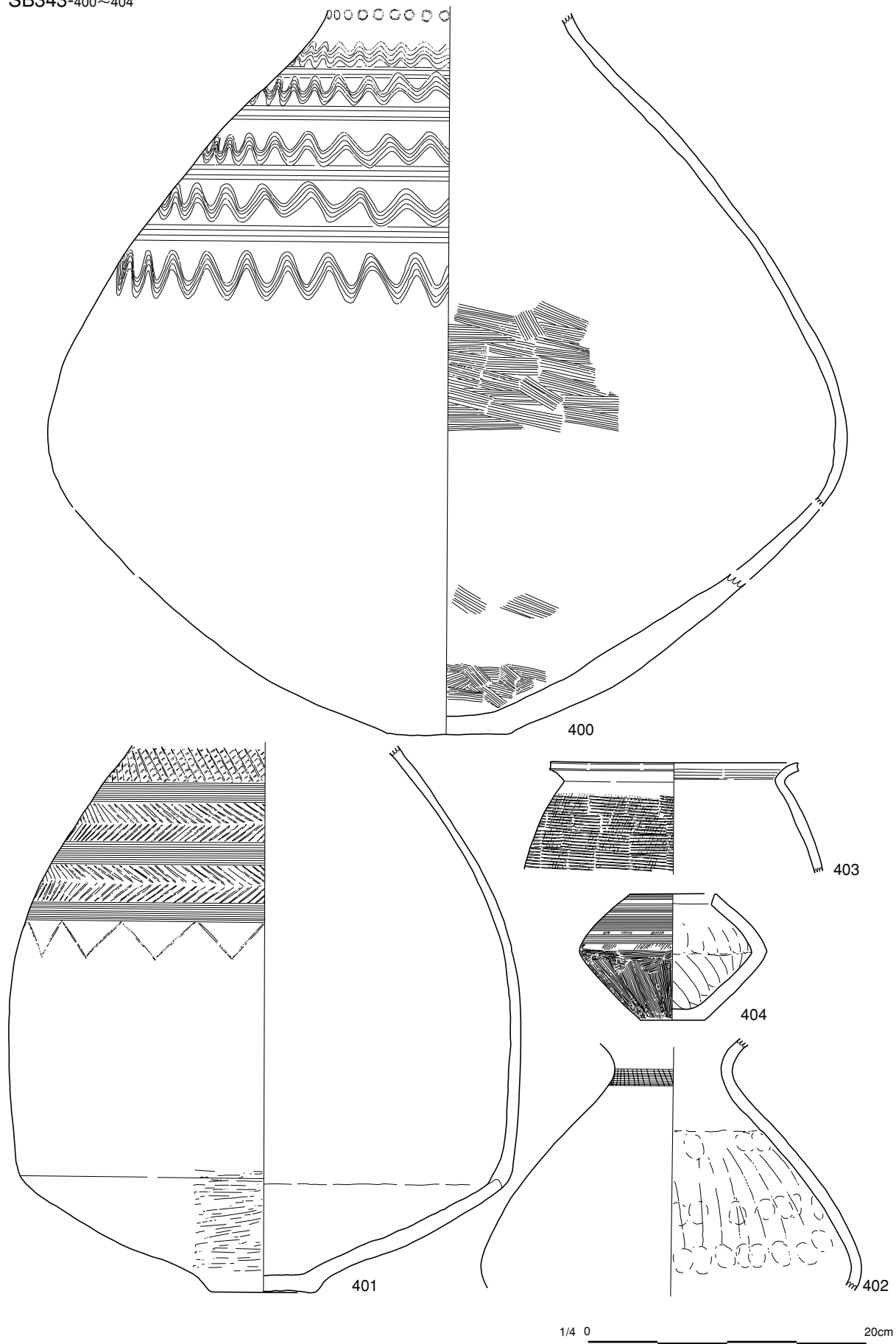


1/4 0 20cm

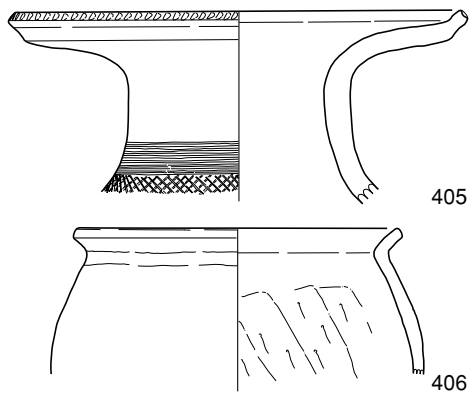
SB326-388~394



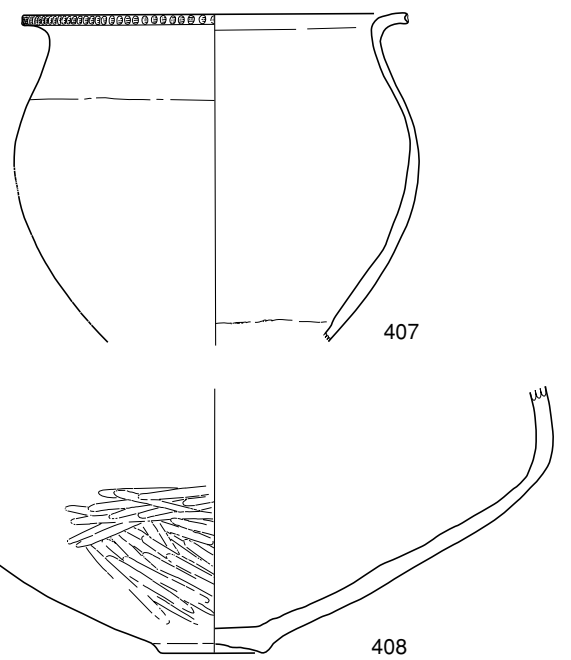
SB343-400~404



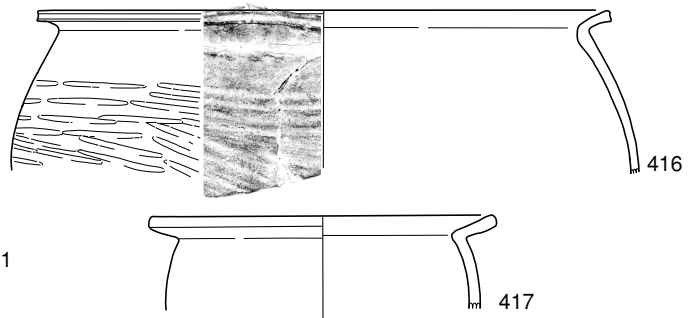
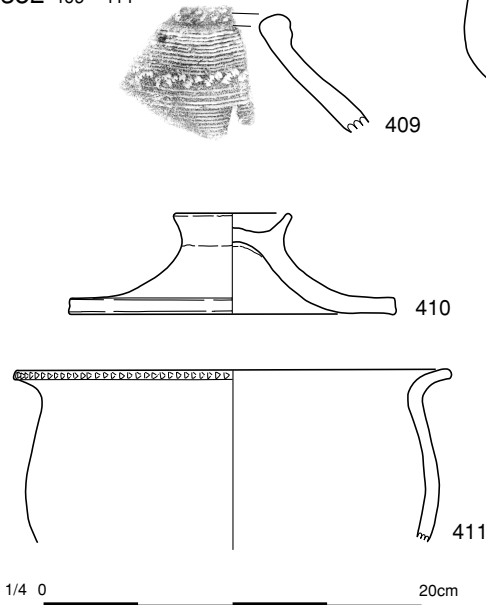
SB333-405~406



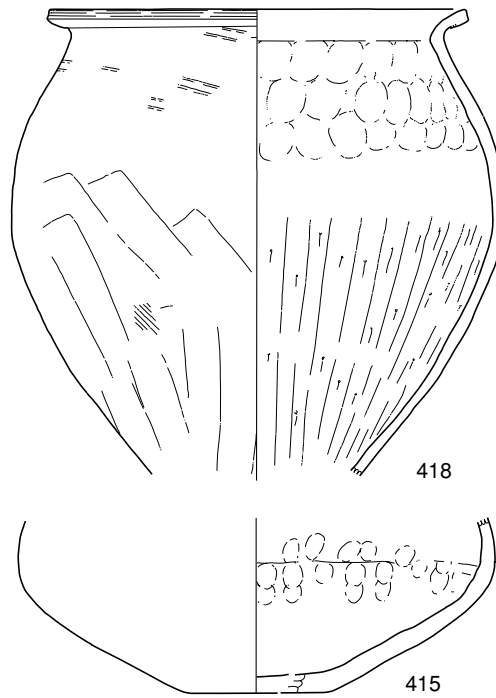
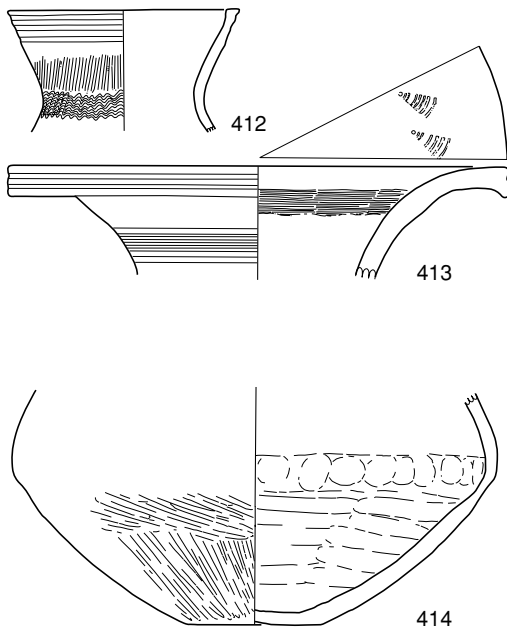
SB347-407~408



SB352-409~411

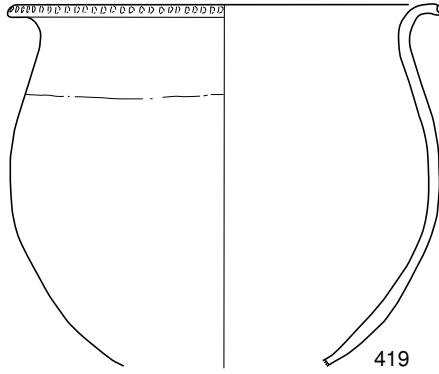
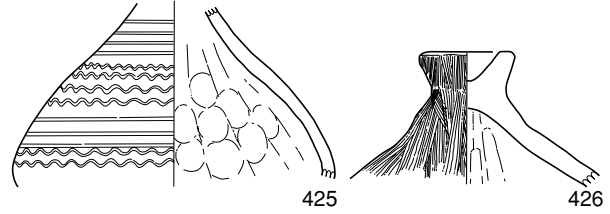
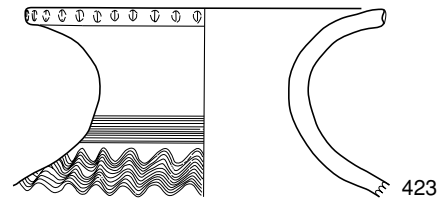


SB355-412~418

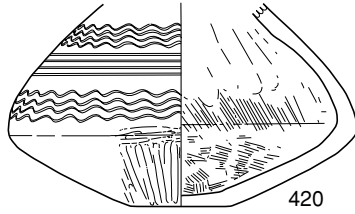


1/4 0 20cm

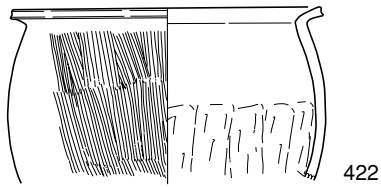
SB358-419

SB367-
423~428

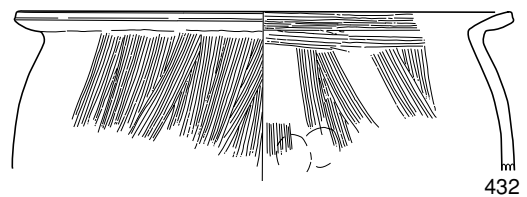
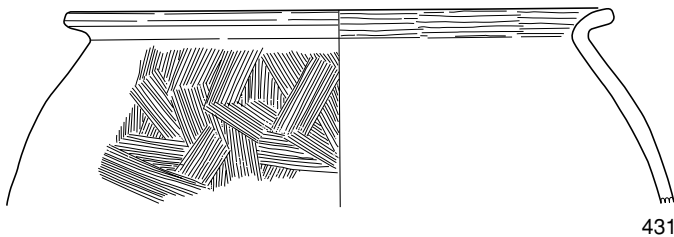
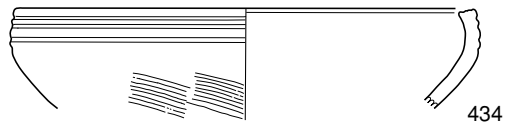
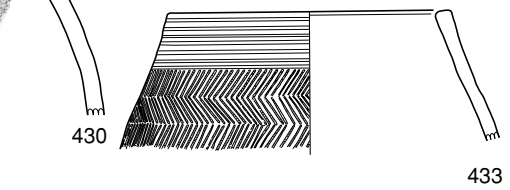
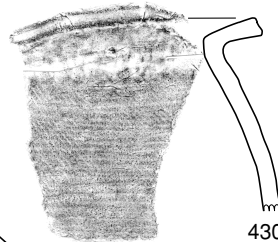
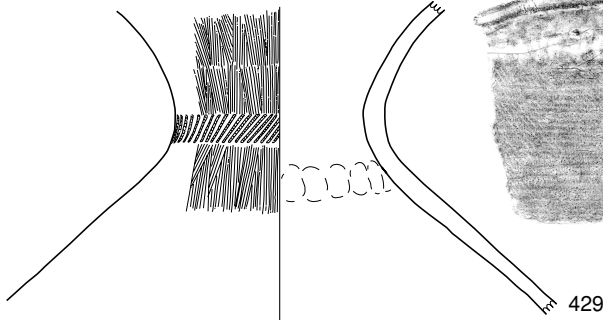
SB358・P01-420



SB360-421~422

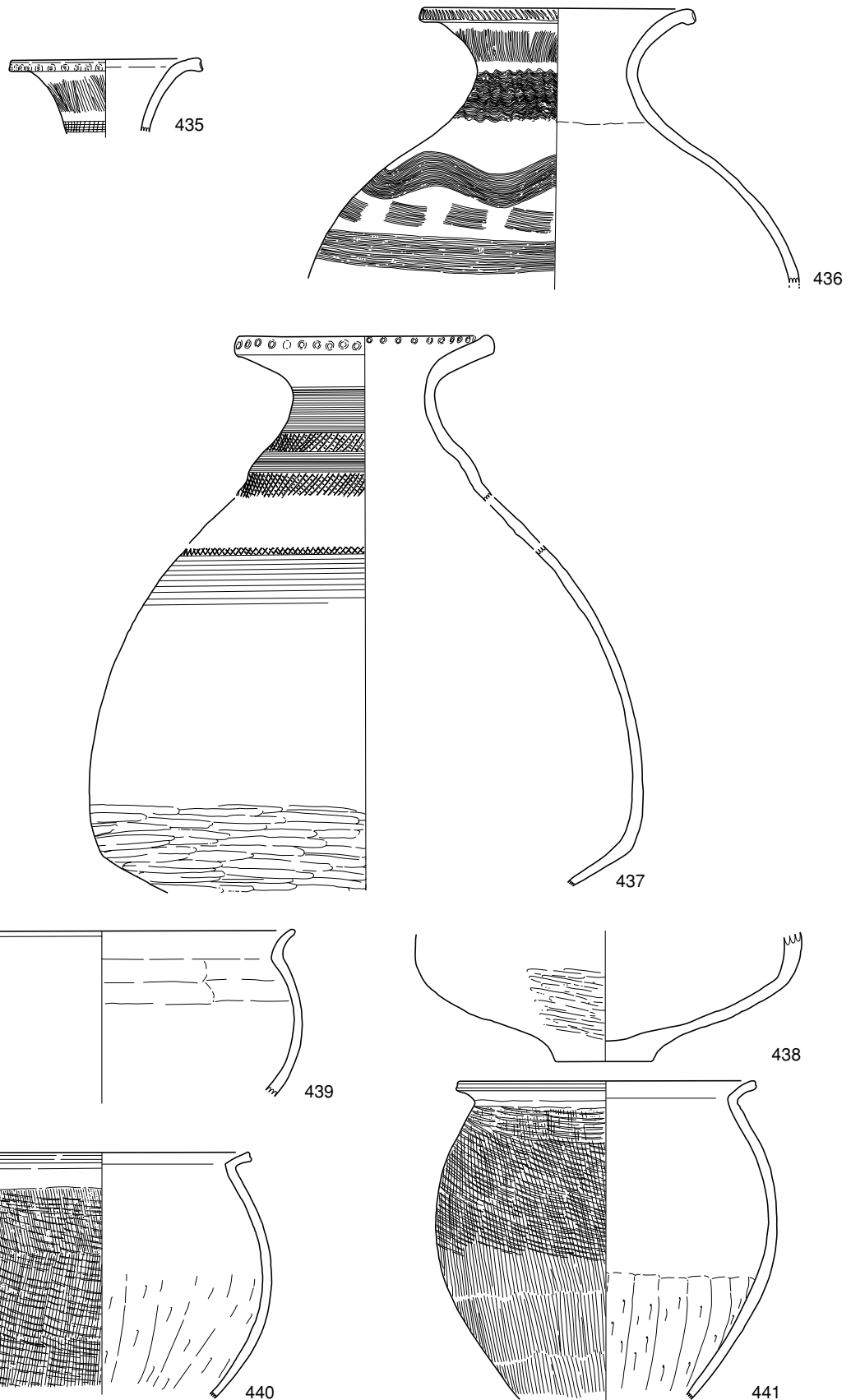


SB369-429~434



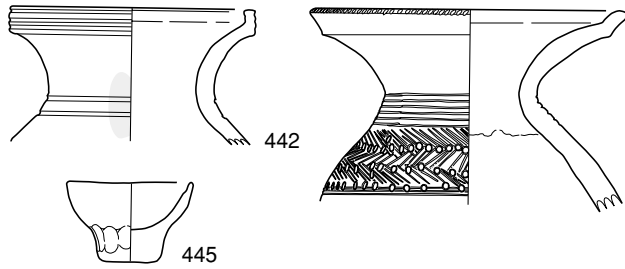
1/4 0 20cm

SB368-435~441

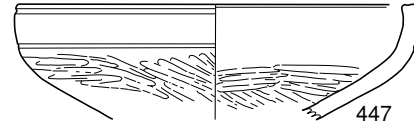


1/4 0 20cm

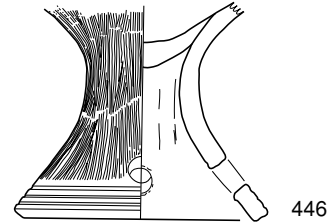
SB375-442~445



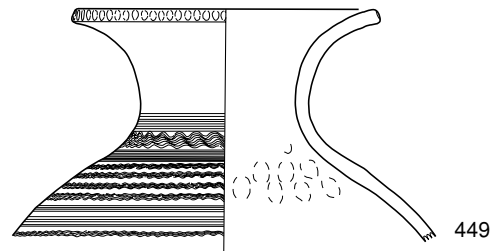
SB385-447



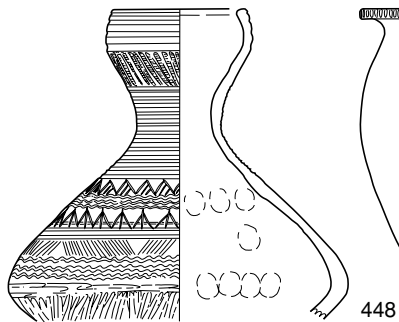
SB382-446



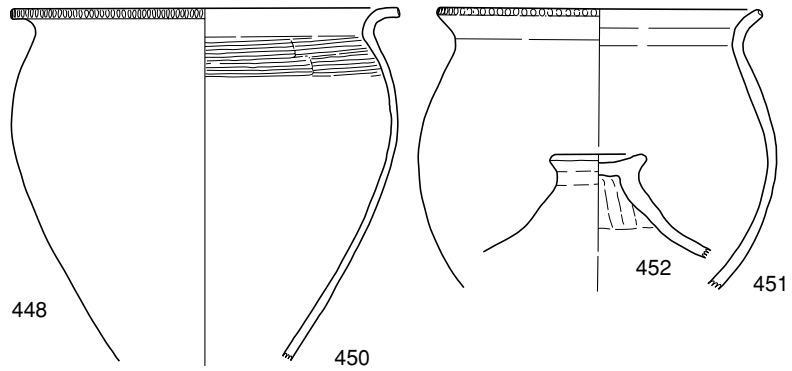
SB394-449



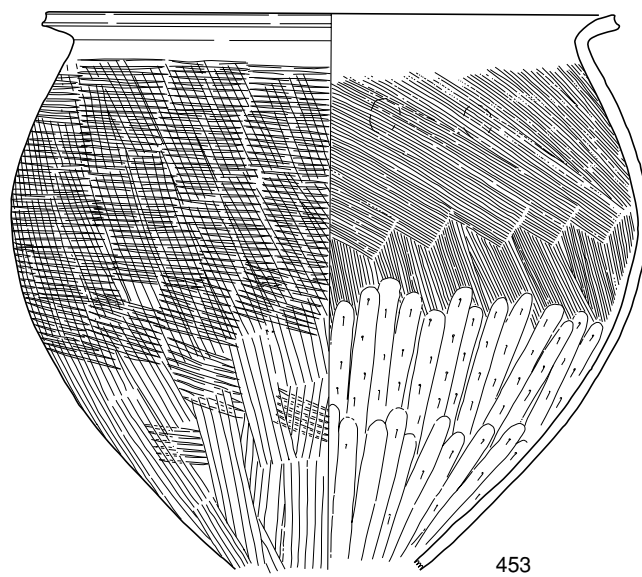
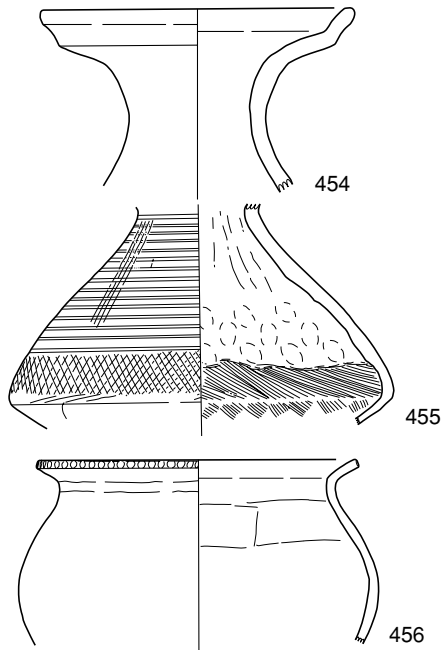
SB386-448



SB397-450~453

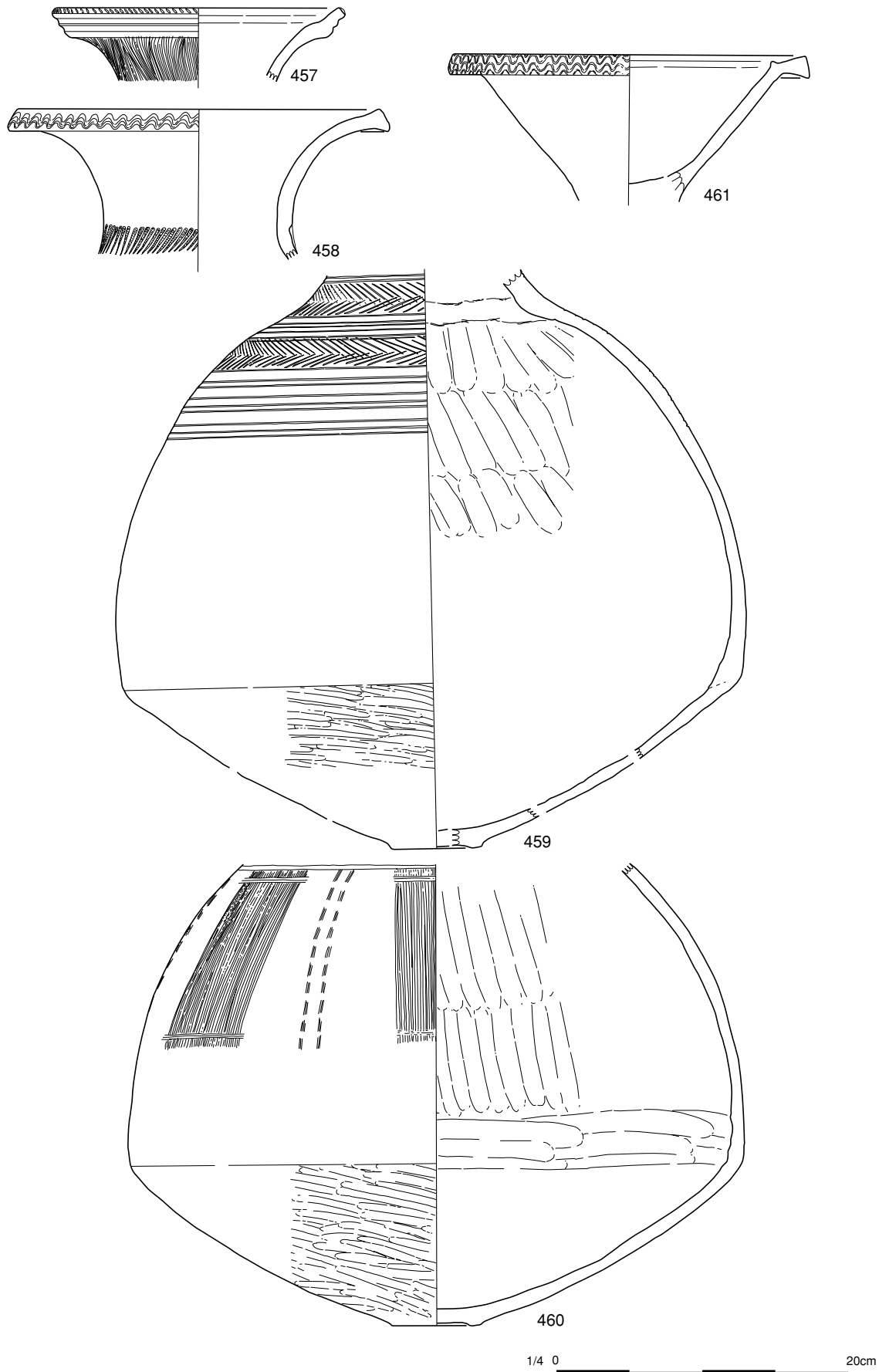


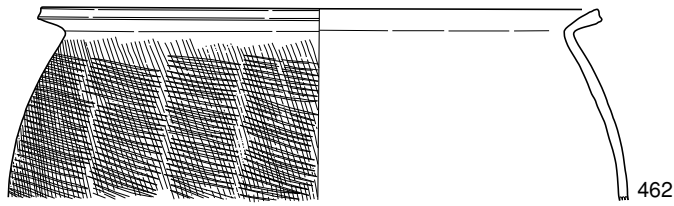
SB400-454~456



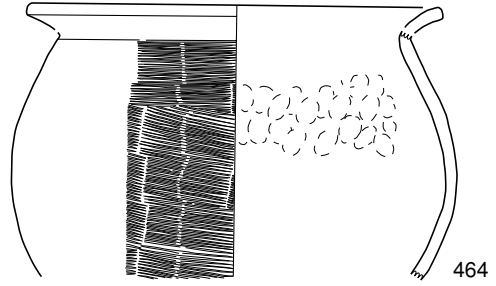
1/4 0 20cm

SB388-457~466

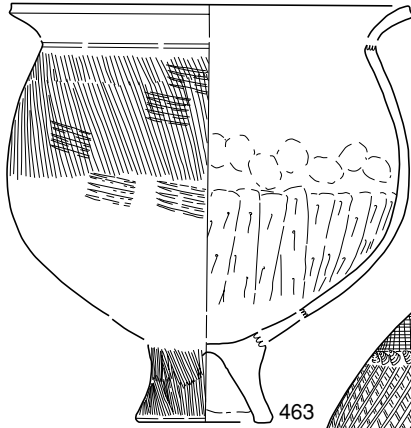




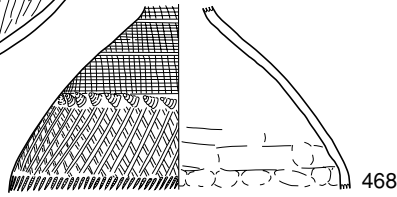
462



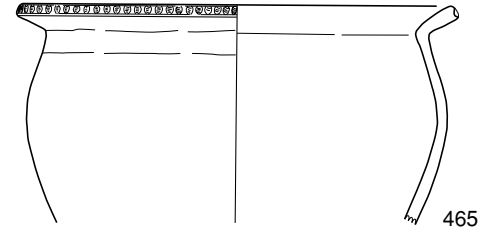
464



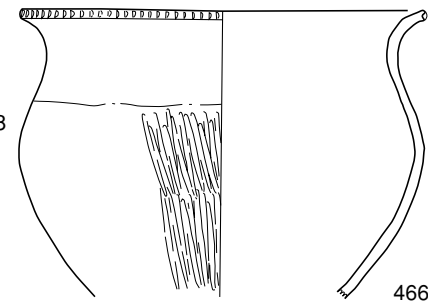
463



468

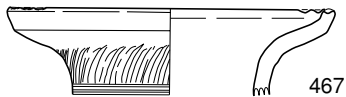


465



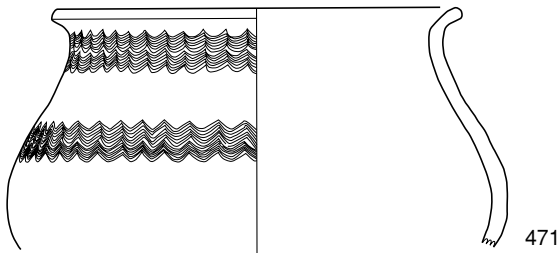
466

SB398-467~470



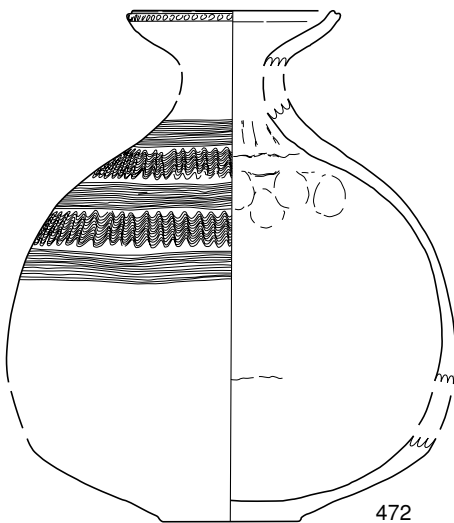
467

SB398・P01-471

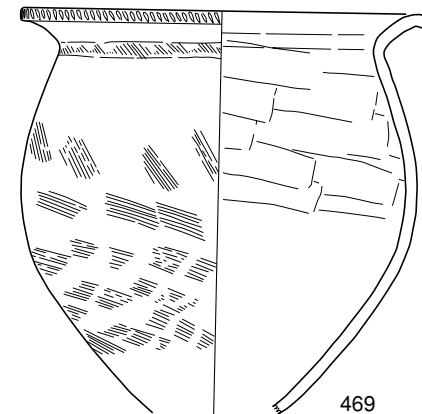


471

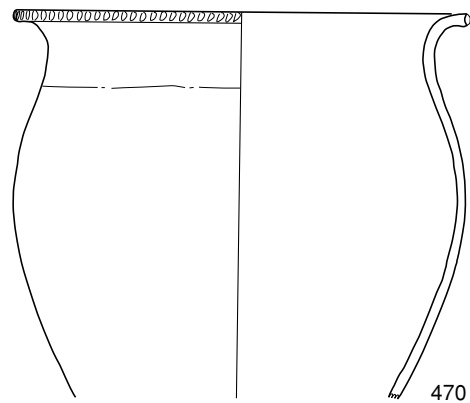
SB398・SK01-472



472



469

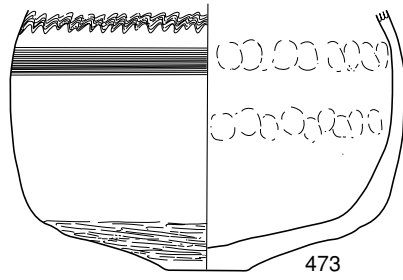


470

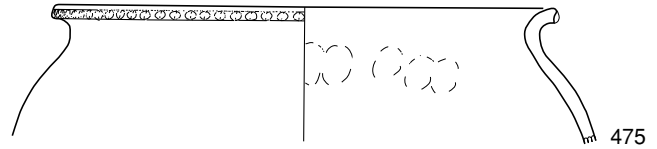
1/4 0

20cm

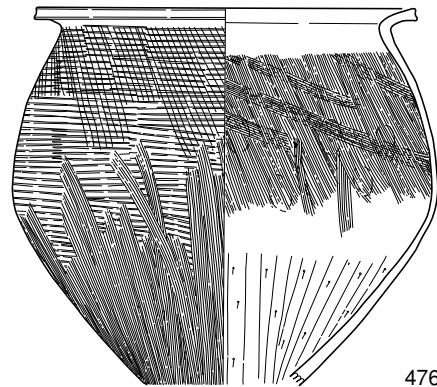
SB399-473~476



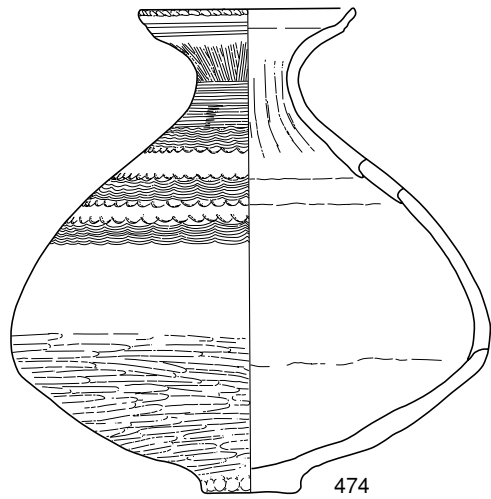
473



475

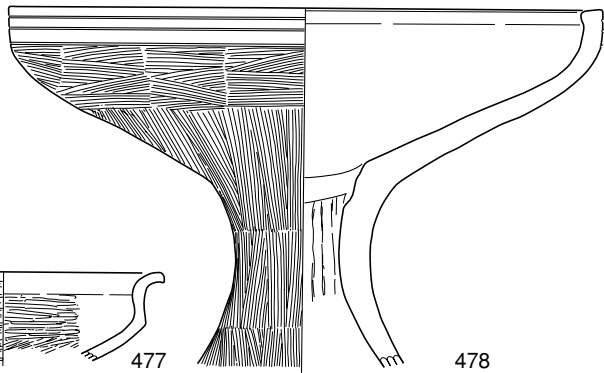


476

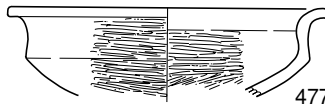


474

SB402-477~478

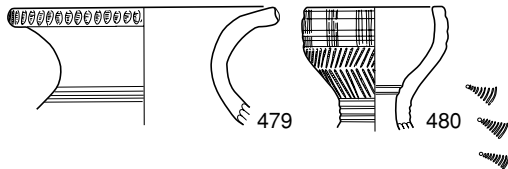


478

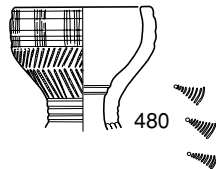


477

SB407-479~485



479



480

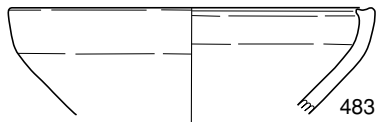


481

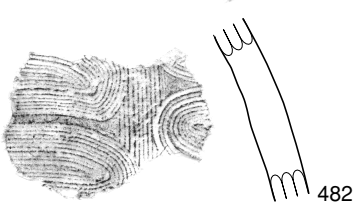
SB415-486~487



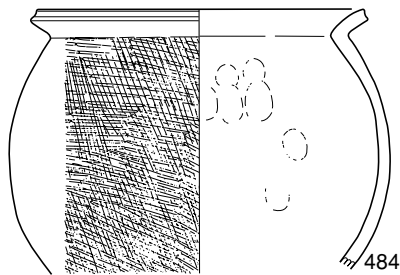
486



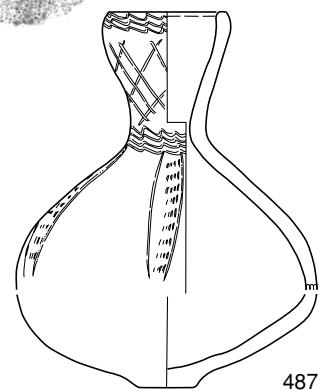
483



482



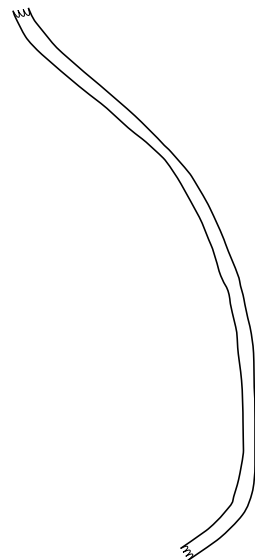
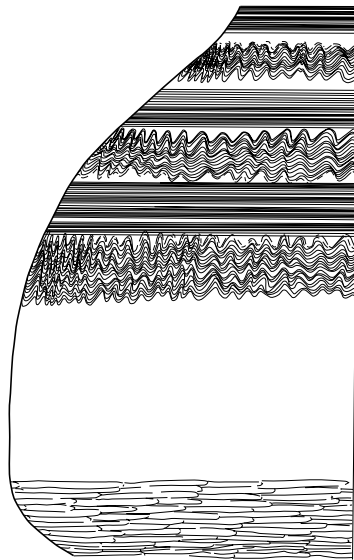
484



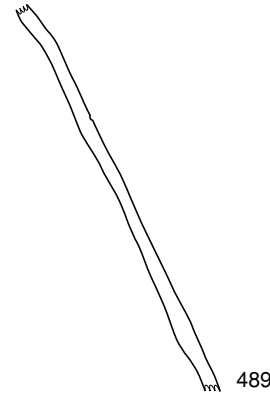
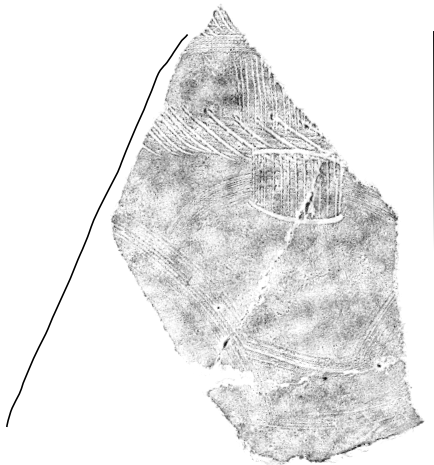
487

1/4 0 20cm

SB412-488~489

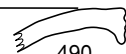
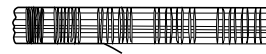


488

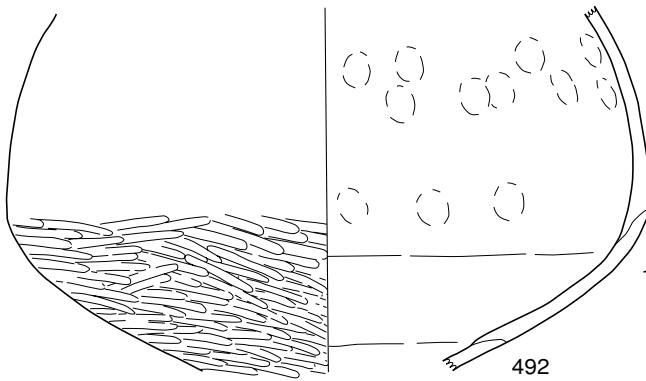


489

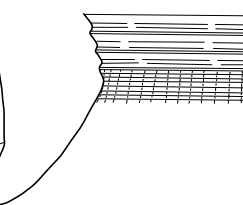
SB422-490~491



490



492



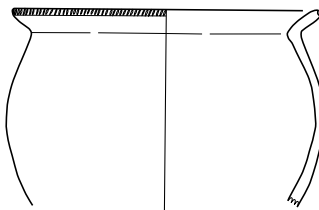
491

SB501-492~494



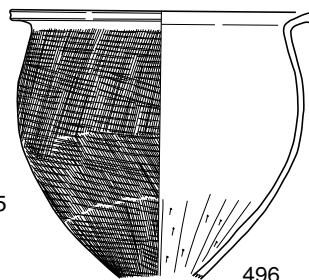
493

SB512-495

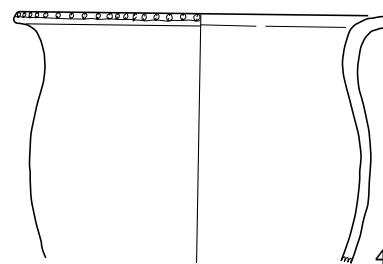


495

SB512・SK01-496



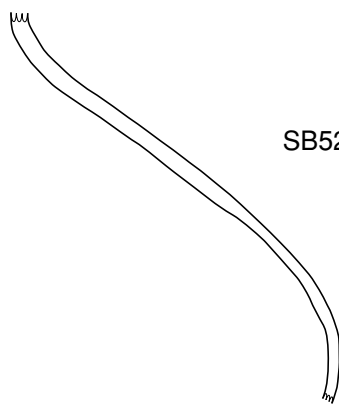
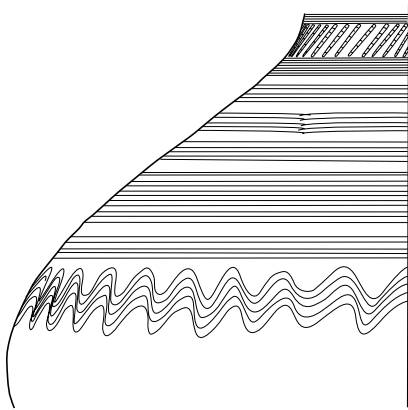
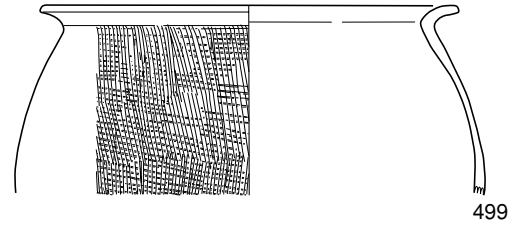
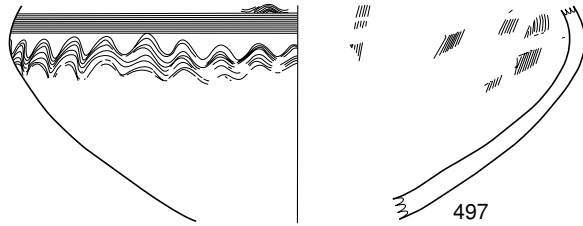
496



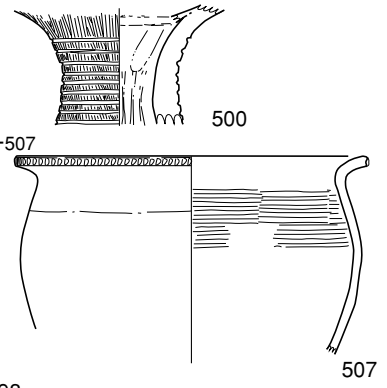
494

1/4 0 20cm

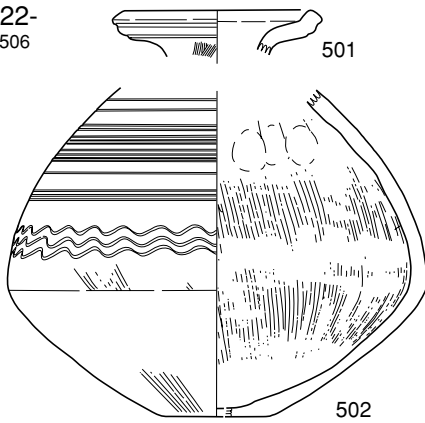
SB503-497~500



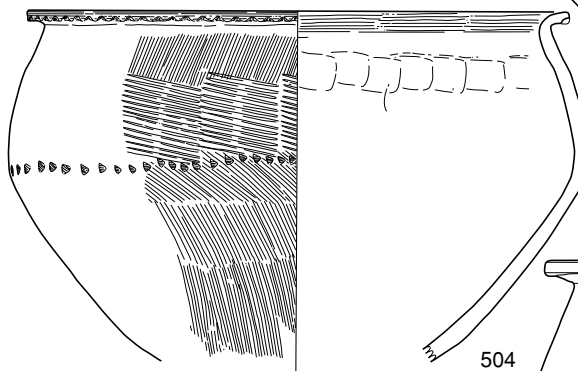
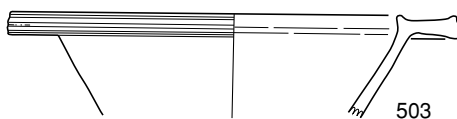
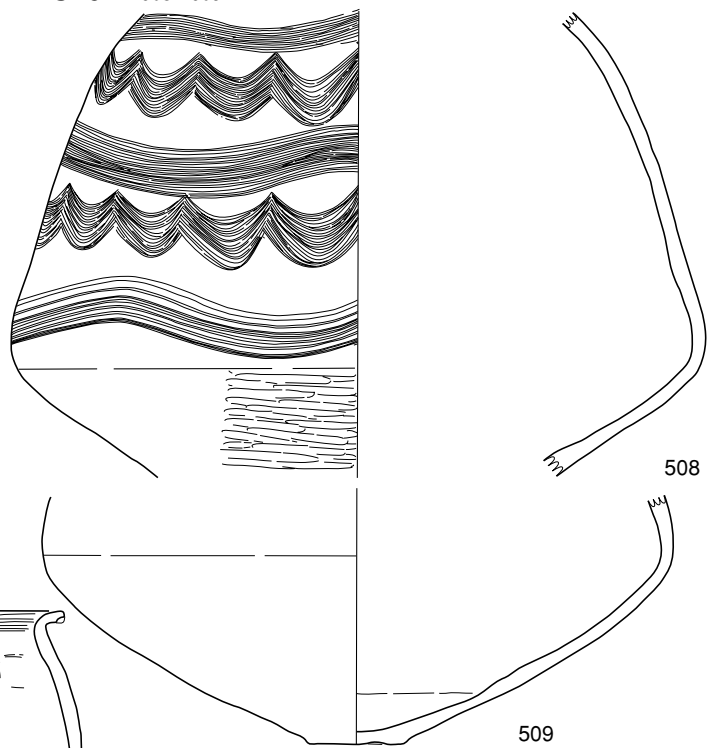
SB523-507



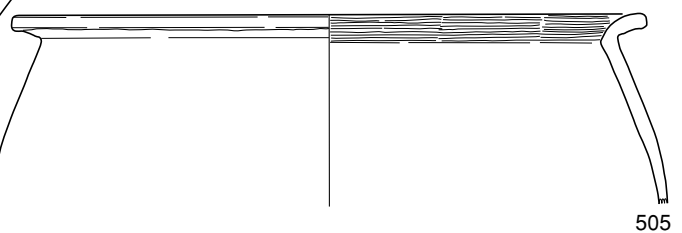
SB522-
501~506

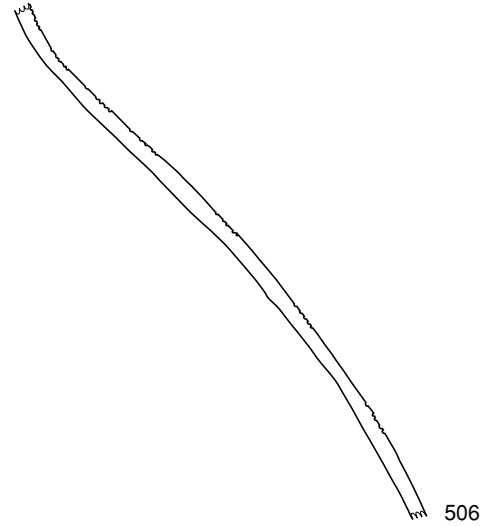
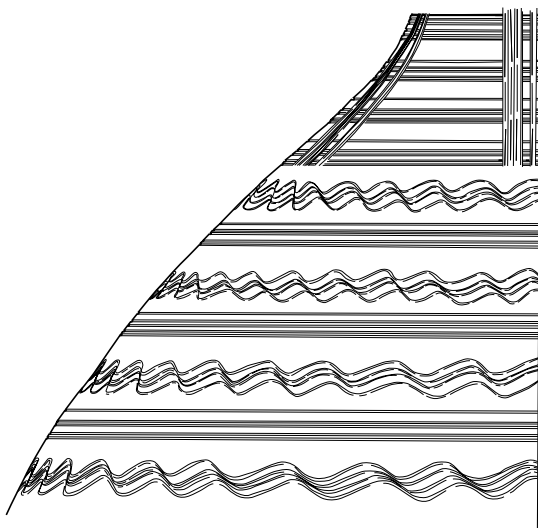


SB524-508~509

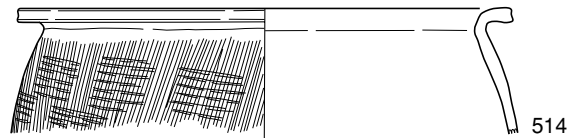
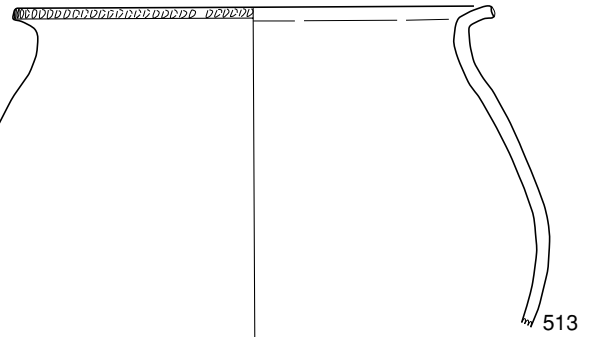
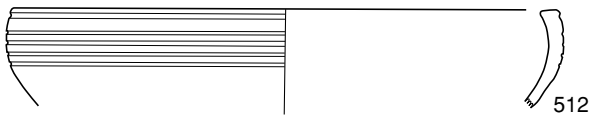
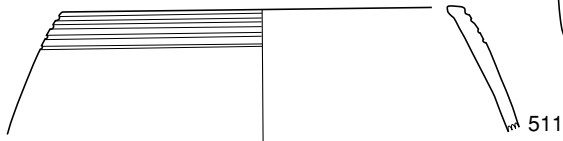
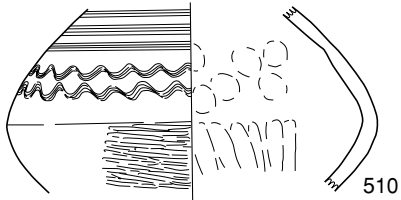


1/4 0 20cm



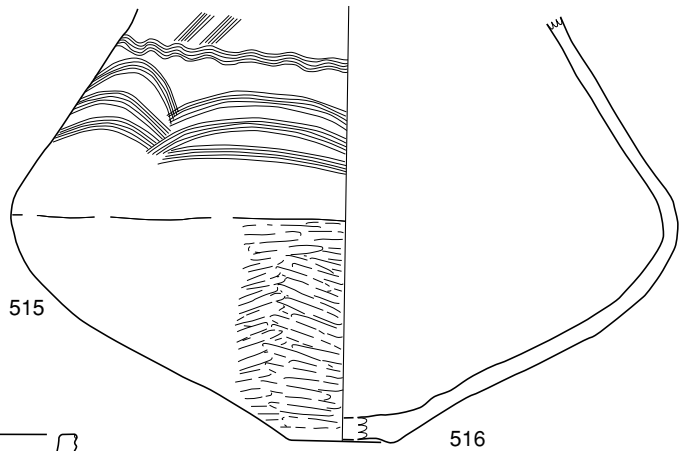
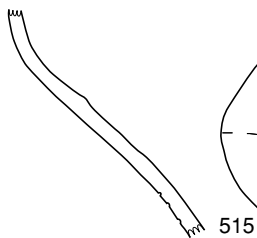


SB528-510~514

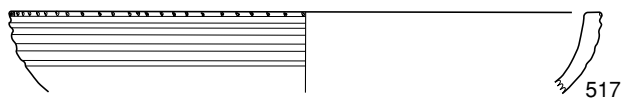


1/4 0 20cm

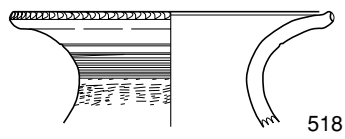
SB541-515~516



SB566-517

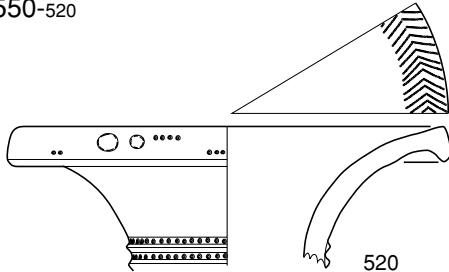


SB545-518~519



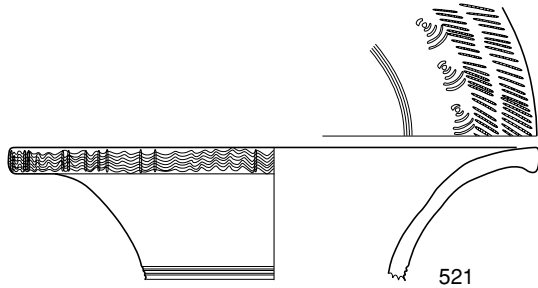
518

SB550-520



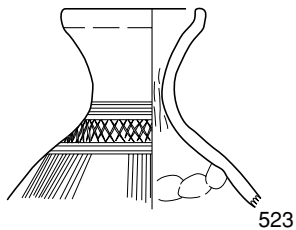
520

SB564-521

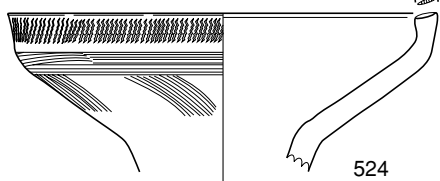


521

SB570-523~524

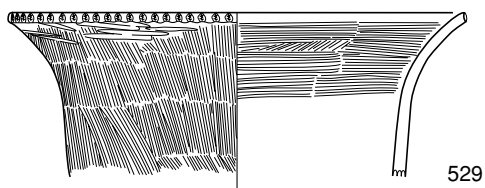


523



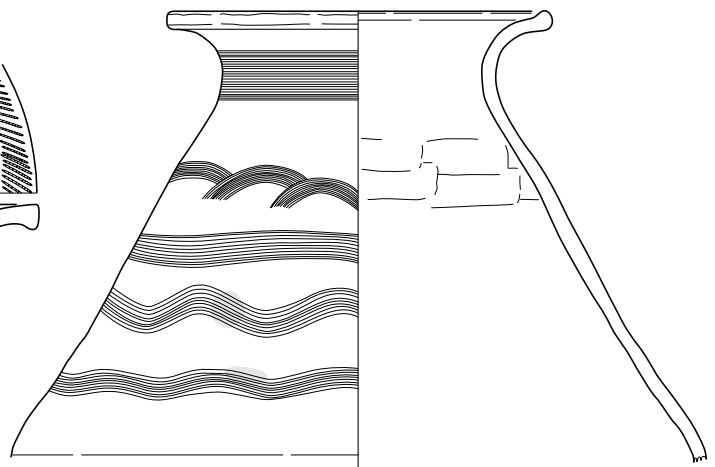
524

SB572-529



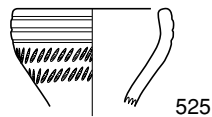
529

SB568-522

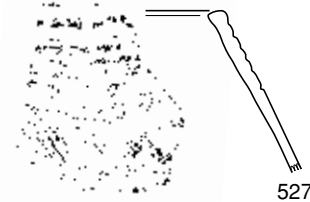


522

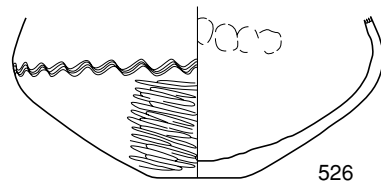
SB571-525~528



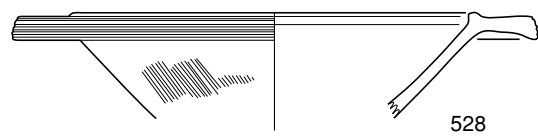
525



527



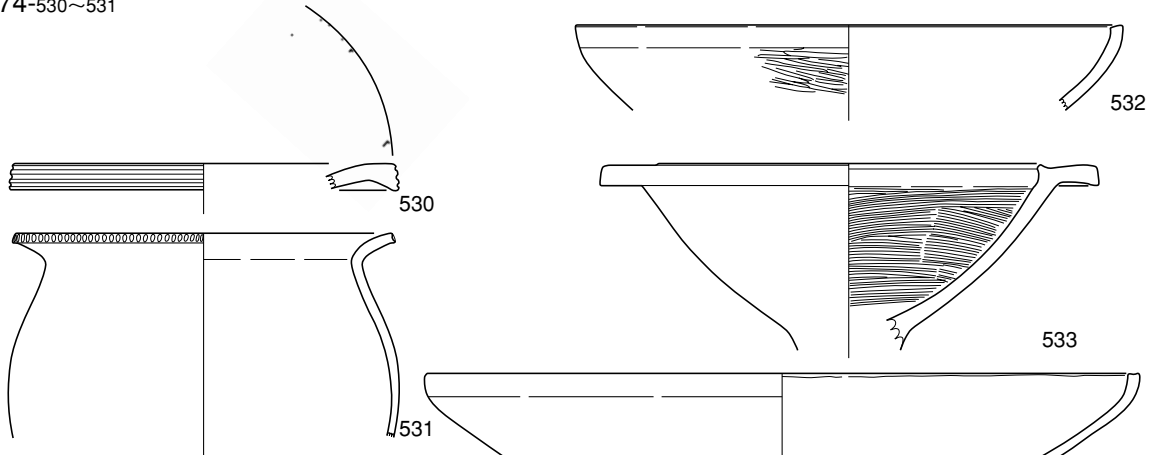
526



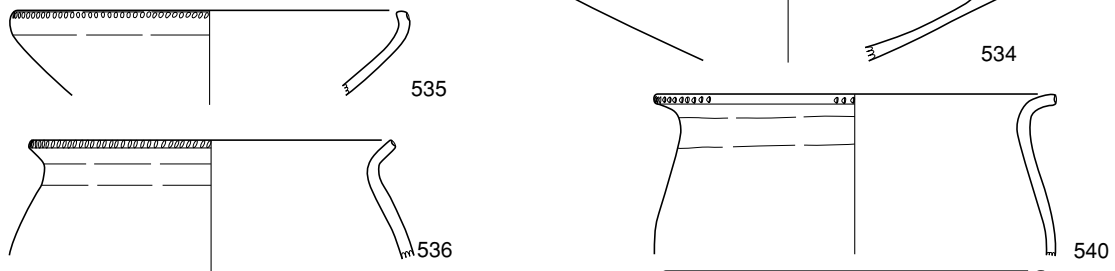
528

1/4 0 20cm

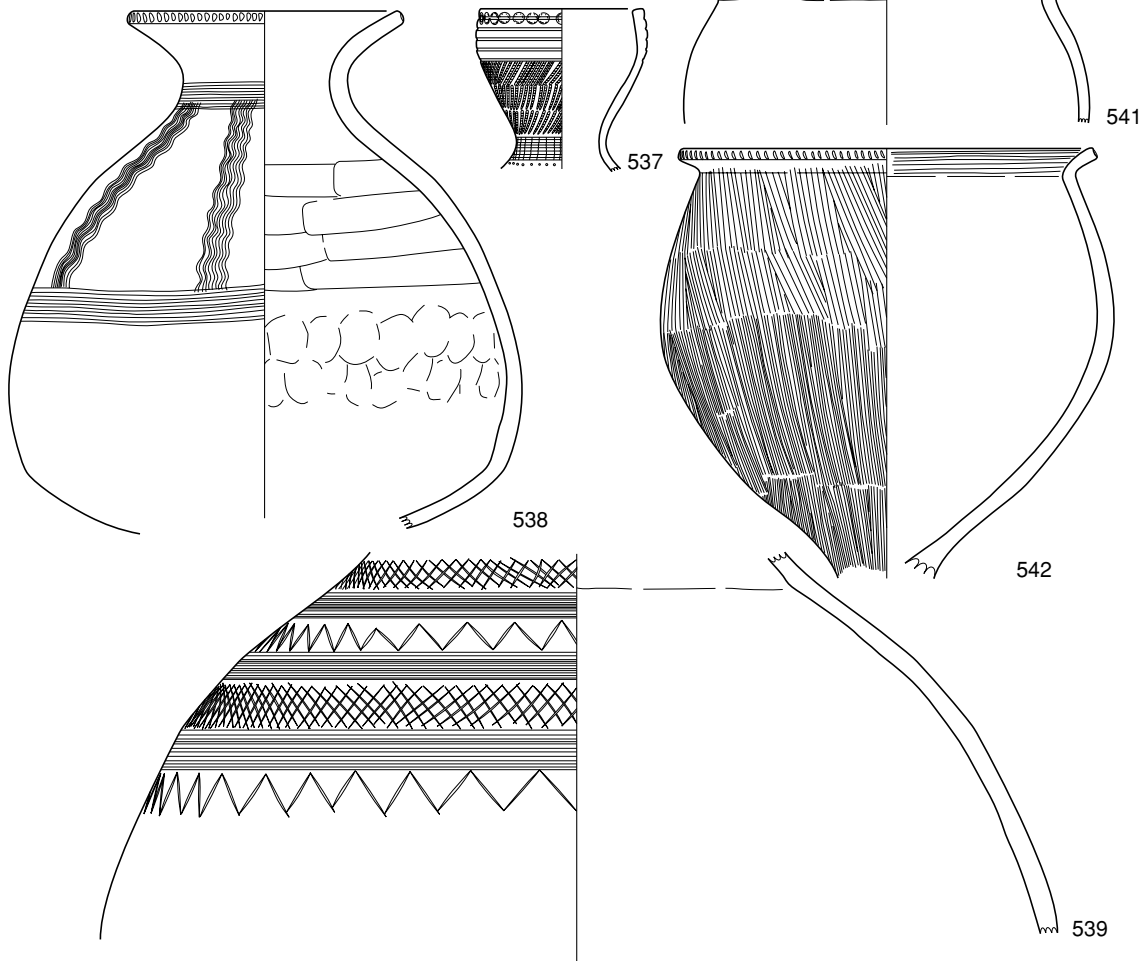
SB574-530~531



SB576-532~536

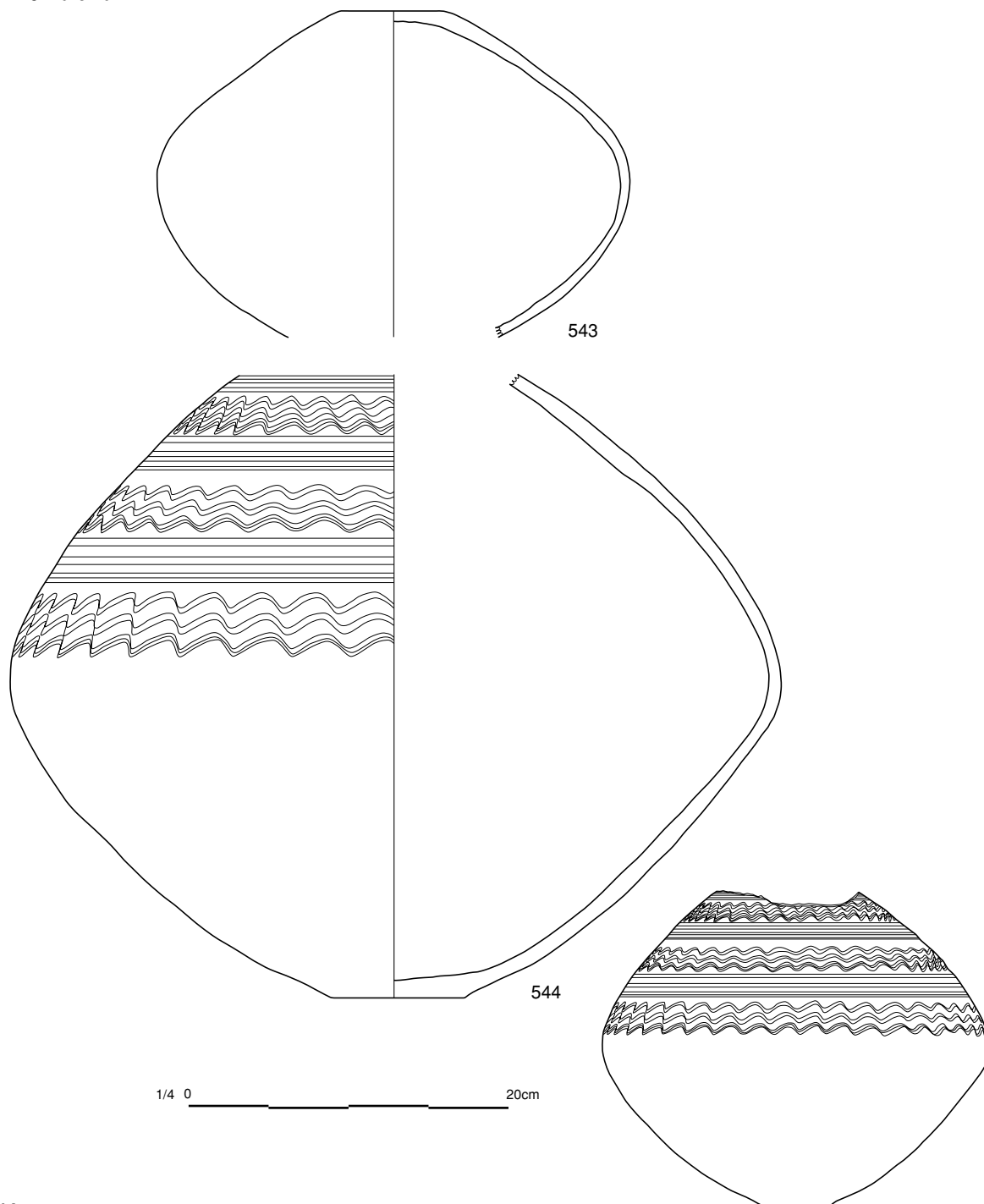


SB582-537~542

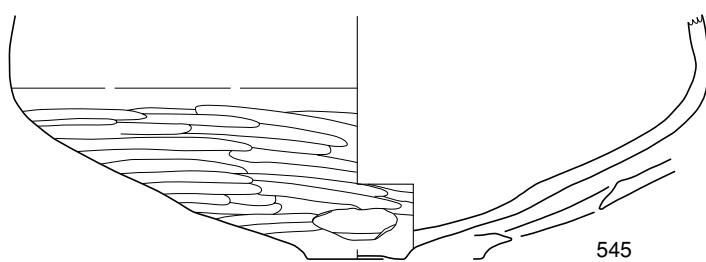


1/4 0 20cm

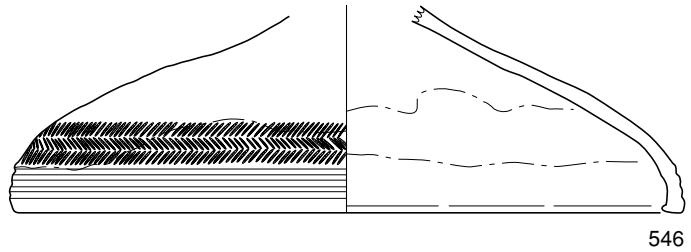
SK201-543~544



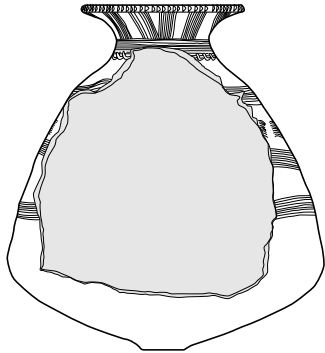
SK207-545



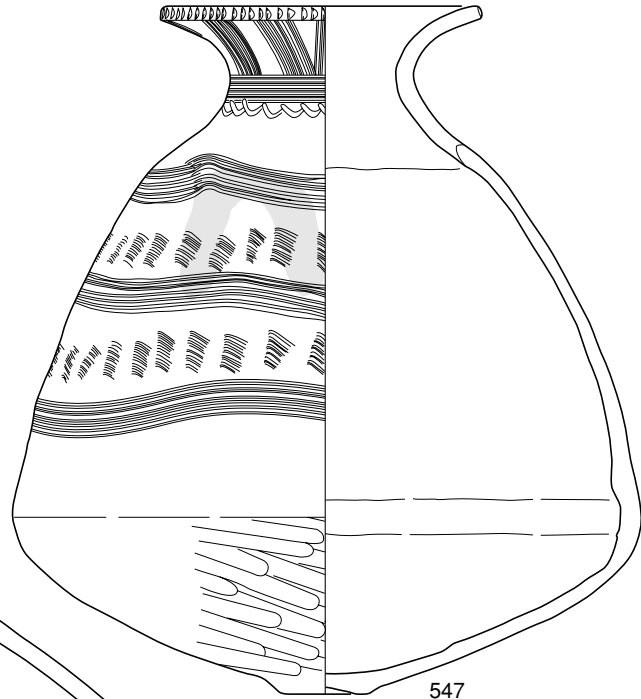
SK204-546~547



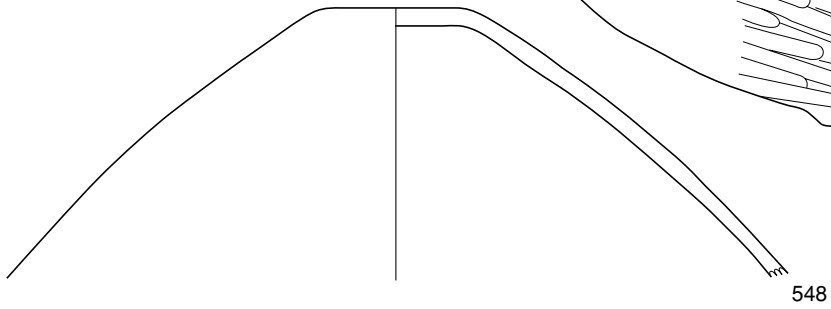
546



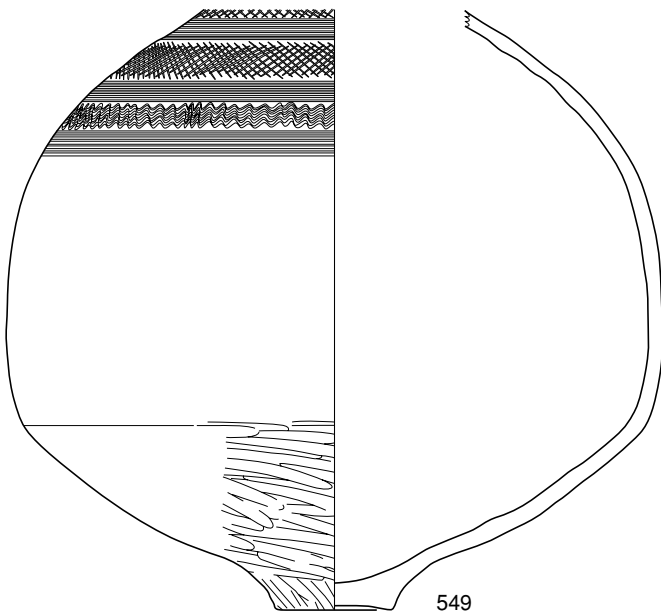
SK208-548~549



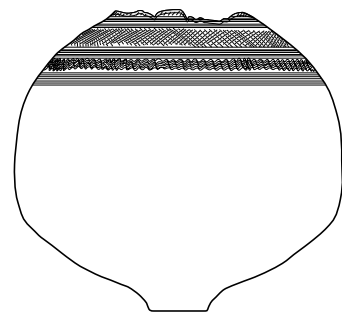
547



548

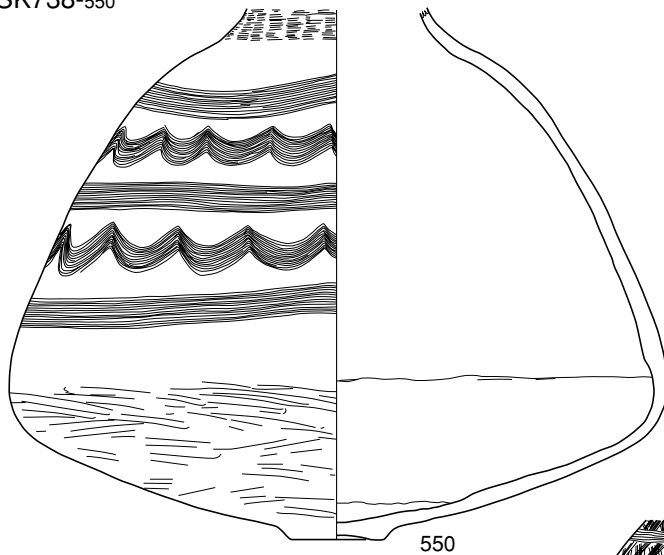


549



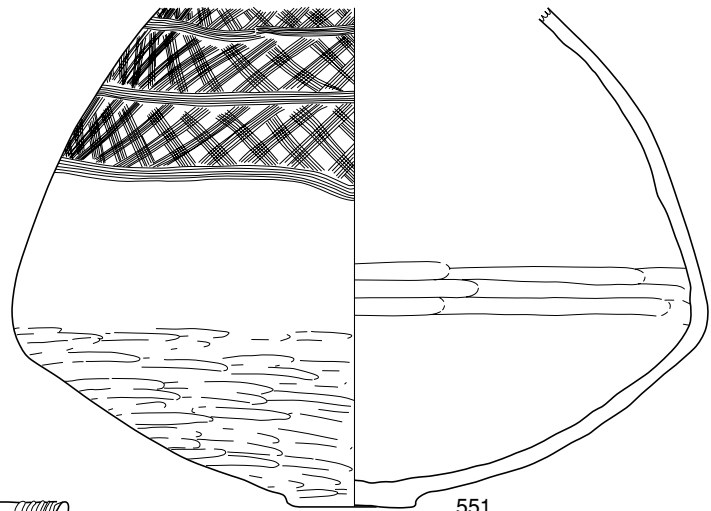
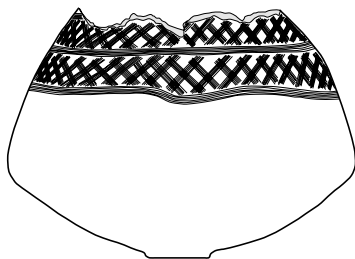
1/4 0 20cm

SK738-550



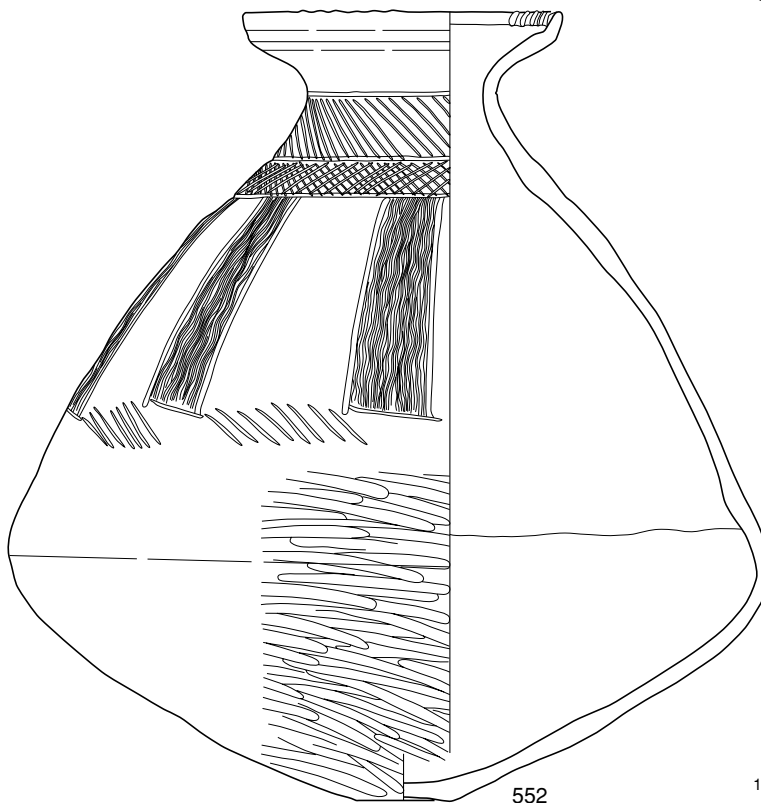
550

SK880-551

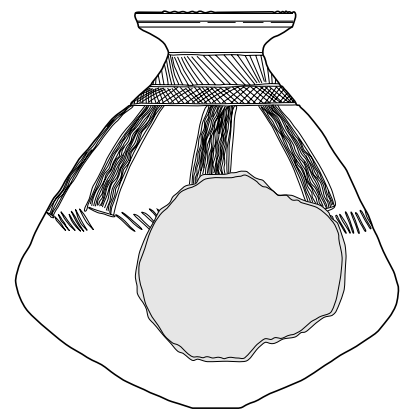


551

SK682-552

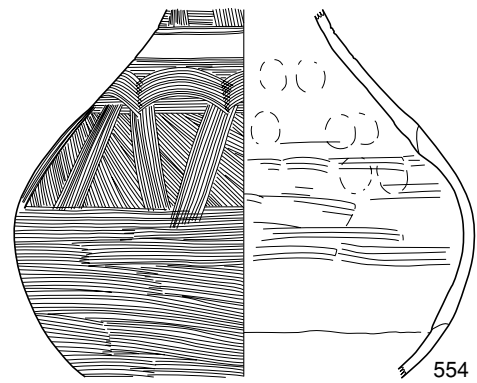
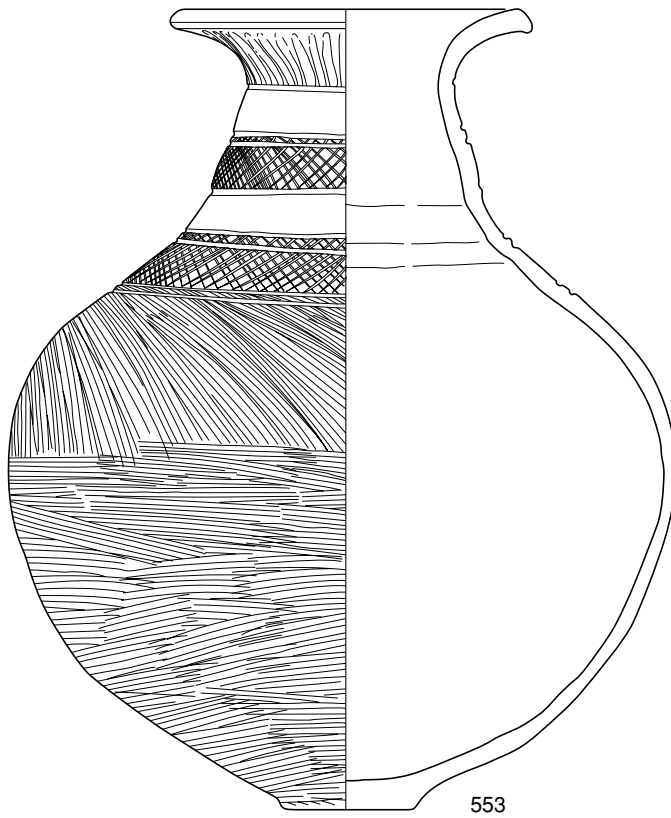


552

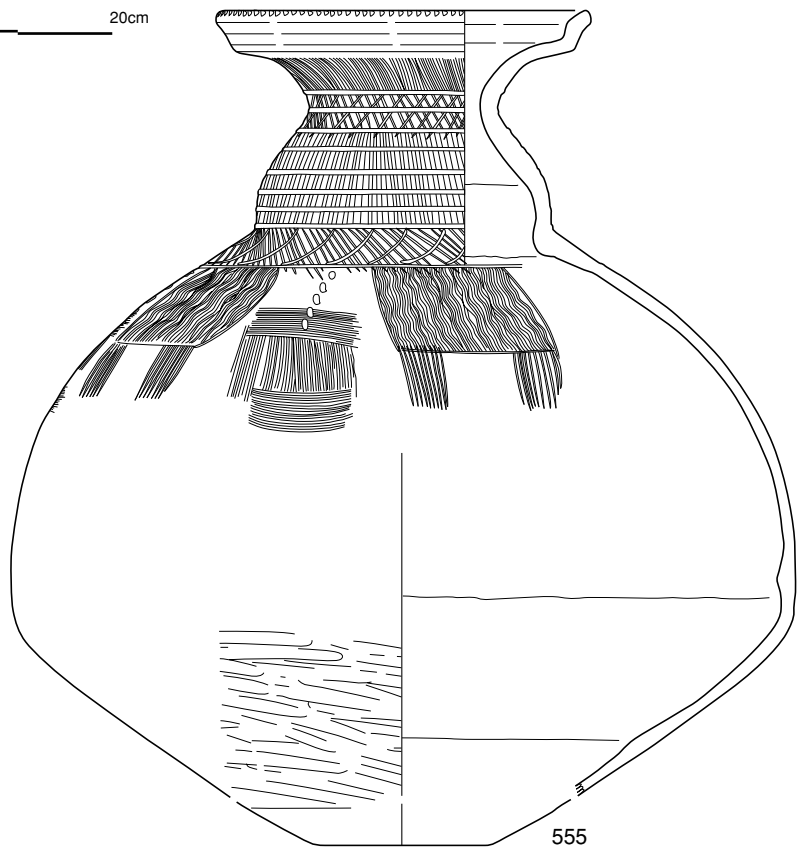
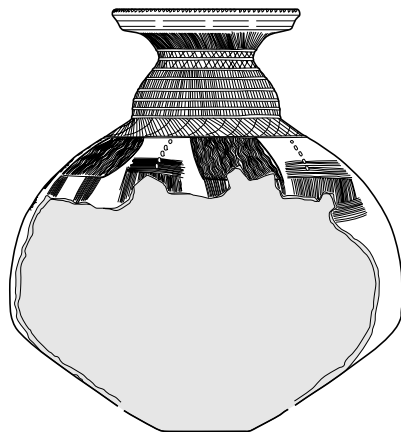


1/4 0 20cm

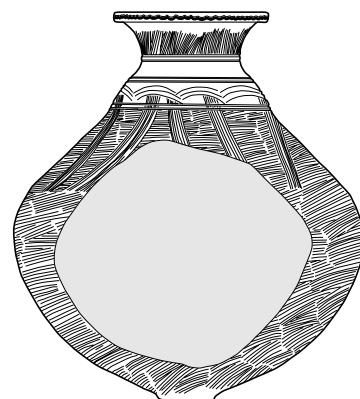
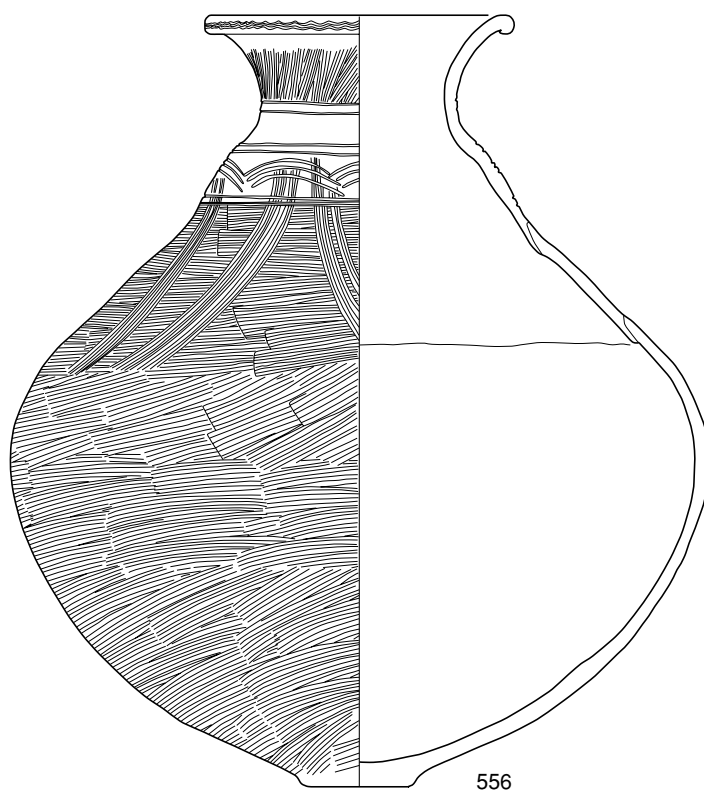
SK888-553~554



SK877-555

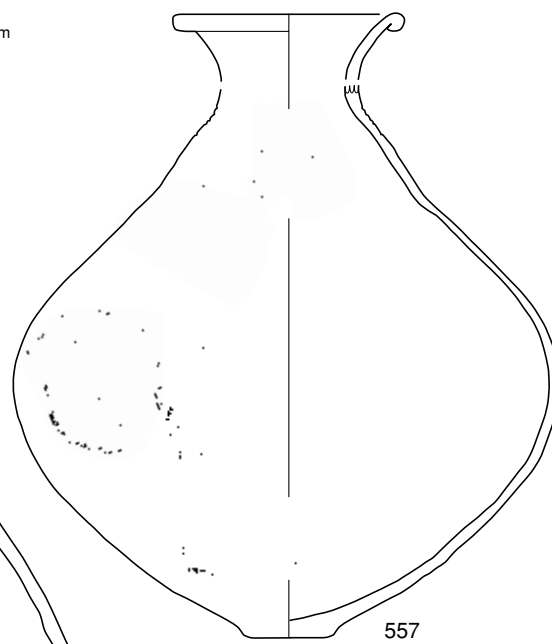
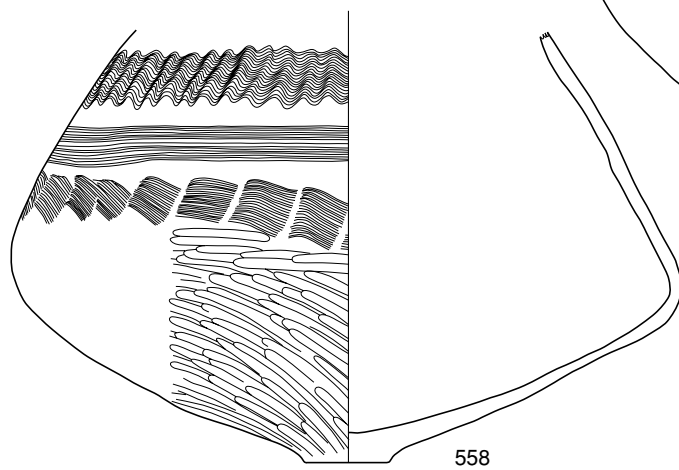


SK925-556~557

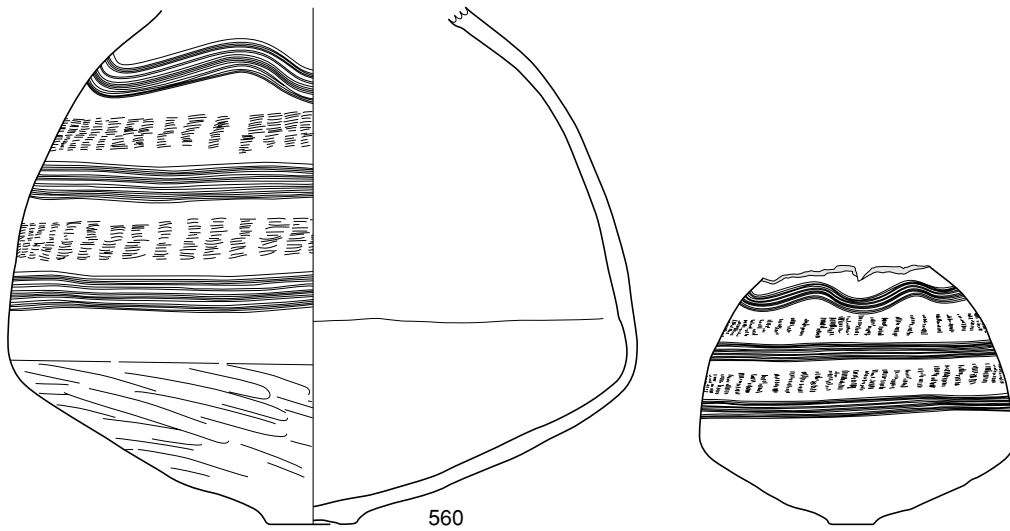
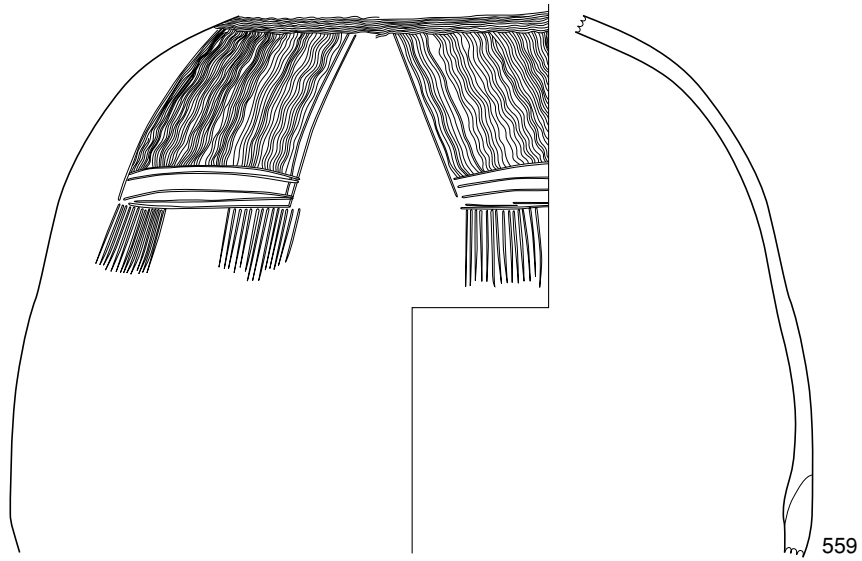


1/4 0 20cm

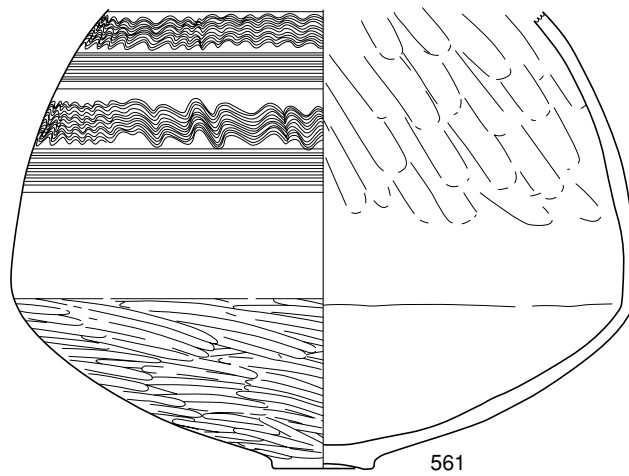
SK943-558



SK934-559~560

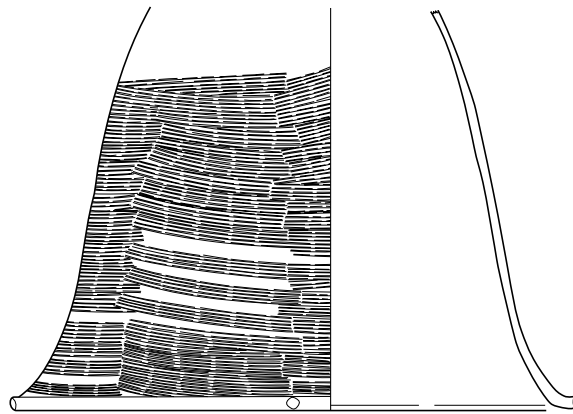


SK960-561

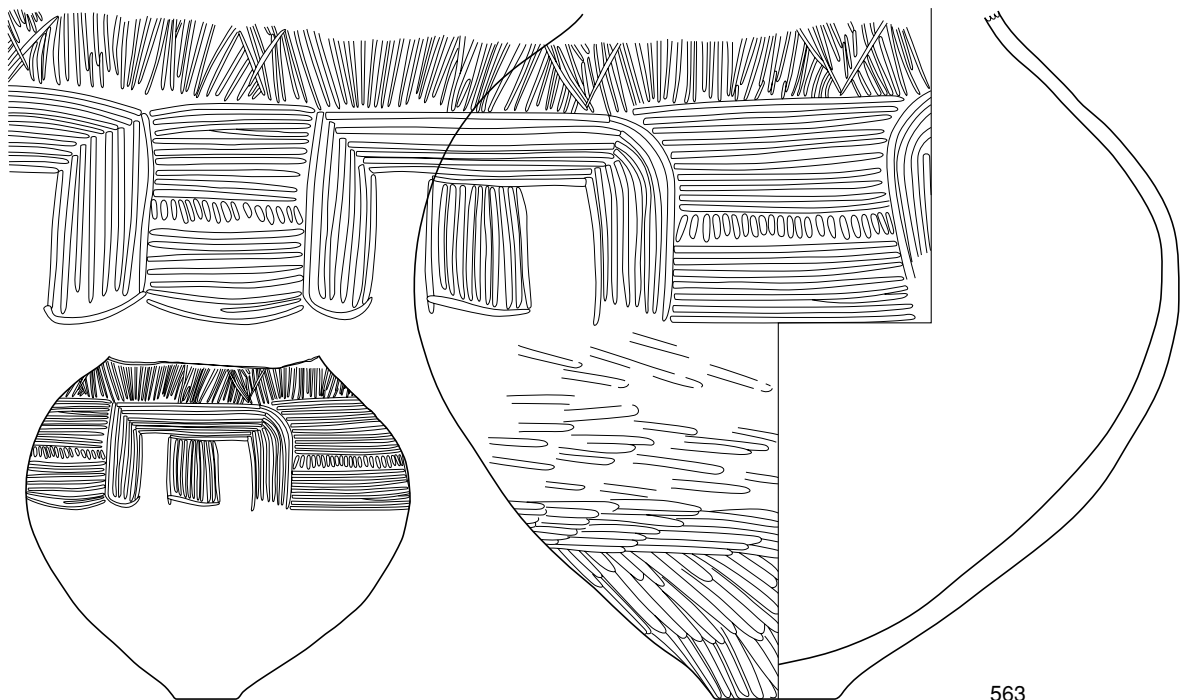


1/4 0 20cm

SK938-562~563



562

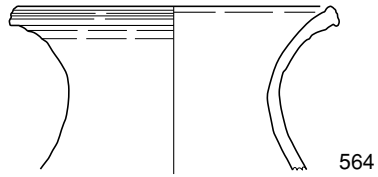


563

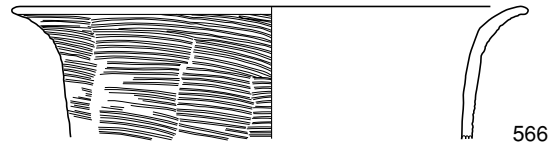


1/4 0 20cm

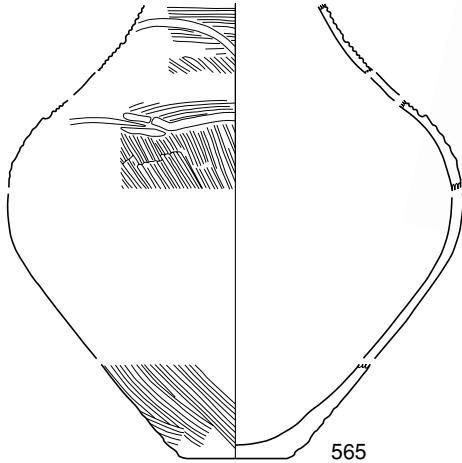
SK533-564~568



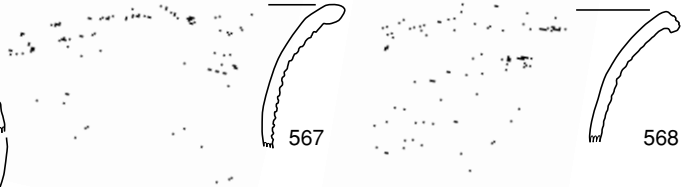
564



566



565

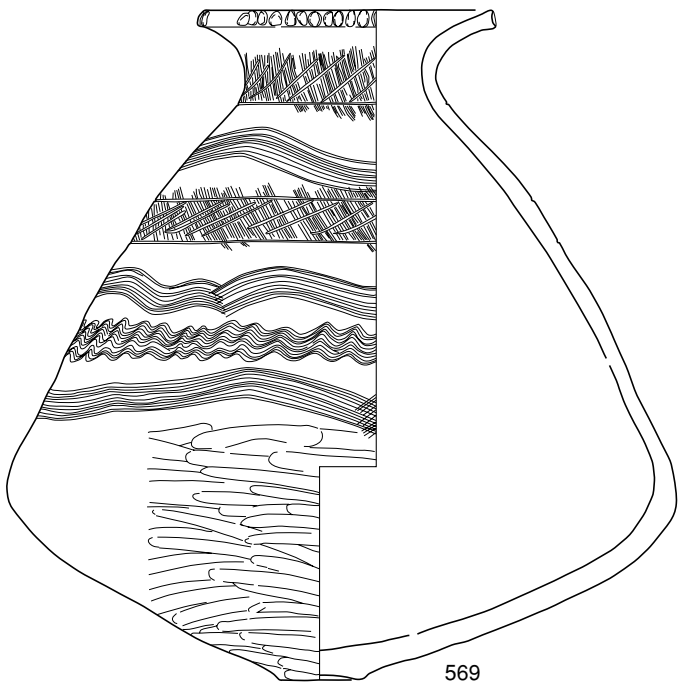


567

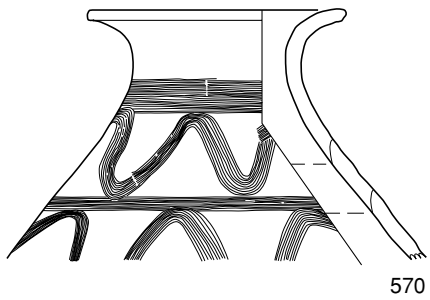
568

1/3 0 15cm

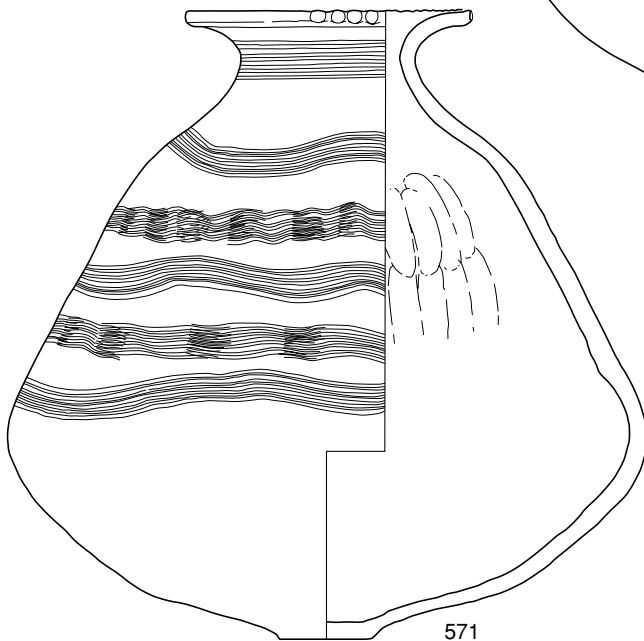
SK538-569~582



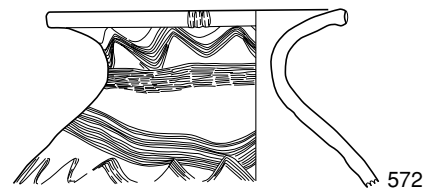
569



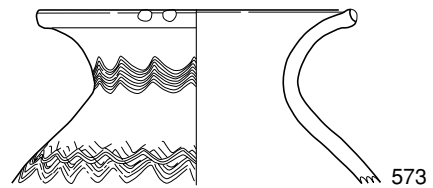
570



571

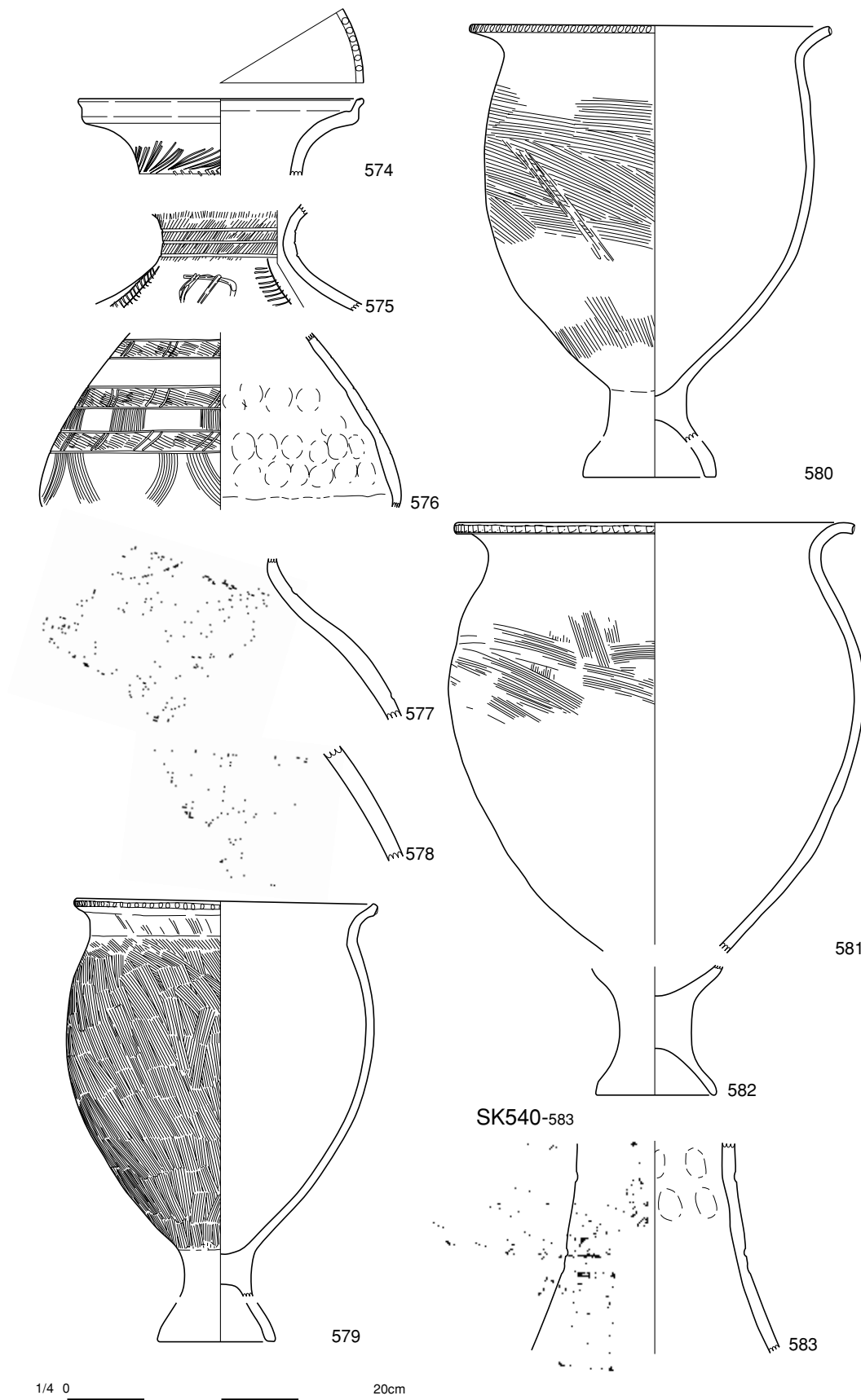


572

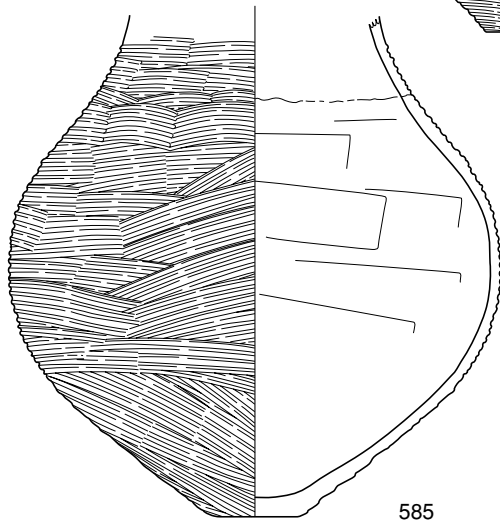
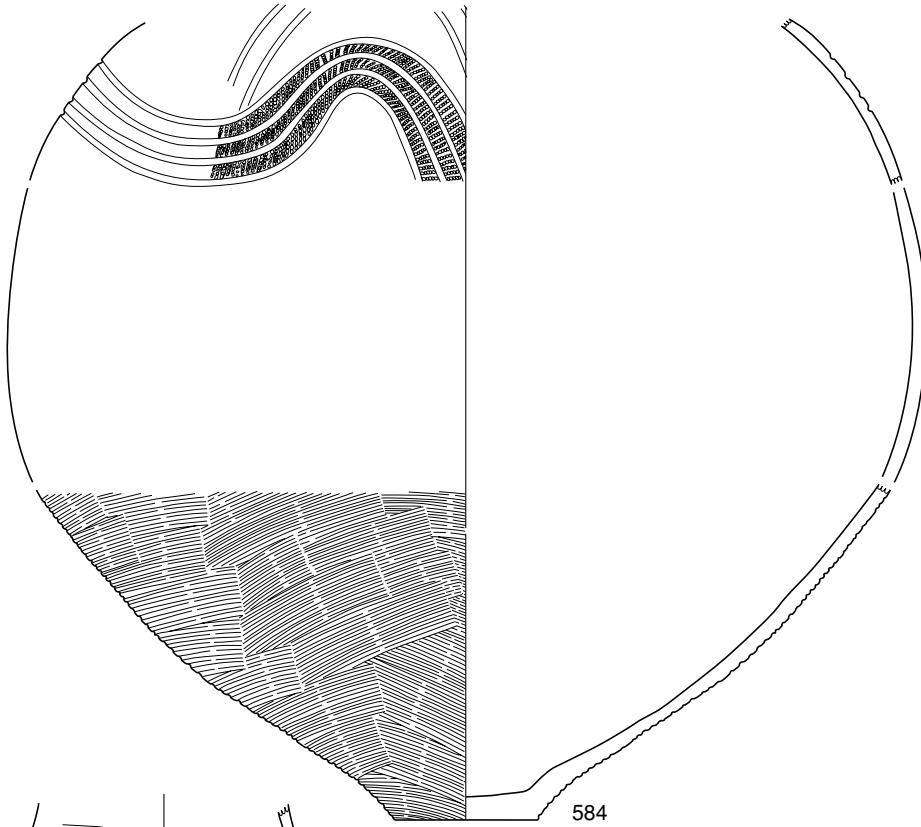


573

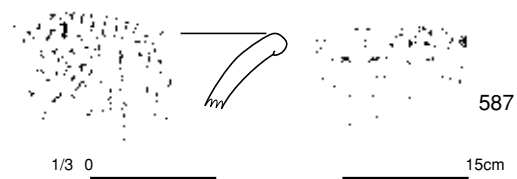
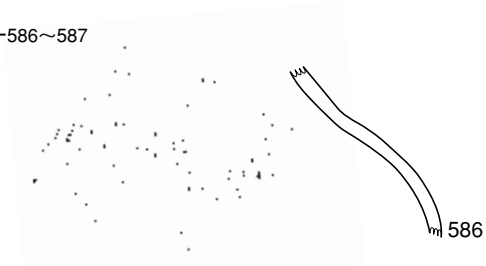
1/4 0 20cm



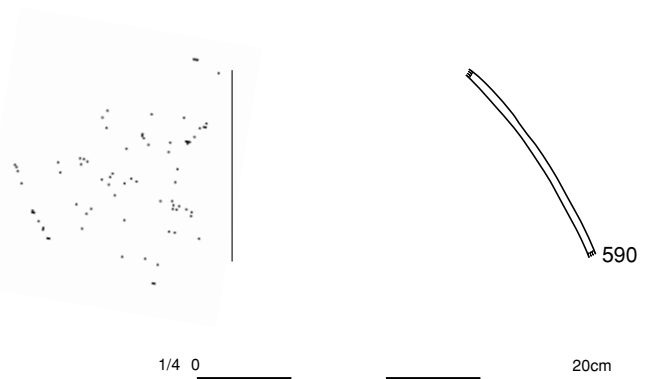
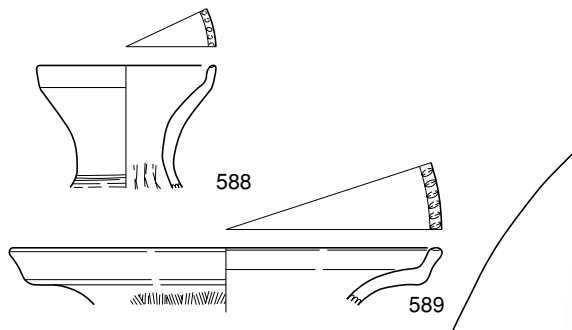
SK545-584~587



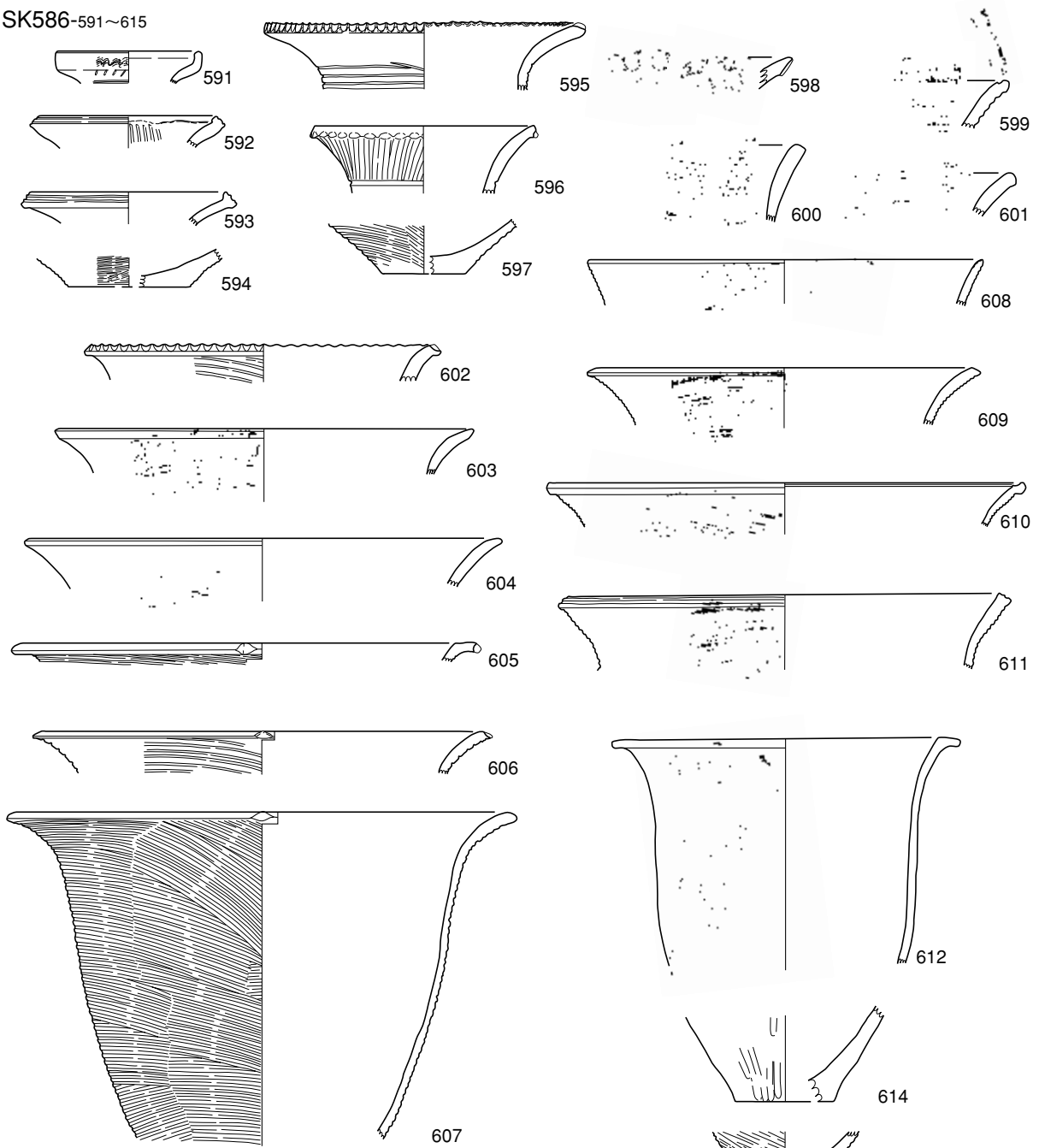
SK587-586~587



SK565-588~590

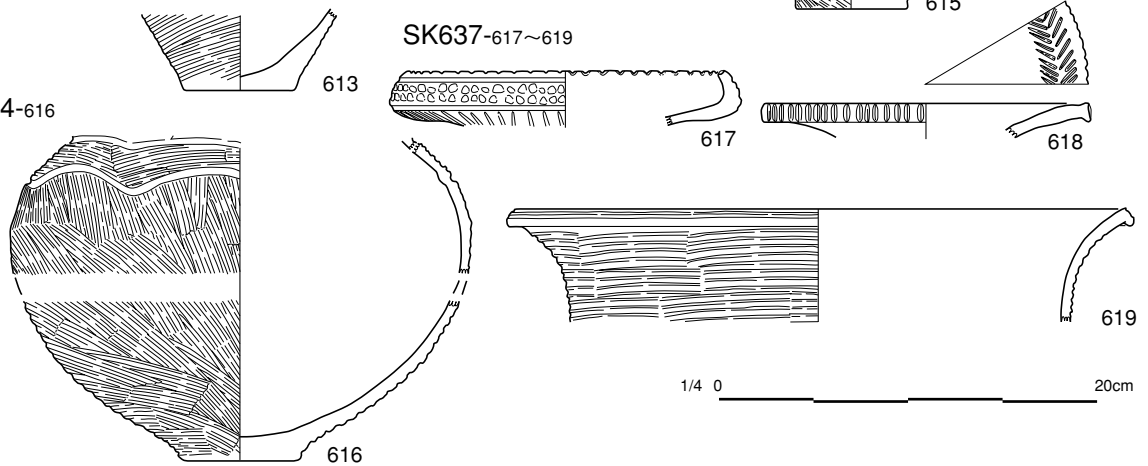


SK586-591~615

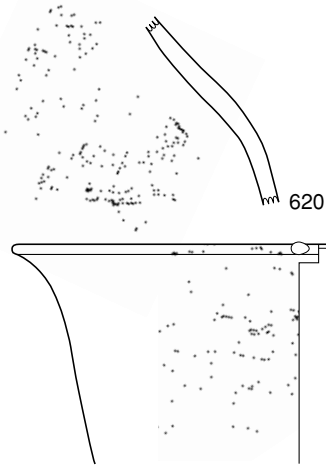


SK637-617~619

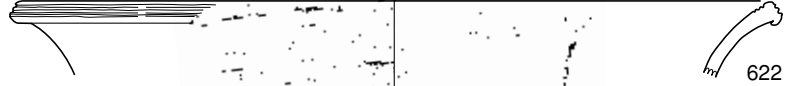
SK624-616



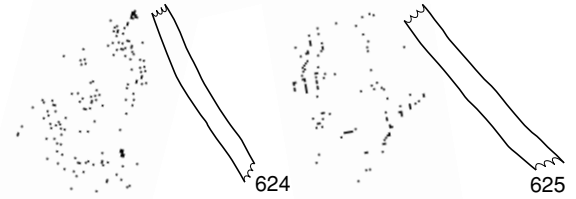
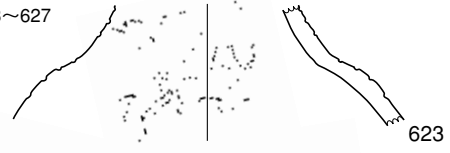
SK705-620~621



SK718-622

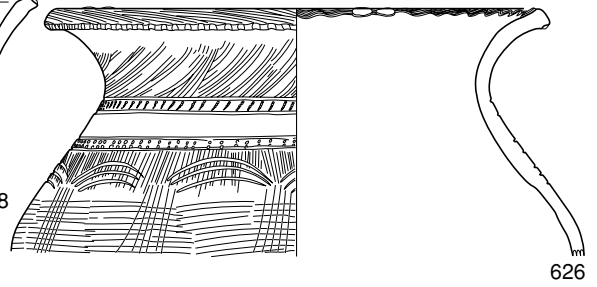
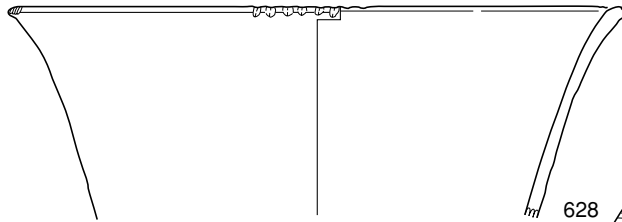


SK727-623~627

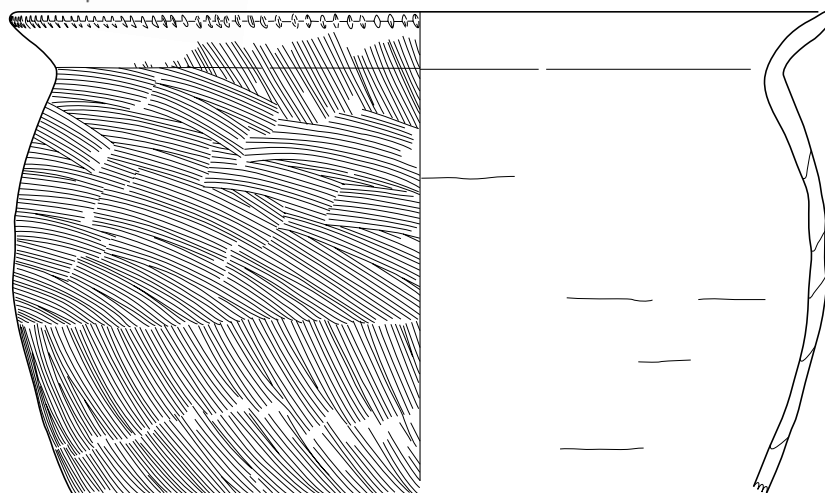
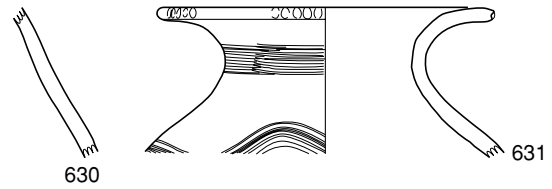
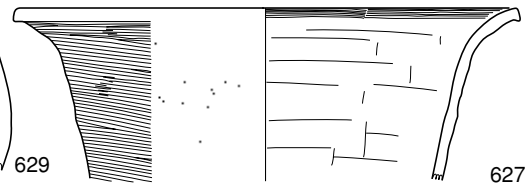


625

SK732-628

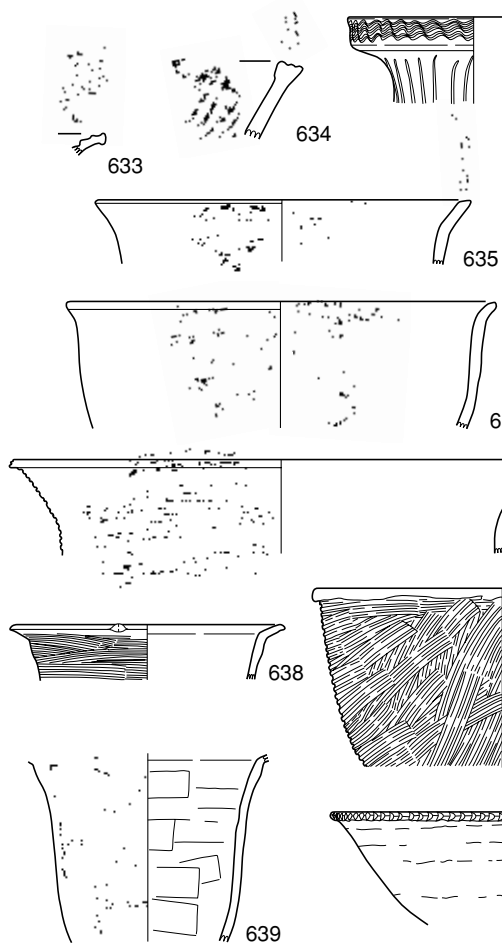


SK768-629~632

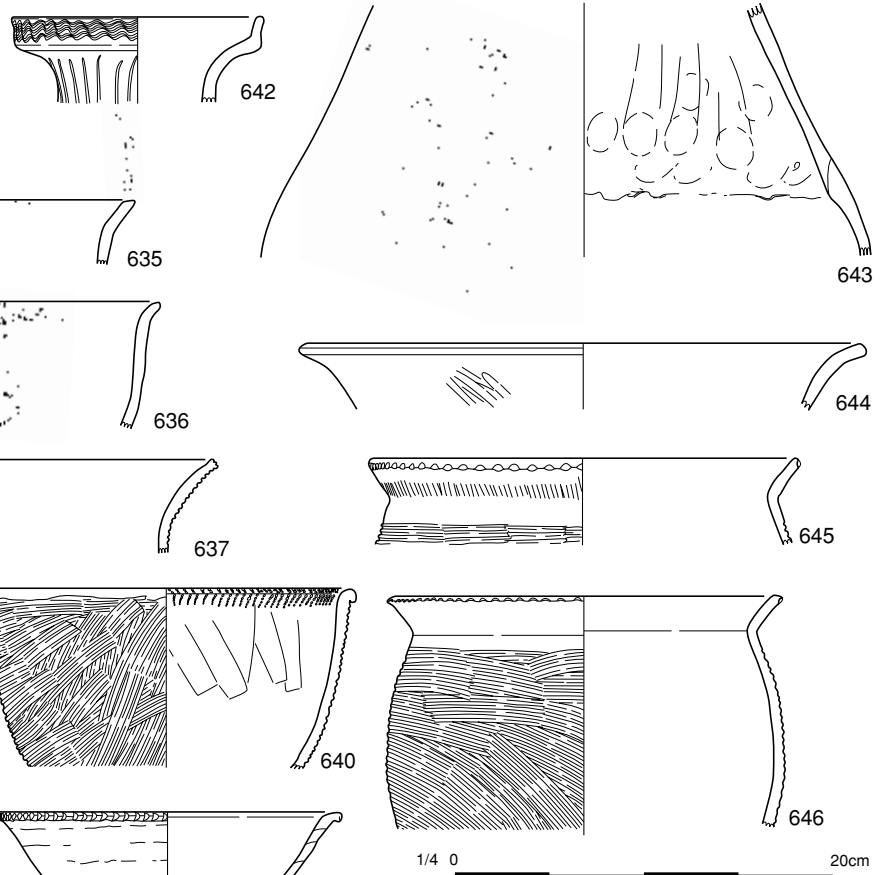


1/4 0 20cm

SK784-633~641



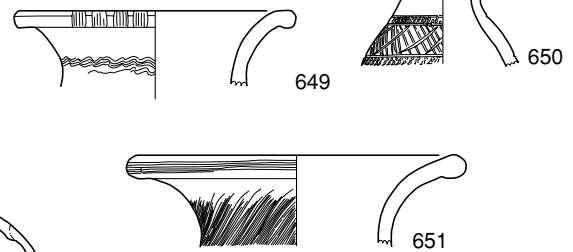
SK811-642~646



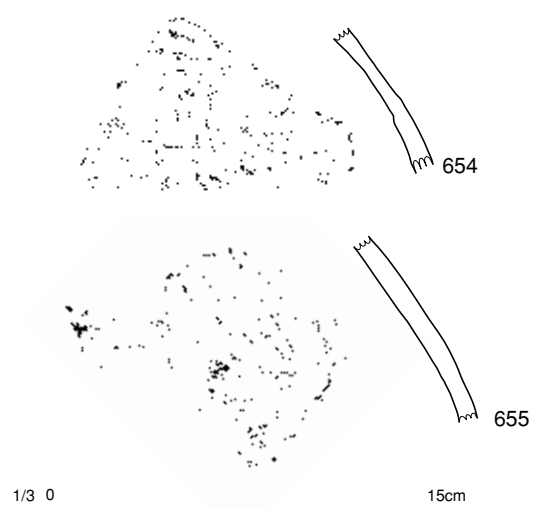
SK815-647~648



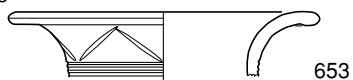
SK816-649~651



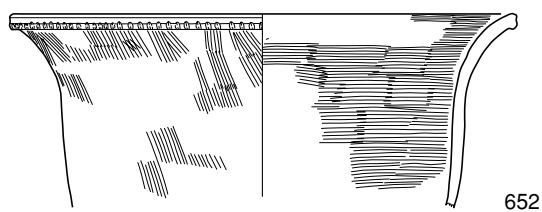
SK847-654~655



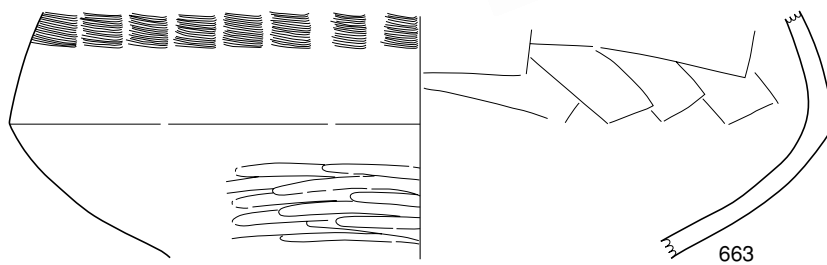
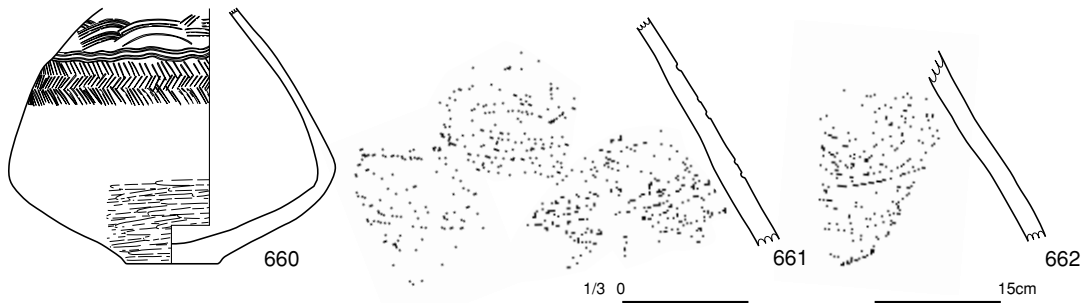
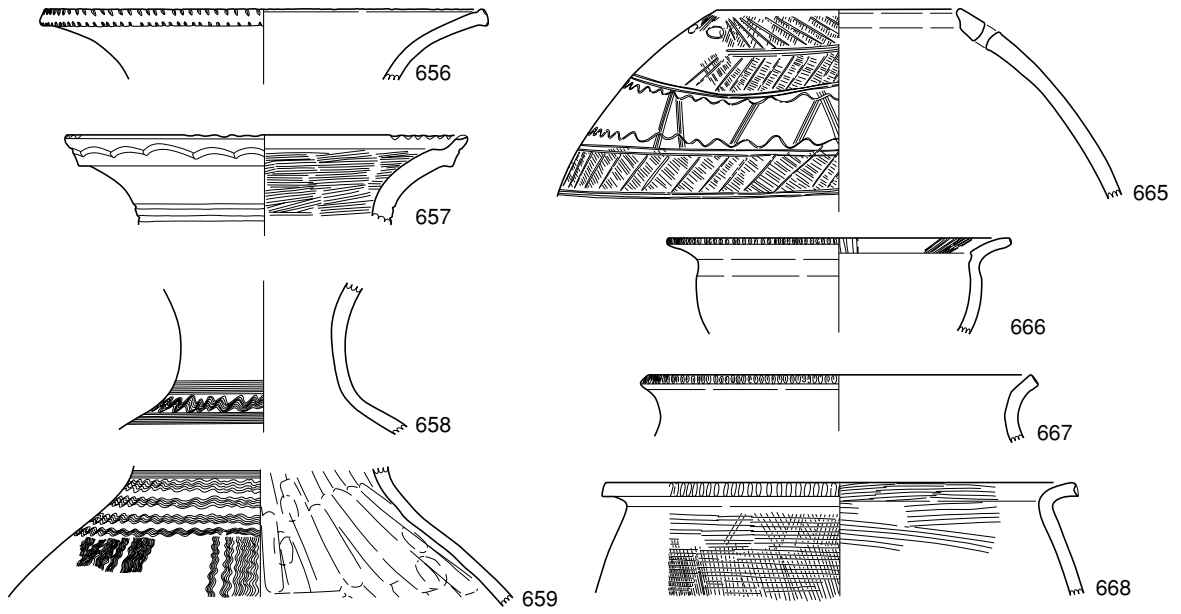
SK823-653



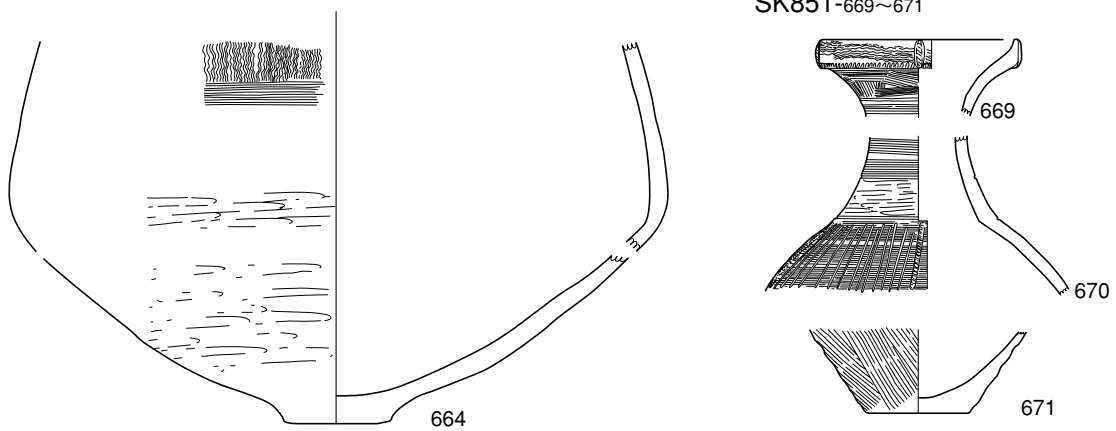
SK819-652



SK848-656~668

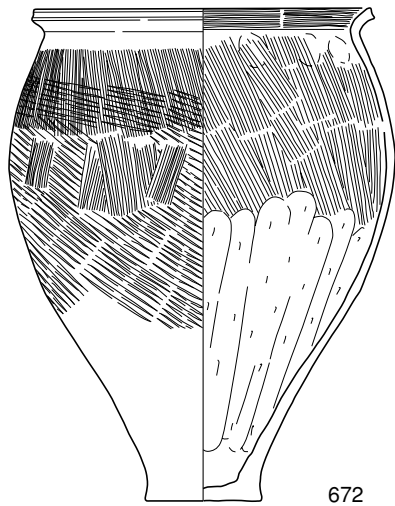


SK851-669~671

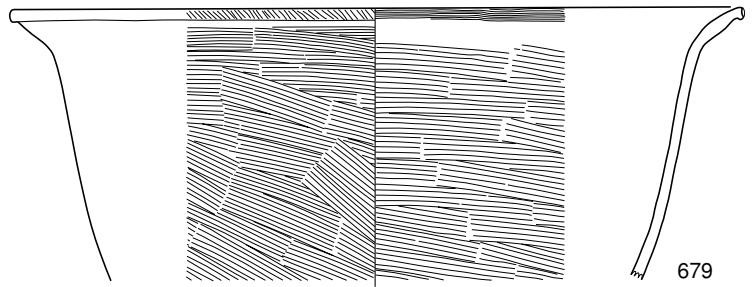


1/4 0 20cm

SK852-672

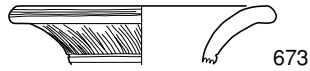


672

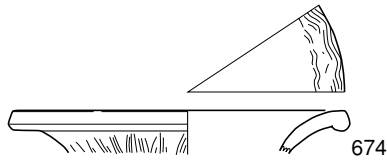


679

SK867-673~679



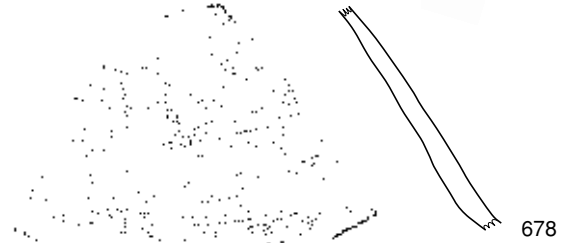
673



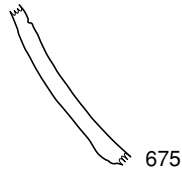
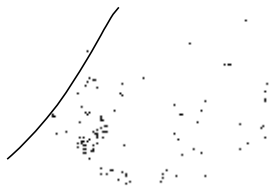
674



677



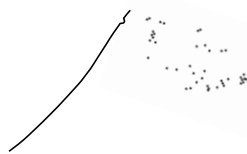
678



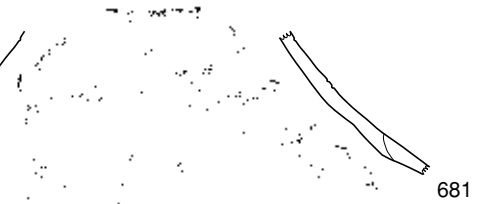
675

1/3 0 15cm

SK897-681~682

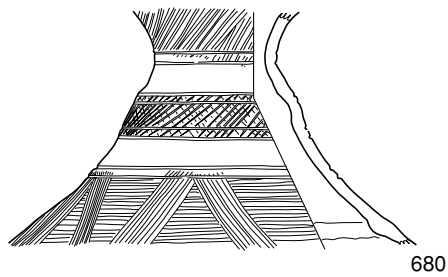


676

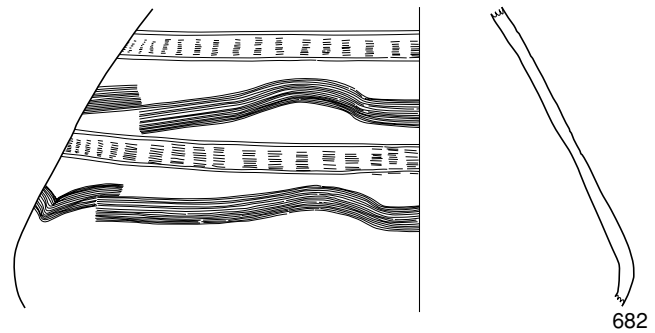


681

SK891-680



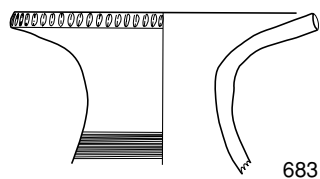
680



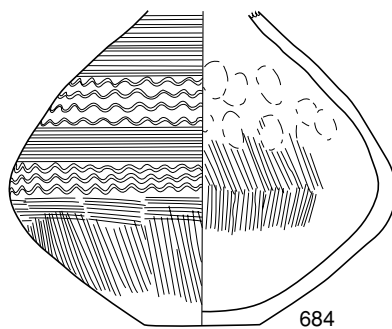
682

1/4 0 20cm

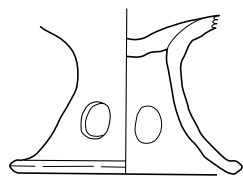
SZ202東溝-683~691



683



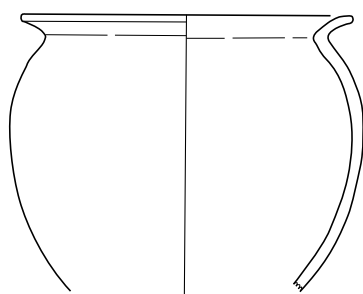
684



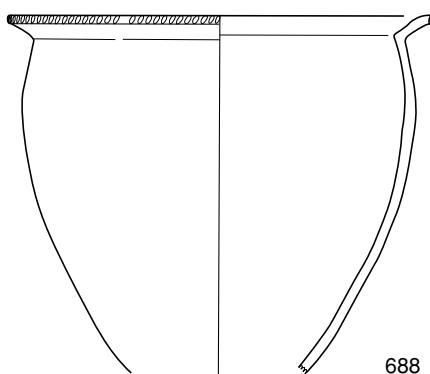
685



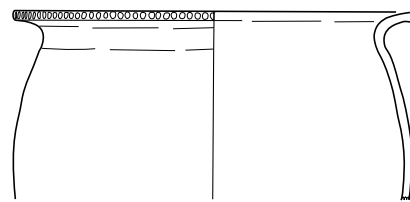
686



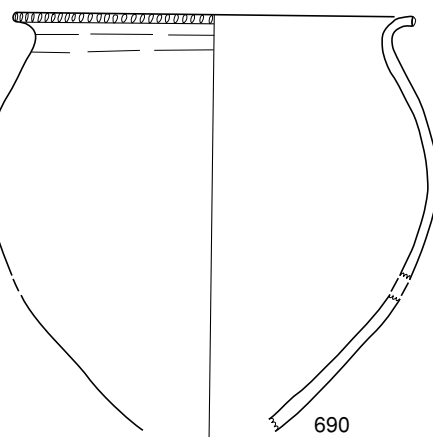
687



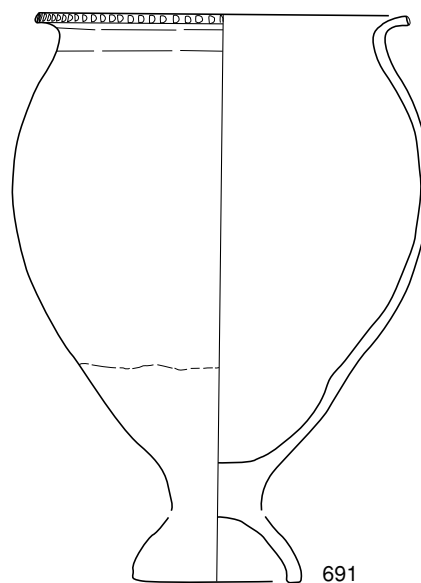
688



689

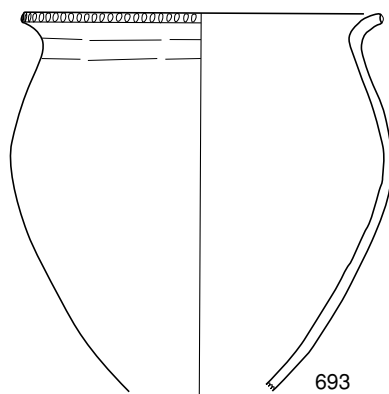


690



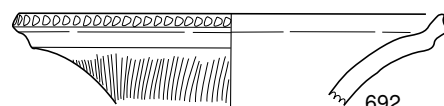
691

SZ202南溝-692~694

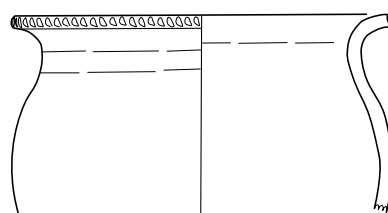


693

1/4 0 20cm

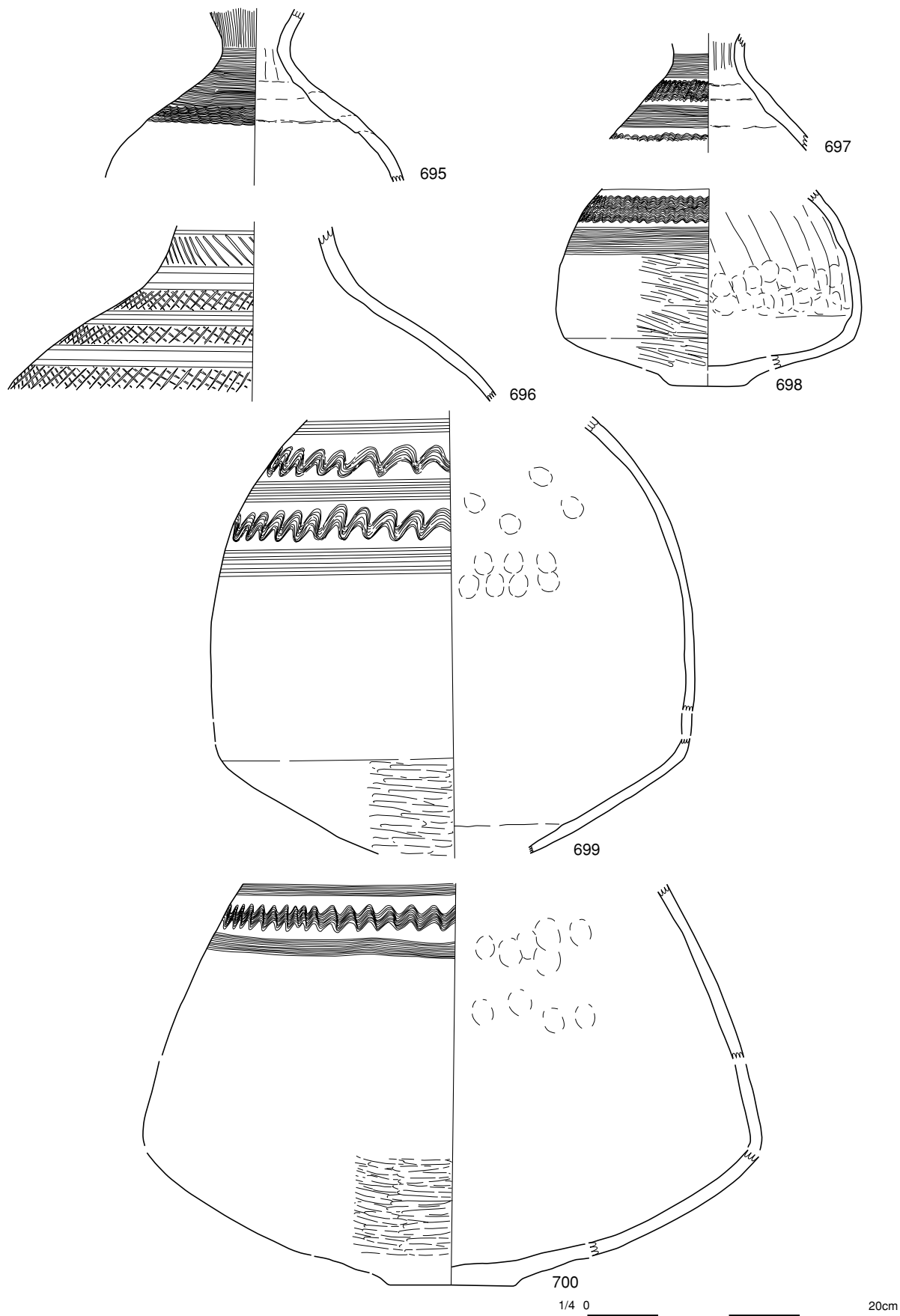


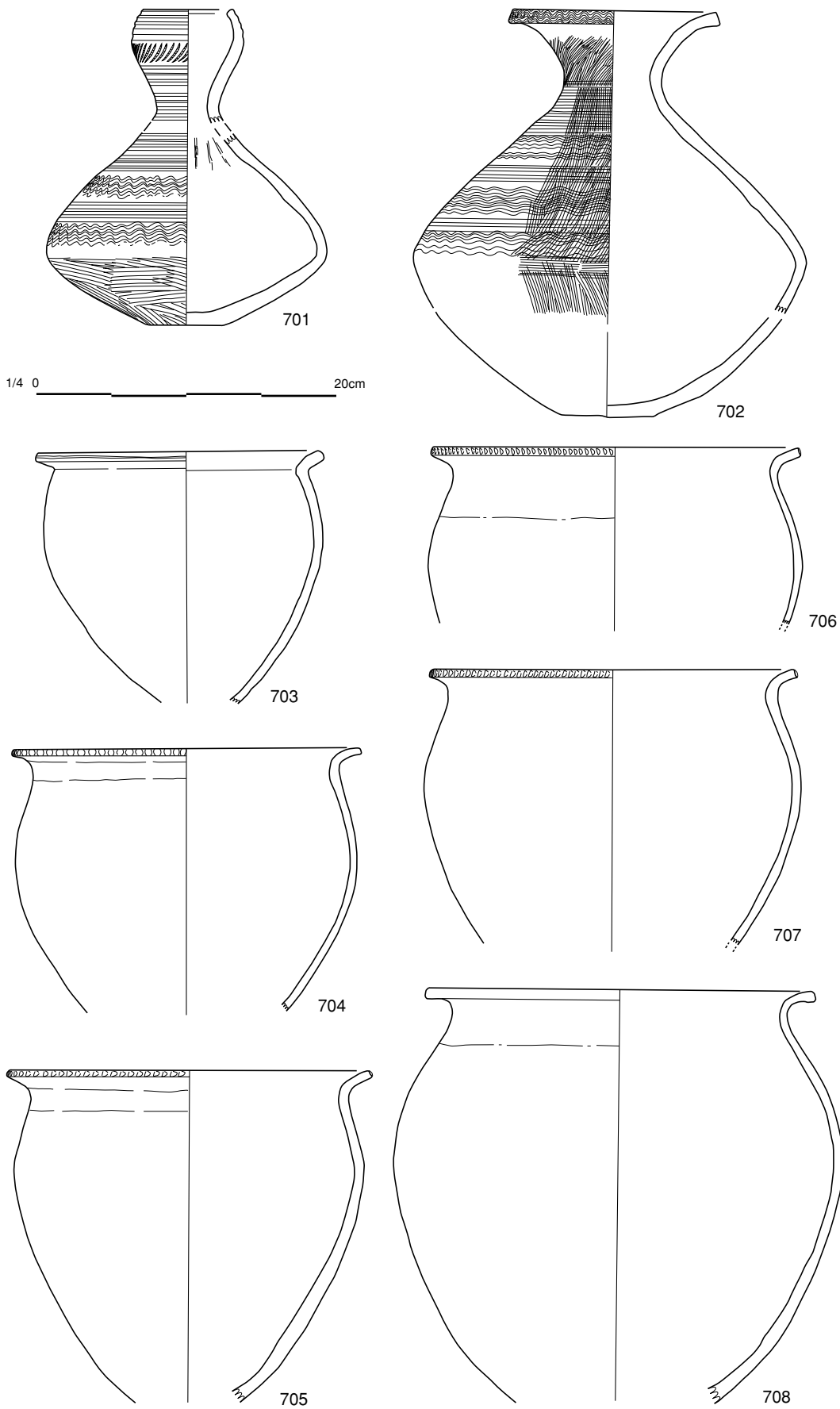
692

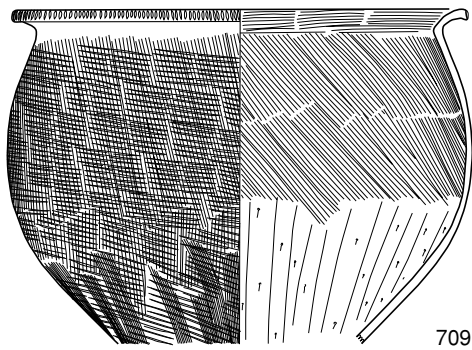


694

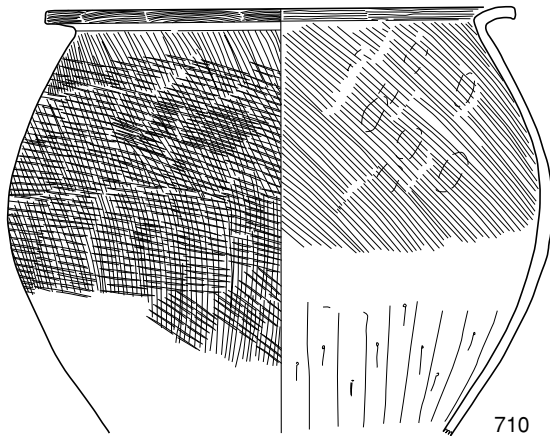
SZ202西溝-695~711



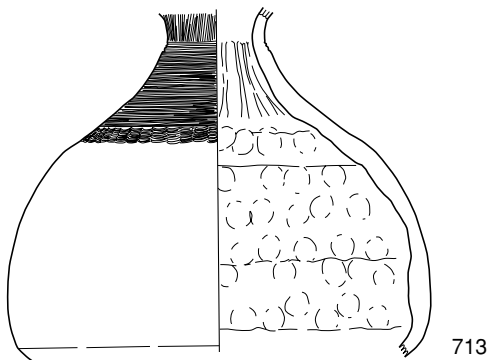




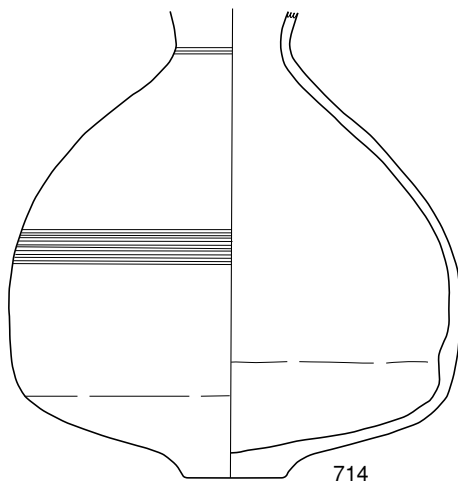
709



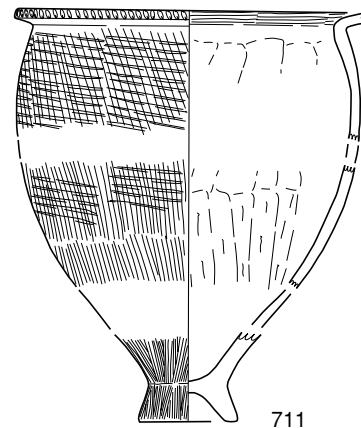
710



713

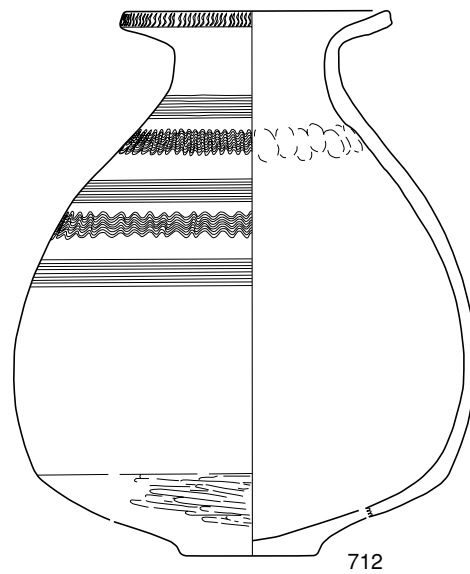


714

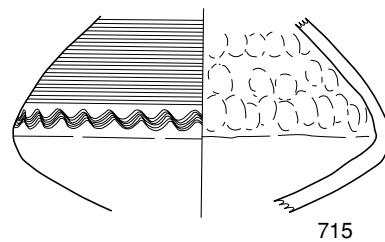


711

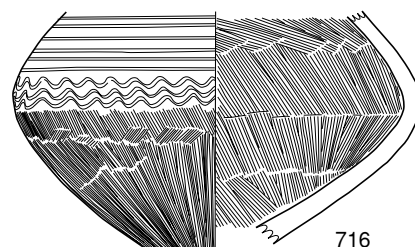
SZ202北溝-712~724



712



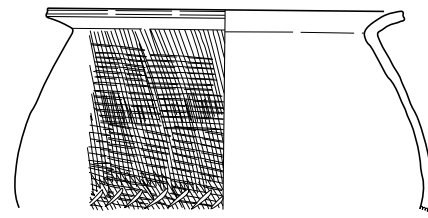
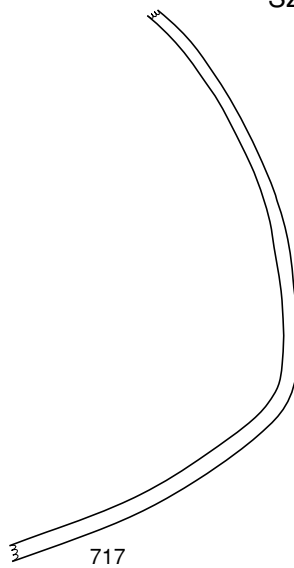
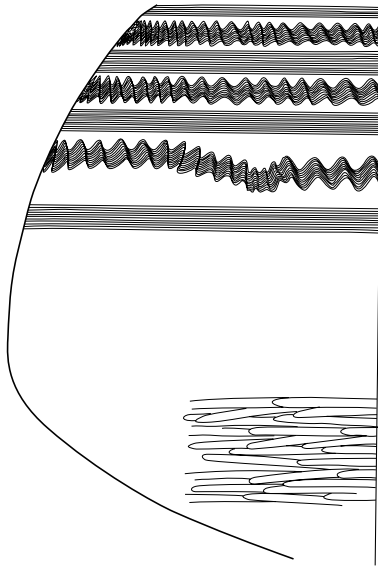
715



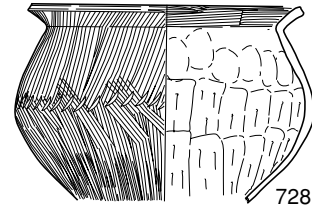
716

1/4 0 20cm

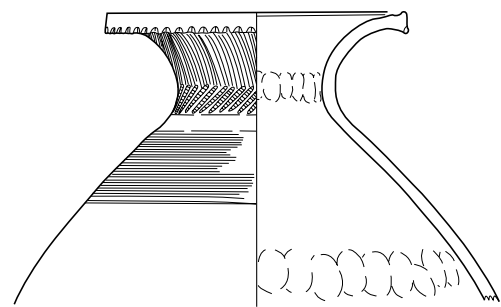
SZ201-726~728



727

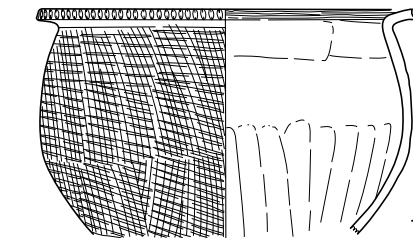


728

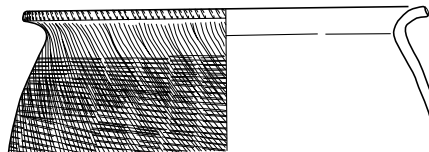


726

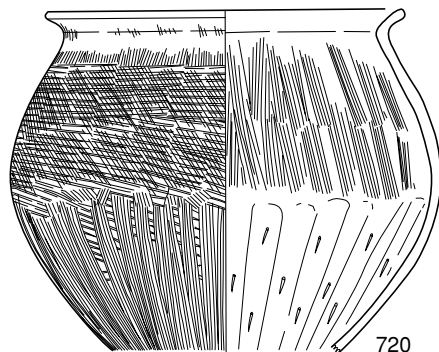
1/4 0 20cm



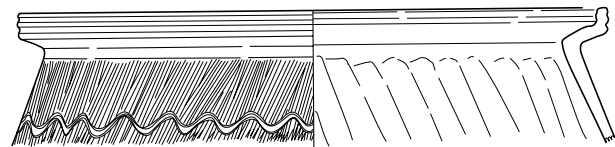
718



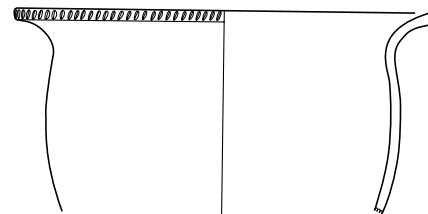
719



720

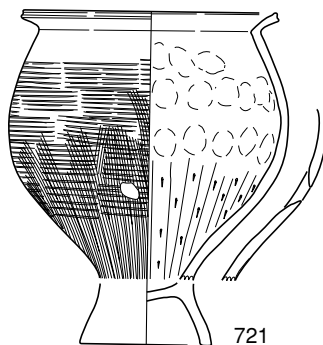


722

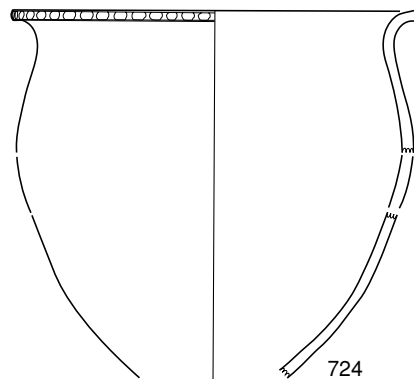


723

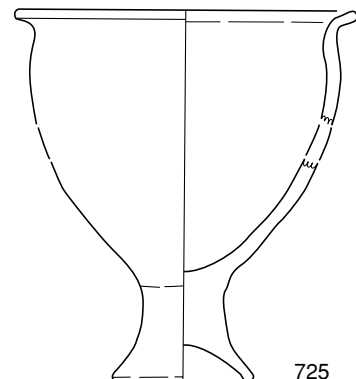
SZ202墳丘-725



721

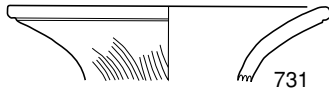


724

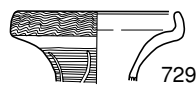


725

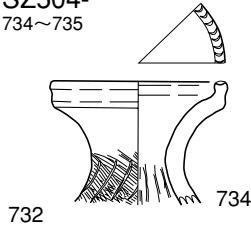
SZ503-731~733



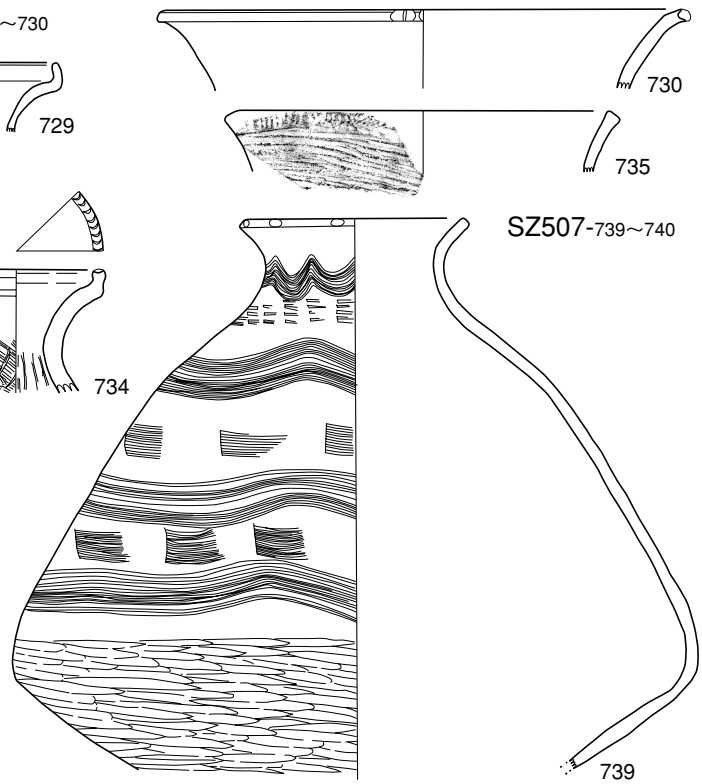
SZ502-729~730



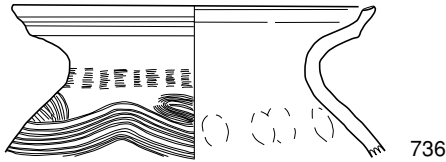
SZ504-734~735



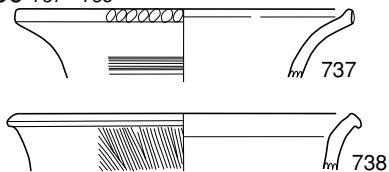
SZ507-739~740



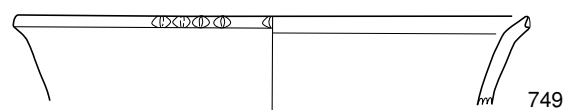
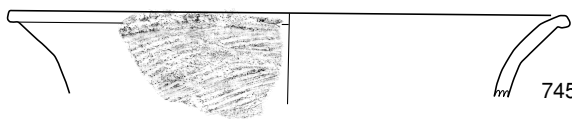
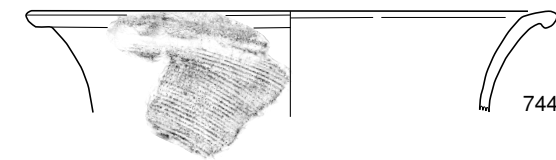
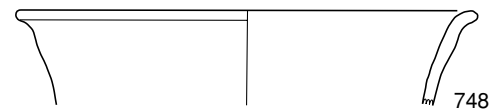
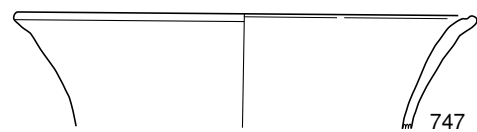
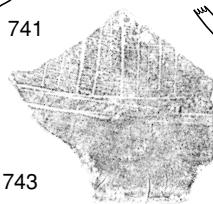
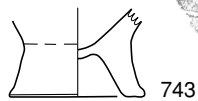
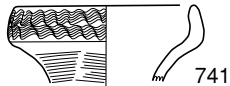
SZ505-736



SZ506-737~738

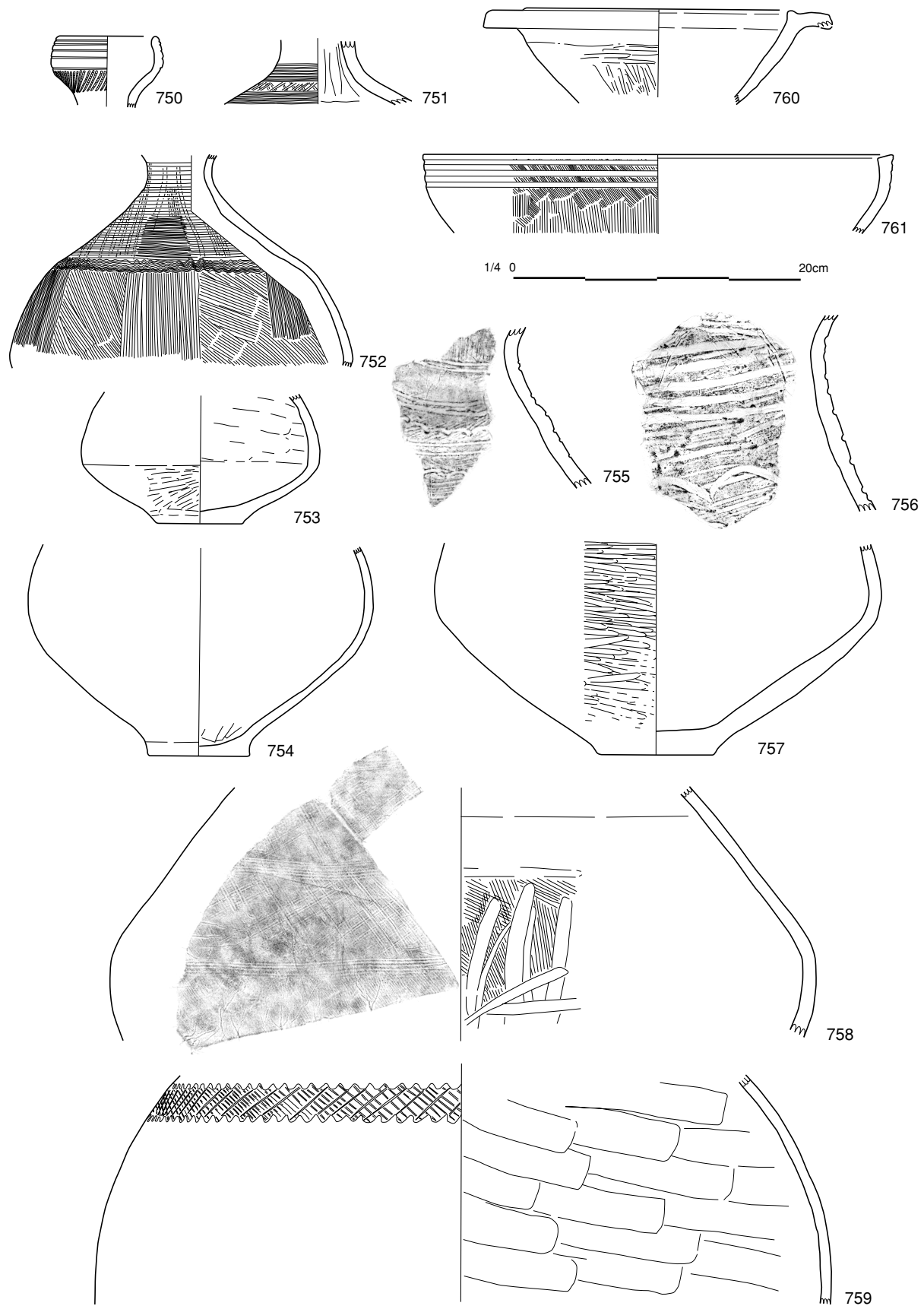


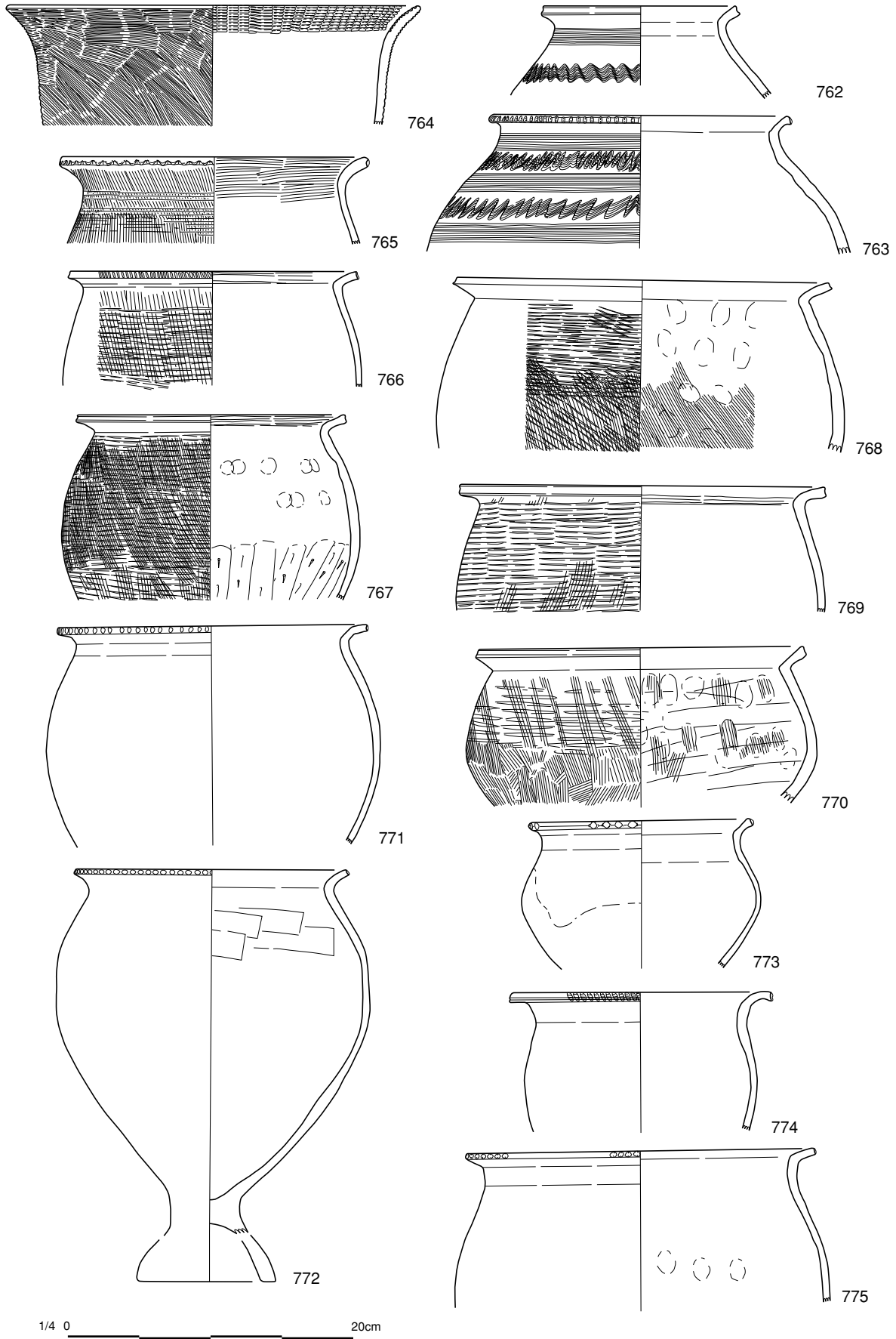
SX501-741~749



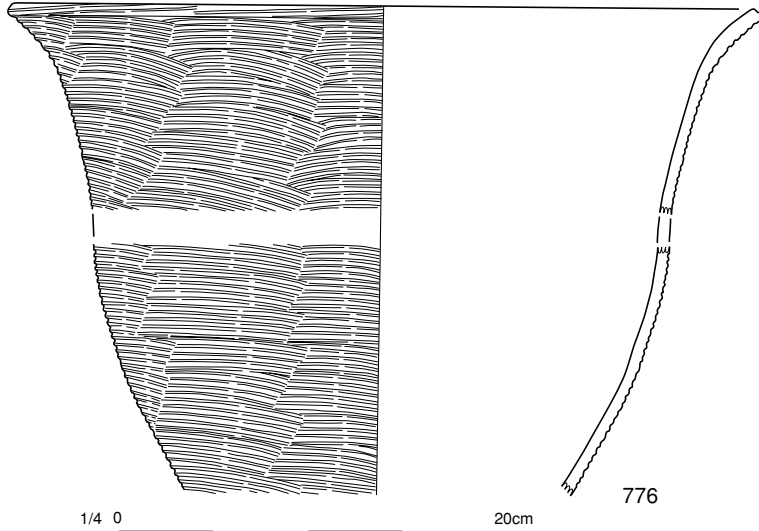
1/4 0 20cm

SD502-750~775

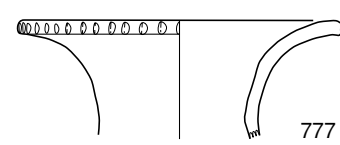




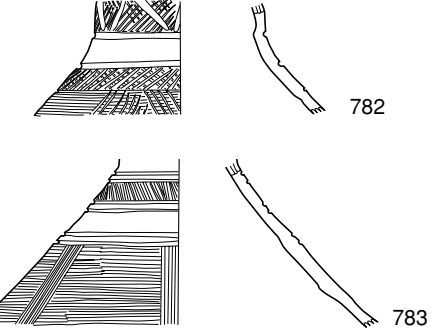
SD505-776



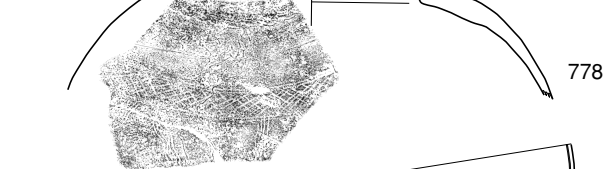
SD508-777



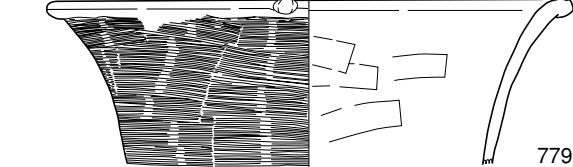
SD540-782~786



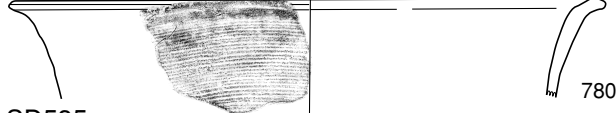
SD513-778



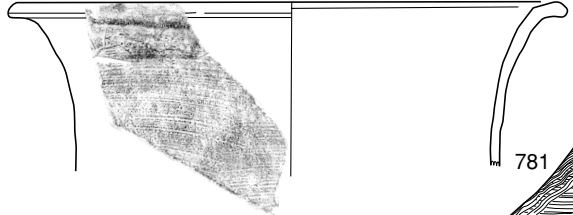
SD524-779



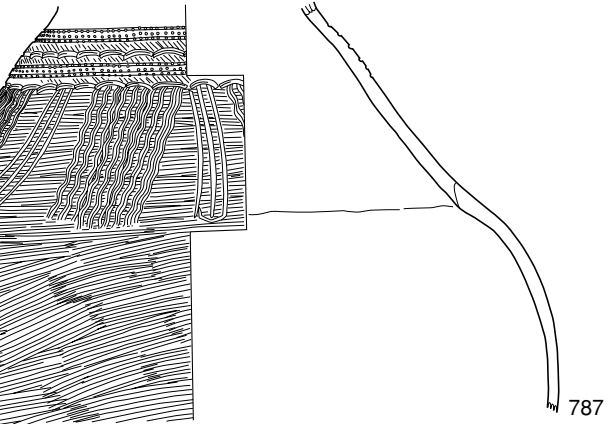
SD525-780



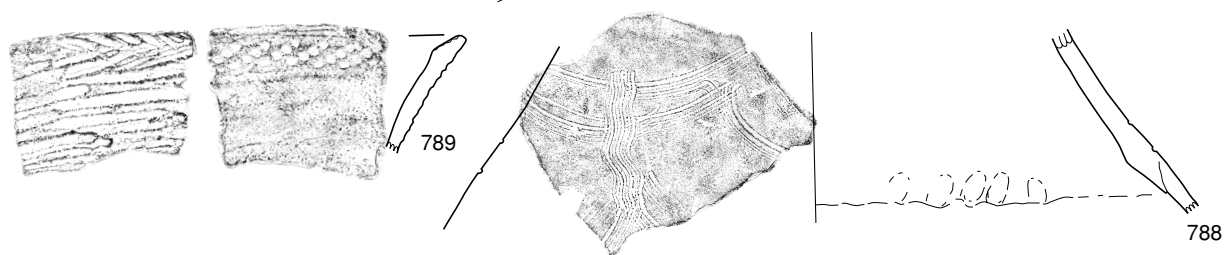
SD535-781



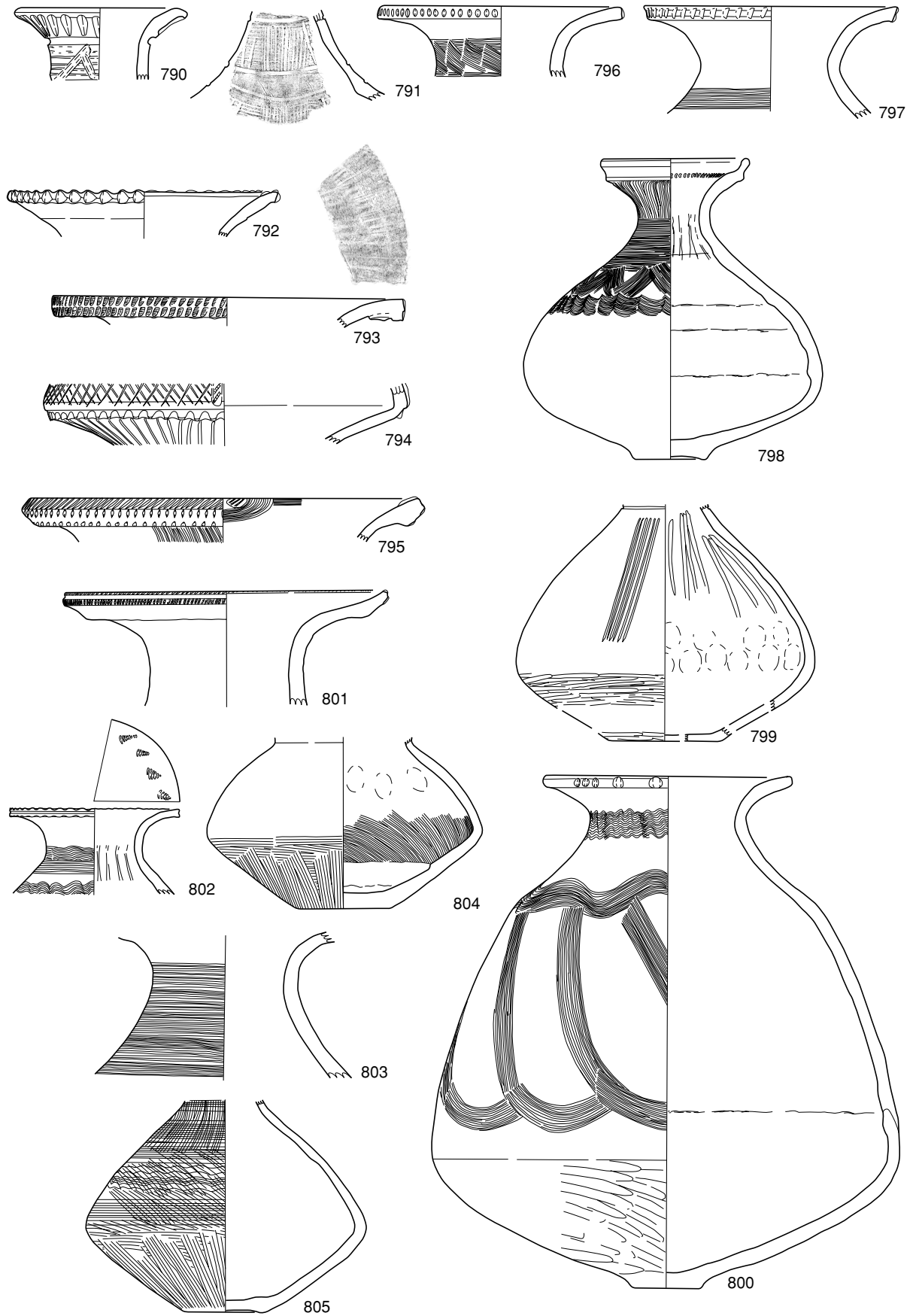
SD545-787

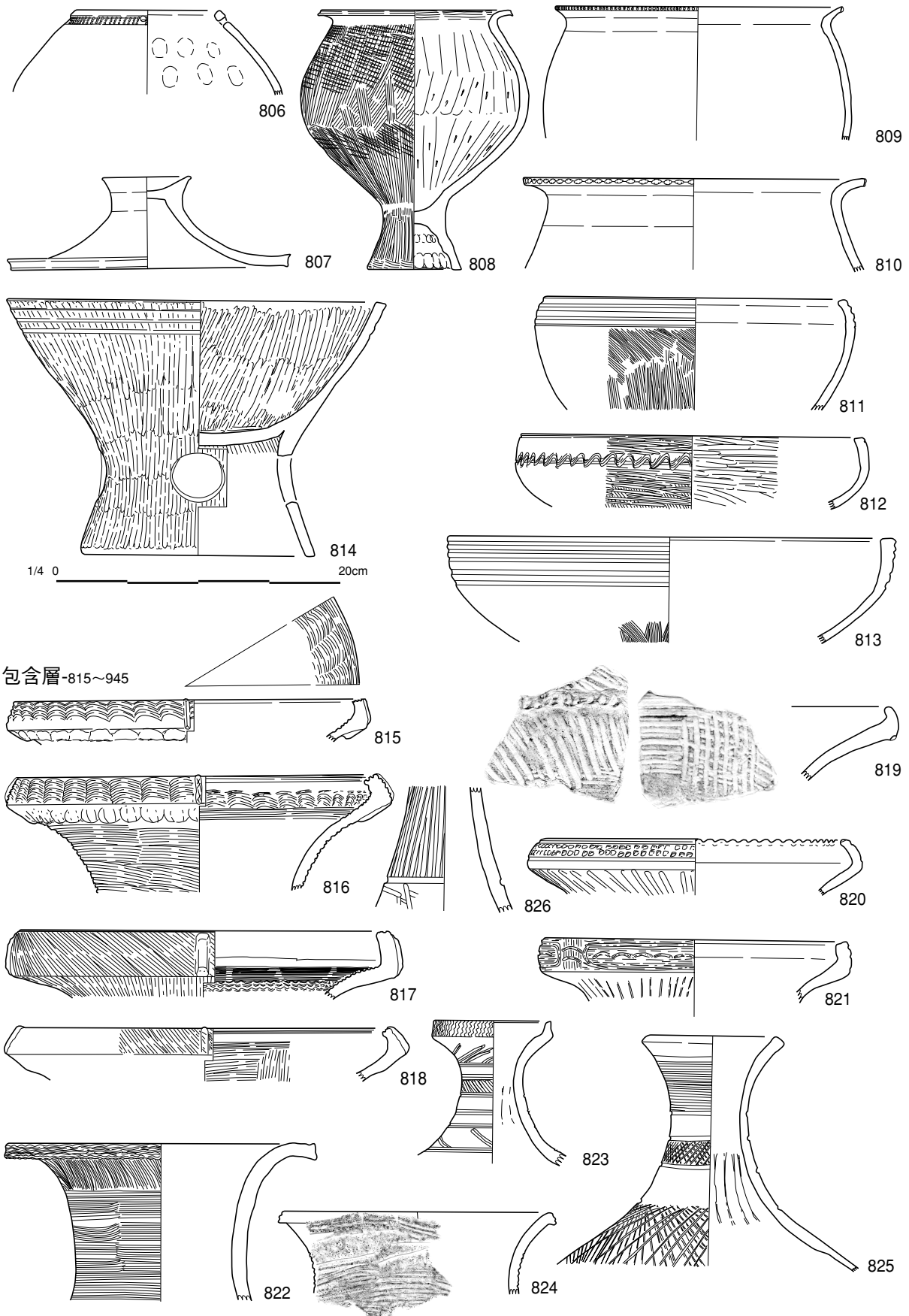


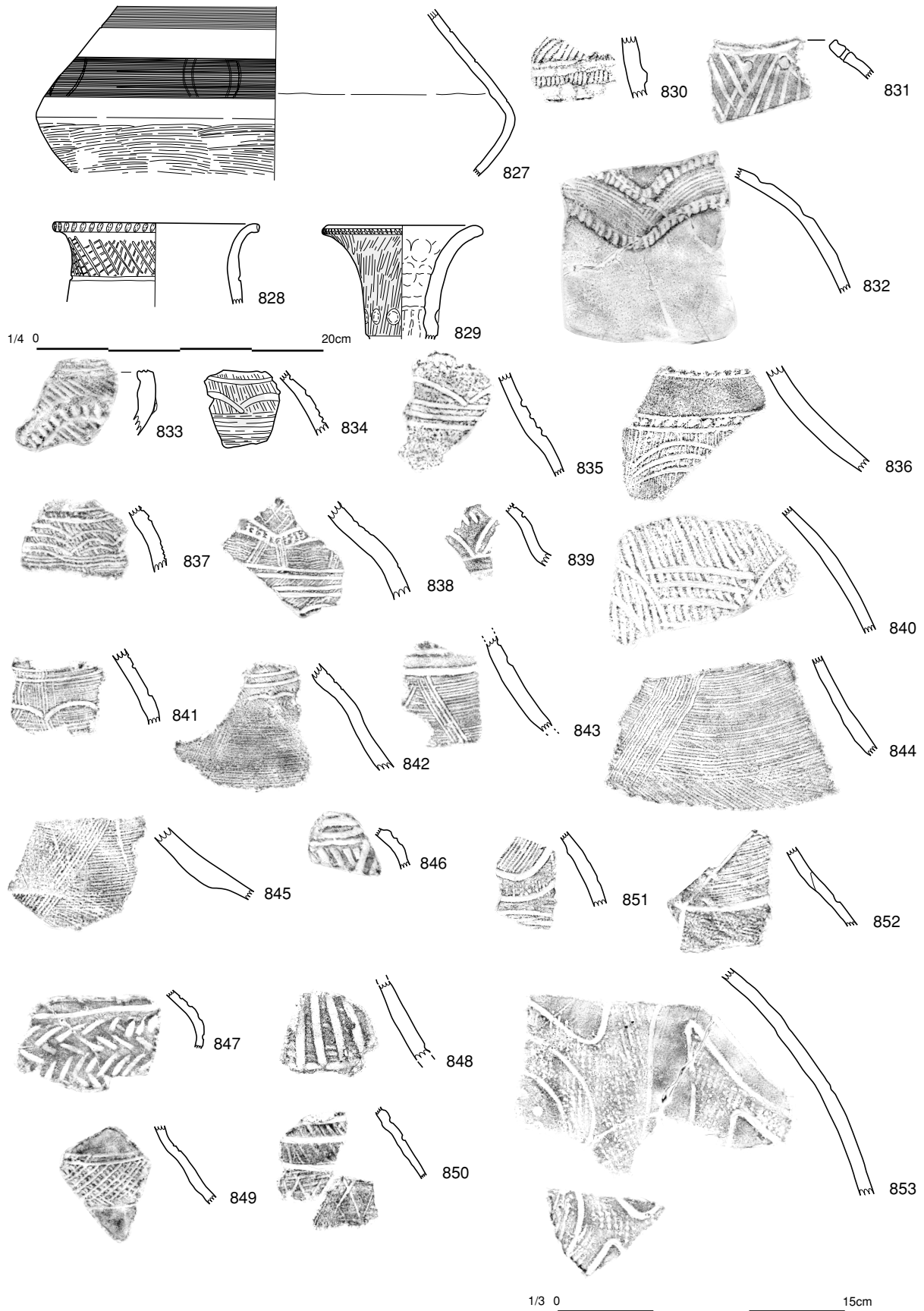
SD549-788~789

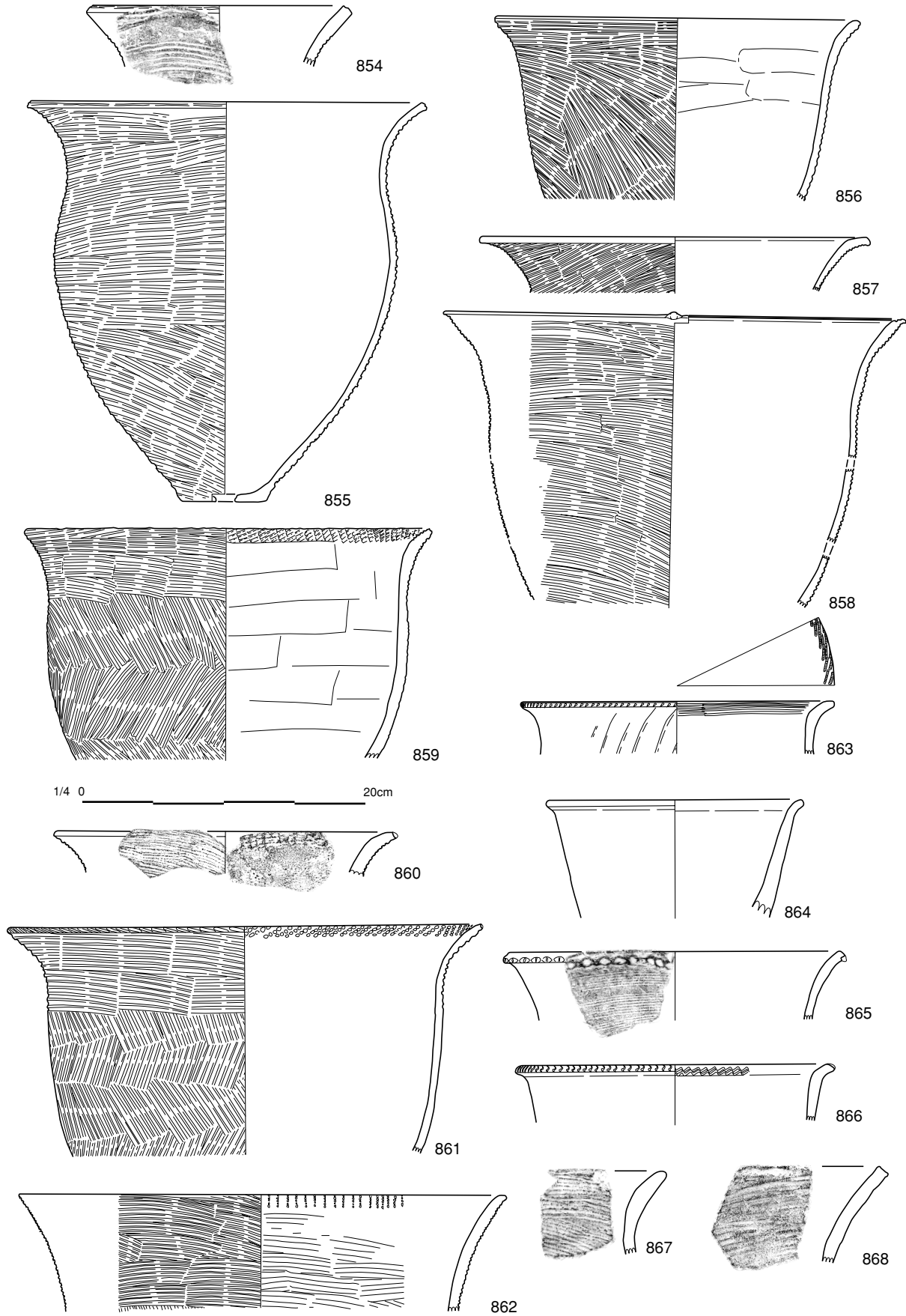


NR03-790~814

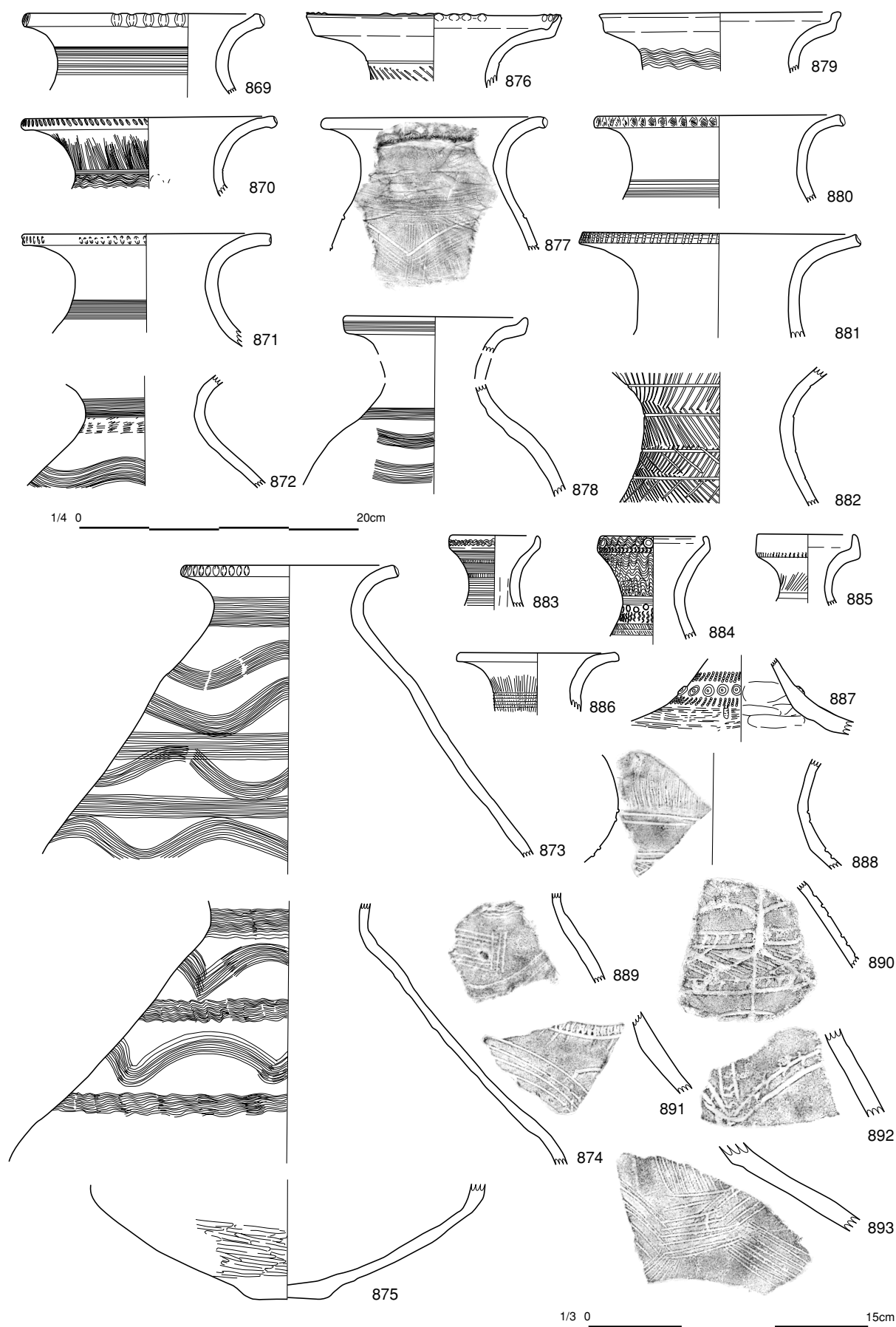


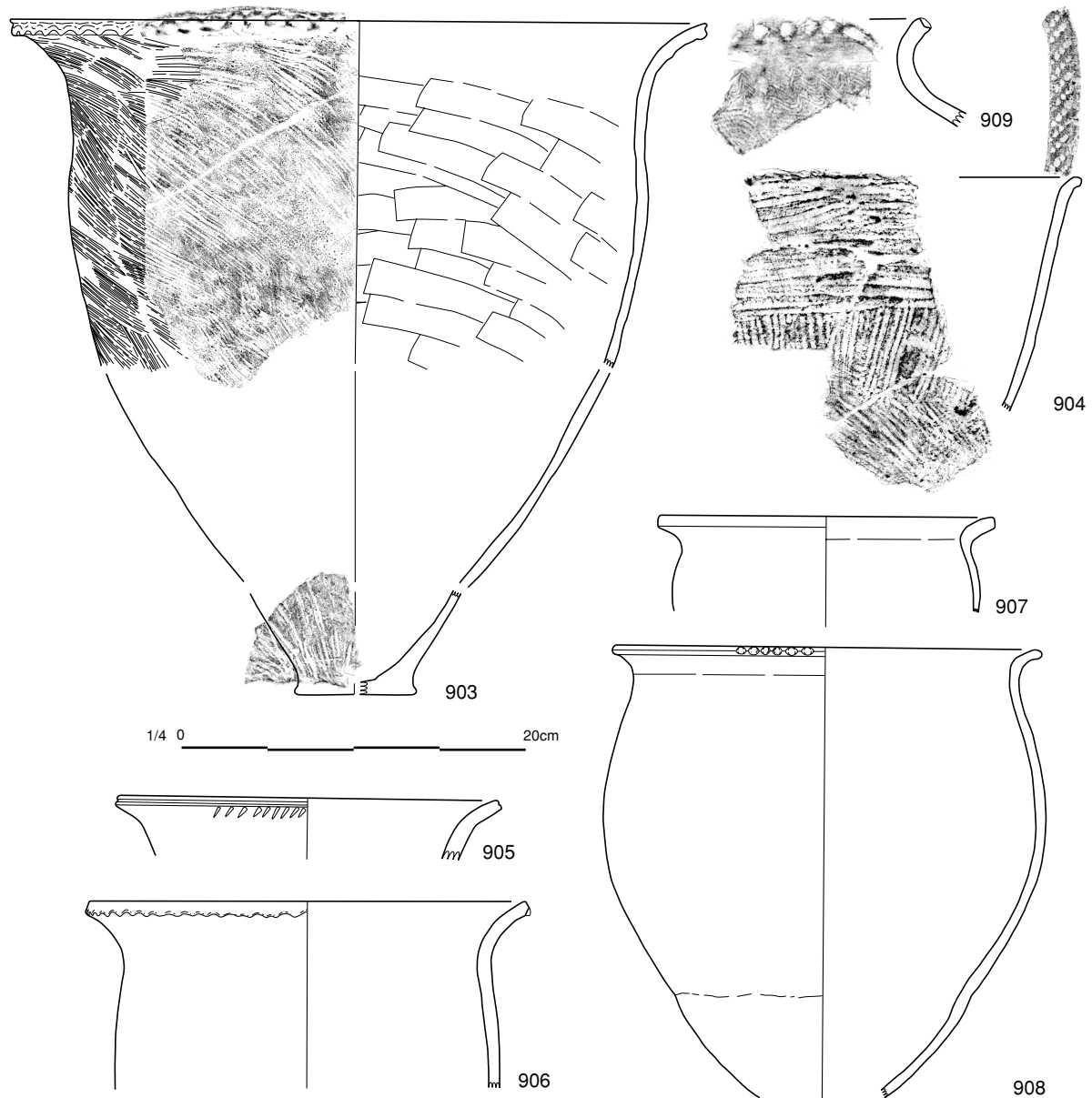
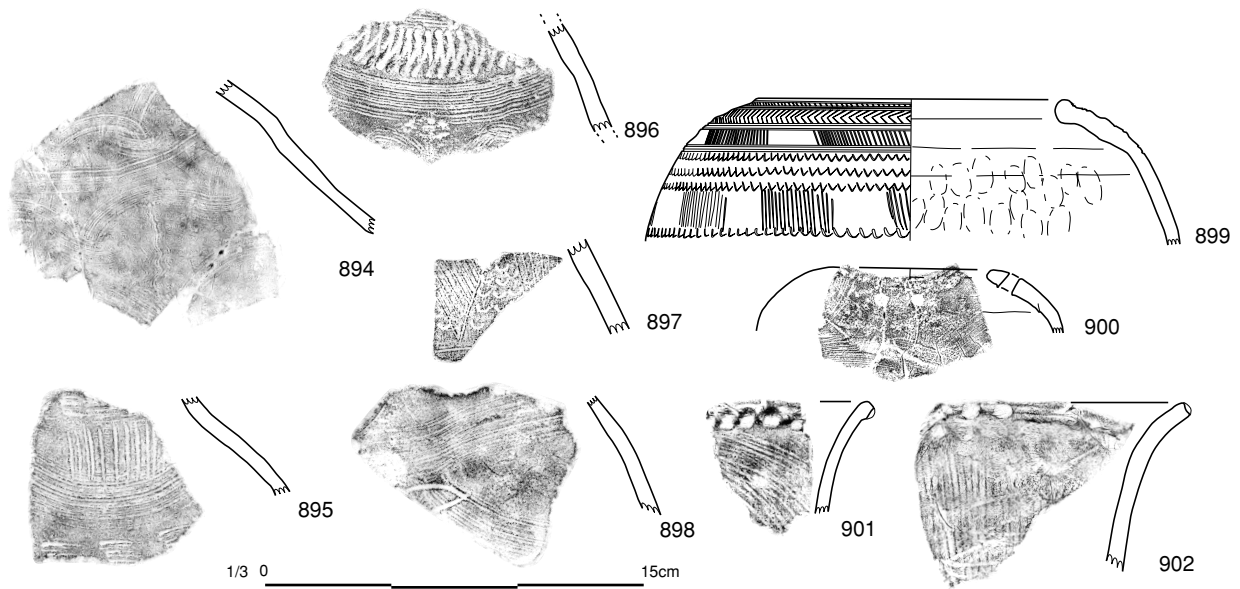


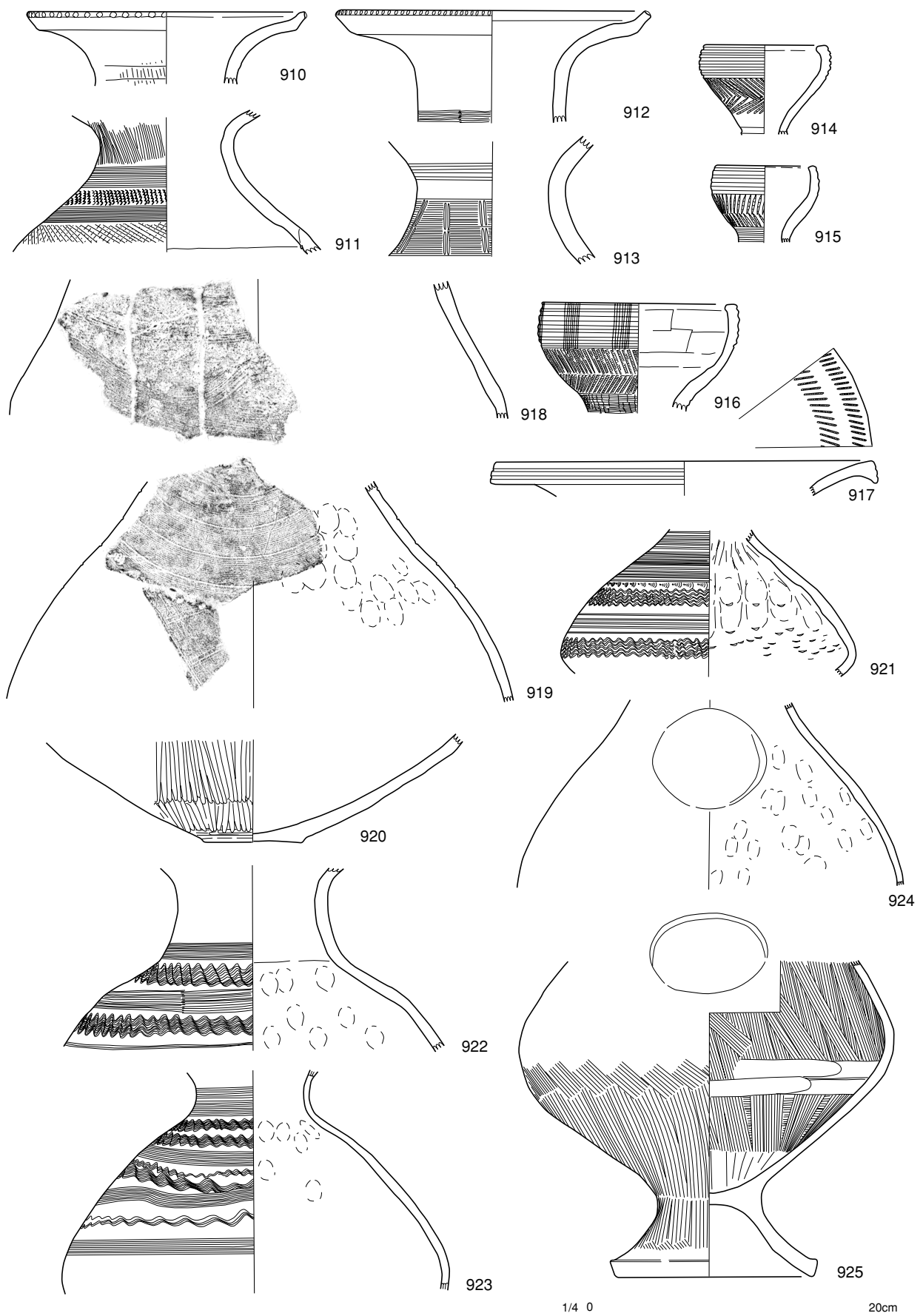


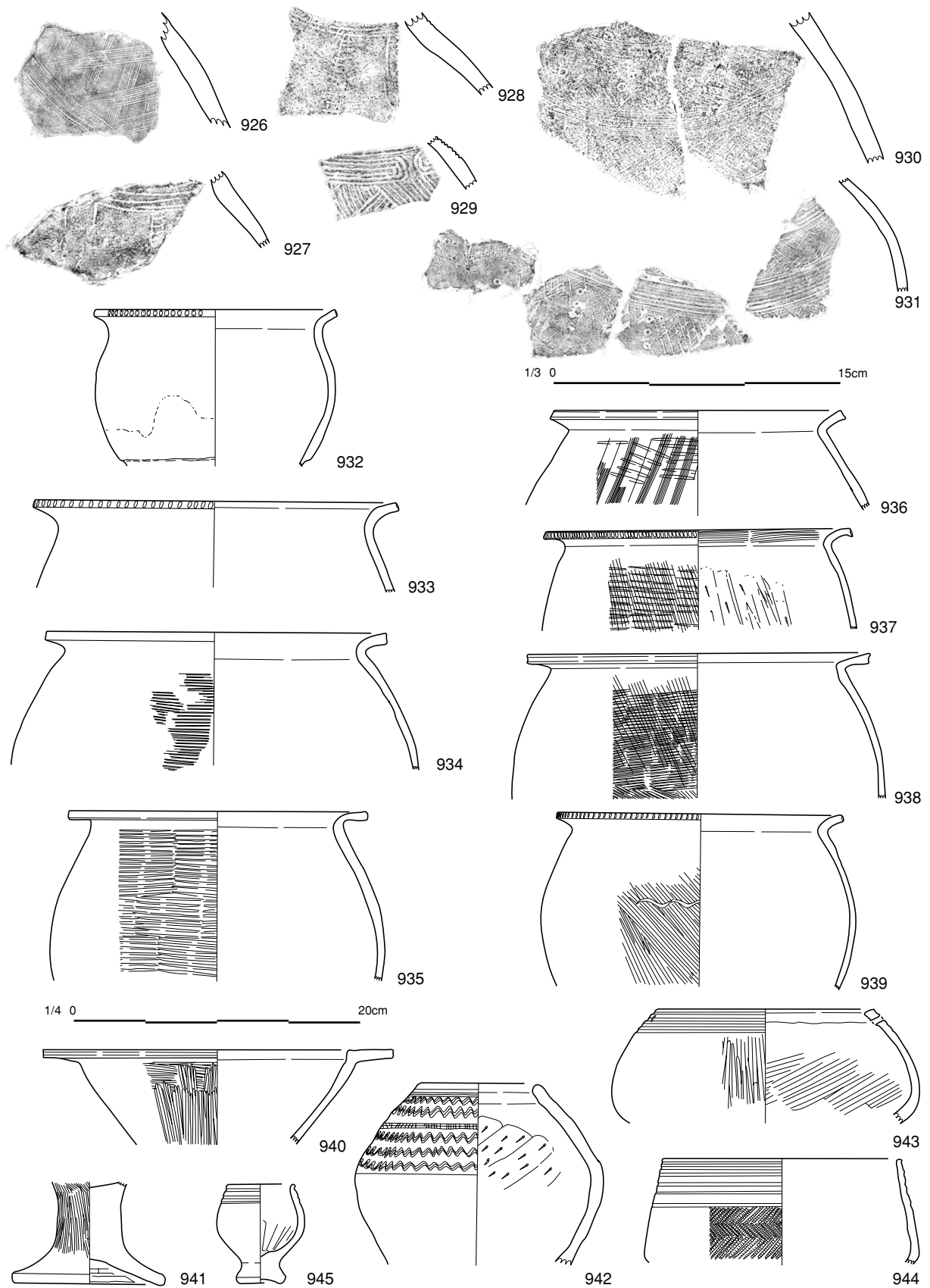


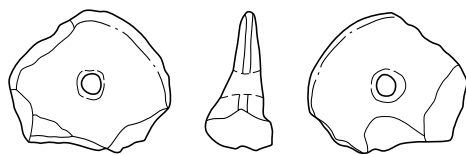
図版81



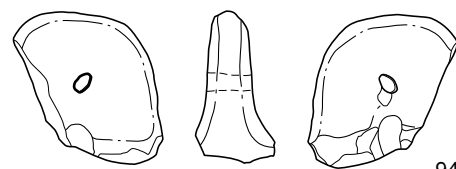




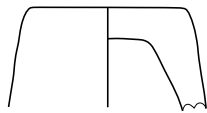




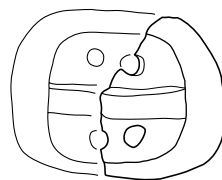
946



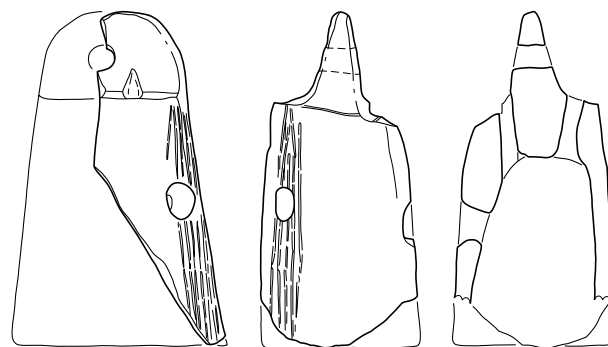
947



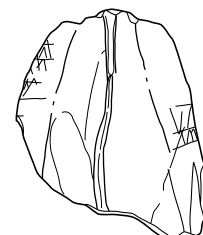
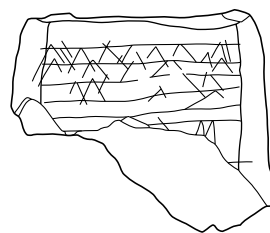
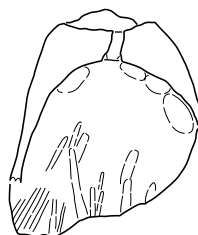
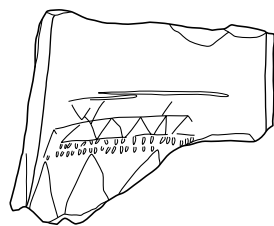
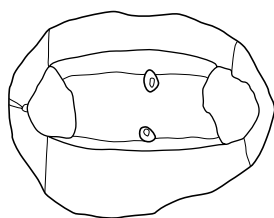
948



949

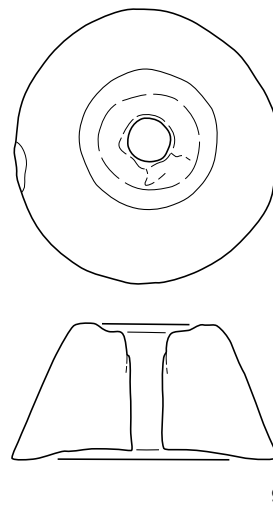
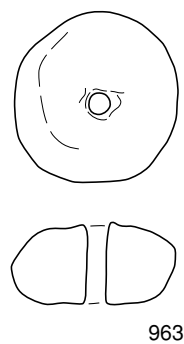
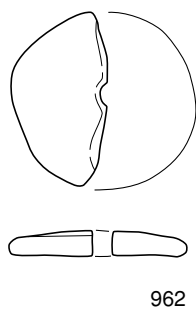
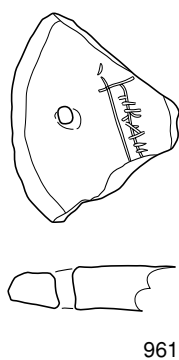
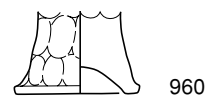
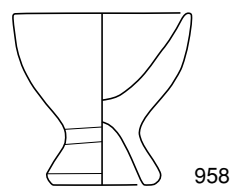
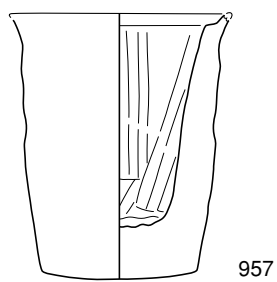
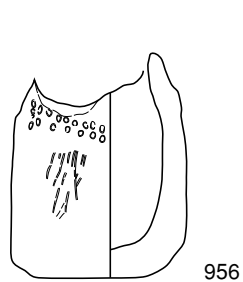
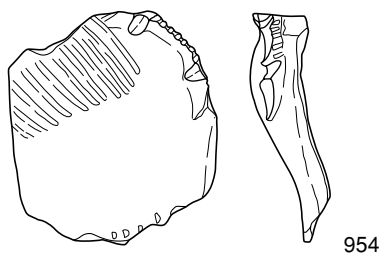
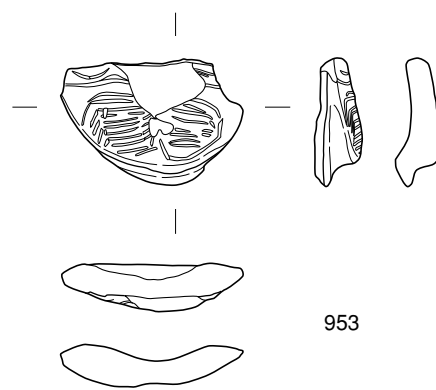
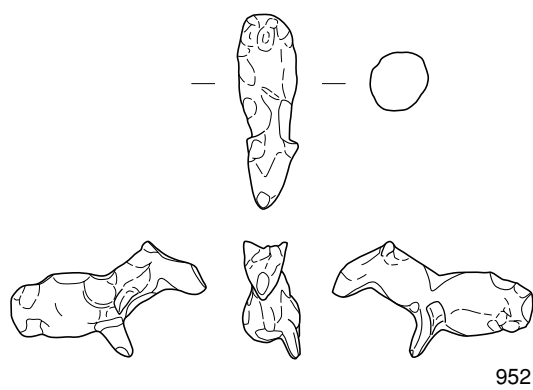


950



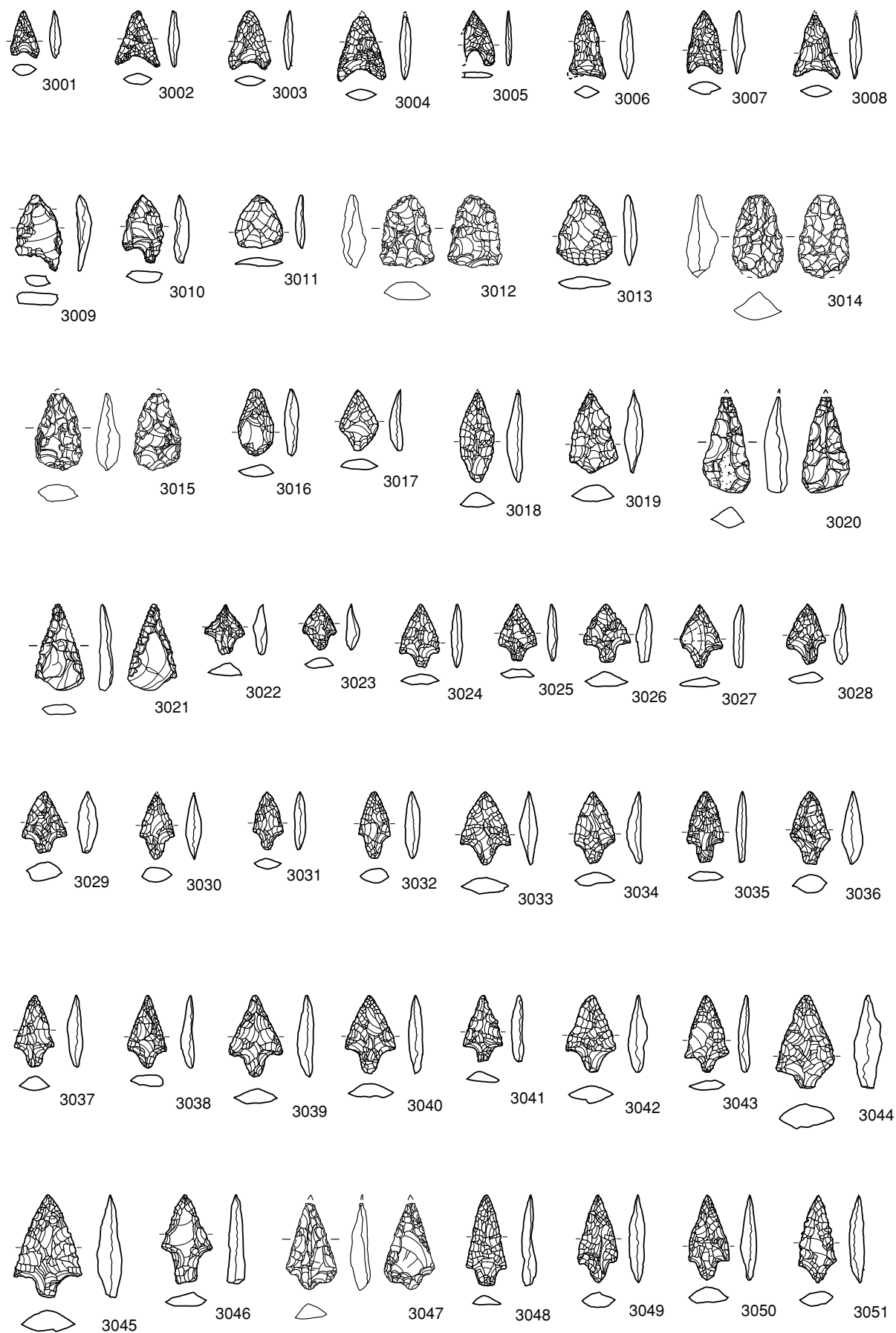
951

1/2 0 10cm

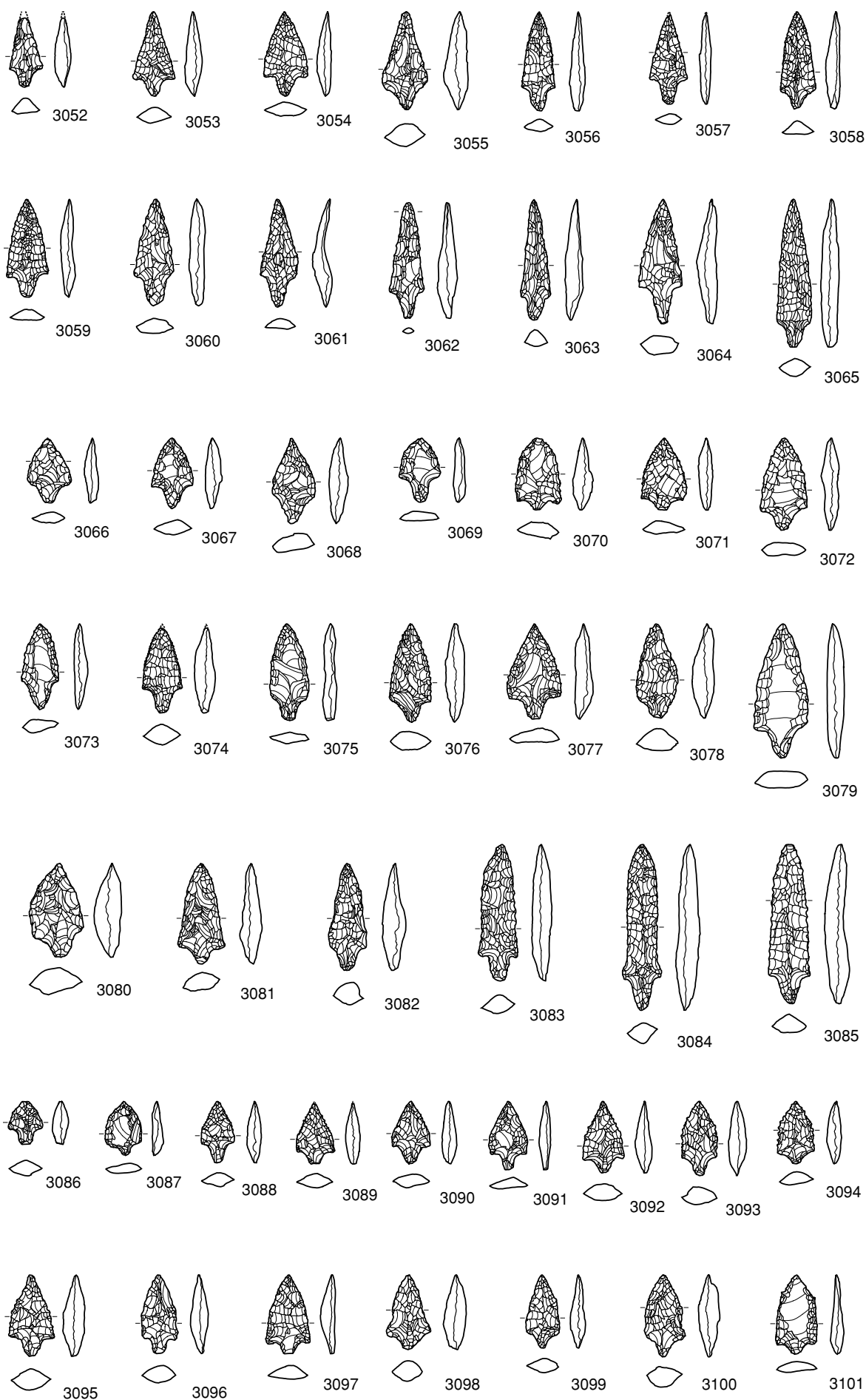


1/2 0 10cm

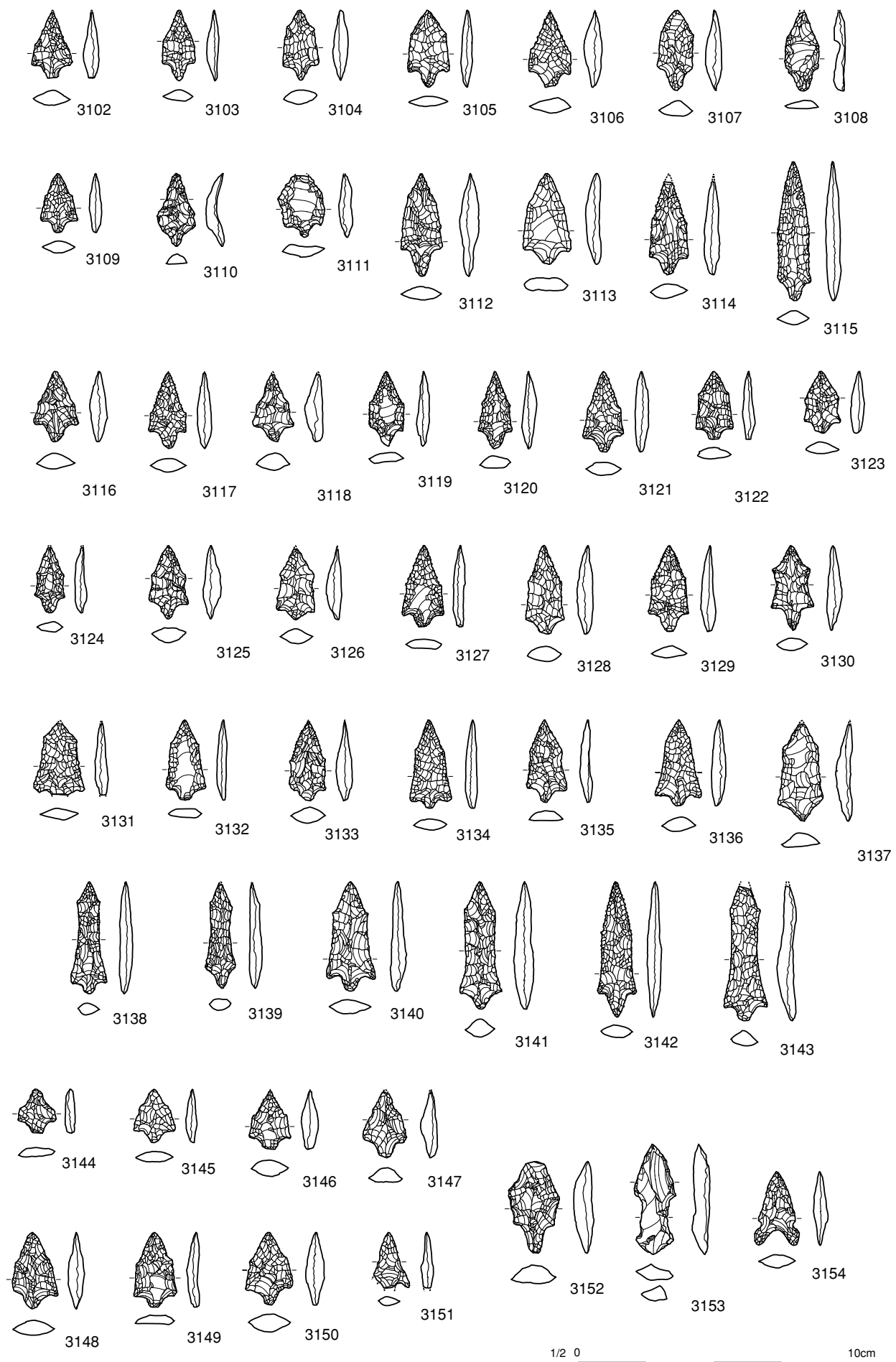
図版87

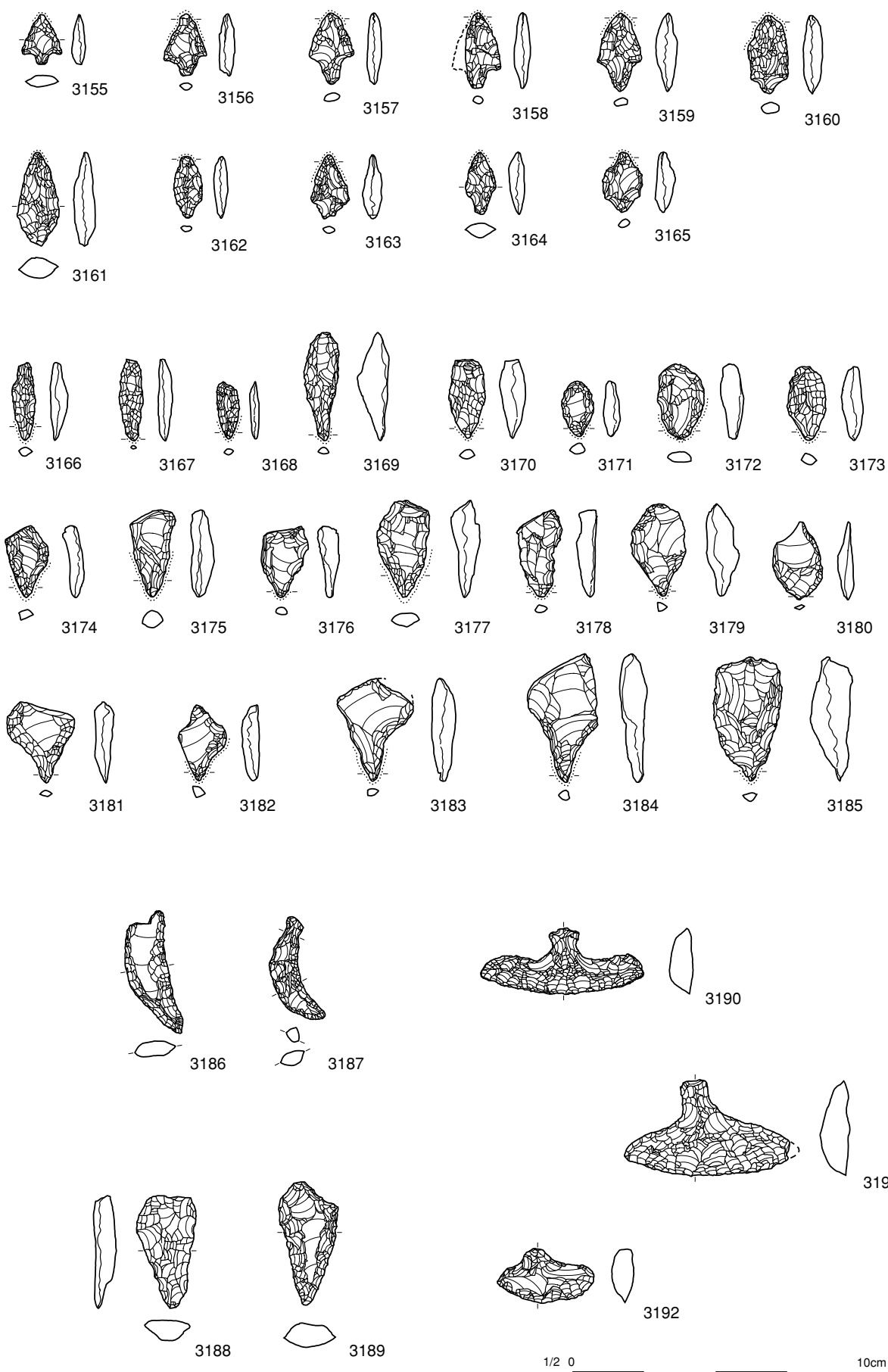


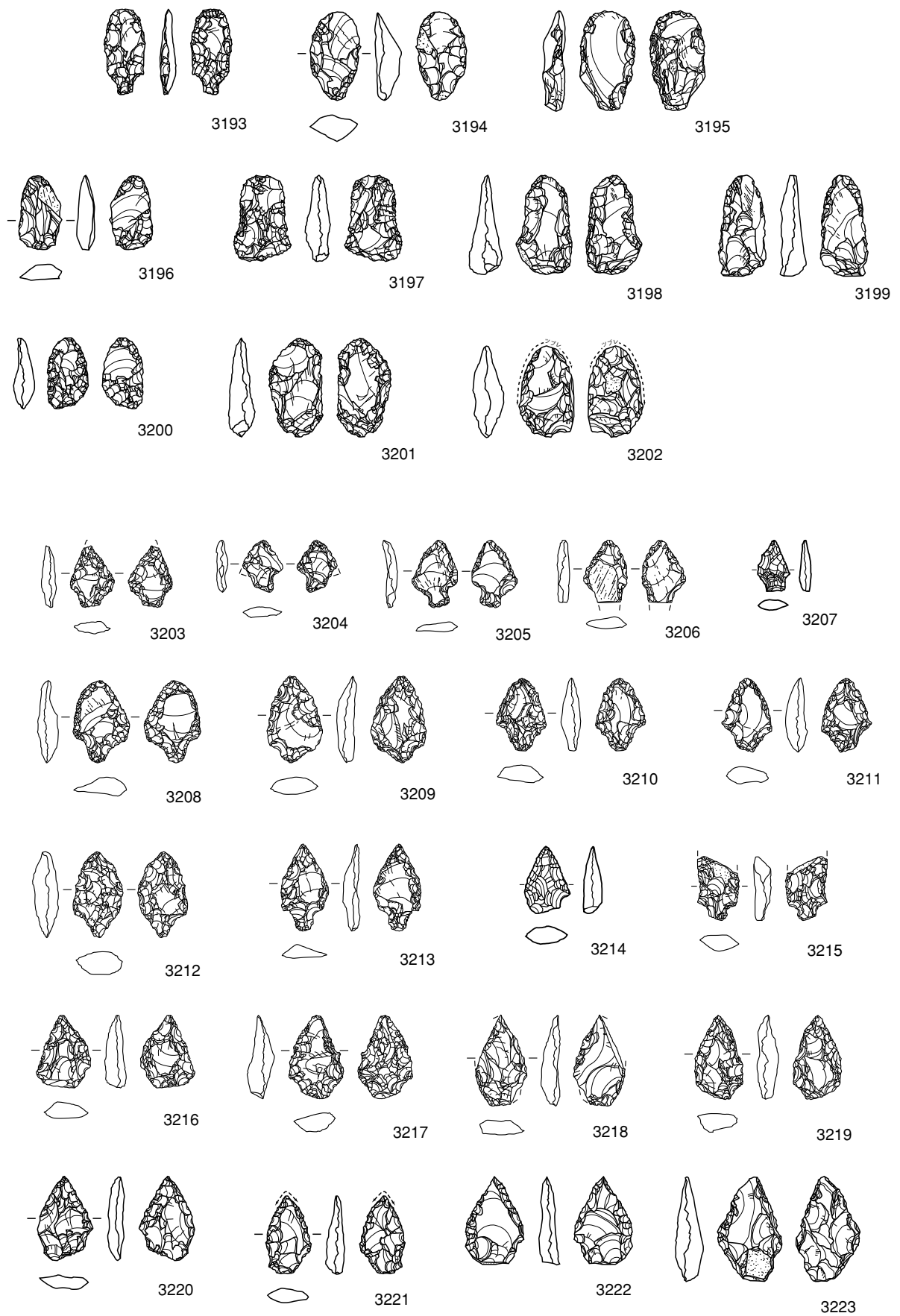
1/2 0 10cm



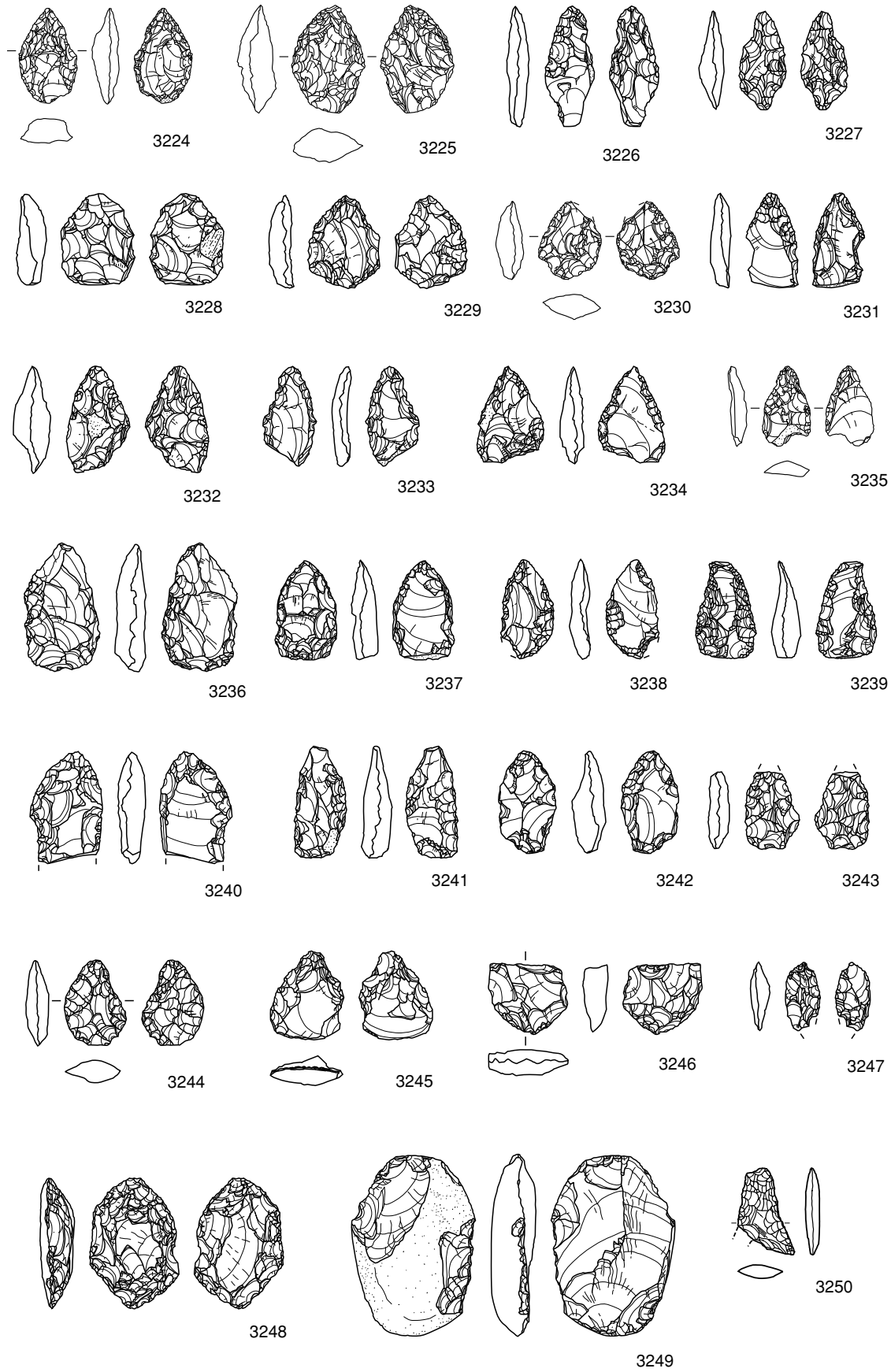
1/2 0 10cm



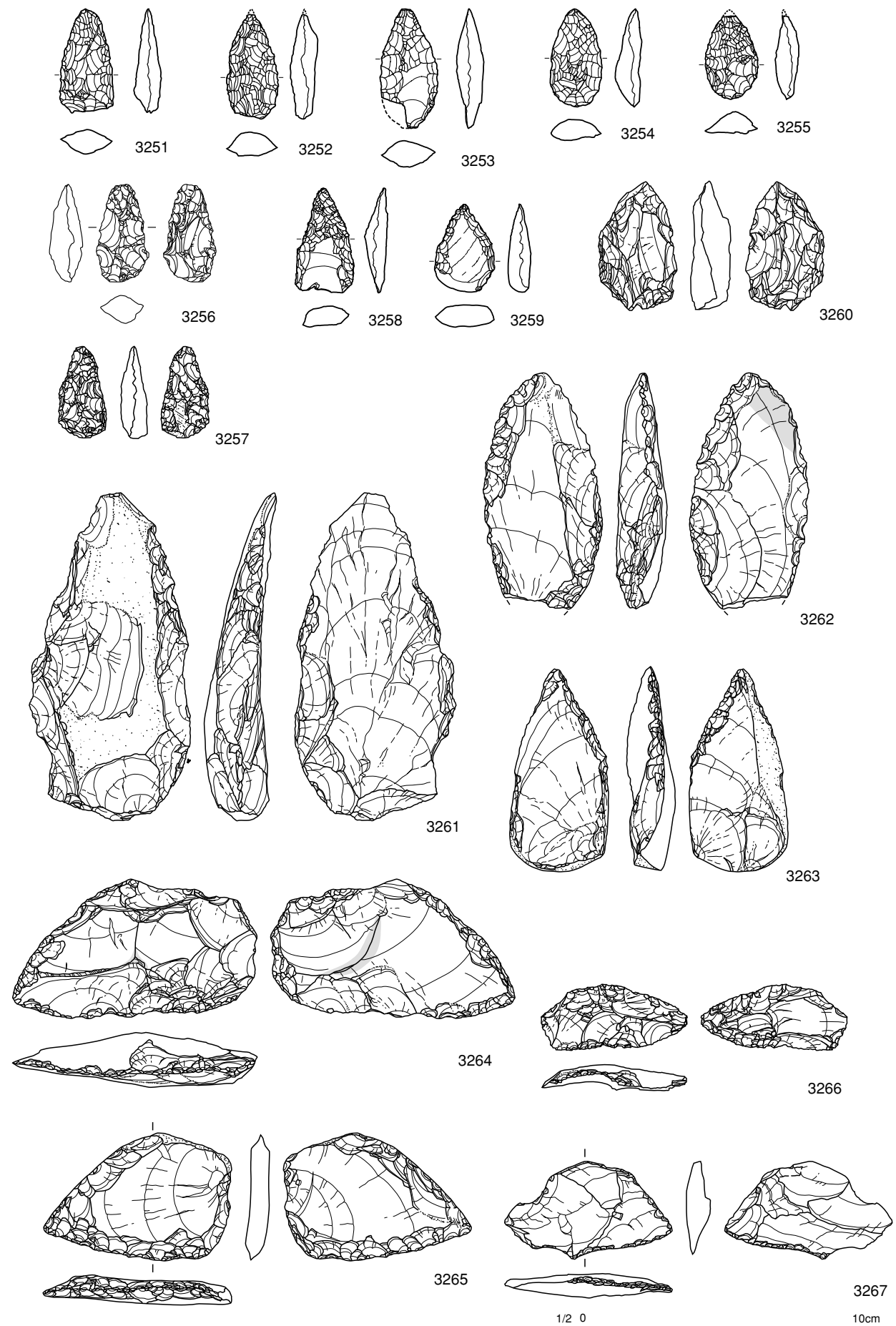


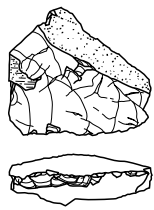


1/2 0 10cm



1/2 0 10cm

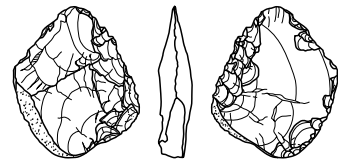




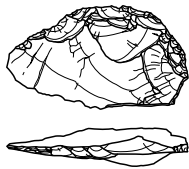
3268



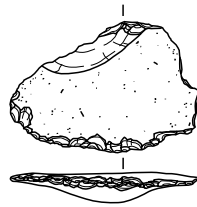
3269



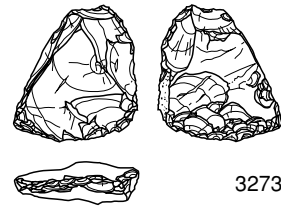
3270



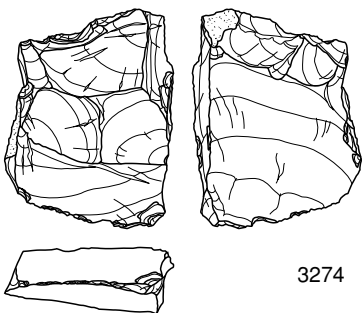
3271



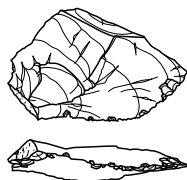
3272



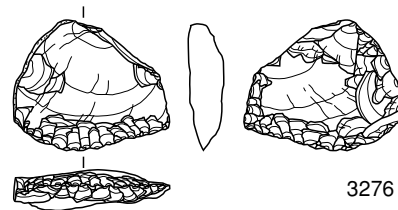
3273



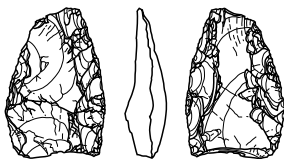
3274



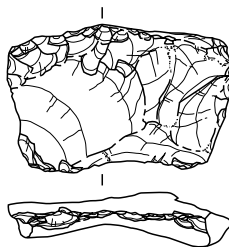
3275



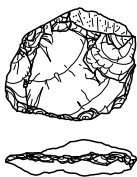
3276



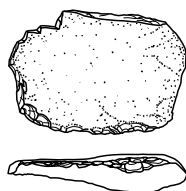
3277



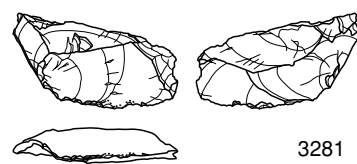
3278



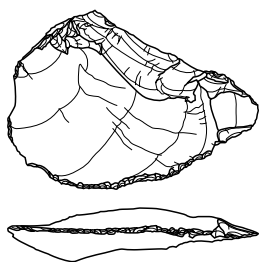
3279



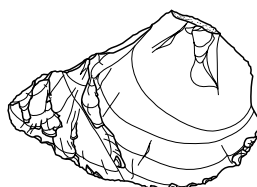
3280



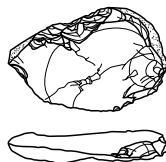
3281



3282

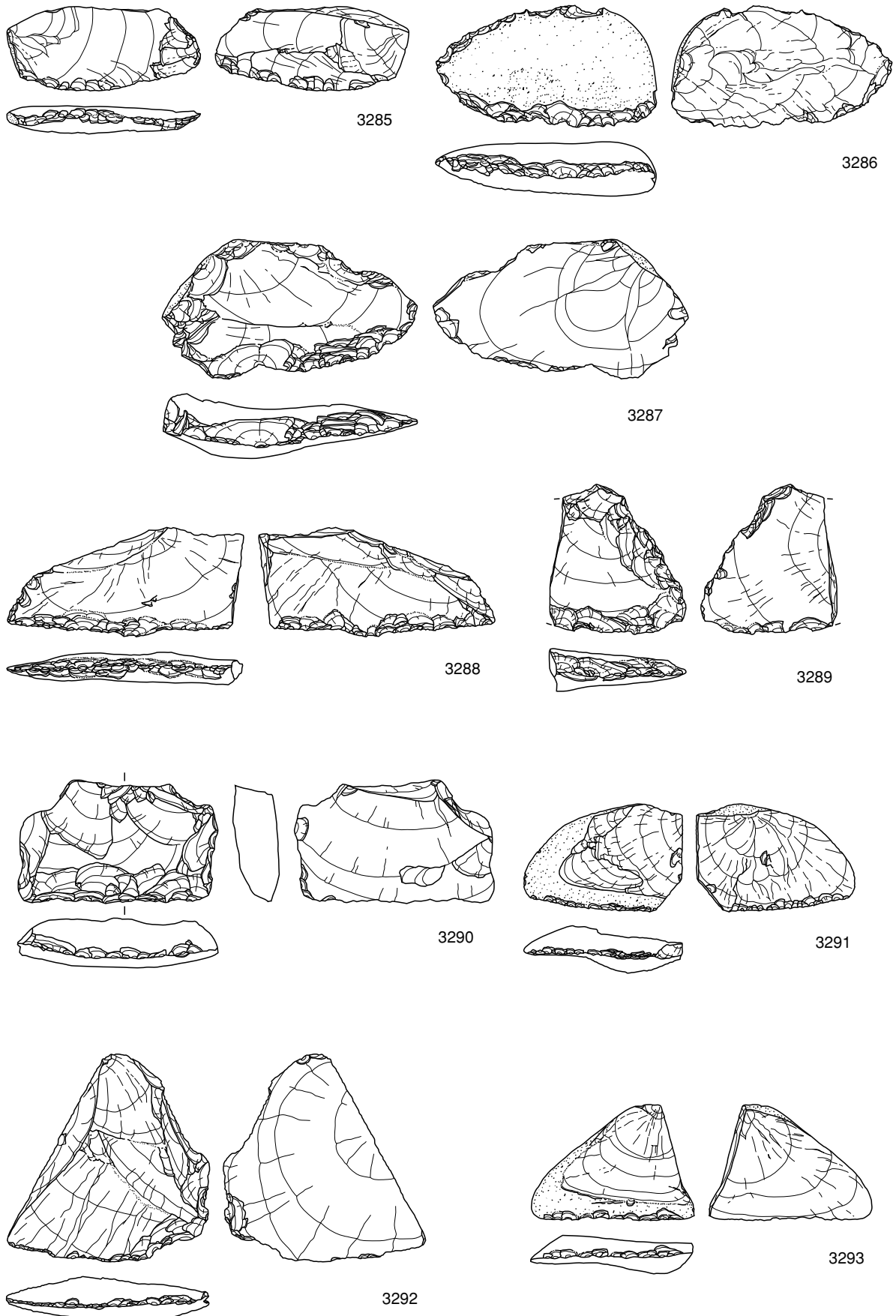


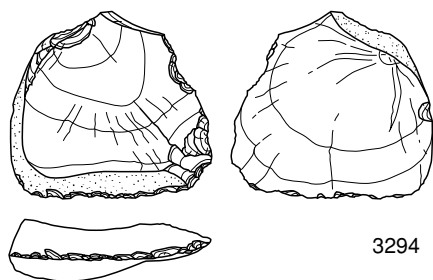
3283



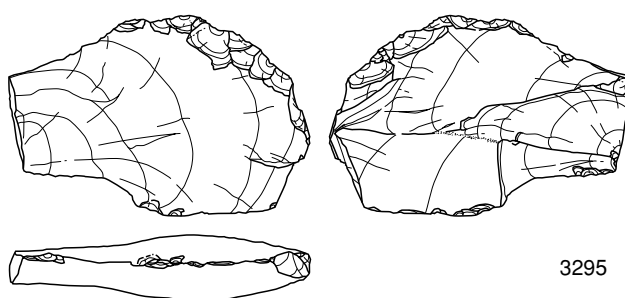
3284

1/2 0 10cm

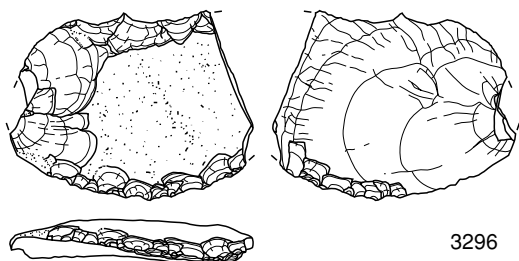




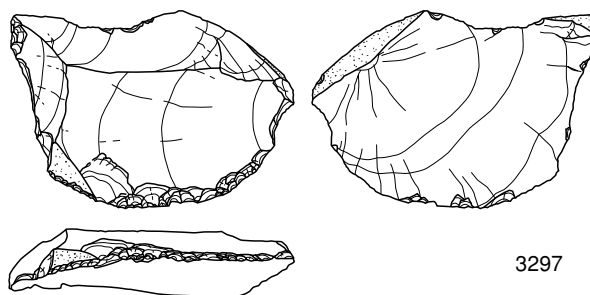
3294



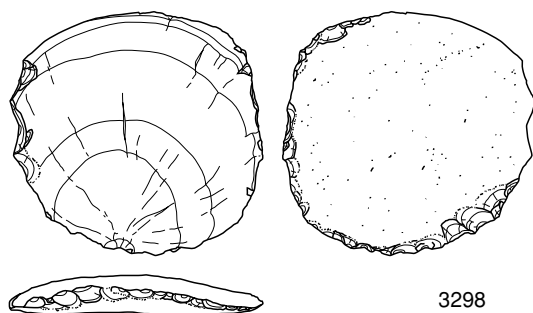
3295



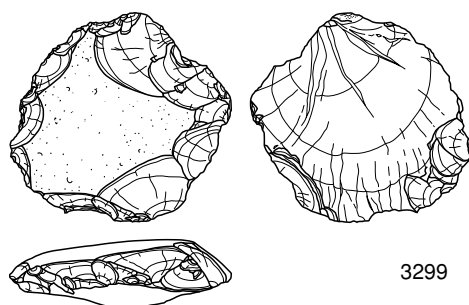
3296



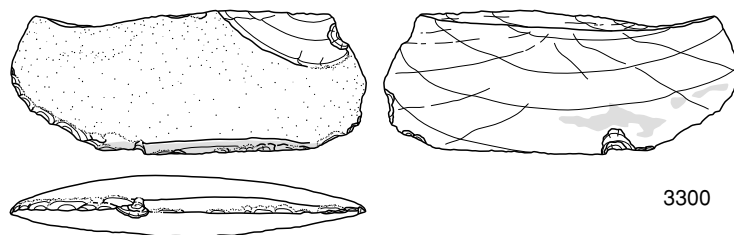
3297



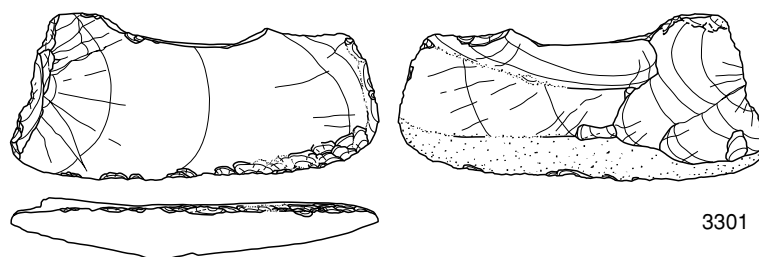
3298



3299

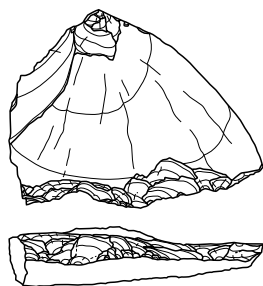


3300

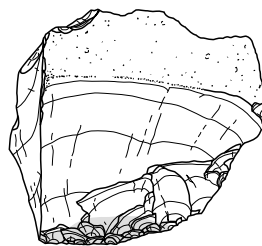
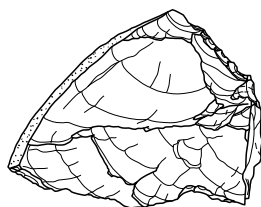


3301

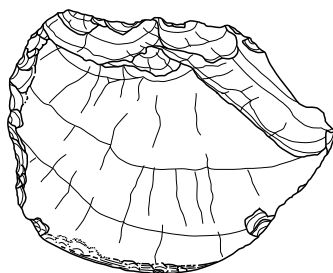
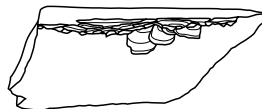
1/2 0 10cm



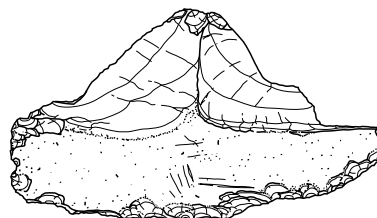
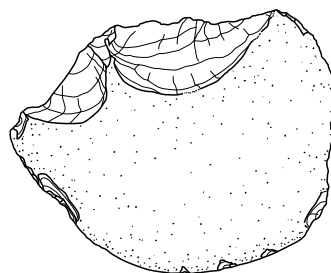
3302



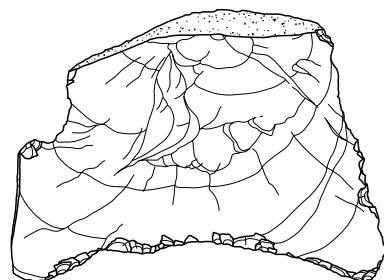
3304



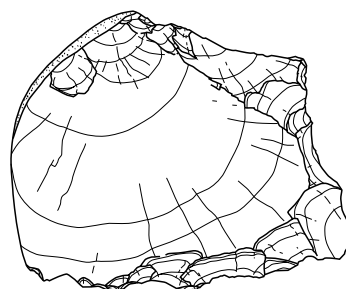
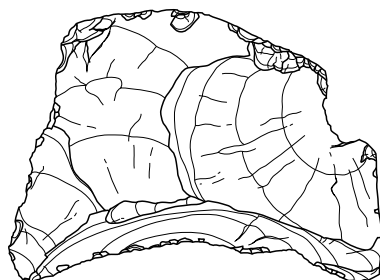
3303



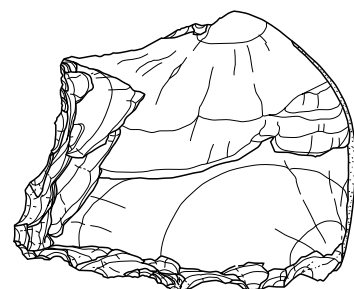
3305



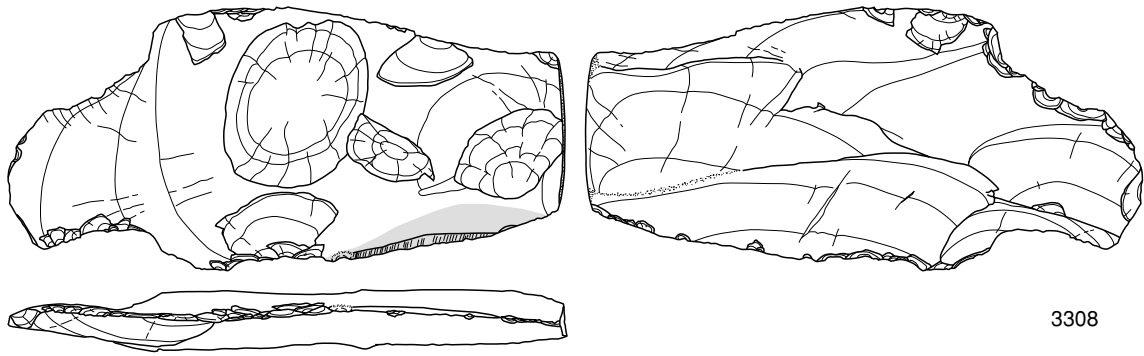
3306



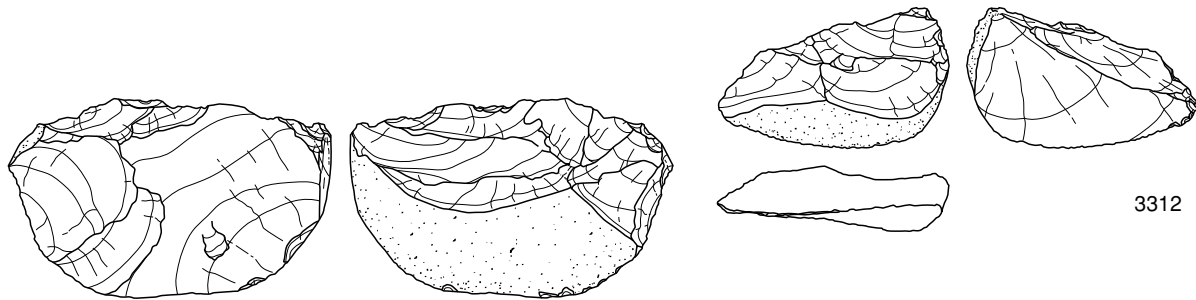
3307



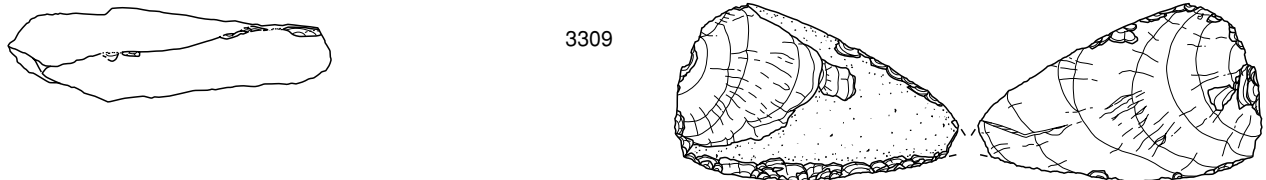
1/2 0 10cm



3308

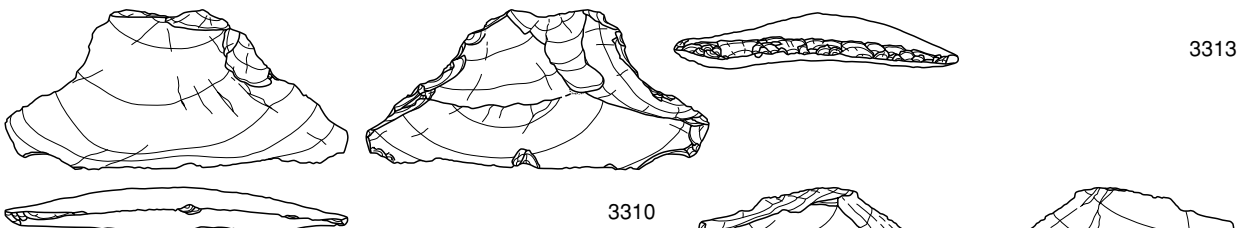


3312



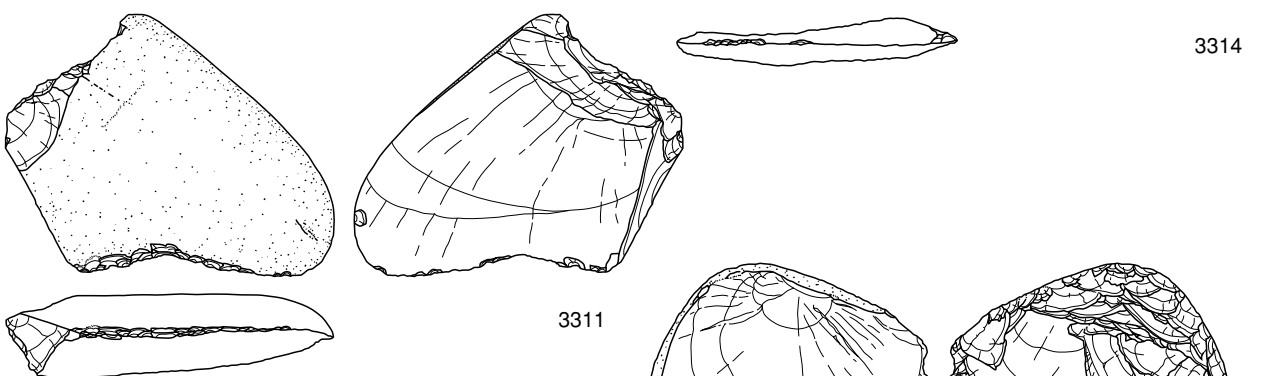
3309

3313



3310

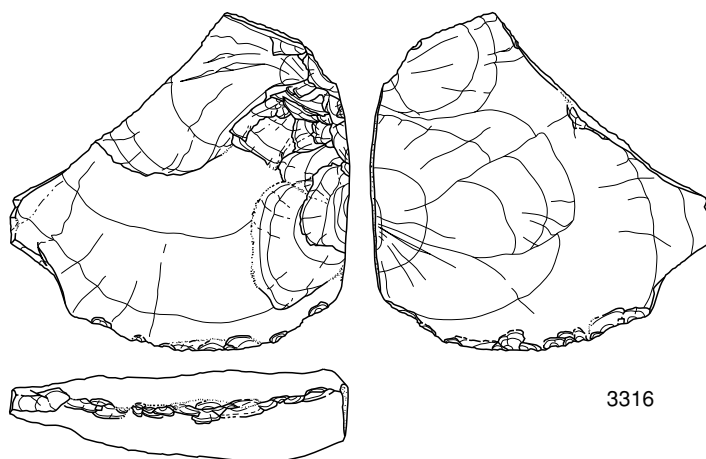
3314



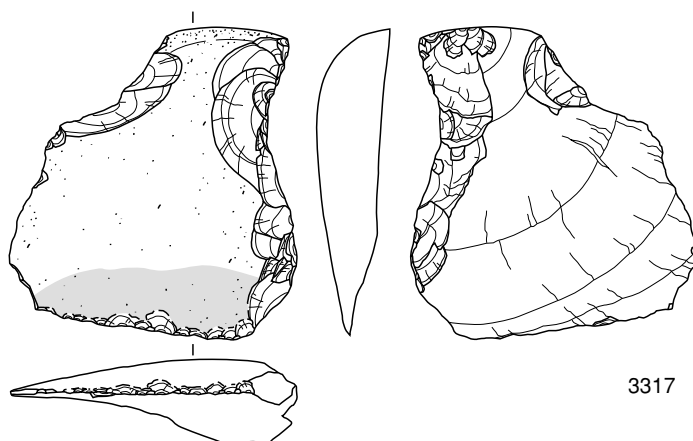
3311

3315

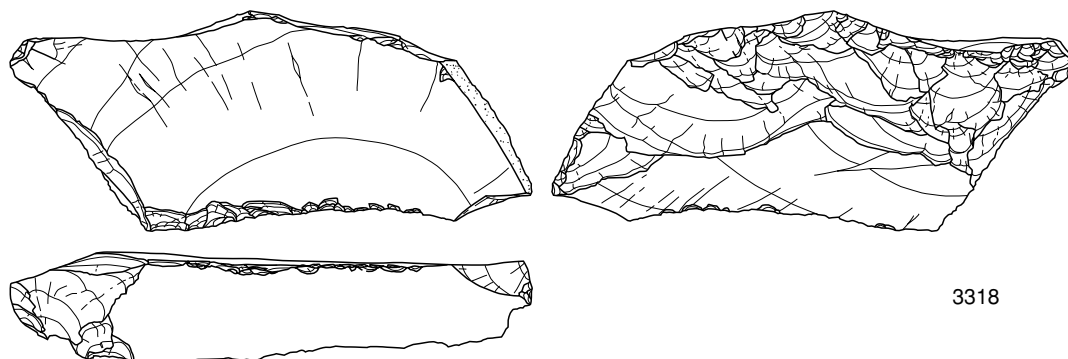
1/2 0 10cm



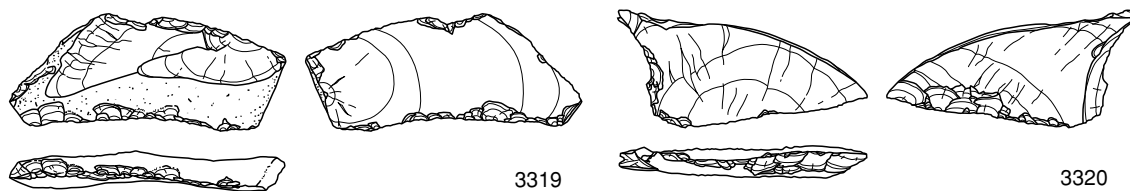
3316



3317



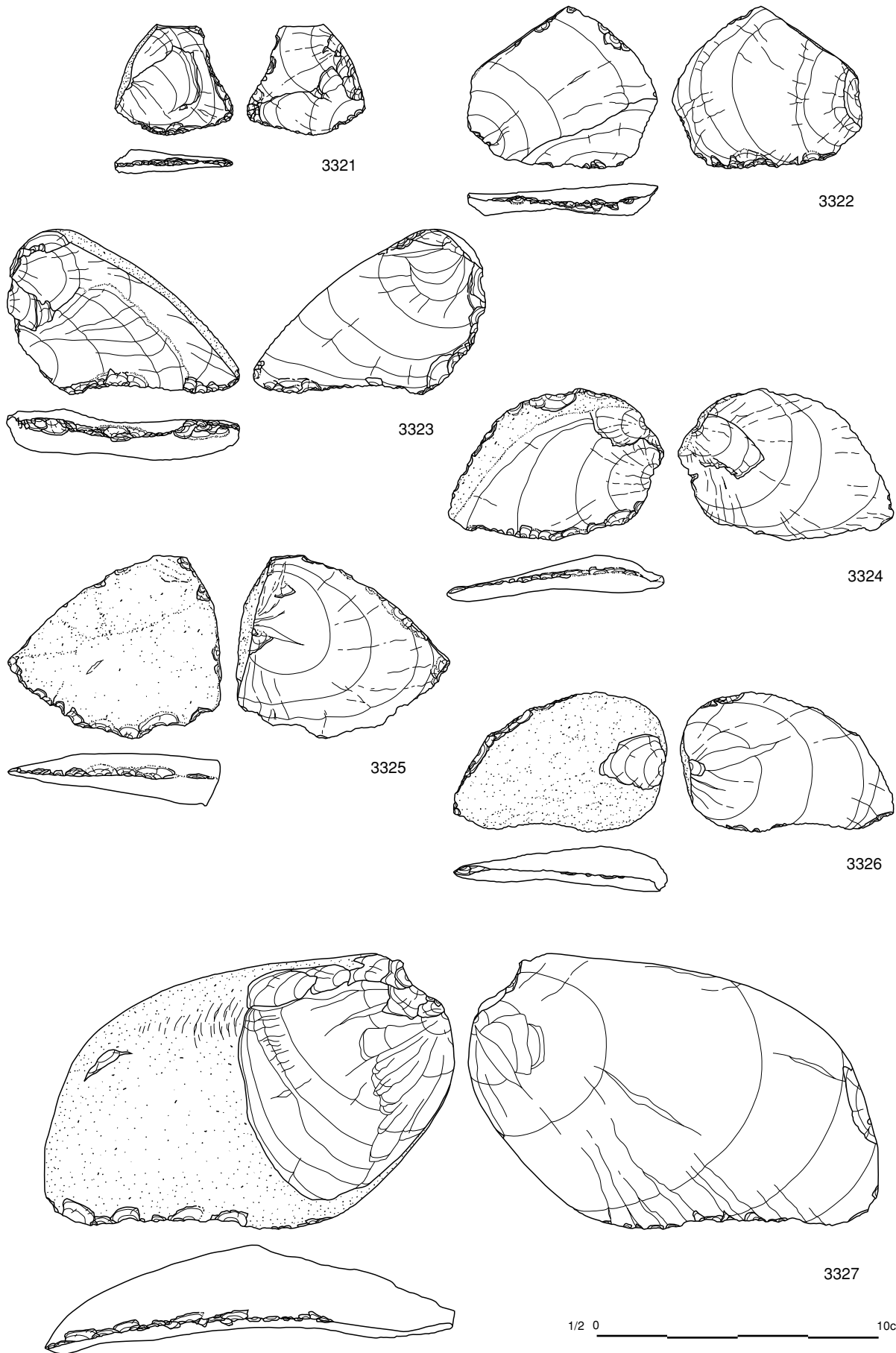
3318

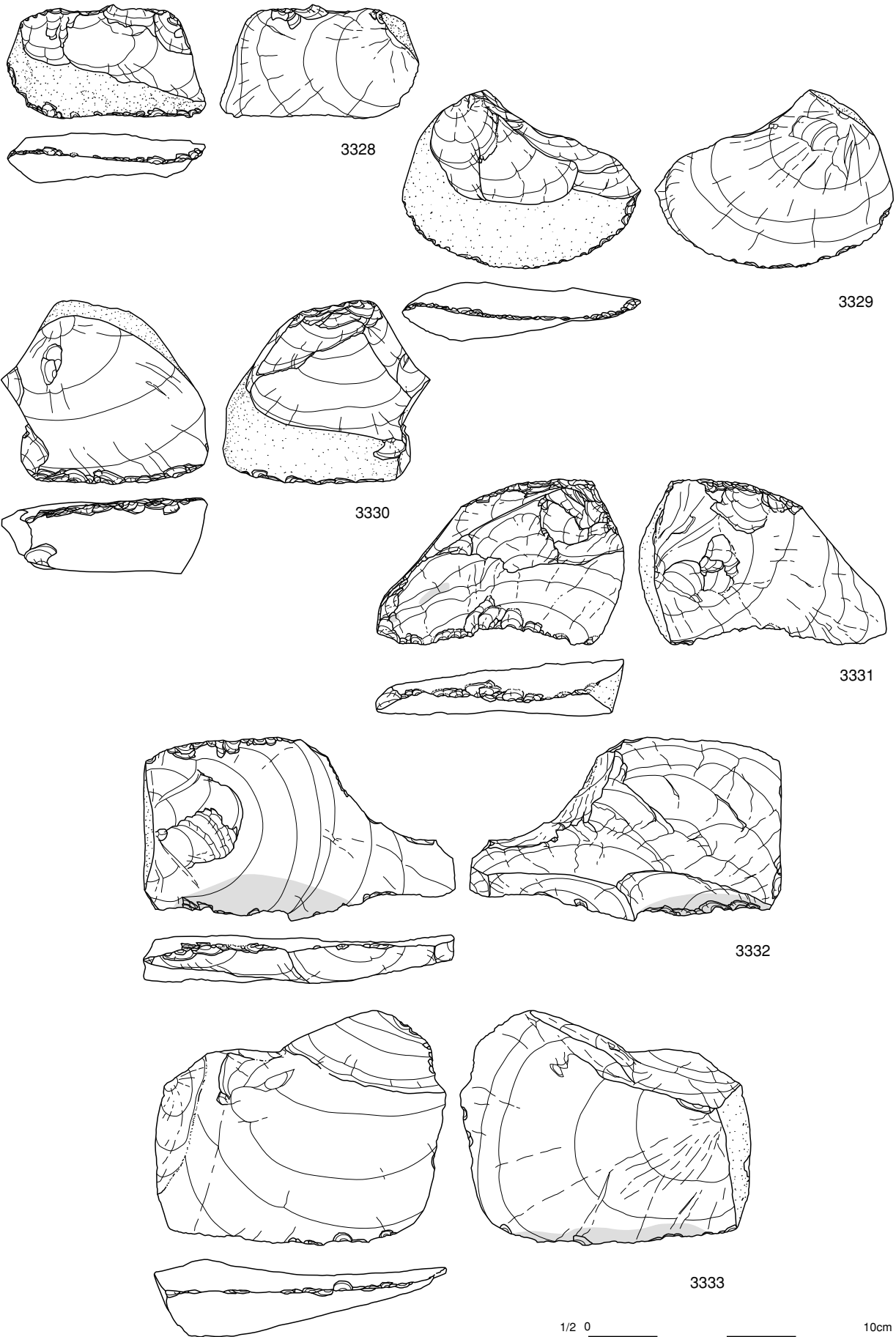


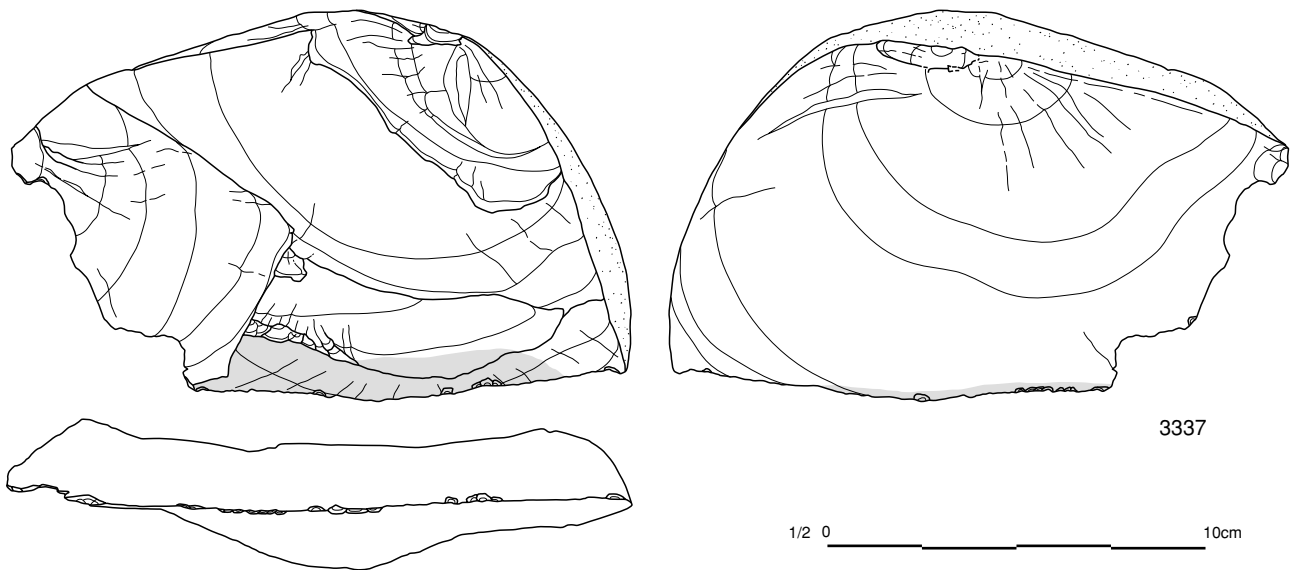
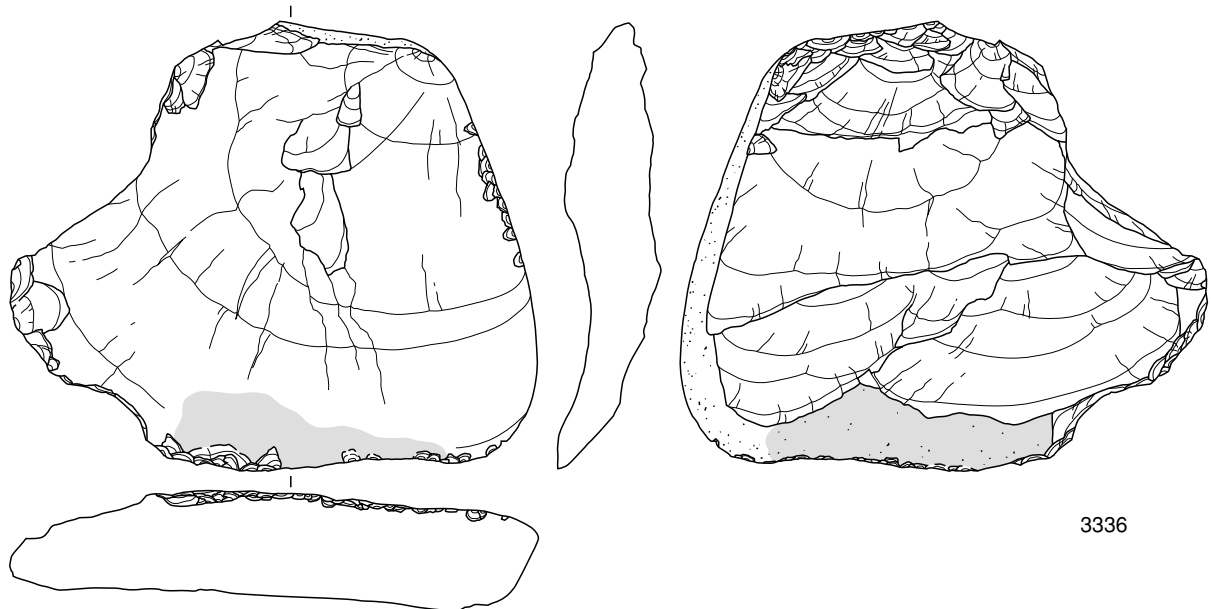
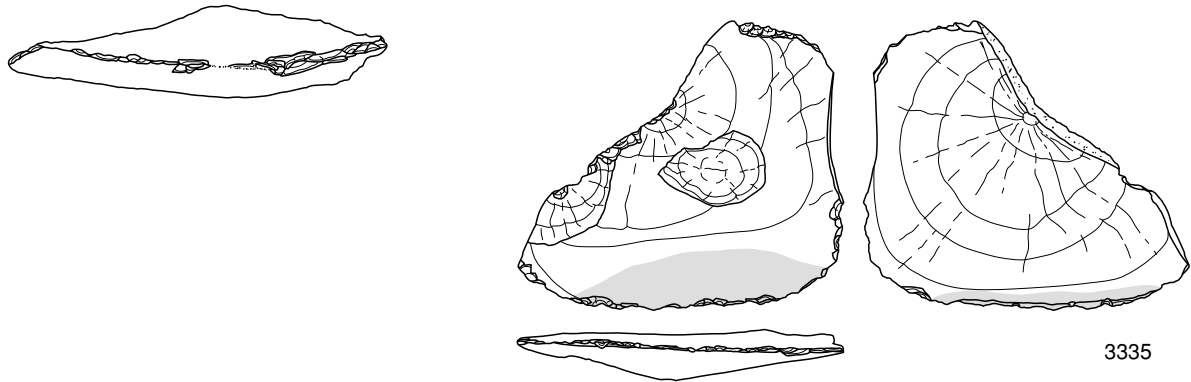
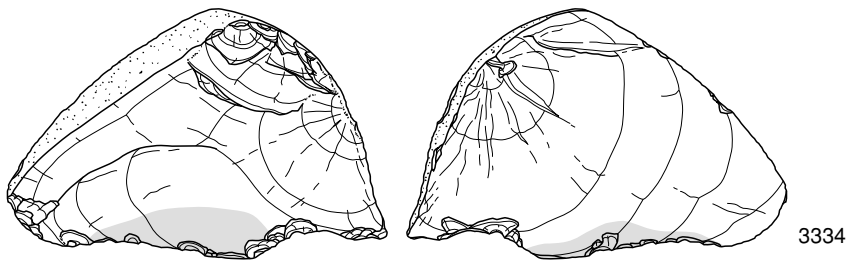
3319

3320

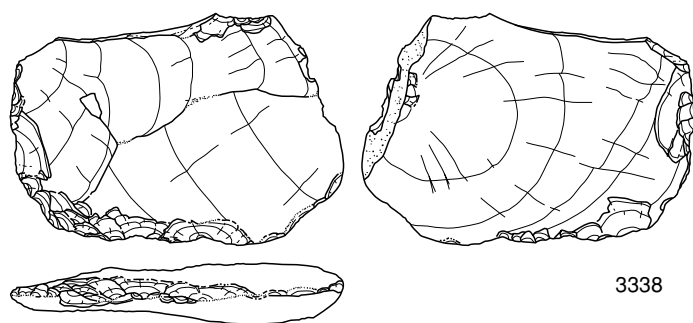
1/2 0 10cm



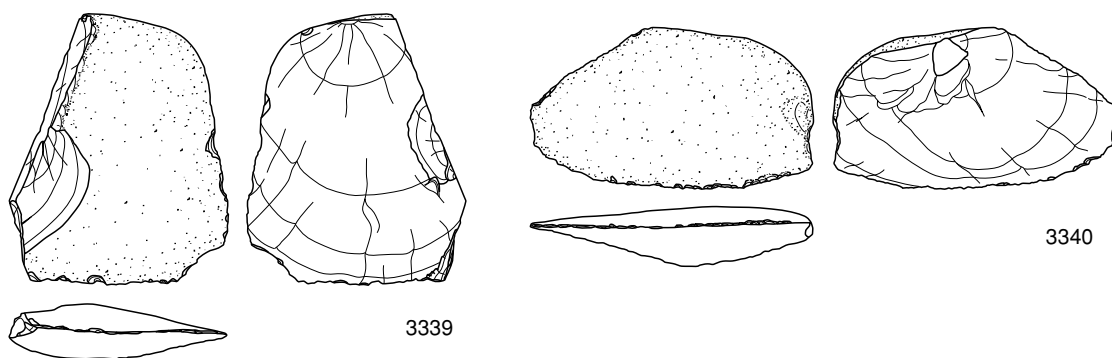




1/2 0 10cm

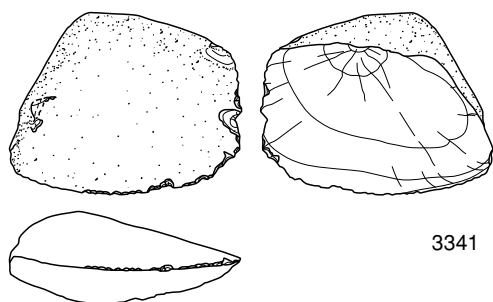


3338

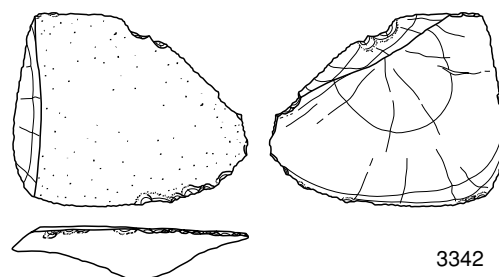


3339

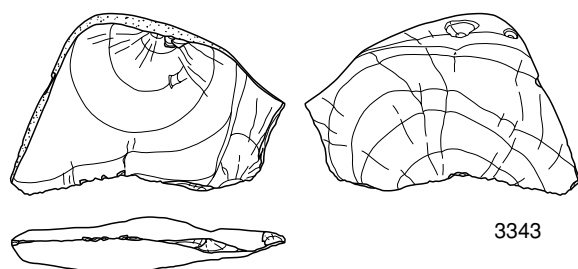
3340



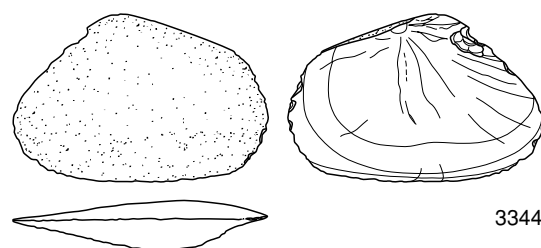
3341



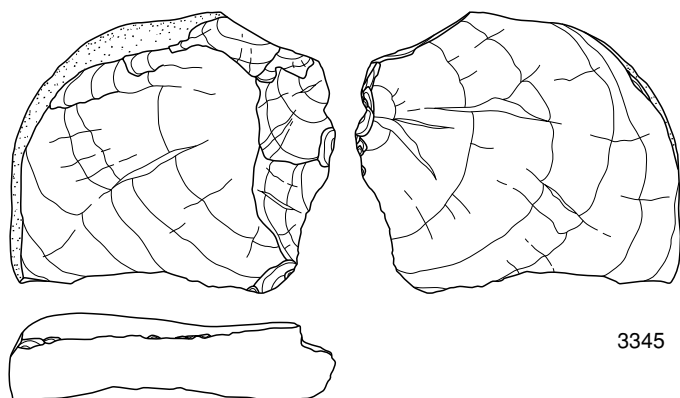
3342



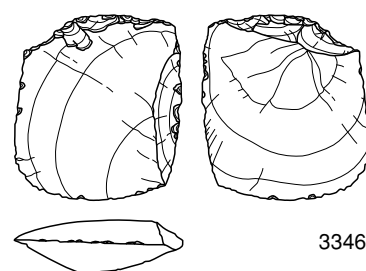
3343



3344

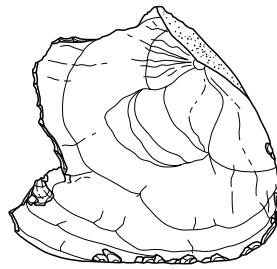
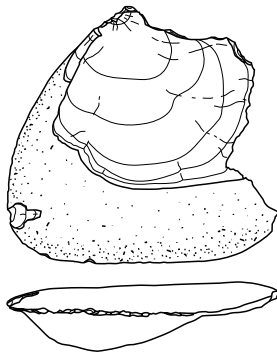


3345

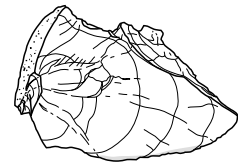
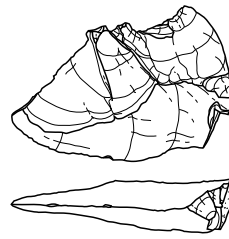


3346

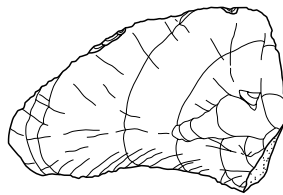
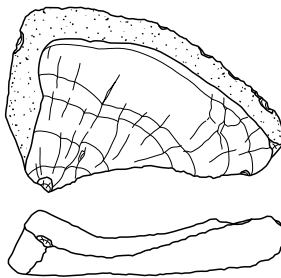
1/2 0 10cm



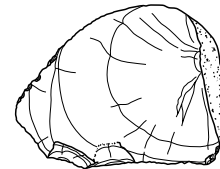
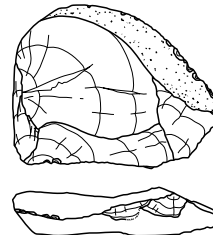
3347



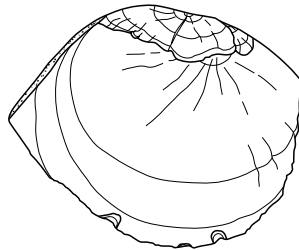
3348



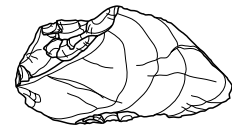
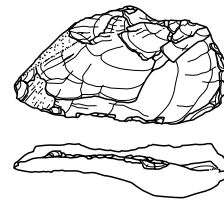
3349



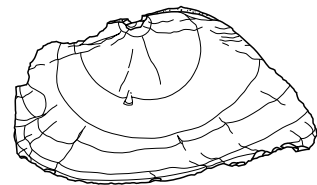
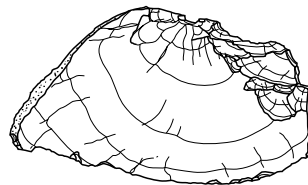
3350



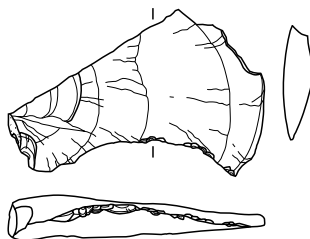
3351



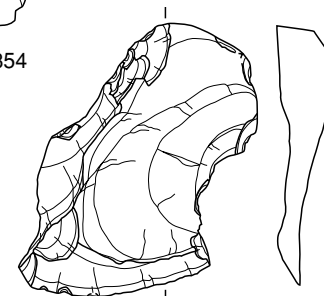
3352



3353

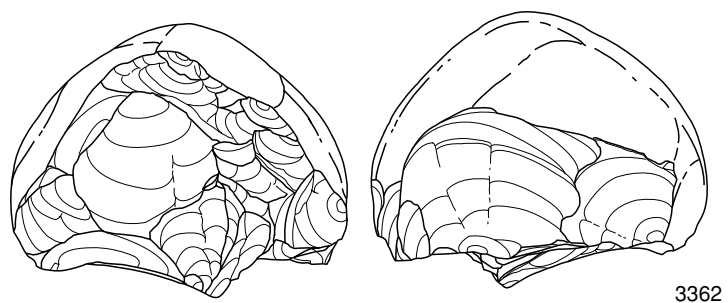
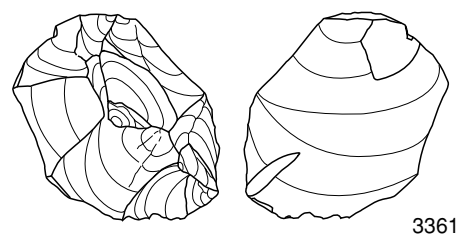
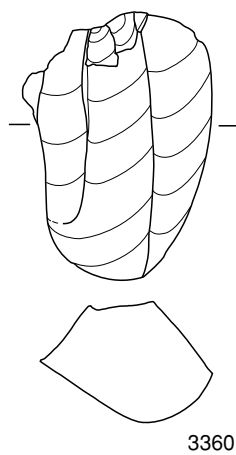
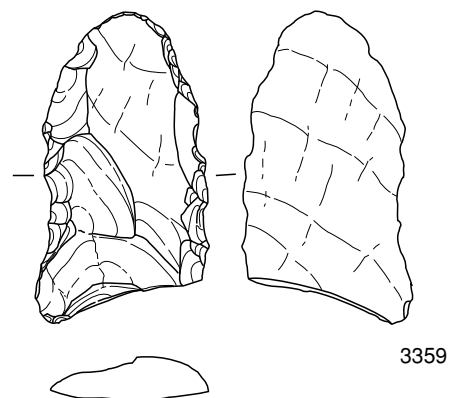
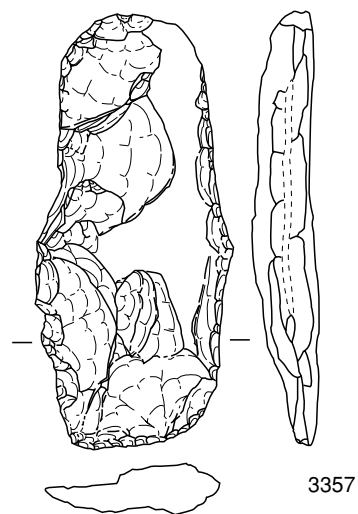
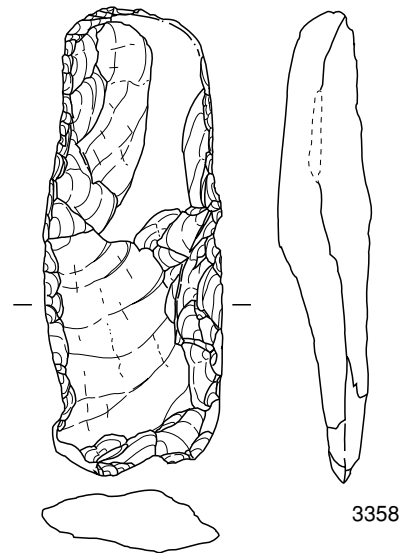
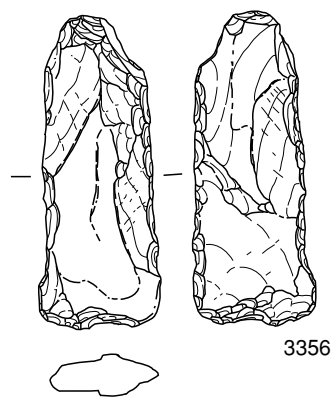


3354

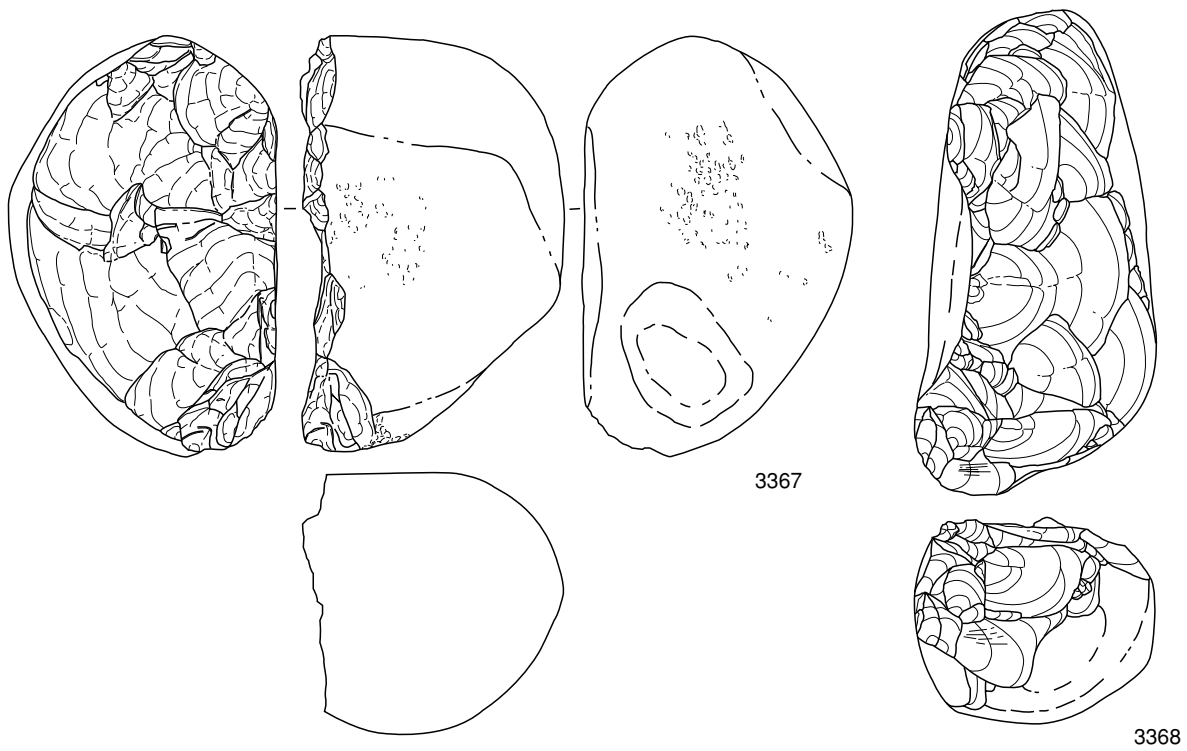
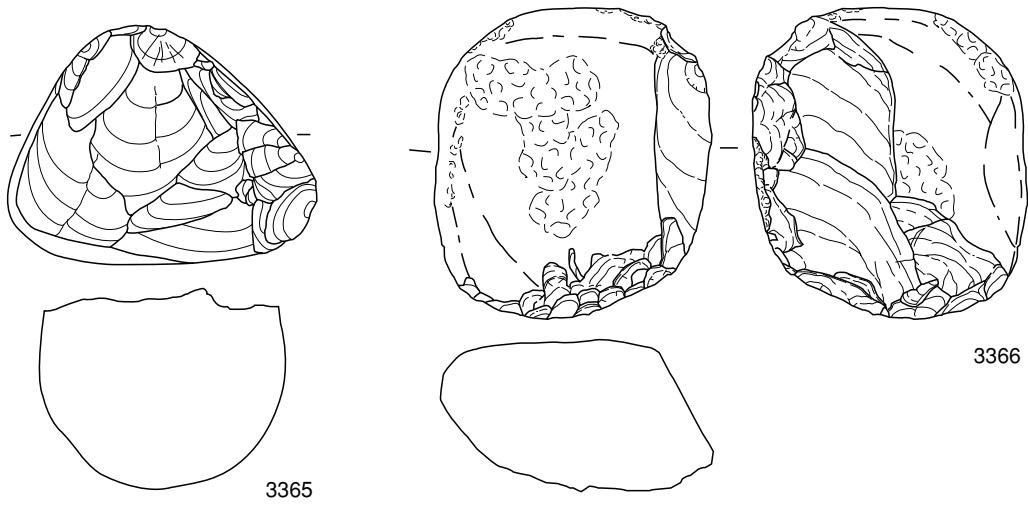
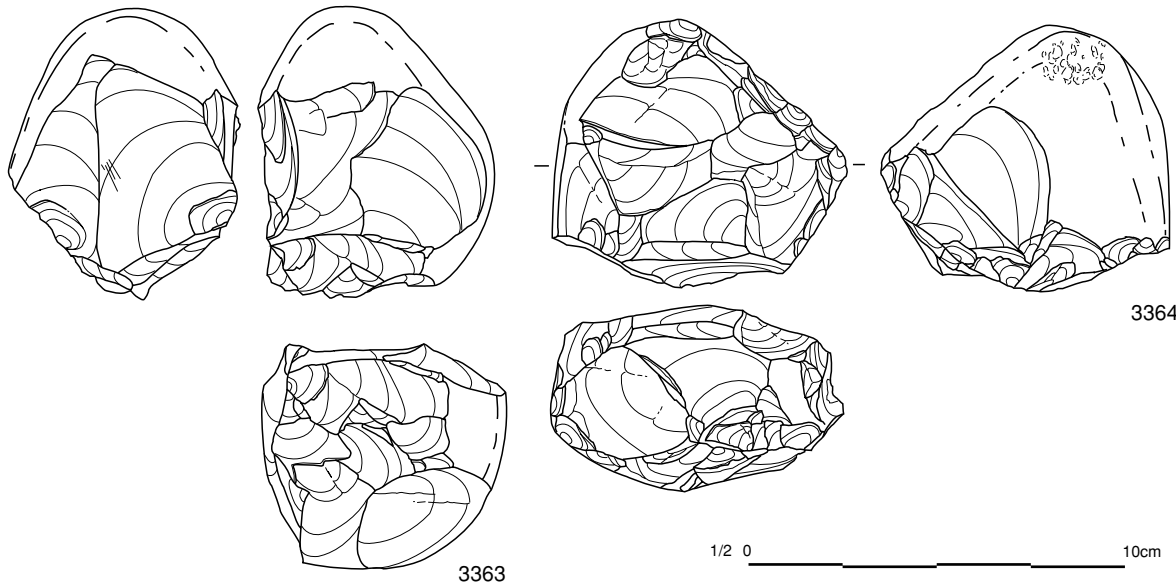


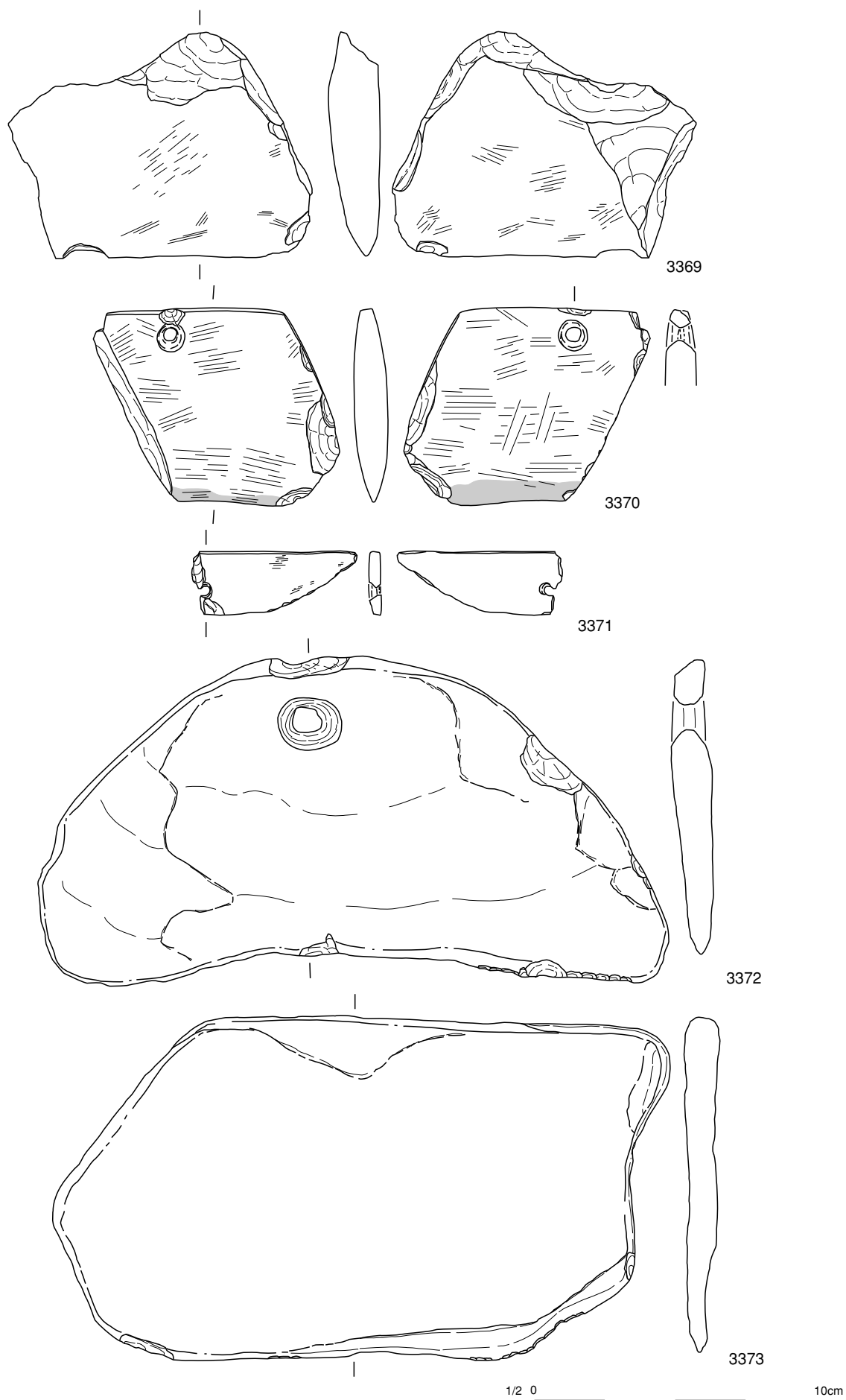
3355

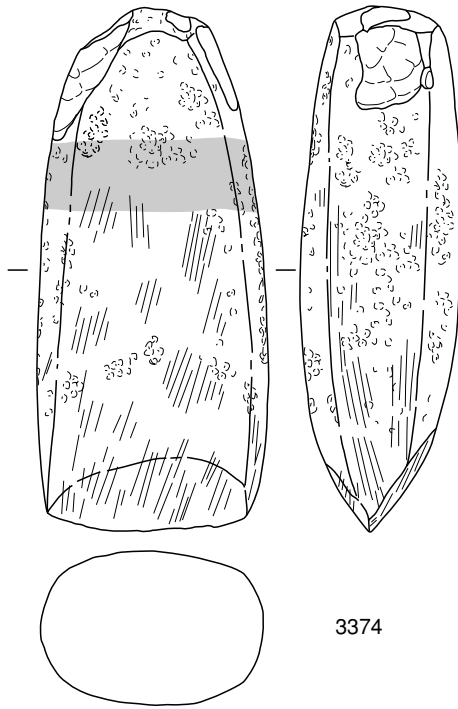
1/2 0 10cm



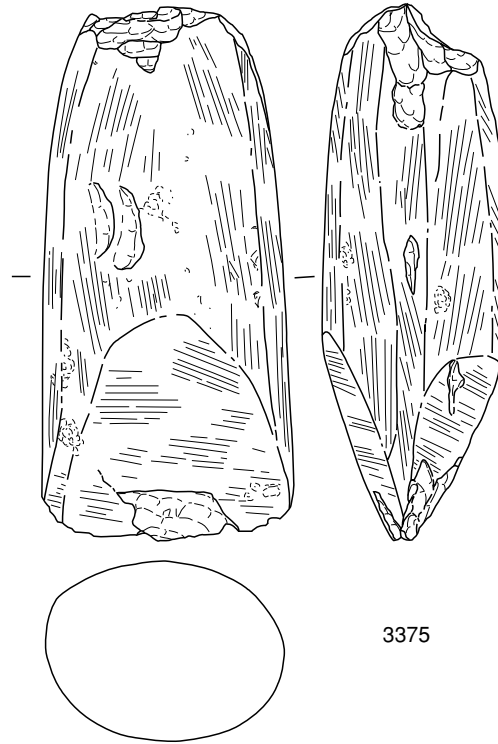
1/2 0 10cm



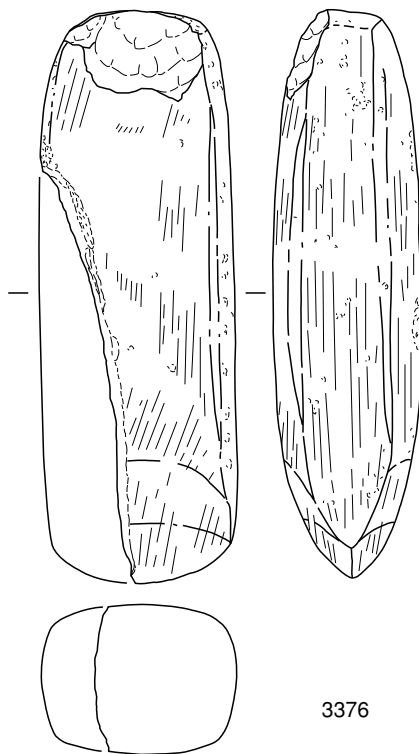




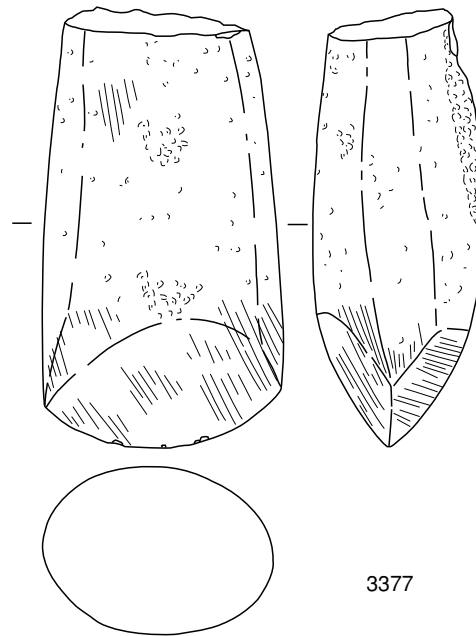
3374



3375

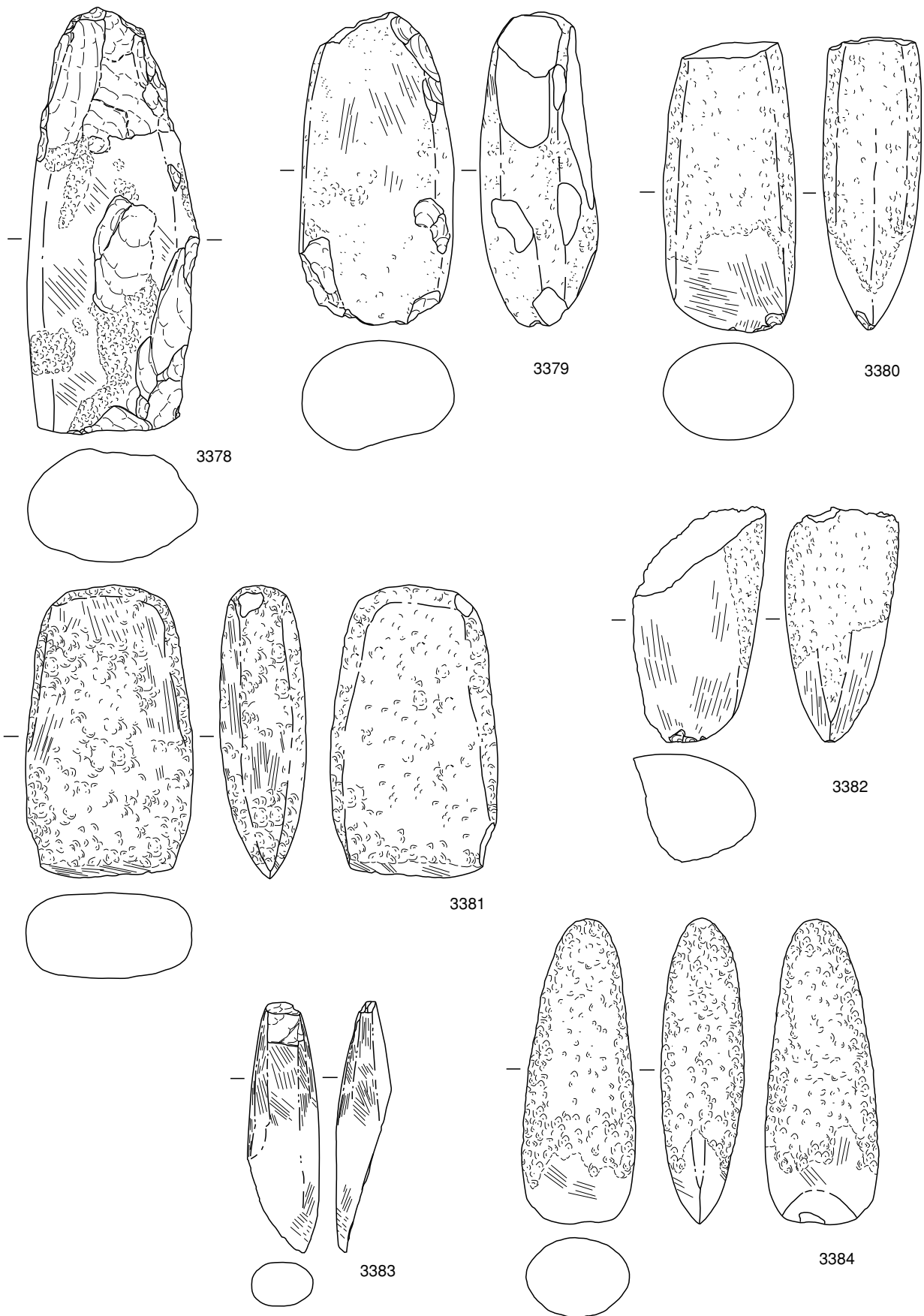


3376

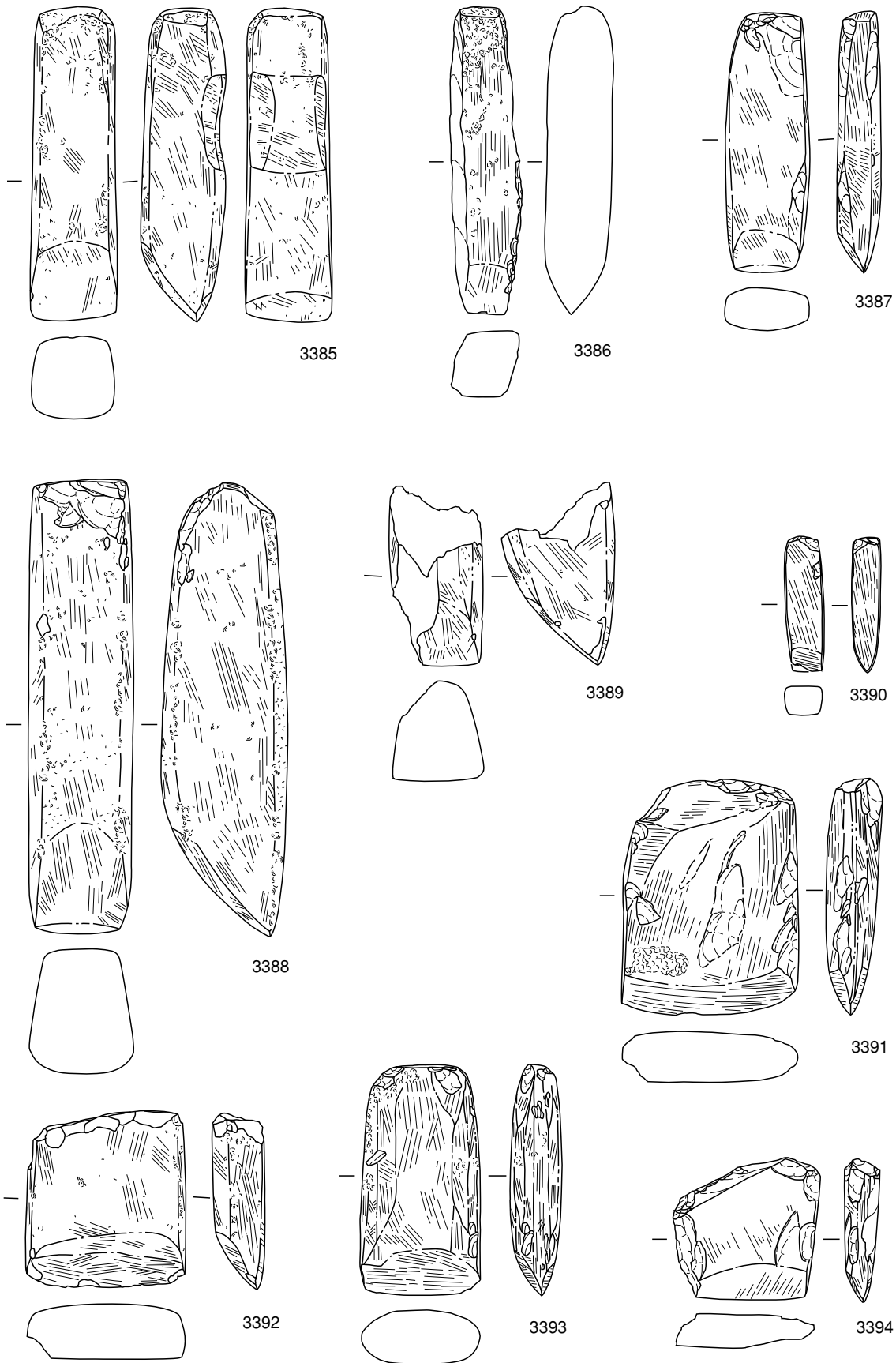


3377

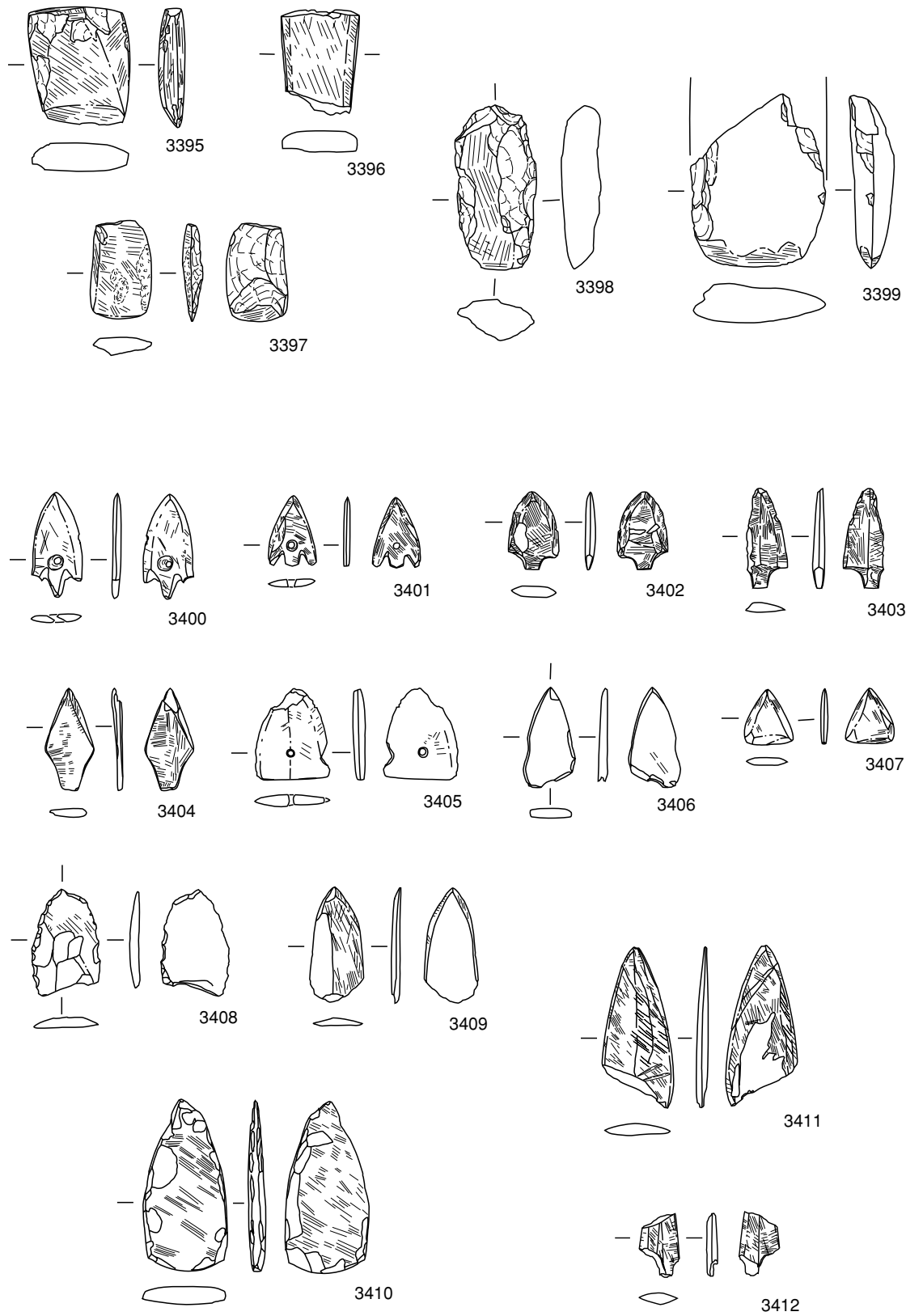
1/2 0 10cm



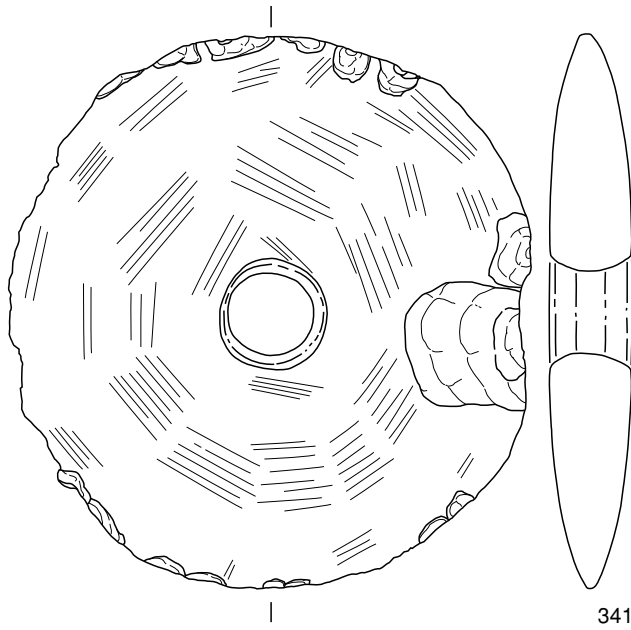
1/2 0 10cm



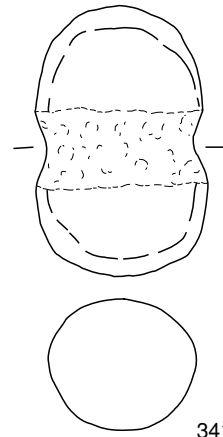
1/2 0 10cm



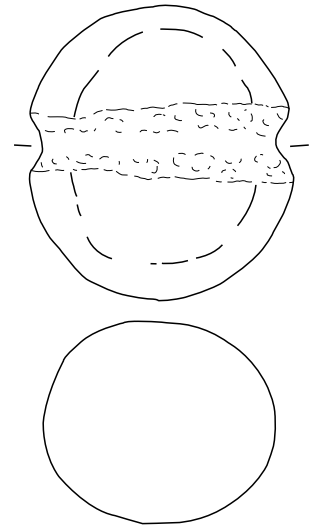
1/2 0 10cm



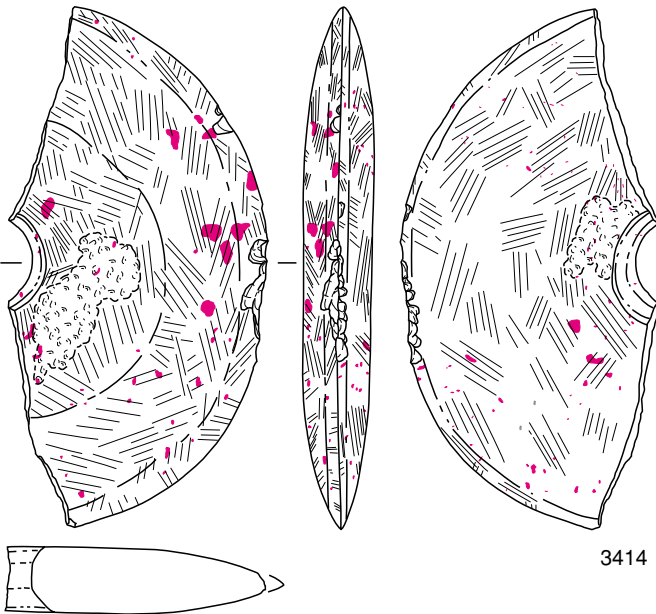
3413



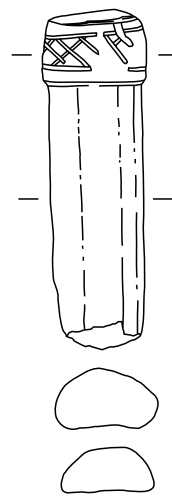
3415



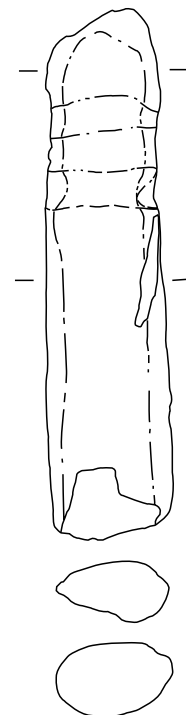
3416



3414

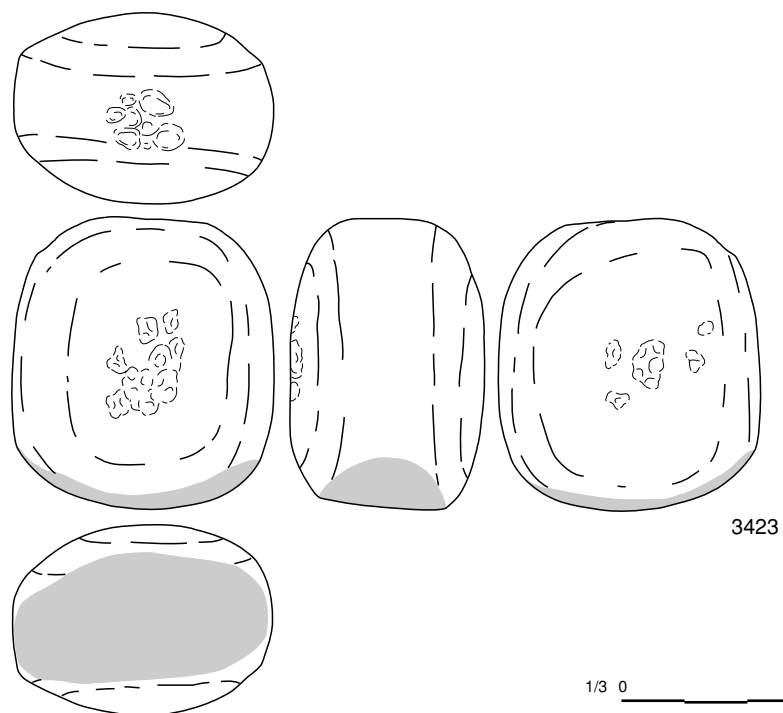
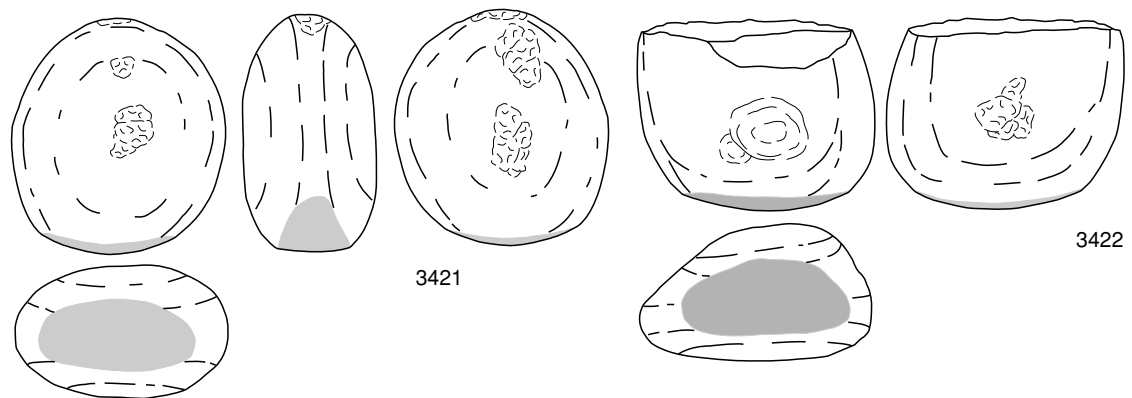
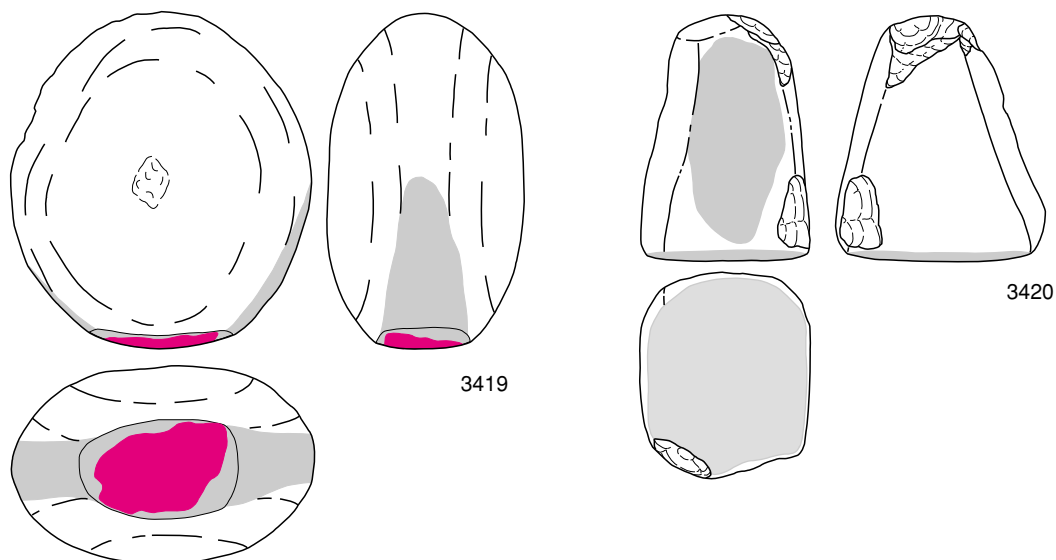


3417

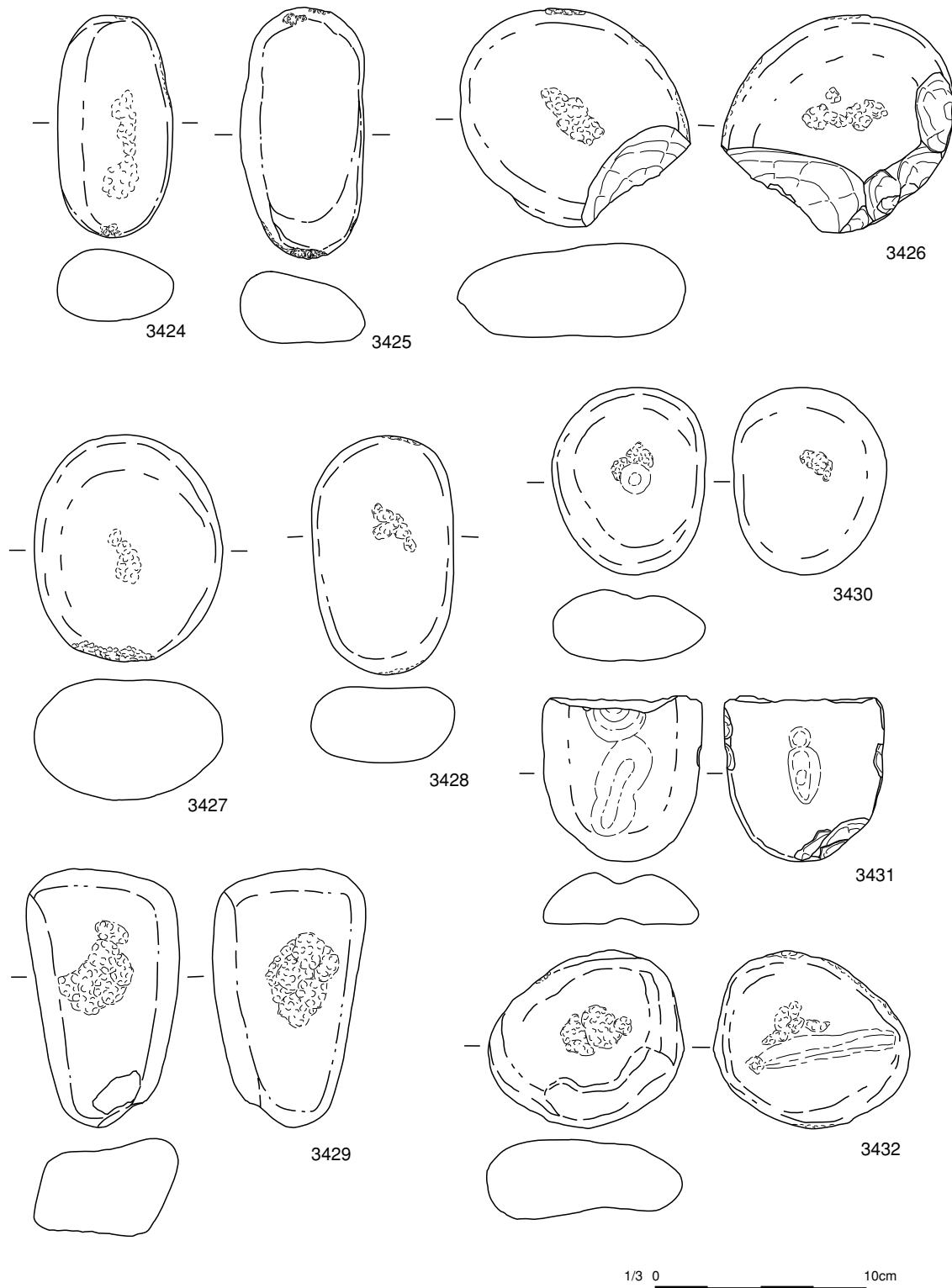


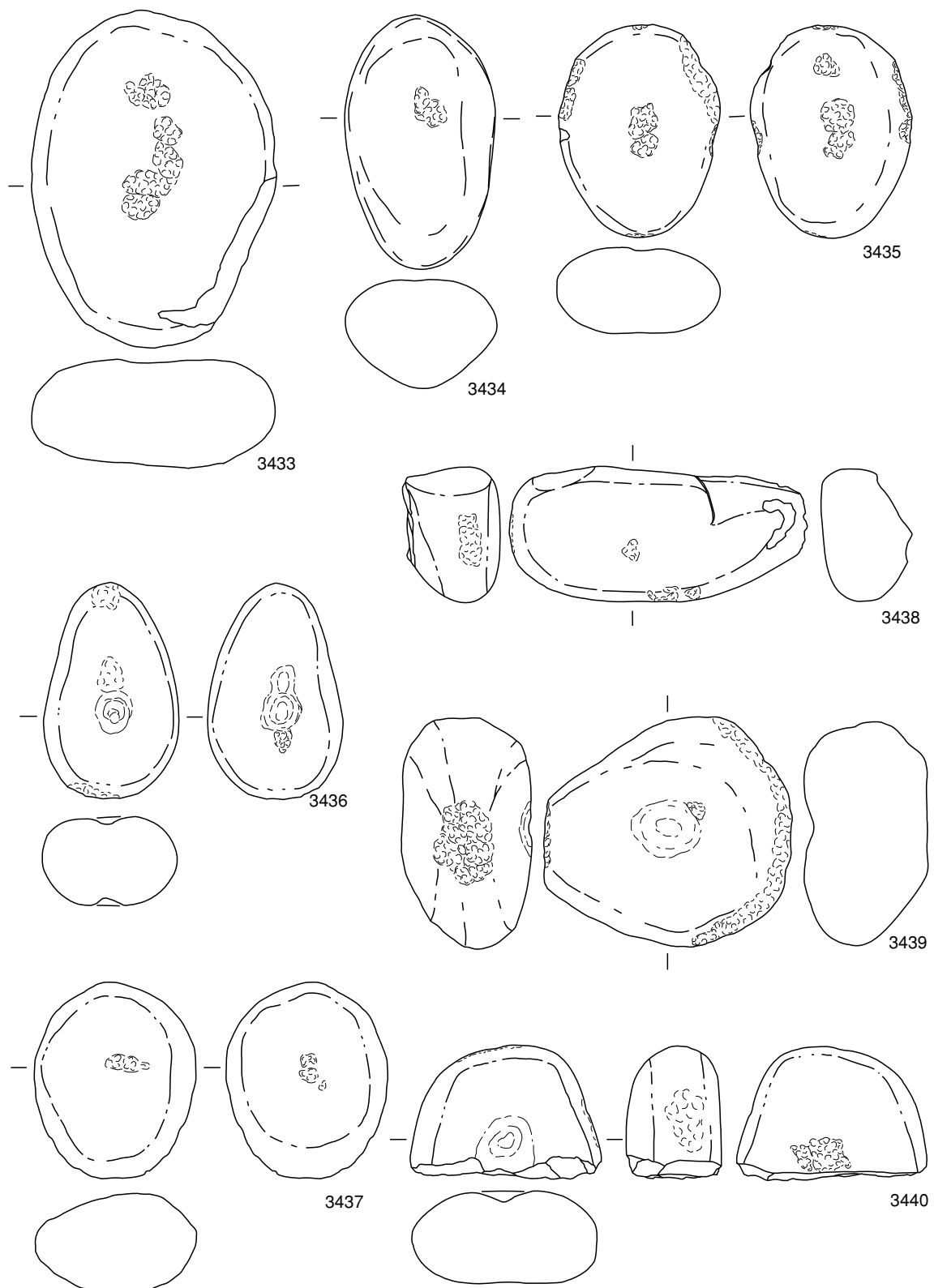
3418

1/2 0 10cm

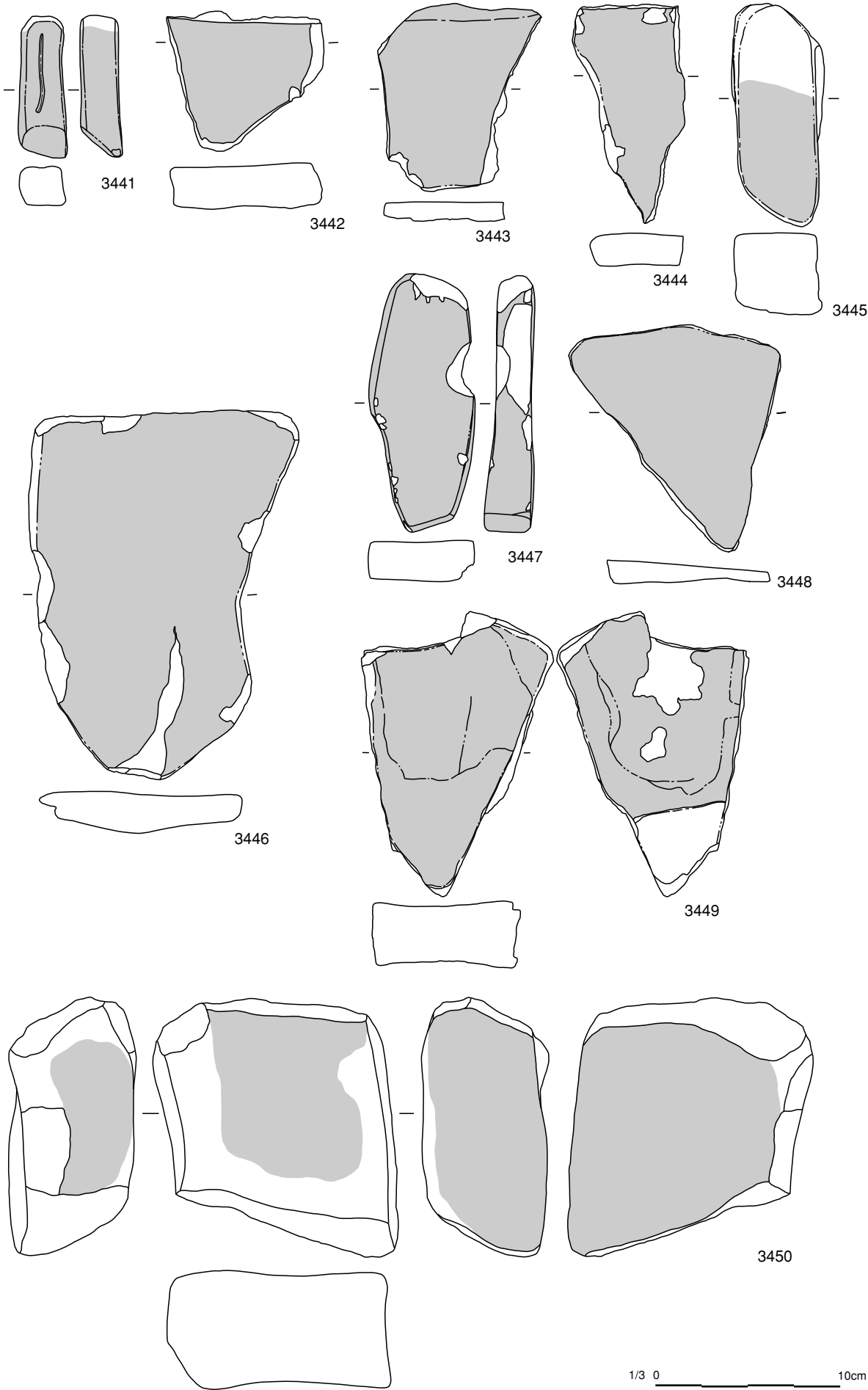


1/3 0 10cm





1/3 0 10cm



愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集

川 原 遺 跡

－第1分冊－

2001年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

印 刷 サンメッセ株式会社